公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（16）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

立小野堀遺跡（たちおのぼりいせき）

（鹿屋市串良町）

第１分冊

2017年３月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(16)
立小野堀遺跡 第1分冊
二〇一七年三月
鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

鹿児島県

立小野堀遺跡遠景（北西より国見山地方向を望む）

巻頭図版２

立小野堀遺跡遠景（南西より高隈山地方向を望む）

90号地下式横穴墓

巻頭図版４

古墳時代の出土遺物

古墳時代の壺

巻頭図版６

エリア 16 出土土器

古墳時代の高坏・坩・ミニチュア土器

巻頭図版８

古墳時代　立小野堀遺跡最古段階鉄器（71 号地下式横穴墓出土）

青銅鈴と共伴遺物１（90 号地下式横穴墓）

巻頭図版10

青銅鈴と共伴遺物２（126 号地下式横穴墓）

序　　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志 IC ～鹿屋串良 JCT 間）の建設に伴って，平成22年度から平成26年度にかけて実施した鹿屋市串良町細山田に所在する立小野堀遺跡の発掘調査の記録です。

立小野堀遺跡では，主に縄文時代から古墳時代の遺物・遺構が発見されました。中でも特筆すべきは古墳時代の地下式横穴墓群の調査です。５世紀前半から６世紀前半にかけて造営されたこの墓群は，玄室内から多くの鉄器・人骨が，竪坑上部からは土器や須恵器が発見され，南九州の古墳時代を考える上で，多くの情報を得ることができました。報告書作成に際しては，それらの情報をまとめるにあたり組織全体で試行錯誤をくり返し，この度，刊行する運びとなりました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発や研究などの一助になれば幸いです。

最後に，発掘から報告書刊行までの一連の調査にあたり，御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県立埋蔵文化財センター，鹿屋市教育委員会の各関係機関並びに調査において御指導いただきました先生方や発掘作業，整理作業に従事された方々に対し，厚くお礼申し上げます。

平成29年３月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　　堂　込　秀　人

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たちおのぼりいせき いち
書　　名	立小野堀遺跡　1
副 書 名	東九州自動車道建設（志布志 IC ～鹿屋串良 JCT 間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第 16 集
編 集 者 名	繁昌　正幸　　新屋敷 久美子　　中村 有希　　（藤島 伸一郎）
編 集 機 関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　　TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576
発 行 年 月 日	西暦 2017 年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
たちおのぼりいせき 立小野堀遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市 くしらちょう 串良町	46203	203-384	31° 36′ 48″	130° 54′ 28″	確認調査 2009.01.20 ～ 2009.03.19 本調査 ① 2010.05.06 ～ 2011.03.11 ② 2011.05.09 ～ 2012.03.09 ③ 2012.05.07 ～ 2013.03.08 ④ 2014.05.08 ～ 2014.10.30	25,100	東九州自動車道建設（志布志 IC ～鹿屋串良 JCT 間）に伴う発掘調査

所収遺跡名	種　別	時　代	主な遺構	主な遺物	特記事項
たちおのぼりいせき 立小野堀遺跡	その他	縄　文 (Ⅲ・Ⅳ層)	落とし穴　1 基	土器（深浦式・指宿式・西平式・市来式・黒川式・入佐式） 石鏃・磨石	ほかに，時期不明の遺構として，溝状遺構が 1 条ある。
	その他	弥　生 (Ⅲ・Ⅳ層)		土器（入来式・山ノ口式）	
	地下式 横穴墓	古　墳 (Ⅲ層)	地下式横穴墓　190 基 土坑墓　5 基 溝状遺構　3 条 （墓に伴うもの）	・成川式土器 ・須恵器 ・鉄器（刀・剣・槍身鉾・刀子・鏃等） ・青銅鈴 ・人骨	

遺跡の概要

本遺跡は，古墳時代の地下式横穴墓群を主体とする，縄文時代前期から古墳時代までの複合遺跡である。

地下式横穴墓群は笠野原台地縁辺の東西 230 mに広がる。5 基の土坑墓を含め,195 基の調査を行った結果，玄室内からは鉄鏃・鉄剣を中心とした約 400 点以上の鉄器が，竪坑上部やその周辺からは多量の土器・須恵器が発見された。

これだけの規模の地下式横穴墓の調査は県内では初めてのことであり，地下式横穴墓の研究だけでなく，南九州の古墳時代を考える上で多くの情報をもたらす重要遺跡である。

第１図　立小野堀遺跡位置図（Ｓ＝ 1/25000）

例　　言

1　本報告書は，東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う立小野堀遺跡の発掘調査報告書である。

2　立小野堀遺跡は鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。

3　発掘調査は，平成20年度に確認調査と一部本調査を行い，その後の本調査を平成22年度から平成24年度まで国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会(以下「県教委」という。)が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）が実施した。平成26年度は県教委が公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）へ調査委託し，埋文調査センターが実施した。

4　発掘調査事業は，平成22年度から平成24年度まで埋文センターが，平成26年度は埋文調査センターが実施した。なお，道路など未調査部分は，今後，発掘調査を行う予定である。

5　整理・報告書作成事業は，平成24年度は埋文センターが，平成25年度から平成28年度は埋文調査センターが実施した。

6　掲載遺物番号は通し番号であり，本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。掲載遺構番号は，時代及び遺構の種類ごとに番号を付し，本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。

7　遺物注記等で用いた遺跡記号は「ＴＯ」である。

8　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

9　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

10　本書で使用した方位はすべて真北である。

11　発掘調査における写真撮影は調査担当者が行った。また，空中写真の撮影及び遺構全体図の合成は，(有)スカイサーベイ九州に委託した。

12　遺構実測図の作成及びトレースは，(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託し，一部を職員及び埋文調査センターで行った。遺構の３Ｄ実測は，平成24年度は(株)パスコに，平成26年度は(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。全ての監修は，藤島が行った。

13　出土鉄器の実測・トレースは，約140点を（公財）元興寺文化財研究所に，約50点を(株)東都文化財保存研究所に委託した。それ以外は新屋敷が担当し，整理作業員とともに行った。鉄器に関する全ての監修は，新屋敷が行った。

14　出土土器・須恵器の実測・トレースは中村が担当し，整理作業員とともに行った。

15　出土石器の実測・トレースは新屋敷が担当し，整理作業員とともに行った。

16　出土遺物の写真撮影は，埋文調査センターの吉岡康弘・辻　明啓が行った。

17　検出した人骨については，鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授，下野真理子氏に指導を受けた。

18　青銅鈴については，国立歴史博物館の斉藤　努教授に鑑定・理化学的分析を依頼した。

19　赤色顔料については，埋文センターの武安雅之文化財主事に分析を依頼した。

20　本報告に係る自然科学分析については，以下の業者に委託を行った。

⑴　樹種同定・放射性炭素年代測定：(株)加速器分析研究所

⑵　寄生虫卵分析及び花粉分析，土器付着のテフラ分析：(株）パリノ・サーヴェイ

⑶　鉄器に付着する微小付着物等の分析・観察

ア：(公財）元興寺文化財研究所委託分：同財団

イ：(株)東都文化財保存研究所分:(株)パリノ･サーヴェイ

21　本編の執筆は次のように分担し，編集は繁昌・新屋敷が行った。

第Ⅰ章～第Ⅲ章　藤島伸一郎・繁昌正幸

第Ⅳ章第１節（古墳時代以外）

遺構：藤島

遺物（土器）：中村有希

遺物（石器）：新屋敷久美子・繁昌

〃　第２節（古墳時代）

遺構：藤島・繁昌

遺物（鉄器）：新屋敷

遺物（土器・須恵器）：中村

第Ⅴ章　竹中正巳（鹿児島女子短期大学）・斉藤　努（国立歴史博物館）・武安・藤島

第Ⅵ章　藤島

第Ⅶ章　繁昌・新屋敷・中村・藤島

写真図版

（遺構・その他）：辻・藤島

（鉄器）：吉岡・新屋敷

（土器・須恵器）：吉岡・中村

22　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図ることにしている。

凡　　例

1　グリッド（マス）について

グリッドは，高速道路建設予定地のセンター杭STA186及び約100m東方向にあるSTA185を基準とし，１グリッド10m×10mの大きさで遺跡内を主に東西に囲むように設定した。

2　遺構について

⑴　遺構図の縮尺は，地下式横穴墓・土坑墓は全て1/40とし，遺構内の鉄器拡大図などは1/20，工具痕実測図は全て1/8である。全てスケールを付けている。

⑵　発掘調査時に，遺構の主軸や形態を把握するために確認トレンチをあけている。あけた場所は「確認ＴＲ」と表記した。

⑶　赤色顔料は全て赤色で表示しており，多量出土の場合は範囲を破線で示している。少量の粒はドットで表示している。

⑷　炭化物は全て黒色で表示しており，多量出土の場合は形状を図で,少量の場合はドットで示している。

3　遺物について

⑴　掲載遺物の縮尺は，土器は１/３を基本とし，大型の壷形土器及び須恵器は１/４とした。

⑵　鉄器・青銅鈴は１/２を基本とし，刀剣類は75㎝までを１/３，それ以上を１/４とした。５㎝以下の円錐形鉄器や鉄針などの小型の鉄製品は原寸とした。

⑶　石器は石鏃など小型のものは原寸，石斧や磨石・敲石などは１/３とした。

4　デジタルデータについて

地下式横穴墓

次頁以降の挿図を参照のこと。

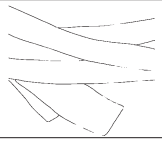
5　エリア図上の略語について

⑴　地下式横穴墓の号数の番号は数字のみで表記

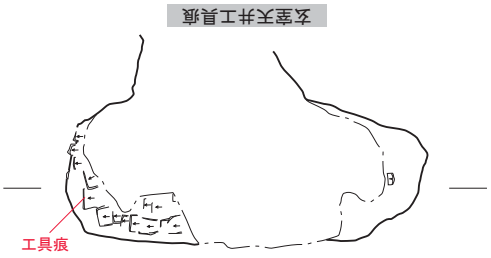
⑵　土坑墓の号数の番号は「土１」（＝１号土坑墓）と表記

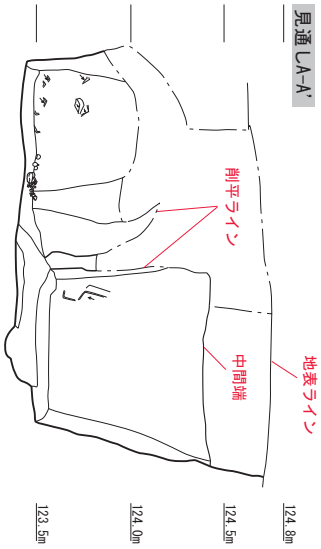
⑶　溝状遺構は「溝」と表現するが，地下式横穴墓と切り合っているものは，地下式横穴墓の号数の番号をとって「○号溝」と表記

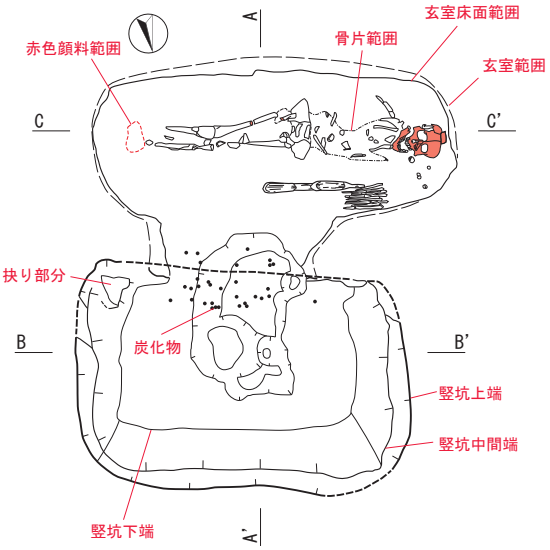
◎ 土器の調整痕

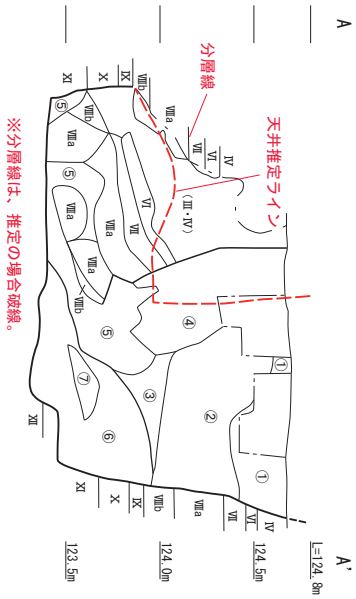
調整痕種	実測図表示例
工具ナデ	
ミガキ	
指頭圧痕	
指ナデ	

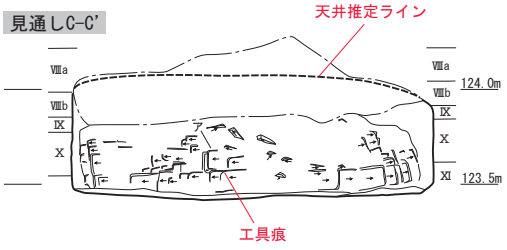
赤色顔料	
ススス	

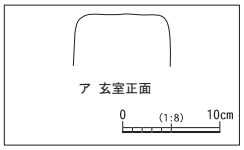






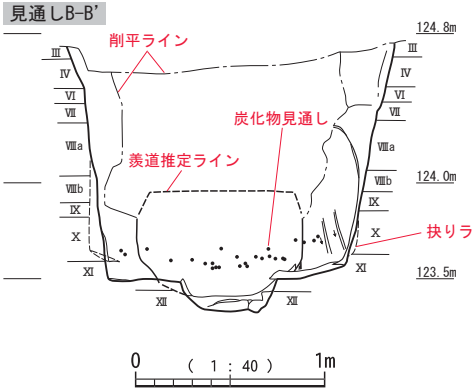


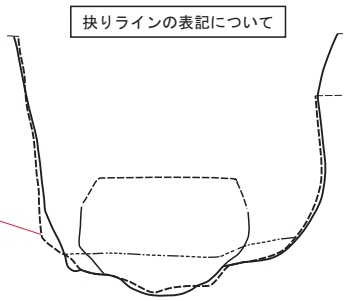




工具痕実測図

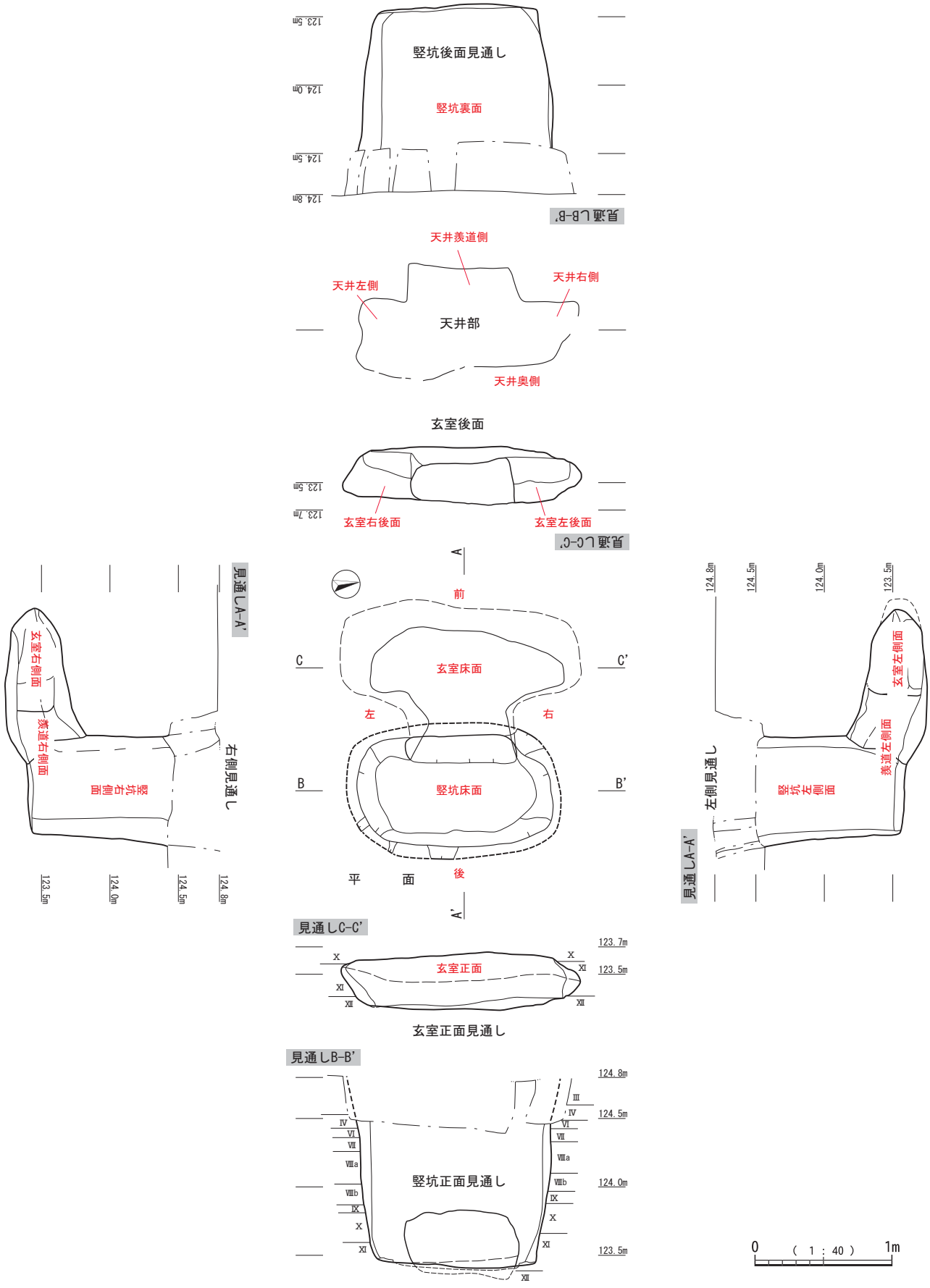
※ 工具痕の先端を上向きとする。





※ 抉りがある竪坑の断面を２つ重ねた図。
抉りのある方の断面を破線で図示。

第２図　遺構図の線の名称



第３図　遺構解説に用いる呼称

本　文　目　次

第１分冊

巻頭図版…… (1)
序　　文…… (11)
報告書抄録…… (12)
遺跡位置図…… (13)
例　　言…… (14)
凡　　例…… (15)
目　　次…… (18)

第Ⅰ章　発掘調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　調査の経過…… 1
　第３節　本調査…… 2
　第４節　整理・報告書作成作業…… 6
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 8
　第１節　地理的環境…… 8
　第２節　歴史的環境…… 8
第Ⅲ章　調査の方法と層序…… 19
　第１節　調査の方法…… 19
　第２節　層　　序…… 21
第Ⅳ章　発掘調査の成果…… 32
　第１節　縄文時代・弥生時代の調査…… 32
　　(1)　遺　　構…… 32
　　(2)　遺　　物…… 35
　第２節　古墳時代の調査…… 44
　　(1)　１～14エリア …… 59

第２分冊

目　　次…… (1)

第Ⅳ章　発掘調査の成果…… 1
　第２節　古墳時代の調査…… 1
　　(1)　15～21エリア …… 1
　　(2)　一般遺物……168
第Ⅴ章　科学分析等……193
　第１節　自然科学分析……193
　　(1)　出土炭化物の樹種同定 ……193
　　(2)　出土炭化物の放射性炭素年代……194
　　(3)　立小野堀遺跡出土土器付着物の
　　テフラ分析……204
　　(4)　立小野堀遺跡出土試料の花粉分析……209
　第２節　立小野堀遺跡出土の赤色顔料について …212
　第３節　立小野堀遺跡出土青銅鈴の理化学的分析結果…224
　第４節　鉄　　器……234
　第５節　鹿児島県鹿屋市立小野堀遺跡
　　地下式横穴墓出土人骨……335
第Ⅵ章　遺構の３Ｄ実測及び立体剥ぎ取り……341
　第１節　３Ｄ実測について……341
　第２節　遺構の立体剥ぎ取り……350
第Ⅶ章　総　　括……352
　第１節　遺　　構……352
　第２節　遺　　物……355
　第３節　ま と め……369

第３分冊

目　　次…… (1)

写真図版…… 1
　遺　　構…… 1
　遺　　物……227

付　　図

付図１　古墳時代遺構全体図１
付図２　古墳時代遺構全体図２
付図３　エリア12土器集中区域
付図４　エリア16土器集中区域

第１分冊目次

エリア１ …… 60
１号，２号，３号，４号，土１

エリア２ …… 72
５号，６号，７号，８号，９号

エリア３ …… 89
15号，16号，17号，18号，19号，
20号，21号，22号，23号，24号，
25号，26号，28号，28号溝，土２

エリア４ ……127
10号，11号，12号，13号，14号，
27号，27号溝，29号

エリア５ ……149
40号，42号，43号，44号，45号

エリア６ ……161
30号，31号，32号，33号，34号，
35号，36号，37号，38号，39号，
41号，54号，58号，59号

エリア７ ……209
46号，47号，48号，49号，50号，
67号，68号，69号

エリア８ ……227
51号，52号，53号，55号，56号，
57号，60号，61号，62号，63号，
64号，65号，66号，80号，81号，
82号，83号，84号，土３

エリア９ ……266
70号，71号，72号，73号，74号，
75号，96号，97号，98号，99号，
100号，101号

エリア10 ……296
76号，77号，78号，79号，85号，
86号，87号，88号，89号，90号，
91号，92号，93号，94号，95号，
102号，103号，104号，105号，
106号，107号，108号，109号，
110号，111号，112号，113号，
114号

エリア11 ……383
117号，118号，119号，120号，
121号，122号，123号，124号

エリア12 ……404
115号，116号，125号，126号，
127号，128号，129号，130号，
131号，土４

エリア13 ……474
132号，133号，134号，135号

エリア14 ……488
136号，137号，138号，139号，
140号，141号

注；○号　地下式横穴墓○号墓
　　土○　土坑墓○号墓

第２分冊目次

エリア15 …… 2
142号，143号，144号，145号

エリア16 …… 14
146号，147号，149号，148号，

150号，151号，152号，153号，

154号，155号，156号，157号，

158号，159号，160号，161号，

162号，163号，164号，165号，

166号，167号，168号，土５，

溝１

エリア17 …… 111
176号，177号，178号，179号，

180号，182号

エリア18 ……125
169号，170号，171号，172号，

173号，174号，175号，181号

エリア19 ……146
183号

エリア20 ……149
184号，185号，186号，187号，

188号，189号

エリア21 ……166
190号

注；○号　地下式横穴墓○号墓
　　土○　土坑墓○号墓

挿 図 目 次

第１分冊

第１図　立小野堀遺跡位置図 ……(13)
第２図　遺構図の線の名称 ……(16)
第３図　遺構解説に用いる呼称 ……(17)
第４図　平成20年度確認調査時のトレンチ配置図 …… 1
第５図　平成22年度確認調査時のトレンチ配置図及び範囲拡張部分 …… 2
第６図　1902年地形図における立小野堀遺跡周辺 ……11
第７図　周辺遺跡図 ……12
第８図　周辺の古墳・地下式横穴墓群 ……14
第９図　肝属平野部の地形分類図 ……15
第10図　東九州自動車道建設に伴う遺跡位置図 ……18
第11図　遺構検出区域の畑別区分図 ……19
第12図　周辺地形及びグリッド図 ……20
第13図　土層断面位置図 ……22
第14図　土層断面図(1)（H-23 ～ 24区）……22
第15図　土層断面図(1)（H-24 ～ 29区）……23
第16図　土層断面図(2)（F ～ I-30区）……24
第17図　土層断面図(3)（I-32 ～ 34区）……25
第18図　土層断面図(4)（F ～ J-35区）……26
第19図　土層断面図(5)（I-37 ～ 41区）……27
第20図　土層断面図(5)（I-41 ～ 44区）……28
第21図　土層断面図(6)（G ～ I-40区）……29
第22図　土層断面図(7)（E ～ H-51区）……30
第23図　土層断面図(8)・(9)（I-51区北壁・東壁）……31
第24図　落とし穴 ……32
第25図　溝状遺構 ……33
第26図　縄文・弥生時代の遺構位置図 ……34
第27図　縄文時代前期末～後期の土器 ……35
第28図　縄文時代後・晩期の土器 ……36
第29図　弥生時代以降の土器 ……37
第30図　石器(1) ……39
第31図　石器(2) ……40
第32図　石器(3) ……41
第33図　縄文時代の土器分布図 ……42
第34図　弥生時代の土器分布図 ……42
第35図　石器分布図 ……43
第36図　立小野堀遺跡遺構全体図 ……45
第37図　地下式横穴墓の分類 ……48
第38図　計測位置及び開口方向 ……52
第39図　鉄鏃・異形鉄器の部位の名称 ……53
第40図　圭頭鏃分類図 ……53
第41図　短頸鏃分類図 ……54
第42図　長頸鏃分類図 ……54
第43図　土器分類図(1) ……55
第44図　土器分類図(2) ……56
第45図　土器分類図(3) ……57
第46図　立小野堀遺跡エリア区分図 ……59
第47図　エリア１遺構配置図 ……60
第48図　１号地下式横穴墓 ……62
第49図　２号地下式横穴墓 ……64
第50図　３号地下式横穴墓 ……66
第51図　４号地下式横穴墓 ……68
第52図　１号土坑墓 ……69
第53図　４号地下式横穴墓・１号土坑墓出土鉄器 ……70
第54図　エリア２遺構配置図 ……72
第55図　５号地下式横穴墓 ……74
第56図　６号地下式横穴墓 ……76
第57図　７号地下式横穴墓 ……78
第58図　８号地下式横穴墓 ……80
第59図　９号地下式横穴墓 ……82
第60図　7号・8号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況…83
第61図　５号地下式横穴墓出土鉄器 ……84
第62図　８号地下式横穴墓出土鉄器(1) ……85
第63図　8号(2)・9号地下式横穴墓・エリア２遺構外出土鉄器 …86
第64図　５号地下式横穴墓・エリア２出土土器(1) ……87
第65図　エリア２出土土器(2) ……88
第66図　エリア３遺構配置図 ……89
第67図　15号地下式横穴墓 ……91
第68図　16号地下式横穴墓 ……93
第69図　17号地下式横穴墓 ……95
第70図　18号地下式横穴墓 ……97
第71図　19号地下式横穴墓 ……99
第72図　20号地下式横穴墓 …… 101
第73図　21号地下式横穴墓 …… 103
第74図　22号地下式横穴墓(1) …… 105
第75図　22号地下式横穴墓(2) …… 105
第76図　23号地下式横穴墓 …… 107
第77図　24号地下式横穴墓(1) …… 109
第78図　24号地下式横穴墓(2) …… 110
第79図　25号地下式横穴墓 …… 113
第80図　26号地下式横穴墓 …… 113
第81図　28号地下式横穴墓(1) …… 115
第82図　28号地下式横穴墓(2)・28号溝状遺構 …… 116
第83図　２号土坑墓 …… 117
第84図　15号地下式横穴墓出土鉄器 …… 118
第85図　16号地下式横穴墓出土鉄器 …… 119
第86図　20号地下式横穴墓出土鉄器 …… 120
第87図　22号地下式横穴墓出土鉄器・Ｘ線ＣＴ画像(102)… 122
第88図　23号地下式横穴墓出土鉄器 …… 123
第89図　24号地下式横穴墓出土鉄器 …… 124
第90図　２号土坑墓出土鉄器 …… 125
第91図　エリア３出土土器 …… 126
第92図　エリア４遺構配置図 …… 127

第93図　10号地下式横穴墓 …… 129
第94図　11号地下式横穴墓 …… 131
第95図　12号地下式横穴墓 …… 133
第96図　13号地下式横穴墓 …… 135
第97図　14号地下式横穴墓 …… 137
第98図　27号地下式横穴墓(1) …… 139
第99図　27号地下式横穴墓(2)・27号溝状遺構 …… 140
第100図　29号地下式横穴墓 …… 142
第101図　14・27号地下式横穴墓周辺遺物出土状況 …… 143
第102図　12号・14号(1)地下式横穴墓出土鉄器 …… 145
第103図　14号地下式横穴墓出土鉄器(2) …… 146
第104図　29号地下式横穴墓出土鉄器・エリア４遺構外出土鉄器… 147
第105図　エリア４出土土器 …… 148
第106図　エリア５遺構配置図 …… 149
第107図　40号地下式横穴墓 …… 151
第108図　42号地下式横穴墓 …… 153
第109図　43号地下式横穴墓 …… 155
第110図　44号地下式横穴墓 …… 157
第111図　45号地下式横穴墓 …… 159
第112図　44号地下式横穴墓出土鉄器 …… 160
第113図　エリア５出土土器 …… 160
第114図　エリア６遺構配置図 …… 161
第115図　30号地下式横穴墓 …… 163
第116図　31号地下式横穴墓(1) …… 165
第117図　31号地下式横穴墓(2) …… 166
第118図　32号地下式横穴墓 …… 168
第119図　33号地下式横穴墓(1) …… 170
第120図　33号地下式横穴墓(2) …… 171
第121図　34号地下式横穴墓 …… 173
第122図　35号地下式横穴墓 …… 175
第123図　36号地下式横穴墓 …… 177
第124図　37号地下式横穴墓 …… 179
第125図　38号地下式横穴墓 …… 181
第126図　39号地下式横穴墓 …… 183
第127図　41号地下式横穴墓 …… 185
第128図　54号地下式横穴墓 …… 187
第129図　58号地下式横穴墓 …… 189
第130図　59号地下式横穴墓 …… 191
第131図　37号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況… 192
第132図　39号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況… 193
第133図　30号地下式横穴墓出土鉄器 …… 195
第134図　32号地下式横穴墓出土鉄器 …… 196
第135図　33号地下式横穴墓出土鉄器(1) …… 197
第136図　33号地下式横穴墓出土鉄器(2) …… 198
第137図　33号(3)・35号地下式横穴墓出土鉄器 …… 200
第138図　36号地下式横穴墓出土鉄器(1) …… 201
第139図　36号地下式横穴墓出土鉄器(2) …… 203
第140図　38号・59号(1)地下式横穴墓出土鉄器 …… 204
第141図　59号地下式横穴墓出土鉄器(2) …… 205
第142図　59号地下式横穴墓出土鉄器(3) …… 207
第143図　31号地下式横穴出土土器 …… 208
第144図　エリア６出土土器 …… 208
第145図　エリア７遺構配置図 …… 209
第146図　46号地下式横穴墓 …… 211
第147図　47号地下式横穴墓 …… 213
第148図　48号地下式横穴墓 …… 215
第149図　49号地下式横穴墓 …… 217
第150図　50号地下式横穴墓 …… 219
第151図　67号地下式横穴墓 …… 221
第152図　68号地下式横穴墓 …… 223
第153図　69号地下式横穴墓 …… 225
第154図　49号・67号・68号地下式横穴墓出土鉄器 …… 226
第155図　エリア８遺構配置図 …… 227
第156図　51号地下式横穴墓 …… 229
第157図　52号地下式横穴墓 …… 231
第158図　53号地下式横穴墓 …… 233
第159図　55号地下式横穴墓 …… 235
第160図　56号地下式横穴墓 …… 237
第161図　57号地下式横穴墓 …… 239
第162図　60号地下式横穴墓 …… 241
第163図　61号地下式横穴墓 …… 244
第164図　62号地下式横穴墓 …… 244
第165図　63号地下式横穴墓 …… 247
第166図　64号地下式横穴墓 …… 247
第167図　65号地下式横穴墓 …… 249
第168図　66号地下式横穴墓(1) …… 251
第169図　66号地下式横穴墓(2) …… 252
第170図　80号地下式横穴墓 …… 254
第171図　81号地下式横穴墓 …… 257
第172図　82号地下式横穴墓 …… 257
第173図　83号地下式横穴墓 …… 259
第174図　84号地下式横穴墓 …… 261
第175図　３号土坑墓 …… 262
第176図　52号・62号・66号地下式横穴墓出土鉄器 …… 263
第177図　83号地下式横穴墓出土鉄器 …… 264
第178図　エリア８出土土器 …… 265
第179図　エリア９遺構配置図 …… 266
第180図　70号地下式横穴墓 …… 268
第181図　71号地下式横穴墓 …… 270
第182図　72号地下式横穴墓 …… 273
第183図　73号地下式横穴墓 …… 273
第184図　74号地下式横穴墓 …… 275
第185図　75号地下式横穴墓 …… 277
第186図　96号地下式横穴墓 …… 279
第187図　97号地下式横穴墓 …… 281
第188図　98号地下式横穴墓 …… 283

第189図　99号地下式横穴墓 …… 285
第190図　100号地下式横穴墓 …… 287
第191図　101号地下式横穴墓 …… 289
第192図　71号地下式横穴墓出土鉄器(1) …… 291
第193図　71号地下式横穴墓出土鉄器(2) …… 292
第194図　97号・98号(1)地下式横穴墓出土鉄器 …… 293
第195図　98号(2)・101号地下式横穴墓出土鉄器 …… 294
第196図　エリア９出土土器 …… 295
第197図　エリア10遺構配置図 …… 296
第198図　76号地下式横穴墓 …… 298
第199図　77号地下式横穴墓 …… 300
第200図　78号地下式横穴墓 …… 302
第201図　79号地下式横穴墓 …… 304
第202図　85号地下式横穴墓 …… 306
第203図　86号地下式横穴墓 …… 308
第204図　87号地下式横穴墓 …… 310
第205図　88号地下式横穴墓 …… 312
第206図　89号地下式横穴墓(1) …… 314
第207図　89号地下式横穴墓(2) …… 315
第208図　90号地下式横穴墓(1) …… 317
第209図　90号地下式横穴墓(2) …… 318
第210図　90号地下式横穴墓(3) …… 319
第211図　91号地下式横穴墓 …… 321
第212図　92号地下式横穴墓(1) …… 323
第213図　92号地下式横穴墓(2) …… 324
第214図　93号地下式横穴墓 …… 326
第215図　94号地下式横穴墓 …… 328
第216図　95号地下式横穴墓 …… 330
第217図　102号地下式横穴墓 …… 332
第218図　103号地下式横穴墓 …… 334
第219図　104号地下式横穴墓 …… 336
第220図　105号地下式横穴墓(1) …… 338
第221図　105号地下式横穴墓(2) …… 339
第222図　106号地下式横穴墓 …… 341
第223図　107号地下式横穴墓 …… 343
第224図　108号地下式横穴墓 …… 345
第225図　109号地下式横穴墓(1) …… 347
第226図　109号地下式横穴墓(2) …… 348
第227図　110号地下式横穴墓 …… 350
第228図　111号地下式横穴墓実測図(1) …… 352
第229図　111号地下式横穴墓実測図(2) …… 353
第230図　112号地下式横穴墓 …… 355
第231図　113号地下式横穴墓 …… 357
第232図　114号地下式横穴墓 …… 359
第233図　88号～92号地下式横穴墓周辺遺物出土状況(1) … 360
第234図　88号～92号地下式横穴墓周辺遺物出土状況(2)・土層堆積状況 … 361
第235図　111号・112号地下式横穴墓周辺遺物出土状況 … 362
第236図　87号地下式横穴墓出土鉄器 …… 364
第237図　89号・90号(1)地下式横穴墓出土鉄器 …… 365
第238図　90号地下式横穴墓出土鉄器(2) …… 366
第239図　90号地下式横穴墓出土鉄器(3) …… 368
第240図　90号地下式横穴墓出土鉄器(4) …… 369
第241図　90号地下式横穴墓出土鉄器(5)・青銅鈴 …… 370
第242図　90号地下式横穴墓出土青銅鈴Ｘ線ＣＴ画像 … 372
第243図　93号地下式横穴墓出土鉄器 …… 372
第244図　102号地下式横穴墓出土鉄器(1) …… 373
第245図　102号(2)・106号地下式横穴墓出土鉄器 …… 374
第246図　108号地下式横穴墓出土鉄器 …… 375
第247図　110号地下式横穴墓出土鉄器 …… 376
第248図　111号地下式横穴墓出土鉄器 …… 377
第249図　エリア10遺構外出土鉄器 …… 378
第250図　エリア10出土土器(1) …… 379
第251図　エリア10出土土器(2) …… 380
第252図　エリア10出土土器(3) …… 381
第253図　エリア10出土土器(4) …… 382
第254図　エリア11遺構配置図 …… 383
第255図　117号地下式横穴墓 …… 385
第256図　118号地下式横穴墓 …… 387
第257図　119号地下式横穴墓 …… 389
第258図　120号地下式横穴墓 …… 391
第259図　121号地下式横穴墓 …… 393
第260図　122号地下式横穴墓 …… 395
第261図　123号地下式横穴墓 …… 397
第262図　124号地下式横穴墓 …… 399
第263図　118号地下式横穴墓出土鉄器 …… 400
第264図　119号地下式横穴墓出土鉄器 …… 401
第265図　121号地下式横穴墓出土鉄器 …… 402
第266図　エリア11出土土器 …… 403
第267図　エリア12遺構配置図 …… 404
第268図　115号地下式横穴墓 …… 406
第269図　116号地下式横穴墓 …… 408
第270図　125号地下式横穴墓(1) …… 410
第271図　125号地下式横穴墓(2) …… 411
第272図　126号地下式横穴墓 …… 413
第273図　127号地下式横穴墓(1) …… 415
第274図　127号地下式横穴墓(2) …… 416
第275図　128号地下式横穴墓 …… 418
第276図　129号地下式横穴墓 …… 420
第277図　130号地下式横穴墓(1) …… 422
第278図　130号地下式横穴墓(2) …… 423
第279図　130号地下式横穴墓(3) …… 424
第280図　131号地下式横穴墓 …… 426
第281図　４号土坑墓 …… 427
第282図　エリア12　小エリア区分図 …… 428
第283図　エリア12-1遺物出土状況 …… 429
第284図　エリア12-2遺物出土状況(1) …… 430

第285図　エリア12-2遺物出土状況(2) …… 431
第286図　エリア12-2遺物出土状況(3) …… 432
第287図　125号地下式横穴墓周辺土層堆積状況 …… 433
第288図　126号地下式横穴墓周辺土層堆積状況 …… 433
第289図　エリア12-3遺物出土状況(1) …… 434
第290図　エリア12-3遺物出土状況(2) …… 435
第291図　エリア12-4遺物出土状況(1) …… 436
第292図　エリア12-4遺物出土状況(2) …… 437
第293図　エリア12-4遺物出土状況(3) …… 438
第294図　エリア12-5遺物出土状況(1) …… 439
第295図　エリア12-5遺物出土状況(2) …… 440
第296図　エリア12-5遺物出土状況(3) …… 441
第297図　115号地下式横穴墓出土鉄器(1)…… 443
第298図　115号地下式横穴墓出土鉄器(2)…… 444
第299図　115号地下式横穴墓出土鉄器(3)…… 446
第300図　116号地下式横穴墓出土鉄器…… 447
第301図　125号地下式横穴墓出土鉄器（1）…… 448
第302図　125号地下式横穴墓出土鉄器(465～482)Ｘ線ＣＴ画像… 448
第303図　125号地下式横穴墓出土鉄器（2）…… 449
第304図　126号地下式横穴墓出土鉄器・青銅鈴 …… 450
第305図　126号地下式横穴墓出土青銅鈴Ｘ線ＣＴ画像… 451
第306図　127号・128号地下式横穴墓出土鉄器 …… 451
第307図　130号地下式横穴墓出土鉄器(1)…… 453
第308図　130号地下式横穴墓出土鉄器(2)…… 454
第309図　130号地下式横穴墓出土鉄器(3)…… 455
第310図　130号(4)・131号地下式横穴墓出土鉄器 …… 456
第311図　４号土坑出土鉄器 …… 457
第312図　エリア12遺構外出土鉄器 …… 457
第313図　130号地下式横穴墓周辺出土土器…… 458
第314図　４号土坑墓周辺出土土器 …… 458
第315図　エリア12-1出土土器 …… 460
第316図　エリア12-2出土土器(1) …… 461
第317図　エリア12-2出土土器(2) …… 462
第318図　エリア12-2出土土器(3) …… 463
第319図　エリア12-4出土土器(1) …… 464
第320図　エリア12-4出土土器(2) …… 465
第321図　エリア12-4出土土器(3) …… 466
第322図　エリア12-4出土土器(4) …… 467
第323図　エリア12-4出土土器(5) …… 468
第324図　エリア12-4出土土器(6) …… 469
第325図　エリア12-4出土土器(7) …… 470
第326図　エリア12-5出土土器(1) …… 471
第327図　エリア12-5出土土器(2) …… 472
第328図　エリア12-5出土土器(3) …… 473
第329図　エリア13遺構配置図 …… 474
第330図　132号地下式横穴墓(1)…… 476
第331図　132号地下式横穴墓(2)…… 477
第332図　133号地下式横穴墓…… 479
第333図　134号地下式横穴墓…… 481
第334図　135号地下式横穴墓…… 483
第335図　132号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況… 484
第336図　134号・135号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況… 485
第337図　134号地下式横穴墓出土鉄器…… 485
第338図　エリア13出土土器(1) …… 486
第339図　エリア13出土土器(2) …… 487
第340図　エリア14遺構配置図 …… 488
第341図　136号地下式横穴墓…… 490
第342図　137号地下式横穴墓(1)…… 492
第343図　137号地下式横穴墓(2)…… 493
第344図　138号地下式横穴墓…… 495
第345図　139号地下式横穴墓…… 497
第346図　140号地下式横穴墓…… 499
第347図　141号地下式横穴墓…… 501
第348図　137号・138号地下式横穴墓周辺遺物出土状況(1) … 502
第349図　137号・138号地下式横穴墓周辺遺物出土状況(2) … 503
第350図　137号・138号地下式横穴墓周辺遺物出土状況(3) … 504
第351図　136号・137号地下式横穴墓出土鉄器 …… 505
第352図　141号地下式横穴墓出土鉄器(1)…… 506
第353図　141号地下式横穴墓出土鉄器(2)…… 507
第354図　エリア14出土土器(1) …… 509
第355図　エリア14出土土器(2) …… 510

第２分冊

第356図　立小野堀遺跡エリア区分図 …… 1
第357図　エリア15遺構配置図 …… 2
第358図　142号地下式横穴墓…… 4
第359図　143号地下式横穴墓…… 6
第360図　144号地下式横穴墓…… 8
第361図　145号地下式横穴墓……10
第362図　144号地下式横穴墓出土鉄器(1)……11
第363図　144号地下式横穴墓出土鉄器(2)……12
第364図　145号地下式横穴墓出土鉄器……13
第365図　エリア16遺構配置図 ……14
第366図　146号地下式横穴墓……16
第367図　147号地下式横穴墓……19
第368図　149号地下式横穴墓……19
第369図　148号地下式横穴墓……21
第370図　150号地下式横穴墓……23
第371図　151号地下式横穴墓……25
第372図　152号地下式横穴墓……27
第373図　153号地下式横穴墓……29
第374図　154号地下式横穴墓……31
第375図　155号地下式横穴墓(1)……33
第376図　155号地下式横穴墓(2)……34
第377図　156号地下式横穴墓……36
第378図　157号地下式横穴墓……38

第379図　158号地下式横穴墓……40
第380図　159号地下式横穴墓(1)……42
第381図　159号地下式横穴墓(2)……43
第382図　160号地下式横穴墓……45
第383図　161号地下式横穴墓……47
第384図　162号地下式横穴墓……49
第385図　163号地下式横穴墓……51
第386図　164号地下式横穴墓(1)……53
第387図　164号地下式横穴墓(2)……54
第388図　165号地下式横穴墓……56
第389図　166号地下式横穴墓……58
第390図　167号地下式横穴墓……60
第391図　168号地下式横穴墓……62
第392図　５号土坑墓 ……63
第393図　エリア16溝状遺構 ……64
第394図　150号・151号地下式横穴墓周辺遺物出土状況 …65
第395図　エリア16　小エリア区分図 …… 66
第396図　エリア16-1遺物出土状況 ……67
第397図　エリア16-2遺物出土状況(1) ……68
第398図　エリア16-2遺物出土状況(2) ……69
第399図　エリア16-2遺物出土状況(3) ……70
第400図　エリア16-3遺物出土状況(1) ……70
第401図　エリア16-3遺物出土状況(2) ……71
第402図　エリア16-3遺物出土状況(3) ……72
第403図　エリア16-4遺物出土状況(1) ……73
第404図　エリア16-4遺物出土状況(2) ……74
第405図　エリア16-5遺物出土状況(1) ……75
第406図　エリア16-5遺物出土状況(2) ……76
第407図　エリア16-5遺物出土状況(3) ……77
第408図　エリア16-6遺物出土状況(1) ……78
第409図　エリア16-6遺物出土状況(2) ……79
第410図　エリア16-6遺物出土状況(3) ……80
第411図　146号地下式横穴墓出土鉄器……82
第412図　148号・150号・155号地下式横穴墓出土鉄器……83
第413図　158号地下式横穴墓出土鉄器(1)……84
第414図　158号地下式横穴墓出土鉄器(2)……86
第415図　158号地下式横穴墓出土鉄器(3)……87
第416図　159号地下式横穴墓出土鉄器(1)……88
第417図　159号地下式横穴墓出土鉄器(2)……89
第418図　159号地下式横穴墓出土鉄器(3)……90
第419図　159号地下式横穴墓出土鉄器(4)……92
第420図　161号・162号地下式横穴墓出土鉄器 ……93
第421図　163号・168号地下式横穴墓出土鉄器 ……94
第422図　エリア16遺構外出土鉄器(1) ……94
第423図　エリア16遺構外出土鉄器(2) ……95
第424図　エリア16-1出土土器 ……96
第425図　エリア16-2出土土器(1) ……97
第426図　エリア16-2出土土器(2) ……98
第427図　エリア16-2出土土器(3) ……99
第428図　エリア16-2出土土器(4) …… 100
第429図　エリア16-3出土土器 …… 101
第430図　エリア16-4出土土器 …… 101
第431図　エリア16-5出土土器(1) …… 102
第432図　エリア16-5出土土器(2) …… 103
第433図　エリア16-5出土土器(3) …… 104
第434図　エリア16-6出土土器(1) …… 105
第435図　エリア16-6出土土器(2) …… 106
第436図　エリア16-6出土土器(3) …… 107
第437図　エリア16-6出土土器(4) …… 108
第438図　エリア16-6出土土器(5) …… 109
第439図　エリア17遺構配置図 …… 111
第440図　176号地下式横穴墓…… 113
第441図　177号地下式横穴墓…… 115
第442図　178号地下式横穴墓…… 117
第443図　179号地下式横穴墓…… 119
第444図　180号地下式横穴墓…… 121
第445図　182号地下式横穴墓…… 123
第446図　176号地下式横穴墓出土鉄器…… 124
第447図　エリア18遺構配置図 …… 125
第448図　169号地下式横穴墓…… 127
第449図　170号地下式横穴墓…… 129
第450図　171号地下式横穴墓…… 131
第451図　172号地下式横穴墓…… 133
第452図　173号地下式横穴墓(1)…… 135
第453図　173号地下式横穴墓(2)…… 136
第454図　174号地下式横穴墓…… 139
第455図　175号地下式横穴墓…… 139
第456図　181号地下式横穴墓…… 141
第457図　173号地下式横穴墓出土鉄器(1)…… 142
第458図　173号地下式横穴墓出土鉄器(2)…… 143
第459図　173号地下式横穴墓出土鉄器(3)…… 144
第460図　173号(4)・175号・181号地下式横穴墓出土鉄器… 145
第461図　エリア18出土土器 …… 145
第462図　エリア19遺構配置図 …… 146
第463図　183号地下式横穴墓…… 148
第464図　エリア20遺構配置図 …… 149
第465図　184号地下式横穴墓…… 151
第466図　185号地下式横穴墓…… 153
第467図　186号地下式横穴墓…… 155
第468図　187号地下式横穴墓(1)…… 158
第469図　187号地下式横穴墓(2)…… 159
第470図　187号地下式横穴墓(3)…… 160
第471図　188号地下式横穴墓…… 160
第472図　189号地下式横穴墓…… 162
第473図　186号・187号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況
…… 163

第474図　187号地下式横穴墓出土鉄器…… 164
第475図　エリア20出土土器 …… 165
第476図　エリア21遺構配置図 …… 166
第477図　190号地下式横穴墓…… 168
第478図　一般遺物(1) …… 169
第479図　一般遺物(2) …… 170
第480図　地下式横穴墓分類図 …… 352
第481図　41～46区の凹地状の地形 …… 354
第482図　地下式横穴墓の頭位の方向 …… 356
第483図　鉄鏃分類図 …… 359
第484図　土器編年図 …… 365
第485図　Ⅰ期土器分布図 …… 367
第486図　Ⅱ期土器分布図 …… 367
第487図　Ⅲ期土器分布図 …… 368
第488図　Ⅱ・Ⅲ期土器分布図 …… 368
第489図　赤色顔料・須恵器分布図 …… 370
第490図　地下式横穴墓築造時期図 …… 371

付図１　古墳時代遺構全体図１
付図２　古墳時代遺構全体図２
付図３　エリア12土器集中区域
付図４　エリア16土器集中区域

表　目　次

表目次

第１分冊

第１表　周辺遺跡 ……13
第２表　大崎ＩＣ（仮称）～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡 …16
第３表　立小野堀遺跡　基本層序 ……21
第４表　落とし穴計測表 ……32
第５表　溝状遺構計測表 ……33
第６表　包含層出土土器観察表 ……37
第７表　石器観察表 ……41
第８表　鉄鏃分類表 ……54
第９表　土器分類表 ……58

第２分冊

第10表　地下式横穴墓観察表(1) …… 171
第11表　地下式横穴墓観察表(2) …… 172
第12表　地下式横穴墓(3)・土坑墓観察表 …… 173
第13表　土器観察表(1) …… 174
第14表　土器観察表(2) …… 175
第15表　土器観察表(3) …… 176
第16表　土器観察表(4) …… 177
第17表　土器観察表(5) …… 178
第18表　土器観察表(6) …… 179
第19表　土器観察表(7) …… 180
第20表　古墳時代金属製品観察表(1) …… 181
第21表　古墳時代金属製品観察表(2) …… 182
第22表　古墳時代金属製品観察表(3) …… 183
第23表　古墳時代金属製品観察表(4) …… 184
第24表　古墳時代金属製品観察表(5) …… 185
第25表　古墳時代金属製品観察表(6) …… 186
第26表　古墳時代金属製品観察表(7) …… 187
第27表　古墳時代金属製品観察表(8) …… 188
第28表　古墳時代金属製品観察表(9) …… 189
第29表　古墳時代金属製品観察表(10) …… 190
第30表　古墳時代金属製品観察表(11) …… 191
第31表　古墳時代金属製品観察表(12) …… 192
第32表　遺構内出土金属製品一覧と時期分類…… 358

遺構詳細観察表目次

第１分冊

１号地下式横穴墓…… 61
２号地下式横穴墓…… 63
３号地下式横穴墓…… 65
４号地下式横穴墓…… 67
５号地下式横穴墓…… 73
６号地下式横穴墓…… 75
７号地下式横穴墓…… 77
８号地下式横穴墓…… 79
９号地下式横穴墓…… 81
15号地下式横穴墓…… 90
16号地下式横穴墓…… 92
17号地下式横穴墓…… 94
18号地下式横穴墓…… 96
19号地下式横穴墓…… 98
20号地下式横穴墓……100
21号地下式横穴墓……102
22号地下式横穴墓……104
23号地下式横穴墓……106
24号地下式横穴墓……108
25号地下式横穴墓……111
26号地下式横穴墓……112
28号地下式横穴墓……114
10号地下式横穴墓……128
11号地下式横穴墓……130
12号地下式横穴墓……132
13号地下式横穴墓……134
14号地下式横穴墓……136
27号地下式横穴墓……138
29号地下式横穴墓……141
40号地下式横穴墓……150
42号地下式横穴墓……152
43号地下式横穴墓……154
44号地下式横穴墓……156
45号地下式横穴墓……158
30号地下式横穴墓……162
31号地下式横穴墓……164
32号地下式横穴墓……167
33号地下式横穴墓……169
34号地下式横穴墓……172
35号地下式横穴墓……174
36号地下式横穴墓……176
37号地下式横穴墓……178
38号地下式横穴墓……180
39号地下式横穴墓……182
41号地下式横穴墓……184
54号地下式横穴墓……186
58号地下式横穴墓……188
59号地下式横穴墓……190
46号地下式横穴墓……210
47号地下式横穴墓……212
48号地下式横穴墓……214
49号地下式横穴墓……216
50号地下式横穴墓……218
67号地下式横穴墓……220
68号地下式横穴墓……222
69号地下式横穴墓……224
51号地下式横穴墓……228
52号地下式横穴墓……230
53号地下式横穴墓……232
55号地下式横穴墓……234
56号地下式横穴墓……236
57号地下式横穴墓……238
60号地下式横穴墓……240
61号地下式横穴墓……242
62号地下式横穴墓……243
63号地下式横穴墓……245
64号地下式横穴墓……246
65号地下式横穴墓……248
66号地下式横穴墓……250
80号地下式横穴墓……253
81号地下式横穴墓……255
82号地下式横穴墓……256
83号地下式横穴墓……258
84号地下式横穴墓……260
70号地下式横穴墓……267
71号地下式横穴墓……269
72号地下式横穴墓……271
73号地下式横穴墓……272
74号地下式横穴墓……274
75号地下式横穴墓……276
96号地下式横穴墓……278
97号地下式横穴墓……280
98号地下式横穴墓……282
99号地下式横穴墓……284
100号地下式横穴墓 ……286
101号地下式横穴墓 ……288
76号地下式横穴墓……297
77号地下式横穴墓……299
78号地下式横穴墓……301
79号地下式横穴墓……303
85号地下式横穴墓……305
86号地下式横穴墓……307
87号地下式横穴墓……309
88号地下式横穴墓……311
89号地下式横穴墓……313
90号地下式横穴墓……316
91号地下式横穴墓……320
92号地下式横穴墓……322
93号地下式横穴墓……325
94号地下式横穴墓……327
95号地下式横穴墓……329

102号地下式横穴墓 …… 331
103号地下式横穴墓 …… 333
104号地下式横穴墓 …… 335
105号地下式横穴墓 …… 337
106号地下式横穴墓 …… 340
107号地下式横穴墓 …… 342
108号地下式横穴墓 …… 344
109号地下式横穴墓 …… 346
110号地下式横穴墓 …… 349
111号地下式横穴墓 …… 351
112号地下式横穴墓 …… 354
113号地下式横穴墓 …… 356
114号地下式横穴墓 …… 358
117号地下式横穴墓 …… 384
118号地下式横穴墓 …… 386
119号地下式横穴墓 …… 388
120号地下式横穴墓 …… 390
121号地下式横穴墓 …… 392
122号地下式横穴墓 …… 394
123号地下式横穴墓 …… 396
124号地下式横穴墓 …… 398
115号地下式横穴墓 …… 405
116号地下式横穴墓 …… 407
125号地下式横穴墓 …… 409
126号地下式横穴墓 …… 412
127号地下式横穴墓 …… 414
128号地下式横穴墓 …… 417
129号地下式横穴墓 …… 419
130号地下式横穴墓 …… 421
131号地下式横穴墓 …… 425
132号地下式横穴墓 …… 475
133号地下式横穴墓 …… 478
134号地下式横穴墓 …… 480
135号地下式横穴墓 …… 482
136号地下式横穴墓 …… 489
137号地下式横穴墓 …… 491
138号地下式横穴墓 …… 494
139号地下式横穴墓 …… 496
140号地下式横穴墓 …… 498
141号地下式横穴墓 …… 500

第２分冊

142号地下式横穴墓 …… 3
143号地下式横穴墓 …… 5
144号地下式横穴墓 …… 7
145号地下式横穴墓 …… 9
146号地下式横穴墓 …… 15
147号地下式横穴墓 …… 17
149号地下式横穴墓 …… 18
148号地下式横穴墓 …… 20
150号地下式横穴墓 …… 22
151号地下式横穴墓 …… 24
152号地下式横穴墓 …… 26
153号地下式横穴墓 …… 28
154号地下式横穴墓 …… 30
155号地下式横穴墓 …… 32
156号地下式横穴墓 …… 35
157号地下式横穴墓 …… 37
158号地下式横穴墓 …… 39
159号地下式横穴墓 …… 41
160号地下式横穴墓 …… 44
161号地下式横穴墓 …… 46
162号地下式横穴墓 …… 48
163号地下式横穴墓 …… 50
164号地下式横穴墓 …… 52
165号地下式横穴墓 …… 55
166号地下式横穴墓 …… 57
167号地下式横穴墓 …… 59
168号地下式横穴墓 …… 61
176号地下式横穴墓 …… 112
177号地下式横穴墓 …… 114
178号地下式横穴墓 …… 116
179号地下式横穴墓 …… 118
180号地下式横穴墓 …… 120
182号地下式横穴墓 …… 122
169号地下式横穴墓 …… 126
170号地下式横穴墓 …… 128
171号地下式横穴墓 …… 130
172号地下式横穴墓 …… 132
173号地下式横穴墓 …… 134
174号地下式横穴墓 …… 137
175号地下式横穴墓 …… 138
181号地下式横穴墓 …… 140
183号地下式横穴墓 …… 147
184号地下式横穴墓 …… 150
185号地下式横穴墓 …… 152
186号地下式横穴墓 …… 154
187号地下式横穴墓 …… 156
188号地下式横穴墓 …… 157
189号地下式横穴墓 …… 161
190号地下式横穴墓 …… 167

図　版　目　次

巻頭図版		ページ
図版１	立小野堀遺跡遠景（北西より国見山地方向を望む）……	1
図版２	立小野堀遺跡遠景（南西より高隈山地方向を望む）……	2
図版３	90号地下式横穴墓……	3
図版４	古墳時代の出土遺物……	4
図版５	古墳時代の壺……	5
図版６	エリア16出土土器……	6
図版７	古墳時代の高坏・坩・ミニチュア土器…	7
図版８	古墳時代最古段階鉄器(71号地下式横穴墓出土) …	8
図版９	青銅鈴と共伴遺物１(90号地下式横穴墓) …	9
図版10	青銅鈴と共伴遺物２(126号地下式横穴墓) …	10
図版１	遺跡近景・遠景……	1
図版２	調査風景・土層・遺物出土状況……	2
図版３	土器集中区域・調査指導……	3
図版４	遺跡見学・現地説明会……	4
図版５	１号地下式横穴墓(1)……	5
図版６	１号地下式横穴墓(2)……	6
図版７	２号地下式横穴墓……	7
図版８	３号地下式横穴墓……	8
図版９	４号地下式横穴墓……	9
図版10	１号土坑墓……	10
図版11	５号地下式横穴墓……	11
図版12	６号地下式横穴墓……	12
図版13	７号地下式横穴墓……	13
図版14	８号地下式横穴墓……	14
図版15	９号地下式横穴墓……	15
図版16	10号地下式横穴墓(1)……	16
図版17	10号地下式横穴墓(2)……	17
図版18	11号地下式横穴墓……	18
図版19	12号地下式横穴墓……	19
図版20	13号地下式横穴墓……	20
図版21	14号地下式横穴墓……	21
図版22	15号地下式横穴墓……	22
図版23	16号地下式横穴墓(1)……	23
図版24	16号地下式横穴墓(2)……	24
図版25	17号地下式横穴墓……	25
図版26	18号地下式横穴墓……	26
図版27	19号地下式横穴墓……	27
図版28	20号地下式横穴墓……	28
図版29	21号地下式横穴墓……	29
図版30	22号地下式横穴墓……	30
図版31	23号地下式横穴墓……	31
図版32	24号地下式横穴墓(1)……	32
図版33	24号地下式横穴墓(2)……	33
図版34	25号地下式横穴墓……	34
図版35	26号地下式横穴墓……	35
図版36	２号土坑墓……	36
図版37	27号地下式横穴墓(1)……	37
図版38	27号地下式横穴墓(2)……	38
図版39	28号地下式横穴墓(1)……	39
図版40	28号地下式横穴墓(2)……	40
図版41	29号地下式横穴墓……	41
図版42	30号地下式横穴墓……	42
図版43	31号地下式横穴墓……	43
図版44	32号地下式横穴墓……	44
図版45	33号地下式横穴墓(1)……	45
図版46	33号地下式横穴墓(2)……	46
図版47	34号地下式横穴墓……	47
図版48	35号地下式横穴墓……	48
図版49	36号地下式横穴墓……	49
図版50	37号地下式横穴墓……	50
図版51	38号地下式横穴墓……	51
図版52	39号地下式横穴墓……	52
図版53	40号地下式横穴墓……	53
図版54	41号地下式横穴墓……	54
図版55	42号地下式横穴墓……	55
図版56	43号地下式横穴墓……	56
図版57	44号地下式横穴墓……	57
図版58	45号地下式横穴墓……	58
図版59	46号地下式横穴墓……	59
図版60	47号地下式横穴墓……	60
図版61	48号地下式横穴墓……	61
図版62	49号地下式横穴墓……	62
図版63	50号地下式横穴墓……	63
図版64	51号地下式横穴墓……	64
図版65	52号地下式横穴墓……	65
図版66	53号地下式横穴墓……	66
図版67	54号地下式横穴墓……	67
図版68	55号地下式横穴墓……	68
図版69	56号地下式横穴墓……	69
図版70	57号地下式横穴墓……	70
図版71	58号地下式横穴墓……	71
図版72	59号地下式横穴墓……	72
図版73	60号地下式横穴墓……	73
図版74	61号地下式横穴墓……	74
図版75	３号土坑墓……	75
図版76	62号地下式横穴墓……	76
図版77	63号地下式横穴墓……	77
図版78	64号地下式横穴墓……	78

図版79　65号地下式横穴墓…… 79
図版80　66号地下式横穴墓…… 83
図版81　67号地下式横穴墓…… 84
図版82　68号地下式横穴墓…… 85
図版83　69号地下式横穴墓…… 83
図版84　70号地下式横穴墓…… 84
図版85　71号地下式横穴墓…… 85
図版86　72号地下式横穴墓…… 86
図版87　73号地下式横穴墓…… 87
図版88　74号地下式横穴墓…… 88
図版89　75号地下式横穴墓…… 89
図版90　76号地下式横穴墓…… 90
図版91　77号地下式横穴墓…… 91
図版92　78号地下式横穴墓…… 92
図版93　79号地下式横穴墓…… 93
図版94　80号地下式横穴墓…… 94
図版95　81号地下式横穴墓…… 95
図版96　82号地下式横穴墓…… 96
図版97　83号地下式横穴墓…… 97
図版98　84号地下式横穴墓…… 98
図版99　85号地下式横穴墓…… 99
図版100　86号地下式横穴墓……100
図版101　87号地下式横穴墓……101
図版102　88号地下式横穴墓……102
図版103　89号地下式横穴墓(1)……103
図版104　89号地下式横穴墓(2)……104
図版105　90号地下式横穴墓(1)……105
図版106　90号地下式横穴墓(2)……106
図版107　90号地下式横穴墓……107
図版108　91号地下式横穴墓……108
図版109　92号地下式横穴墓……109
図版110　F ～ J −38・39区遺構完掘状況 ……110
図版111　93号地下式横穴墓……111
図版112　94号地下式横穴墓……112
図版113　95号地下式横穴墓……113
図版114　96号地下式横穴墓……114
図版115　97号地下式横穴墓……115
図版116　98号地下式横穴墓……116
図版117　99号地下式横穴墓……117
図版118　100号地下式横穴墓 ……118
図版119　101号地下式横穴墓 ……119
図版120　102号地下式横穴墓 ……120
図版121　103号地下式横穴墓 ……121
図版122　104号地下式横穴墓 ……122
図版123　４号土坑墓……123
図版124　105号地下式横穴墓 ……124
図版125　106号地下式横穴墓 ……125
図版126　107号地下式横穴墓 ……126
図版127　108号地下式横穴墓 ……127
図版128　109号地下式横穴墓 ……128
図版129　110号地下式横穴墓 ……129
図版130　111号地下式横穴墓 ……130
図版131　112号地下式横穴墓 ……131
図版132　113号地下式横穴墓 ……132
図版133　114号地下式横穴墓 ……133
図版134　115号地下式横穴墓(1) ……134
図版135　115号地下式横穴墓(2) ……135
図版136　116号地下式横穴墓 ……136
図版137　117号地下式横穴墓 ……137
図版138　118号地下式横穴墓 ……138
図版139　119号地下式横穴墓 ……139
図版140　120号地下式横穴墓 ……140
図版141　121号地下式横穴墓 ……141
図版142　122号地下式横穴墓 ……142
図版143　123号地下式横穴墓 ……143
図版144　124号地下式横穴墓 ……144
図版145　125号地下式横穴墓(1) ……145
図版146　125号地下式横穴墓(2) ……146
図版147　126号地下式横穴墓(1) ……147
図版148　126号地下式横穴墓(2) ……148
図版149　127号地下式横穴墓(1) ……149
図版150　127号地下式横穴墓(2) ……150
図版151　127号地下式横穴墓(3) ……151
図版152　128号地下式横穴墓 ……152
図版153　129号地下式横穴墓 ……153
図版154　130号地下式横穴墓(1) ……154
図版155　130号地下式横穴墓(2) ……155
図版156　130号地下式横穴墓(3) ……156
図版157　131号地下式横穴墓 ……157
図版158　132号地下式横穴墓 ……158
図版159　133号地下式横穴墓 ……159
図版160　134号地下式横穴墓 ……160
図版161　135号地下式横穴墓 ……161
図版162　136号地下式横穴墓 ……162
図版163　137号地下式横穴墓 ……163
図版164　138号地下式横穴墓 ……164
図版165　139号地下式横穴墓 ……165
図版166　140号地下式横穴墓 ……166
図版167　141号地下式横穴墓 ……167
図版168　142号地下式横穴墓 ……168
図版169　143号地下式横穴墓 ……169
図版170　144号地下式横穴墓 ……170
図版171　145号地下式横穴墓 ……171
図版172　146号地下式横穴墓 ……172
図版173　147号地下式横穴墓 ……173
図版174　148号地下式横穴墓 ……174

図版175　149号地下式横穴墓 ……175
図版176　150号地下式横穴墓 ……176
図版177　151号地下式横穴墓 ……177
図版178　G・H-45・46区遺構完掘状況 ……178
図版179　152号地下式横穴墓 ……179
図版180　153号地下式横穴墓 ……180
図版181　5号土坑墓……181
図版182　5号土坑墓，153号～155号地下式横穴墓間溝状遺構……182
図版183　154号地下式横穴墓(1) ……183
図版184　154号地下式横穴墓(2) ……184
図版185　155号地下式横穴墓 ……185
図版186　156号地下式横穴墓 ……186
図版187　157号地下式横穴墓 ……187
図版188　158号地下式横穴墓(1) ……188
図版189　158号地下式横穴墓(2) ……189
図版190　159号地下式横穴墓 ……190
図版191　160号地下式横穴墓 ……191
図版192　161号地下式横穴墓(1) ……192
図版193　161号地下式横穴墓(2) ……193
図版194　162号地下式横穴墓 ……194
図版195　163号地下式横穴墓 ……195
図版196　164号地下式横穴墓 ……196
図版197　G・H-46区遺構完掘状況 ……197
図版198　165号地下式横穴墓 ……198
図版199　166号地下式横穴墓 ……199
図版200　167号地下式横穴墓 ……200
図版201　168号地下式横穴墓 ……201
図版202　169号地下式横穴墓 ……202
図版203　170号地下式横穴墓 ……203
図版204　171号地下式横穴墓 ……204
図版205　H-47・48区遺構完掘状況 ……205
図版206　172号地下式横穴墓 ……206
図版207　173号地下式横穴墓 ……207
図版208　174・175号地下式横穴墓……208
図版209　176号地下式横穴墓 ……209
図版210　177号地下式横穴墓 ……210
図版211　178・179号地下式横穴墓……211
図版212　F・G-47・48区遺構完掘状況 ……212
図版213　180号地下式横穴墓 ……213
図版214　181号地下式横穴墓 ……214
図版215　182号地下式横穴墓 ……215
図版216　183号地下式横穴墓 ……216
図版217　184号地下式横穴墓 ……217
図版218　185号地下式横穴墓 ……218
図版219　186号地下式横穴墓 ……219
図版220　187号地下式横穴墓(1) ……220
図版221　187号地下式横穴墓(2) ……221
図版222　187号地下式横穴墓(3) ……222
図版223　188・189号地下式横穴墓……223
図版224　190号地下式横穴墓 ……224
図版225　H・I-39・40区境　落とし穴 ……225
図版226　E～H-52区　溝状遺構 ……226
図版227　古墳時代の土器1 ……　227
図版228　古墳時代の土器2 ……228
図版229　古墳時代の土器3 ……229
図版230　古墳時代の土器4 ……230
図版231　古墳時代の土器5 ……231
図版232　古墳時代の土器6 ……232
図版233　古墳時代の土器7 ……233
図版234　古墳時代の土器8 ……234
図版235　古墳時代の土器9 ……235
図版236　古墳時代の土器10……236
図版237　古墳時代の須恵器甕……237
図版238　古墳時代の須恵器……238
図版239　地下式横穴墓出土刀剣類1 ……239
図版240　地下式横穴墓出土刀剣類2 ……240
図版241　地下式横穴墓出土刀剣類3 ……241
図版242　地下式横穴墓出土刀剣類4 ……242
図版243　地下式横穴墓出土刀剣類5 ……243
図版244　地下式横穴墓出土鉄器1 ……244
図版245　地下式横穴墓出土鉄器2 ……245
図版246　地下式横穴墓出土鉄器3 ……246
図版247　地下式横穴墓出土鉄器4 ……247
図版248　地下式横穴墓出土鉄器5 ……248
図版249　地下式横穴墓出土鉄器6 ……249
図版250　地下式横穴墓出土鉄器7 ……250
図版251　地下式横穴墓出土鉄器8 ……251
図版252　地下式横穴墓出土鉄器9 ……252
図版253　地下式横穴墓出土青銅鈴・遺構外出土鉄器……253
図版254　地下式横穴墓出土青銅鈴……254
図版255　鉄器拡大1 ……255
図版256　鉄器拡大2 ……256
図版257　鉄器拡大3 ……257
図版258　鉄器拡大4 ……258
図版259　鉄器拡大5 ……259
図版260　鉄器拡大6 ……260
図版261　鉄器拡大7 ……261
図版262　鉄器拡大8 ……262
図版263　鉄器拡大9 ……263
図版264　縄文時代•弥生時代の石器 ……264
図版265　縄文時代・弥生時代・中世の土器……265

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ区間の事業に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）に照会した。

この計画に伴い文化財課は，平成11年１月に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間を，平成12年２月には志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50か所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センターの４者で協議を重ね対応を検討している最中に日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。

このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の緻密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査，試掘調査，確認調査が実施されることとなった。

そこで，県教委は，まず，平成13年１月29日から平成13年２月６日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，石綴遺跡，十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに，平成13年７月10日から７月26日に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査と，平成13年９月17日～10月26日，平成13年12月３日～12月25日の２期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に平成13年10月１日から平成14年３月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年４月には，志布志ＩＣ～鹿屋串良JCT間の遺跡について再度分布調査を実施した。

その後，日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成15年11月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年12月に大隅ＩＣ（平成21年４月28日，「曽於弥五郎ＩＣ」へ名称変更）から末吉財部ＩＣ間の発掘調査協定書締結，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が行われ，工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま生きるということになった。ただし，日本道路公団からの委託は曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

平成24年度，国土交通省は，平成25年度から東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良JCT間）の建設工事をさらに推進する意向を示し，発掘調査期間の短縮を要請してきた。

このような状況に対応するため，県は関係機関で協議を重ね，職員確保や予算運用が柔軟にでき，発掘調査を効率かつ効果的に実施できる財団の設置を決定した。

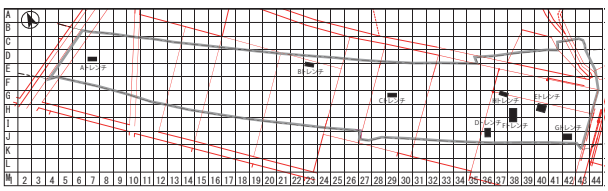
これを受けて，平成25年４月に公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋蔵文化財調査センター（以下「（公財）埋蔵文化財調査センター」という。）が設置された。そして，文化財課は，国事業に関する業務を（公財）埋蔵文化財調査センターへ委託し，（公財）埋蔵文化財調査センターが県立埋蔵文化財センターから業務を引き継ぎ実施することとなった。

第２節　調査の経過

１　確認調査・一部本調査（平成20年度）

確認調査は，平成21年１月20日から平成21年３月19日まで，遺跡東側の田原迫ノ上遺跡，牧山遺跡と平行し実施した（実働34日）。調査は，用地買収が済み，重機等の進入路の確保できたか所に７×３ｍを基本とした確認トレンチを８か所設定し，重機で表土を剥いだ後，人力で掘り下げた。トレンチ設定か所を図中に示す。

調査の結果，現在の耕作土の下はゴボウ栽培のためのトレンチャーによる攪乱を受けている。Ａ～Ｃ及びＨトレンチでは弥生・縄文時代の遺物が検出され，Ｄ～Ｇトレンチでは古墳時代の地下式横穴墓が８基検出された。Ｅトレンチの104号（旧１号）地下式横穴墓は掘り上げ・実測を行った。Ｄ～Ｇトレンチ周辺を中心にかなりの数の墓があると想定され，その墓域を中心に本調査を実施することとなった。調査体制及び詳細は以下のとおりである。



第４図　　平成20年度確認調査時のトレンチ配置図

調査体制

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	宮原　景信
調査企画	〃	次長兼総務課長	平山　章
	〃	次長兼南の縄文調査室長	池畑　耕一
	〃	調査第二課長	彌榮　久志
	〃	主任文化財主事兼調査第二課第一調査係長	中村　耕治
調査担当	〃	文化財主事	髙岡　和也
事務担当	〃	総務係長	紙屋　伸一
	〃	主事	五百路　真

【1月】

Aトレンチ：Ⅳ層掘り下げ。Bトレンチ表土剥ぎ。

【2月】

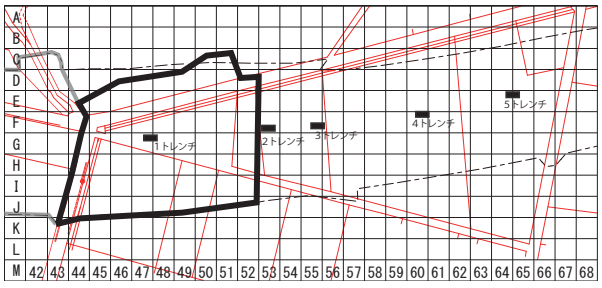
Bトレンチ：Ⅲ～Ⅳ層掘り下げ。Cトレンチ：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ。D～Hトレンチ掘り下げ。D・Fトレンチ Ⅳ層調査。Gトレンチ：Ⅲ～Ⅳ層調査。

【3月】

104号（旧1号）地下式横穴墓完掘。埋め戻し。

2　43区以東の確認調査（平成22年度）

立小野堀遺跡と田原迫ノ上遺跡の調査が平成22年度に始まると，両遺跡間側の調査範囲境界付近でも遺構・遺物が発見されていることから，両遺跡は範囲が拡大する可能性が出てきた。このため，両遺跡間に試掘確認調査を実施することとなり，平成22年10月８日に文化財課が確認調査を実施した。確認トレンチ設置部分を第５図に示す。



第５図　平成22年度確認調査時のトレンチ配置図及び範囲拡張部分

５か所設定されたトレンチを重機及び人力で掘り下げた。この結果，１トレンチから地下式横穴墓と思われる竪坑及び赤色顔料が検出された。２～５トレンチからは遺物・遺構とも検出されなかった。このため，立小野堀遺跡の墓域が広がることが確実となり，調査範囲を52区まで拡大した。なお，この際の調査体制は以下のとおりである。

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査者	鹿児島県教育庁文化財課		
		文化財主事	中村　和美
立会者	大隅河川国道事務所調査第三課		
		専門職	黒木　敏郎
調査協力者	鹿屋市教育委員会文化課		
		主任主事	稲村　博文

第３節　本調査

本調査を平成22～24年度及び平成26年度前半の，約３年半にわたり実施した。各年度の調査期間は以下のとおりである。

平成22年度：平成22年５月10日～平成23年３月11日
平成23年度：平成23年５月９日～平成24年３月９日
平成24年度：平成24年５月７日～平成25年３月８日
平成26年度：平成25年５月８日～平成25年10月30日

また，各年度の調査体制及び調査の詳細については次のとおりである（日誌抄より）。

調査体制（平成22年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	山下　吉美
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中　明成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	中村　耕治
	〃	調査第二課長	井ノ上秀文
	〃	文化財主事兼調査第二課第一調査係長	前迫　亮一
調査担当	〃	文化財主事	上床　真
	〃	〃	藤島伸一郎
事務担当	〃	総務係長	大園　祥子
	〃	主事	髙﨑　智博

（現地指導者）

橋本　達也	鹿児島大学総合研究博物館准教授
大西　智和	鹿児島国際大学教授
竹中　正巳	鹿児島女子短期大学教授
中村　直子	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長
本田　道輝	鹿児島大学准教授
上村　俊雄	鹿児島県文化財保護審議会委員

調査の詳細（日誌抄より）

【５月】

Ｆ～Ｊ-36～39区：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ。

【６月】

Ｆ～Ｊ-32～35区，Ｆ～Ｊ-37～43区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。

【７月】

Ｅ・Ｆ-34・35区，Ｆ～Ｈ-34～36区，Ｈ～Ｊ-31～35区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。

【８月】

Ｆ～　Ｈ-32～43，　Ｅ-32～39区，Ｉ・Ｊ-42・43区，Ｊ-35区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。

【９月】

Ｅ～Ｊ-32～39区，Ｆ～Ｈ-40～42区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。

【10月】

Ｅ～Ｊ-31～38区，Ｆ～Ｊ-39～42区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。

【11月】

Ｅ～Ｊ-31～39区，Ｆ～Ｈ-40～43区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。

【12月】

Ｈ～Ｊ-33～38区，Ｆ～Ｈ-36～42区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。102号地下式横穴墓完掘。

【１月】

Ｆ～Ｈ-36～42区，Ｉ～Ｊ-34～40区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。

【２月】

Ｆ～Ｊ-34～39区，Ｇ～Ｊ-40～42区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。65号・100号・124号地下式横穴墓完掘。

【３月】

Ｅ～Ｈ-29～31区：Ⅶ層まで掘り下げ。Ｅ～Ｈ-29～34区：Ⅶa層まで掘り下げ。Ｆ～Ｉ-29・30区：Ⅵ層まで掘り下げ。Ｆ～Ｊ-34～41区：Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。航空写真撮影。

29・48・53・58・63・96・103・113・119・122号地下式横穴墓完掘。

（来跡者）

橋本　達也（鹿児島大学総合研究博物館准教授）
竹中　正巳（鹿児島女子短期大学教授）
市来　真澄（山口県立萩美術館学芸員）
上村　俊雄（鹿児島県文化財保護審議会委員）
林　　正憲（文化庁文化財調査官）
後藤　雅彦（琉球大学准教授）他鹿大学生２名
中村　　実（鹿屋市副市長）他６名
九州国立博物館共同研究会９名
新東　晃一氏（元県立埋蔵文化財センター次長）
永山　修一（ラサール学園教諭）
中学校社会科研究会の2名の先生
串良町内小学校教諭８名（鹿大橋本達也准教授引率）
霧島市より引率3名生徒22名（霧島キッズ開催）
曽於市文化財保護審議会委員８名
大隅東風隊堀之内裕行氏他７名
市町村文化財担当者7名（埋蔵文化財中級講座）

調査体制（平成23年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	寺田　仁志
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中　明成
	〃 次長	南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	〃	調査第二課長	冨田　逸郎
	〃	主任文化財主事兼	
	〃	調査第二課	
	〃	第一調査係長	八木澤一郎
調査担当	〃	文化財主事	中村　耕治
〃		〃	藤島伸一郎
	〃	文化財調査員	岩元　康成
事務担当	〃	総務係長	大園　祥子
	〃	主査	髙﨑　智博

（現地指導者）

橋本　達也　鹿児島大学総合研究博物館准教授
大西　智和　鹿児島国際大学教授
竹中　正巳　鹿児島女子短期大学教授
豊島　直博　文化庁文化財調査官
三吉　秀充　愛媛大学教授
岩永　哲夫　宮崎県考古学会会長

調査の詳細（日誌抄より）

【５月】

Ｃ～Ｆ-5～9区：Ⅱ～Ⅵ層掘り下げ・一部下層確認調査（ⅩⅢ層まで）。Ｆ～Ｈ-29・30区：Ⅱ～Ⅵ層掘り下げ・一部下層確認調査（ⅩⅢ層まで）。Ⅵ層上面地形測量図作成。Ｅ～Ｊ-31～44区遺構清掃・調査（地下室横穴墓）。64・69号地下式横穴墓完掘。

【６月】

Ｃ～Ｆ-5～10区：Ⅱ～Ⅵ層掘り下げ・一部下層確認調査（ⅩⅢ層まで）調査終了。Ｆ～Ｇ-11～13区，Ｆ～Ｈ-12・13区：Ⅱ～Ⅵ層掘り下げ・一部下層確認調査（ⅩⅢ層まで）。Ｆ～Ｉ-29～31区：Ⅱ～Ⅵ層掘り下げ・一部下層確認調査（ⅩⅢ層まで）調査終了。Ⅵ層上面地形測量図作成。Ｅ～Ｊ-31～44区表土掘り下げ・遺構清掃・調査（地下式横穴墓）。

22・67号地下式横穴墓完掘。

【７月】

Ｆ～Ｈ11～15区：Ⅱ～Ⅵ層掘り下げ・一部下層確認調査（ⅩⅢ層まで）調査終了。Ｆ～Ｈ-16～18区：Ⅱ～Ⅵ

層掘り下げ・一部下層確認調査（ⅩⅢ層まで）。Ｊ-29～30区：Ⅱ～Ⅵ層掘り下げ，Ⅵ層上面地形測量図作成，遺構検出（地下式横穴墓）。Ｅ～Ｊ-31～44区表土掘り下げ・遺構清掃・調査（地下式横穴墓）。Ｆ～J-31・32区：ⅩⅢ層まで掘り下げ（下層確認）。遺構実測委託開始（地下式横穴墓）。
33・41・49・51・52・68・70号地下式横穴墓完掘。
【８月】
Ｆ～Ｈ16～18区：Ⅱ～Ⅵ層掘り下げ・一部下層確認調査（ⅩⅢ層まで）調査終了。Ｆ～Ｈ-19～20区：Ⅱ～Ⅵ層掘り下げ・一部下層確認調査（ⅩⅢ層まで）。Ｅ～Ｊ-31～44区表土掘り下げ・遺構清掃・調査・土層断面実測・コンタ図作成。Ｆ～Ｊ-31・32区：ⅩⅢ層まで掘り下げ（下層確認）。
4・9・11・14・28・30・32・101号地下式横穴墓完掘。
【９月】
Ｆ～Ｈ-19～20区：Ⅵ層まで調査終了・一部下層確認調査（ⅩⅢ層まで）。Ｅ～Ｊ-47～51区表土掘り下げ・一部Ⅵ層まで掘り下げ・遺構検出。Ｅ～Ｊ-31～44区表土掘り下げ・遺構検出・調査・土層断面実測・コンタ図作成。後藤雅彦（琉球大学准教授）他学生3名，地下レーダー実習。
5・10・19・21号地下式横穴墓完掘。
【10月】
Ｃ～Ｅ-11～13区：Ⅵ層まで調査中。Ｆ～Ｈ-19～20区調査終了。Ｅ～Ｊ-48～51区：Ⅵ層まで掘り下げ，遺構検出。Ｅ～Ｊ-31～44区表土掘り下げ・遺構検出・調査・土層断面実測・コンタ図作成。
12・17・20・36・38・62号地下式横穴墓完掘。
【11月】
Ｃ～Ｅ-10～13区調査終了。Ｃ～Ｅ-14～16区調査中（Ⅵ層まで）。Ｄ・Ｅ-45～48区調査中（Ⅵ層まで）。Ｅ～Ｈ-48～51区：Ⅵ層まで掘り下げ，遺構検出。Ｅ～Ｊ-31～44区表土掘り下げ・遺構検出・調査・土層断面実測・コンタ図作成。
40号・42号地下式横穴墓完掘。
【12月】
Ｃ～Ｅ-14～16区調査終了。Ｄ～Ｅ-17～20，Ｃ-17区調査中（Ⅵ層まで）。Ｄ・Ｅ-45～48区調査中（Ⅵ層まで）。Ｅ～Ｈ-49～52区：Ⅵ層まで掘り下げ，遺構検出。Ｅ～Ｊ-31～44区表土掘り下げ・遺構検出・調査・土層断面実測・コンタ図作成。
4号土坑墓完堀。
【１月】
Ｄ～Ｅ17～20，Ｃ-17区調査終了。Ｆ～Ｉ-21～23区調査中（Ⅵ層まで）。Ｅ～Ｊ-31～44区表土掘り下げ・遺構検出・調査・土層断面実測・コンタ図作成。
6・27・43・44・46・47・60号地下式横穴墓完掘。
【２月】
Ｄ～Ｅ-21～23区調査中（Ⅵ層まで）。Ｆ～Ｉ-21～23区調査終了。Ｅ～Ｊ-31～44区表土掘り下げ・遺構検出・調査・土層断面実測・コンタ図作成。航空写真撮影。
66号・87号地下式横穴墓完掘。
【３月】
Ｄ～Ｅ-21～23区調査終了。Ｅ～Ｊ-31～44区表土掘り下げ・遺構検出・調査・土層断面実測・コンタ図作成。
７・115・130号地下式横穴墓完掘。

（来跡者）
国土交通省大隅河川事務所８名
衆議院議員秘書２名，国土交通省４名
国土交通省首長現場見学会　肝属地区4市町長及び国土交通省14名
禰宜田　佳男（文化庁主任文化財調査官）
鹿屋市高隈史談会
東アジアの古代文化を考える会（東京）28名　引率 橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館准教授）
奈良県立橿原考古学研究所１名，東串良町教育長他１名
鹿屋航空自衛隊４名
曽於市カブスカウト小学生12名　引率４名
霧島市文化財少年団小学生10名　引率２名
鹿屋市文化財ウオッチング事業　生徒32名　引率10名
国土交通省　東九州自動車道建設事業マスコミ公開15名
さつま町郷土史研究会２名
大人塾（南九州遺跡巡見）10名
薩摩川内市より見学者４名
埋蔵文化財専門職員養成講座（中級講座）　研修生１名
大隅教育事務所管内市長職員14名
現地説明会開催　参加者201名

調査体制（平成24年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
		所長	寺田　仁志
調査企画	〃	次長兼総務課長	田中　明成
	〃	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	〃	調査第二課長	冨田　逸郎
	〃	文化財主事兼調査第二課第一調査係長	八木澤一郎
調査担当	〃	文化財主事	中村　耕治
	〃	〃	藤島伸一郎
	〃	文化財調査員	榎本　美里
	〃	〃	宮城　幸也

事務担当　〃 総務係長 大園 祥子
　　〃 主査 岡村 信吾

（現地指導者）
竹中　正巳　鹿児島女子短期大学教授
吉村　和昭　奈良県立橿原考古学研究所総括研究員
大西　智和　鹿児島国際大学教授
橋本　達也　鹿児島大学総合研究博物館准教授
柳澤　一男　宮崎大学名誉教授
和田　理啓　宮崎県埋文センター主査
成尾　英仁　武岡台高校教諭
面高　哲郎　元宮崎県埋蔵文化財センター課長

調査の詳細（日誌抄より）

【５月】
Ｄ～Ｉ-24～25区調査中（Ⅵ層まで）。Ｉ～Ｊ-24～28区再調査（遺構検出）。Ｅ～Ｊ-27～34区遺構調査。

【６月】
Ｄ～Ｉ-24･25区調査中（Ⅵ層まで）。Ｉ-24～28，Ｊ-27･28区調査中（Ⅵ層まで）。Ｅ～Ｊ-27～34区遺構調査。
2号地下式横穴墓，1号土坑墓完掘。

【７月】
Ｄ～Ｉ-24・25区調査中（Ⅵ層まで）。Ｉ-24～28，Ｊ-27・28区調査中（Ⅵ層まで）。コンタ図作成。Ｅ～Ｊ-27～44区遺構検出･遺構調査・コンタ図作成。
１・３・８・15・57号地下式横穴墓，2号土坑墓完掘。

【８月】
Ｄ～Ｉ-24･25区　調査中（ⅩⅢ層まで）。Ｆ～Ｈ-24～28区調査中（Ⅵ層まで）。コンタ図作成。Ｅ～Ｊ-27～44区遺構検出･遺構調査･コンタ図作成。
16・24・39・54・56・79・82号地下式横穴墓，3号土坑墓完堀。

【９月】
Ｄ～Ｉ-24・25区調査終了（ⅩⅢ層まで）。Ｄ～Ｅ-24～28区調査終了･コンタ図作成。Ｅ～Ｊ-27～44区遺構検出･遺構調査・コンタ図作成。Ｄ～Ｇ-45～49区遺構調査。Ｅ・Ｆ-35･36区遺構検出･遺構調査（Ⅵ層まで）。
37・73・76・85・88・89・90・91・92・93・94・95・105・107・112号地下式横穴墓完堀。

【10月】
Ｅ～Ｊ-27～44区遺構検出･遺構調査・コンタ図作成。Ｅ・Ｆ-35・36区遺構検出（Ⅵ層まで）。Ｄ・Ｅ-45～47区遺構調査。Ｈ～Ｊ-44～52区遺構検出・遺構調査（Ⅵ層まで）。
34・71・83・86・97・99・106・111・123・143・183号地下式横穴墓完掘。

【11月】
Ｅ～Ｊ-38～44区遺構検出･遺構調査･コンタ図作成。Ｆ～Ｉ-44～52区遺構検出･遺構調査（Ⅵ層まで）。航空写真撮影１回目（37区以西･Ｅ～Ｈ-51・52区）。
13・45・50・59・80・81・84・98・108・117・121・133・135・142・144号地下式横穴墓完掘。

【12月】
Ｅ～Ｊ-38～44区遺構検出・遺構調査・コンタ図作成。Ｄ・Ｅ-48～51区遺構検出・遺構調査。Ｆ～Ｈ-47～51区調査終了。
31・35・77・104・134・138号地下式横穴墓完掘。

【１月】
Ｅ～Ｊ-38～44区遺構検出･遺構調査・コンタ図作成。Ｆ～Ｉ-45～51区遺構調査。航空写真撮影２回目（38～44区）。
23・55・61・72・74・75・109・116・118・120・125・132・140・141号地下式横穴墓完掘。

【２月】
Ｅ～Ｊ-38～44区遺構検出・遺構調査・コンタ図作成。Ｆ～Ｉ-45～51区遺構調査。航空写真撮影３回目（41～51区）。３Ｄレーザー遺構実測。
18・78・110・114・126・128・129・131・136・137・139・146・159・160・185・186・190号地下式横穴墓完掘。

【３月】
Ｅ～Ｊ-38～44区遺構検出･遺構調査。Ｆ～Ｉ-45～51区遺構調査。
25・26・127・173・187号地下式横穴墓完掘。

（来跡者）
井村　隆介（鹿児島大学准教授）
森脇　　広（鹿児島大学教授教授）
上村　俊雄（県文化財保護審議会委員）
海上自衛隊第一航空司令･大隅河川国道事務所事務所長他計６名
県総務福利課３名，曽於市小学校社会科部会20名，垂水市立協和小学校職員５名
西都原博物館より30名
西都原考古博物館ボランティアグループ８名，他２名
ＴＶＱ九州放送番組撮影取材（苅谷俊介氏）
霧島中央新聞社 大薗代表
堀之内　　記者（南日本新聞社）
甲斐　康大（延岡市教育委員会）
石堂　和博（南種子町教育委員会）他５名

調査体制（平成26年度）

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団

埋蔵文化財調査センター

	センター長	堂込　秀人
調査企画	〃	総務課長兼総務係長　山方　直幸
	〃	調査課長　八木澤一郎
	〃	調査第二係長　寺原　徹
調査担当	〃	文化財専門員　藤島伸一郎
	〃	文化財調査員　花薗　友美
	〃	〃　新屋敷久美子
事務担当	〃	総務課長兼総務係長　山方　直幸
	〃	主査　岡村　信吾

（現地指導者）

竹中　正巳　鹿児島女子短期大学教授
下野　真理子　鹿児島女子短期大学助手
田中　裕　茨城大学教授
橋本　達也　鹿児島大学総合研究博物館准教授

調査の詳細（日誌抄より）

【５月】

D～E-45～47区：Ⅳ層掘り下げ。G～Ⅰ-44～52区：Ⅳ層掘り下げ・遺構調査。

【６月】

D～E-45～47区：Ⅳ層掘り下げ（調査終了）。G～Ⅰ-44～49区：Ⅳ層掘り下げ・遺構調査（H～Ⅰ-47～52区調査終了）。

161・166・167・169・171号地下式横穴墓完掘。

【７月】

E～H-45～52区：Ⅳ層掘り下げ（F・G-45～47区及びE～H-49～52区調査終了）。G～Ⅰ-44～47区：Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ・遺構調査。

152・155・156・157・158・162・163・164・170・172号地下式横穴墓完掘。

【８月】

F～H-47～49区・G～Ⅰ-45～47区　Ⅳ層掘り下げ・遺構調査。F～H-46～51区　農道・畑かん部分遺構調査。

147・149・150・151・153・165・168・174・175・189号地下式横穴墓完掘。

【９月】

F～H-47～49区・G～Ⅰ-45～47区：Ⅳ層掘り下げ・遺構調査。航空写真撮影。埋め戻し。

145・148・154・176・177・178・179・180・181・182・184・188号地下式横穴墓，5号土坑墓完堀。

（来跡者）

笠野原婦人会10名（鹿屋市教委 稲村主事引率）
現地説明会（午前）参加者210名
霧島市より１名
鹿屋市内より４名
横浜市より１名
南日本新聞　藤本　記者遺跡取材
ＭＢＣ（南日本放送）取材

第４節　整理・報告書作成作業

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成24年度から28年度まで実施した。

平成24年度は鹿児島県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で，平成25～28年度は公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター第一整理作業所で実施した。作業内容は以下の通りである。

１　整理作業

⑴　遺構

実測図と図面台帳との照合，遺構別実測図仕分け等。

⑵　遺物

ア　土器・石器共通

水洗い，遺構内出土遺物と包含層出土遺物との仕分け，遺物と遺物台帳や遺構実測図との照合。

イ　土器

注記，分類，実測する土器の選別，接合。

ウ　石器の分類，実測する石器の選別

エ　鉄器

写真撮影及び遺物カード作成，クリーニング，X線写真撮影，実測等委託準備。

オ　炭化物・赤色顔料共通

フローテーション，リスト作成，科学分析委託準　備。

２　報告書作成作業

⑴　遺構図のレイアウト及びデジタルトレース，トレース委託準備，遺構配置図・コンタ図の作成，報告書掲載用写真選別・レイアウト，土器出土状況図作成・出土位置確認，遺構上及び周辺の遺物レベル位置図作成。

⑵　土器の実測，拓本，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載用写真撮影

⑶　石器の実測，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載用写真撮影

⑷　鉄器の実測，トレース，観察表作成，原稿執筆

整理・報告書作成に係る組織は以下のとおりである。

平成24年度（平成24年4月～平成25年3月）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	所長　寺田　仁志
調査企画	〃　次長兼総務課長　田中　明成
	〃　次長兼南の縄文調査室長　井ノ上秀文
	〃　調査第二課長　冨田　逸郎

〃　文化財主事兼
調査第二課
第一調査係長　八木澤一郎
調査担当　〃　文化財主事　田畑　哲治
〃　文化財調査員　新屋敷久美子
事務担当　〃　総務係長　大園　祥子
〃　主査　岡村　信吾

整理指導
柳沢　一男　宮崎大学名誉教授
和田　理啓　宮崎県埋蔵文化財センター主査
藤井　大祐　鹿児島市教育委員会文化課主任

平成25年度（平成25年4月～平成26年3月）
事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　冨田　逸郎
調査企画　〃　総務課長兼総務係長　山方　直幸
〃　調査課長　鶴田　靜彦
調査第一係長　八木澤一郎
調査担当　〃　文化財専門員　関　明恵
〃　藤島伸一郎
（4月～11月）
〃　〃　隈元　俊一
〃　文化財調査員　岩下　直樹
（4月～9月）
〃　〃　新屋敷久美子
〃　〃　榎本　美里
（4月～9月）

整理指導
竹中　正巳　鹿児島女子短期大学教授

平成26年度（平成26年10月～平成27年3月）
事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　堂込　秀人
調査企画　〃　総務課長兼総務係長　山方　直幸
〃　調査課長　八木澤一郎
〃　調査第二係長　寺原　徹
調査担当　〃　文化財専門員　藤島伸一郎
（10月～12月）
〃　文化財調査員　花薗　友美
（10月～12月）
〃　〃　新屋敷久美子
（10月～3月）
事務担当　〃　総務課長兼総務係長　山方　直幸
〃　主査　岡村　信吾

平成27年度（平成27年4月～平成28年3月）
事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　堂込　秀人
調査企画　〃　総務課長兼総務係長　有村　貢
〃　調査課長　八木澤一郎
〃　調査第二係長　寺原　徹
調査担当　〃　文化財専門員　藤島伸一郎
〃　文化財調査員　新屋敷久美子
〃　〃　中村　有希
事務担当　〃　総務課長兼総務係長　有村　貢
〃　主査　荒瀬　勝己

整理指導
竹中　正巳　鹿児島女子短期大学教授
中村　直子　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター長
柳澤　一男　宮崎大学名誉教授
小嶋　篤　九州国立博物館研究員

平成28年度（平成28年4月～7月）
事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　堂込　秀人
調査企画　〃　総務課長兼総務係長　有村　貢
〃　調査課長　八木澤一郎
〃　調査第二係長　宗岡　克英
調査担当　〃　文化財専門員　繁昌　正幸
〃　文化財調査員　新屋敷久美子
事務担当　〃　総務課長兼総務係長　有村　貢
〃　主査　荒瀬　勝己
〃　事業推進員　柏木　昌子

整理指導
竹中　正巳　鹿児島女子短期大学教授

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

立小野堀遺跡は，鹿屋市串良町細山田に所在する。最初に地名について，次に遺跡を中心とした地形・地質・自然について記述する。

１　地名

「立小野堀」は，この地の小字であり，笠野原台地周辺には花岡堀・鎌田堀・伊集院堀など，「堀」がつく地名が大変多い。「堀」は「ホイ」と呼ばれ，その由来は土手で周りを囲み，竹などを植えて風を防ぐ境界とした，大隅半島において高禄の武士が開いた抱地のことである。細山田地区では江戸時代以降に台地上の開発が行われ，「堀」を中心に開発者の氏や出身地などの地名が付けられたようである。立小野堀遺跡の字は，約2.5㎞北北東側には「立小野」集落があり，この集落からの移住者による開発地名が付いたものと思われる。

２　地形

立小野堀遺跡は，大隅半島東南部のほぼ中央，肝属平野の北西部にある笠野原台地の北東部縁辺に位置し，西南方向には台地が広がり，北側は串良川に向かい傾斜が続く。笠野原台地は南北16km，東西12kmに広がる総面積6,300haの九州南部において最も広いシラス台地と呼ばれる高台で，北から南へ緩傾斜しながら扇形に広がる。

その北西側には高隈山地があり，これを水源とする串良川が南東方向に流れ，肝属川に合流した後，志布志湾に注ぐ。

詳しくは色別で地形を示した第９図を参照されたい。

３　地質

高隈山地周辺に分布している新生代古第３紀の日南層群によって大隅半島の基盤をなしている。山間地を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形である。

この火砕流は，南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や，湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流で，その堆積物は現在に至るまで大小さまざまな多くの河川で開析され，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面がほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。一方，低地は，高隈山地や鰐塚山地などに水源を持つ大小の河川が走り，志布志湾や鹿児島湾などに注いでいる。シラス台地上には「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌が分布し，低地部に位置する水田の一部には泥炭層が見られる。

４　自然

立小野堀遺跡は笠野原台地上に所在するため，大正期に耕地整理を受けており，畑地となっている。ただし，北側の串良川に向けて傾斜する斜面には樹木が生い茂っている。環境省のホームページによると，その北側斜面にはスギ・ヒノキ・サワラの植林やシイ・カシの二次林，モウソウチク林などが見られる。

第２節　歴史的環境

１　弥生時代以前

弥生時代以前について簡略に記述する。立小野堀遺跡の西に接する石綴･十三塚遺跡，東に接する田原迫ノ上遺跡は，縄文早期及び弥生中期を中心とした遺構・遺物が多い。しかし立小野堀遺跡には縄文時代早期の遺物はほぼ見られず，弥生中期の遺物も少ない。これは，両遺跡より湧水地などの水を得られる場所が遠く，生活に不向きなことが原因と考えられる。ただし，石鏃や落とし穴などが見られることから，狩猟の場としては使われたようである。これ以外にも台地縁辺を中心に多くの遺跡がある。主要な遺跡については，次項の東九州自動車道関連の遺跡についてのところで記載する。

２　古墳時代

立小野堀遺跡は平成28年度末現在までにおいて，地下式横穴墓群の最多の調査数となる，古墳時代の肝属平野における重要遺跡と言える。そこで同時代の肝属平野部の著名な古墳及び地下式横穴墓群について，串良川流域を中心に，未調査遺跡を含め記述する。

ア　立小野堀地下式横穴墓群

鹿屋市串良町細山田の，標高約125ｍの台地縁辺部に位置する。本報告書参照。

イ　町田堀地下式横穴墓群

立小野堀遺跡より西側に２㎞，細山田小学校の近隣に位置し，立小野堀遺跡と同じく笠野原台地の北東部，串良川右岸の緩傾斜地に立地する。東九州自動車道建設事業により調査が行われ，小型の地下式横穴墓が89基検出された。墓群は調査区域外にも大きく広がると思われる。遺物から主に５世紀前半の造営と考えられ，立小野堀遺跡と重なる期間が長く，遺構の形態や遺物に共通するものが多い。

ウ　北原古墳群

鹿屋市串良町細山田の川久保遺跡のすぐ北に位置する。

エ　石塚古墳

鹿屋市串良町有里石塚の，標高約70ｍの舌状台地上に位置する。鶏舎建設により一部削平されている。同台地中央付近に径５ｍの円墳１基が存在する。

オ　宮留古墳群

鹿屋市串良町有里宮留の，標高約50ｍの台地縁辺部に位置する。山林内に２基の円墳がみられ，２基ともに墳丘上に一部板石が露出している。

カ　柿木迫古墳

鹿屋市串良町有里柿木迫にあり，標高約60mの台地上山林の中に位置する。径５m，高さ１mの円墳で，墳丘中央部に枯れた大木が見られる。

キ　七反古墳群

鹿屋市串良町有里七反にあり，標高約50mの台地縁辺部に位置している。墓地及び山林内に５基の円墳が見られる。

ク　上市ノ園古墳群

肝属郡東串良町岩弘の串良川左岸，永吉台地縁辺部に位置する。発掘調査は行われていない。

ケ　市ノ園古墳群

肝属郡東串良町岩弘の串良川左岸，永吉台地縁辺部に位置する。発掘調査は行われていない。

コ　上大塚原古墳群

鹿屋市串良町有里大塚原にあり，串良川右岸の標高約50mの台地縁辺に位置する。円墳10基が南北1列に並んでおり，道路拡張工事で地下式横穴墓が1基発見されたが消滅した。

サ　岡崎古墳群

鹿屋市串良町岡崎の旧串良町役場近くの串良川下流の台地上に位置する。前方後円墳・円墳で構成される20基の古墳と９基の地下式横穴墓が判明しており，今後も増加することが予想される。古墳時代中期を中心に築造され，古墳の周溝に伴う地下式横穴墓も多く見られる。地下式横穴墓は家形玄室を持つタイプである。主な遺物としては，初期須恵器や土師器，鉄剣や鉄鏃，鋤先などの鉄製品やイモガイ製腕輪，古墳時代の土器類である。立小野堀遺跡と時期も重なり，有段脚高坏・初期須恵器などの遺物や家形平入りタイプの地下式横穴墓が見られることなどが共通する。

シ　祓川地下式横穴墓群

鹿屋市西祓川町の肝属川上流の微高地に位置する。地下式横穴墓が34基調査されており，蛇行剣や長頸鏃，胡禄金具などの鉄器も出土している。５世紀後半の造墓と考えられ，立小野堀遺跡と時期が重なり，遺構の形態も近い。

ス　上小原古墳群

鹿屋市串良町上小原の肝属川近く，笠野原台地の南端に位置する。前方後円墳１基，円墳20基，地下式横穴墓３基が確認されている。４号墳の前方部西側で，４号墳に伴うと考えられる須恵器が出土している。

セ　塚崎古墳群

肝属郡肝付町野崎の肝属川下流右岸側の台地上に位置する。日本最南端の前方後円墳（花牟礼古墳）を含む古墳群で，44基の古墳，10基の地下式横穴墓が確認されている。近年の調査で，古墳時代前期の遺物が発見され，肝属平野周辺域では最も古い古墳群であり，古墳時代前期から中期にかけて造営されたと考えられる。31号墳の調査トレンチから初期須恵器の甕が２個並んで検出された。１つは市場南組産と思われ，立小野堀遺跡出土のものと類似する。

ソ　唐仁古墳群

肝属郡東串良町新川西の，肝属川下流左岸の砂丘上に位置する。肝属平野最大の唐仁大塚古墳を中心とする130基以上の古墳からなる最大の古墳群である。弱い地質のせいか地下式横穴墓は見られない。唐仁大塚古墳は中期初頭の造営と考えられ，この後に多くの古墳が造られたと推定される。

タ　横瀬古墳

曽於郡大崎町横瀬の，汐入川沿いの砂丘地に位置する，古墳時代中期の大型前方後円墳で，県内第２の規模を誇る。平成２年の測量調査では，全長160m，墳長132m，前方部幅72m，前方部長68m，後円部径64m，くびれ部幅48mを測り，墳丘からは円筒埴輪片や象形埴輪片が出土している。昭和53年の範囲確認調査では周濠跡も確認され，伽耶系陶質土器及び大阪府陶邑産の須恵器も出土している。墳丘の高さについては，後円部が10.5m，前方部が11.5mであるが，後円部の頂上部に石室が露呈していることから，もともとの後円部は現在よりも高かったと考えられる。古墳時代中期の肝属平野域最大の古墳であり，立小野堀遺跡の中心時期と時期が重なる。

チ　神領古墳群

大崎町神領，田原川下流の大崎台地縁辺に位置する。前方後円墳４基，円墳９基で構成され，10号墳は墳長54mの前方後円墳であり，５世紀前半の造営と考えられる。主体部は刳抜式舟形石棺を軽石で覆った礫槨で，周辺から管玉・勾玉，鉄剣，短甲の一部，鉄鏃束等が出土している。周溝からは盾持人物埴輪や朝顔形埴輪などの埴輪や，愛媛県市場南組窯産などの初期須恵器・土師器高坏・製塩土器などを含む大量の祭祀土器群が出土している。初期須恵器は立小野堀遺跡出土のものと類似している。地下式横穴墓も８基確認されている。

ツ　飯隈古墳群

大崎町神領の田原川下流，神領古墳群の対岸の台地上に位置する古墳群である。平成28年３月時点で円墳９基と地下式横穴墓23基が確認されており，近年は玄室落下などによる緊急調査によって調査数が増加している。平成27年度には５基が調査され，家形玄室の地下式横穴墓が見られた。

テ　下堀地下式横穴墓群

大崎町岡別府の持留川左岸の台地上に位置する。地下式横穴墓７基が調査され，立小野堀遺跡からも出土している異形鉄器が１点出土した。立小野堀遺跡と地下式横穴墓の規模がほぼ同じで時期も重なる。やや距離はあるが，何らかの関わりが想定される。

3　古代以後

古代における遺跡については，周辺では川久保・小牧遺跡などに遺物がみられる程度で，比較的少ない。

中世においては，串良川沿いに北原・細山田・霧島などの城跡があり，北原城は12世紀に造られ，13～14世紀には北原氏が居城していたと言われている。

近世における遺跡は，笠野原台地開発の苦難を物語る土持堀の深井戸があり，後述する。

近現代においては，遺跡の南西部の台地上に，戦時中の昭和19年に造られ，多くの特攻機が出撃した串良飛行場跡がある。実際に立小野堀遺跡においても薬莢が見つかっており，基地に近いことから，米軍による機銃掃射を受けたようである。

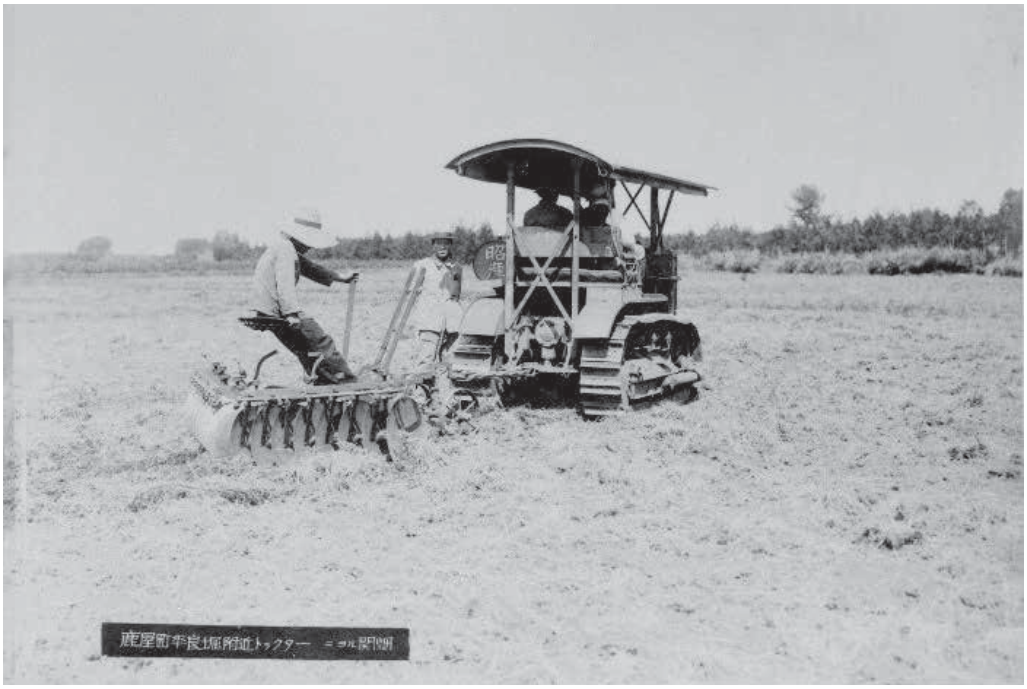
最後に，立小野堀遺跡に大きな影響を与えた笠野原台地の開発の歴史について略述しておきたい。

笠野原台地は，農耕作が困難だったことから約400年前の江戸時代初期，台地上はほぼ荒れ地であったようだ。台地に人々が住み始めたのは約300年前からで，当時この地を治めていた薩摩藩が，朝鮮出兵の際に朝鮮半島から連れてきた陶工たちの子孫の一部を台地南部に移住させたところから始まる。こうして水源に近い場所からごく小規模の開発が進められてきた。

しかし，水源から遠い台地中部以北においては，水の確保に50～80mものシラス層を貫いた井戸を掘り，さらに水の汲み上げに大変な労力が必要だったことから，依然として居住は困難だったようだ。それを物語る史跡が，立小野堀遺跡から約1㎞南西にある土持堀の深井戸である。掘られた時期は文政年間から天保年間（1818～1834年）頃と見られ，井戸の深さは約64mで，現在も史跡として保存されている。立小野堀でも前述のように立小野集落からの移住者による開発が行われたと推測されるが，規模や正確な時期ははっきりしない。

その後，明治時代に入っても特に大きな開発は行われなかったようで，初めて作られた1902年（明治35年）の地形図を見ても，井戸を使っていたと思われる集落や河川に近い地区以外，畑などが少なく林地が目立っている（第６図参照）。

1914年（大正３年），桜島の大噴火が起こると，多くの耕地が火山灰の被害を受けて荒廃した。これをきっかけに耕地整理事業が始められ，1920年（大正９年）には鹿児島県が笠野原台地の開発を目指して，鹿屋に土地利用研究所を設け，栽培方法の研究を進めた。また水の確保のため，1925～1927年には水道工事が行われ，台地上に配水幹線が引かれた。この幹線は立小野堀遺跡周辺にも引かれたようだ。1925～1934年には耕地整理も行われ，10年の歳月をかけてトラクターや人力で開墾し，１区画を約3haに区切り，道路を縦横に通し，現在の碁盤の目状の区画が完成した。この際に遺跡の地表部分の多くは破壊されたと考えられる。トラクターの重量で地下式横穴墓の玄室天井崩壊も多かったであろう。立小野堀遺跡が撮影されている最も古い写真である1946年（昭和22年）の米軍航空写真を見ると，遺跡の道路北側，D・E-45～51区



笠野原台地の開墾

写真提供：笠野原土地改良区

第６図　1902年地形図における立小野堀遺跡周辺

昭和22年1月25日笠野原台地航空写真（米軍撮影）
（赤点線が立小野堀遺跡範囲推定）

は森林，他は現在とほぼ変わらぬ畑となっているのが分かる（上部写真参照）。

その後，戦後になると食料増産が課題となり，1955年には国営畑地かんがい事業の第１号地区として笠野原地区が指定され，1958～1969年にかけて高隈ダムの建設やパイプラインの敷設が行われ，遺跡内においても道路沿いを中心にパイプラインの埋め込みが行われた。

また近年にかけては，ゴボウ栽培が振興され，ゴボウ作付用の深耕機械であるゴボウトレンチャーの影響を受けた（右上写真参照）。

このように，古墳時代から現代にかけて大きな変化が見られたのは1920年代以降の笠野原台地の開発以降であり，畑地として耕作や水道幹線敷設の影響を受けていることが分かる。

ゴボウトレンチャー（掘削部分）

（参考・引用文献）

○鹿児島県教育委員会，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2016「町田堀遺跡」公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（7）

○鹿児島県教育委員会1977「鹿児島県埋蔵文化財調査発掘報告書（6）大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」

○鹿児島県教育委員会1978「鹿児島県埋蔵文化財調査発掘報告書（9）大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」

○鹿児島大学総合研究博物館2008「大隅串良岡崎古墳群の研究」

○鹿屋市教育委員会2007「薬師堂の古墳　祓川地下式横穴墓群」

○鹿児島大学総合研究博物館2008「大隅串良岡崎古墳群の研究」

○肝付町教育委員会2009「塚崎古墳群」肝付町埋蔵文化財調査報告書（11）

○大崎町教育委員会2005「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

○橋本達也　2010 「古墳築造南限域の前方後円墳―鹿児島県神領10号墳の発掘調査とその意義」『考古学雑誌』 第94巻第３号

○鹿児島県1971「志布志湾地域開発地域　土地分類基本調査　鹿屋・志布志」

○九州前方後円墳研究会2001「九州の横穴墓と地下式横穴墓　第Ⅱ分冊　資料編」

○九州農政局HP　農業用水開発の歴史（笠野原台地のかんがい）

○環境省自然環境局HP　自然環境調査GIS

○串良町郷土史編纂委員会　1973「串良郷土誌」

○鹿屋市教育委員会1967「鹿屋市史　上巻」

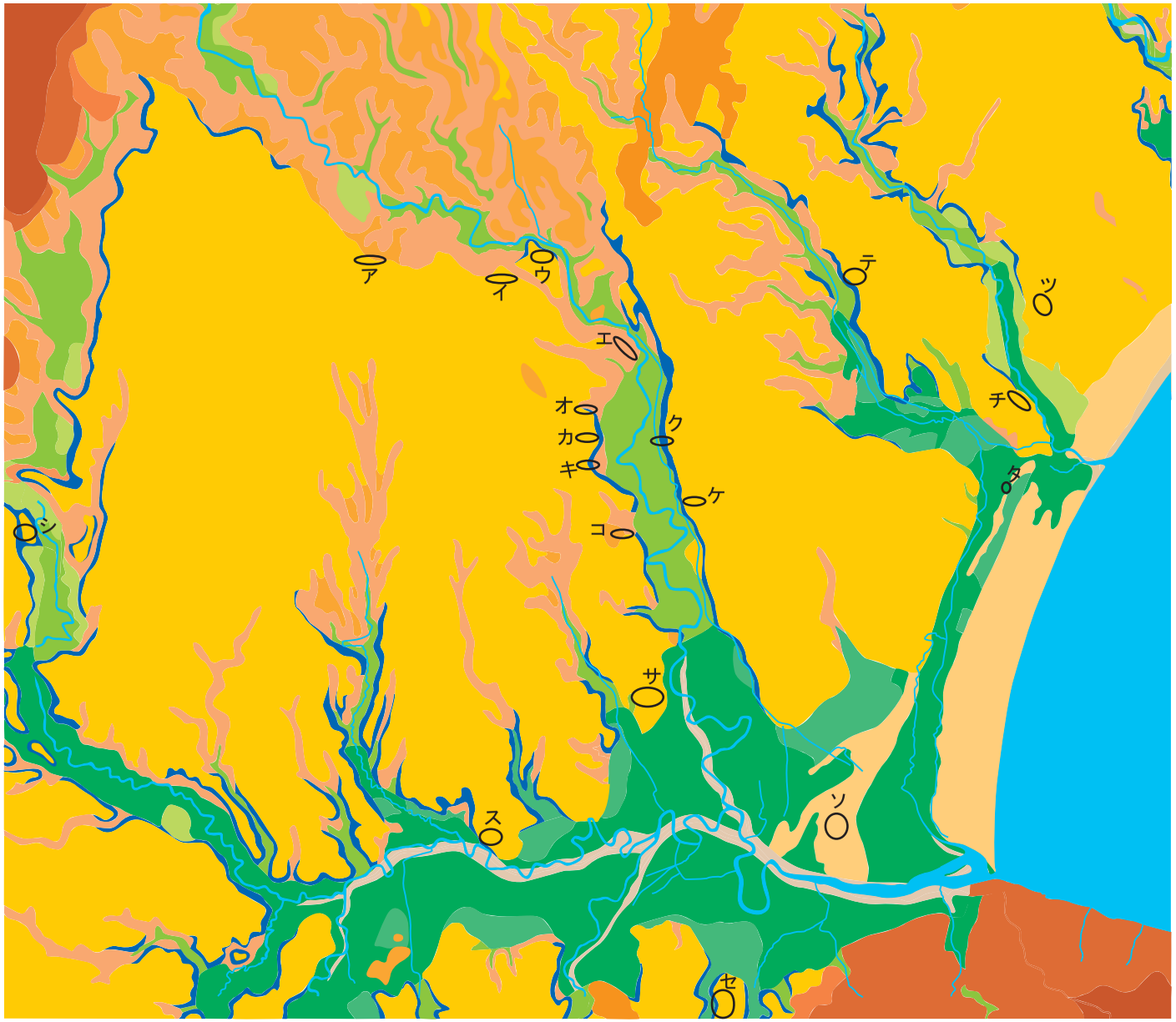
○町園仁濟　1999 「ふる里の字」南日本出版

第７図　周辺遺跡図

第１表　周辺遺跡

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	種類	現状	時代	地形	遺構・遺物等	備考
1	203	383	牧原	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生，古墳 古代	台地		
2	203	380	石綴	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	縄文，弥生	台地	集石，土坑	H20～本調査
3	203	379	十三塚	鹿屋市串良町細山田	集落跡 散布地	畑地	縄文，弥生 古墳，中世	台地	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑	H20～本調査
4	203	384	立小野堀	鹿屋市串良町細山田	地下式 横穴墓	畑地	縄文，弥生 古墳	台地	地下式横穴墓， 溝状遺構	本報告書
5	203	385	田原迫ノ上	鹿屋市串良町細山田	散布地 集落跡	畑地	縄文，弥生	台地	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，周溝	H22～本調査
6	203	295	牧山	鹿屋市串良町細山田	集落跡 散布地	畑地	縄文，弥生	台地	掘立柱建物跡，埋設土器，三角壕形石製品	H25～本調査
7	203	335	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	城館跡	山林	中世	丘陵		
8	203	346	入部堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生，古代	台地		
9	203	329	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	城館跡	山林	中世	台地		
10	203	300	町田堀	鹿屋市串良町細山田	散布地 地下式 横穴墓	畑地	縄文，弥生 古墳，古代	台地	住居跡，掘立柱建物跡，埋設土器，地下式横穴墓	H25～本調査
11	203	352	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	古墳	畑地	古墳	台地		
12	203	349	川久保	鹿屋市串良町細山田	集落跡 散布地	畑地	旧石器，縄文 弥生，古墳 古代，中世	台地	土坑，住居跡，製鉄工房跡 掘立柱建物跡	H26～本調査
13	203	350	小牧	鹿屋市串良町細山田	集落跡 散布地	畑地	旧石器，弥生 古墳，古代 中世	台地	土坑，住居跡，掘立柱建物跡	H27～本調査
14	203	334	霧島城跡	鹿屋市串良町細山田下中	城館跡	山林	中世	台地		
15	203	292	ホンドンガマ	鹿屋市串良町細山田	洞窟	山林	縄文	台地		
16	203	347	新堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	縄文	台地		
17	203	348	是ヶ迫	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	縄文，弥生	台地		
18	203	354	瓜々良蒔	鹿屋市串良町有里	散布地	畑地	縄文，弥生	台地	土坑	H12本調査
19	203	355	永田堀	鹿屋市串良町有里	散布地	畑地	弥生，古墳	台地		
20	203	356	杤場	鹿屋市串良町有里	散布地	畑地	弥生	台地		
21	203	357	熊ヶ鼻	鹿屋市串良町有里	散布地	畑地	縄文，弥生	台地	石鏃	
22	203	339	土持堀の深井戸	鹿屋市串良町有里	史跡	集落内	近世	台地		S57 県指定史跡

第８図　周辺の古墳・地下式横穴墓群（明治 33 年測量「鹿屋」・「志布志」地形図を改変）



（河川は明治 33 年測量「鹿屋」「志布志」地形図より）

山　地
- 大起伏山地
- 中起伏山地
- 小起伏山地
- 山麓地（Ⅰ）
- 山麓地（Ⅱ）

丘陵地
- 丘陵地（Ⅰ）
- 丘陵地（Ⅱ）

台　地
- 火山灰砂台地（シラス台地）
- 砂礫台地

低　地
- 谷底平野
- 三角州および海岸平野
- 浜

副分類
- 被覆砂嘴および砂丘
- 裸出砂丘
- 泥炭地
- 崖

1997 志布志湾地域開発地域土地分類基本調査
「鹿屋・志布志」地形分類図を改変

＊ 裸出砂丘は現在の改修を受けた河川沿い

第９図　肝属平野部の地形分類図

第３節　大崎IC(仮称)～鹿屋串良JCT間の遺跡

東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間には23の遺跡が存在する。報告書が刊行されていない遺跡もあるが，ここでは第２表に示す大崎ＩＣ（仮称）～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡について概要を記載する。詳細については報告書を参照されたい。

第２表　大崎IC(仮称)～鹿屋串良JCT間の遺跡

	遺　跡　名	発掘調査	整理作業
1	石綰･十三塚	平成20・21年度	平成22年度刊行
2	立小野堀 （本報告書）	平成22～24年度 平成26年度 （未調査地あり）	平成28年度刊行 未調査地は平成29年度以降刊行予定
3	田原迫ノ上	平成22～26年度 平成28年度	平成27年度刊行 （弥生･縄文晩期編） 縄文早期編は平成28年度刊行予定
4	牧山	平成25～27年度 （未調査地あり）	平成28年度以降作業中
5	町田堀	平成25～28年度	平成25年度調査部分は 平成27年度刊行 平成26年度以降の調査部分は作業中
6	川久保	平成26年度以降調査継続中 平成29年度以降も発掘作業予定	平成29年度以降作業予定
7	小牧	平成27年度以降調査継続中	平成29年度以降作業予定
8	京の塚	平成25～27年度	平成26年度及び平成28年度以降作業中
9	永吉天神段	平成24～27年度	平成27年度一部刊行，以後時代別に刊行予定
10	荒園	平成24～26年度	平成28年度刊行予定

１　石綰･十三塚遺跡

鹿屋市串良町細山田字石綰及び十三塚に所在し，標高約140mの台地上に立地している。主な遺構として縄文時代早期の集石遺構・土坑，弥生時代中期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡がある。主な遺物は縄文時代早～晩期の土器，弥生時代中期の土器・勾玉・石器・鉄器等である。弥生時代中期の竪穴住居跡は遺跡に比較的近い王子遺跡（鹿屋市王子町）や田原迫ノ上遺跡（鹿屋市串良町）でも確認されており，当時の南九州の集落形成の在り方を解明する上で貴重な資料となる。

２　立小野堀遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，標高約125mのシラス台地である笠野原台地の北縁辺部に位置している。古墳時代の南九州に見られる墓制である地下式横穴墓群が190基調査された。詳しくは本報告書参照。

３　田原迫ノ上遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，標高約110～120mのシラス台地である笠野原台地の北縁辺部に位置している。串良川への傾斜は立小野堀に比べ緩やかである。平成22～26年度の調査の結果，主な遺構は縄文時代早期の竪穴住居跡・連穴土坑・落とし穴・土坑・集石・石器製作跡，縄文時代後期の礫集積，弥生時代中期の竪穴住居跡・大型建物跡・掘立柱建物跡・円形周溝・方形周溝等である。古墳時代以降と考えられる溝状遺構・畝状遺構群，近世の溝状遺構が検出されているが，古墳時代関連のものはほぼ見られない。遺物は，縄文時代早期の土器・石器，縄文時代後期の土器・石器，縄文時代晩期の土器，弥生時代中期の土器・石器・土製勾玉・鉄器片等が出土している。縄文時代早期と弥生時代中期を中心に，多種多様な遺構・遺物が発見されており，特に弥生時代中期の住居跡群は31軒と肝属平野周辺の中では最も検出数が多い。

４　牧山遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，標高約100mのシラス台地である笠野原台地の北縁辺部に位置している。平成25～27年度の調査の結果，遺構は，縄文時代早期の集石・石器製作跡・石器集中部，連穴土坑，縄文時代前期の埋設土器（轟B式土器),縄文時代後期の掘立柱建物跡･落とし穴・土坑・土器集中部，縄文時代晩期の土坑・柱穴，弥生時代の土坑・柱穴，中世の古道跡が検出されている。遺物は，旧石器時代の剥片，縄文時代早期の石坂式土器･石器，縄文時代後期の丸尾式土器･西平式土器・太郎迫式土器・中岳式土器・石冠・台石・磨石等，縄文時代後期の土器・石器，弥生時代の土器，中世の青磁が出土している。なお，縄文時代後期では，遺物が環状に集中して出土し，遺物の集中範囲の内側に柱穴が環状に集中して検出されていることから，掘立柱建物跡であった可能性が高いと考えられる。柱穴や遺物が環状に集中することから，南九州では数例しか例がない環状集落であった可能性がある。また，柱穴の集中する範囲から土器が完全な状態で出土（埋設土器）しており，県内では出土例が少ない祭祀に使用されたと考えられる石冠が１点出土している。

５　町田堀遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，標高約90mのシラス台地である笠野原台地の北東端に位置する。平成25・26年度の調査の結果，遺構は，縄文時代早期の集石，縄文時代後期の竪穴住居跡・埋設土器・落とし穴等，弥生時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑，古墳時代の地下式横穴墓（円形周溝及び弧状遺構含む）・溝状遺構が検出されている。地下式横穴墓からは，副葬品とともに人骨

も発見されている。遺物は，縄文時代早期の土器・石器，縄文時代後期の中岳Ⅱ式土器・垂飾品・丸玉・勾玉・小玉・打製石斧・磨製石斧・磨石・石皿，弥生時代の土器・石器，古墳時代の土師器・鉄器（剣・鏃・大型異形鏃）・貝釧・赤色顔料，古代の土師器・墨書土器が出土している。注目すべきは縄文時代後期の石刀で，住居から出土し時期決定できるものは県内初の事例である。また古墳時代の大墓群でもあり，古墳時代の集落跡が検出されている川久保遺跡が近くにあり，その関係性が注目される。

６　川久保遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，標高約30～40mの串良川右岸の縁辺部に位置している。平成26・27年度の調査の結果，縄文時代前期の集石，弥生時代の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡・鍛冶関連遺構，古代の掘立柱建物跡，中世の掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑墓等が検出されている。遺物は，縄文時代前期の土器・石器，縄文時代晩期の土器・石器・垂飾品，弥生時代の土器，古墳時代の成川式土器・勾玉・垂飾品・管玉・金床石・鞴の羽口・鉄滓・鍛造剥片，古代の須恵器・土師器，中世の土師器・白磁・青磁・瓦器椀（楠葉型）・東播系須恵器，近世の薩摩焼・寛永通宝が出土している。古墳時代の鍛冶関連遺構やそれに伴う鞴の羽口が発見されており，古墳時代の在地による鉄器生産を解明するための貴重な資料である。平成28年度以降も本調査中である。

７　小牧遺跡

鹿屋市串良町細山田に所在し，串良川左岸にある標高約60mの独立した平坦な丘陵地上に位置する。平成27年度の調査の結果，遺構は，縄文時代早期の方形土坑（竪穴住居跡？）・集石，縄文時代前期の落とし穴・集石，縄文時代後期の竪穴住居跡・集石・土坑・埋設土器・石斧デポ，古墳時代の竪穴住居跡・礫集積・土器溜まり・土坑，古代以降の溝状遺構等が検出されている。遺物は，縄文時代早期の前平式土器・下剥峯式土器・桑ノ丸式土器・平栫式土器・磨石・石皿，縄文時代前期の深浦式土器，縄文時代後期の指宿式土器･市来式土器･石匙･磨石･軽石加工品・横刃型石器・石鏃，縄文時代晩期の黒川式土器・刻目突帯文土器・組織痕土器，古墳時代の成川式土器・須恵器・布留式土師器・軽石加工品・鉄鏃・勾玉が出土している。古墳時代の竪穴住居跡は９軒検出されており，川久保遺跡と共に生活の基盤の地であったことを示し，立小野堀や町田堀などの墓域との関連が推測される。

８　京の塚遺跡

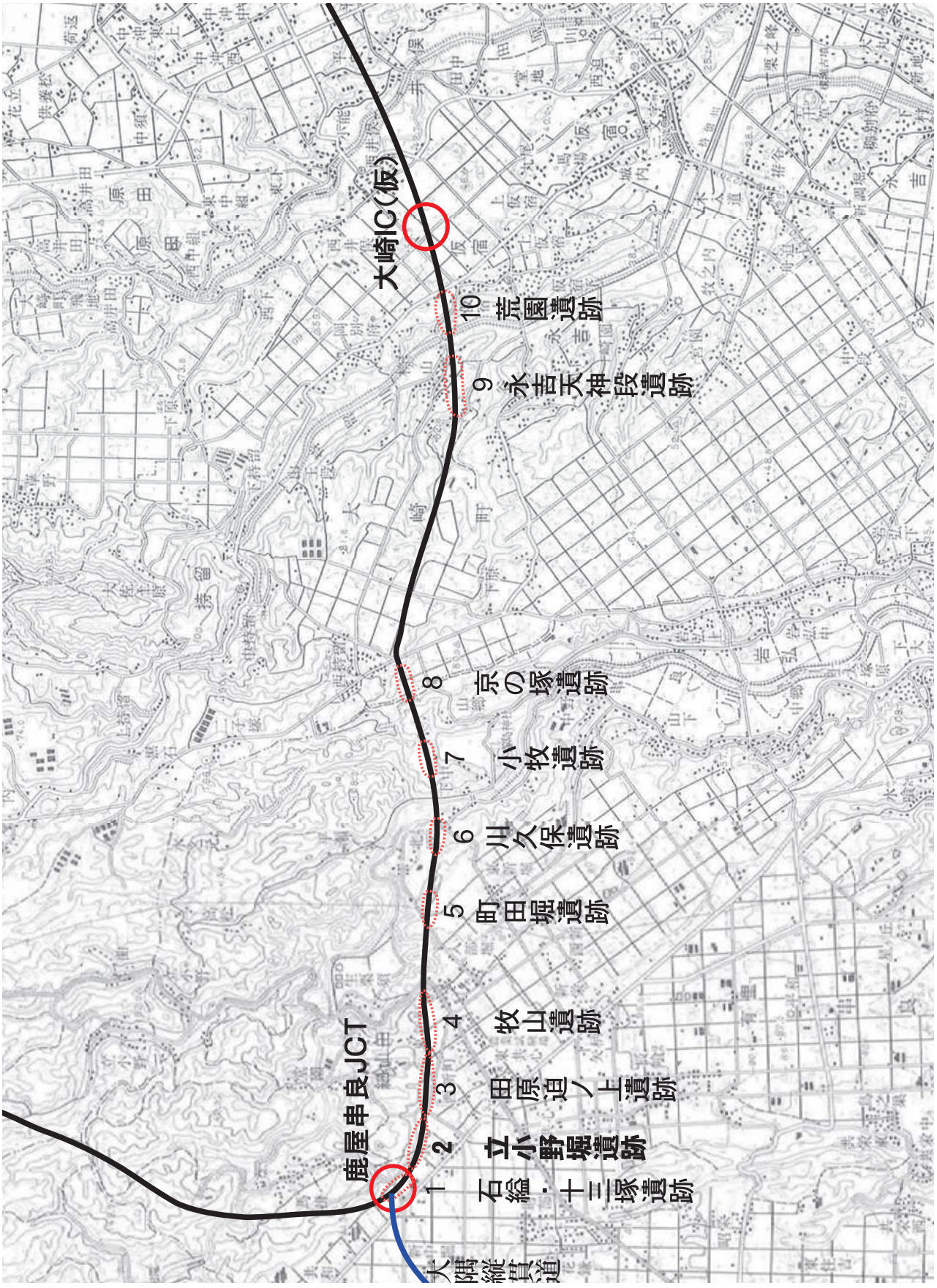
曽於郡大崎町持留に所在し，串良川左岸に形成された標高約90～100mのシラス台地上に位置する。平成25・26年度の調査の結果，遺構は，縄文時代早期の集石，縄文時代前期末から中期前半の土坑約150基，近世～近代の溝状遺構・古道が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器・石器，縄文時代前期の曽畑式土器，縄文時代前期末から中期前半の在地系土器の深浦式土器・近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器・瀬戸内地方の船元式土器，石鏃・石匙・磨石・敲石・石皿・有溝砥石等，縄文時代後期から晩期の土器・石器が出土している。中心となるのは縄文時代前期末～中期前半であり，この時期の遺構の検出例は県内では少なく，多くの土坑が発見されたことだけでなく，多くの遺物の中で在地系土器に他地域の土器が共伴していることなど，広域な交流があったことを示している。

９　永吉天神段遺跡

大崎町永吉に所在し，標高約30mの河岸段丘と標高約50mのシラス台地の縁辺部に位置している。遺構は，旧石器時代の石器製作跡・礫群，縄文時代早期の集石・埋設土器，縄文時代晩期の竪穴住居跡，落とし穴・土坑，弥生時代中期の竪穴住居跡・円形周溝墓を中心とする土坑墓群・土坑・掘立柱建物跡，古墳時代の竪穴住居跡・土坑・埋設土器，古代の掘立柱建物跡・土坑，中世の掘立柱建物跡・土坑墓・地下式坑・土坑・溝状遺構，近世の土坑墓が検出されている。遺物は，旧石器時代の尖頭器・ナイフ形石器等，縄文時代早・前期の土器・石鏃・打製石斧・磨石・敲石・石皿等，縄文時代晩期の土器・石器，弥生時代中期の土器・鉄鏃・磨製石鏃・打製石斧・磨製石斧等，古墳時代の土器，古代の須恵器・土師器等，中世の土師器・白磁・青磁・東播系須恵器・瓦質土器・備前焼・常滑焼・石塔・滑石製石鍋等，近世の陶磁器・寛永通宝等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。中世の地下式坑の検出は南九州初の事例である。平成27年度で本調査は終了した。

10　荒園遺跡

大崎町仮宿に所在し，標高約50mのシラス台地の縁辺部に位置している。平成24 ～ 26年度の調査の結果，縄文時代早期の集石，弥生時代中期の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡，中世の溝状遺構などが検出されている。また，時期不明であるが，片薬研掘りの堀が検出されている。この埋土中に厚さ約10㎝の火山灰が堆積しており，分析の結果，開聞岳噴出起源の紫ゴラ（A.D.874年）に比定されている。遺物は，旧石器時代の細石刃核（畦原型）・細石刃・黒曜石と水晶の剥片やチップ，縄文時代早期の土器・石器，弥生時代中期の土器・石器，古墳時代の土器，中世の東播系須恵器・備前焼が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。古墳時代の住居跡は６軒を数え，中には焼失家屋も見られた。遺構内からは土器が集中して出土している。



第 10 図　東九州自動車道建設に伴う遺跡位置図（S=1/50,000）

第Ⅲ章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

１　発掘調査前の状態

調査区域内は国営畑地かんがい事業を受けて，水路敷設や道路整備がなされ，畑地・林地として利用されていた。その後の作付けなどによって，表土以下の残存状況には違いが見られる。ここでは，調査区内において地下式横穴墓を主体とする遺構が見られた①～⑨の部分について，平成22年度の本調査前の状況を記述する（図内の赤線が畑境を示す）。

①　2m近くある背の高い雑草が生い茂っている状態で，耕作土を剥がすとゴボウトレンチャーによる攪乱が格子状に縦横に見られ，トレンチャーの影響を受けていない部分は50％程度であった。

②　伐採された植樹クスノキの切り株が約1.5～2m間隔で残り，さらに丈の低い雑草が生い茂っている状態であった。さらにトレンチャーが縦横に入っており，トレンチャーや樹根の影響を受けていない部分は０～20％程度である。さらに北側は旧地形が高かったことから，Ⅶ～Ⅷ層まで耕作を受けている。

③　未調査であるが，７～10mの高さの杉が約２～３m間隔で植樹された状態である。平成28年度現在，確認調査は行われておらず，詳細は不明。根がかなり深く入っており，遺構があるとすればかなりの影響を受けていると思われる。

④　②と同様，植樹されたクスノキの切り株が残っている状態であった。細長い畑の形状からか，トレンチャーは東西の横方向にのみ入っており，南北方向には入っていない。トレンチャーの影響を受けていない部分は50％程度である。

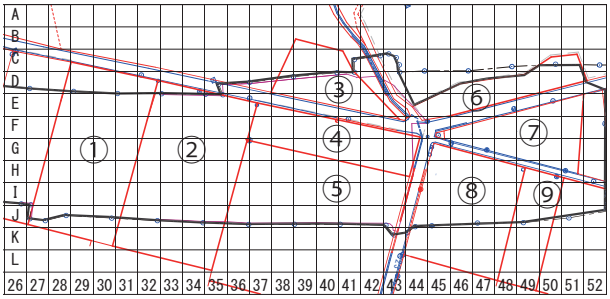
⑤　雑草も短く，入りやすい状態であった。植樹はなされておらず，毎年畑地として利用されてきたと思われる。表土下はゴボウトレンチャー跡が縦横に入っており，中にはほぼ全面攪乱を受けている部分もあった。畑の耕作者の話では，ゴボウの作付けを多く行ったとのことである。トレンチャーの影響を受けた部分は残りの良いところで40％程度，悪いところではほぼ全面であった。ただし，H・Ⅰ-41・42区付近は旧地形が深いため，トレンチャーの影響を受けた層より下位でも多くの部分が残存している。

⑥　畑地として利用された後で雑草が生い茂っている状態であり，表土を取り除くとトレンチャーは全く入っていなかった。最も攪乱が少ない部分と言えるが，戦前は樹林がなされた場所であり，樹痕の影響はみられる（第Ⅱ章第２節，昭和22年航空写真参照）。E-45・46区は旧地形が高かったために，Ⅳ層付近まで削平されていた。

⑦　浅いトレンチャーが数十年前に1回，農道に平行に入っているものの，残存度はかなり良い。旧地形が高かったため，上部はⅢ～Ⅳ層を中心に農地整備事業で削平されている部分が多い。⑦より東の52区も同じ状況である。

⑧　⑦と同じく農地整備を受けているが，旧地形が低かったため，H-45・46区を中心に残存度は良い。遺構の上部構造を探ることができる重要箇所であり，近年にゴボウトレンチャーによる作付がなされなかったことが幸運であった。なお，最初の確認調査で⑥～⑨の部分が調査対象区域外になった理由は，ゴボウトレンチャーによる攪乱が少なかったことから，土器の散乱がほとんどみられなかったためであろう。

⑨　この部分も⑧と同様であるが，西側から次第に低くなっていた旧地形に配慮して，⑧との境から約50～70cmほど低く整地されており，その影響で186・187号地下式横穴墓はⅥ層上面近くまで削平されていた。

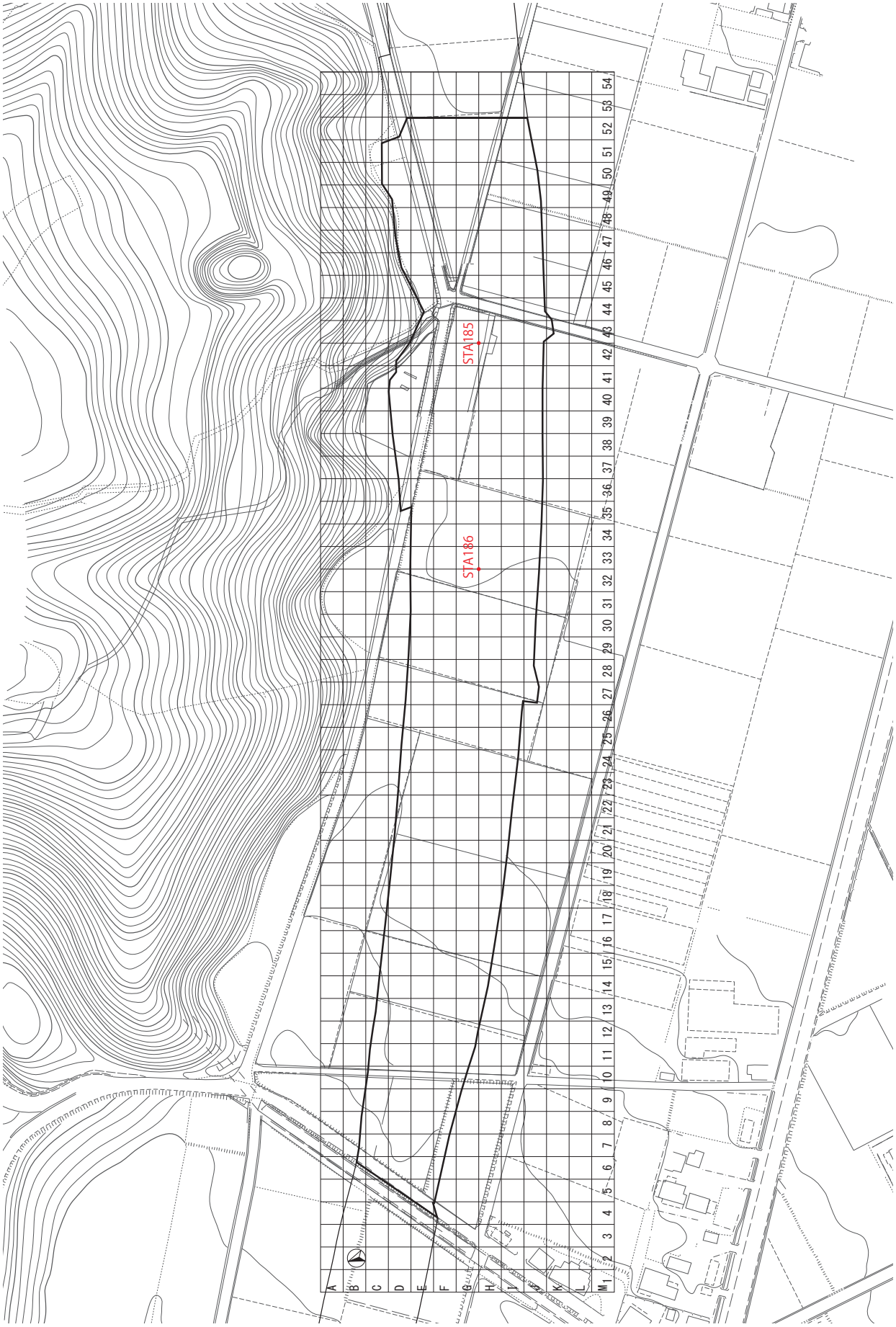


第11図　遺構検出区域の畑別区分図

２　発掘調査の方法

グリッドは，高速道路建設予定地の工事用センター杭STA186（F・G-32・33区境）を基点にして，約100m東方向にあるSTA185（F・G-42・43区境）を視準した線をグリッドの基軸とし，１グリッド10m×10mの大きさで遺跡内を主に東西に囲むように設定した。なお，工事用センター杭STA186の国土座標はX=-172195.452，Y=-8780.288，STA185は X=-172241.750，Y=-8691.672である。

調査については，重機及び鋤簾で表土（耕作土）を剥ぎ，耕作土より下の部分の掘り下げを行い，遺物・遺構の検出を行った。ほとんどの区域がゴボウトレンチャーの撹乱を受けており，一括で取り上げた遺物が多い。遺構については撹乱を利用し，撹乱部分を除去して形状を確認してから調査する方法をとった。遺構が検出されなかった部分については，Ⅵ層の池田降下軽石層まで掘り下げ，コンタ図の作成を行った。調査の主体は古墳時代の遺構であるが，それについては第Ⅳ章第2節を参照されたい。



第 12 図　周辺地形及びグリッド図

第２節　層　序

１　基本土層

本調査に当たり，最初は遺跡西側に隣接する石縄・十三塚遺跡の層位を参考としたが，遺跡の実情と合わない部分もあり，平成22年度において東側に隣接する田原迫ノ上遺跡と統一した層序を作成した。以下に層の概略を示す。

Ⅰ層は耕作土であり，新旧両方見られる。新しいものは多くの土が混ざりあい，古いものは黒色土に白パミス（大正期の桜島火山灰）のみ含まれている。

Ⅱ層は暗黒褐色土層で，深い部分にのみ残存している。ほぼ黒色土であるが，中に0.5㎜以下の細かい白いパミスが見られ，これがⅢ層土と区別する指標となる。

Ⅲ層は黒茶褐色土層で，本遺跡で中心となる層であり，古墳時代を中心とした遺構・遺物が確認されている。Ⅱ層よりやや黒色が強い。

Ⅳ層は黒褐色土層で，Ⅲ層より黒色がやや強いが，その境目は明瞭ではない。遺構の掘り込みによって，この層から古墳時代の遺物が出土することも多い。

Ⅴ層は黒茶褐色土で，Ⅳ層との違いは黄色パミスが含まれることと，やや黒色が薄くなること。ただし，この層は深い部分でしか見られない。よって，遺構の層位のほとんどはこの層が抜けている。

Ⅵ層は黒褐色黄橙パミス混合土層で，大隅半島南部でよく見られる池田降下軽石を含む黒色土層である。やや厚くなる部分も見られるが，ほぼ５㎝程度である。

Ⅶ層は暗茶褐色土層で，アカホヤ火山灰上の腐食土層であり，Ⅷ層近くはアカホヤに近い色だが，Ⅵ層に近づくほど黒色が強くなる。

Ⅷ層は明橙色火山灰層で２層に分けられ，Ⅷaがアカホヤ火山灰層，Ⅷbがアカホヤ軽石層（一次堆積層）である。30 ～ 50㎝と厚く，乱れているような箇所はほぼ見られない。

Ⅸ層は黒褐色弱粘質土層で，10～15㎝程度の厚さで色はほぼ真っ黒，粘質で軟らかいのが特徴である。Ⅷｂ層とは色が，Ｘ層とは固さが明らかに異なり，明瞭に区分できる層でもある。

Ｘ層は黒褐色黄橙パミス混合土層，ⅪⅠ層は暗茶褐色黄橙パミス混合土層，ⅪⅡ層は暗黄褐色黄橙パミス混合土層で，他の遺跡では縄文時代早期の包含層に該当する。桜島起源と思われる黄橙色の大きなパミスを含み，Ｘ層は全体として黒色が強く，ⅪⅠ層は黄色が強くなり，ⅪⅡ層はⅪⅠ層に比べ黄橙色パミスが少なくなる。Ｘ～ⅪⅡ層全体として，色がＸⅢ層の黄色からⅨ層に近い黒色へと変わっていく。これらの層は固く，しまりがある。

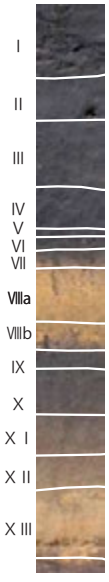
ＸⅢ層は黄白色火山灰層で，薩摩火山灰に該当する。大変厚く，固い。遺構において，この層まで掘り下げているのは数基しかない。

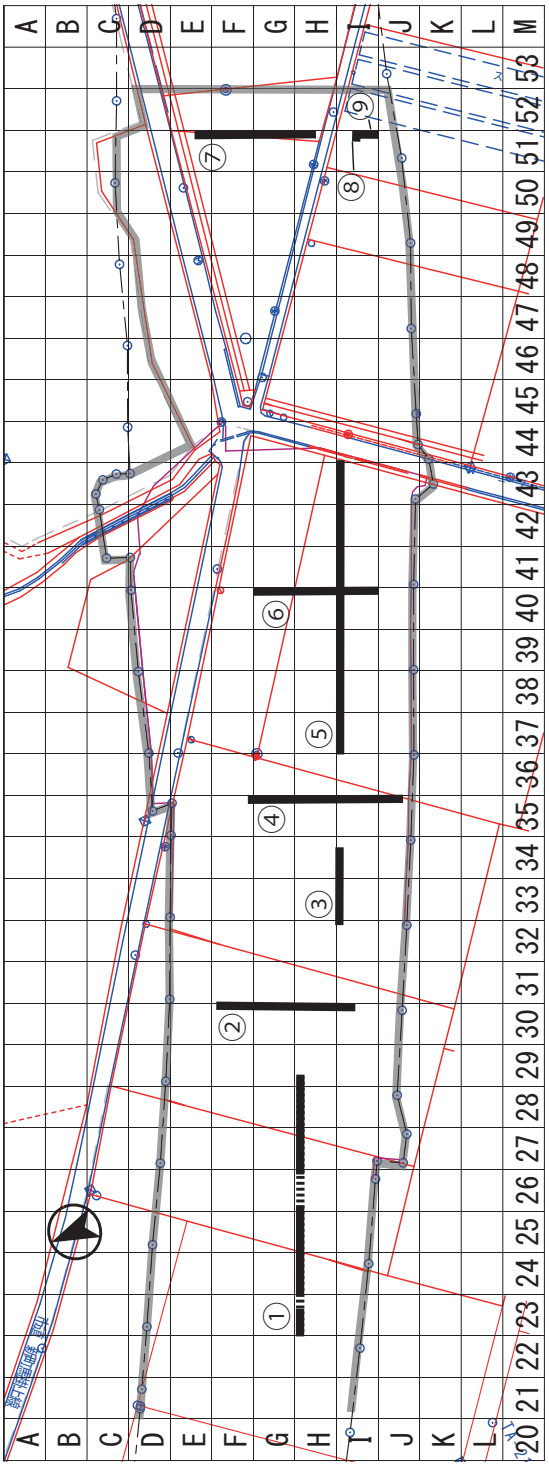
２　土層断面図

土層断面図については，23区以東を中心に記録した。ただし，土層断面図よりも遺構の調査を優先したため，ほとんどが遺構調査を終えたⅥ層以下の記録となっている。全体として北西から南東に向けて緩やかに傾斜する地形となっているが，H･I-42区やH-45区のように深くなっている箇所もある。なお土層断面図⑧⑨に示した箇所は，地滑りが起こり，1.5m以上の沈降が起こっている。立小野堀遺跡は台地の縁に当たり，こうした現象が起きやすいのだろう。埋め戻された土は多くの土が混ざり合っており，おそらく昭和の頃の畑地への改変時に，重機によって埋められたものと推測される。

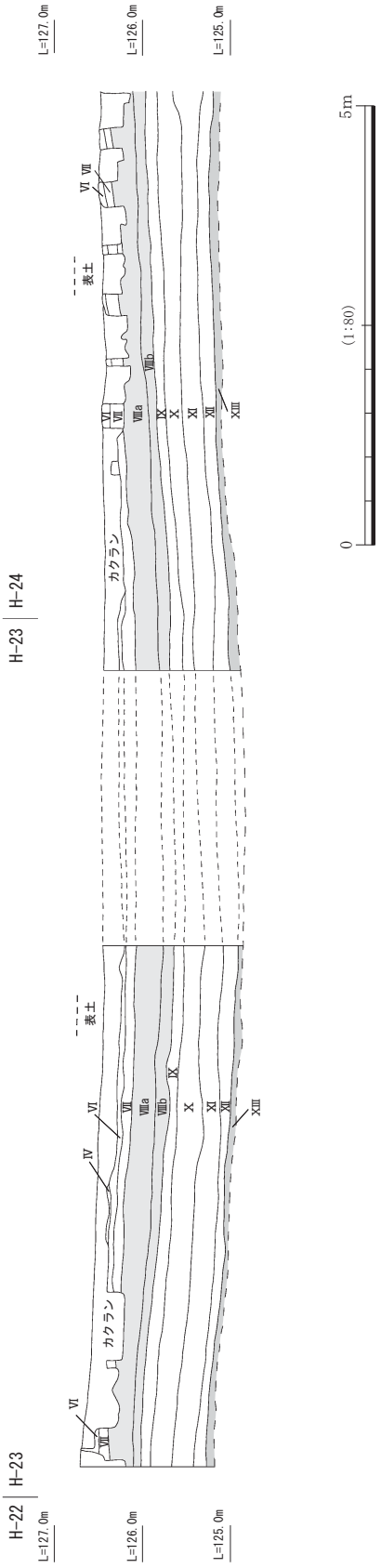
第３表　立小野堀遺跡　基本層序

層	土層名	火山灰名及び包含層	平均層厚（cm）
Ⅰ	表土（新・旧耕作土）		30～40
Ⅱ	暗黒褐色土層	古墳	0～10
Ⅲ	黒茶褐色土層	弥生～古墳	20～40
Ⅳ	黒褐色土層	縄文後晩期	20～30
Ⅴ	黒茶褐色土層（黄色パミス多）		0～5
Ⅵ	黒褐色黄橙パミス混土層	池田降下軽石	5～10
Ⅶ	暗茶褐色土層	縄文早期	10～15
Ⅷa	暗橙褐色土層	アカホヤ火山灰層	20～30
Ⅷb	暗橙褐色土層	アカホヤ軽石	10～15
Ⅸ	黒褐色弱粘質土層		10～15
Ⅹ	黒褐色黄橙パミス混土層		15～20
ⅪⅠ	暗茶褐色黄橙パミス混土層		15～20
ⅪⅡ	暗黄褐色黄橙パミス混土層		20～30
ⅪⅢ	黄白色火山灰層	薩摩火山灰	30～40

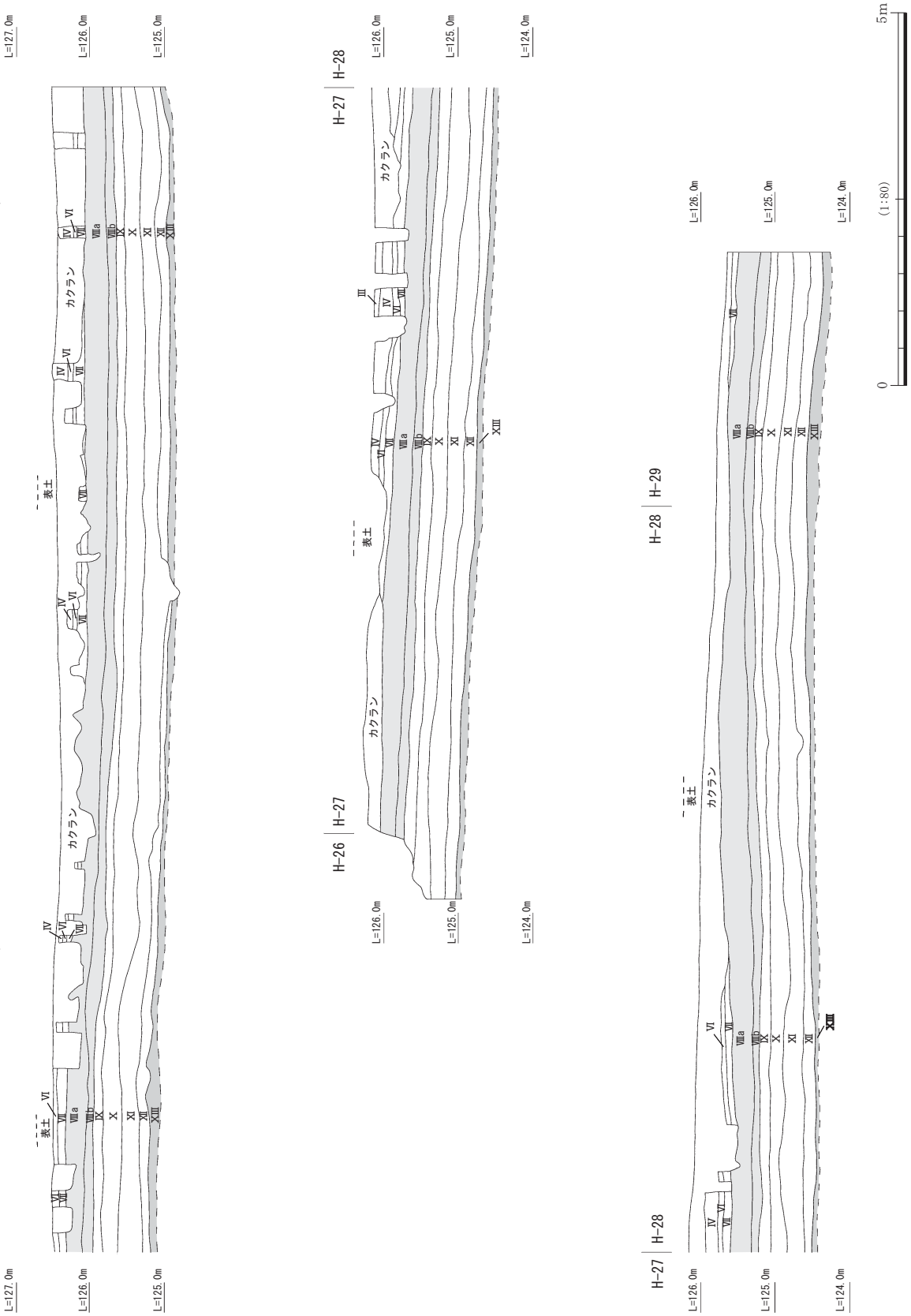




第 13 図　土層断面位置図

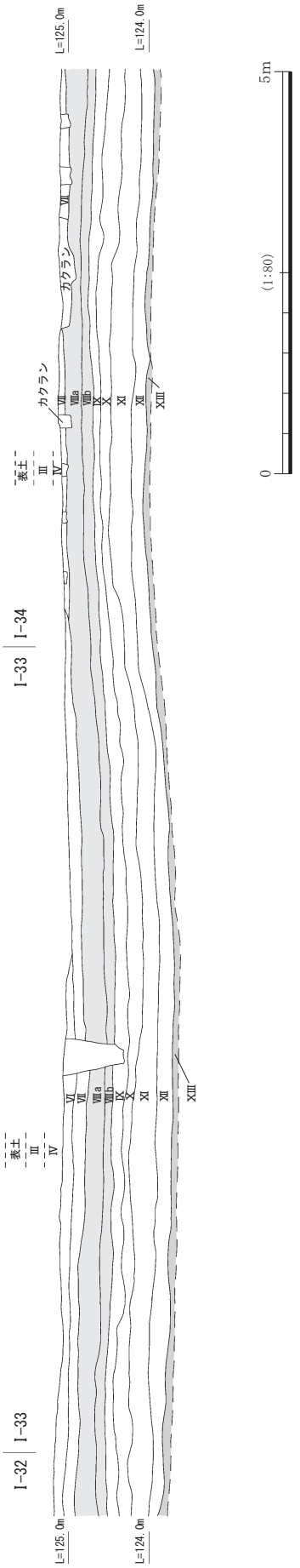


第 14 図　土層断面図（1）（H-23 ～ 24 区）

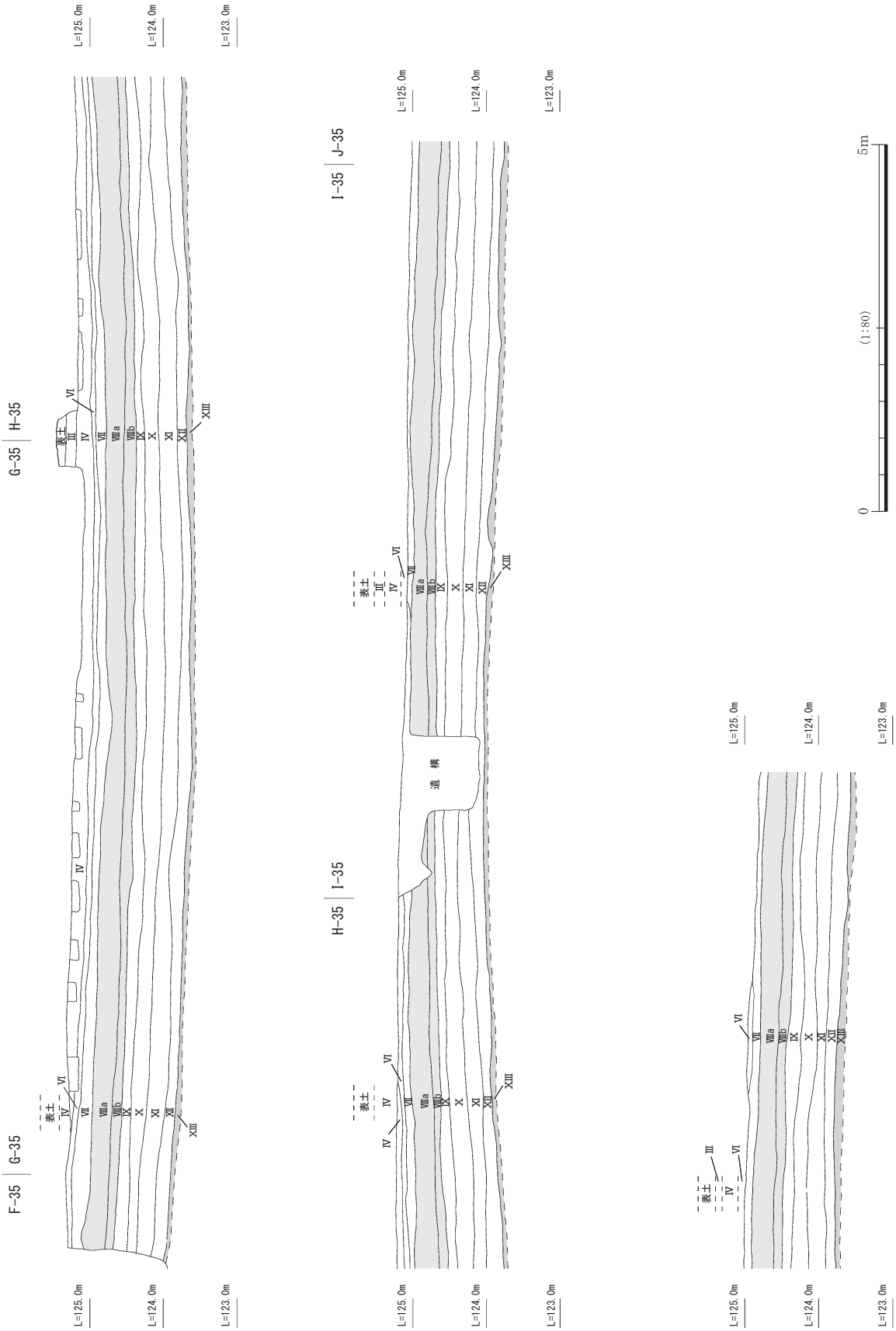


第 15 図　土層断面図　(1)（H-24 ～ 29 区）

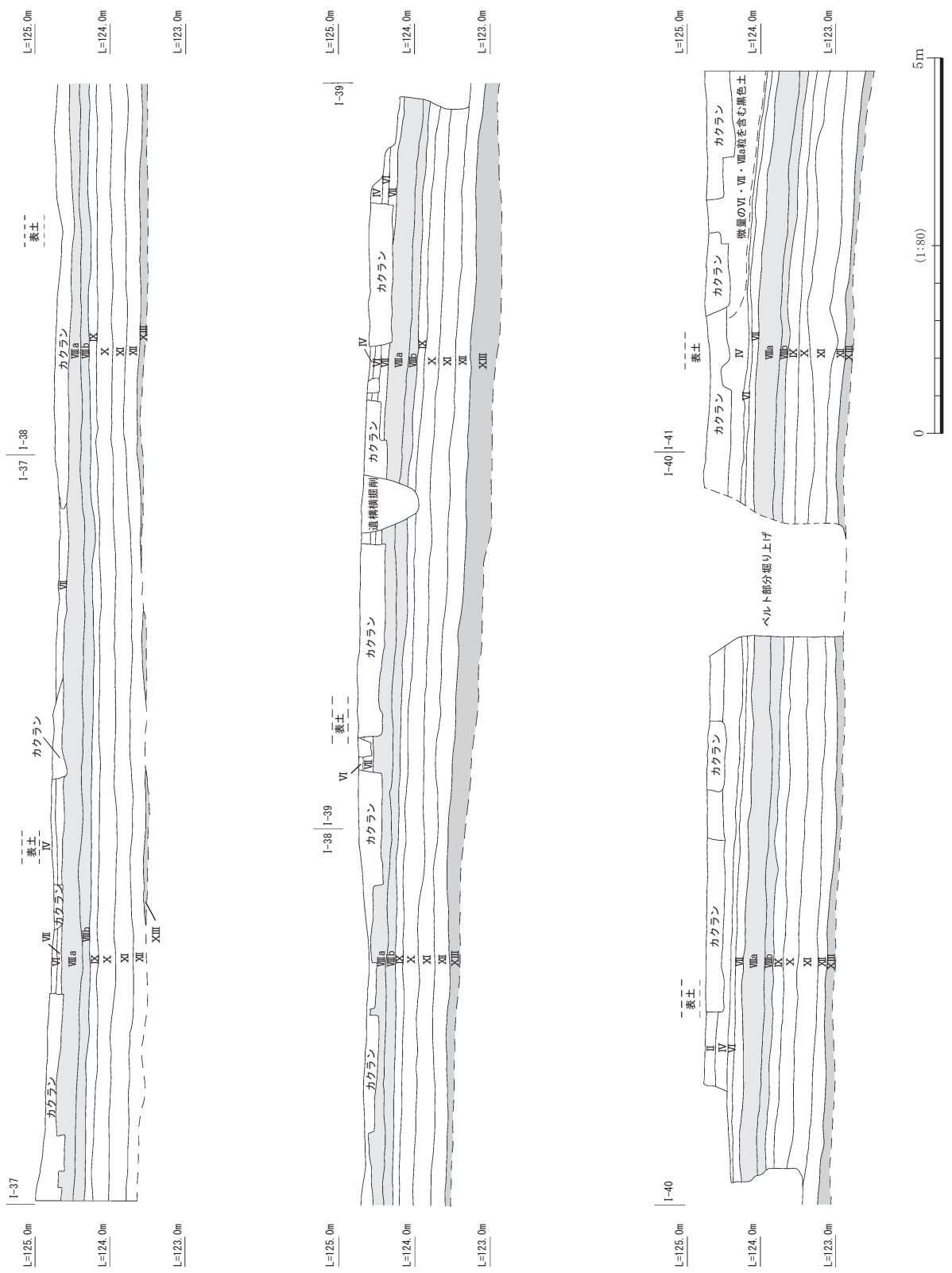
第 16 図　土層断面図　(2) (F ～ I-30 区)



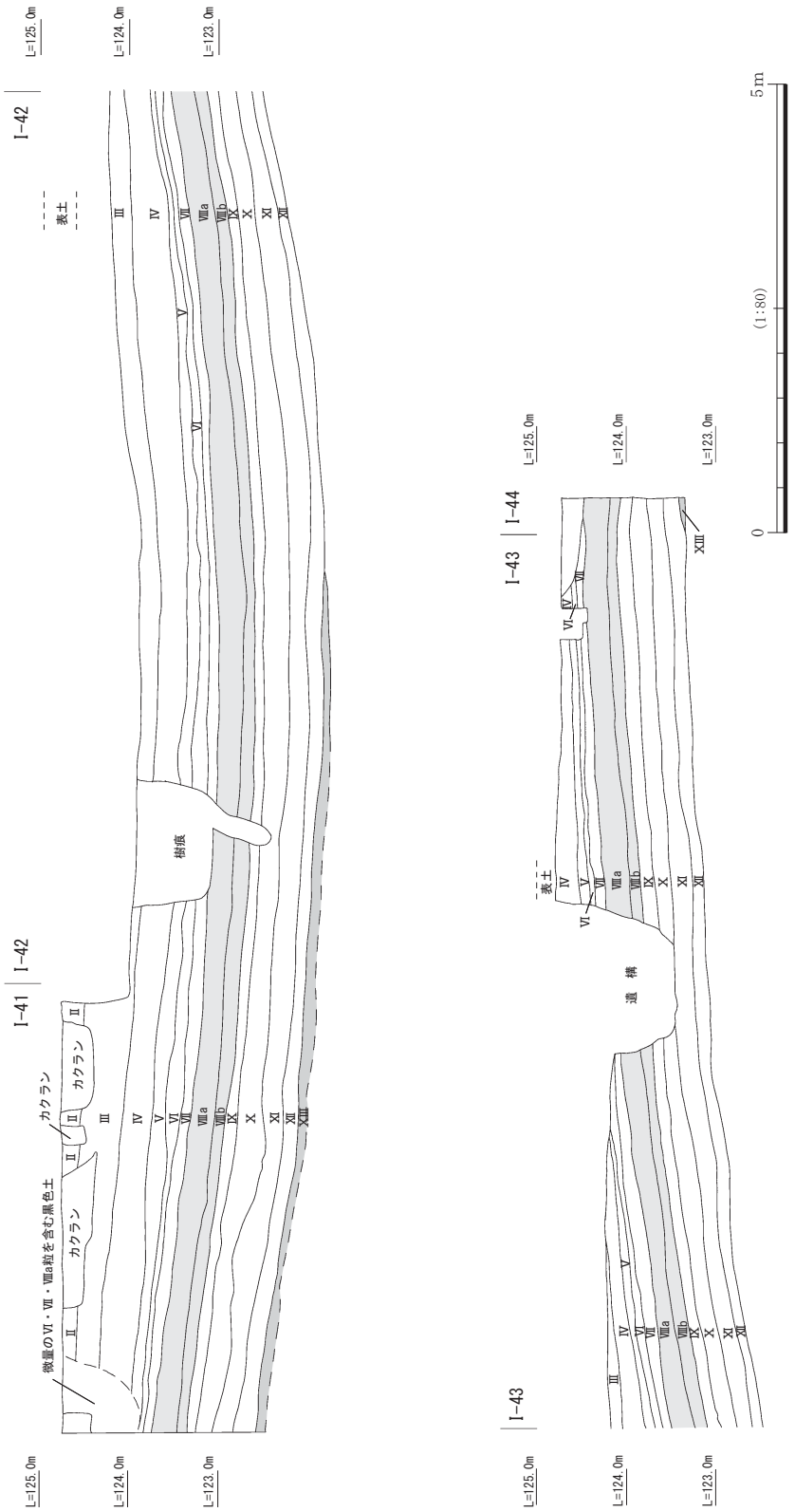
第 17 図　土層断面図（3）（I-32 ～ 34 区）



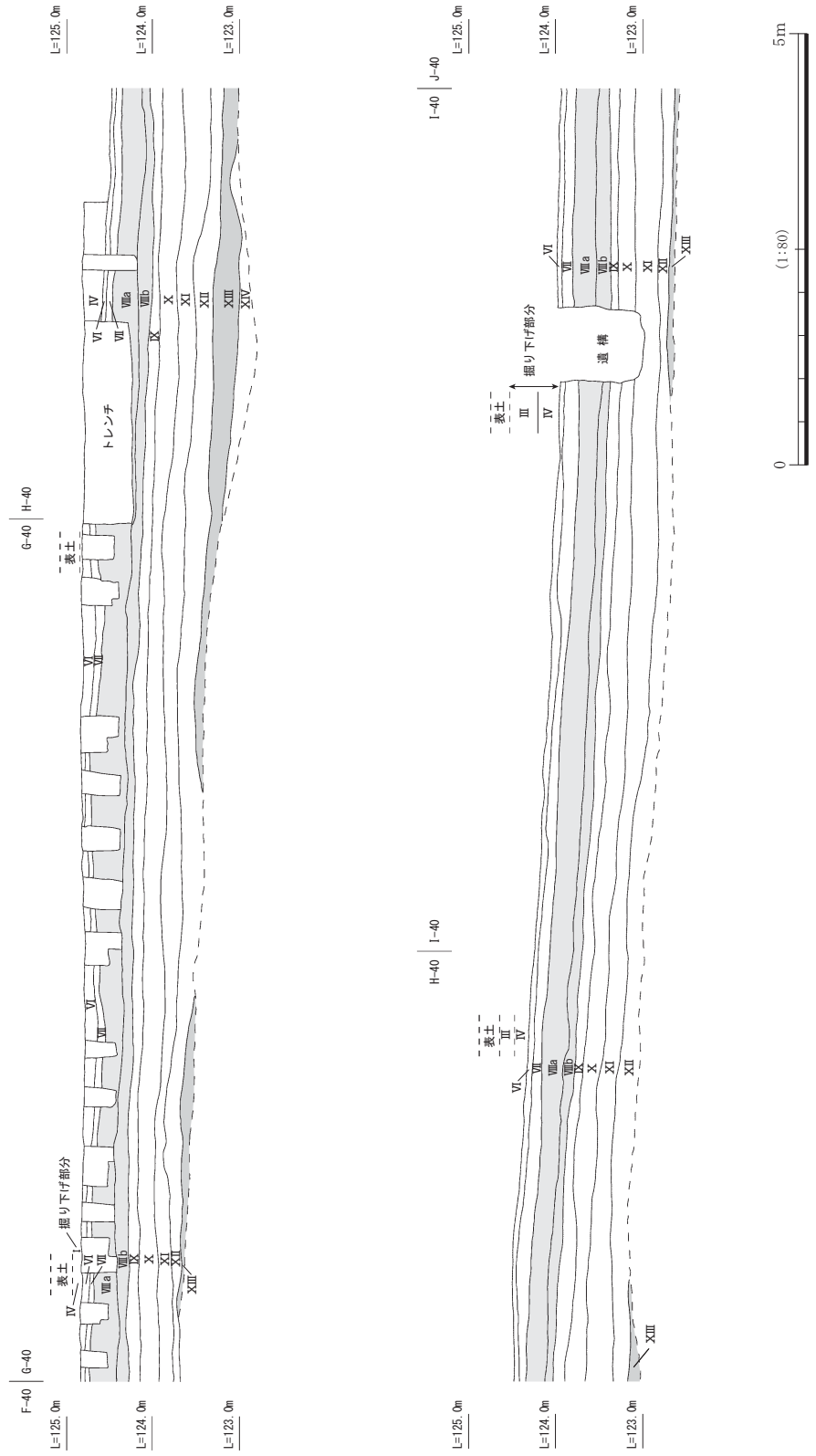
第 18 図　土層断面図　(4) (F ～ J-35 区)



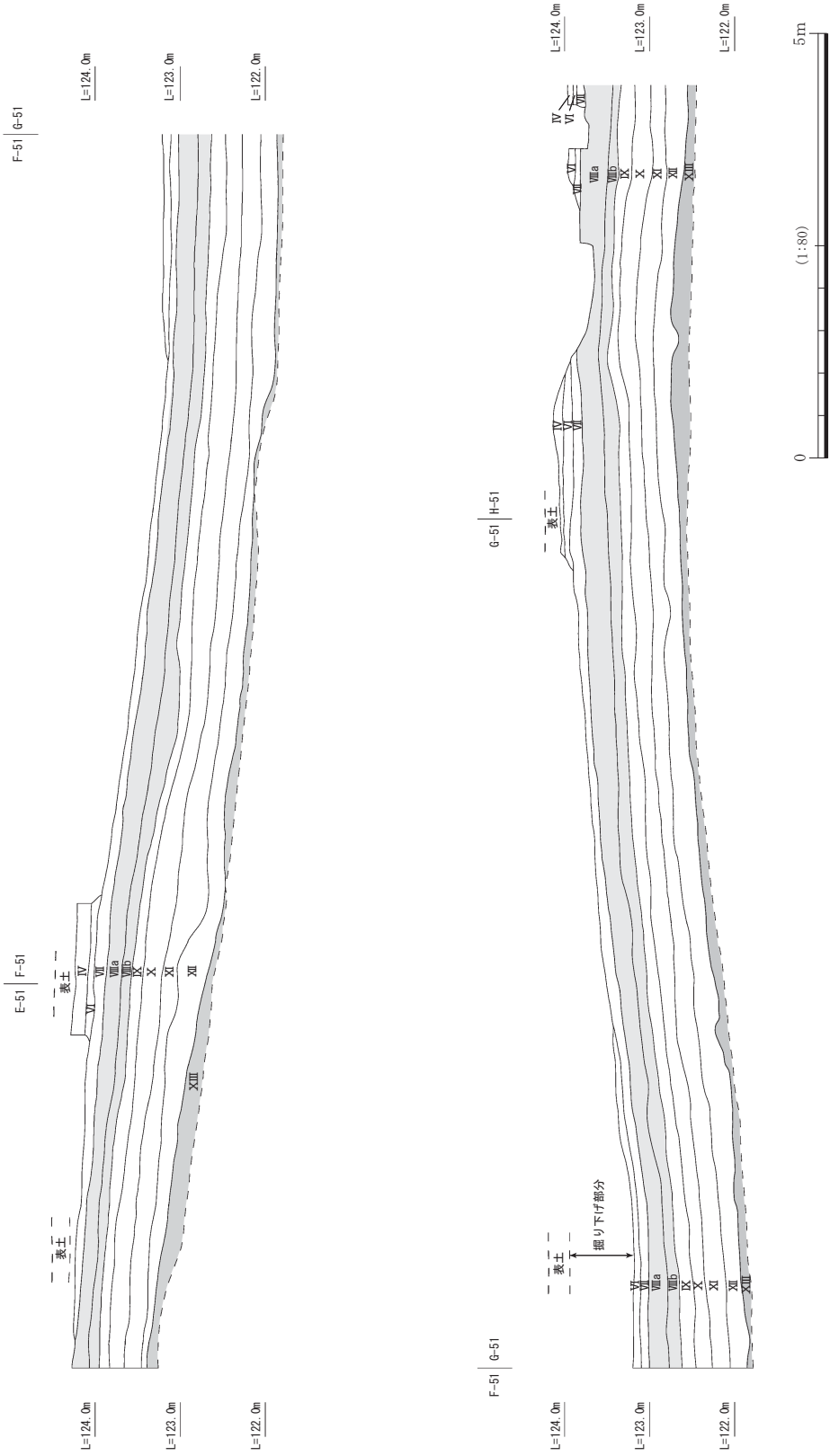
第 19 図　土層断面図　(5)（I-37 ～ 41 区）



第 20 図　土層断面図　(5)（I-41 ～ 44 区）

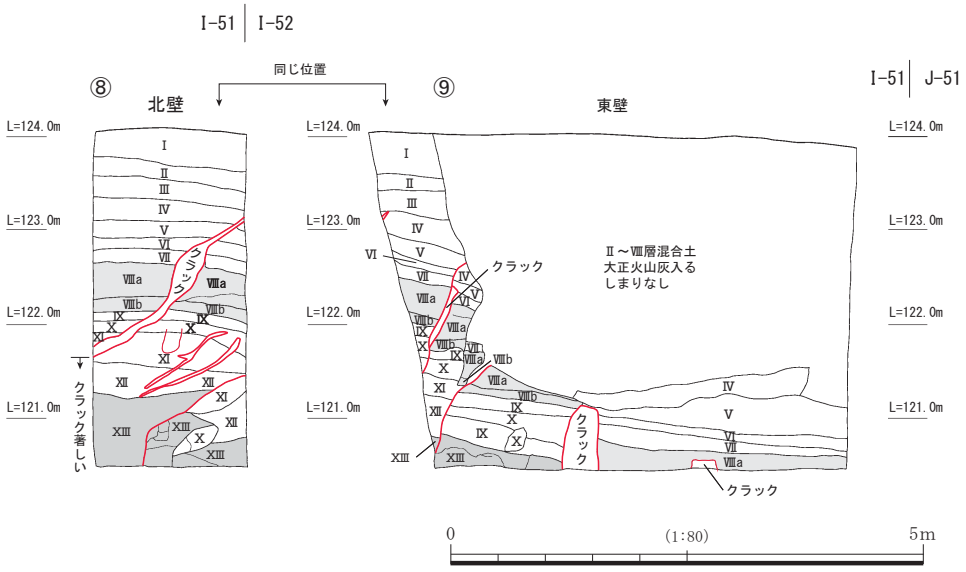


第 21 図　土層断面図　(6)（G ～ I-40 区）



第 22 図　土層断面図　(7)（E ～ H-51 区）

土層断面



第23図　　土層断面図　(8)・(9)(I-51区　北壁・東壁)

第Ⅳ章　発掘調査の成果

第１節　縄文時代･弥生時代の調査

立小野堀遺跡からは，中心となる古墳時代以前の縄文時代前期～弥生時代の遺物が少量ではあるがⅢ・Ⅳ層から出土している。しかし，地下式横穴墓群の造営及び現代のゴボウ耕作時のトレンチャーによって強い攪乱を受けており，１個体とみられる土器の集中箇所や住居跡などは検出できなかった。大きく復元できる土器もなく，ほとんどが小片であり，掲載できる遺物の点数も少ないことから，古墳時代以前の時期の調査成果については，遺構及び土器と石器にまとめて記述する。

また，古墳時代以後，本遺跡は近世の耕地開拓までほぼ手が加えられていない状況のままであったと考えられ，遺物は少数で，掲載できるものは1点のみであったため，ここでまとめて記述する。

⑴　遺　構

遺構としては，縄文時代後期あるいは晩期頃と考えられる落とし穴１基と，古墳時代の地下式横穴墓群よりも遙かに新しいと考えられる溝状遺構１条を検出した。

①落とし穴（第24図）

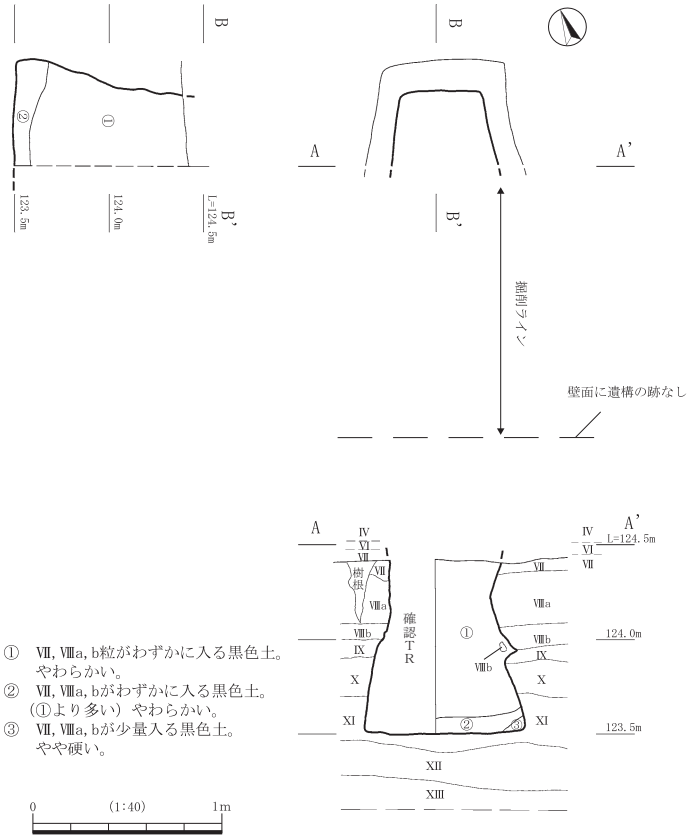
H・I-39・40区境に位置する。ゴボウの撹乱部分を深掘りし，Ⅵ層上面までを調査している際には検出できず，土層断面をとる段階で，重機によるⅥ層以下の掘り下げ時に検出された。埋土は軟らかいⅢ・Ⅳ層の黒色土で，形状は四角形のフラスコ形である。検出した段階で，埋土内にⅧ層ブロックなどが全くみられなかったことから，地下式横穴墓の玄室が崩壊した状況とは考えられなかった。えびの盆地方面でみられる竪坑上部閉塞タイプの地下式横穴墓の可能性も考えられたが，検出した部分から1.5m先の断面には遺構の跡は見られず，また，平面的にも幅は２m以上なく，小さすぎる。近隣の牧山遺跡で極めて似た形状の落とし穴が発見されており，縄文後期に比定されていることから，この遺構も同時期の落とし穴と考えられる。底面には逆茂木痕は見られない。

第４表　落とし穴計測表

検出面	長径(cm)	40
	短径(cm)	58
底面	長径(cm)	60
	短径(cm)	84
深さ(cm)（検出面から）		90
深さ(cm)（Ⅳ層より推定）		110

※長径は掘削面までの長さ。

※長径はB軸に、短径はA軸に平行



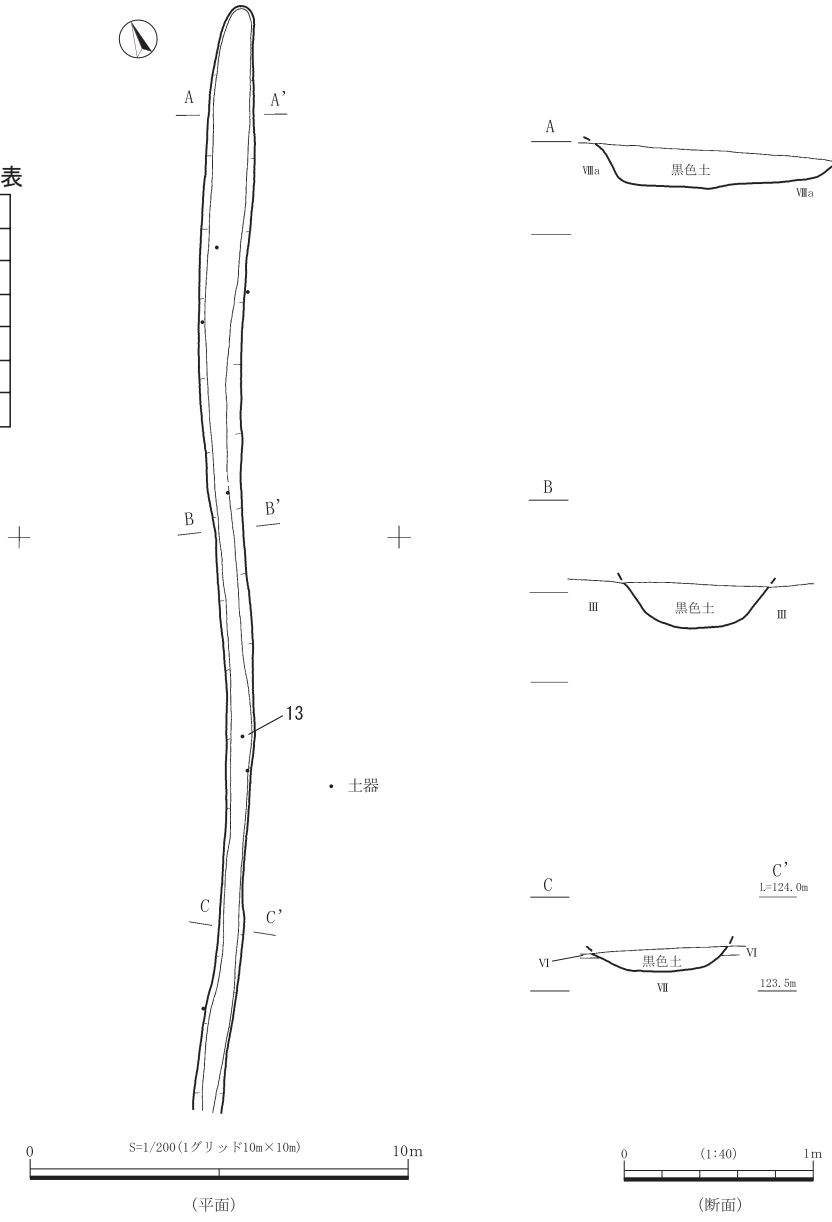
第24図　落とし穴

②溝状遺構（第25図）

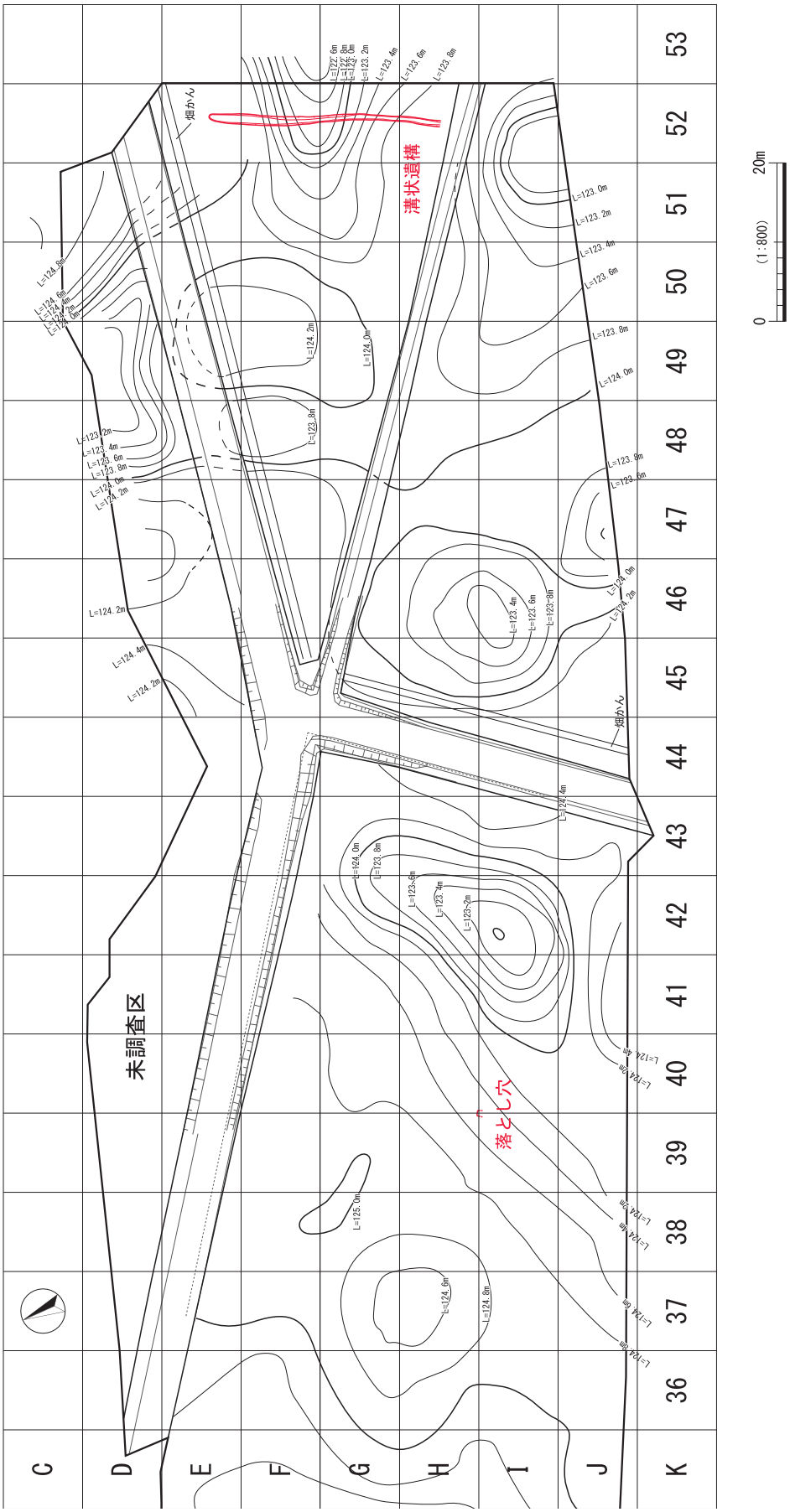
Ｅ～Ｈ－52区で検出された。直線的に造られており，南北に30m近く伸びる。農道（Ｈ－52区）の南側では検出されなかった。埋土はほぼ黒色土であり，断面Ａ・Ｃ付近では埋土との境がはっきりと分かるのに対し，断面Ｂ付近では黒色土の中であり，非常に見分けにくかった。遺構の年代については，墓域を区切る境界として造られた可能性も考えられたことから，慎重に検証を行った。周辺の遺物は，点在する土器が縄文時代後晩期や弥生時代のもので，古墳時代のものはほとんど見られなかった。遺構実測後にⅥ層まで掘り下げを行ったところ，断面Ｂ付近が断面Ａ・Ｃ付近に比べて１m近く低い地形であることが判明した。ただし，それは池田降下軽石が飛来した5700年前の地形であり，1500年前の古墳時代当時は標高差は土の堆積によって縮まっていたと考えられるが，同じような標高のＨ・Ｉ-41・42区やＨ・Ｉ-45・46区において遺構の残存状態が良かったことを考えると，これほどの標高差がなくなるほど平坦になっていたとは考えにくい。これらを考慮すると，江戸時代後～昭和初期いずれかの時期に耕地開拓によって土地がほぼ平坦にならされた後に，畑境もしくは排水溝として直線的に造られた可能性が高い。

第５表　溝状遺構計測表

全長(m)	29.2
A(幅)	126 cm
A(深さ)	18 cm
B(幅)	82 cm
B(深さ)	23 cm
C(幅)	82 cm
C(深さ)	10 cm



第25図　溝状遺構



第26図　縄文・弥生時代の遺構位置図

⑵ 遺　物

①土　器（第27～29図　１～20）

土器分布図をみると，G-30区やＦ－50・51区に集中区がみられる。ただし，遺構は検出されていない。全体として，古墳時代の遺構が無い部分には集中しているが，ある部分では拡散している。これは，古墳時代の造墓による攪乱と考えられる。後期に該当するものが最も点数が多かった。実測は13点行っている。

縄文時代

ア　前期末～中期

１と２は胴部片である。１は，外面には横方向の刺突，一部押し引きを施し，斜位に沈線と貝殻刺突も施す。内面は貝殻条痕を施す。２は外面ナデ後，貝殻刺突と押し引きを施し，内面は貝殻条痕を施す。

イ　後期

３は深鉢の肥厚した三角状の口縁部である。外面は横方向のナデを施した後，ヘラ状工具や二枚貝腹縁部で刺突を施す。また，爪形文を列状に１条施している。内面は工具によるナデを施す。胎土に風化礫を多く含む。４も深鉢の口縁部で，外面には刺突を列状に３条施し，肥厚させた部分と口縁端部の間にはヘラ状の工具で上下２つずつ刺突を施す。それ以外ではナデや貝殻条痕を施す。１㎜～２㎜の礫を多く含み，黒雲母も少量含む。５は口縁部～胴部である。全体的に横方向の丁寧なミガキを施す。口縁部には２条，頸部には少なくとも３条の凹線を施す。また，中岳Ⅱ式特有の三日月文様を口縁部に施しており，その間には刺突を施す。頸部の凹線の間にも刺突を列状に施している。内面は横方向にナデを施している。胎土には黒雲母を微量含む。６は，外面にヘラ状工具で沈線を施す。また，口縁端部に同じ工具で刻みを２か所以上施し，その部分はやや高くなるため，緩やかな波状口縁であった可能性がある。胎土には黒雲母と，１㎜～２㎜程度の白色鉱物を多く含む。７・８は底部である。７は外面に押圧指頭痕が明瞭に残り，底面はナデを施す。内面は強めの貝殻条痕を施す。また，内面には煤が付着しており，胎土は１㎜～２㎜大の風化礫や白色鉱物を多く含む。８は，内外面共に貝殻条痕が施され，胎土は，黒雲母や１㎜～２㎜大の礫を多量に含む。底面には編物圧痕がある。９は，台付皿型土器の口唇部で肥厚しており，装飾部分の一つと考えられる。胎土は，黒雲母と１㎜～２㎜大の礫を多く含む。

ウ　晩期

10～12は，浅鉢の口縁部付近である。10は内外面ともにミガキを丁寧に施す。11は10・12に比べ，口縁部が長く伸びる。内外面ともに工具で丁寧にミガキを施す。12は精製品で玉縁であり，内外面ともにミガキを丁寧に施す。10より口縁部が短く，屈曲部は緩やかである。内外面ともに工具で丁寧にミガキを施す。13は深鉢の底部である。風化が顕著である。外面は工具によるナデの痕跡が薄く確認できる。

弥生時代

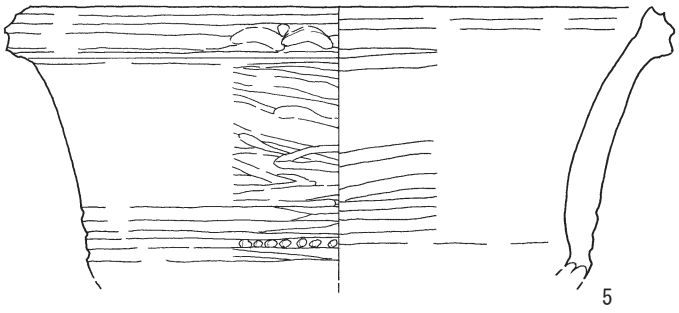
14・15・16は，甕の口縁部である。14は口唇部に刻目が施される。逆Ｌ字型の口縁で，外面の口縁直下には煤が付着している。内面はヨコナデを施す。胎土には白色鉱物を多く含む。15は，14よりも口縁部が伸び，内面に突出部を持つ。口縁部下面にはススが付着する。16は口縁部内面に突出部分を持ち，1㎜以下の白色鉱物を多く含み，外面にはススが付着するなど15と大変似ており，出土位置からも同一個体の可能性がある。17は甕の胴部である。横方向のナデを施す。外面には少なくとも３条の三角突帯を貼付する。胎土は黒雲母を少量含む。

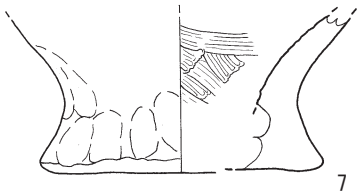
18は，壺の底部である。平底で厚みがある。黒雲母を多く含む。19は弥生時代のものと思われるが，類例が見つからず，器種・部位共に不明である。沈線を斜め方向に交差させており，上面に粘土を貼り付けた部分が剥離している。胎土は２㎜～３㎜大の礫を多く含む。

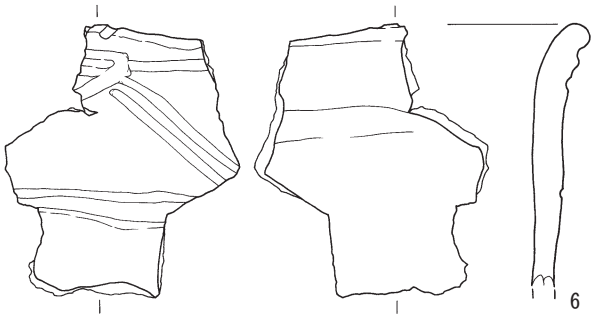
中　　世

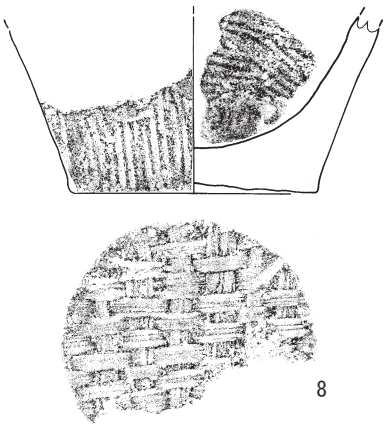
20は焙烙の把手部分である。上面には指圧痕があり，下面は工具によるナデが施される。

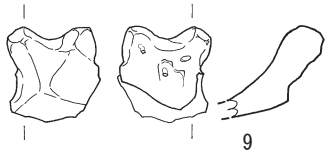
第27図　縄文時代前期末～後期の土器

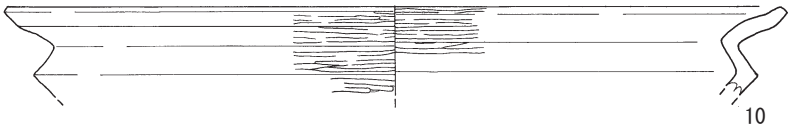


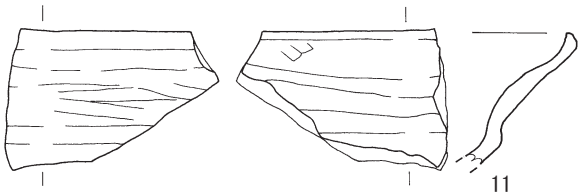


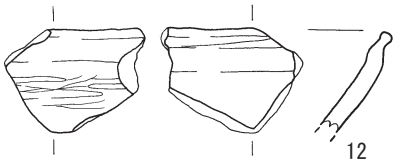


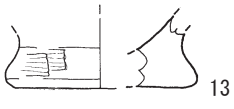


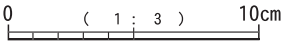




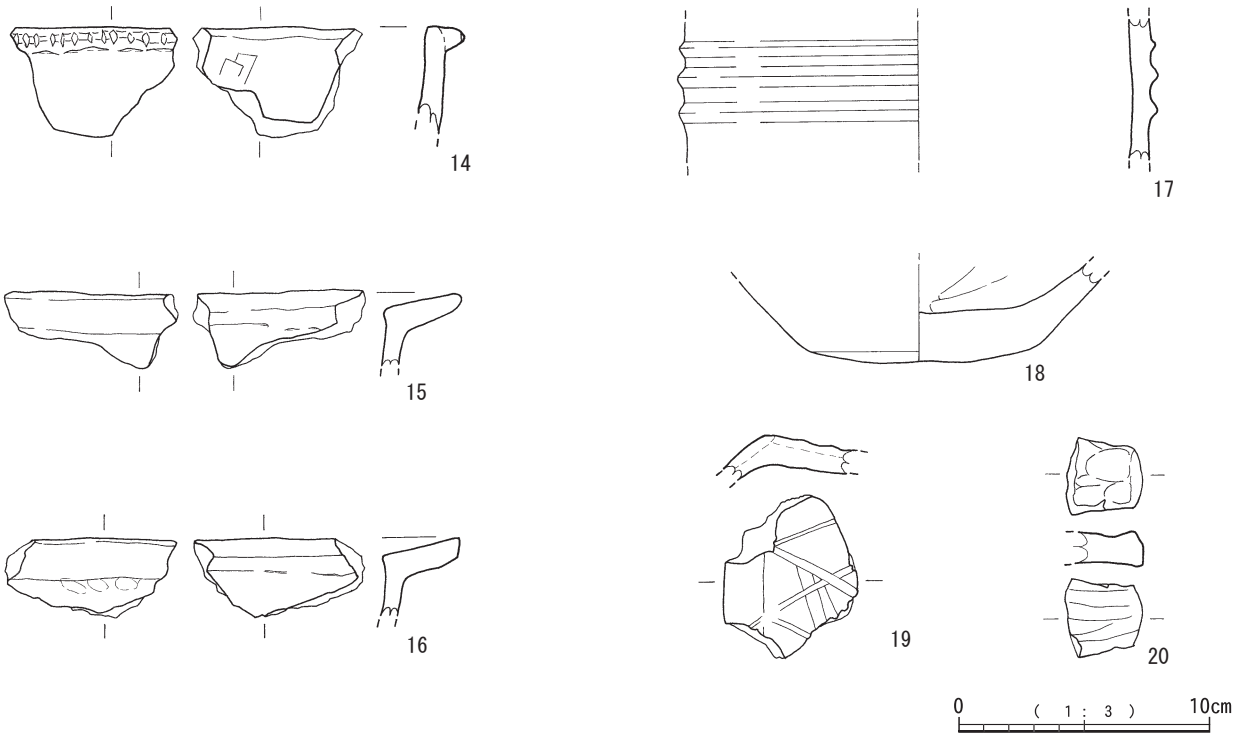








第28図　縄文時代後・晩期の土器



第29図　弥生時代以降の土器

第６表　包含層出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	注記番号	器種	部位	胎土					色調		調整・文様		備考
					石英	長石	黒雲母	ガラス粒子	その他	外面	内面	外面(上面)	内面(下面)	
27	1	TO.G-49.50 表土	深鉢	胴部	—	○	—	○	赤色粒	Hue5YR4.5/6 赤褐～明赤褐	Hue5YR6/7 橙	刺突・沈線・連点文	貝殻条痕	
	2	TO.G-49. Ⅳ.484	深鉢	胴部	○	○	—	○	赤色粒	Hue5YR4/6 赤褐	Hue5YR6/6 橙	ﾅﾃﾞ・刺突・押し引き	貝殻条痕	
	3	TO.H-48.. Ⅳ.2993	深鉢	口縁部	—	○	—	○	岩粒	Hue7.5YR7/6 橙	Hue5YR5.5/4 にぶい赤褐～にぶい橙	ﾅﾃﾞ・刺突	ﾅﾃﾞ	
	4	TO..I.J-43. 一括	深鉢	口縁部	—	○	○	○	赤色粒	Hue5YR5/5 にぶい赤褐～明赤褐	Hue5YR5/6 明赤褐	ﾅﾃﾞ・刺突・条痕	貝殻条痕	
28	5	TO.G-50. Ⅳ.495	深鉢	口縁部～胴部	○	○	○	○	—	Hue7.5YR6/4 にぶい橙	Hue5YR6/7 橙	ﾐｶﾞｷ	工具ﾅﾃﾞ	
	6	TO.F.J-53. Ⅳ 841 TO.F.J-53. Ⅳ 875 TO.F.J-53. Ⅳ 889	深鉢	口縁部	○	○	○	○	白色鉱物	Hue5YR6/6 橙	Hue5YR6/7 橙	工具ﾅﾃﾞ・沈線	工具ﾅﾃﾞ	
	7	TO.F-37. Ⅲ.1058	深鉢	底部	—	○	○	○	角閃石	Hue7.5YR5.5/7 明褐～橙	Hue5YR3/1 オリーブ黒	指圧痕・ﾅﾃﾞ	条痕	
	8	TO.F-50. Ⅳ.589 TO.F-50. Ⅳ.596	深鉢	底部	—	—	○	○	軽石	Hue5YR6/6 橙	Hue5YR6/6 橙	条痕	条痕	底面に編物圧痕
	9	TO.J-42. Ⅱ.1943	台付皿型土器	口縁部	—	○	○	—	軽石岩粒	Hue5YR6/6 橙	Hue5YR6/6 橙	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	
	10	TO.F-53. Ⅳ.838	浅鉢	口縁部	○	○	—	○	—	Hue10YR5.5/2 灰黄褐	Hue10YR6/3 にぶい黄橙	ﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ	
	11	TO.ET. ｶｸ. 表	浅鉢	口縁部	—	○	—	—	赤色粒岩粒	Hue7.5YR5.5/4 にぶい褐～にぶい橙	Hue5YR6/6 橙	ﾐｶﾞｷ	ﾅﾃﾞ	
	12	TO.I-43. Ⅲ.2641	浅鉢	口縁部	○	—	○	—	赤色粒軽石	Hue10YR6/4 にぶい黄褐	Hue2.5Y4/2 暗灰黄	ﾐｶﾞｷ	ﾐｶﾞｷ	
	13	TO.G-52. ﾐｿﾞ内 1716	深鉢	底部	○	○	—	○	岩粒	Hue5YR5.5/6 にぶい赤褐～にぶい橙	Hue10YR7/4 にぶい黄橙	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	
29	14	TO.G-18. Ⅲ.812	甕	口縁部	—	○	—	○	白色鉱物	Hue7.5YR7/6 橙	Hue5YR7/8 橙	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	スス付着
	15	TO.G-52. Ⅲ.937	甕	口縁部	—	○	—	○	白色鉱物	Hue5YR6/6 橙	Hue10 YR6/3 にぶい黄橙	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	スス付着
	16	TO.G-52. Ⅲ.943	甕	口縁部	—	○	○	—	白色鉱物	Hue10YR5/2 灰黄褐	Hue10YR6/6 明黄褐	ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	スス付着
	17	TO.G-52. Ⅳ.915 TO.G-52. Ⅳ.961	甕	胴部	○	○	○	—	—	Hue7.5YR7/6 橙	Hue10 YR6/4 にぶい黄橙	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	多条突帯
	18	TO.J-40. Ⅲ.2673	壺	底部	○	○	○	—	—	Hue7.5YR6/6 橙	Hue7.5YR7/6 橙	ﾅﾃﾞ	工具ﾅﾃﾞ	
	19	H-35・36. 一括	壺	口縁部	—	○	—	—	—	Hue10YR6.5/6 明黄褐	Hue5Y3.5/1 オリーブ黒～灰	(ﾅﾃﾞ)	(ﾅﾃﾞ)	
	20	H-43, 一括	焙烙	把手	—	—	—	○	—	Hue10YR6/4 にぶい黄褐	Hue10YR6/4 にぶい黄褐	(指圧痕・ﾅﾃﾞ)	(ﾅﾃﾞ)	

②石　器（第30～32図　21～56）

石器は，立小野堀遺跡では約100点ほどが出土しており，そのうち36点を図化した。

出土層はⅢ・Ⅳ層であるが，トレンチャーや地下式横穴墓築造時によるものと考えられる攪乱のため，包含層出土のものでも明確な時期を判断しにくいものがある。本報告書では，包含層出土のものに加えて，地下式横穴墓や土器の集中区域から出土したものも，形態や出土状況から地下式横穴墓築造時の攪乱と考えられることから，一括して報告する。時期については，縄文時代晩期（Ⅳ層）・弥生時代（Ⅲ層）に相当するものと考えられる。

打製石鏃（第30図）

18点を図化した。21～25は平基式の石鏃である。そのうち，21は側縁が直線的ないわゆる三角形鏃で，127号地下式横穴墓から出土した。側縁に角をもつ。22と23は先端を欠き，基部のみが残存している。三角形鏃である可能性が高い。24は五角形鏃である。側縁の角が明瞭で，上位に位置する。169号地下式横穴墓から出土した。25は平基式よりも基部が若干凹むものである。側縁が直線的でなく，角をもっている。

26～38は凹基式の石鏃である。凹みの程度はそれぞれに異なる。26は先端部から約５㎜の位置で刃部の一部が張り出している。27は腰岳産黒曜石製である。28は裏面の中央部は丁寧な調整は行われておらず，剥片を使用して作った痕跡が残っている。29は抉りが深く，側縁の角は上位に位置する。土器の集中区域から出土した。30は腰岳産黒曜石製で，先端部が丸味を帯びている。31は抉りが浅く，緩やかな弧を描いている。非常に丁寧な調整が行われている。32は先端を欠くが，節理面があり，稜縁は周縁のみ調整剥離を施す。33は先端及び脚部が欠損している。安山岩製である。

34は側縁が直線的な三角形鏃である。刃部が鋸歯状を呈する。基部は両脚ともに丸味を帯びている。35は正三角形状を呈している。頁岩製である。先端と脚部の端部を両脚ともに欠いている。36は53号地下式横穴墓の竪坑から出土した。側縁が直線的な二等辺三角形を呈する。脚部は端部まで丁寧に調整が行われている。37は２辺の長い二等辺三角形を呈するもので，脚部の先端を鋭利に作り出している。38は側縁が丸味を帯びており，団扇状を呈する。極めて丁寧な調整が行われる。

磨製石鏃（第30図）

２点を図化した。39と40はいずれも粘板岩製の磨製石鏃である。二等辺三角形状を呈する。39は中央部に抉りがあり，両面ともに磨きが施されている。40も中央部に抉りがあり，39に比べて細身で，上半部の刃部は欠損している。隣接する十三塚遺跡の７号竪穴住居跡でも出土例がある。弥生時代に相当すると考えられる。

磨製石斧（第31図）

１点を図化した。41は刃部を欠き，基部のみである。両面に敲打による調整痕が見られる。石斧としての使用によって破損したためか，基部の先端を尖らせていることから，ツルハシのような使用を行ったことも考えられる。

打製石斧（第31図）

３点を図化した。42は刃部を欠損しており，裏面は節理面である。43は安山岩製で，刃部は剥離によって形成されている。刃部周辺に使用によるとみられる摩耗痕が残る。44は扁平の打製石斧である。両面ともに両側縁に調整加工を施している。基部は欠く。

磨石・敲石（第31図・第32図）

10点を図化した。45～49，54は敲石，50～53は磨石としての使用が主であるが，48と49は敲石としての使用のほかに磨石として使用した痕跡が残っている。

45は土器の集中区域から出土した。砂岩製で，表面の右上部と下部に集中して敲打痕が見られる。46は155号地下式横穴墓の竪坑内から出土した。安山岩製で，側面に集中して敲打痕が見られる。一部欠損する。47は156号地下式横穴墓の被覆土内から出土した。側面の一部に敲打痕が見られる。一部は欠損している。48は側面部，特に下部に集中的な敲打痕が見られる。また，表面及び裏面には，部分的に磨った痕跡が見られる。

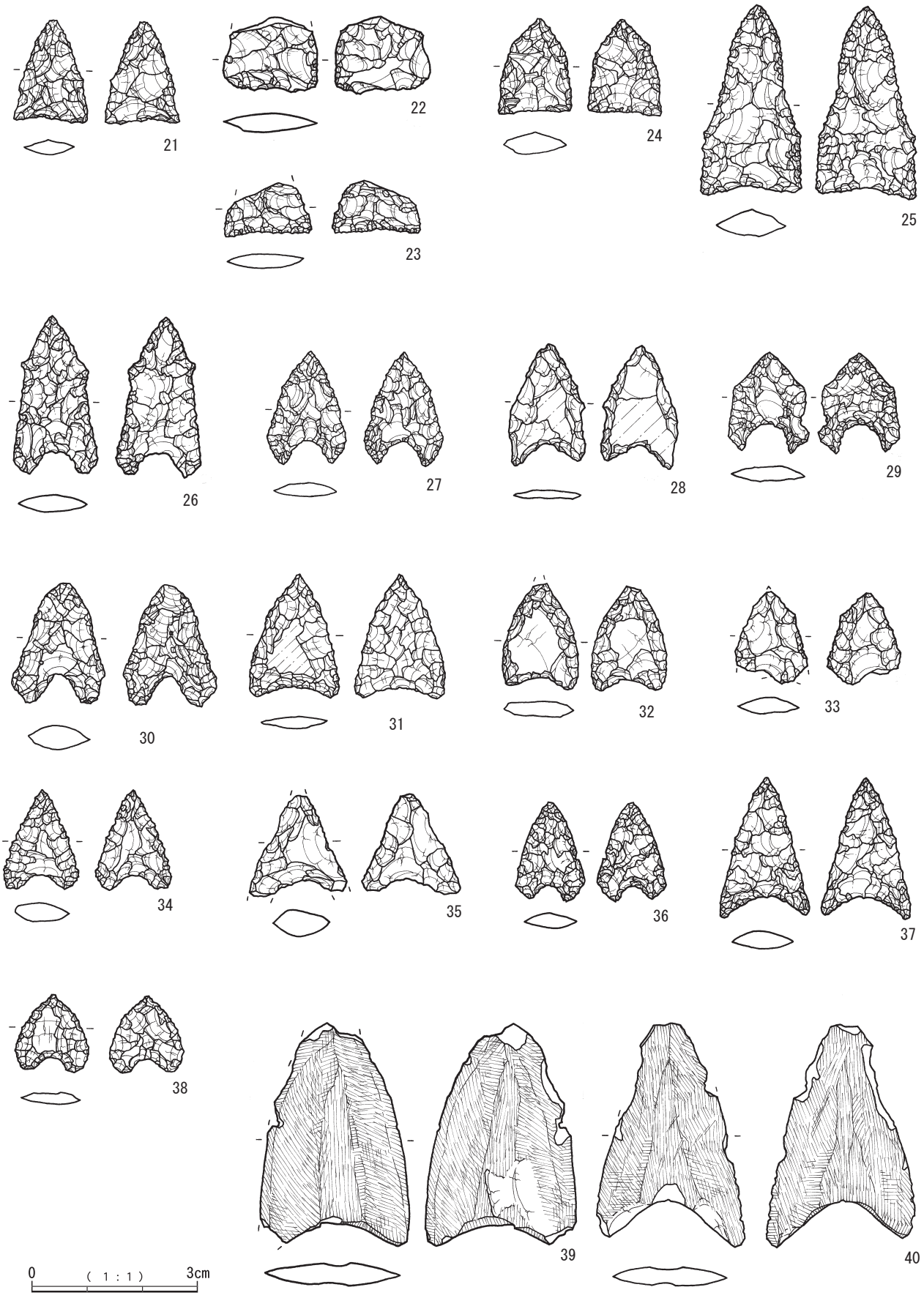
50は楕円形で，被熱のためか表面は赤く変色している。表裏両面にかけて，主に中心部分に擦痕が見られる。51は裏面の平坦面を磨石，欠損部を敲石として使用したと考えられる。52は全体の約25％のみ残存している。表面に使用による擦痕が見られる。53は両面にわずかな擦痕が残る。54は小円礫を利用した磨石・敲石で，平面と側縁の中間を敲打に使用しているほか，表面と裏面及び側縁を磨石として使用している。

礫　器（第32図）

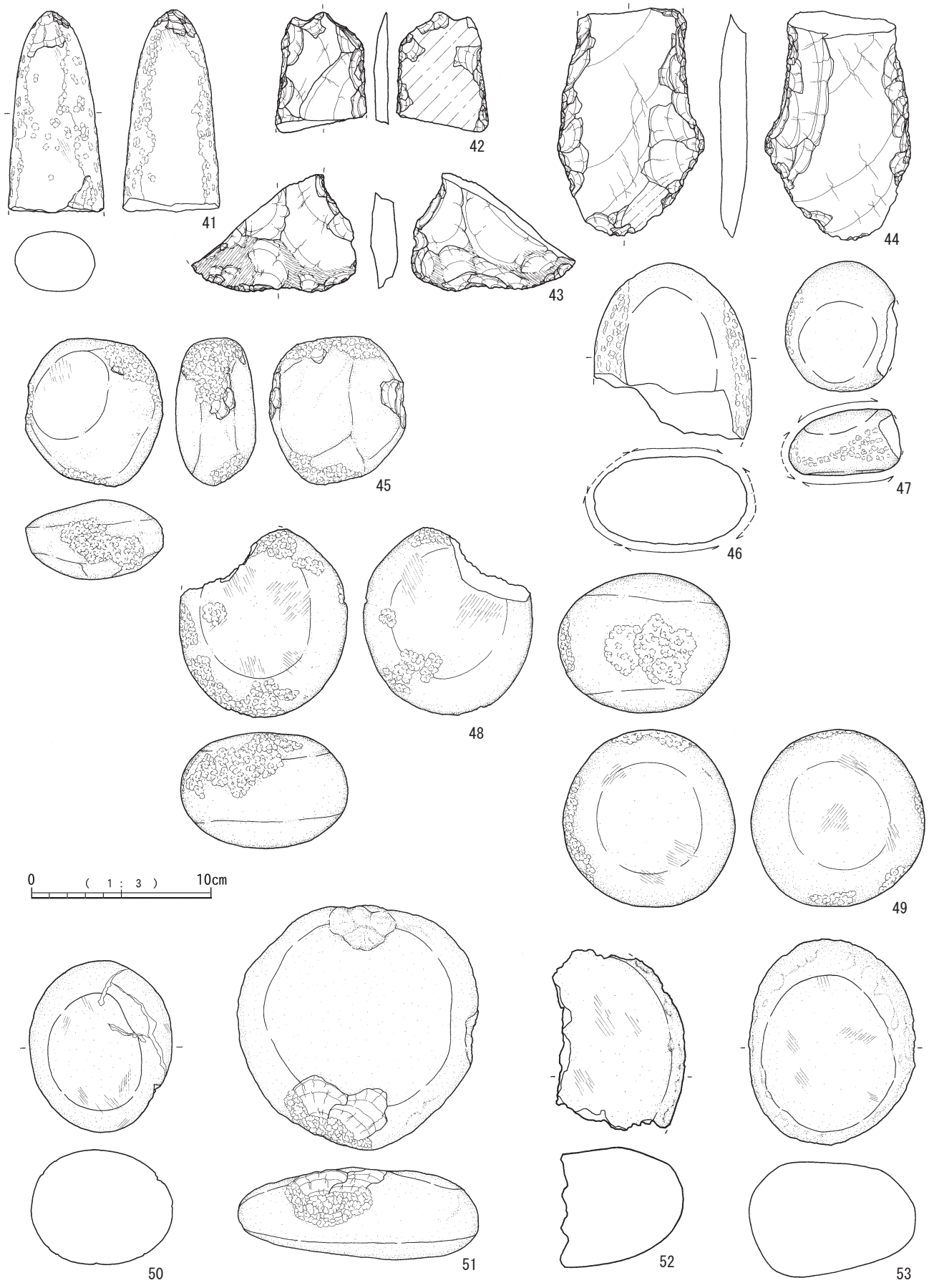
１点図化した。55は敲打痕が見られることから，敲打具として使用されたと考えられる。右半分を欠損している。

砥　石（第32図）

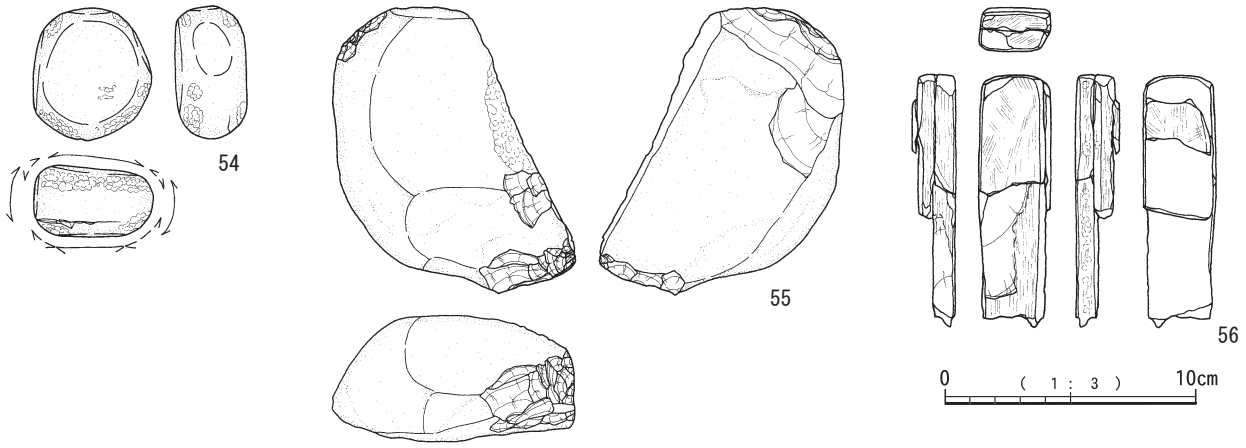
56は砥石である。３点の接合からなる。一部欠損しているが，全体は，最大長10㎝，最大幅２㎝程度と小型である。表裏面及び側縁部の全てに擦痕が見られる。頁岩製である。



第30図　石器(1)



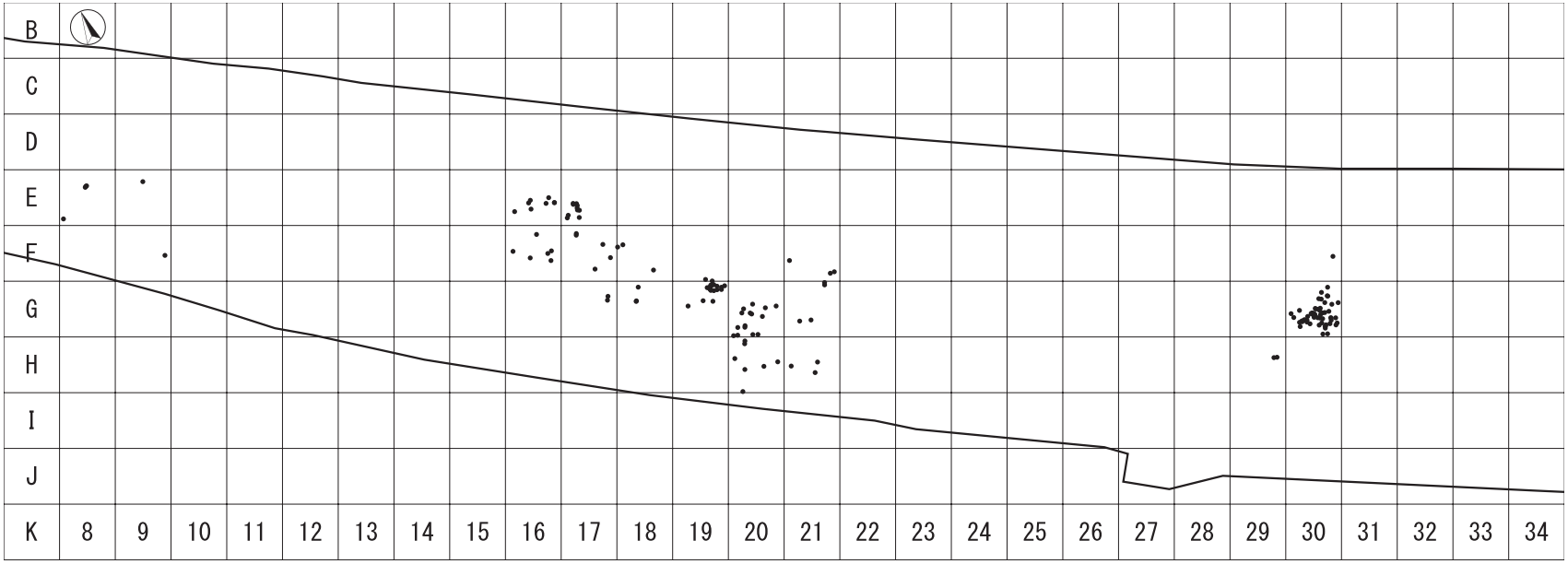
第31図　石器(2)

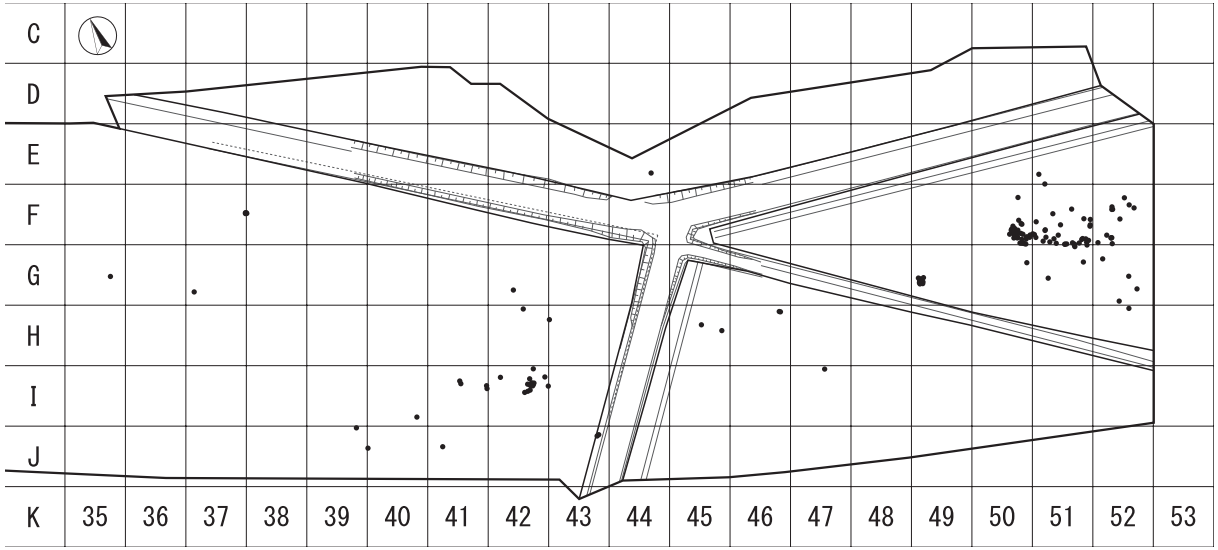


第32図　石器(3)

第７表　石器観察表

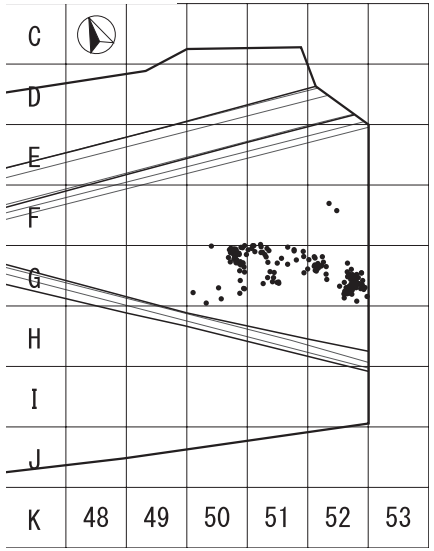
挿図番号	掲載番号	取上番号	出土地点	層位	器種	石材	計測値（cm）			重量（g）	備　考
							最大長	最大幅	最大厚		
30	21	127号	H-41	－	打製石鏃	安山岩	1.85	1.3	0.3	0.8	
	22	799	G-19	－	打製石鏃	上牛鼻産黒曜石	1.3+	1.6	0.3	0.8	
	23	951	G-52	Ⅳ	打製石鏃	腰岳産黒曜石	0.9+	1.6	0.3	0.4	
	24	169号墓-2	H-47	－	打製石鏃	頁岩	1.7	1.3	0.4	0.6	
	25	548	F-18	－	打製石鏃	チャート	3.4	1.8	0.55	2.7	
	26	2181	I-46	Ⅲ	打製石鏃	チャート	2.8	1.6	0.3	1.3	
	27	272	H-37	－	打製石鏃	腰岳産黒曜石	2	1.4	0.2	0.6	
	28	1032	G-51	Ⅳ	打製石鏃	安山岩	2.2	1.2	0.1	0.8	
	29	土器 17	I-46	－	打製石鏃	チャート	1.7	1.4	0.25	0.6	
	30	2671	G-41	－	打製石鏃	腰岳産黒曜石	2.2	1.7	0.4	1.1	
	31	2182	I-46	Ⅲ	打製石鏃	安山岩	2.2	1.6	0.2	0.7	
	32	2636	H-43	Ⅳ	打製石鏃	安山岩	1.8+	1.35	0.3	0.9	
	33	273	E-34	－	打製石鏃	安山岩	1.6+	1.3	0.3	0.6	
	34	515	F-49	Ⅳ	打製石鏃	チャート	1.7	1.3	0.3	0.7	
	35	816	H-18	－	打製石鏃	頁岩	1.7+	1.7	0.5	1.1	
	36	53号墓竪坑一括	H-37	－	打製石鏃	チャート	1.7	1.25	0.3	0.6	
	37	19号玄室	F-32	－	打製石鏃	玉髄	2.5	1.6	0.3	1	
	38	2180	H-46	Ⅲ	打製石鏃	安山岩	1.3	1.3	0.15	0.4	
	39	一括	H-34	－	磨製石鏃	頁岩	3.9+	2.7	0.4	5	
	40	一括	H-38	－	磨製石鏃	頁岩	4	2.7	0.3	3.5	
31	41	－	D-48	Ⅲ	磨製石斧	ホルンフェルス	11.2	5.2	3.3	286	
	42	473	G-32	Ⅲ	打製石斧	ホルンフェルス	6.2+	5	1.8	39	
	43	2705	H-42	Ⅳ	打製石斧	砂岩	6.4+	9+	1.4	80.7	
	44	513	G-49	Ⅳ	打製石斧	ホルンフェルス	12.3+	7.9	1.4	183.3	
	45	土器集中 37-75	H･I-45	－	磨石・敲石	砂岩	7.9	7.4	4.3	355.5	
	46	155号墓竪坑	H-45	－	磨石・敲石	安山岩	9.7+	8.1	4.8	503.5	
	47	2997	H-45	－	磨石・敲石	安山岩	7.2	6.15+	3.65	244.5	
	48	1426	E-44	Ⅲ	磨石・敲石	安山岩	9.9+	9.2	6.3	804	
	49	1484	E-48	Ⅲ	磨石・敲石	安山岩	9.7	9.9	7.7	965	
	50	754	F-51	Ⅳ	磨石・敲石	安山岩	9.5	7.8	6.3	632	
	51	358	F-35	－	磨石・敲石	安山岩	13.5	13	4.8	1215.5	
	52	628	G-50	Ⅳ	磨石	安山岩	9.3+	6.8+	6.4	479.5	
	53	475	G-37	－	磨石	安山岩	11.3	9	5.9	631.5	
32	54	1829	D-8・9	－	磨石・敲石	頁岩	5.2	4.65	2.8	105	
	55	1999	G-47	Ⅲ	礫器	安山岩	10.4	7.4	4.9	761.5	
	56	土器 17-33・34・39	H-46	－	砥石	安山岩	9.9	2.8	1.7	63.5	



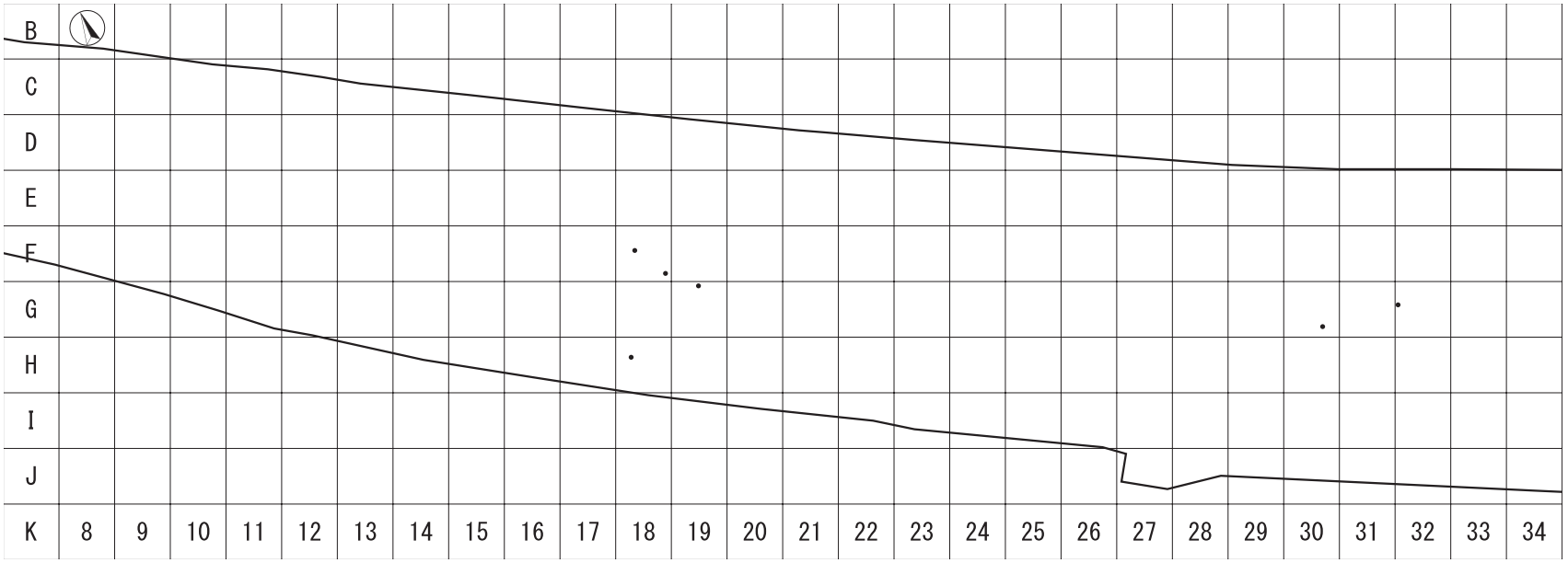


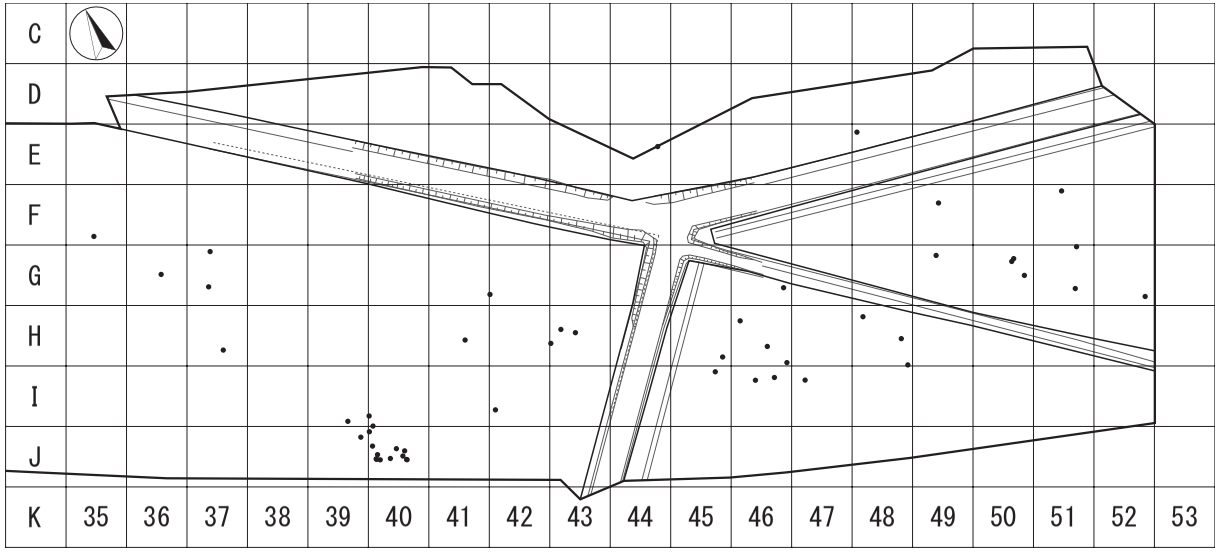
第33図　縄文時代の土器分布図

0　(1:1250)　20m



第34図　弥生時代の土器分布図





第35図　石器分布図

0　(1:1250)　20m

第２節　古墳時代の調査

⑴　概　要

古墳時代の地下式横穴墓群が本遺跡の主体である。住居跡などの遺構は検出されておらず，墓群を形成した住民の生活根拠地は不明である。

遺跡内においては，27～51区の約240mにわたり，地下式横穴墓190基及び土坑墓5基が東西方向に帯状に広がっており，表土下の遺構周辺では多量の土器が，また，遺構の内部からは副葬された鉄器が500点以上検出されている。

墓の大きさは，主軸が４mを超える大型のものから１m程度の規模のものまで様々である。

Ⅵ層上面のコンタ図でわかるように，地形は遺跡の北西から南東方向へと緩やかに傾斜しているほか，H・I－42区や46区においては凹んだ地形となっている。

⑵　遺構検出

重機及び鋤簾で表土（耕作土）を剥ぎ，耕作土より下の部分を検出した。そこでは，ゴボウトレンチャーによる筋状または格子状の攪乱がほとんどの部分にみられた。その中で攪乱を受けず，アカホヤ（Ⅶ・Ⅷ層土）等の混合土が見られる部分について，その周囲の攪乱部分を掘り上げた結果，下部に混合土が深く続くものを遺構とした。混合土が薄く，上面近くにしか入っていない場合は，遺構を構築するために掘削を行って排出された土が，溝等の凹地に残存したものと考えられる。この土の呼称について本報告書では，竪坑内の埋土と区別するために，遺構外に堆積若しくは遺構を覆っている土として，「被覆土」と記述することにする。

調査区域に切り株が多い場所では，表土を剥ぎながら根をノコギリで丁寧に切ったほか，大きい根はルートチェンソーで伐り倒すなど，遺構の保護に配慮して調査を行った。

トレンチャーの影響が少ない東側の区域では，表土を重機で剥いだ後はアカホヤ混合土が見られる部分を中心に一部を掘り下げて，前述したように混合土が下部に続くものを遺構と認定した。また，遺構が見つからなかった部分は，幅１mごとにⅥ層まで溝状に掘り下げを行って遺構の有無を確認した。これは，全面を掘り下げることによって上部の情報を失うことを恐れたためである。

地下式横穴墓及び土坑墓の遺構番号については，調査時に検出した順序に従って１号から仮の番号を付けて調査を行った。また，整理・報告書作成の段階において，改めて西側から番号を付し，地下式横穴墓には１号から190号まで，土坑墓には１号から５号までを付した。

⑵　遺物検出

土器や須恵器などについては，攪乱を受けた部分の土器は一括して取り上げ，攪乱を受けていない土器のうち，散在しているものはトランシットによって取り上げ，集中しているものは出土状況の実測を行った。遺構配置図等に記載されている黒色のものは平面実測したもの，青色のドットはトランシットにより取り上げたものを表す。

⑶　遺構調査

地下式横穴墓の調査については，攪乱部分を取り除いて竪坑の形状を確認するとともに，羨道検出のために竪坑を部分的に深く掘り下げ，羨道検出後に軸を設定することで，主軸のズレが少なくなるように努めた。埋土断面については，攪乱部分が多い場合はゴボウ穴の攪乱を受けた埋土を除去した後に，ゴボウトレンチャーのライン沿いに軸をとり，埋土の情報を最大限記録できるよう努めた。

平成22年度に実施した，空洞状態の玄室や人骨を初めて検出した113号墓の調査以降は，竪坑調査の方法を工夫した。残存状態の良い地下式横穴墓は，羨道入口の埋土や空洞の部分が閉塞に関する情報を多く持っていることから，竪坑の埋土を主軸に平行に20～30㎝おきにスライスして掘り下げ，埋土の断面を記録する方法をとった。

また，竪坑側面に抉りが見られるものは，閉塞に使用した材料の痕跡を調べるために羨道前の横軸の断面を記録し，また，埋土が実測できる場合にはその記録を行った。羨道部分を20～30㎝おきに記録した遺構については，その断面図の分層線が羨道前に設定した横軸と交差する点を取り，破線で接合して横軸を示した。（詳しくは90号地下式横穴墓の遺構図等を参照のこと）

玄室については，天井が崩壊している場合，天井の高さの復元を行うため，崩壊したブロックがどの層の土であるかを調べるために，主軸に沿って切った断面の層位を記録した。天井が崩壊したブロックについては，崩壊面に残る工具痕の残存状況が良いと判断した場合は，ブロックを丁寧に取り上げ，断面図にブロックの形状や層位を記録するとともに工具痕を実測した。副葬品が少ない墓については，玄室の横軸も記録した。

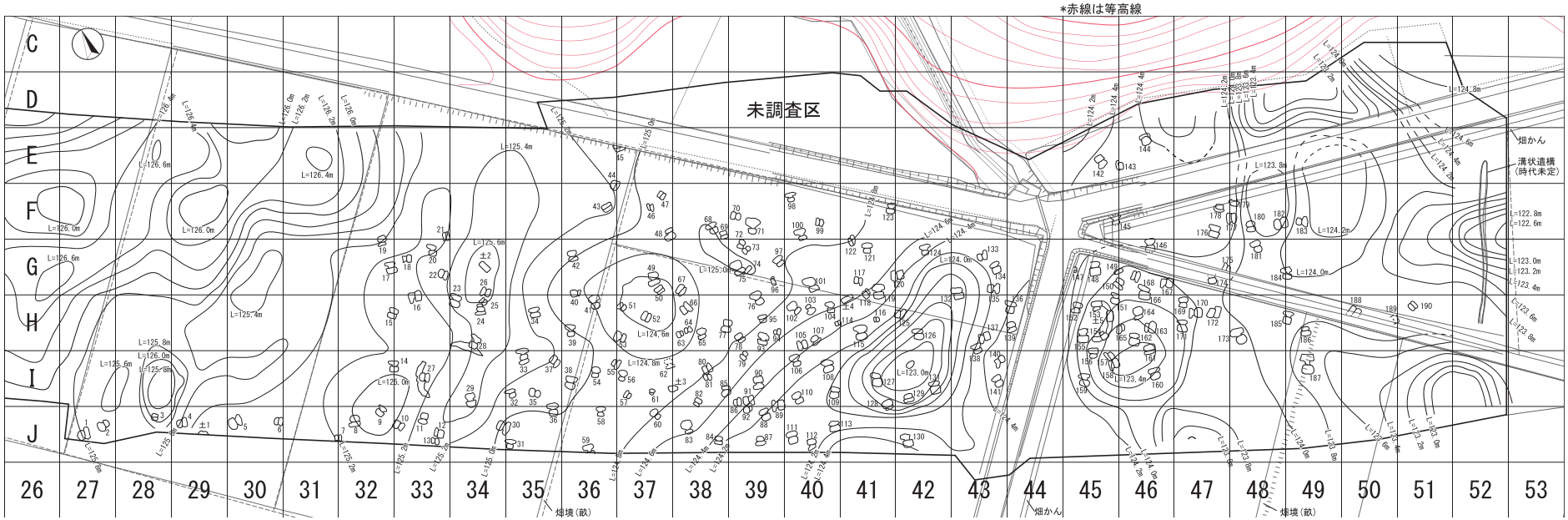
玄室の天井が残存している場合は，埋土中に骨や副葬品がないか確認を行った後に，断面を記録するため半掘し，屍床を造った痕跡がないかを調べた。遺物や人骨等がみられた場合は，影響のない部分を溝状に掘り下げ，断面を記録した。なお，天井が残存しているものについては，人骨が残っている可能性が高いことから，実測によって人骨を破損してしまうことを考慮して，横軸は記録していない。

また，地層は遺構の崩壊前の状態を推定するために欠かせない情報であることから，主軸・竪坑横軸・玄室横軸のそれぞれの壁の層位を調べて図化した。このような実測によって玄室の天井がゆがみ，崩落し始めているこ

立小野堀遺跡全体写真

＊4回撮影したものを合成。写真のゆがみのため，下図の遺構位置図とは完全には一致しない。

＊赤線は等高線



第36図　立小野堀遺跡遺構全体図

＊道路や畑かん等含む。

コンタラインは，主にⅥ層上面のものを参考として掲載した。
直接，当時の生活面を表すものではない。

0　(1:800)　20m
1グリッド=10m

とや，壁面の剥離に気づかされたものも多かった。

工具痕については，壁面で確認できたものは白線を引いた後に実測を行い，見通し図に記入した。また，工具痕の上にビニール袋を押し当て，油性ペンでビニールの上から工具痕のラインを写し取り，図面に反転してなぞり，それをさらに反転するという方法で実測を行った。工具痕の断面が曲面になっているものは非常に少ないが，その場合は粘土で型取りを行って曲面を測り，実測図に記入した。

人骨については，実測及び取り上げを鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授に依頼し，骨の部位等を記録していただいた。遺構図面中の人骨には，部位の判明するものは全て記載した。

⑷　整理作業の方法

整理作業は平成24年度から開始したが，その流れは第Ⅰ章第４節に記したとおりである。ここでは遺構及び遺物図における表現の方法について触れておきたい。

①地下式横穴墓

竪坑から玄室を見て，羨道がある壁面を竪坑正面，反対側を竪坑裏面，左壁を左側面，右壁を右側面とした。玄室も基本的に同じで，竪坑の中から羨道に向かって，玄室の奥壁を玄室正面，羨道がある方の壁を玄室裏面，入って左壁を左側面，右を右側面とした。詳しくは第38図を参照されたい。

また，玄室を２つ持つものは，玄室は北・南玄室，竪坑は竪坑東側・西側などと方位で表現している。玄室の天井については，箱の展開図の要領で配置を行った。土層断面については，断面軸が主軸に対してずれた場合，正軸とは別に軸を示している。見通し図等の配置に関しては，掲載欄に制約があるものは，断面ラインに合わせて配置することができなかった。

遺構中の遺物は，鉄鏃などの重なりが多いものについては，玄室周辺に20分の１で掲載している。また，遺物や人骨が多く見られた90号・130号・187号の各地下式横穴墓については，別に玄室内の状況を20分の１で掲載している。

埋土の説明で,混合した場合に区別ができるのは①Ⅲ・Ⅳ層の黒色土（Ⅴ層土がある場合はそれも含む），②Ⅶ～Ⅷ層のアカホヤ主体土（黄～橙色），③Ｘ～ＸⅢ層土の桜島由来のパミスを多く含む固い土（黒～薄黄色）の３つである。このうち，①のように，埋土中に最も多い黒色土に対して②や③がどの程度含まれているか，また，Ⅶ・Ⅷ層土のブロックの大きさはどの程度かを記述している。なお，Ⅵ層土とⅨ層土は層厚が５㎝程度しかなく，いずれも黒色土が主体であることから，Ⅲ・Ⅳ層土との区別が難しいため，明確に確認できたもの以外は記述していない。

ア　分類

地下式横穴墓について，玄室・羨道・竪坑の大きさや深さ，形状を考慮して分類を行った。詳しい分類方法については，次の節を参照されたい。

イ　竪坑・羨道・玄室の測定位置

第38図に示す。推定は５㎝単位で行った。上面が崩壊している遺構の推定は，Ⅵ層上面はコンタ図を，Ⅲ・Ⅳ層の厚さは近隣の残存部分をそれぞれ参考にしている。

ウ　竪坑の平面形

楕円形，長方形，隅丸長方形，隅丸正方形，円形に分類した。

エ　羨門の正面形

楕円形，六角形，長方形，隅丸長方形，台形，逆台形，正方形，不整形に分類した。

オ　玄室の平面形

楕円形，隅丸長方形，長方形，正方形，不整形に分類した。なお，横軸が縦軸の２倍以上のものは「横長」と記載した。

カ　玄室の断面形

方形，楕円形，ドーム形，家形に分類した。

キ　閉塞推定

遺構内では羨道の前に炭化物が多くみられたり，空洞が検出されたりしたことから，ほとんどが木材による閉塞と思われるが，土塊などの土による閉塞は土塊とし，それ以外は埋土の状態から木材と推定した。

ク　竪坑の抉り

竪坑の正面と左右側面の接する壁面に抉りがみられるものは「あり」，ないものは「なし」と記載した。

ケ　竪坑掘り返し痕

竪坑埋土の断面において，掘り返しの痕跡がみられるものは「あり」，ないものは「なし」とした。なお，追葬跡としなかったのは，人骨が明確に２体分遺存しないものが多いことから，この名称を用いている。

コ　工具痕

遺構内部における工具痕の状況を記述し，実測を行ったものについては，幅等や多く残存している箇所，掘削方向などを記載した。

サ　赤色顔料

検出されたものについて，竪坑・羨道・玄室などの検出箇所と分析結果を記載した。検出箇所が平面図に入っているものは調査時に位置を記録したもので，埋土のふるいがけにより検出されたものは位置等の記載はない。

シ　炭化物

赤色顔料と同様である。樹種同定・年代測定に関する詳細は科学分析の章に記載してある。

ス　人骨

人骨が検出された墓は，その残存度や年齢・性別について，判断した根拠をもとに記載している。

セ　出土土器・鉄器

竪坑の検出面・埋土・玄室内の３箇所に分け，その場所にあったものを記載。なお，竪坑の上面は，耕作やゴボウ作付の機械による掘削を受けたために，遺存していたかどうかの判断ができないものは，その旨を記載している。

②土坑墓

土坑墓は玄室を持たないため，左右などの方向の表現を使わず，方角で示す。見通し図は主軸の両側，土層図は主軸とそれに垂直な横軸を基本とする。

③遺構周辺土器分布図

実測した土器の分布図とトランシットで取り上げた遺物のドット図及び被覆土の図は，遺構配置図の中に表示した。遺構間で玄室が向き合い，周囲に円形や方形状に土器片や被覆土がみられるものについては，遺構断面や被覆土の断面及び土器の高さをドットで示した図を作成した。なお，高さの分布を示す土器は，平面の「　」で囲まれた範囲のものである。また，実測を行った土器に関しては，土器の分布図内に位置を破線で示した。ただし，調査時に土器集中区域内において50㎝四方の大きさの小グリッドを設定して一括取り上げを行っているものがあるなど，詳細な位置が分からないことから，判明した土器の位置が確認できる最大の範囲を破線で囲んでいる。そのため，破線の範囲内の土器全てがその記号の土器が出土した範囲を示すものではない。

④遺　物（鉄器類，土器類）

鉄器類は有機物の残存度が高いことなどから，剥離・錆などの劣化が危惧されるものを中心に実測図等の業務委託を行い，それ以外は埋蔵文化財センター及び埋蔵文化財調査センターで実測・トレースや保存処理を行った。

鉄器については，錆で強く覆われたものや遺物同士が重なったもの，また，青銅鈴については鈴口が閉ざされているものなどについては，Ｘ線写真では形状が分からないことから，九州国立博物館及び九州歴史資料館においてＣＴスキャンを実施して，断面や内部の状態を確認して実測に使用した。なお，青銅鈴の丸については，最大の大きさとなる部分のスキャン写真を実測図に使用した。

⑤土器・須恵器

土器集中区域のものを中心に接合・復元を行った。接合したものやそれ以外の周辺の土器も調べて，遺構周辺の土器分布図に記録している。実測やトレースなどの作業は，全て埋蔵文化財センター及び埋蔵文化財調査センターで行った。

⑥地下式横穴墓の分類

羨道の状況をもとに，竪坑や玄室の形状や向きなどを考慮して分類を行った。

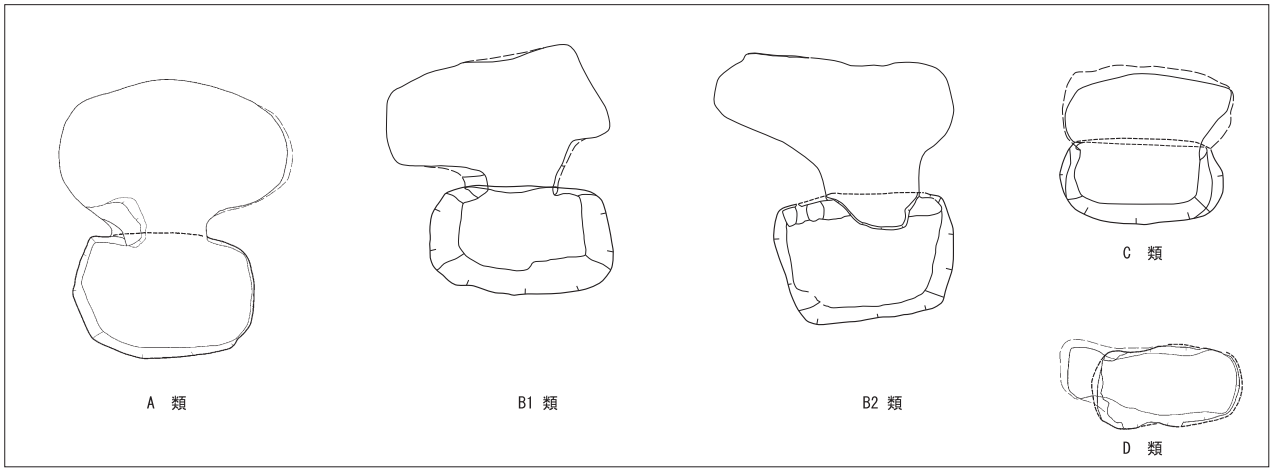
Ａ類　羨道が狭く竪坑のほぼ中央部にあり，玄室は平入りで，竪坑と平行。

Ｂ１類　羨道が狭く竪坑のほぼ中央部にあり，玄室は平入りで，竪坑に対して斜めの向きとなる。

Ｂ２類　羨道が狭く竪坑の片側に寄っており，玄室は平入りで，竪坑に対して斜めの向きとなる。

Ｃ類　羨道が広く竪坑と玄室とが平行に接している。

Ｄ類　羨道が極めて狭く，竪坑の長軸の延長上に妻入りで，極端に小さい玄室が付く。



第37図　地下式横穴墓の分類

⑦地下式横穴墓・土坑墓の解説方法－エリア区分－

調査区全体を，東西及び南北または南北及び東西をそれぞれ２グリッド×３グリッドとするエリアに区画し，西側からエリア１，エリア２，・・・などと呼称してエリア21までを設定した。ただし，遺構の見られない区域にはエリア名は付していない。以下，それぞれのエリア毎に概観していくことにする。

エリア１

Ⅰ・Ｊ-27～29区で，本遺跡で最も西側のエリアである。Ⅵ層上面のコンタ図によると，このエリアは西から東側にかけて全体的に下っているが，中央部には大きな凹地も見られる。また，このエリアから北西方向にかけては凹凸を繰り返しながら，漸次高くなっている。エリア内では，地下式横穴墓４基と土坑墓１基が確認された。西側にＡ類が２基並び，中央部から東側にかけてはＣ類とＡ類に分類される地下式横穴墓，その隣には４類の土坑墓があり，全体的にはこれらの遺構が列状に東西方向に並んでいる状況である。遺構の分布を見ると，南側にも墓域が広がっていると考えられる。

エリア２

Ⅰ・Ｊ-30～32区で，エリア１の東側に隣接している。地形的には東側にかけて緩やかに下っているほか，東の端には凹地が見られる。エリア内には５基の地下式横穴墓が確認されており，Ａ類，Ｂ１類，Ｂ２類がそれぞれ１基ずつ，それにＣ類が２基である。８号地下式横穴墓の周囲には土器の集中部分が見られる。遺構分布から，調査区域の南側にも墓域が広がっている可能性が考えられる。

エリア３

Ｆ～Ｈ-32～34区で，エリア２の北東方向に隣接している。地形的には東側にかけて漸次下っているが，東の端はやや高くなっている。エリア内には13基の地下式横穴墓と１基の土坑墓が確認されている。地下式横穴墓は，１基が竪坑の両側に２つの玄室が取り付くものであるために形態分類を行ったものは14基となり，その内訳は，Ａ類が５基，Ｂ１類が１基，Ｂ２類が５基，Ｃ類が３基である。また，土坑墓は整った長方形を呈した１類である。エリア１～３の北側には遺構は見られないことから，墓域はこれらの場所を北端としていると考えられる。

エリア４

Ⅰ・Ｊ-32～34区で，エリア２の東，エリア３の南に隣接している。地形的には，東側に若干高いところがあるものの，全体的には東側にかけて漸次下っていると言える。エリア内には７基の地下式横穴墓が確認されている。内訳はＡ類が３基，Ｂ１類が２基，Ｂ２類が２基である。エリア４の南側にも墓域は広がっていることが考えられる。

エリア５

Ｅ～Ｇ-35・36区で，エリア３の東側に隣接しており，地形的には東側に向かって次第に下っている。このエリアでは５基の地下式横穴墓が確認された。Ａ類が１基，Ｂ１類が１基，Ｃ類が３基である。Ｃ類はエリアの北側にほぼ南北方向に列状に並んでいる。エリアの西側には遺構は全く見られないが，北側には墓域が広がっている可能性がある。

エリア６

Ｈ～Ｊ-35・36区で，エリア５の南側に隣接している。東側にかけて緩やかに下るほか，北東方向にある凹地に向かっても下っていると言える。14基の地下式横穴が確認されたが，そのうちの１基は竪坑の両側に２つの玄室が取り付くもので，15基を分類の対象とした。Ａ類は６基，Ｂ15類が４基，Ｂ２類が５基である。このエリアの南側にも墓域が広がっていると考えられる。

エリア７

Ｅ～Ｇ-37・38区で，エリア５の東に隣接している。地形的には西側が高く，南側が低くなっているほかは，ほとんど平らで，極めて緩やかに東側へと下っている。地下式横穴墓は８基確認された。Ａ類は１基，Ｂ１類が２基，Ｂ２類が１基，Ｃ類は４基である。隣接するエリアでは本エリアよりも北側にも遺構があることから，北側の未調査区域にも墓域が広がっている可能性は考えられる。

エリア８

Ｈ～Ｊ-37・38区で，エリア６の東側，エリア７の南側に隣接している。地形的には南東方向にかけて下っているほか，北側も凹んだ状況が見られる。地下式横穴墓は18基確認されたほか，土坑墓も１基検出されている。Ａ類が10基，Ｂ１類が１基，Ｂ２類が３基，Ｃ類が４基である。土坑墓は不正方形を呈した３類である。遺構の広がりから考えると，墓域はエリアの南側にも伸びることが想定される。

エリア９

Ｅ～Ｇ-39・40区で，エリア７の東側に隣接している。地形的には東に向かって緩やかに下っている。地下式横穴墓は12基確認された。Ａ類が６基あるほか，Ｂ１類が１基，Ｂ２類が２基，Ｃ類が１基，それにＤ類が２基である。エリアの北側，未調査区域にも墓域が広がってい

ることが考えられる。

エリア10

Ｈ～Ｊ-39・40区で，エリア８の東側，エリア９の南側に隣接している。地形的には，南東に向けて緩やかに下っているほか，東端の中央部では，隣のエリア12の中央にある大型の凹地に向かっても下っている状況が見られる。地下式横穴墓は28基確認された。Ａ類が11基，Ｂ１類も11基，Ｂ２類が２基，Ｃ類が４基である。遺構の密度はエリア16と同様，非常に高い。この遺構の密集度から考えると，エリアの南側にもまだ墓域が広がっていることは大いに考えられる。

エリア11

Ｅ～Ｇ-41・42区で，エリア９の東側に隣接している。地形的には，全体としては東側に傾斜しているほか，南側にある大型の凹地に向かっても下っている。地下式横穴墓は８基確認された。Ａ類が１基，Ｂ１類が４基，Ｂ２類が２基で，Ｃ類が１基である。本エリアのほぼ中央部に遺構があることから，未調査区域にかけても墓域が広がっている可能性がある。

エリア12

Ｈ～Ｊ-41・42区で，エリア11の南側，エリア10の東側に隣接している。地形的には，中央部が大きく凹んでいる。残存度の良好なこの凹地を中心に，土器の集中箇所が広域にわたって見られ，部分的には途中の切れた円形あるいは弧状を呈している状況も見られた。さながら，この巨大な凹地に向かって破壊した土器を撒いたか敷き詰めたかしているようにも思われる。地下式横穴墓は９基確認されたほか，土坑墓が１基検出されている。Ａが３基，Ｂ１類が２基，Ｂ２類が１基，Ｃ類が３基である。土坑墓は隅丸長方形を呈する３類である。エリアの南側にやや離れて構築されている130号地下式横穴墓は，副葬品が優れていることなどから盟主墓的な墓であったことも考えられるほか，この南側にも墓域が広がることが考えられる。

エリア13

Ｅ～Ｇ-43・44区で，エリア11の東側に隣接している。地形的には，南西にある大きな凹地に向かって下っている状況である。地下式横穴墓は４基確認されており，Ｂ１類が３基，Ｂ２類が１基である。いずれもエリア12の中央にある大きな凹地の外縁に位置していることになる。遺構の位置は南側に偏っていることから，北側の市道を挟んで未調査区域にかけても墓域がなお広がっていることも考えられる。

エリア14

Ｈ～Ｊ-43・44区で，エリア12の東側，エリア13の南側に隣接している。地形的には，全体的には東側に向かって緩やかに傾斜しているほか，西に隣り合っているエリア12の中央部に位置している大きな凹地に向かっては割合に急角度で大きく下っていると言える。地下式横穴墓は６基が確認された。Ａ類が１基，Ｂ１類４基，Ｂ２類が１基である。遺構は東側の市道の下にもあると考えられる。

エリア15

Ｄ～Ｆ-45・46区で，エリア13の中央部から上部にかけて東側に隣接している。地形的には，中央部付近が高く，東及び西側にかけては下っている。地下式横穴墓は４基確認され，Ｂ１類が１基，Ｂ２類１基，Ｃ類が２基である。このエリアの北側は崖であることから，墓域が北側に広がる可能性は低い。

エリア16

Ｇ～Ｉ-45・46区で，エリア15の南側，エリア14の中央部から上部にかけて東側に隣接している。地形的には，全体的に東側に向かって傾斜している中にあって，このエリアのやや南側の中央部には大きな凹地が存在する。遺構はこの大きな凹地の周辺に展開している印象を受けるが，それは地形的に残りが良いためと考えられる。地下式横穴墓は23基，土坑墓が１基確認されている。Ａ類が５基，Ｂ１類が10基，Ｂ２類が３基，Ｃ類が４基で，Ｄ類が１基である。土坑墓は隅丸長方形を呈する３類である。この凹地の周囲には，エリア12と同様に，土器の集中箇所が広域にわたって見られる。これは，エリア12と同様である。ここよりも南側には，調査した範囲にも遺構が見られないことから，墓域は広がらない可能性が大きい。

エリア17

Ｄ～Ｆ-47・48区で，エリア15の東側に隣接している。地形的には，東側に向かって緩やかに傾斜しているほか，北側には急傾斜で下っている。市道部分はまだ調査が行われていないことから，遺構の有無については言えないものの，調査した範囲内では南側に寄ったところに遺構が集中している状況が見られる。地下式横穴墓は６基確認された。Ａ類が３基，Ｂ１類が１基，Ｃ類が１基のほか，全体形状がわからずに不明としたもの１基である。急速に北側に向かって下っている状況から判断すると，北側には墓域の広がりは考えにくい。

エリア18

Ｇ～Ｉ-47・48区で，エリア17の南側，エリア16の東

側に隣接している。地形的には，割合に安定した平らに近い状況であるが，南東部にかけては下り始めている。地下式横穴墓は８基確認された。Ａ類が１基，Ｂ１類が２基，Ｂ２類が２基，Ｃ類が２基，それに不明なもの１基である。エリアの南側には遺構が見られず，調査区域のさらに南側にも全く遺構が確認されていないことから，南側には墓域は広がっていない公算が大きいと考えられる。

エリア19

Ｄ～Ｆ-49・50区で，エリア17の東側に隣接している。地形的には，全体的に北側に向かって次第に大きく下っていく場所であり，そのためか地下式横穴墓も１基しか検出されていない。この地下式横穴墓は，Ｂ１類に分類される。エリアの北及び東側は崖であり，墓域の広がりは極めて想定しにくい。

エリア20

Ｇ～Ｉ-49・50区で，エリア19の南側，エリア18の東側に隣接している。地形的には，北側及び東側に向かってほぼ急勾配で下り始める場所である。地下式横穴墓は６基確認された。Ａ類が２基，Ｂ１類が１基，Ｂ２類が１基，Ｃ類が１基，不明なもの１基である。先述のように，東側に位置する急勾配で下っているエリアにかけては墓域の広がりは難しいと考えられる。

エリア21

Ｇ～Ｉ-50・51区で，エリア20の東側に隣接している。北側の東側に向かって急勾配で下っている部分と，南側にある南に向かって漸次下っている部分を避けた中央部に１基のみ地下式横穴墓が確認された。Ｃ類に分類できる。この190号地下式横穴墓を東端の遺構として，墓域の東の境界に当たると考えられる。

⑧土器の出土状況について

土器は，遺構内から出土した個体は極めて少なく，また，破片は小さいものが多い。Ⅲ層一面に，土器片が重なり合いながら広がって出土した状況であることから，時期差は小さいことがわかる。器種は，壷・高坏・坩・鉢・その他で構成される。破片が多く，完形に復元できる個体が少ないことから，廃棄する際にわざと細かく割った，いわゆる破砕祭祀を行った可能性がある。甕は確認できない。土器型式も，近くから出土したものどうしは時期がさほどはなれていない。このことから，出土位置は遺跡形成時期から大きく動いていないと考えられる。

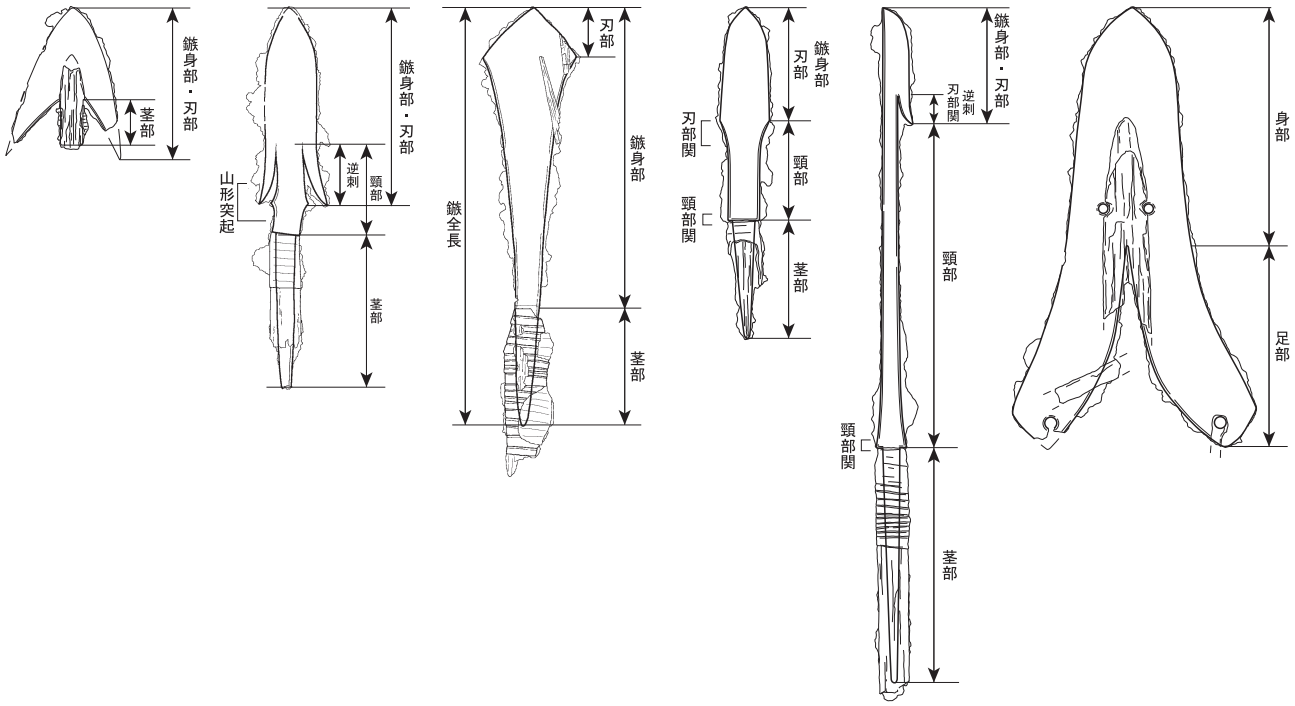
土器も，エリア（小エリア）毎に個別に説明を行う。

第38図　計測位置および開口方向

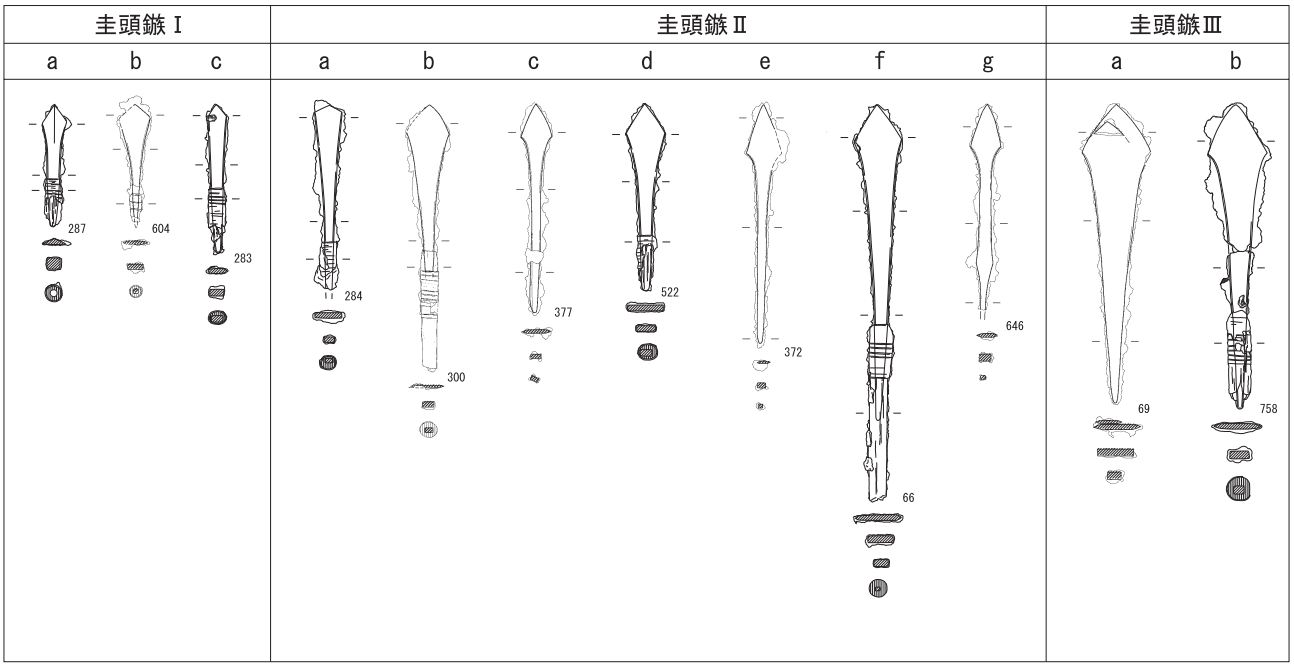
⑨鉄鏃の分類について

鉄鏃の全体的な分類に関しては，杉山秀宏氏や水野敏典氏の分類を指標とした（杉山1988，水野2009他）。

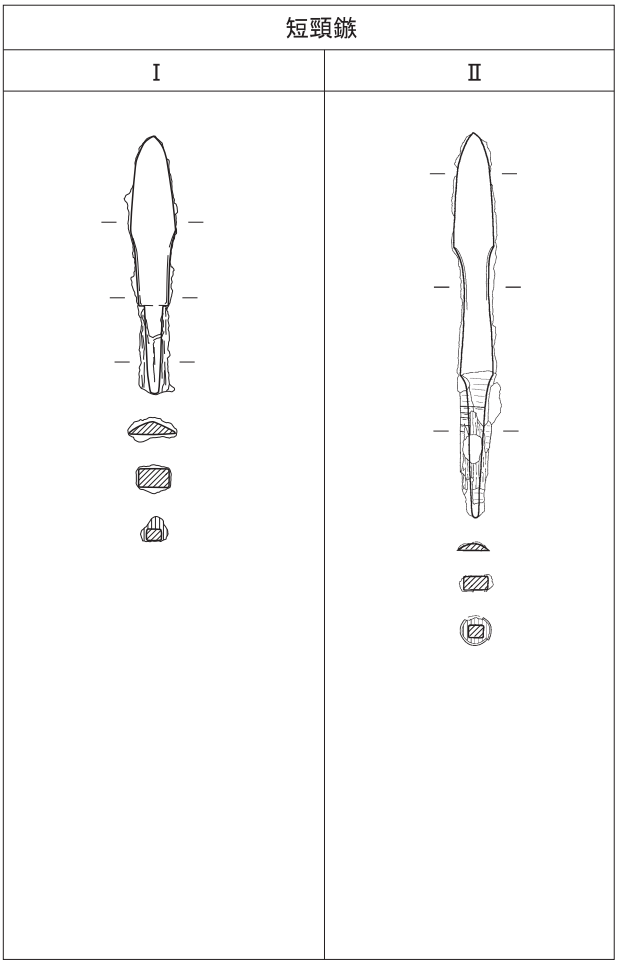
ただし，南部九州の地域性がみられる鉄鏃については橋本達也氏（橋本2003・2014他），圭頭鏃の分類に関しては高木恭二氏や和田理啓氏による分類を参考にした（高木1981・1982，和田2001他）。特に，圭頭鏃は，バリエーションが豊富であったことから細分した。まず大きさで３つに分類し，そのなかで刃部長や最大幅，頸部関の有無などで分類した（第40図，第８表）。刃部長の分類基準は，全ての刃部長を計測した結果，0.5㎝，1.8㎝にそれぞれ境目があったことから，これらを基準とした。また，短頸鏃は頸部長（第41図），長頸鏃は頸部幅（第42図）を分類基準とした。



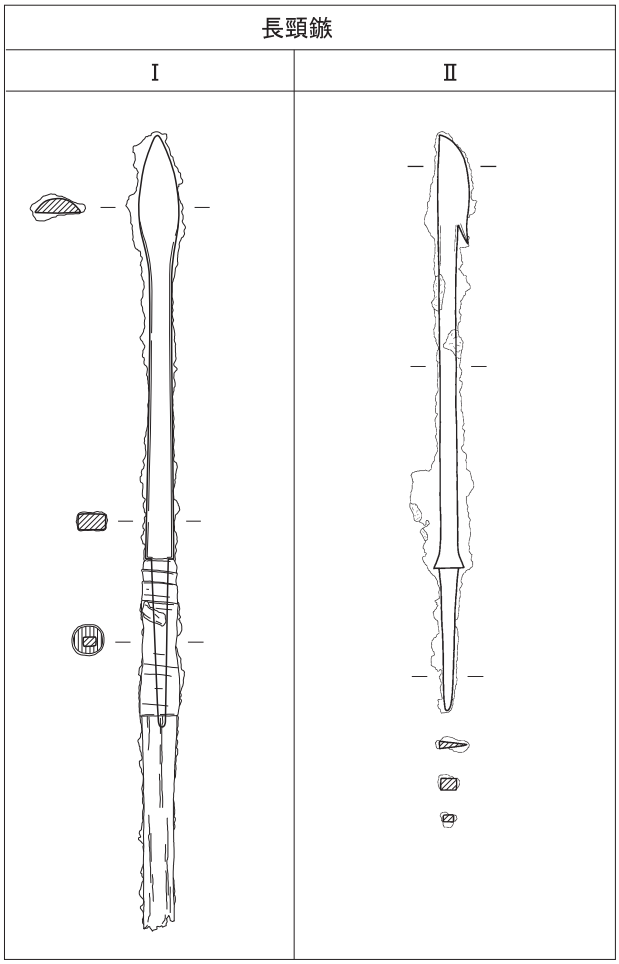
第39図　鉄鏃・異形鉄器の部位の名称



第40図　圭頭鏃分類図（S=1/4）



第41図　短頸鏃分類図（S=1/2）



第42図　長頸鏃分類図（S=1/2）

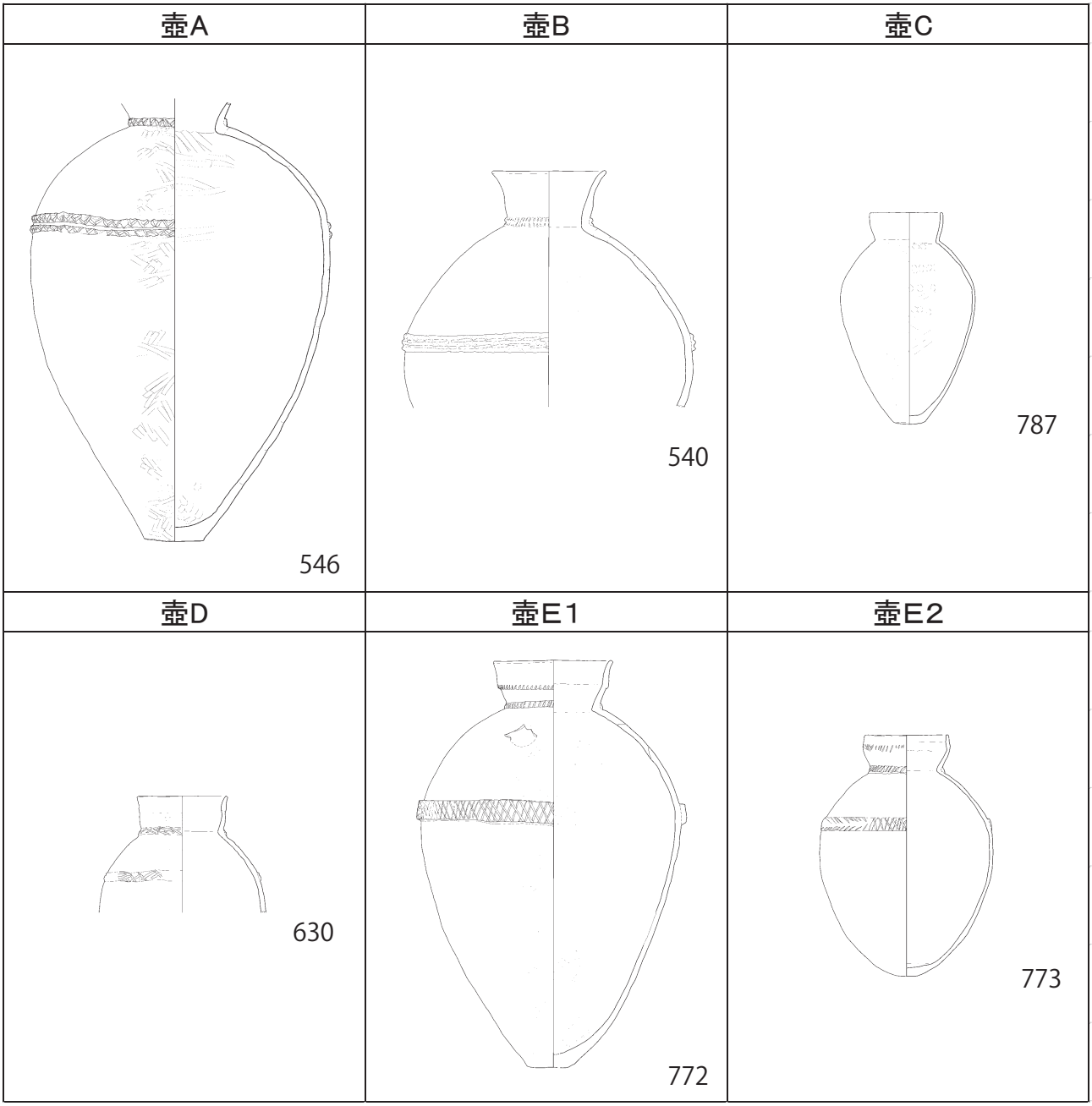
第８表　鉄鏃分類表

型式	類別１	類別２	分類基準
圭頭鏃	圭頭鏃Ⅰ（鏃身長５cm 以下）	a	造りが厚い。
		b	造りが薄い。
		c	刃部下にくびれがなく直線的。
	圭頭鏃Ⅱ（鏃身長５cm 以上，最大幅 2.5 cm以下）	a	刃部長が 0.5 cm以下であり，刃部下にくびれがなく直線的。
		b	刃部長が 1.8 cm以下であり，明確な刃部関をもたない。
		c	刃部長が 1.8 cm以下であり，明確な刃部関をもつ。
		d	刃部長が 1.8 cm以上であり，明瞭な刃部関をもたない。
		e	刃部長が 1.8 cm以上であり，明瞭な刃部関をもつ。
		f	鏃身部長が５cm 以上。
		g	頸部関あるいは山形突起を有する。
	圭頭鏃Ⅲ（最大幅 2.5cm 以上）	a	明瞭な刃部関をもたず，わずかにくびれる。
		b	明瞭な刃部関をもつ。
短頸鏃	短頸鏃Ⅰ		頸部の長さが３cm以下。
	短頸鏃Ⅱ		頸部の長さが３cm以上５cm未満。
長頸鏃	長頸鏃Ⅰ		頸部の幅が６mm以上。
	長頸鏃Ⅱ		頸部の幅が６mm以下。

⑩土器の分類について

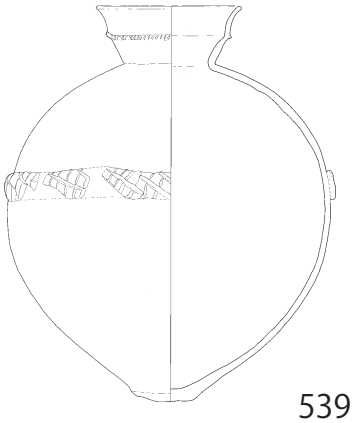
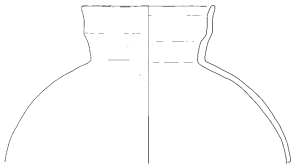
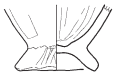
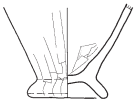
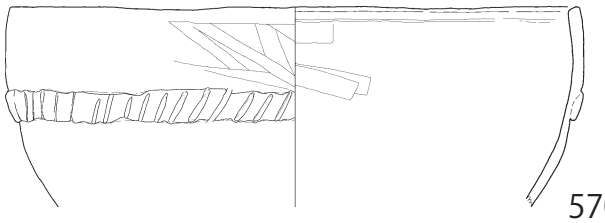
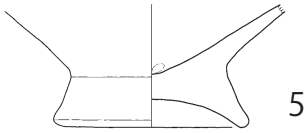
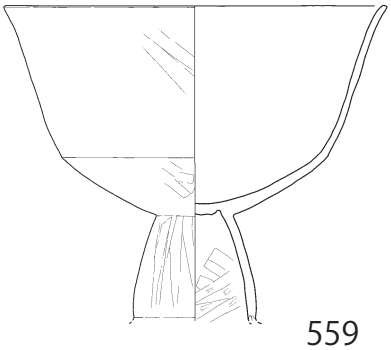
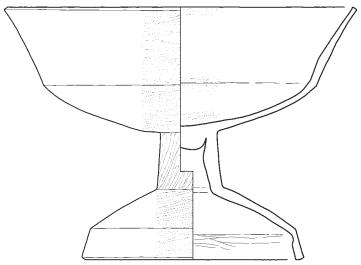
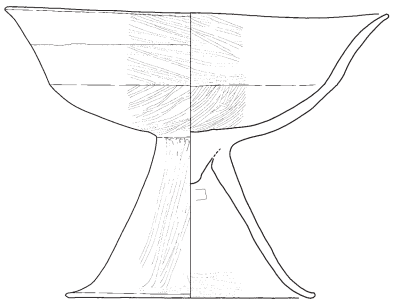
本遺跡の土器群は，古墳時代中期以降の成川式土器の土器群で構成されている。そのため，中村直子（1987，2002）の編年及び分類を判断の基準として分類した。器種は壺型土器（以下，壺と呼ぶ），鉢型土器（以下，鉢と呼ぶ），高坏型土器（以下，高坏と呼ぶ），坩型土器（以下，坩と呼ぶ）等がある。

おおまかに，壺はA ～ Hの８つに分類したが，残存部分の少ないものは，壺H類のように胴部の文様のみで分類したものも含まれる。高坏は，坏部形態で屈曲が強いものはほとんど見られず，緩やかに屈曲するものや丸みを帯びるものがほとんどであった。また，脚部がエンタシス状を呈して裾部分で屈曲するものや，スカート状に広がるものの2種類ある。したがって，口径と坏部形態と脚部形態でＡ～Ｉの９つに分けた。鉢はいずれも脚台付のもので，サイズでＡ・Ｂの２つに分けた。坩は，大きめのものと小さめのものの２つに大別することができる。口縁部形態はやや内湾するものがほとんどで，胴部形態は丸みを帯びるものと，張って稜線が入るものがある。よって，サイズと，口縁部形態と胴部形態でA ～ Fの６つに分類した。詳細は，第42図～第44図と第９表のとおりである。須恵器の年代は，鹿児島大学の橋本達也准教授の指導に従った。



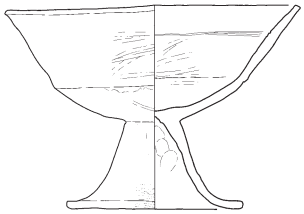
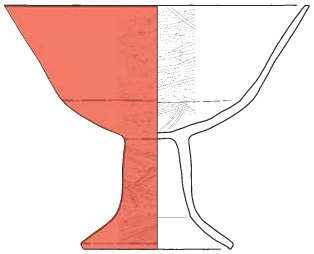
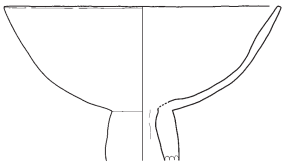
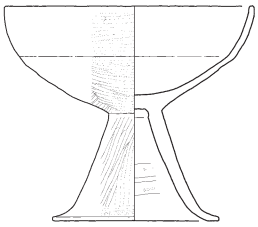
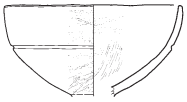
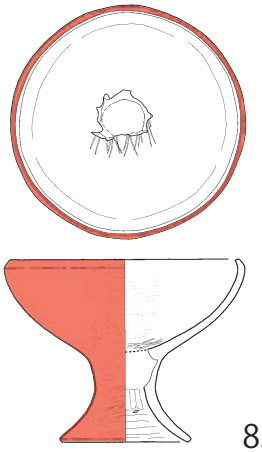
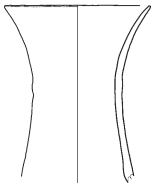
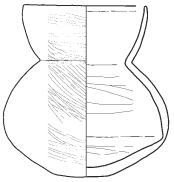
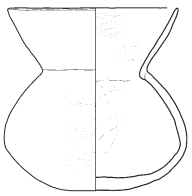
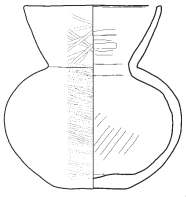
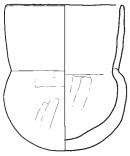
（縮尺　1/12）

第43図　土器分類図(1)

壺F	壺G	壺H
 539	 629	609
鉢A	鉢B	
 533  534	 570  571	
高坏A	高坏B	高坏C
 559	 807	 560

（縮尺　壷：1/12　　鉢・高坏：1/6）

第44図　土器分類図(2)

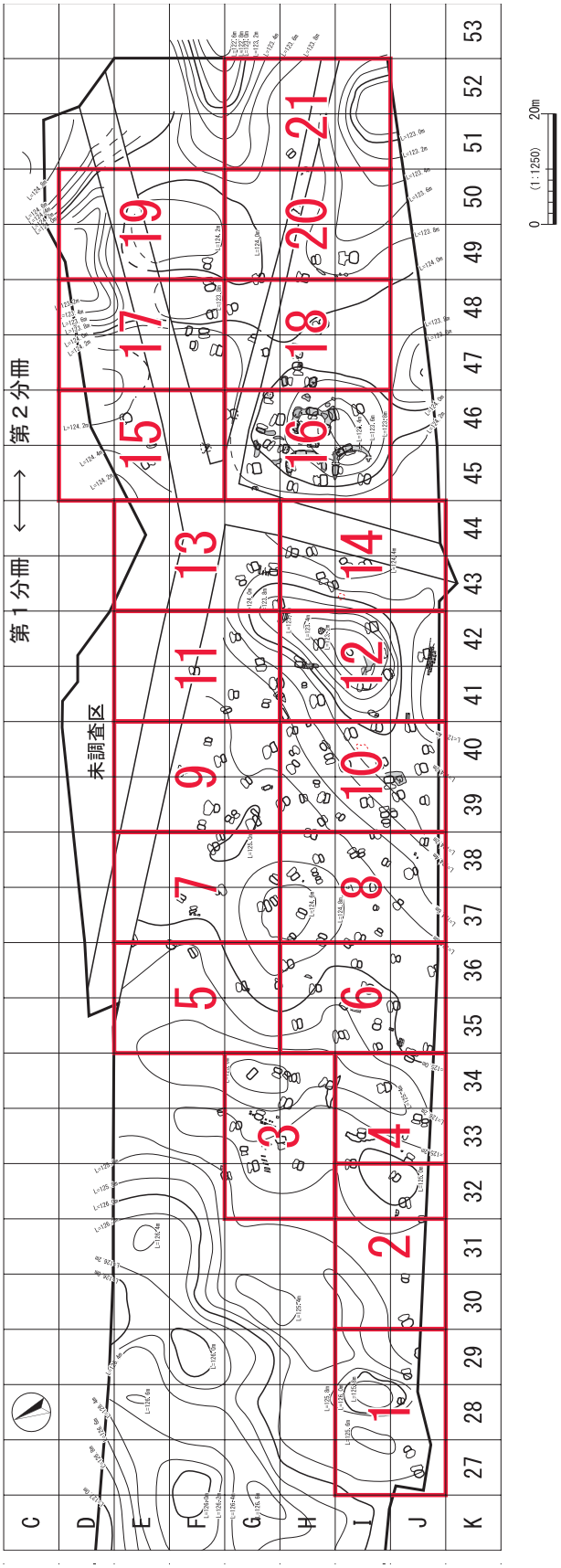
高坏D	高坏E	高坏F
 563	 850	 634
高坏G	**高坏H**	**高坏I**
 778	 796	 852
坩A	**坩B**	**坩C**
 301	 575	 574
坩D	**坩E**	**坩F**
 599	 173	815

（縮尺　1/6）

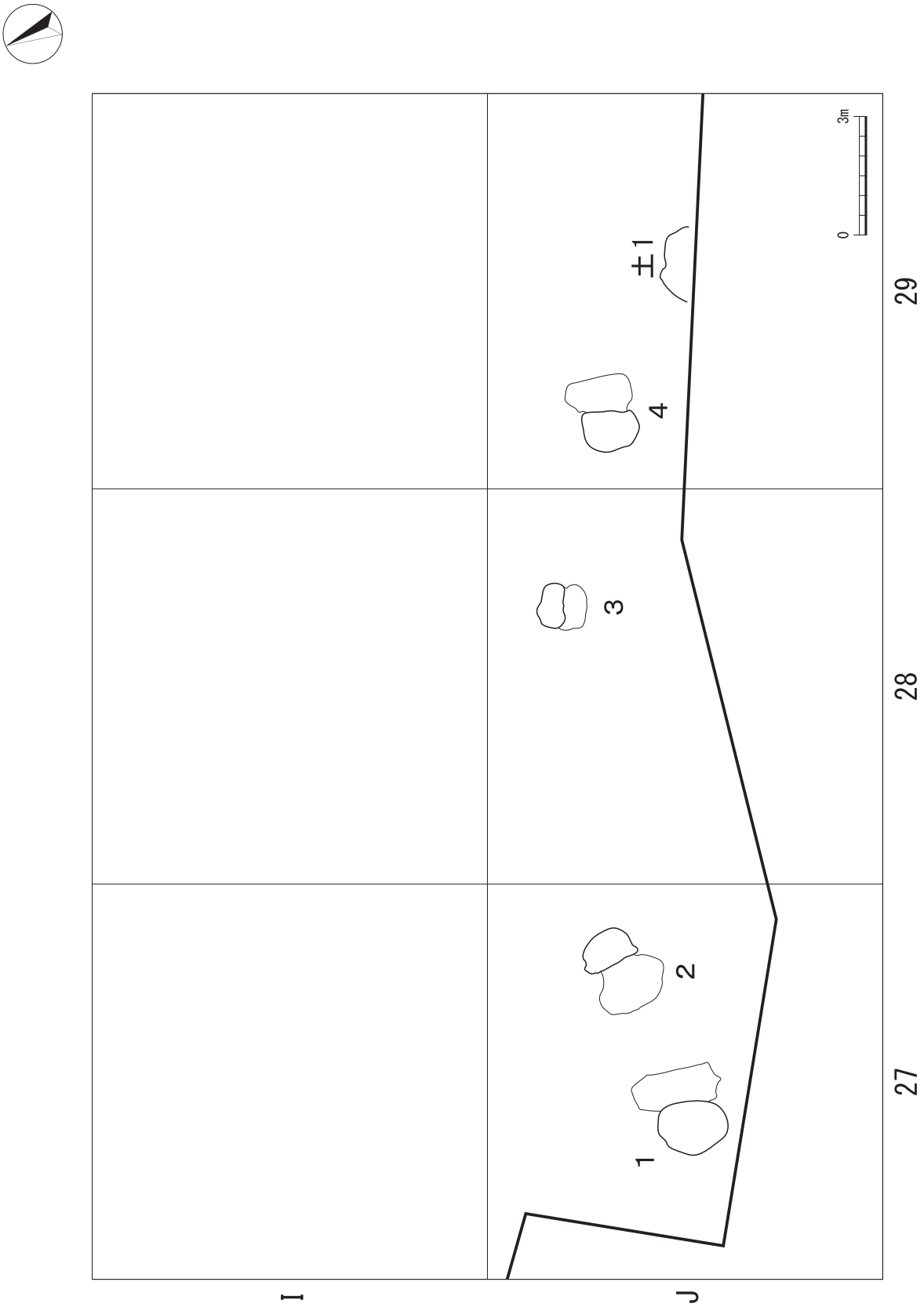
第45図　土器分類図(3)

第９表　土器分類表

器種	分類１	分類２	分類の説明
壺		A	頸部に突帯を１条，胴部に２条突帯もしくは幅広突帯に併行沈線を引いたものを有する。口縁部形態が欠損しているが，文様形態から，壺Ｂかもしくは壺Ｅに繋がっていく祖形と思われる。
	直口縁	B	大型の直口縁壺。
		C	単口縁の壺。
		D	口縁部下半は膨らみ，いい端部にかけて外反する。
	二重口縁	E	長胴気味のもので，頸部に突帯を有する。
			1 大型のもの。
			2 小型のもの。
		F	胴部形態が球形胴状を呈するもの。
		G	無紋のもの。
		H	胴部幅広突帯竹管文を施す。
鉢	脚台をもつもの。		
	A		小型のもの。
	B		大型のもの。
高坏	A		口径 30 ㎝程。坏部が深く，口縁部がやや外反する。脚部はエンタシス状を呈する。
	B		口径 25 ㎝～ 30 ㎝程。坏部屈曲が坏部の中程で屈曲する。
			1 有段脚高坏。
			2　口縁部は直線的に外傾する。
	C		口径 30 ㎝程。坏部が緩やかに屈曲する。
			1　坏部屈曲部からやや外反して開く。脚部はスカート状に開く。
			2　口縁部は直線的に外傾する。
	D		坏部が坏部高中心よりやや下で弱く屈曲し，外面に段を有する。脚部がスカート状に湾曲して開く。中村Ｃａ３型式に相当する。
	E		口径 25 ㎝程。坏部は弱く屈曲し，口縁部は直線的に開く。細い脚台を持ち，裾はスカート状に開く。
	F		坏部が丸みを帯び，口縁部は直線的に伸びる。
	G		坏部が丸みを帯び，口縁部は内湾する。
	H		坏部高の中程に沈線を有する。
	I		坏部が丸みを帯び，口縁端部が内傾する。脚部はスカート状に開く。
坩	A		頸部が長く，外反する。
	B		器高15㎝程の大きめのもの。口縁部が内湾しながら伸び,胴部は下膨らみを呈する。平底。
			1　屈曲部内面に明瞭な稜線を有する。胴部は丸みを帯びる。
			2　口縁部は直線的に外傾する。
	C		口径･器高ともに14㎝程の大きめのもの。口縁部は直線的に伸び,下膨らみを呈する。平底。
	D		口径10㎝,器高14㎝程の大きめのもの。口縁部はやや内湾しながら伸び,肩部が張る。平底。
	E		口径･器高ともに10㎝未満程の小さめのもの。口径と胴部最大径がほぼ同じくらいのもの。胴部は丸みを帯びる。
			1　口縁部はやや内湾しながら上に伸びる。
			2　口縁部と胴部高がほぼ同じくらいで，扁球状を呈する。丸底。
			3　口縁部高の方が胴部高よいり短くなり，胴部は下膨らみを呈する。
			4　口縁部は短くなり，胴部は下膨らみを呈し，明瞭な稜線が入る。平底。
	F		口径・器高ともに 10 ㎝程の小さめのもの。口縁部は丸みを帯びながら伸び，肩部が少し反るように張る。平底。



第46図　立小野堀遺跡エリア区分図



第47図　エリア１　遺構配置図

１号地下式横穴墓

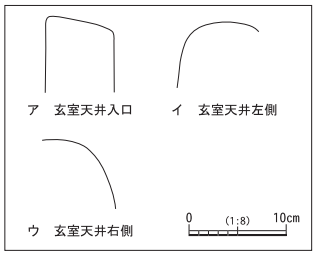
検出区	J-27	玄室開口方向	東南東
分　類	A		

検出状態	竪坑上半部は縦横に攪乱を受けているが，玄室部分には達していない。周辺にⅢ層が残存しているが遺物はみられない。

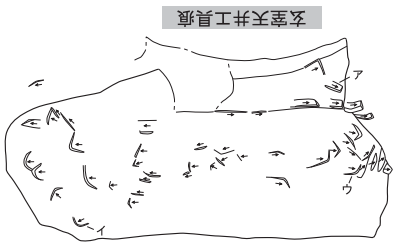
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	140	180	115	104	40	18	98	226	116	48
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

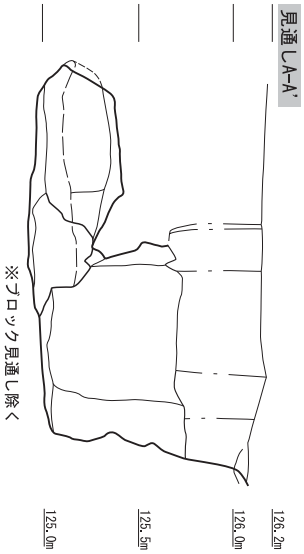
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	六角形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	長方形（家形に近い）		
閉塞推定	土塊	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	あり

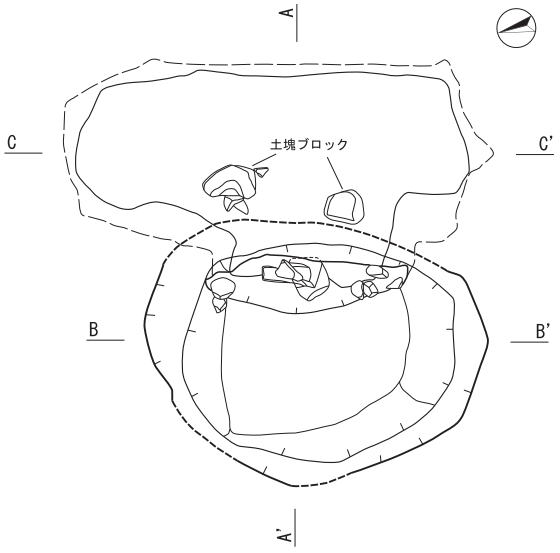
概　要	【竪坑】 床面は平坦であり，羨道部がわずかに下がる。埋土①・②・③は掘り返し痕と考えられ，埋土③と⑤は硬さが明らかに異なる。埋土③は，Ⅷ・X層のブロック状の土が多い。玄室内及び羨道入口付近には，径20cm以上のⅦ・Ⅷ層ブロックが多く入っている。ブロックの位置や埋土状況から，土塊閉塞と考えられる。 【玄室】 比較的横に広く大きい玄室をもつが，玄室内に副葬品等は確認されなかった。羨道と玄室の境界には明瞭な稜をもつ。
工具痕	天井部分に残存していた。中央から左右方向に掘削した痕跡が確認でき，羨道天井には方形状のもの，玄室天井には幅約10 cmのU字形状の工具による痕跡が多い。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

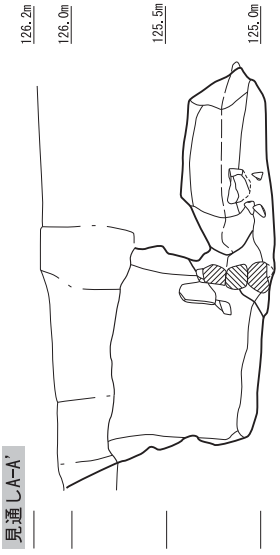


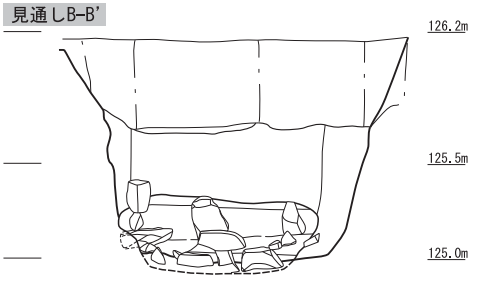
工具痕実測図

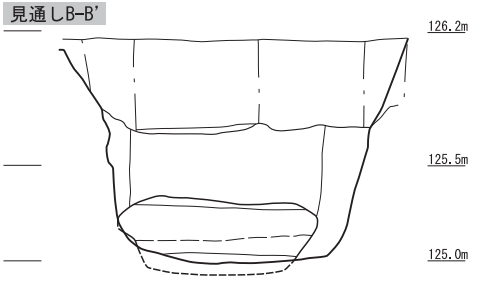


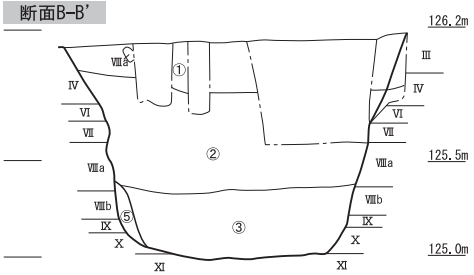


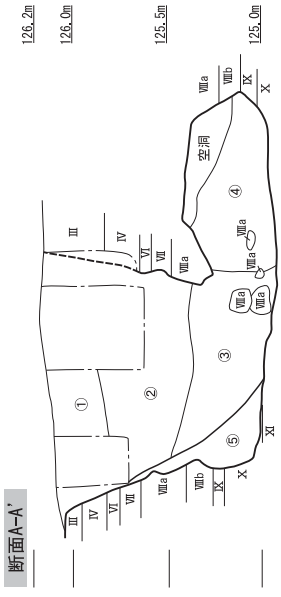












① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（1cm 以下）を約 5% 含む黒色土。
黒色土はⅢ・Ⅳ層の土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（15cm 以下）を約 50%
含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅹ層ブロック（5cm 以下）を約 20%, Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 粒
・ブロック（大型多く含む）を約 40% 含む黒色土。
しまりなし。大型のブロックは，閉塞用に使用されたと考えられる。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 10%, Ⅹ層の粒（2cm 以下）を約 10% 含む黒色土。上層ほど軟らかい。
ほぐれた状態。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 40%, Ⅸ・Ⅹ層を約 40% 含む黒色土。しまり有り。

0　（1：40）　1m

第48図　1号地下式横穴墓

2号地下式横穴墓

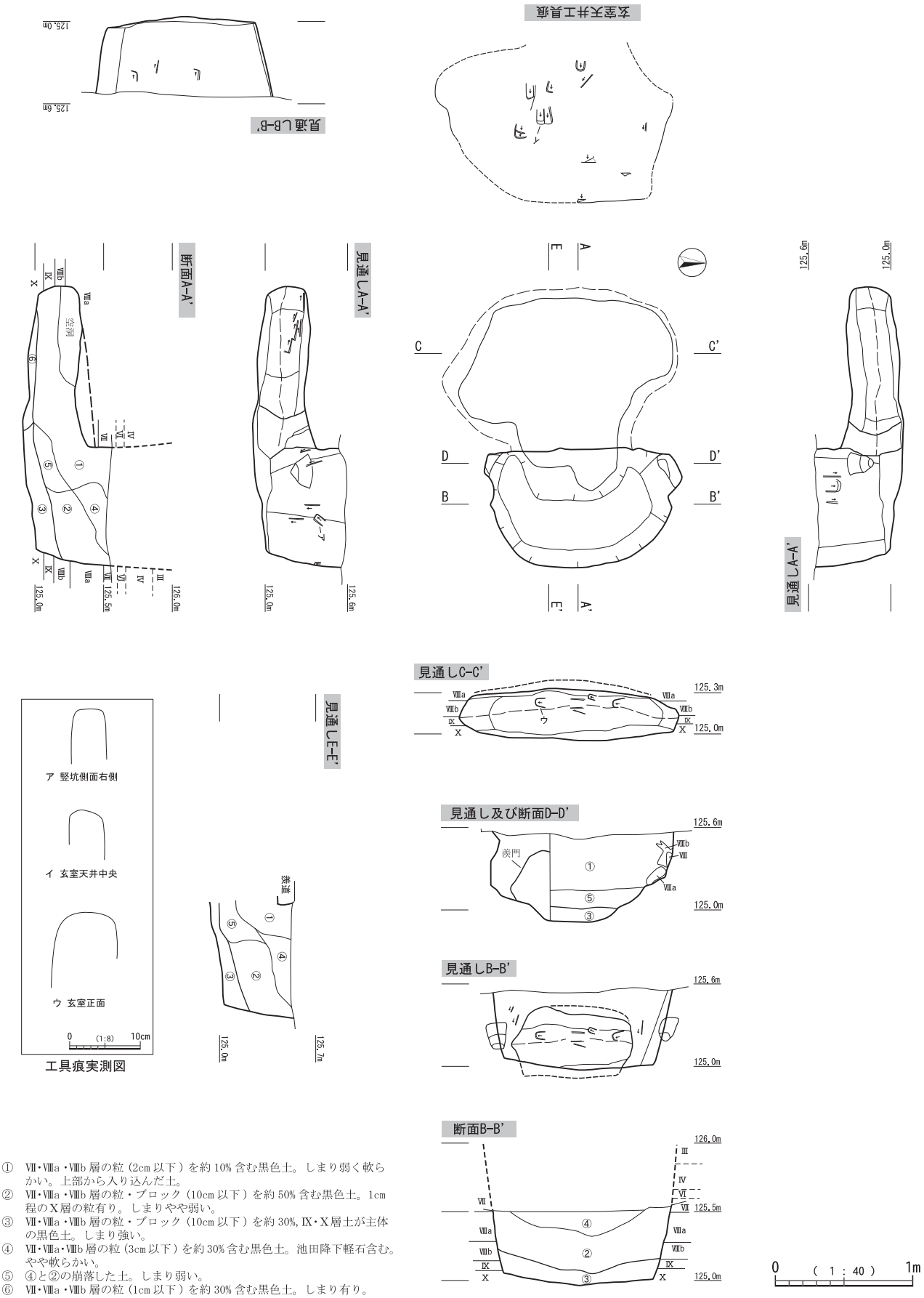
検出区	J-27	玄室開口方向	西
分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層上面で検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	86	132	58	88	46	17	104	168	121	34
推　定	90	140	105	－	50	－	－	－	－	45

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形（やや楕円形に近い）	羨門正面形	六角形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形（やや不整形）		
玄室床面層	X	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 平面形は楕円形に近いいびつな方形である。また，羨道部分がやや低い。羨道入口の左右には幅20cm程度の抉りがみられ，閉塞に関連するものと考えられる。また，断面Ｄにおける羨道左手前の段差と埋土③の上面の高さはほぼ同じであり，この面が閉塞時の床面の可能性が高い。埋土①・⑤は軟らかく，断面Ｄの右端には，Ⅶ・Ⅷ層のブロックがみられる。羨道入口の抉り，およびⅦ・Ⅷ層のブロックは閉塞に関係するものと考えられる。 【玄室】 平面形は左手前や右奥側がやや張り出しており，全体的に不正形である。竪坑から崩落土が流入したことから，天井部が土圧で変形し，断面形状で見ても凹んでいる。
工具痕	竪坑側壁に下方向へ，玄室内の天井や側壁に奥に向け削った痕跡が確認できる。 方形状とＵ字形の工具痕が竪坑・玄室ともにみられるが，切り合いは確認できない。
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。年代測定では，332calAD-421calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（2cm 以下）を約 10% 含む黒色土。しまり弱く軟らかい。上部から入り込んだ土。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm 以下）を約 50% 含む黒色土。1cm 程のⅩ層の粒有り。しまりやや弱い。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm 以下）を約 30%，Ⅸ・Ⅹ層土が主体の黒色土。しまり強い。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を約 30% 含む黒色土。池田降下軽石含む。やや軟らかい。
⑤ ④と②の崩落した土。しまり弱い。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（1cm 以下）を約 30% 含む黒色土。しまり有り。

第49図　２号地下式横穴墓

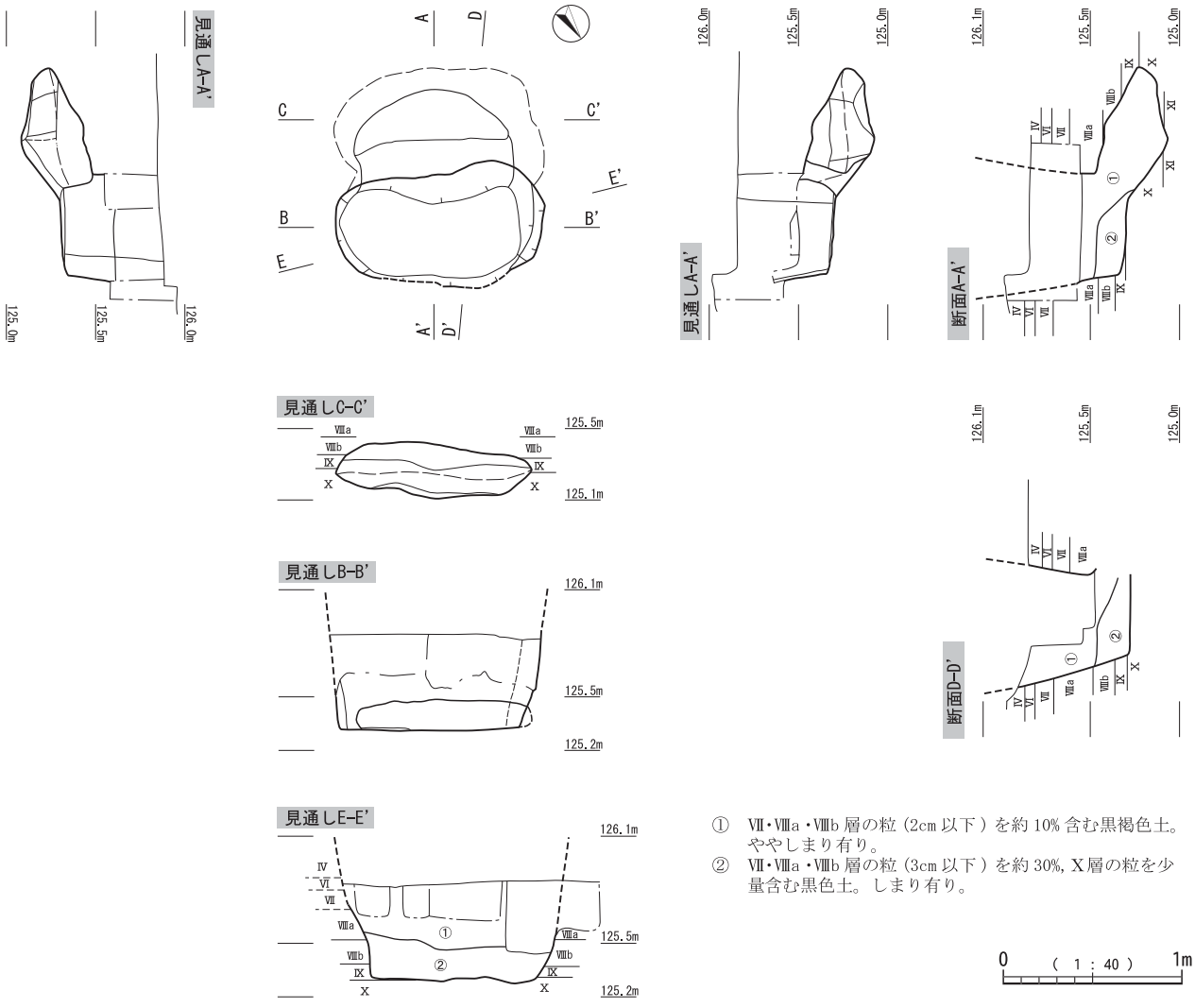
３号地下式横穴墓	検出区	J-28	玄室開口方向	南西
	分　類	C		

検出状態	ほぼ全面に攪乱を受けており，包含層掘り下げ時に検出された。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	60	115	27	92	24	14	64	114	78	38
推　定	80	135	85	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形 （やや楕円形に近い）	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形（不整形）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	不明

概　要	【竪坑】 ほぼⅧ層上面まで攪乱を受けており，上半部は削平されている。床面付近の埋土②は，Ⅶ・Ⅷ層の割合が埋土①より高い。埋土②はしまりが強く，閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 玄室が竪坑より一段深い構造のため，玄室は攪乱を受けていなかった。小型であり，竪坑床面より玄室床面が 30cm 程低い。平面形は楕円形であり，最大幅と羨道の幅はほぼ同じである。そのため，埋土は竪坑とほぼ同じ埋土である。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（2cm 以下）を約 10% 含む黒褐色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を約 30%，X層の粒を少量含む黒色土。しまり有り。

0 （1：40） 1m

第50図　３号地下式横穴墓

4号地下式横穴墓

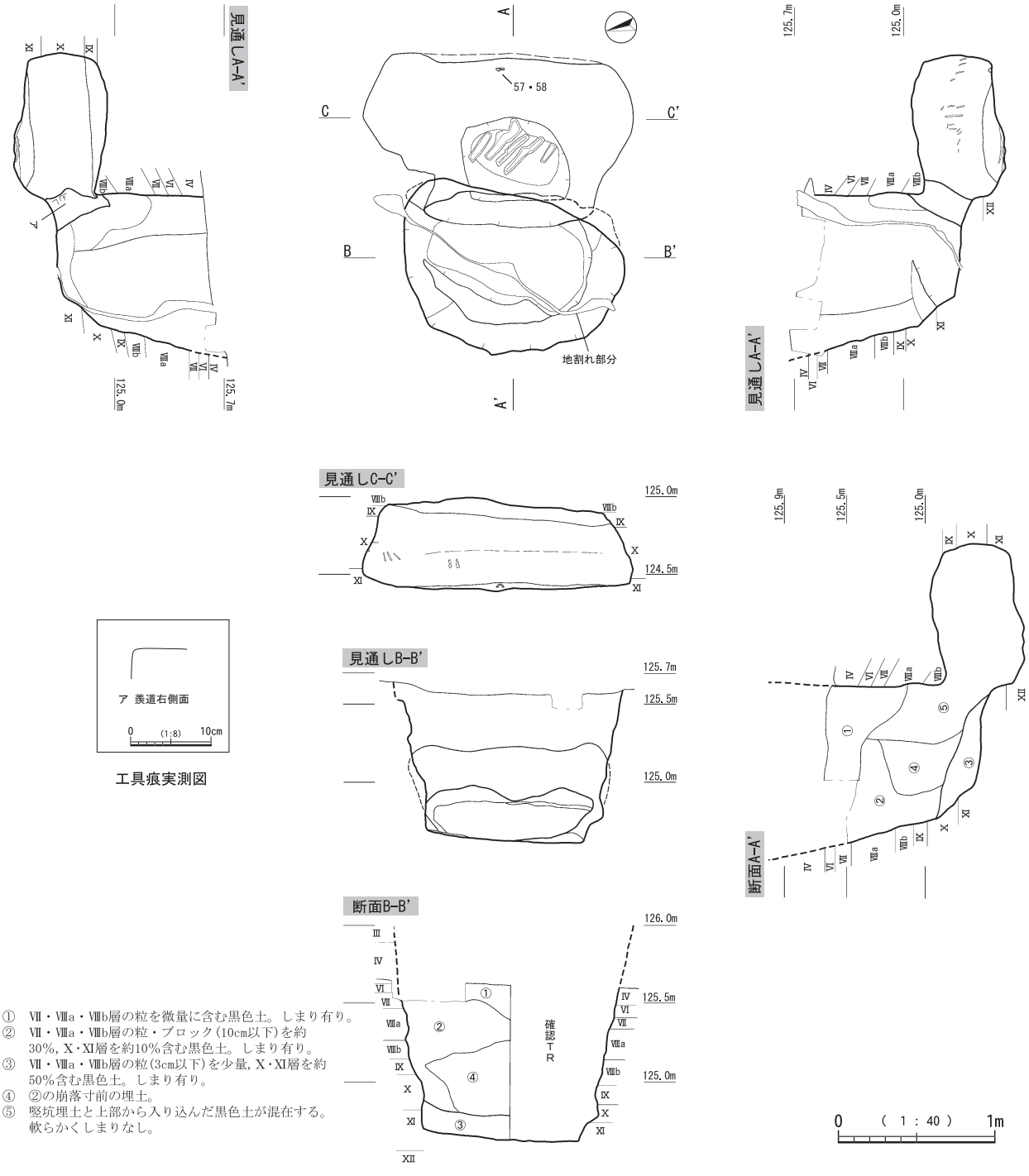
検出区	J-29	玄室開口方向	東
分　類	A		

検出状態	調査区南境で検出された。攪乱は比較的少ない。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	100	140	98	110	40	20	84	172	104	57
推　定	110	155	135	－	－	－	－	－	－	－

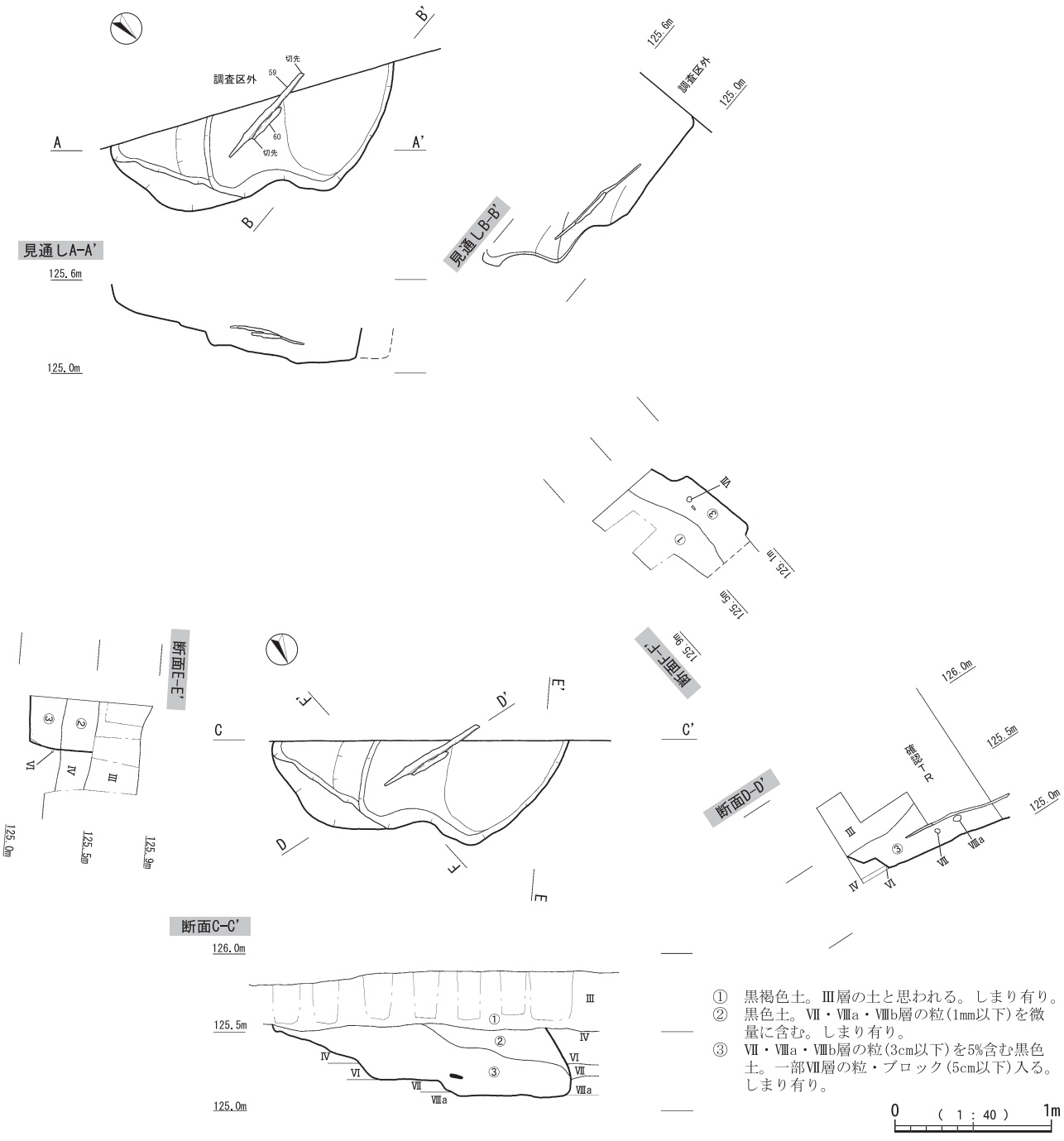
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	不整形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形（やや楕円形に近い）		
玄室床面層	XII	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 平面形はやや不整形な楕円形である。埋土の特徴から，埋土③が閉塞時の床面と考えられ，埋土④・⑤はしまりがなく，一部が玄室に向かって崩落している。竪坑には，地割れ状の亀裂が入っており，その両側で層位がずれている。 【玄室】 玄室は竪坑より深い構造のため，良好な状態で残存していた。左側にやや張り出す形状で，右側はゆるやかである。X・XI層部分を中心に構築されているが，竪坑中には該当する埋土が少ないため，その多くは地表面に残された可能性がある。玄室床面が竪坑床面より30cm程度低く，土が入りやすい構造のため，調査時には天井まで埋土が堆積していた。玄室内で鉄釧が１点出土した。羨門付近の床面は一段深くなっており，工具痕が筋状に観察された。
工具痕	幅は約５cm以上の方形状の工具痕が，羨道右側面にみられた。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄釧１点が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒を微量に含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%, X・XI層を約10%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量, X・XI層を約50%含む黒色土。しまり有り。
④ ②の崩落寸前の埋土。
⑤ 竪坑埋土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。軟らかくしまりなし。

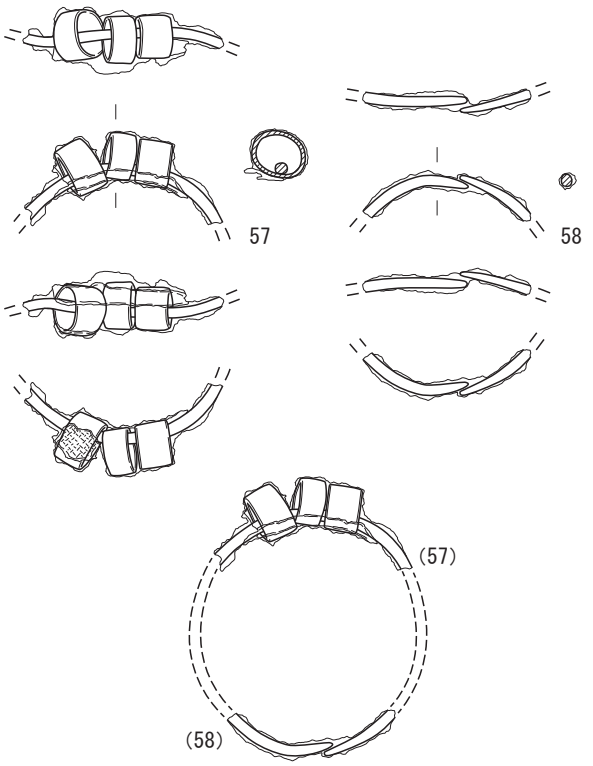
第51図　４号地下式横穴墓



① 黒褐色土。Ⅲ層の土と思われる。しまり有り。
② 黒色土。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1mm以下)を微量に含む。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を5%含む黒色土。一部Ⅶ層の粒・ブロック(5cm以下)入る。しまり有り。

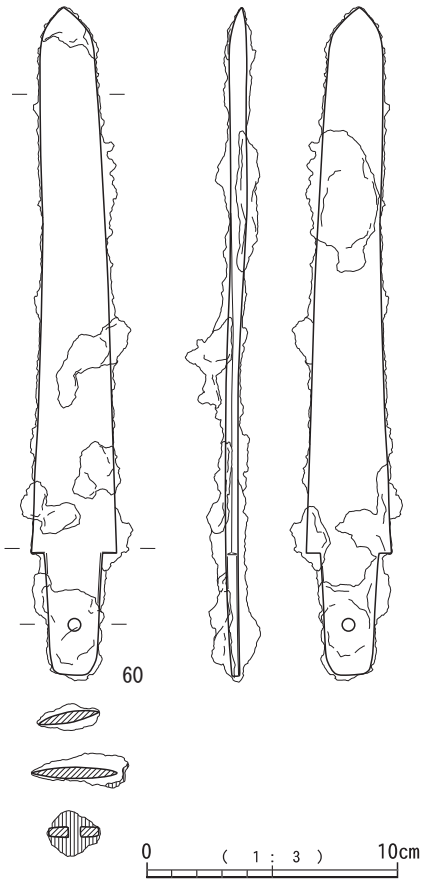
0 (1 : 40) 1m

第52図　１号土坑墓

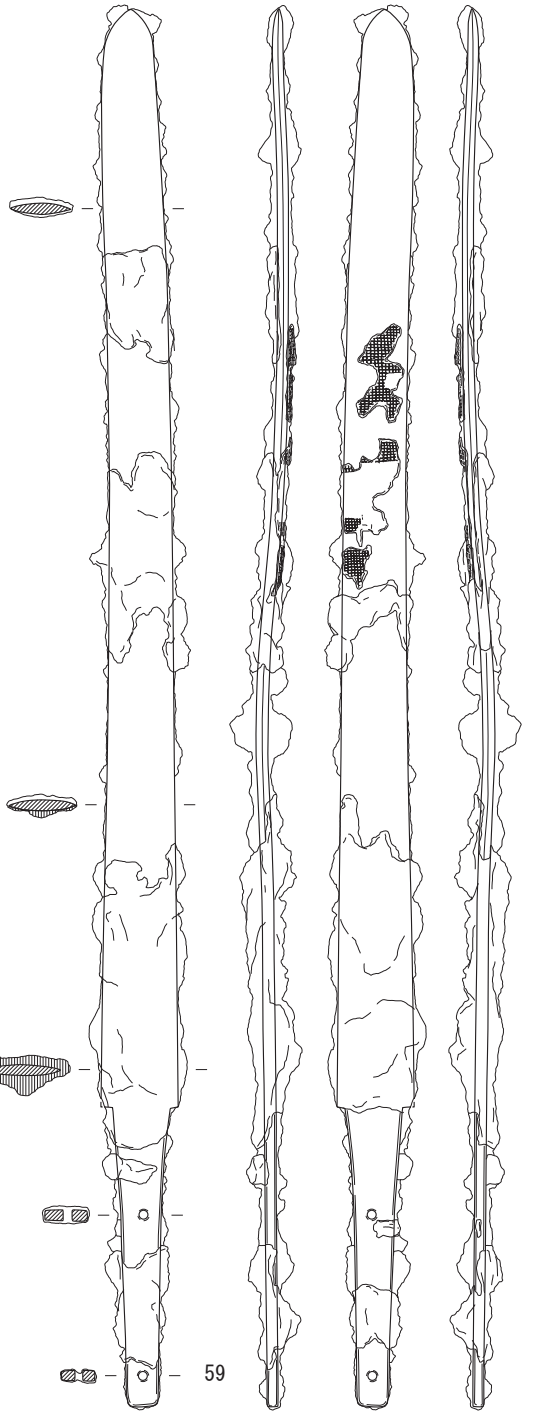


鉄釧模式図

0 (1 : 2) 5cm



0 (1 : 3) 10cm



0 (1 : 4) 10cm

57・58　４号地下式横穴墓
59・60　１号土坑墓

第53図　４号地下式横穴墓・１号土坑墓出土鉄器

１号土坑墓（第52図）

Ｊ－29区で検出した。調査区外と接する部分を掘り下げ，調査区境との断面にⅦ・Ⅷ層が混在する部分があることを確認した結果，検出することができた。床面はⅧa層まで掘り込まれている。５基の土坑墓のうち，掘り込みが最も浅い。

副葬品の鉄剣（59）は床面より20cmほど上位で出土したことから，鉄剣を墓に納める前に床面に土が敷かれた可能性がある。未検出部分が調査区外に延びるため，正確な形状や規模は不明である。土坑墓内から出土した鉄剣と短剣（60）の切先は逆位となっていた。副葬品は他の土坑墓に比べて充実している。わずかに残る壁面と底面に工具痕はみられなかった。赤色顔料・炭化物も未検出である。

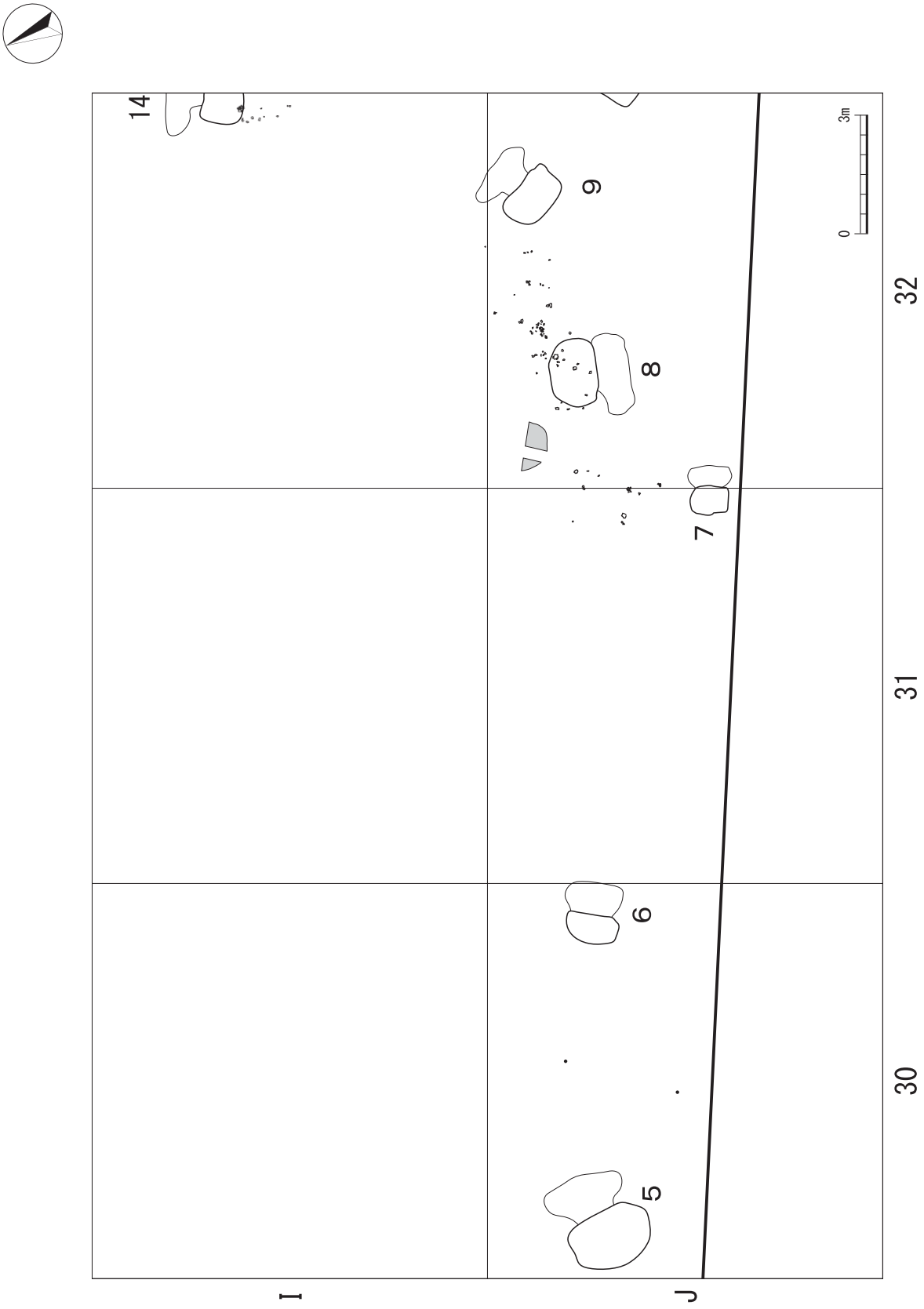
エリア１出土鉄器（第53図）
４号地下式横穴墓（第53図）

鉄器は57・58の鉄釧が出土した。57と58は同一個体である。57は鉄釧に遊環を３点通した状態で銹着していた。鉄釧部分は一部欠損しており，断面は円形である。遊環は，幅約８mm，厚さ１mmの帯状の鉄板を環状に加工する。合わせ方は，状態が悪いため観察できなかった。遊環の一部に銹化した布の痕跡がみられる。顕微鏡での観察から，平織の布であることが確認されている。58は鉄釧の端部である。断面は円形で最大厚３mmを測り，端部に向かって細くなる形状である。端部が一部重なっており，鉄釧部分を曲げ伸ばしすることで着脱していたと考えられる。一部に銹化した布の痕跡がみられる。顕微鏡での観察から，絹製の可能性が指摘されている。57の内面に帯状に凹んだ銹の痕跡が確認できるが，福岡県立アジア文化交流センター研究員の小嶋篤氏の指導により，「革釧」の可能性があることが指摘された。鉄釧と革釧を重ねて装着した状態で埋葬されたと考えられる。また，付着した布に関しても，鉄釧に伴うものではなく，被埋葬者の衣服が付着した可能性が高いと指摘された。小嶋氏の指導では，九州山地以南に分布の中心がある「遊環付円環状鉄釧」であり，鉄釧の分布域の南限に位置していることから，現状で日本最南端の鉄釧であることも指摘された。

遊環の合わせ方の検討のため，九州国立博物館の協力によりＸ線ＣＴスキャンをおこない遊環の断面を観察したが，銹化が進行しており確認できなかった。

１号土坑墓（第53図）

鉄器は鉄剣１点，短剣１点が出土した。59は鉄剣である。刃部に銹による歪みが生じている。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の一部に銹化した平織布が付着するが，明瞭な木質は認められないため，鞘木はなく布を巻くなどして副葬したと考えられる。関部は一方が欠損するものの，深さ約５mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。目釘孔は２孔確認できる。茎部に木質とみられる有機質が付着するが，状態が悪く詳細は不明である。また，全体に有機質が付着した痕跡がみられるが，材質は不明である。60は短剣である。切先に銹による歪みが生じている。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部は深さ約５mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。全体に有機質とみられるものが付着するが，材質は不明である。



第54図　エリア２　遺構配置図

５号地下式横穴墓

検出区	J-30	玄室開口方向	東
分　類	Ｂ１		

検出状態　表土直下のわずかにⅦ・Ⅷ層が混在する黒色土を取り除き検出した。玄室天井は崩落しかかっており，調査中に羨道付近が崩落した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	144	210	120	100	38	38	76	206	114	－
推　定	－	－	－	－	50	－	－	－	－	50

竪坑最下層	X	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	逆台形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要

【竪坑】
　平面形は楕円形で幅広く，他の竪坑に比べて竪坑の立ち上がりの角度が緩い。このような形状を呈する竪坑は，この墓のみである。竪坑から玄室はわずかに傾斜する。検出面で須恵器が１点出土した。

【玄室】
　やや右側に傾いた隅丸長方形であり，右側には羨道との境部分に稜がみられる。Ⅷ～Ⅹ層部分を主体に構築されているが，その土が竪坑埋土中に少なく，地表に残されたものと推察される。玄室天井は調査中に崩落した。入口付近から中央部にかけては，Ⅶ・Ⅷ層土が敷かれ屍床面が構築されている。玄室左側に鉄刀と刀子が副葬されていた。

工具痕　玄室天井に，羨道から玄室中央の奥や右奥方向，中央から右方向に掘削した痕跡が確認できる。幅の広いU字形のものが多く，明瞭な切り合いはない。

赤色顔料　玄室埋土から水銀朱を検出した。

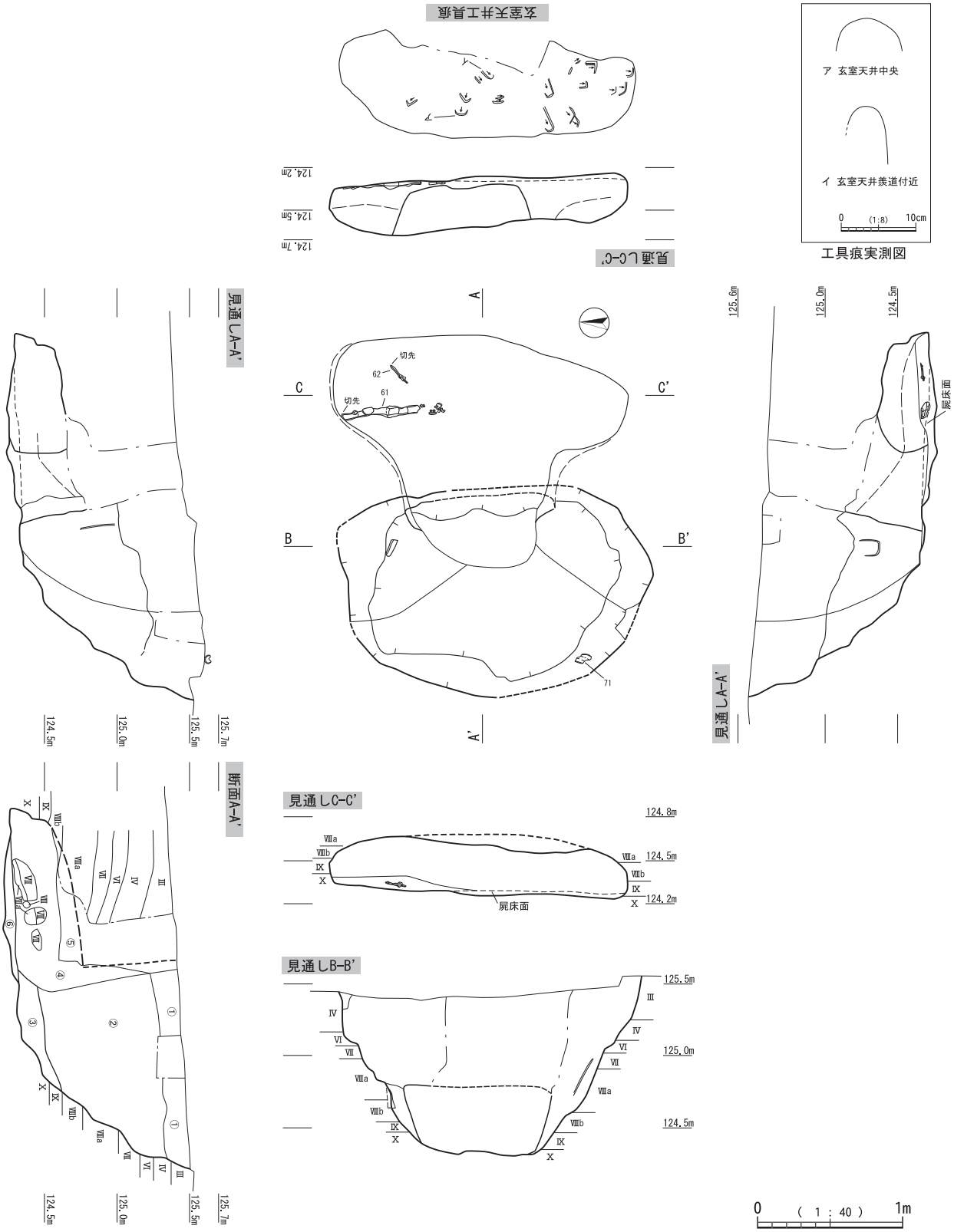
炭化物　未検出

人　骨　未検出

出土遺物

竪坑上面	竪坑検出面から須恵器の瓶片（71）が１点，攪乱を受けていた部分からも同じく須恵器の瓶片が３点（77・78・79）出土した。
竪坑埋土内	なし
玄室内	鉄刀１点，刀子１点が出土した。

備　考　－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（1cm 以下）を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm 以下）を約 30% 含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 70% 含む黒色土。Ⅸ層ブロックみられる。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を少量含む黒色土。軟らかい。竪坑が崩落した土と上部から入り込んだ土が混在する。
⑤ 崩落前の天井。しまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 80% 含む黒色土。しまり有り。屍床と思われる。

第55図　５号地下式横穴墓

6号地下式横穴墓

検出区	J-30	玄室開口方向	南東
分　類	C		

検出状態	遺構の上部は大きく攪乱を受けていた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	79	126	104	100	−	8	64	144	72	−
推　定	85	−	−	−	50	−	−	−	−	55

竪坑最下層	Ⅷb	竪坑平面形	隅丸長方形（やや楕円形に近い）	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅵ・Ⅶ	玄室平面形	長方形（やや楕円形に近い）		
玄室床面層	Ⅸ	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要

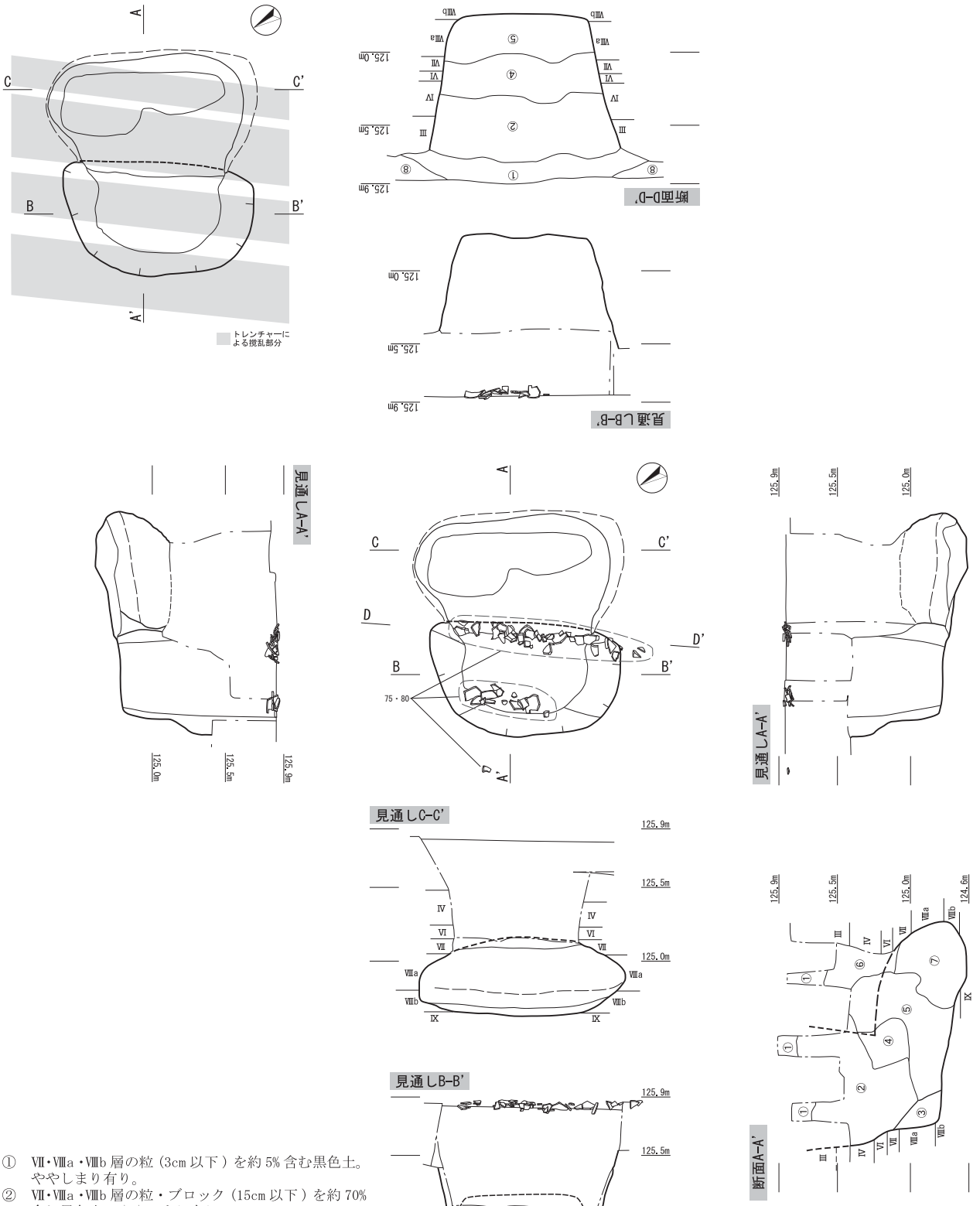
【竪坑】
　上部では攪乱を受けていない範囲で須恵器等が多く出土した。周辺の攪乱が激しく，遺構に伴うものか判断できなかったため，包含層出土とした。埋土にはⅦ・Ⅷ層の土が多く入っている。玄室はⅦ・Ⅷ層を中心に構築されていることから，遺構構築時の排出土が埋め戻しに用いられたと考えられる。

【玄室】
　竪坑と玄室の横幅はほぼ同じであった。天井は崩落しているが，床面などにⅥ・Ⅶ層の崩落土が見られず，埋土⑥はⅢ・Ⅳ層で構成されることなどを考えると，玄室天井はⅣ層付近であったと推定される。

工具痕	玄室中央奥へ向かって削った跡はあったが，幅などは不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出

出土遺物	
竪坑上面	坩の口縁部片（75），須恵器の甕（80）等が出土した。
竪坑埋土内	なし
玄室内	なし

備　考	−



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を約 5% 含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（15cm 以下）を約 70% 含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 90% 含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（15cm 以下）を約 60% 含む黒色土。ややしまり有り。②の崩落した土と天井が崩落した土が混在すると思われる。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（15cm 以下）を約 30% 含む黒色土。ややしまり有り。②が崩落した土と天井が崩落した土が混在すると思われる。軟らかい。
⑥ 黒色土。Ⅲ・Ⅳ層と思われる。ややしまり有り。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を少量含む黒色土。天井が崩落した土と竪坑が崩落した土が混在する。軟らかい。
⑧ 黒色土。Ⅲ層と思われる。

第56図　６号地下式横穴墓

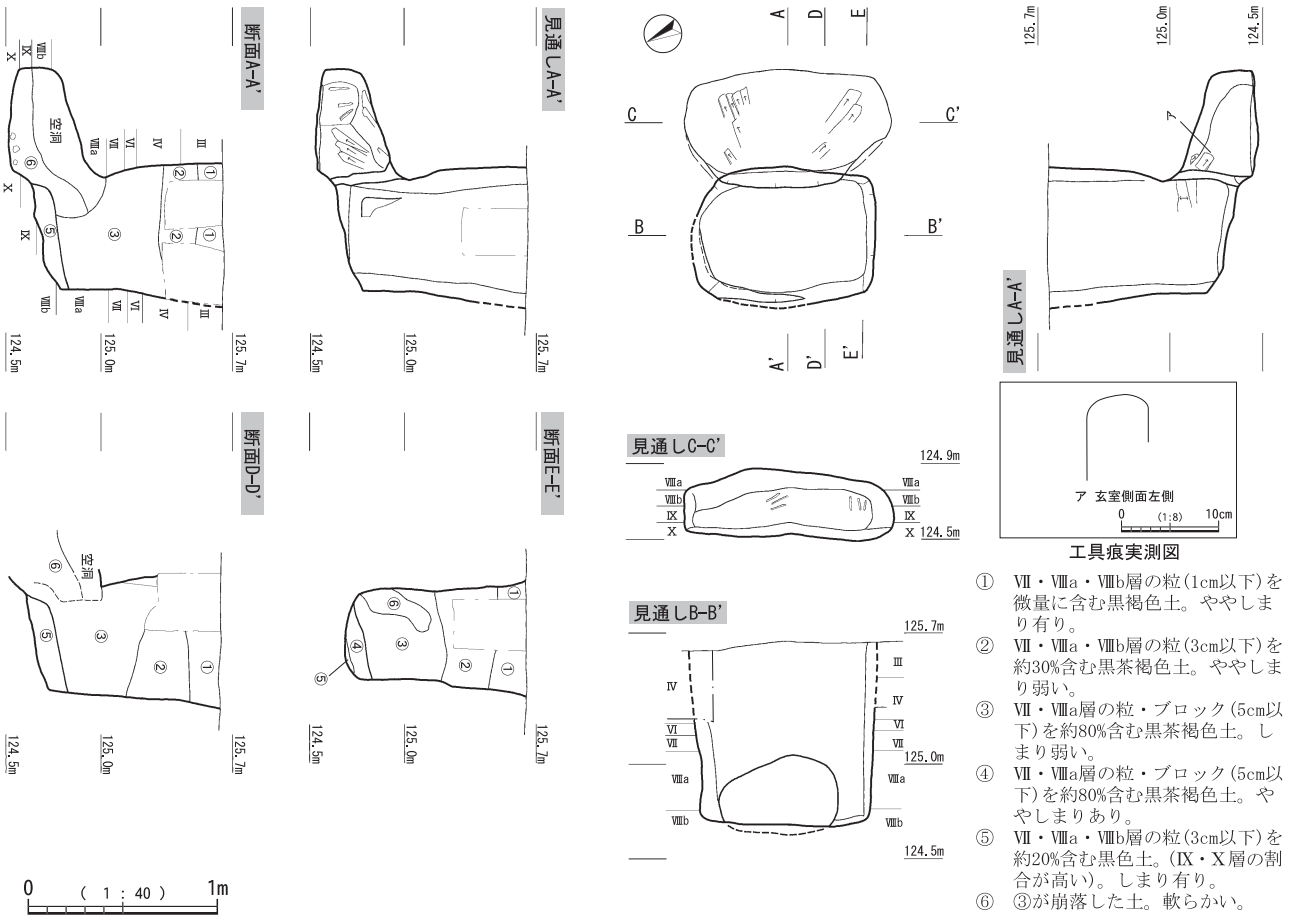
7号地下式横穴墓	検出区	J-31・32	玄室開口方向	東南東
	分　類	C		

検出状態	調査区境を掘削中に空洞を確認し，検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	76	98	96	62	40	－	58	110	58	36
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	Ⅷb	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不整形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 平面形は右側が直線的であるのに対し，左側がややふくらむ。床面に向かってほぼまっすぐに掘り込まれている。竪坑床面付近の埋土⑤は，Ⅸ・X層の土を多く含み，この層は玄室が造られている層であるため，玄室構築時の排出土と考えられる。埋土⑥は軟らかく，閉塞材が消失した後に竪坑の土が入り込んだと考えられる。 【玄室】 竪坑より一段深い位置に構築されている。天井は残存しており，上半部は空洞であった。竪坑と玄室の横幅はほぼ同じであり，平面での規模も同程度である。玄室は比較的小型であるが，工具痕を多数確認できた。
工具痕	玄室床面や側面に，羨門前から奥方向に向けて掘削した痕が多く残っていた。幅がほぼ一致することから，方形状の同一工具の可能性が高い。工具痕の方向から，竪坑に座る，あるいはしゃがんだ状態で玄室全体を掘削したと思われる。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



工具痕実測図

① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒褐色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約30%含む黒茶褐色土。ややしまり弱い。
③ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(5cm以下)を約80%含む黒茶褐色土。しまり弱い。
④ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(5cm以下)を約80%含む黒茶褐色土。ややしまりあり。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。(Ⅸ・Ⅹ層の割合が高い)。しまり有り。
⑥ ③が崩落した土。軟らかい。

第57図　７号地下式横穴墓

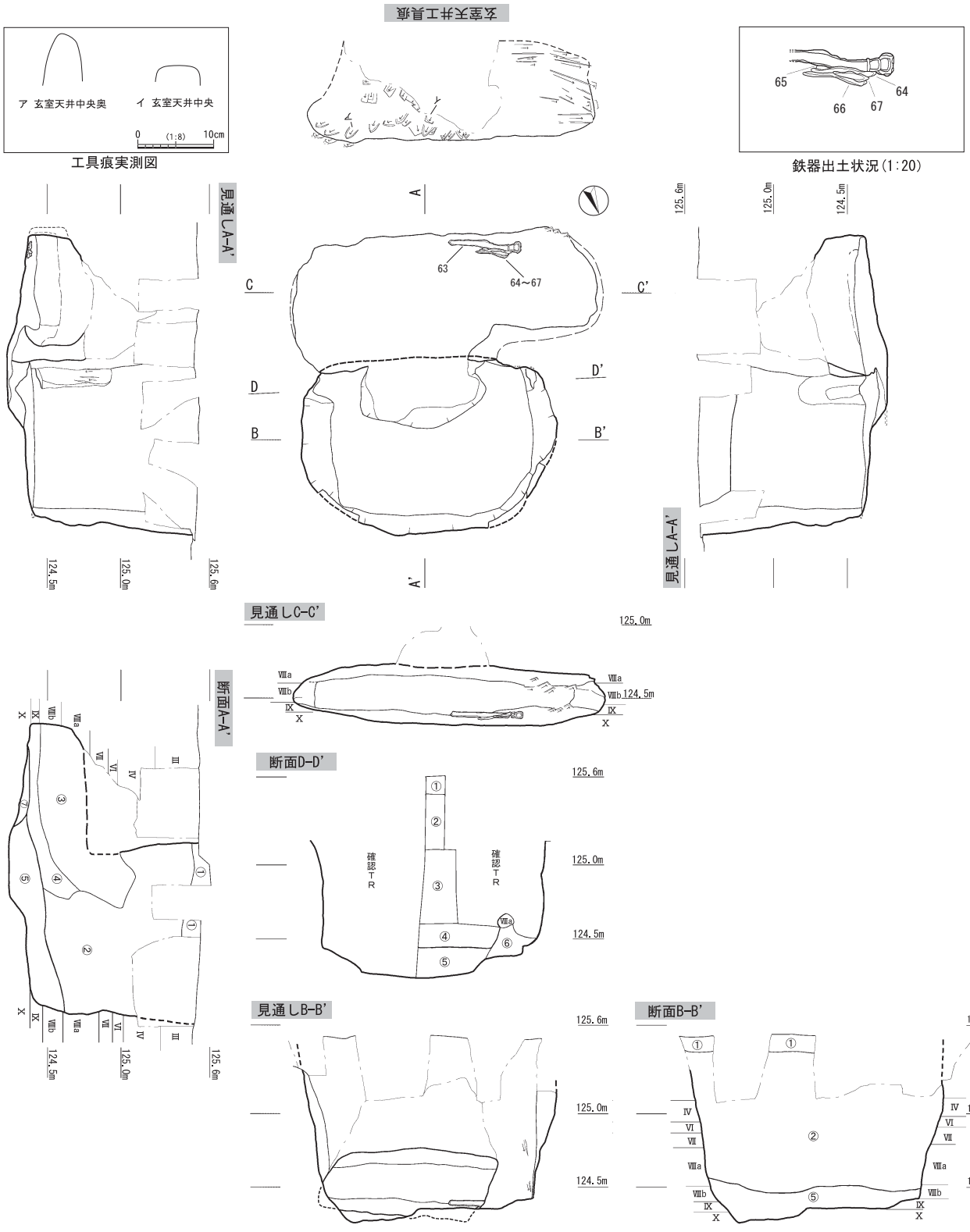
8号地下式横穴墓	検出区	J-32	玄室開口方向	南南西
	分　類	B２		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する周辺の攪乱部分を取り除き検出した。調査中に玄室天井が崩落した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	120	172	124	114	55	9	82	212	91	－
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	40

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形（やや菱形に近い）
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 竪坑の床面は水平であるが，羨道部で一段低くなり，玄室に向かってゆるやかに高くなる。埋土のほとんどにⅦ・Ⅷ層の土が混在しており，床面に近いほどその割合が高くなる。竪坑左右の側面に抉りがみられる。断面Ｄをみると，埋土④の右側に硬いⅧ層のブロックが残存しており，閉塞材との関係が想定される。 【玄室】 右側にやや偏る形状であり，同じく右側では羨道との境部分に稜がある。羨門の高さは推定でも 40cm と低い。中央部には屍床が造られていた。副葬品として素環頭大刀および鉄鏃が重なって出土した。
工具痕	玄室天井には羨道から左奥方向，中央から右奥方向に掘削した痕が残り，天井の左奥・中央奥付近と竪坑左側抉り部分はＶ字状，天井中央・右側に方形状の工具痕が多い。 玄室はＶ字状の工具で掘削し，方形状の工具で天井を平坦にする作業を行ったと推測される。特に右袖天井には 30 ㎝近くの長い工具痕が多く残っており，長い柄の工具を使用したと考えられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	土器片（72・73）が出土した。
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	素環頭大刀１点，鉄鏃４点（圭頭鏃４点）が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%含む黒褐色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む黒褐色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(20cm以下)を約30%含む黒色土。天井落ちブロック多量含む。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒は②が崩落した土。入り込んだ黒色土と思われる。軟らかくしまりなし。
※ 玄室半掘中に崩落したので,ブロックの形などなし。
④ ②の崩落した土が入り込んだもの。軟らかくしまりなし。
⑤ Ⅸ・Ⅹ層を約20%,Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒色土。しまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%,Ⅹ層ブロックを約20%含む黒色土。⑤よりⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒の割合が多く硬い。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約30%含む黒色土。しまり有り。屍床と思われる。

第58図　8号地下式横穴墓

９号地下式横穴墓

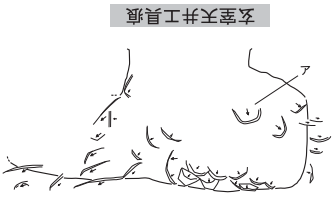
検出区	J-32	玄室開口方向	東北東
分　類	A		

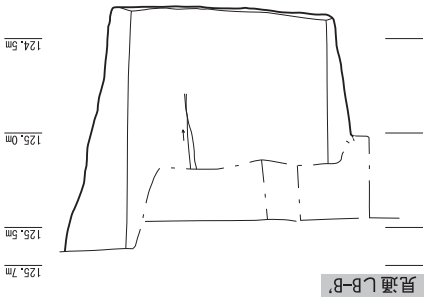
検出状態	わずかにⅦ・Ⅷ層が混在する周辺の攪乱部分を取り除き竪坑のプランを検出した。調査中に玄室天井が一部崩落したが，残存状態は良好であった。

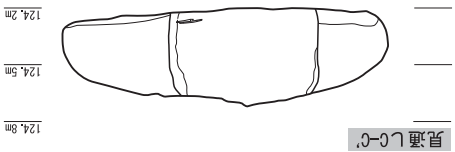
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	101	160	110	72	52	29	68	176	97	56
推　定	105	155	－	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

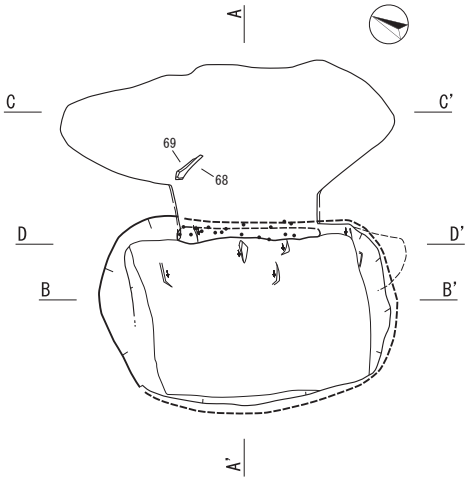
概　要	【竪坑】 上部の大半は攪乱を受けていたが，左側は残存していた。埋土中にはほぼ均等にⅧ層の土が含まれている。床面近くの埋土②はX層の土が多く混在している。X層は主に玄室部分の構築に伴って掘削されており，埋土②はその排出土も混在しているものと考えられる。また，埋土②の上面付近から炭化物を検出した。 【玄室】 玄室は不整形であり，左側部分の張り出しが強い。また，羨道の側面は直線的に整えられ，玄室との境界には明確な稜線が形成されていた。副葬品の鉄鏃が床面直上にあり，屍床は確認できなかった。
工具痕	玄室天井を中心に，玄室・竪坑側面など，多くの工具痕が残っていた。幅 12 ～ 13 ㎝のＵ字形の同一の工具を使用していたと考えられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	羨道付近で検出した。年代測定では 323calAD-424calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃２点（圭頭鏃２点）が出土した。
備　考	－

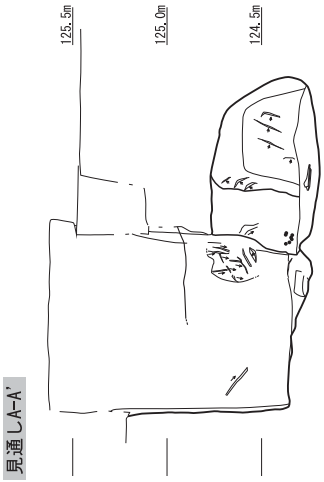


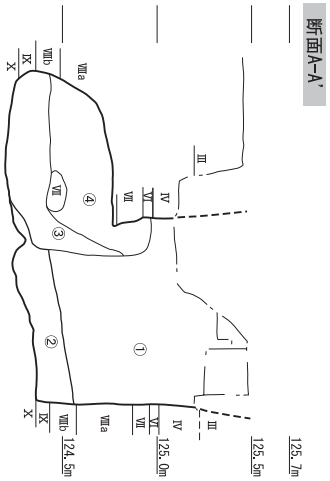


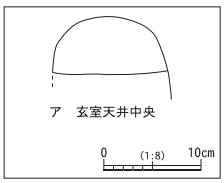


玄室内鉄器拡大図（1:20）

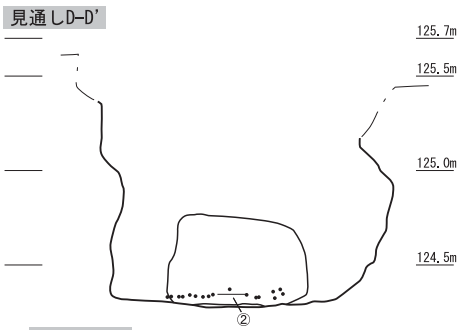


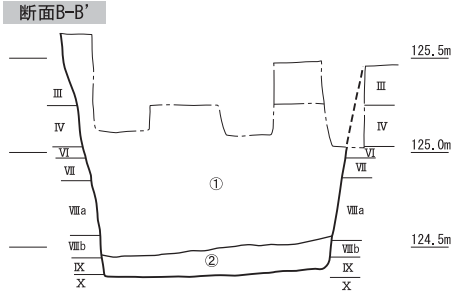


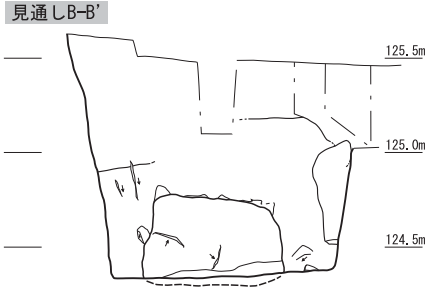




工具痕実測図







① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm 以下）を約 70% 含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 10%, Ⅸ・Ⅹ層を約 30% 含む黒色土。しまり有り。
③ ①が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。軟らかい。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を微量に含む黒色土。軟らかい。

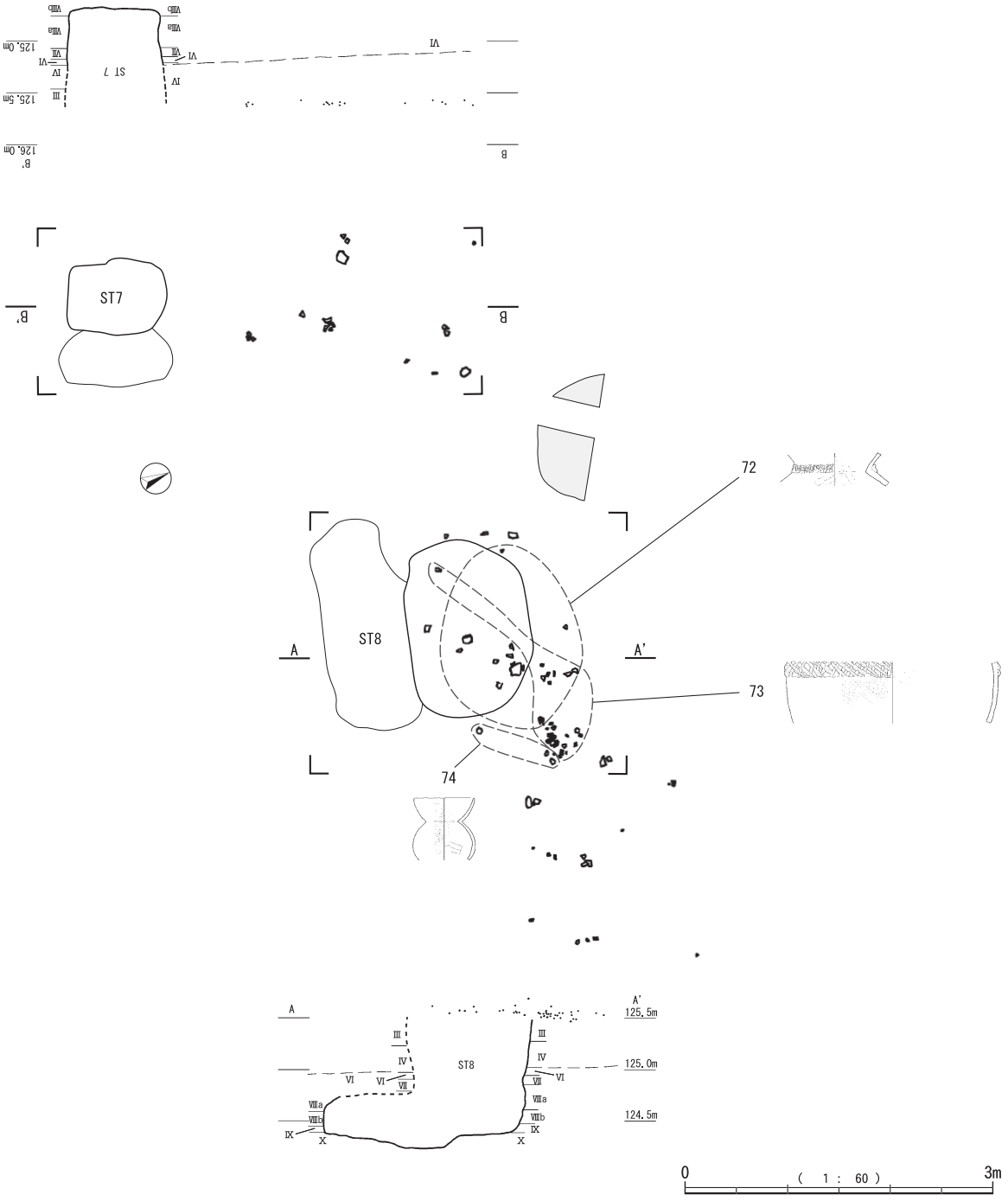
0　（1：40）　1m

第59図　９号地下式横穴墓

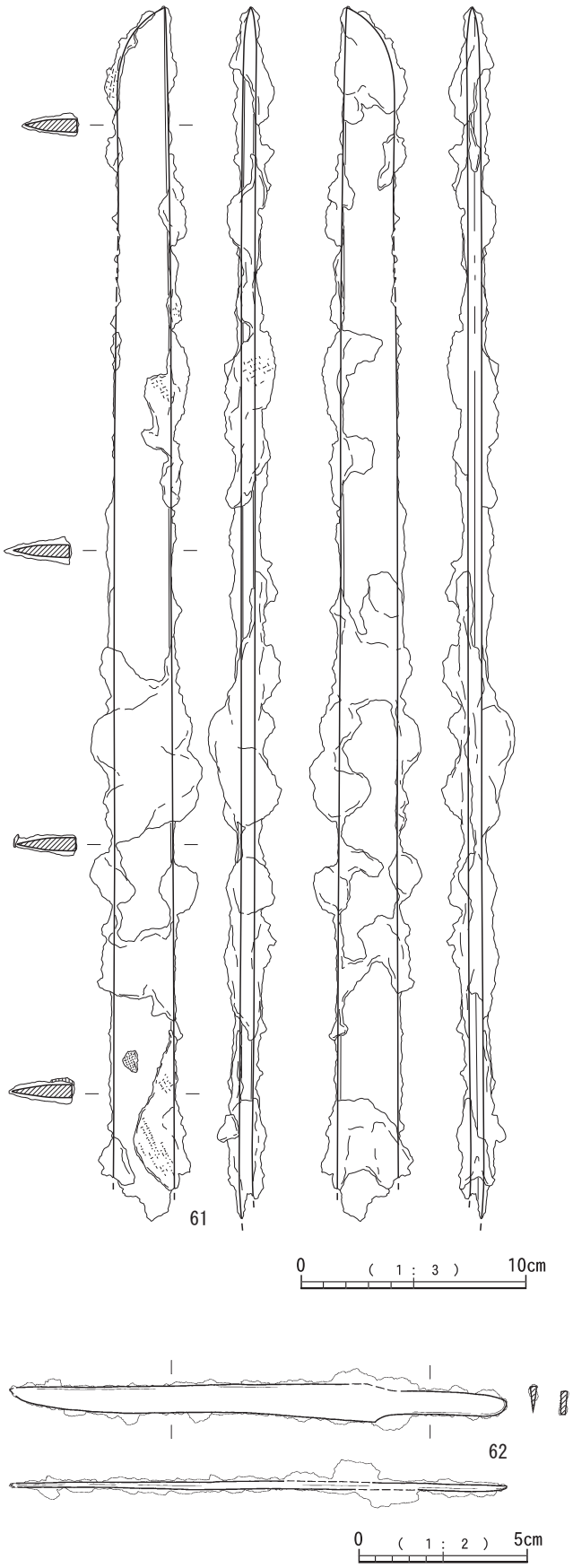
７号･８号地下式横穴墓周辺遺物出土状況･土層堆積状況（第60図）

８号地下式横穴墓北西側の撹乱を免れた部分にⅦ・Ⅷ層の混在する土がみられた。地下式横穴墓を構築際の排出土との関連性が推察される。

大型壺片が７号地下式横穴墓の北側から８号地下式横穴墓の竪坑上面にかけて，坩が８号地下式横穴墓の東側で出土した。



第60図　７･８号地下式横穴墓周辺遺物出土状況･土層堆積状況



第61図　５号地下式横穴墓出土鉄器

エリア２出土鉄器（第61図～第63図）

５号地下式横穴墓（第61図）

鉄器は鉄刀１点，刀子１点が出土した。61は鉄刀である。刃部の一部から茎部が欠損する。切先はふくら切先であり，断面は平造りを呈する。刃部の一部に錆化した平織布が付着するが，明瞭な木質は認められないため，鞘木はなく布を巻いて副葬したと考えられる。全体に有機質が付着した痕跡がみられるが，材質は不明である。62は刀子である。先端が錆により不明瞭である。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面は平造りを呈する。関部は背側が錆により不明瞭であるが，Ｘ線写真の観察から非対称な両関と推定した。刃側の関部が背側の関より深いナデの形態である。茎部は錆によりわずかにねじれるように変形する。茎尻に向かって幅がやや狭くなり，茎断面は台形状を呈する。有機質の付着物は確認できなかった。

８号地下式横穴墓（第62図・第63図）

鉄器は素環頭大刀１点，鉄鏃４点（圭頭鏃４点）が出土した。63は素環頭大刀である。刃部の一部が欠損する。断面は平造りを呈する。関部はナデの形態であり，やや非対称な両関である。刃部に鞘木が残存しており，関部から1.5㎝の位置に端部があることが確認できる。鞘木の上に重なって錆化した布の痕跡がみられるが，状態が悪く材質は不明である。環にやや重なるように筒金具が装着されており，側面の環と接触する部分には抉りが施されている。抉りは幅約６㎜，深さ３㎜を測り，環がはまる形状である。取り上げ時にはすでに破損していたものの，破損部分から環の装着の構造を観察することができる。環は別造りで楕円形を呈する。断面は円形である。大刀の茎部に折り曲げられた痕跡がみられることから，環を大刀の茎部に通し，茎部を折り曲げることで環を装着したものと考えらえられる。筒金具は幅３㎝，厚さ１㎜の板状の鉄を断面が楕円形の筒状に加工しており，接合時には最大径4.2㎝を測る。端部に鋲留めの痕跡が２か所確認できる。一部に錆化した葉が付着する。また，装着位置は不明であるものの，足金具が１点出土している。幅９㎜，厚さ１㎜の板状の鉄をやや不整形な楕円形に加工している。鹿児島大学総合研究博物館准教授の橋本達也氏の指導により，韓半島産の可能性が高いことが指摘されている。

64～67は圭頭鏃Ⅱf類である。64・65は錆着していたため，そのまま実測した。64の断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の状態は良好であり，長さ９cm残存する。65の断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，角関と推定した。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。66の断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形

を呈する。矢柄の状態は良好であり，長さ9.2cm残存する。刃部の一部に皮革，矢柄の一部に布の痕跡が確認されたが，状態が悪く，詳細は不明である。67は銹のため刃部と茎部が不明瞭である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は短いものの，やや良好に残存する。

９号地下式横穴墓（第63図）

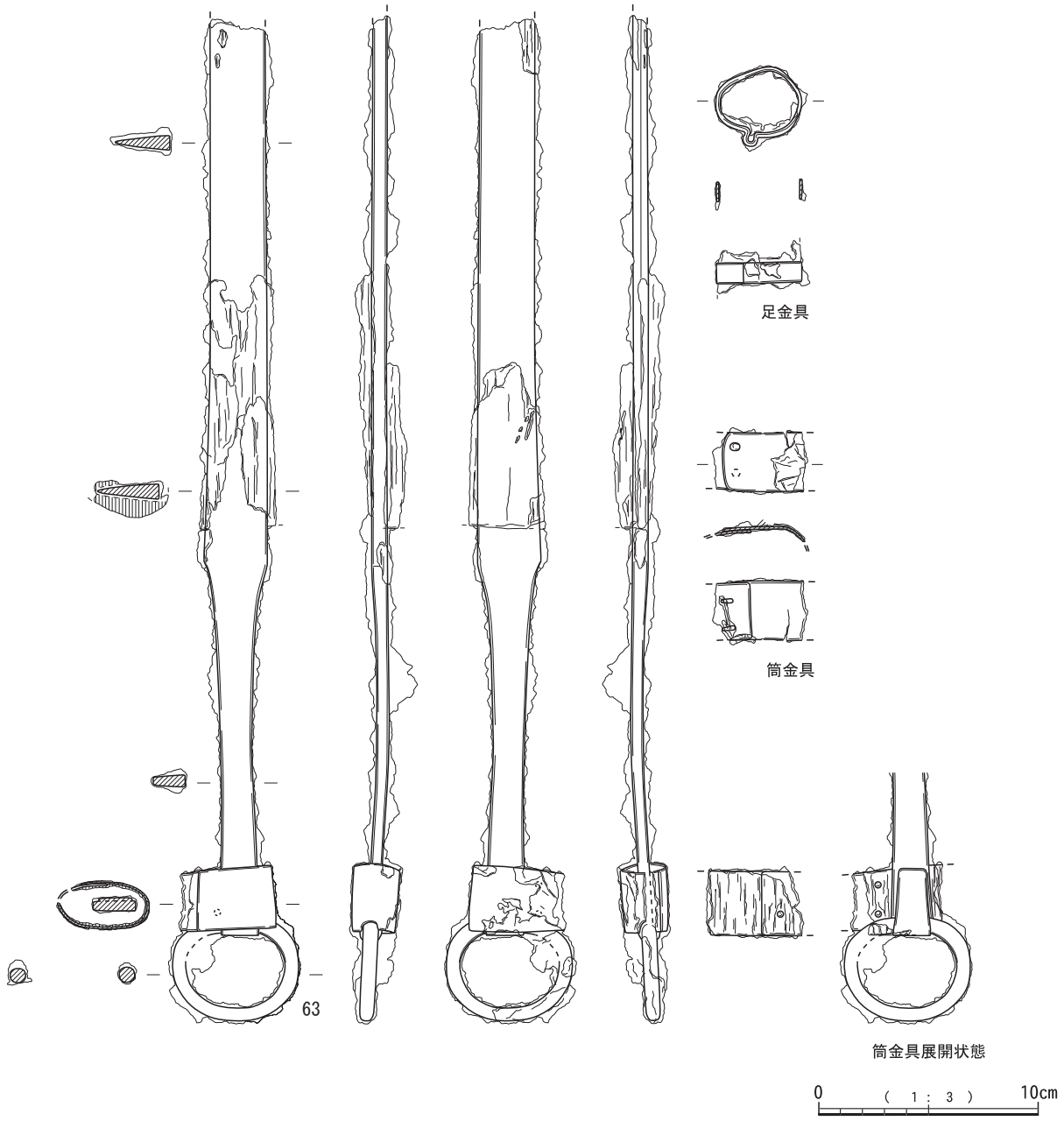
鉄器は鉄鏃２点（圭頭鏃２点）が出土した。68・69は圭頭鏃Ⅲa類である。69の一部欠損した先端が，68に銹着する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の残存はみられない。69の断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。68の先端の一部が銹着している。矢柄の残存はみられない。

エリア２遺構外出土鉄器（第63図）

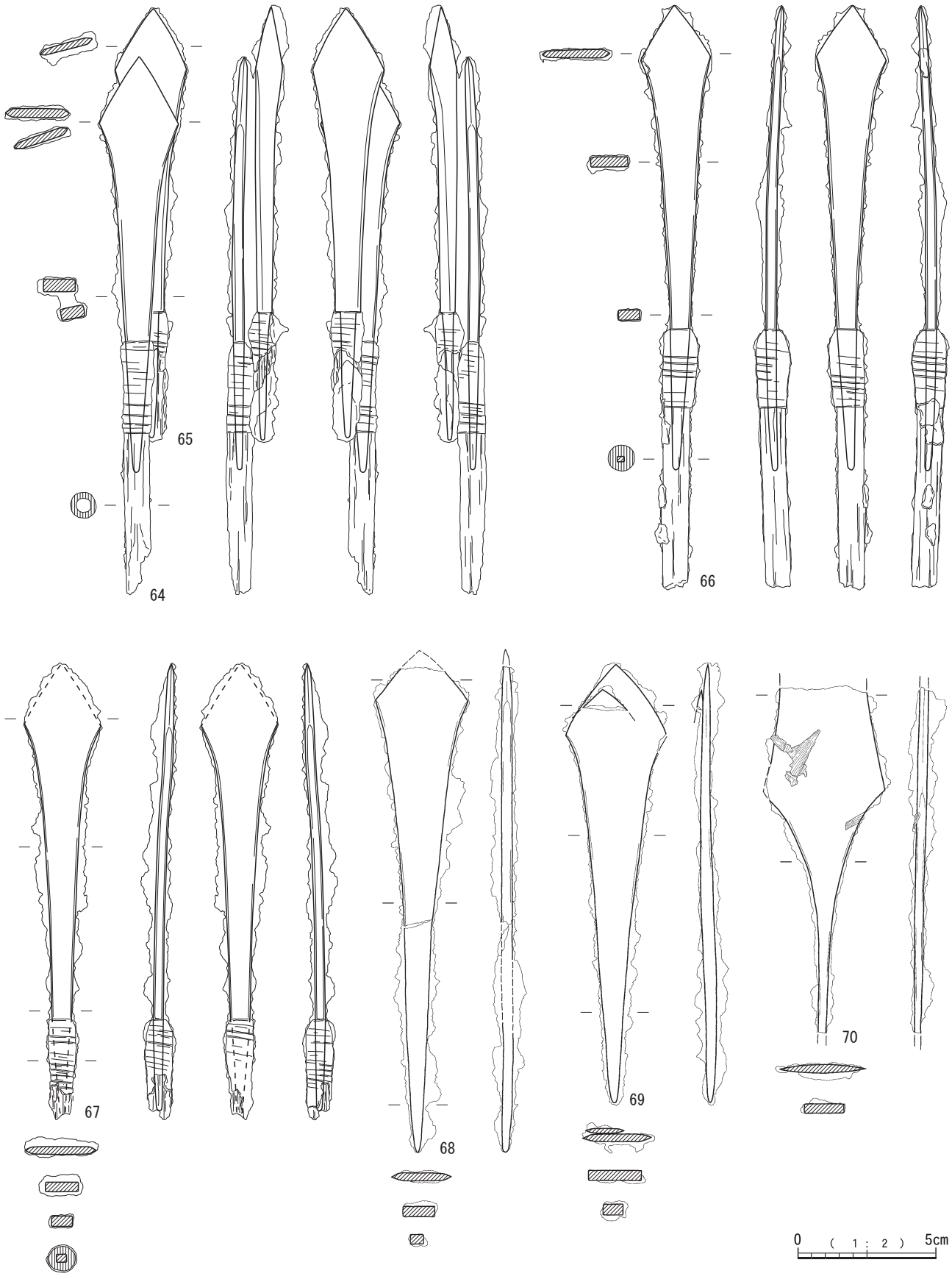
６号地下式横穴墓近くから，70の平根系大型鏃が出土した。刃部の一部が欠損する。刃部関に最大幅を持ち，最大幅4.5cmのナデ関である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。一部に植物繊維が付着するが，状態が悪く詳細は不明である。

エリア２出土土器（第64図・第65図）

71は５号地下式横穴墓の竪坑上面で出土した須恵器の甕の頸部である。TK10型式に該当し，古墳時代後期前葉～中葉（６世紀前葉～中葉）に位置づけられる。

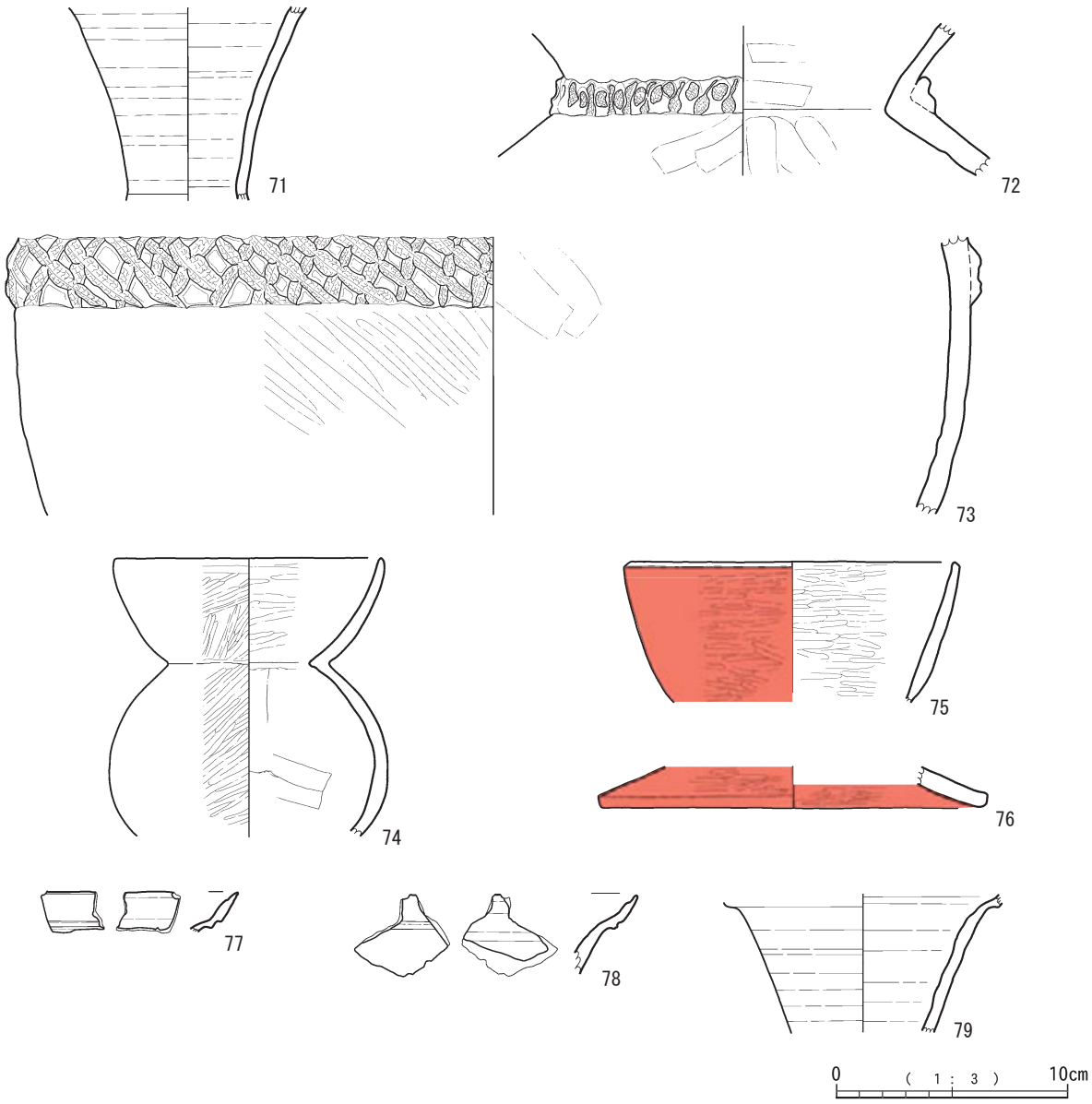


第62図　８号地下式横穴墓出土鉄器(1)



64～67　8号地下式横穴墓
68・69　9号地下式横穴墓
70　遺構外出土鉄器

第63図　８号(2)・９号地下式横穴墓・エリア２遺構外出土鉄器



第64図　５号地下式横穴墓・エリア２出土土器(1)

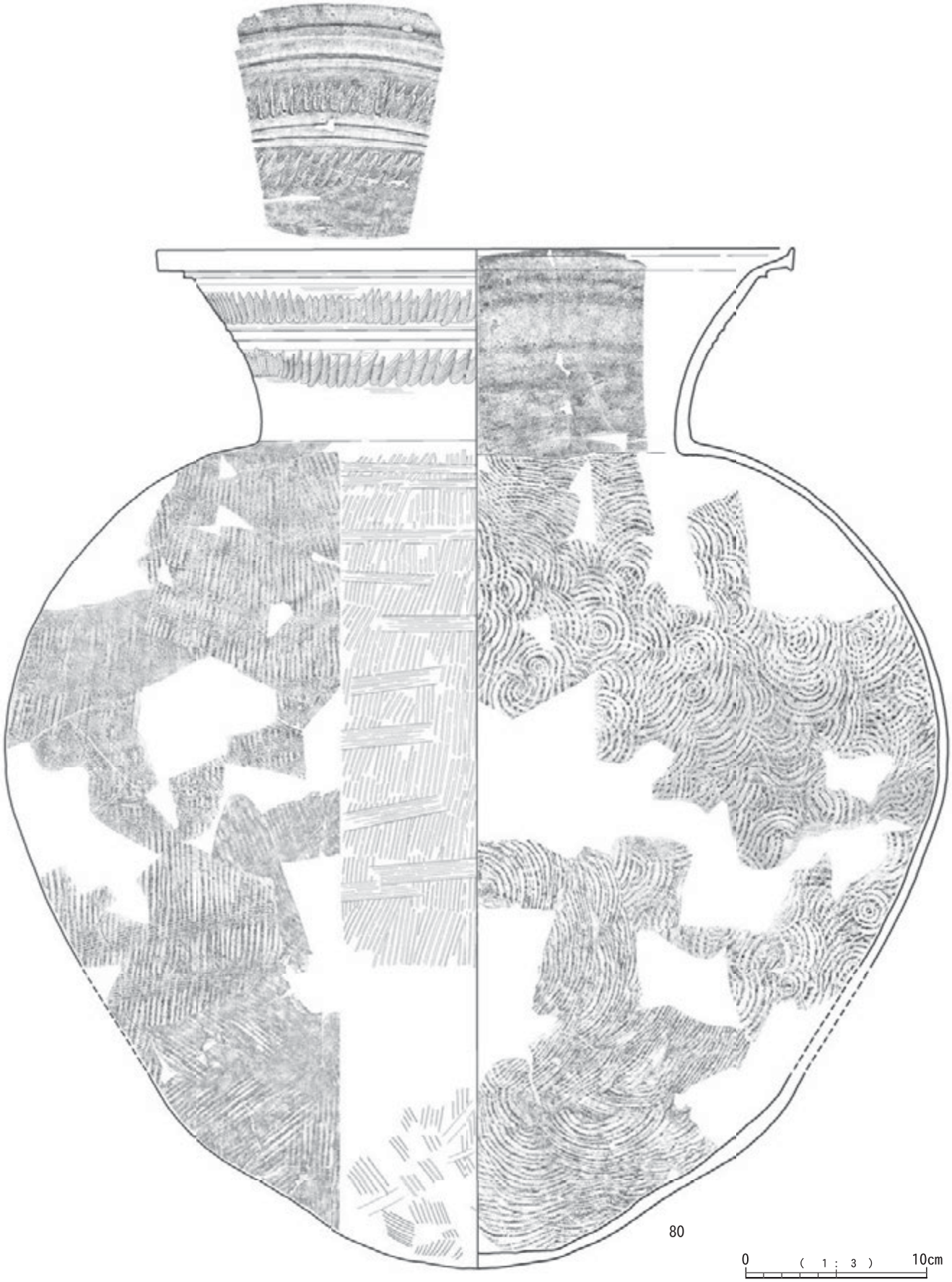
72・73は壺である。72は頸部に一条の突帯を有する。併行斜線の刻みの間には，先が丸みを帯びた工具により刺突状の文様が施されており，いずれも布目痕が認められる。内外面ともに工具ナデ調整である。73は，幅広突帯を有し，斜格子状の刻み目が施される。外面はミガキ調整されているものの，風化が顕著でかすかに確認できる程度である。内面は工具によりナデ調整される。

74・75は坩である。74は口径11.6cmで，口縁部は内湾しながら伸び，口唇部は丸みを呈する。頸部の屈曲部内面には明瞭な稜線が入り，胴部は丸みを帯びる。外面は密なミガキ調整で，内面は口縁部のみに外面よりもやや幅の広いミガキ調整がされている。75は口縁部で，口径14.2cmである。口縁部は直線的に外傾して開き，口唇部のみ内側にやや屈曲する。外面に赤色顔料を塗布する。内外面ともに丁寧な横方向のミガキ調整である。

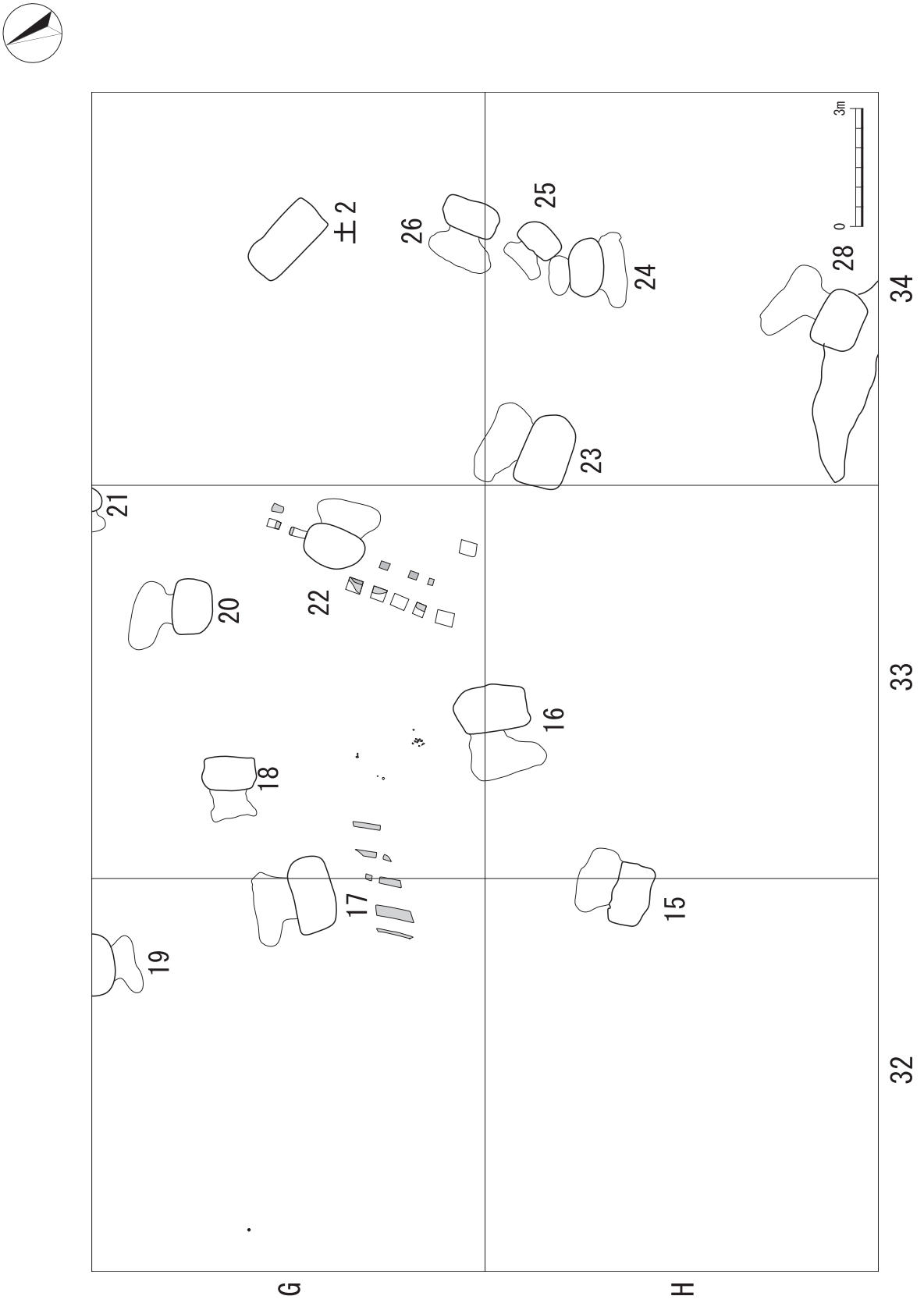
76は高坏の裾部である。内外面に赤色顔料を塗布した後ミガキ調整される。

77～80は須恵器である。77・78は鼈の口縁部，79は鼈の頸部である。77～79は，I-29・30区の撹乱部分で出土した。

80は須恵器の甕で，口縁部には凸線が１条入る。頸部は３条の凹線を入れた後，その上下に２段の櫛描波状文を施す。外面は平行タタキの後，工具により横方向のナデ調整がされている。内面は当て具痕が明瞭で，タタキの切り合いから，下から上に向かって叩いたと推測される。TK208～23型式に該当し，両型式にまたがる要素もみられるが，TK208の新相と思われる。陶邑窯産の可能性が高い。



第65図　エリア２出土土器(2)



第 66 図　エリア３　遺構配置図

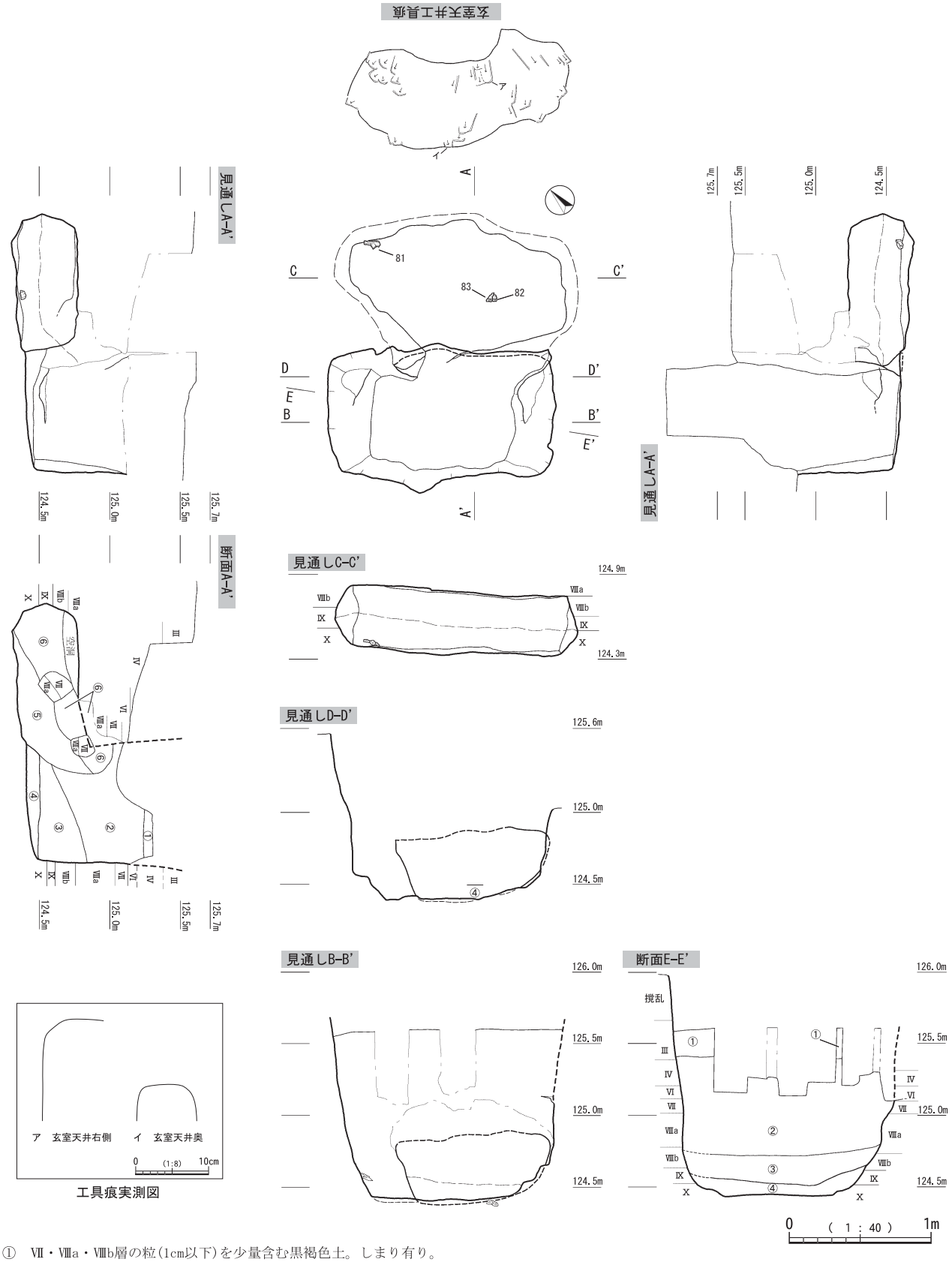
15号地下式横穴墓	検出区	H-32・33	玄室開口方向	北東
	分　類	B２		

検出状態	他の地下式横穴墓と埋土の状況が異なり，平面プランの判別が難しく，竪坑部分をかなり掘り下げた状態で確認した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	96	162	116	108	－	4	100	170	104	46
推　定	－	－	－	－	45	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	逆台形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形（不整形）		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木　材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　　要	【竪坑】 　平面は比較的整った隅丸長方形である。遺構構築の際に，Ⅶ・Ⅷ層部分を多く掘削しているのに対し，竪坑埋土中におけるⅦ・Ⅷ層土の割合はかなり少ない。そのため，排出土の多くは埋め戻しには使われなかったと推定される。羨道付近は軟らかい黒色土で占められており，上部からの流入があったと考えられる。Ｄ軸断面においては，竪坑左壁の抉り部分と埋土④の上面は高さがほぼ同じであり，この面が閉塞時の床面であると思われる。 【玄室】 　平面はいびつな楕円形を呈する。また，高さも低く羨道からほぼ同じ高さの奥行きをもつ。埋土はほとんどが軟らかい黒色土である。中央付近には円錐状鉄器が２点，玄室左奥に異形鉄器が１点が副葬されていた。
工　具　痕	玄室天井右側及び玄室天井奥で方形状のものがみられた。
赤色顔料	玄室埋土から非パイプ状ベンガラを検出した。
炭　化　物	未検出
人　　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄　室　内	異形鉄器１点，円錐形鉄器２点が出土した。
備　　考	円錐形鉄器は他の２墓から出土したものより大きい。



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量含む黒褐色土。しまり有り。
② 池田降下軽石,Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を含む黒褐色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%,Ⅸ・Ⅹ層を約20%含む黒色土。しまり有り。
④ ③にⅩ層が多く入る(約50%)硬い黒色土。
⑤ ②が崩落した土と上部から入り込んだ土が混在する。黒色で軟らかい。
⑥ 天井が崩落した土と上部から入り込んだ土。⑤より軟らかい黒色土。

第67図　15号地下式横穴墓

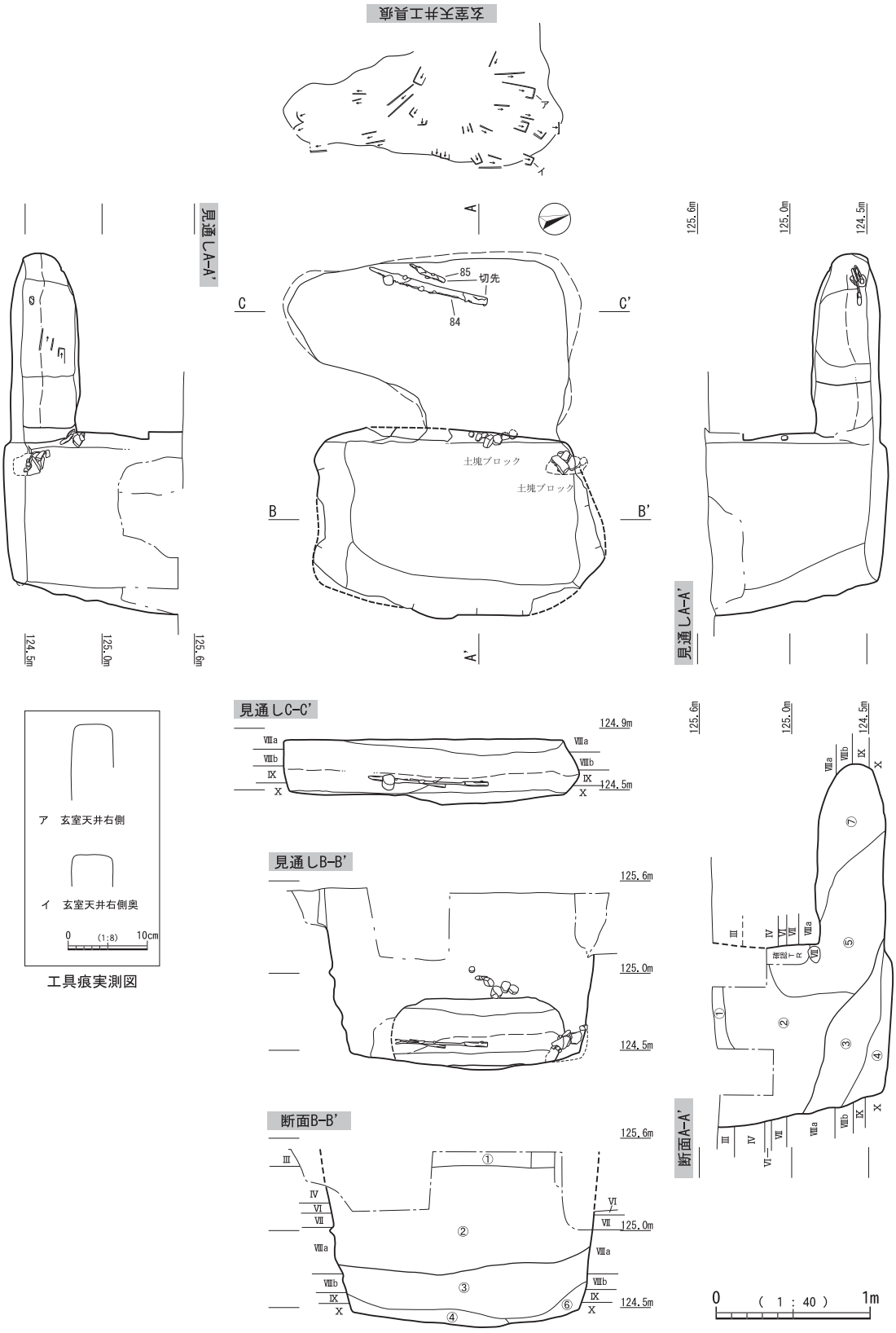
16号地下式横穴墓	検出区	G・H-33	玄室開口方向	西北西
	分　類	B２		

検出状態	埋土はほとんどが軟らかい黒色土である。玄室奥に鉄剣１点，短剣１点が副葬されていた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	119	184	112	106	42	30	88	194	118	42
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	台形（不整形）		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木　材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 竪坑は比較的整った隅丸長方形を呈しており，羨道・玄室よりも床面がやや低い。検出面の埋土①はほぼ黒色土であり，下の埋土②と明確に分かれる。羨門は，原形を保っている。羨門の上部や右側に硬いⅧ層由来の土塊がみられ，閉塞に関係する可能性がある。 【玄室】 羨門と玄室の右壁は直線上に掘り込まれており，左側に偏る片袖状を呈する。羨道の幅は狭いが，玄室と竪坑の横幅はほぼ同じである。内部は流入したと思われる埋土⑤・⑦が堆積していた。
工具痕	玄室の天井と右側面に工具痕がみられ，玄室天井は中央から放射状に掘削された痕が残っている。いずれも方形状で，幅に若干の違いはあるが同一工具と考えられる。玄室内の工具痕はこれのみであり，竪坑は樹痕の影響などにより状態が悪く，工具痕は残っていなかった。
赤色顔料	未検出
炭化物	羨道付近および玄室内から検出した。年代測定では 250calAD-390calAD，樹種はクスノキ科と同定された。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，短剣１点が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa層の粒（3cm以下）を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（3cm以下）を約20%含む黒褐色土。Ⅶ層の粒多い。ややしまり有り。X層の粒を少量含む。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（10cm以下）を約60%，X層の粒・ブロック（5cm以下）を約20%含む黒褐色土。ややしまり有り。
④ Ⅸ・X層を約80%，Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（2cm以下）を約10%含む黒色土。しまり有り。
⑤ ②が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒などが②に比べて細かい。軟らかいが少ししまっている。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（5cm以下）を約80%，Ⅸ・X層を約10%含む黒色土。しまり有り。④とほぼ同時に入れられたと思われる。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒を少量含む軟らかい黒色土。ほとんどが上部から入り込んだ土と考えられる。

第68図　16号地下式横穴墓

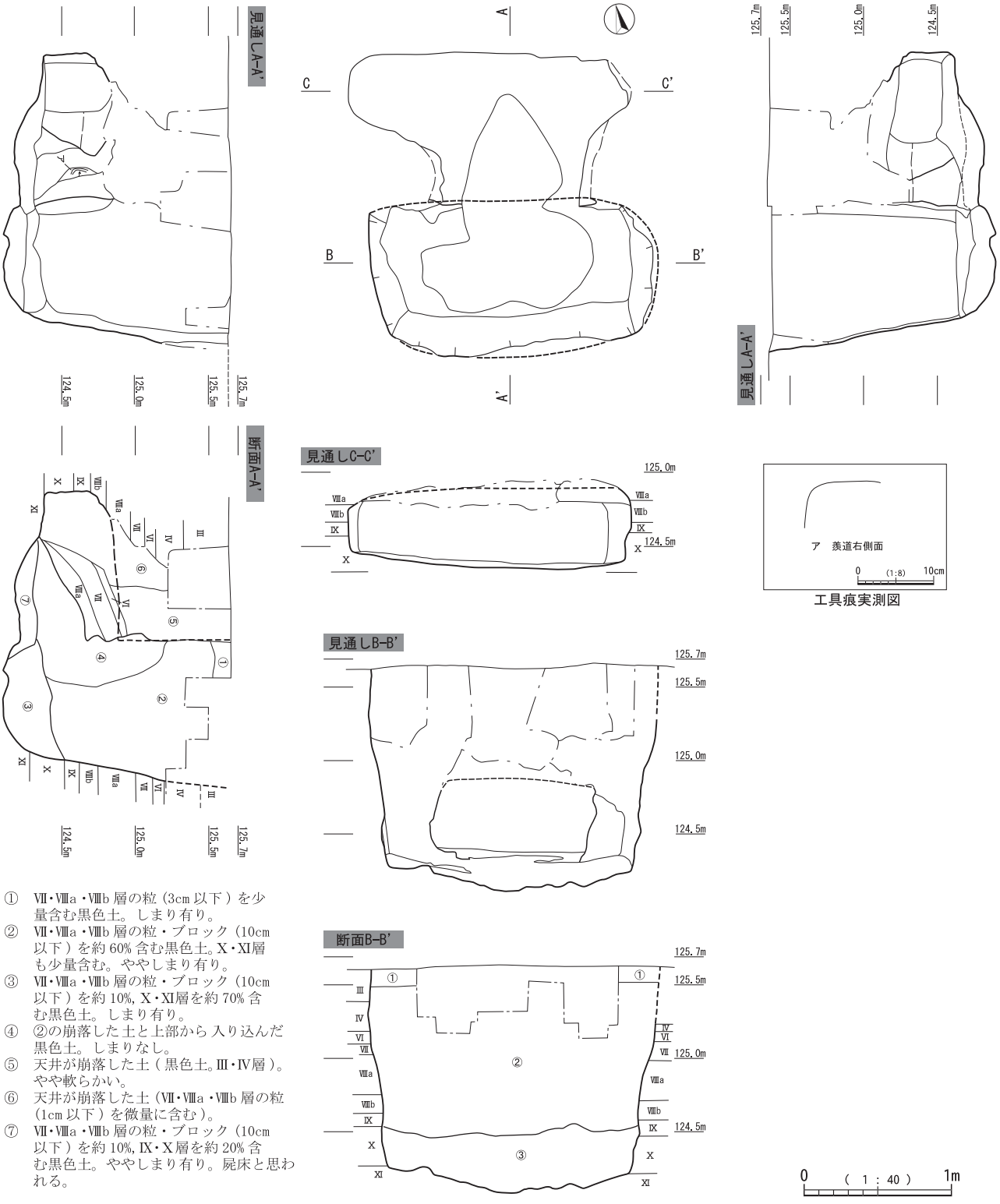
17号地下式横穴墓	検出区	G-32・33	玄室開口方向	北
	分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分がみられた箇所周辺のトレンチャーによる攪乱を取り除いて検出した。玄室は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	104	194	154	108	－	24	72	190	96	－
推　定	－	－	－	－	70	－	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 竪坑の床面は玄室・羨道よりも一段深い。Ⅸ～XI層部分を掘削して遺構を構築しているのに対し，埋土中にこれらの層の土が少ない。よって，Ⅸ～XI層部分の排出土の多くは，地表部に残された可能性が高い。 【玄室】 中央から羨門付近まで屍床が造られている。天井部分全体が崩落し，竪坑からの流入土の上に落ちている状態であった。羨道の側面は直線上に整えられ，玄室との境には明確な稜線が形成されている。
工具痕	方形状と思われるものが羨道右側面に１点のみ残っていた。幅は不明だが 10 ㎝以上はある。天井には明瞭なものはみられなかった。
赤色顔料	竪坑埋土からパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	玄室埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を少量含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm 以下）を約 60% 含む黒色土。X・XI層も少量含む。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm 以下）を約 10%, X・XI層を約 70% 含む黒色土。しまり有り。
④ ②の崩落した土と上部から入り込んだ黒色土。しまりなし。
⑤ 天井が崩落した土（黒色土。Ⅲ・Ⅳ層）。やや軟らかい。
⑥ 天井が崩落した土（Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（1cm 以下）を微量に含む）。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm 以下）を約 10%, Ⅸ・X層を約 20% 含む黒色土。ややしまり有り。屍床と思われる。

第69図　17号地下式横穴墓

18号地下式横穴墓

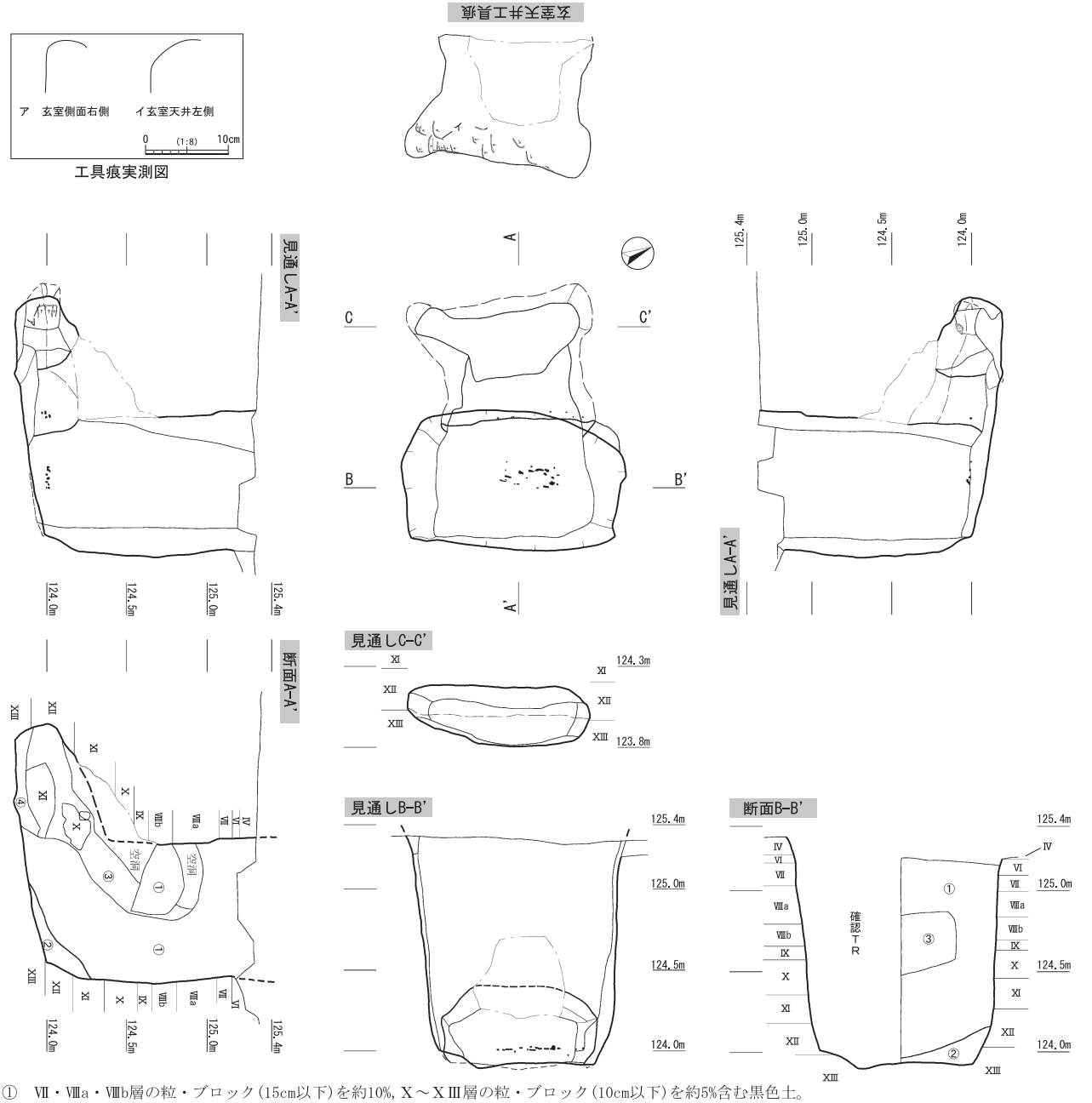
検出区	G-33	玄室開口方向	西北西
分　類	A		

検出状態	17号地下式横穴墓などの遺構周辺のトレンチャーによる攪乱を除去して検出した。玄室天井は剥落していた。検出面の表面積は本遺跡内では比較的小さいのに対して，深さは約130cmと深い。

	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	86	134	129	96	－	29	44	112	73	－
推定	90	－	150	－	55	－	－	－	－	35

竪坑最下層	ⅩⅢ	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	台形
玄室天井層	ⅪⅠ・ⅫⅠ	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	ⅩⅢ	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 ⅩⅢ層まで掘り込まれており，玄室が深い位置に造られている。竪坑から玄室へ向けて床面がゆるやかに下がる。炭化物が竪坑床面近くで出土した。 【玄室】 平面形はいびつであり，両側にやや張り出す形状をしている。ⅪⅠ～ⅩⅢ層付近を中心に掘削されているが，竪坑を含めた埋土中にこれらの層に該当する土が少なく，ⅪⅠ～ⅩⅢ層付近の排出土の多くは，地表部に残された可能性が高い。羨道は本遺跡内では長めであり，玄室は横幅が１ｍ程度で，ややいびつな形状を呈する。
工具痕	玄室天井に中央から中央奥及び左奥方向，右側奥方向に掘削した痕がみられる。玄室側面右側で，やや先端が丸みをおびた方形と思われる幅約6㎝のものがみられる。玄室天井右側では，Ｕ字形で幅は不明のものがみられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑及び玄室内から検出した。年代測定では53calAD-171calAD，樹種はクスノキと同定された。
人骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約10%, Ⅹ～ⅩⅢ層の粒・ブロック(10cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%, Ⅹ～ⅩⅢ層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む黒色土。しまり有り。
③ ①が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。軟らかい。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量含む黒色土。軟らかい。崩落時に竪坑の埋土が入り込んだと思われる。

第70図　18号地下式横穴墓

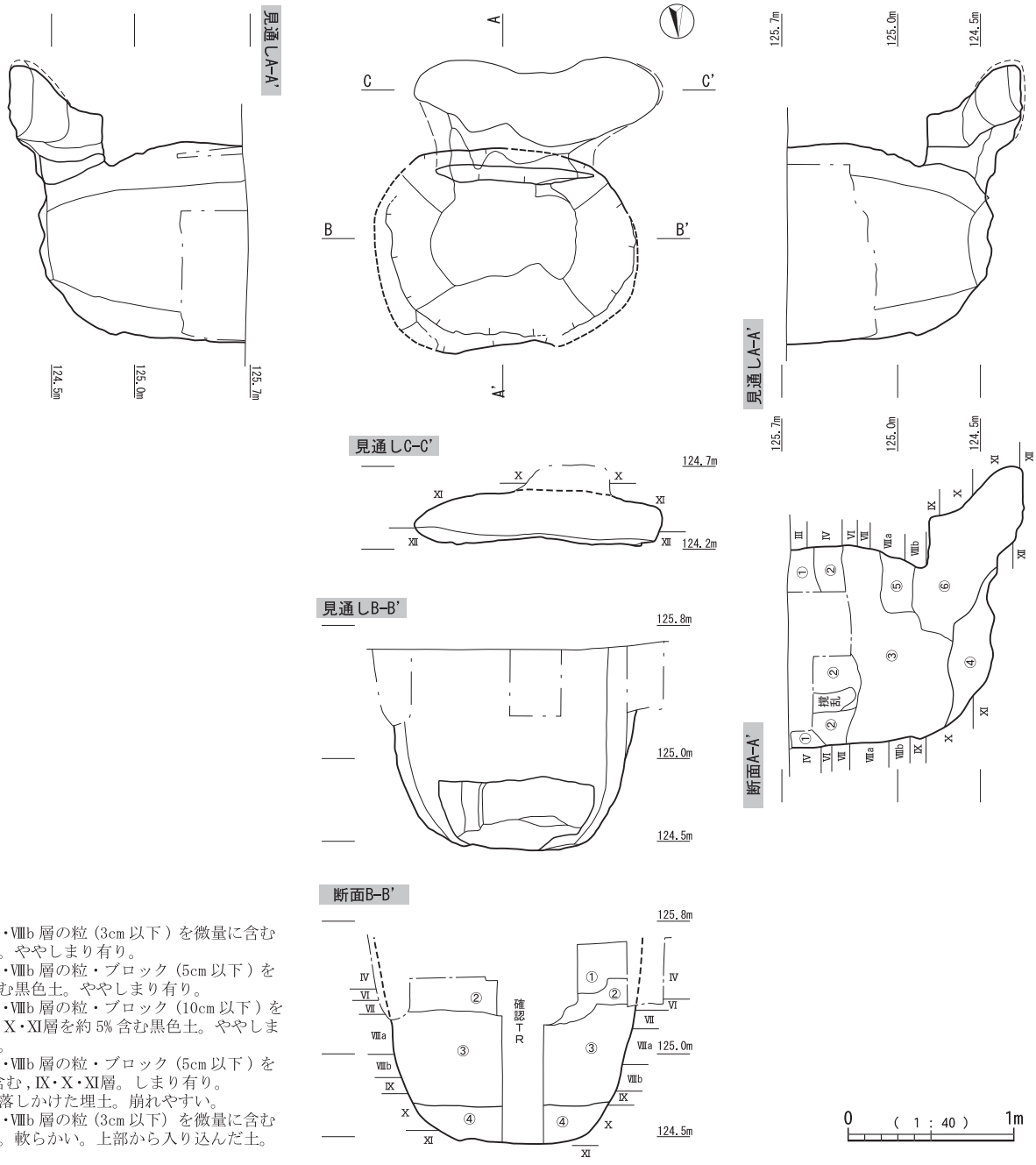
19号地下式横穴墓	検出区	F・G-32	玄室開口方向	南
	分　類	A		

検出状態	トレンチャーによる攪乱を受けていない範囲にⅦ・Ⅷ層が混在した土を確認し，検出した。玄室天井も崩落していない。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	119	158	124	－	40	12	44	150	56	28
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形（円形に近い）	羨門正面形	逆台形
玄室天井層	Ⅸ	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	XI・XII	玄室断面形	隅丸長方形（レンズ状）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 断面形は床面から上位にかけてゆるやかにふくらむ形状である。Ⅸ～XI層部分を主体に掘削して遺構を構築しているのに対し，床面近くの埋土④以外はこれらに該当する層の土が少なく，Ⅸ～XI層部分の排出土の多くは地表に残された可能性が高い。 【玄室】 竪坑の規模に対し玄室は小さく，玄室と羨道は床面の高さが異なり，玄室が一段低くなっている。玄室が深い位置にあり，竪坑からの埋土が流れ込み，調査時には黒色土で埋まっていた。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	土器片（111）が出土した。
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を少量含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm 以下）を約 40%, Ⅹ・Ⅺ層を約 5% 含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 5% 含む , Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層。しまり有り。
⑤ ③の崩落しかけた埋土。崩れやすい。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を微量に含む黒色土。軟らかい。上部から入り込んだ土。

第71図　19号地下式横穴墓

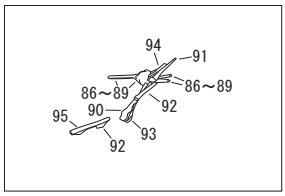
２０号地下式横穴墓	検出区	G-33	玄室開口方向	北
	分　類	Ｂ１		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺のトレンチャーによる攪乱を除去して検出した。玄室天井及び羨道は残存状況は良好であった。

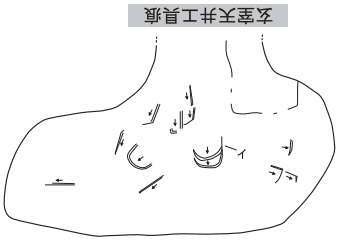
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	107	140	115	96	46	22	80	170	102	52
推　定	115	－	－	－	－	－	－	－	－	－

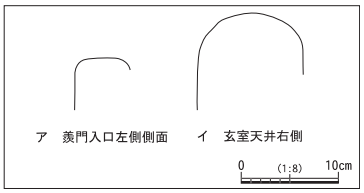
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	六角形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形（レンズ状）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 平面形は隅丸長方形である。竪坑左右側面に抉りがあり，抉り部分の床面と埋土③の上面はほぼ一致する。埋土④は竪坑から玄室に流れ込んだものである。 【玄室】 玄室の横軸と竪坑・羨門の横軸はずれており，玄室が左側に偏る。左側はゆるやかであるが，右側は羨道との間に明確な稜をもつ。鉄鏃が集中して出土しているが，向きがバラバラの状態で銹着しているものがある。鉄鏃の下は大変軟らかい土であったため，攪乱を受けた可能性がある。
工具痕	玄室天井や竪坑側面に方形状のもの，U字形のものがみられた。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃 11 点（圭頭鏃 10 点，鉄鏃片 1 点）が出土した。
備　考	－



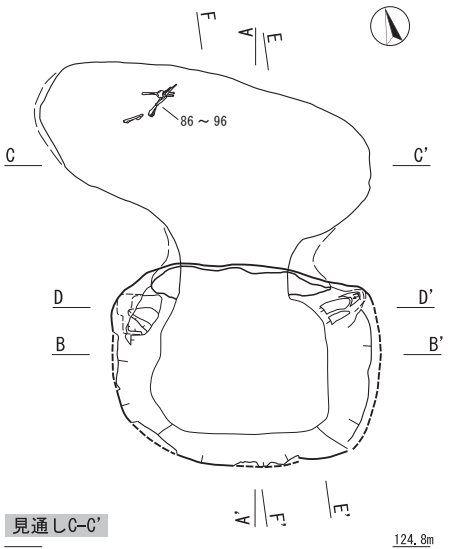
鉄器出土状況（1:20）

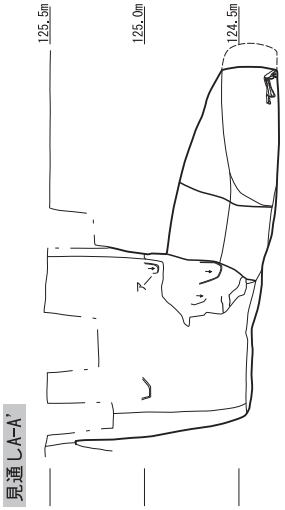

玄室天井工具痕

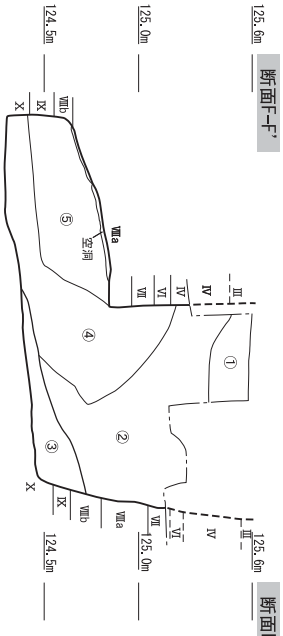


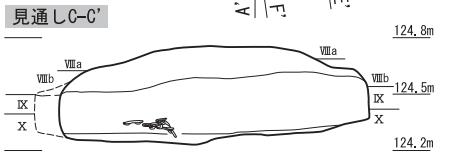
工具痕実測図

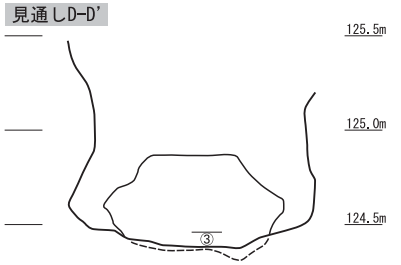
見通しA-A'

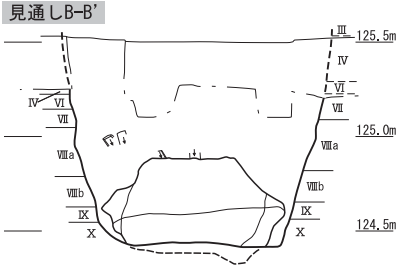












① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を約 5% 含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 40%, Ⅸ・Ⅹ層を約 20% 含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を約 10%, Ⅸ・Ⅹ層を約 80% 含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 40%, Ⅸ・Ⅹ層を少量含む黒色土。軟らかくしまりなし。竪坑が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。
⑤ 上部から入り込んだ黒色土。軟らかい。

0　（ 1 : 40 ）　1m

第72図　20号地下式横穴墓

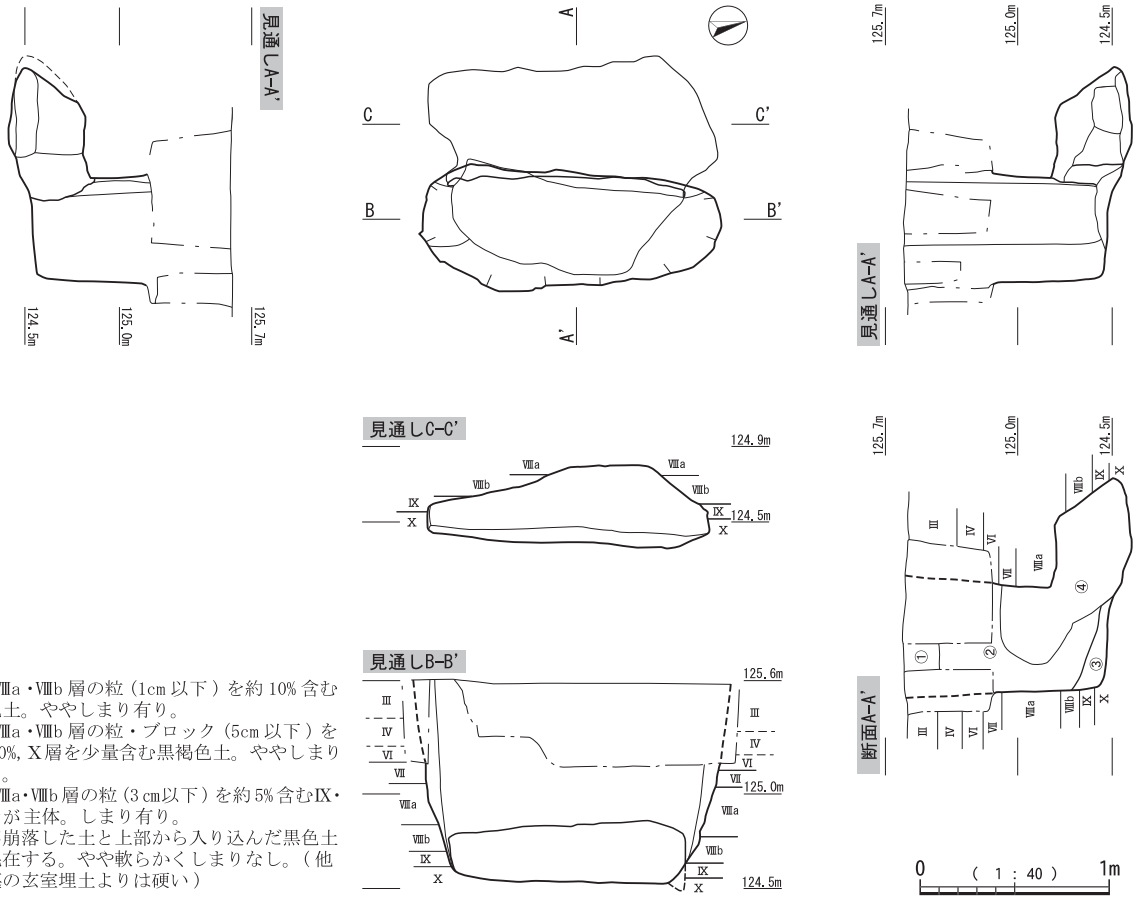
21号地下式横穴墓	検出区	F・G-33	玄室開口方向	西北西
	分　類	C		

検出状態	Ⅲ層が広がる面から，Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分を確認し，トレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。玄室は良好に残存していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	60	156	64	124	34	－	50	146	58	40
推　定	65	170	110	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	台形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 竪坑と玄室の規模はほぼ同じである。埋土③はⅨ・X層主体で硬くしまっており，閉塞時の床面と考えられる。埋土④はしまりがなく，竪坑埋土が玄室に流れ込んだものと思われる。羨道はほぼなく，竪坑と玄室は密接した形状である。 【玄室】 右側がやや張り出す不整形を呈する。羨門の横幅が広く，玄室・羨門の床面は竪坑床面よりやや深いためか，埋土④により天井まで埋まっている。玄室内に屍床はみられない。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。年代測定では 531calAD-614calAD，イネ科と同定された。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（1cm以下）を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（5cm以下）を約30%, X層を少量含む黒褐色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（3cm以下）を約5%含むⅨ・X層が主体。しまり有り。
④ ②が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。やや軟らかくしまりなし。（他の墓の玄室埋土よりは硬い）

第73図　21号地下式横穴墓

２２号地下式横穴墓

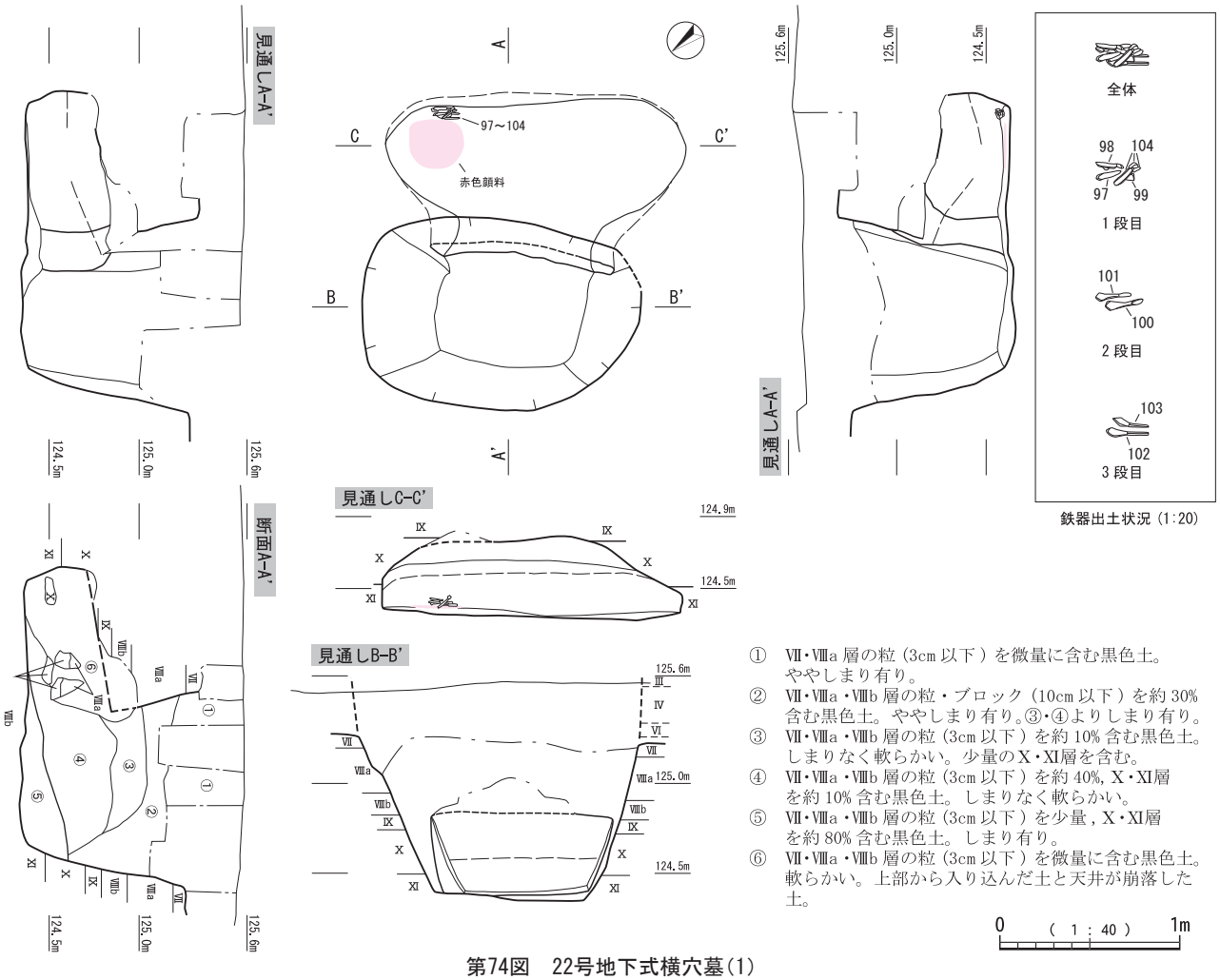
検出区	G-33	玄室開口方向	南東
分　類	Ｂ２		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する土の範囲が広範囲にみられ，トレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。

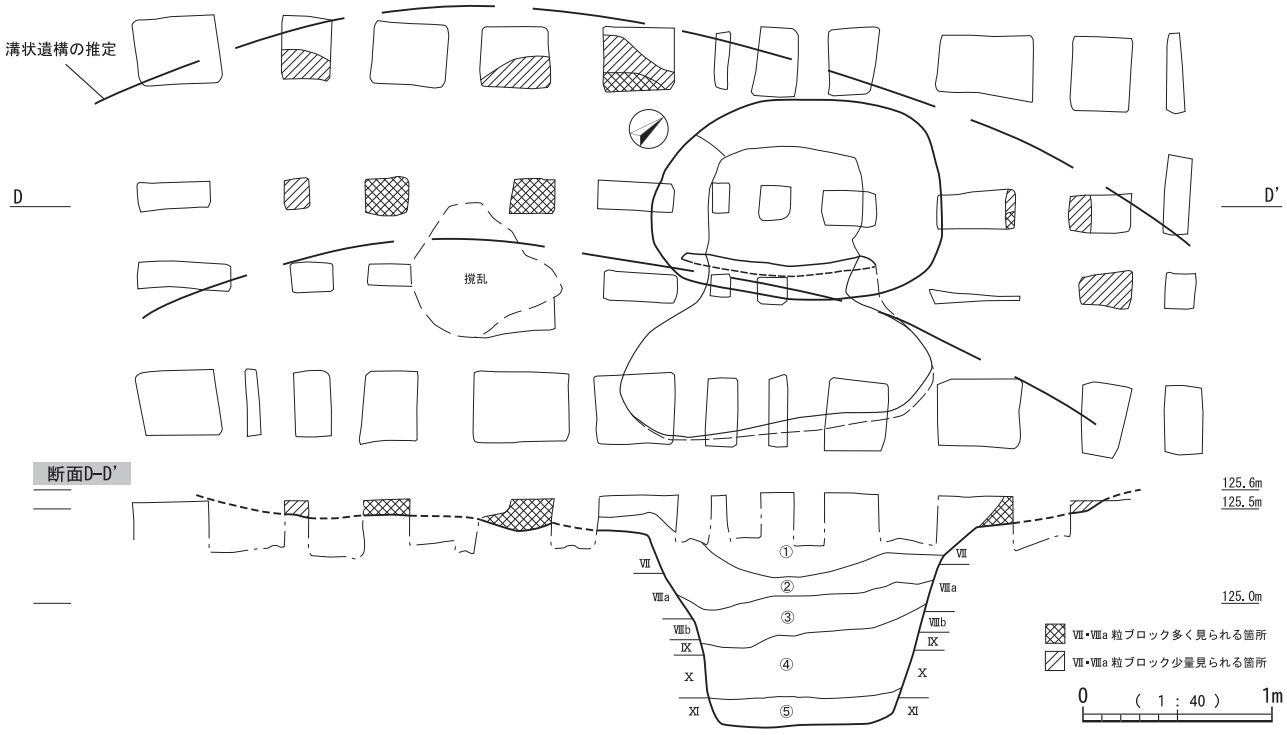
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	94	155	123	98	－	16	84	168	100	44
推　定	－	160	－	－	45	－	－	－	－	－

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	逆台形
玄室天井層	IX	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	台形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 平面形はやや左側に偏る楕円形を呈する。竪坑の床面は玄室と比べて若干低いが，ほぼ同じレベルである。埋土⑤はＸ・XI層主体で硬く，その上の埋土④はしまりがなく，崩れやすい。また，埋土⑤のⅦ・Ⅷ層の混在する比率は埋土④に比べ少ない。 【玄室】 羨門は短く，玄室との境にゆるやかな稜をもつ。玄室は幅広い楕円形である。鉄鏃束が左側奥壁付近で，赤色顔料が左側中央で出土した。床面に埋土は確認されなかったため，玄室に屍床などはなかったと考えられる。
工具痕	玄室内を中心に，断面が曲面となっている工具痕が複数みられるが，先端形が明確なものはない。
赤色顔料	玄室左側から検出した。（未分析）
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃７点（短頸鏃２点，圭頭鏃４点，変形柳葉鏃１点），異形鉄器１点が出土した。
備　考	－



第74図　22号地下式横穴墓(1)



第75図　22号地下式横穴墓(2)

２３号地下式横穴墓

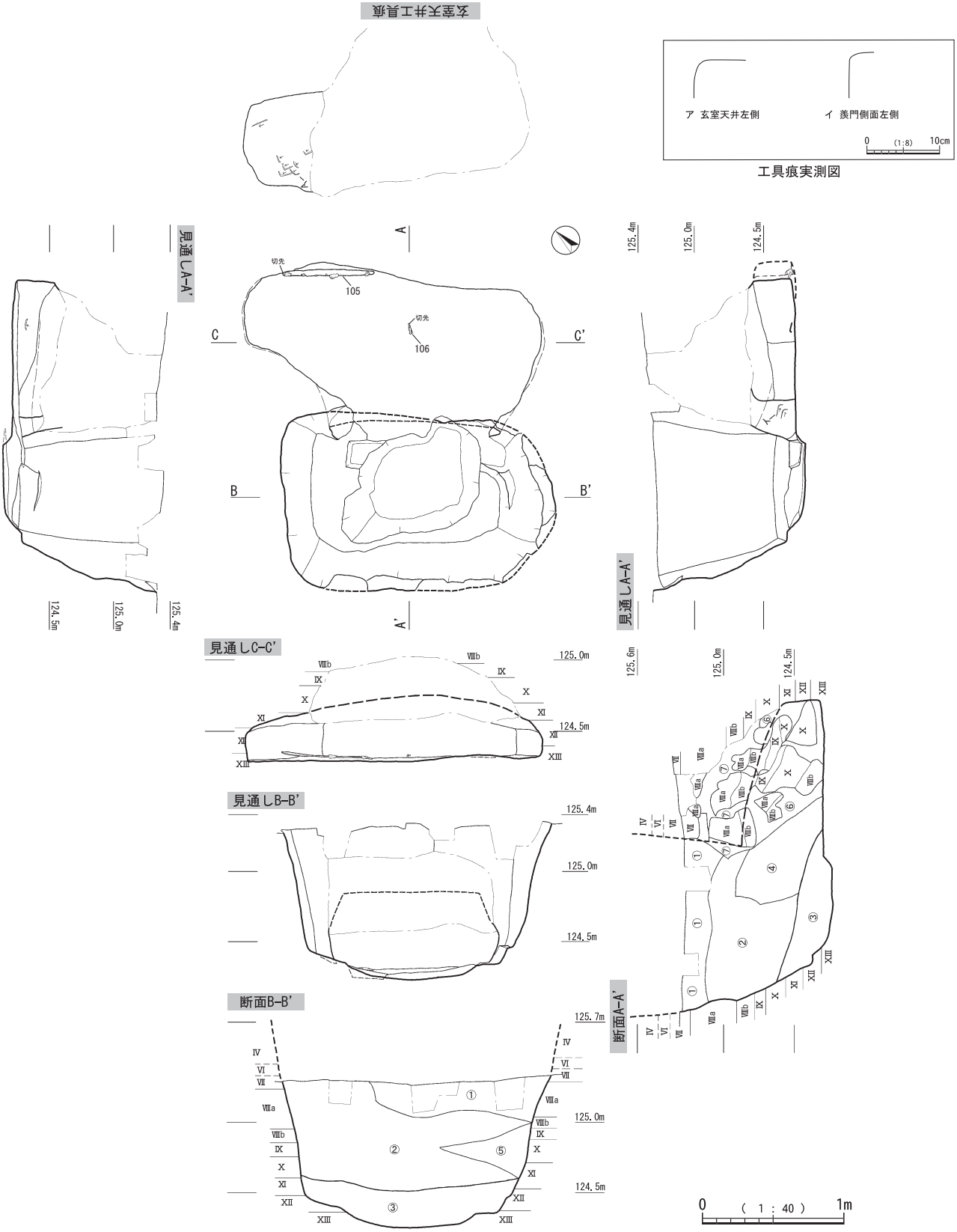
検出区	H-34	玄室開口方向	北東
分　類	Ｂ２		

検出状態	攪乱部分が多く，その土と竪坑埋土の特徴が類似していたため，判別が難しかった。検出面はⅦ層である。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	123	190	103	120	58	23	80	210	103	－
推　定	130	205	140	－	60	－	－	－	－	45

竪坑最下層	ⅩⅢ	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅸ・Ⅹ	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	ⅩⅢ	玄室断面形	隅丸長方形（レンズ状）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 竪坑は玄室の床面より一段深い。埋土内にはⅩ～ⅩⅢ層までの土が多く含まれている。比較的大型の竪坑である。 【玄室】 平面は左側に張り出す形状である。天井はⅧb～Ⅹ層であり，床面はⅩⅢ層と大変深い。玄室内埋土の状況から，埋土④が竪坑から流れ込んだ後に天井が崩落したと考えられる。床面から鉄剣などの副葬品が出土したことから，玄室に屍床はなかったと考えられる。
工具痕	玄室天井左側に，中央から左奥方向に削った幅の広い方形状の痕がみられ，また，羨道左側にも玄室奥方向に削った方形状の痕がみられる。 その他に，天井崩落ブロックに幅の狭い方形状の痕がみられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，刀子１点が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%, Ⅹ～ⅩⅢ層の粒・ブロック(5cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%, Ⅹ～ⅩⅢ層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%, Ⅹ～ⅩⅢ層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒色土。しまり有り。
④ ②が崩落した土。軟らかい。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%, Ⅹ層を約5%含む黒色土。②よりⅩ～ⅩⅢ層少ない。埋めた時の入り方の影響か？
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロックと, Ⅹ層の粒・ブロックは上部から入り込んだ黒色土が混在する。しまりなし。天井が崩落した土。
⑦ 黒色土にⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒が少量混ざる。天井が崩落した土。

第76図　23号地下式横穴墓

２４号地下式横穴墓

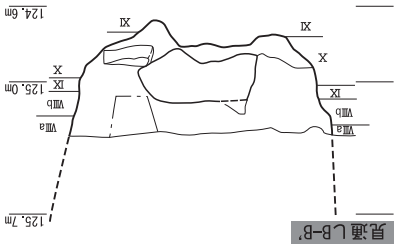
検出区	H-34	玄室開口方向	北側：北北東　南側：南南西
分　類	北側：C　　南側：C		

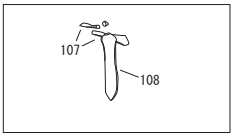
検出状態	標高が高い地点に位置しており，Ⅶ層付近まで耕作による攪乱を受けている。Ⅷa層まで掘り下げた段階で，竪坑埋土及び南側の玄室を確認した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	88	148	47	（北）62 （南）122	（北）28 （南）36	－	（北）50 （南）62	（北）100 （南）188	（北）52 （南）54	（北）30 （南）36
推　定	100	150	95	－	（北）35 （南）－	－	－	－	－	－

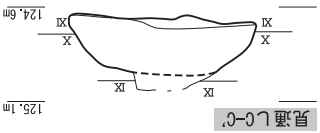
竪坑最下層	Ⅺ	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	（北側）長方形（やや不整形） （南側）楕円形
玄室天井層	（北側）Ⅹ （南側）Ⅷa	玄室平面形	（北側）　楕円形 （南側）　楕円形		
玄室床面層	（北側）Ⅺ （南側）Ⅹ	玄室断面形	（北側）　台形 （南側）　隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

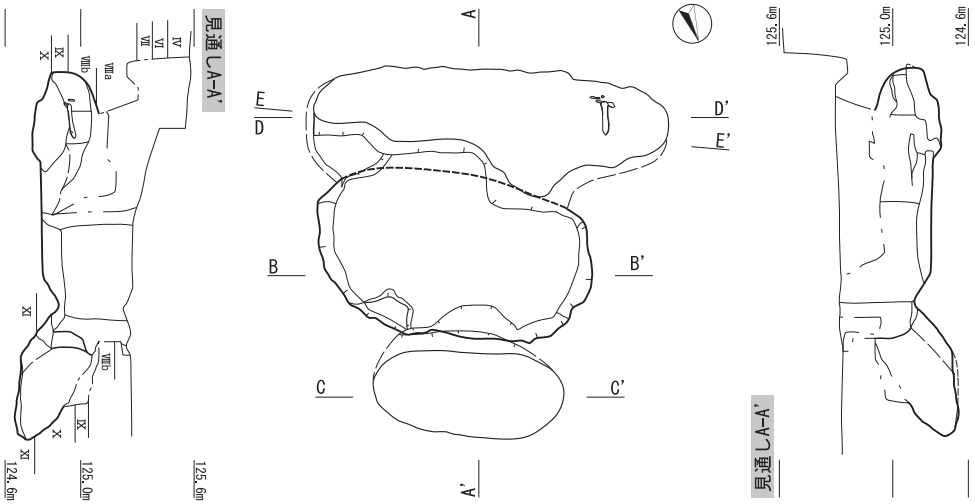
概　要	【竪坑】 床面は平坦である。床面近くの埋土①は，Ⅸ・Ⅹ層が主体であり，閉塞時の床面と考えられる。南側玄室および羨道部分の埋土③・④は黒褐色土が多く，Ⅶ・Ⅷ層を多く含む埋土②と明確に分かれるため，上部から入り込んできたものと推定される。 【北玄室】 床面は竪坑より低い。主軸に平行に４回にわたり埋土断面を確認したが，全てⅩ・Ⅺ層が堆積しており，上部からの黒色土や竪坑崩落土が入った形跡はみられない。埋土⑤はⅦ～Ⅺの粒・ブロックを含む土で充填されており，南側玄室のような堆積状況とは異なる。一括で埋めた可能性も考えられる。 【南玄室】 床面は北玄室より高い位置に造られている。横幅は北玄室・竪坑より広い。副葬された鉄鏃は，約 90 度でお互いが錆着しており，床面より高い位置で出土した。原位置を保っていない可能性が高い。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。年代測定では 209calAD-265calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃１点（長三角形鏃１点），異形鉄器１点が出土した。
備　考	－

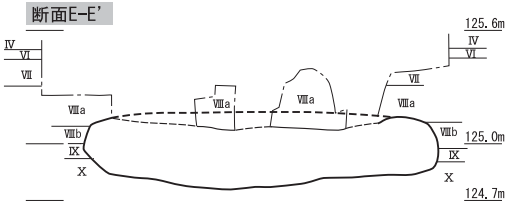


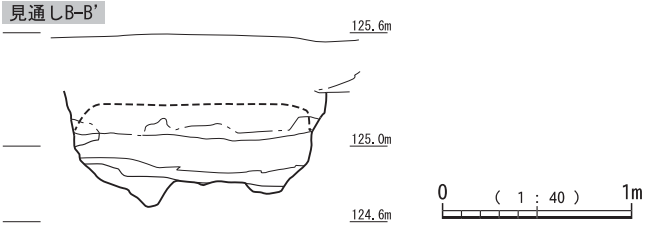


鉄器出土状況（1:20））

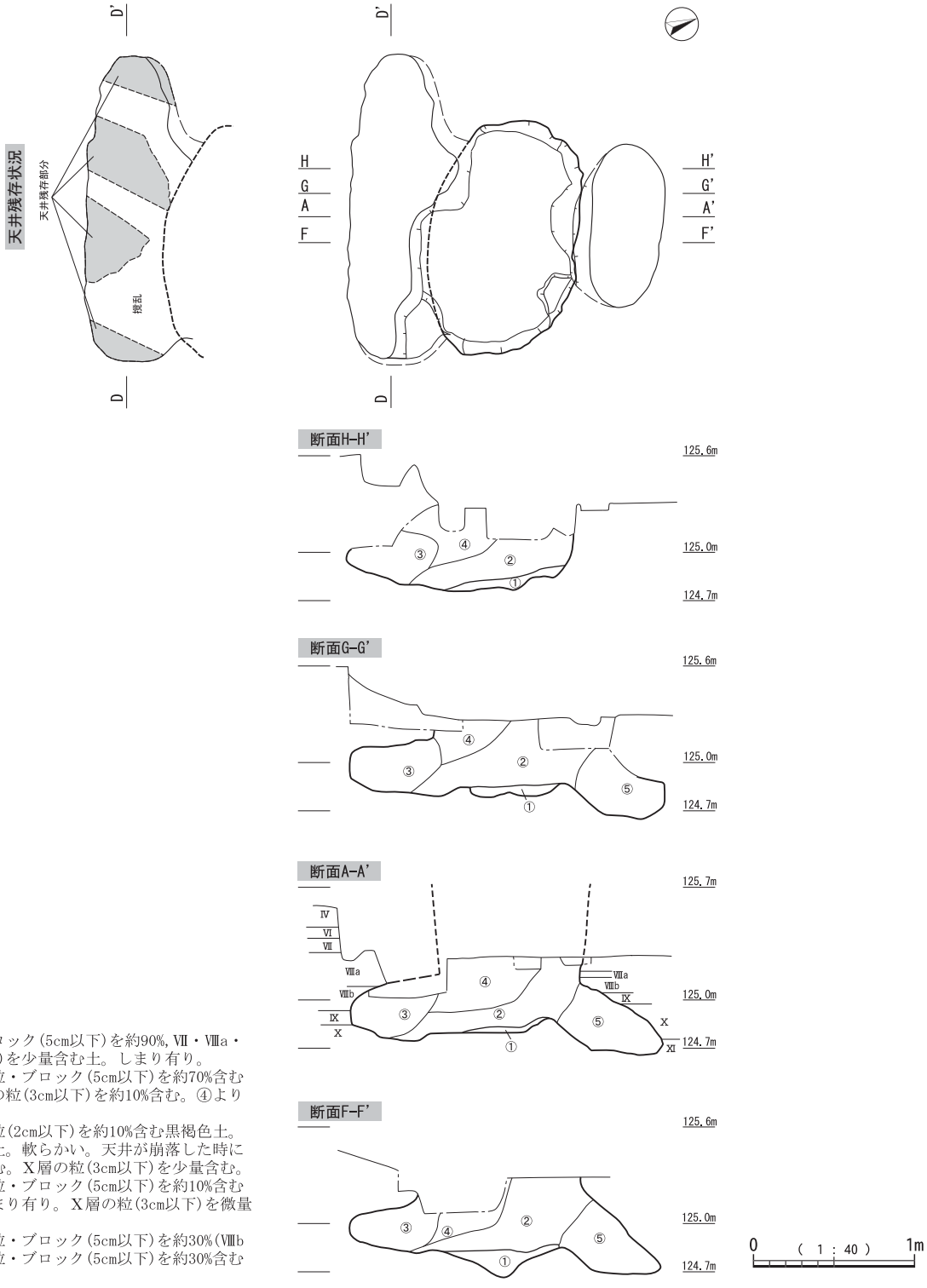








第77図　24号地下式横穴墓(1)



① Ⅸ・Ⅹ層の粒・ブロック(5cm以下)を約90%,Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含む土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約70%含む黒色土。Ⅸ・Ⅹ層の粒(3cm以下)を約10%含む。④より硬い。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約10%含む黒褐色土。玄室へ入り込んだ土。軟らかい。天井が崩落した時に入り込んだ土を含む。Ⅹ層の粒(3cm以下)を少量含む。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒褐色土。ややしまり有り。Ⅹ層の粒(3cm以下)を微量に含む。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%(Ⅷb多い),Ⅹ・Ⅺ層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒色土。硬い。

第78図　24号地下式横穴墓(2)

25号地下式横穴墓

検出区	H-34	玄室開口方向	北北西
分　類	A		

検出状態	隣接する 24 号地下式横穴墓の断面確認の際に，竪坑を検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	78	110	45	54	29	4	39	114	43	40
推　定	85	125	120	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	六角形
玄室天井層	IX	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は若干凹みをもって造られている。竪坑横幅が約１ｍ強であるが，XI層まで掘り抜かれており，小型の割に深い。床面近くの埋土②は硬いX・XI層が主体であり，閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 埋土③はX・XI層を多く含み，しまりがあり，屍床面と考えられる。竪坑より 20cm 程度床面が低い構造である。
工具痕	竪坑背面に下方向へ，玄室右側面に奥方向へ掘削した痕がみられるが，幅や先端の形状がわかるものは残っていない。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	な
備　考	－

26号地下式横穴墓

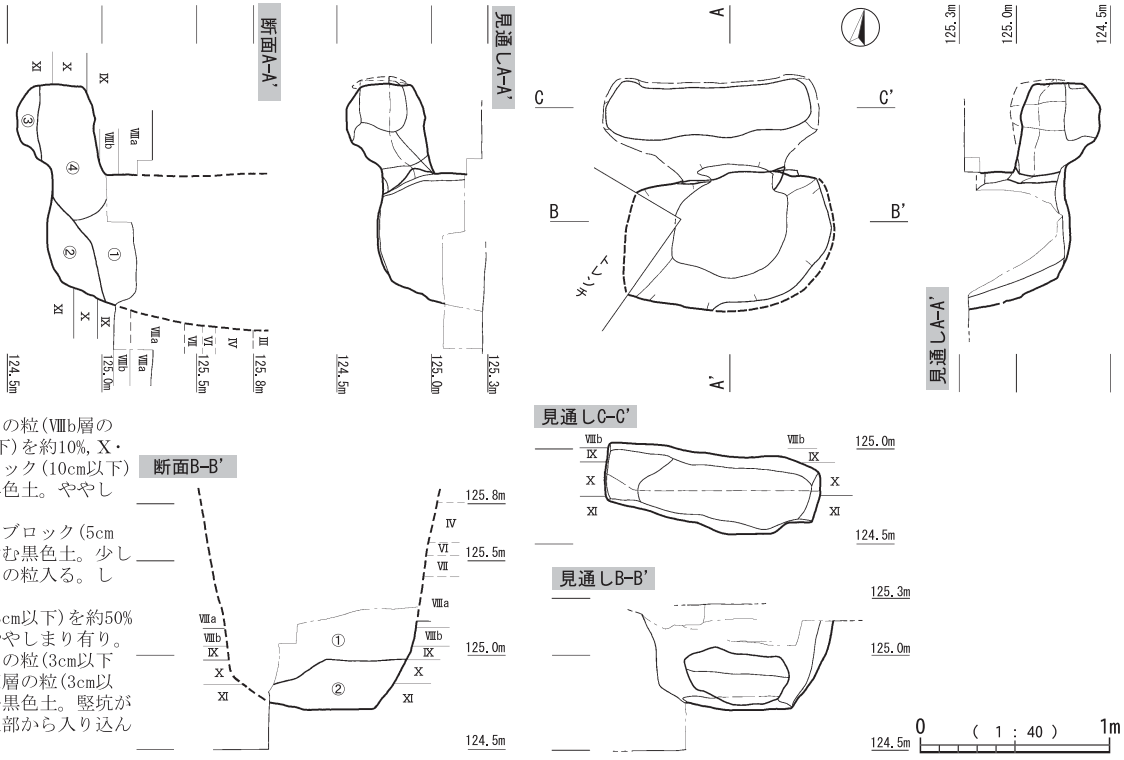
検出区	G・H-34	玄室開口方向	北西
分　類	A		

検出状態	隣接する 25 号地下式横穴墓の検出後，周囲を精査して検出した。玄室天井部は攪乱により削平されていた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	88	145	64	78	－	18	77	170	95	40
推　定	100	155	120	－	55	－	－	－	－	－

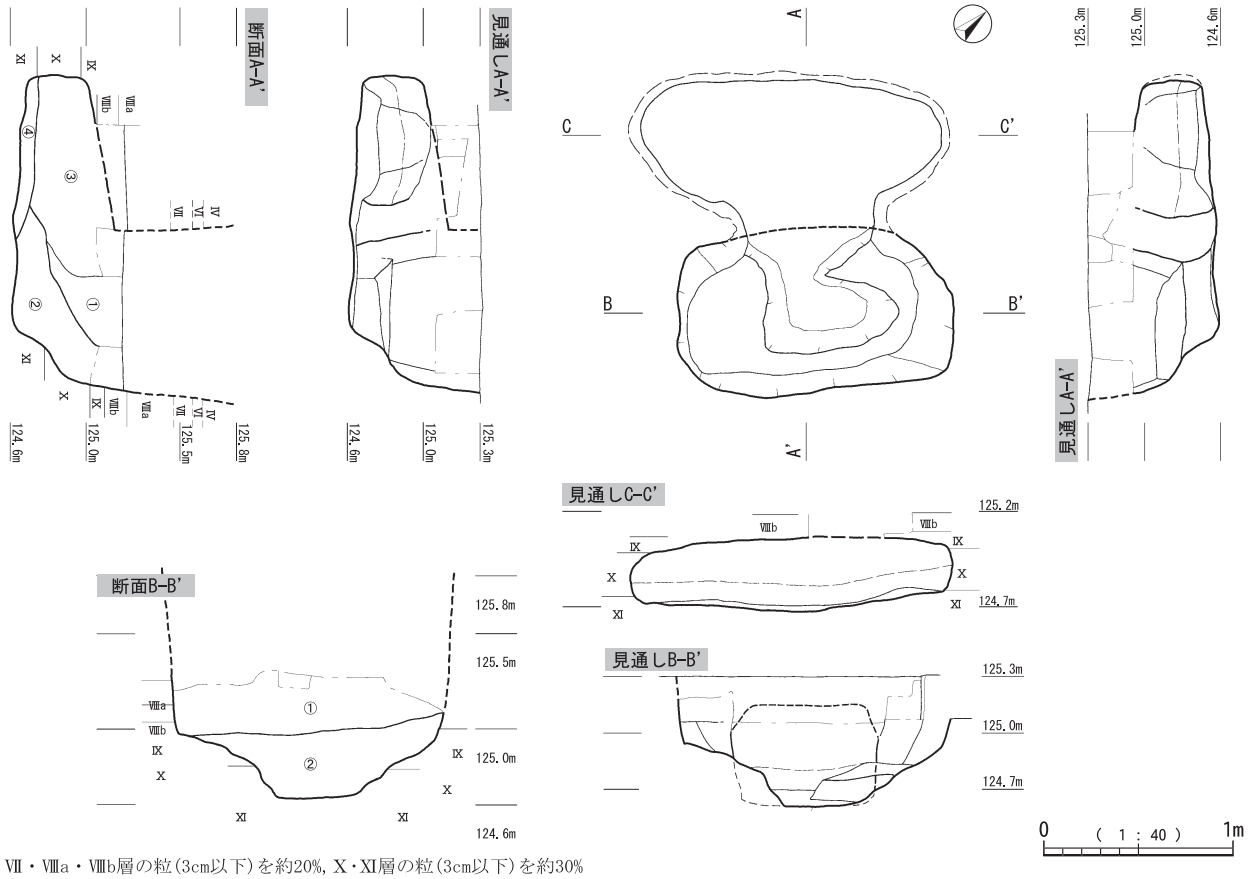
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	IX	玄室平面形	楕円形（横長）		
玄室床面層	XI	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は中央部から羨門にかけて低くなる。埋土②は，X・XI層主体でⅧ層は含まない。埋土①は，Ⅶ・Ⅷ層を主体とし，その硬さなどから埋土②と明確に異なる。そのため，埋土②は閉塞時の床面と考えられる。羨道前はほぼ軟らかい黒色土で占められ，上部から流入したものと考えられる。 【玄室】 左側へやや張り出す形状である。埋土には，竪坑の埋土が流入しているが，玄室内に天井崩落土はみられなかった。ただし，トレンチャーにより天井は削平され，残存していたのは一部であった。羨道と玄室の境界には，稜線がみられる。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(Ⅷb層の粒多い)(3cm以下)を約10%, X・XI層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② X・XI層の粒・ブロック(5cm以下)を約90%含む黒色土。少しⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒入る。しまり有り。
③ X・XI層の粒(3cm以下)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%, X・XI層の粒(3cm以下)を約30%含む黒色土。竪坑が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土。

第79図　25号地下式横穴墓



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%, X・XI層の粒(3cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
② X・XI層の粒・ブロックを約70%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%, 少量のX・XI層土を含む黒色土。軟らかい。竪坑埋土の流れ込みと上部から入り込んだ黒色土が混在する。
④ 褐色と黒色土の混ざり。軟らかい。屍床と思われる。

第80図　26号地下式横穴墓

28号地下式横穴墓

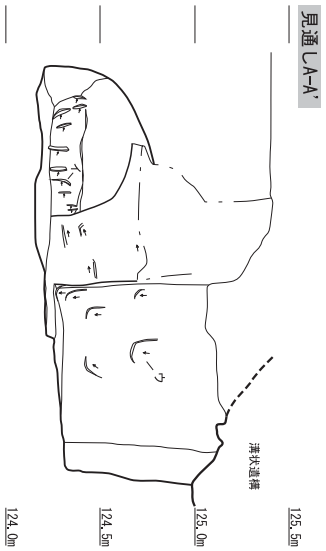
検出区	H-34	玄室開口方向	東北東
分　類	B 2		

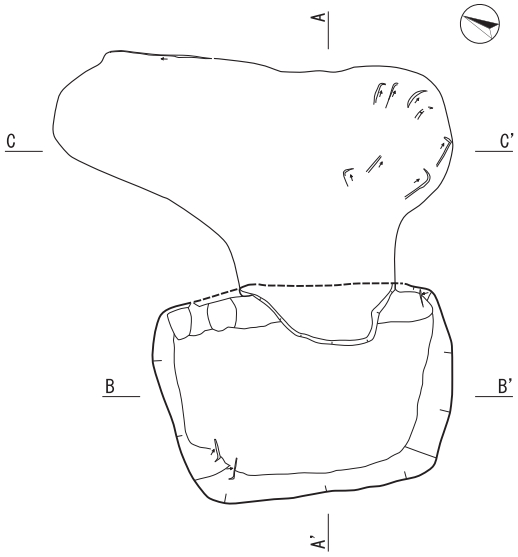
検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する土がみられたため，周辺の攪乱を取り除き検出した。調査終了後に，竪坑の周辺で弧状の遺構が検出され，それに伴い竪坑両側を再調査し，溝状になる遺構と切りあって墓が造られていることが判明した。玄室天井は羨門付近から中央付近にかけて崩落していた。

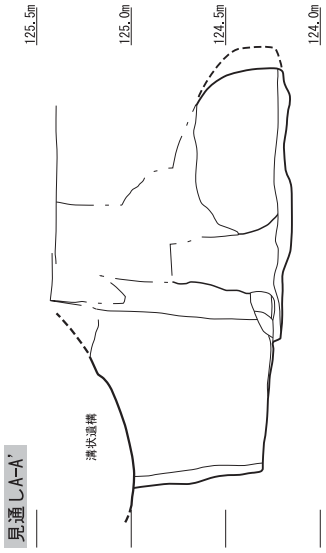
	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	110	152	86	84	－	40	82	210	122	64
推定	120	165	140	－	60	－	－	－	－	－

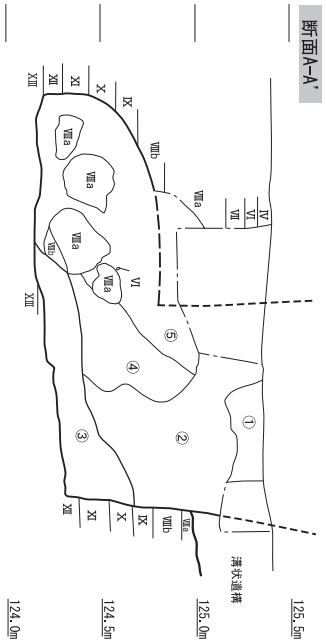
竪坑最下層	Ⅻ	竪坑平面形	隅丸長方形（正方形に近い）	羨門正面形	隅丸長方形（正方形に近い）
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅻ・ⅩⅢ	玄室断面形	隅丸長方形（レンズ状）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

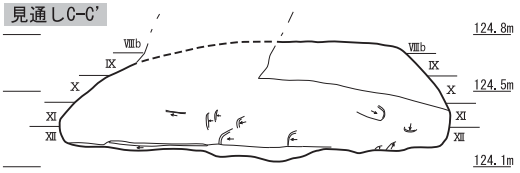
概要	【竪坑】 埋土③はⅨ～Ⅻ層が主体であり，しまりがあり硬く，上部の埋土②と明確に区別できるため，閉塞時の床面と考えられる。床面はほぼ平坦だが，羨門近くの床面にやや凹みがみられる。 【玄室】 平面形は左側へ偏る片袖状である。天井はⅧ層であり，玄室内にブロック状に崩落していた。羨道と玄室の境には稜線が形成される。内部には工具痕が多数残存していた。
工具痕	竪坑では下方向に，玄室には奥方向に掘削した痕が残っている。 玄室天井奥や玄室床面にアの方形状のものが，竪坑及び玄室天井･側面にイ・ウのU字形のものがみられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備考	－

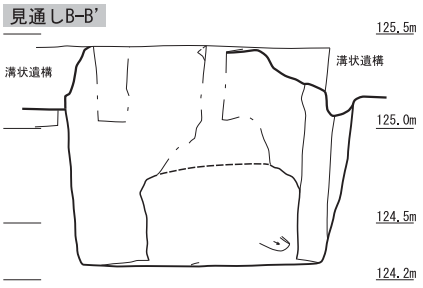


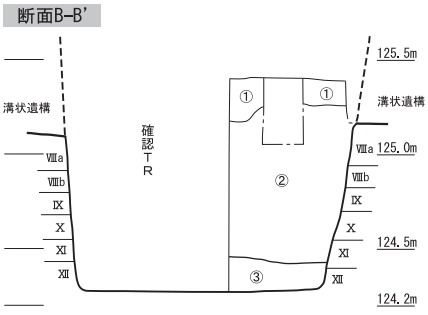


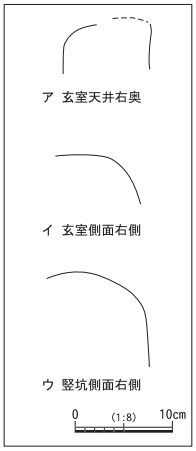




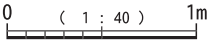






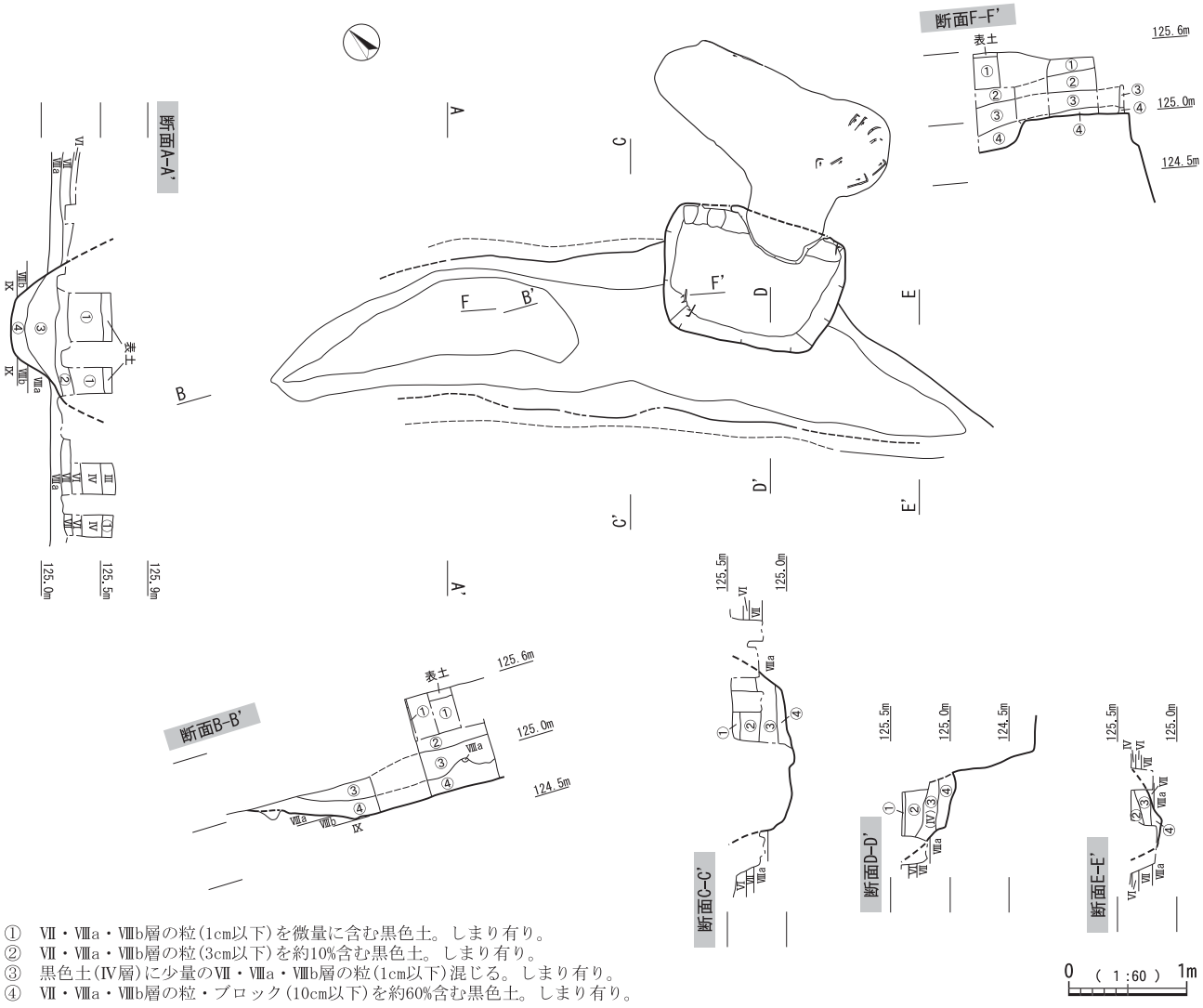


工具痕実測図



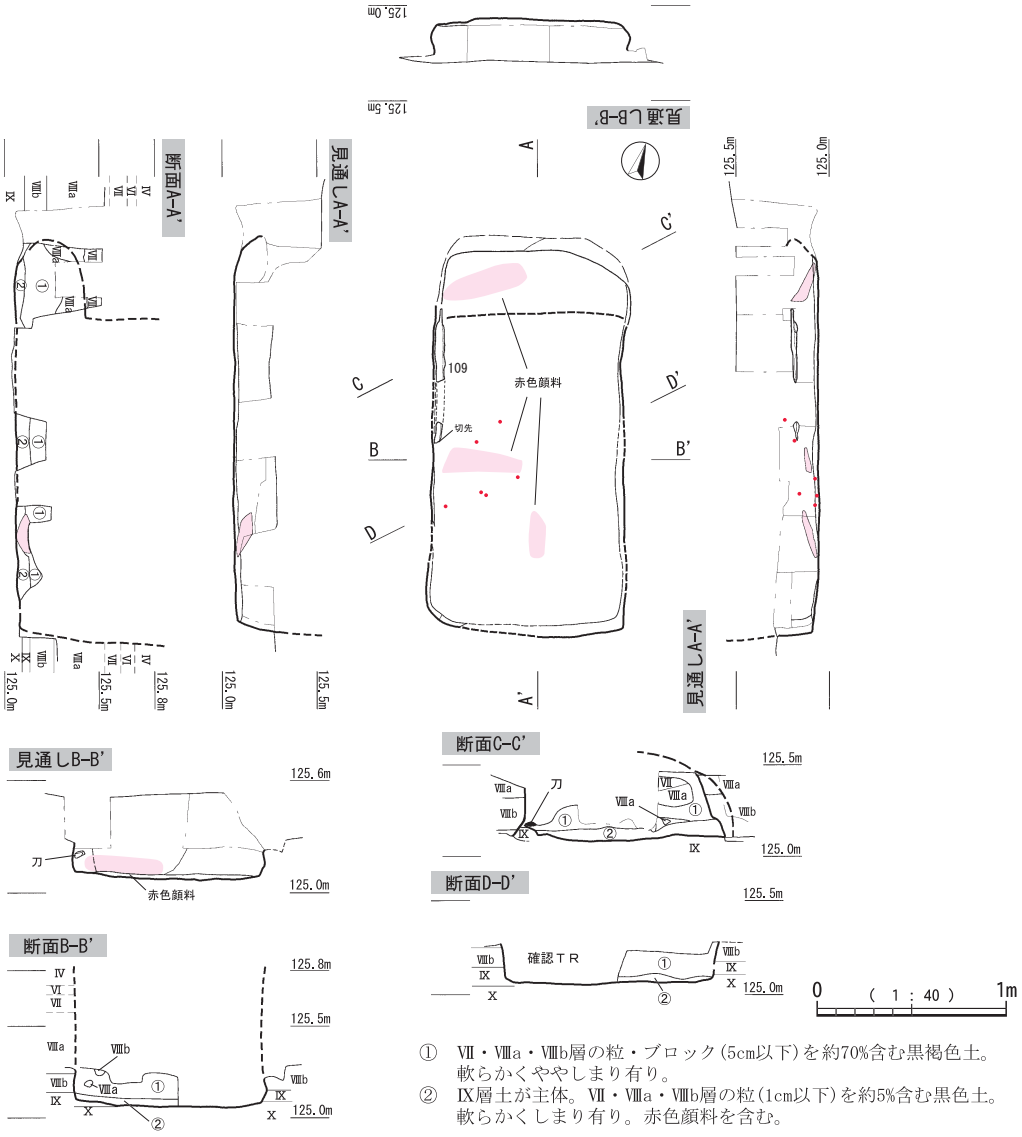
① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%, Ⅹ・Ⅺ層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ層ブロックが主体。硬くしまる。
④ ②が崩落した土。しまり弱い。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を微量に含む黒色土。軟らかくしまりなし。天井が崩落した土。

第81図　28号地下式横穴墓(1)



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り。
③ 黒色土(Ⅳ層)に少量のⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)混じる。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む黒色土。しまり有り。

第82図　28号地下式横穴墓(2)・28号溝状遺構



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約70%含む黒褐色土。軟らかくややしまり有り。
② Ⅸ層土が主体。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約5%含む黒色土。軟らかくしまり有り。赤色顔料を含む。

第83図　２号土坑墓

２号土坑墓（第83図）

Ｇ－34区で検出した。トレンチャーによって攪乱された部分を取り除いた結果，検出することができた。平面形は長方形を呈し，床面はⅨ・Ⅹ層まで掘り込まれている。原地形の標高が高い場所であったため，上部はほとんど後世に削平されている。残存していた部分には，床面付近で多くの赤色顔料（水銀朱）や炭化物がみられた。また，トレンチャーで一部が切断されているものの全形を推定できる鉄刀（109）が出土した。形態と床面の状況から土坑墓と判断した。

エリア３出土鉄器（第84図～第90図）

15号地下式横穴墓（第84図）

鉄器は異形鉄器１点，円錐形鉄器２点が出土した。81は異形鉄器である。刃部の一部から下部が欠損する。断面形は両鎬造りである。先端は圭頭形を呈し，残存する端部全てに刃部を造る。一部に錆化した布の痕跡がみられるが，状態が悪く詳細は不明である。また，下部に断面が円形の木質が付着するが，81に伴うものかは不明である。下部が残存しないため異形鉄器とするには疑問が残るが，ここでは異形鉄器として取り扱う。

82・83は円錐形鉄器である。82は全長4.5cm，最大幅2.45cm，厚さ1.5mmを測る。端部の合わせ方は合わせ型である。83は全長7.3cm，最大幅３cm，厚さ2.3mmを測る。端部の合わせ方は合わせ型である。先端に錆化した葉が付着する。立小野堀遺跡で出土した円錐状鉄器は，鉄鐸あるいは石突との指摘があるが，現状ではどちらとも確定することができないため，今回はすべて円錐状鉄器として取り扱う。

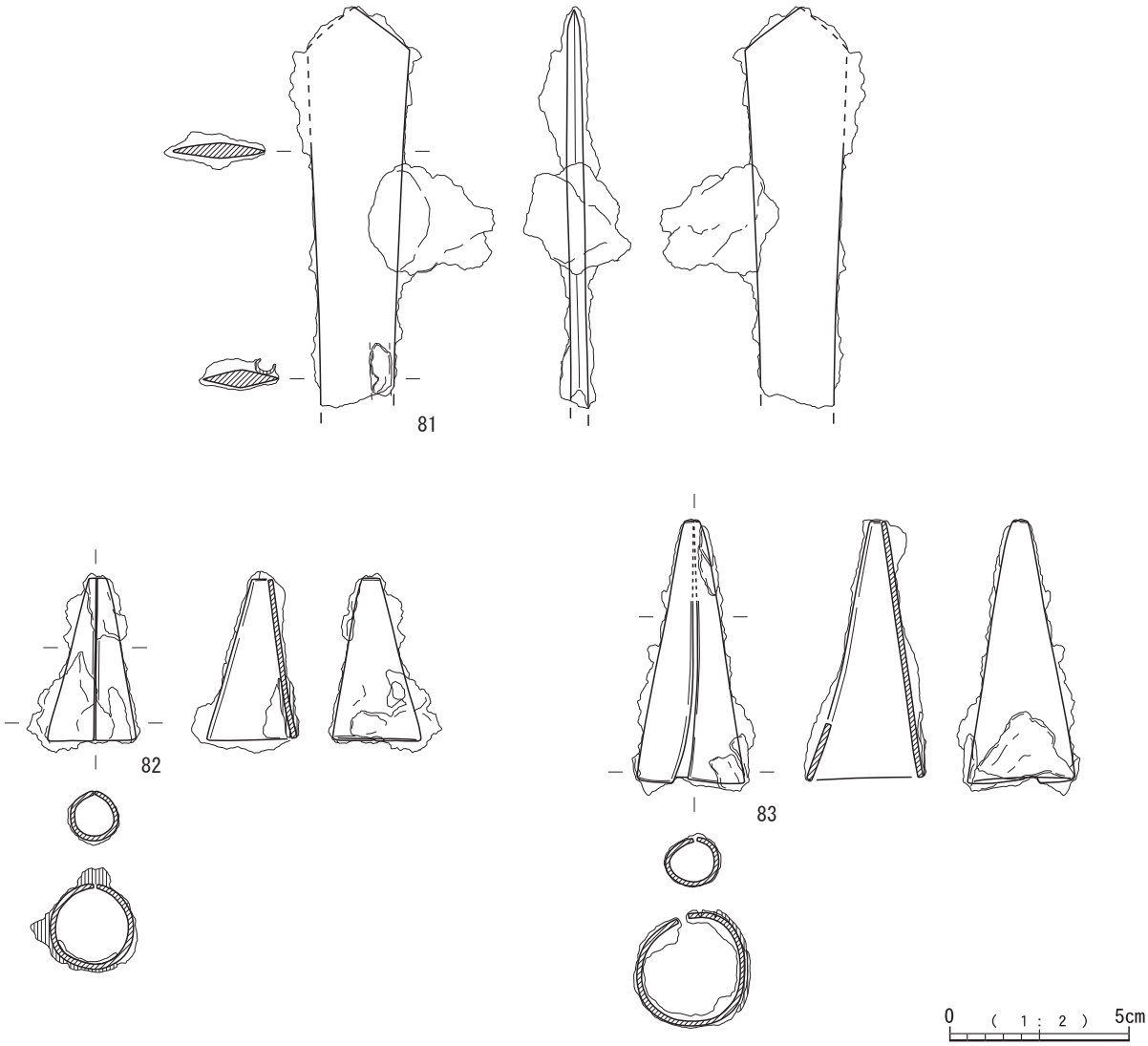
16号地下式横穴墓（第85図）

鉄器は鉄剣１点，短剣１点が出土した。84は鉄剣である。刃部に錆による歪みが生じている。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。状態は悪いものの，刃部に鞘木の木質が残存する。関部直下に把縁の一部が残存する。その横にも把縁の一部と有機

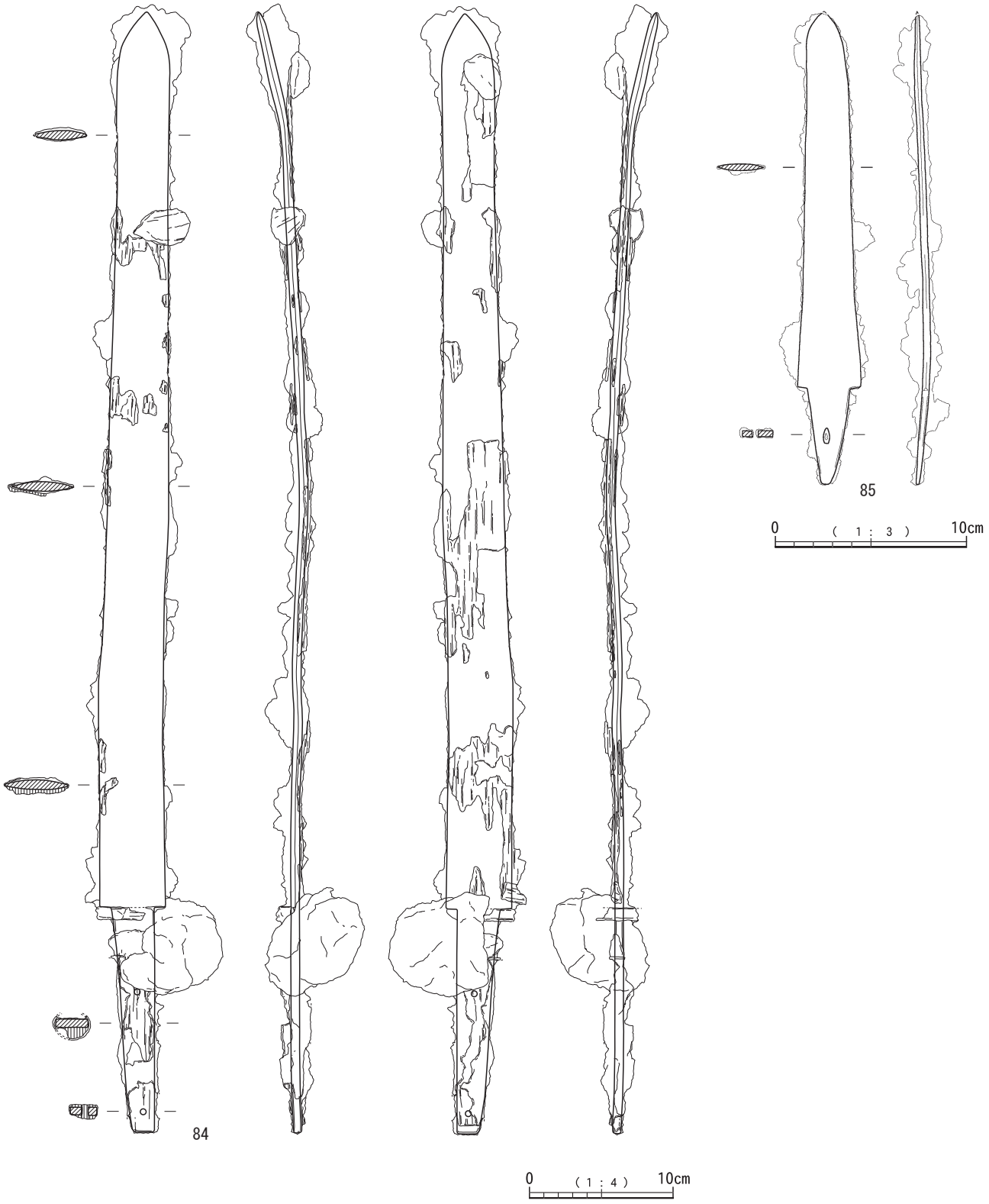
質の塊が残存するが，状態が悪く構造は不明である。関部は深さ約８mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔が確認できる。茎部に柄木とみられる木質が残存する。85は短剣である。刃部の一部が欠損する。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部は深さ約4.5mmのわずかに斜めに落ちる形態である。茎部は茎尻に向かってやや湾曲しながら幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。縦７mm，最大幅３mmの涙滴型の目釘孔が穿たれている。有機質の付着は認められなかった。

20号地下式横穴墓（第86図）

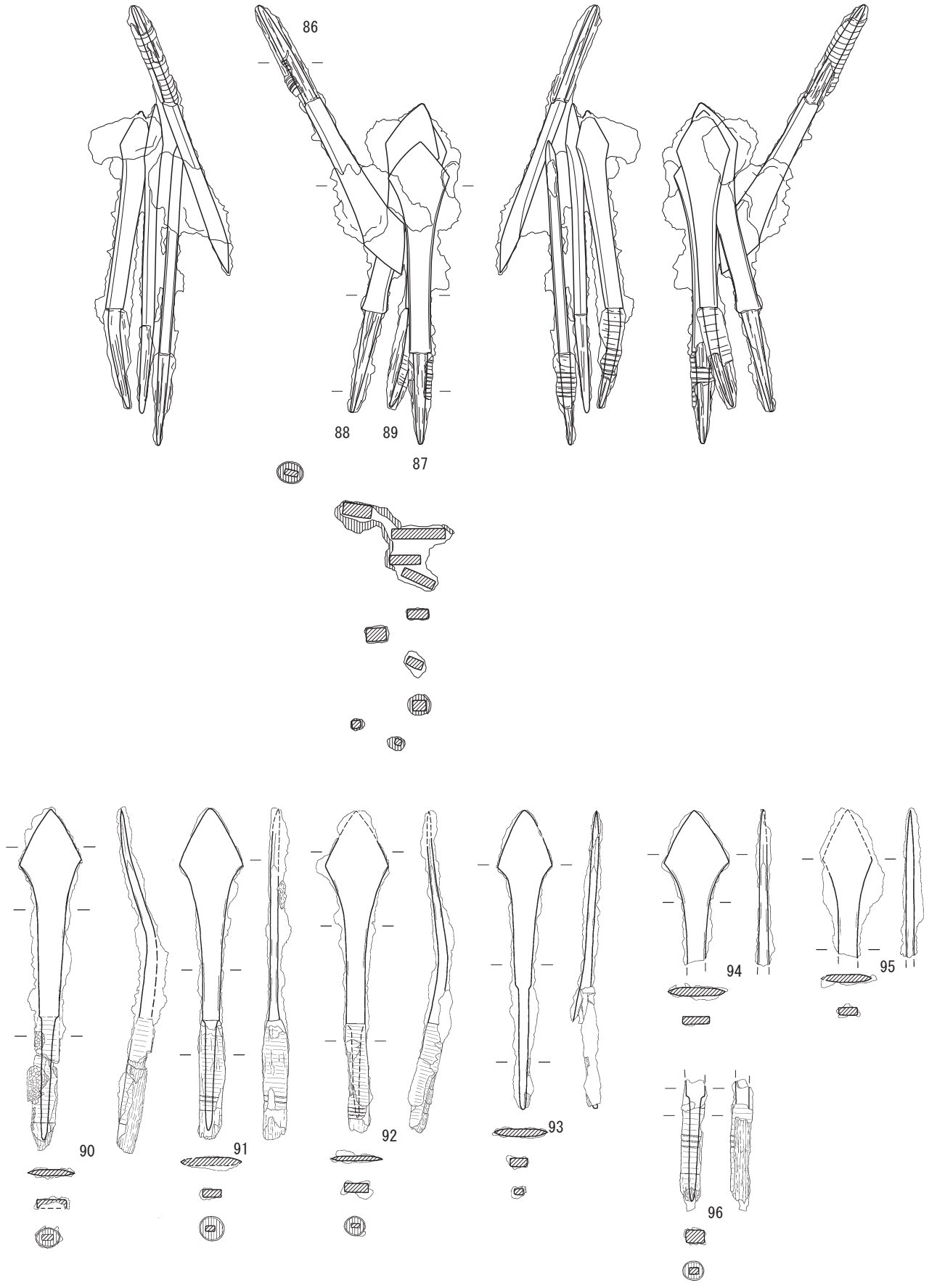
鉄器は鉄鏃11点（圭頭鏃10点，鉄鏃片１点）が出土した。86～93は圭頭鏃Ⅱg類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈し，明瞭な頸部関を有する。86～89は錆着していたため，そのまま実測した。86・87は矢柄が残存する。巻きの単位が良好にみえる口巻きが一部残存するが，全体的に状態は悪い。88は矢柄の木質が残存するものの，状態が悪い。89は頸部関が屈曲するが，錆化によるものと思われる。矢柄が残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。86～89は全体に有機質とみられるものが付着するが，状態が悪く材質は不明である。鉄鏃を覆うように付着していることから，布や皮革で包むように副葬したと考えられる。90は錆化が進行しており変形がみられるが，原形は保たれている。矢柄が残存するものの状態はやや悪い。口巻きの単位は不明瞭だが，端部が確認できる。矢柄に錆化した葉が付着する。91は錆化が進行しており刃部の一部が不明瞭だが，原形は保たれている。頸部側面の一部に錆化した葉が付着する。矢柄が残存しており，口巻きの単位は不明瞭だが端部が確認できる。92は錆化が進行しており，刃部が不明瞭で頸部が変形する。矢柄が残存するものの，状態はやや悪く口巻きの単位は不明瞭である。93は錆化が進行しており刃部・茎部に割れが生じて



第84図　15号地下式横穴墓出土鉄器



第85図　16号地下式横穴墓出土鉄器



第86図　20号地下式横穴墓出土鉄器

いるが，原形は保たれている。茎部に矢柄の木質がわずかに残存する。94・95は鏃身部の一部から茎部が欠損する。94は銹化が進行しており刃部の一部が不明瞭だが，原形は保たれている。95は銹化が進行しており，刃部が不明瞭である。Ｘ線写真の観察から，圭頭鏃と推定した。96は鏃身部の一部から茎部である。わずかに残存した頸部から，角関であることが確認できる。矢柄が残存するものの，状態はやや悪く口巻きの単位は不明瞭である。94あるいは95と同一個体と考えられるが，断面が銹化しており接合できない。

22号地下式横穴墓（第87図）

鉄器は鉄鏃７点（短頸鏃２点，圭頭鏃４点，変形柳葉鏃１点），異形鉄器１点が出土した。97・98は短頸鏃Ⅱ類である。銹着していたため，そのまま実測した。97は銹化が進行しており，刃部の一部が不明瞭である。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態はやや悪く口巻きの単位は不明瞭である。98は茎部の一部が欠損する。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に矢柄の木質がわずかに残存する。99～101は圭頭鏃である。99は圭頭鏃Ⅲa類である。銹化の進行しており，刃部の一部が不明瞭である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡はみられない。100は圭頭鏃Ⅲa類である。茎部の一部が欠損する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存しており，口巻きの単位は不明瞭だが端部が確認できる。矢柄に段を有することから，矢竹の端部を加工せず切り込みのみを入れた状態で鉄鏃に装着し，口巻きを施したと考えられる。101は圭頭鏃Ⅲa類である。銹化が進行しており，刃部の一部が不明瞭である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，銹による変形がみられる。状態はやや悪く，口巻きの単位は不明瞭である。102は変形柳葉鏃である。銹化が進行しており，先端に剥離が生じている。先端の形状は圭頭形だが山形突起を有し，山形突起まで刃部を有する。先端部の断面形は剥離により不明だが，角から下は両丸造りである。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。頸部の一面に溝がみられる。刃部の一部に銹化した葉が付着する。刃部の剥離の様子や鉄塊から，二個体の鉄鏃を鍛接したものと考えられたため，九州国立博物館の協力によりＸ線ＣＴ撮影をおこなった。Ｘ線ＣＴ画像の観察から，頸部に鍛接の痕跡がみられた。矢柄が残存するが口巻きの単位が不明瞭であり，やや状態が悪い。103は圭頭鏃である。銹化が進行しており，切先の形態が不明瞭だが，Ｘ線写真の観察からふくらのない切先と推定した。全体的に薄い造りであり，断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。刃部は角を２つ有し，２つめの角が刃部関である。矢柄が良好に残存する。口巻きの一部では巻きの単位が明瞭にみられ，最後の入れ込みまで観察できる。銹化した葉が付着する。104は異形鉄器である。足部の一部が欠損するものの，最大長13.6cm，最大幅4.2cmを測り，立小野堀遺跡内で出土した異形鉄器の中では最も小型である。先端部は柳葉形を呈し，そこから直線的に狭まり足部に至る。断面形は身部が平造り，足部が長方形を呈する。足部の内面は逆Ｖ字状を呈しており，膨らみながら広がった後，窄まりながら外湾する。足部の側面に銹化した葉が付着する。顕微鏡での観察から，被子植物の葉としている。穿孔は３孔施される。先端から5.1cm下に１孔，根挟み痕を挟むように２孔施されている。根挟みの残存状態が悪く構造は不明だが，根挟みを固定するための穿孔と考えられる。

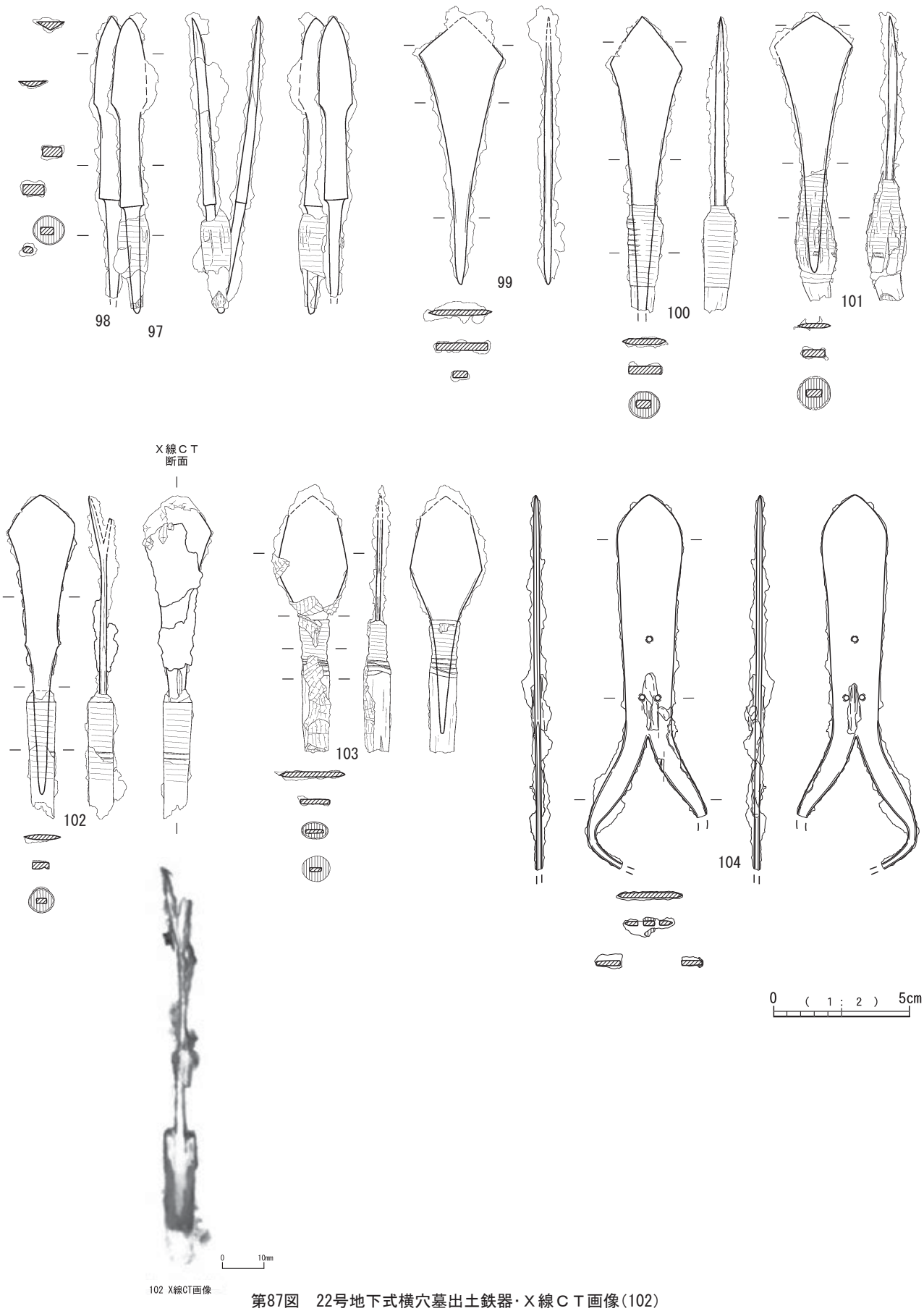
23号地下式横穴墓（第88図）

鉄器は鉄剣１点，刀子１点が出土した。105は鉄剣である。刃部に銹による歪みが生じている。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。顕微鏡での観察から，刃部の一部に銹化した布の痕跡が確認されている。鞘木はなく布を巻くなどして副葬したと考えられる。関部はナデの形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔が確認できる。茎部に有機質が付着するが，状態が悪く詳細は不明である。

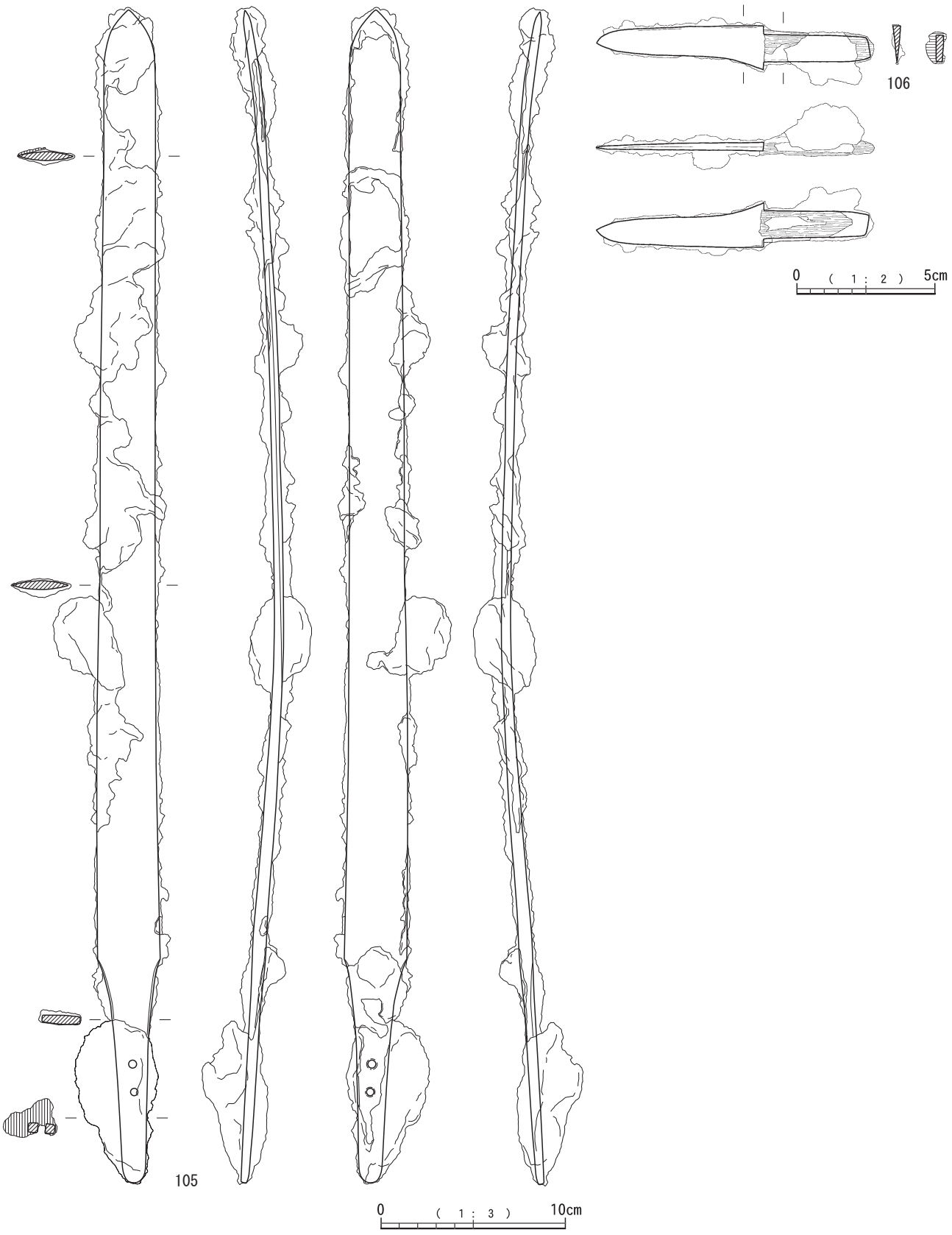
106は刀子である。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先である。刃部にくびれがみられるが，研ぎ減りによるものと考えられる。断面は平造りを呈する。関部は両関で，深さ約３mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かってわずかに幅が狭くなる。茎断面は台形状を呈する。柄の木質が残存するが，状態が悪く構造は不明である。

24号地下式横穴墓（第89図）

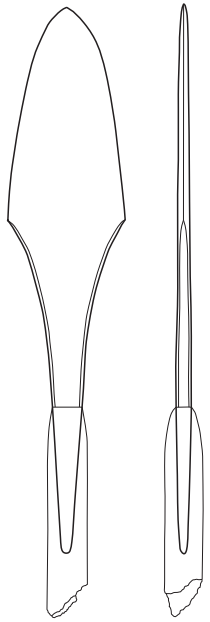
鉄器は鉄鏃１点（長三角形鏃１点），異形鉄器１点が出土した。107は長三角形鏃である。刃部先端に銹化した平織布が付着する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの状態はやや悪い。口巻きの単位は不明瞭だが，端部が確認できる。108は足部のない異形鉄器である。先端部は圭頭形を呈し，そこからわずかに括れた後，直線的にわずかに狭まる。端部はＶ字状を呈する。Ｖ字状の端部以外すべて刃部を造っており，断面形は平造りである。刃部側面にわずかに銹化した平織布が付着する。穿孔が２孔施されている。根挟みを挟むように穿たれていることから，紐状のものを通して根挟みを固定していたと考えられる。根挟みの残存状態は悪く，構造は不明である。



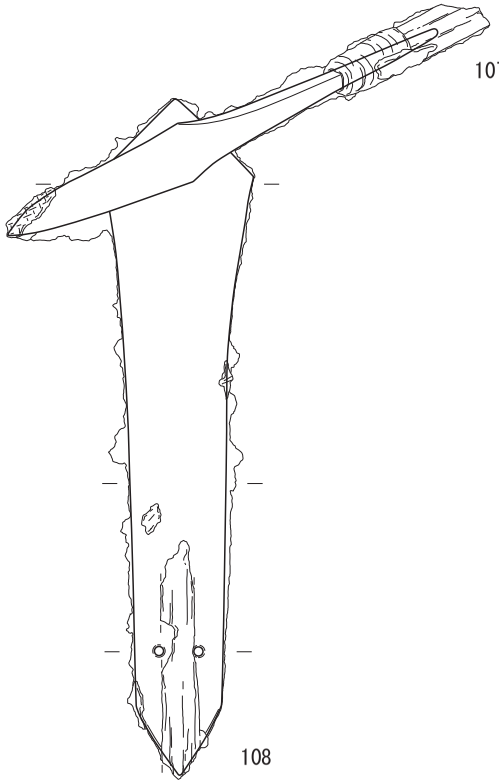
第87図　22号地下式横穴墓出土鉄器・Ｘ線ＣＴ画像(102)



第88図　23号地下式横穴墓出土鉄器

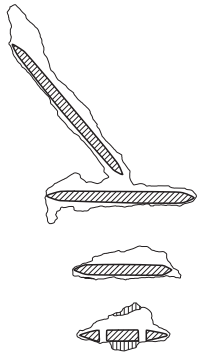


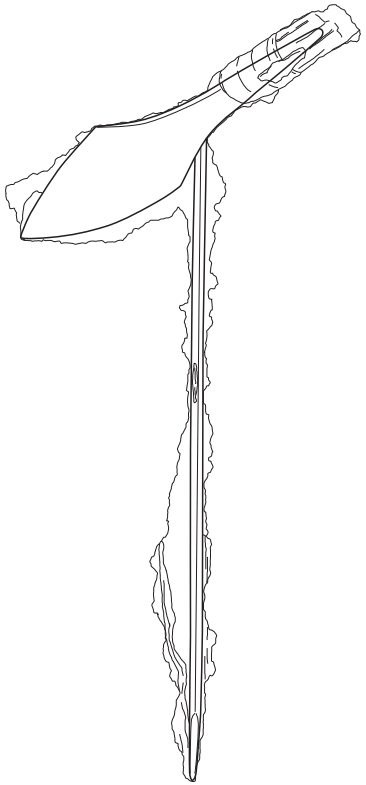
107 模式図

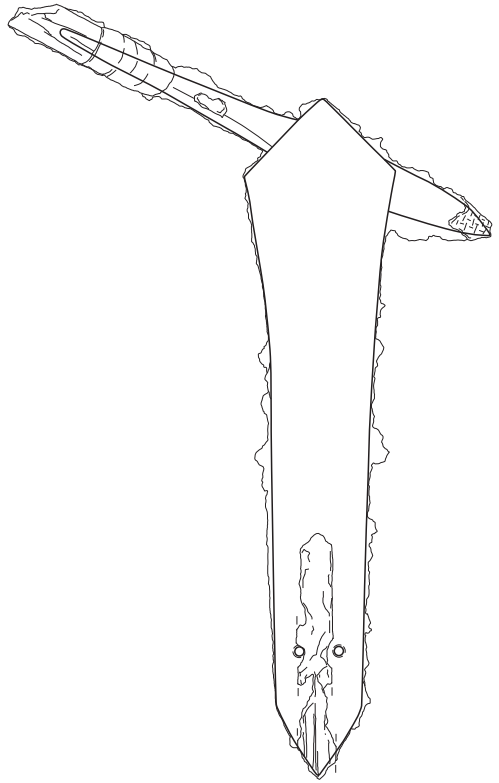


107

108

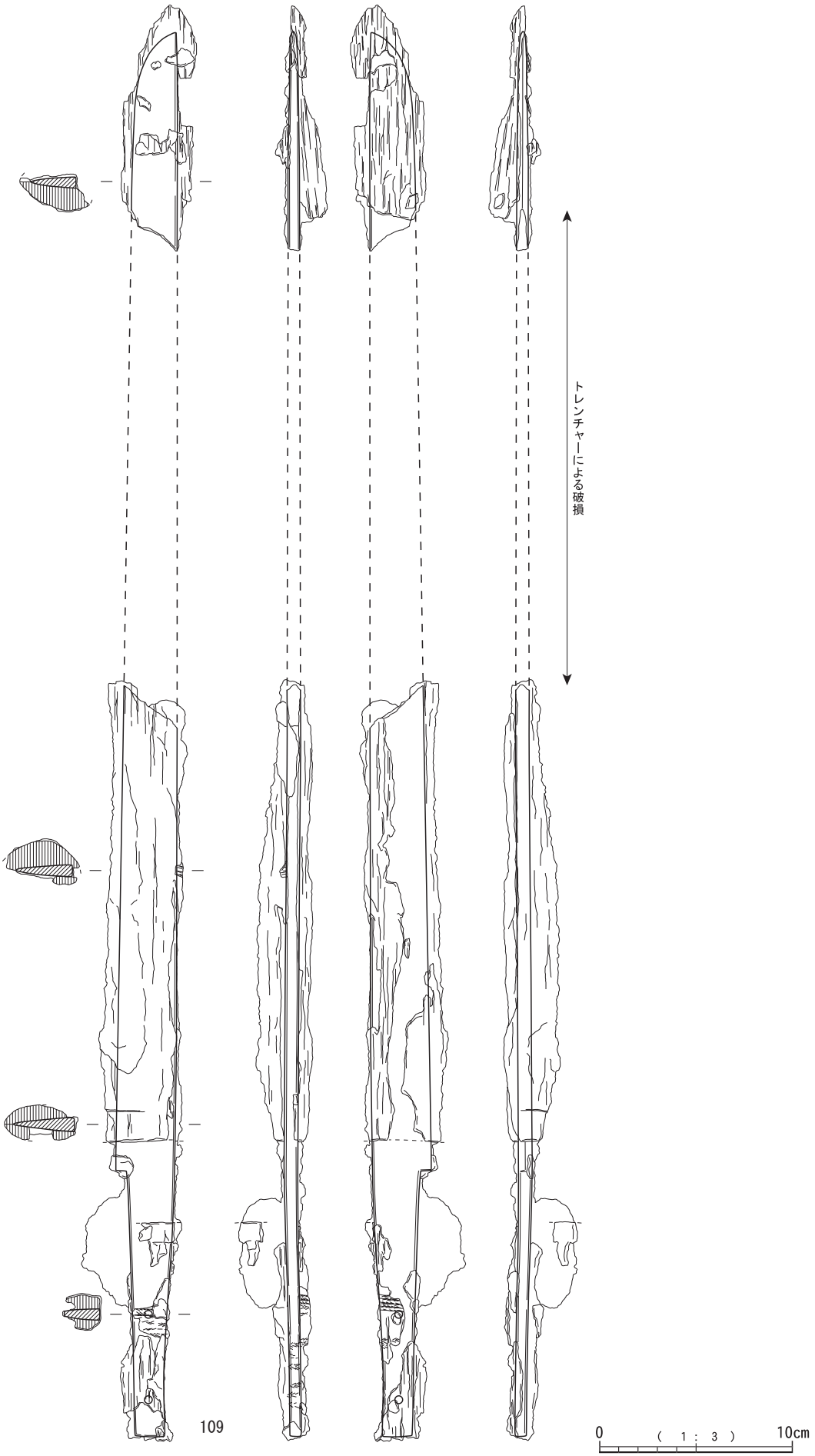






0 (1 : 2) 5cm

第89図　24号地下式横穴墓出土鉄器



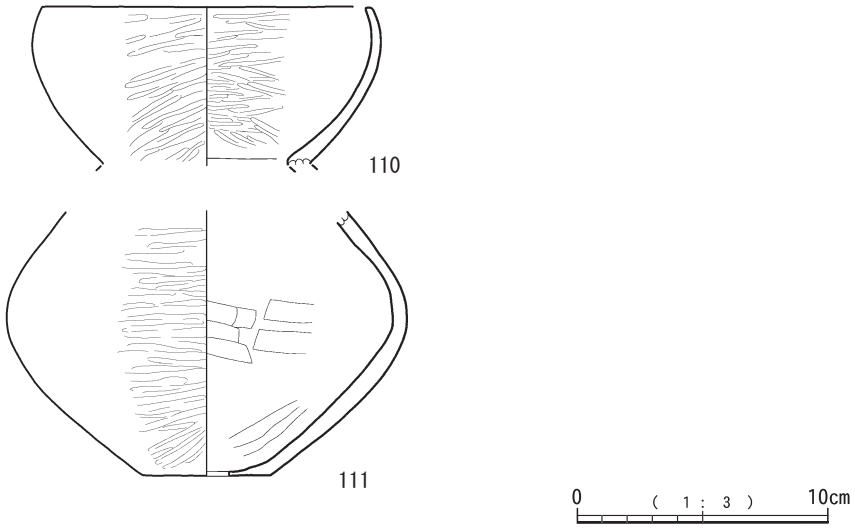
第90図　２号土坑墓出土鉄器

２号土坑墓（第90図）

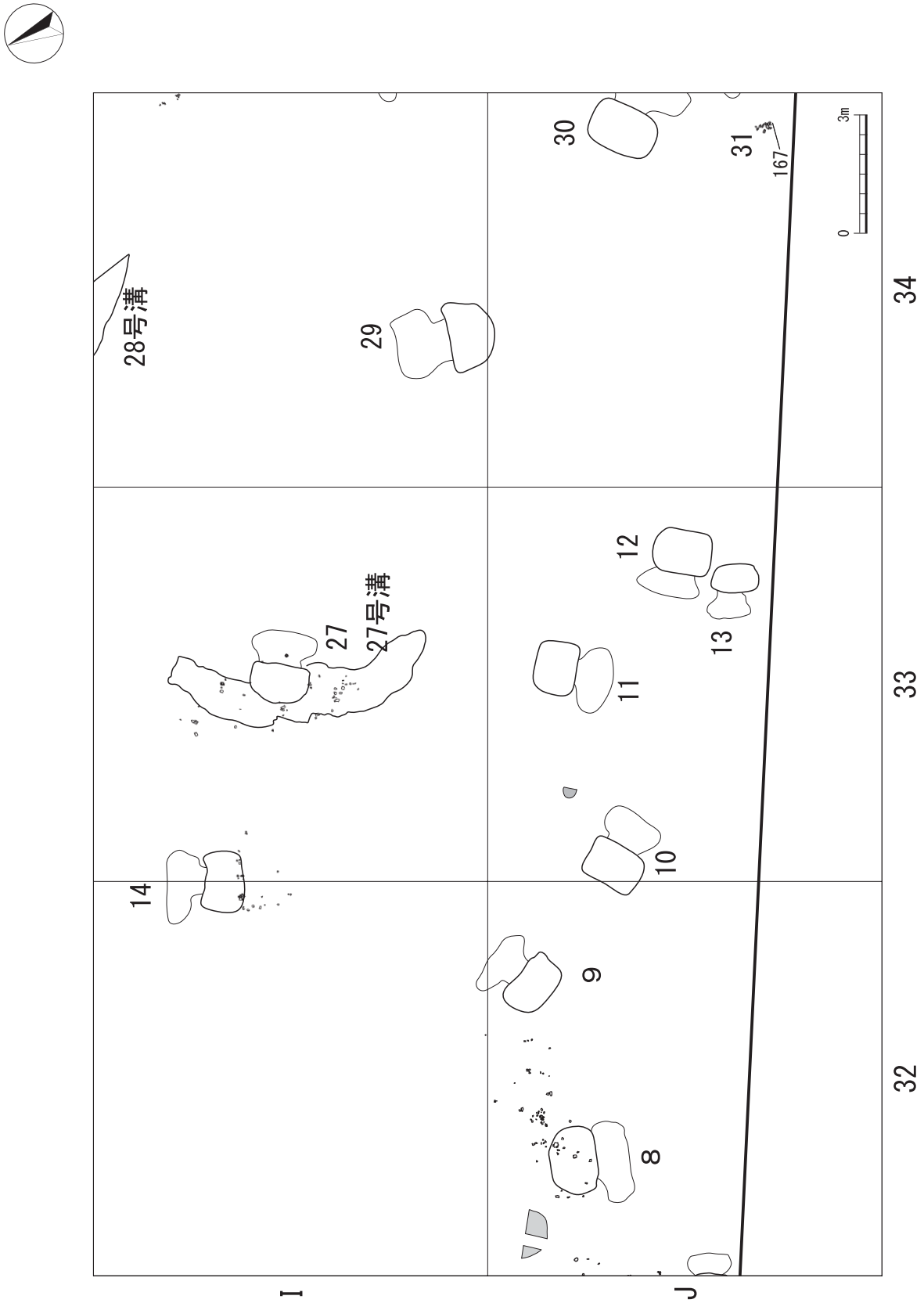
鉄器は109の鉄刀１点が出土した。トレンチャーによる撹乱を受けており，刃部の約半分が欠損する。出土状況から原位置をほとんど保っていると判断し，全長72cmと推定した。刃部はふくら切先であり，刃部の断面は平造りを呈する。鞘木が一部良好に残存しており，二枚合わせであることが観察できる。鞘木の端部が関部から1.5cm上部にみられる。鞘木の端部から1.5cm上部には，鞘口装着のためと考えられる段がみられる。鞘木の上に重なって布の痕跡がみられるが，状態が悪く詳細は不明である。関部は片関であり，深さ４mmに落ちる直角の形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は台形を呈する。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔が確認できる。茎部に木質とみられる有機質が付着する。柄木のない面に紐巻きの痕跡がみられることから，落とし込み式と考えられる。柄木の一部が膨張した錆により浮いている。柄木の一部に三つ組紐巻きが施された痕跡が確認できる。顕微鏡での観察から，２畝平組紐としている。

エリア３出土土器（第91図）

110・111は，同一個体と思われる坩である。坩B類に該当する。110は内湾する口縁部で，口径13cmである。内外面ともにミガキ調整がなされる。111は，胴部最大径が丸みを帯びながら張り，器壁の薄い平底をもつ。最も薄い部分は約３mmである。外面は丁寧なミガキ，内面は工具によるナデ調整である。底部には穿孔を施す。



第91図　エリア３出土土器



第 92 図　エリア４　遺構配置図

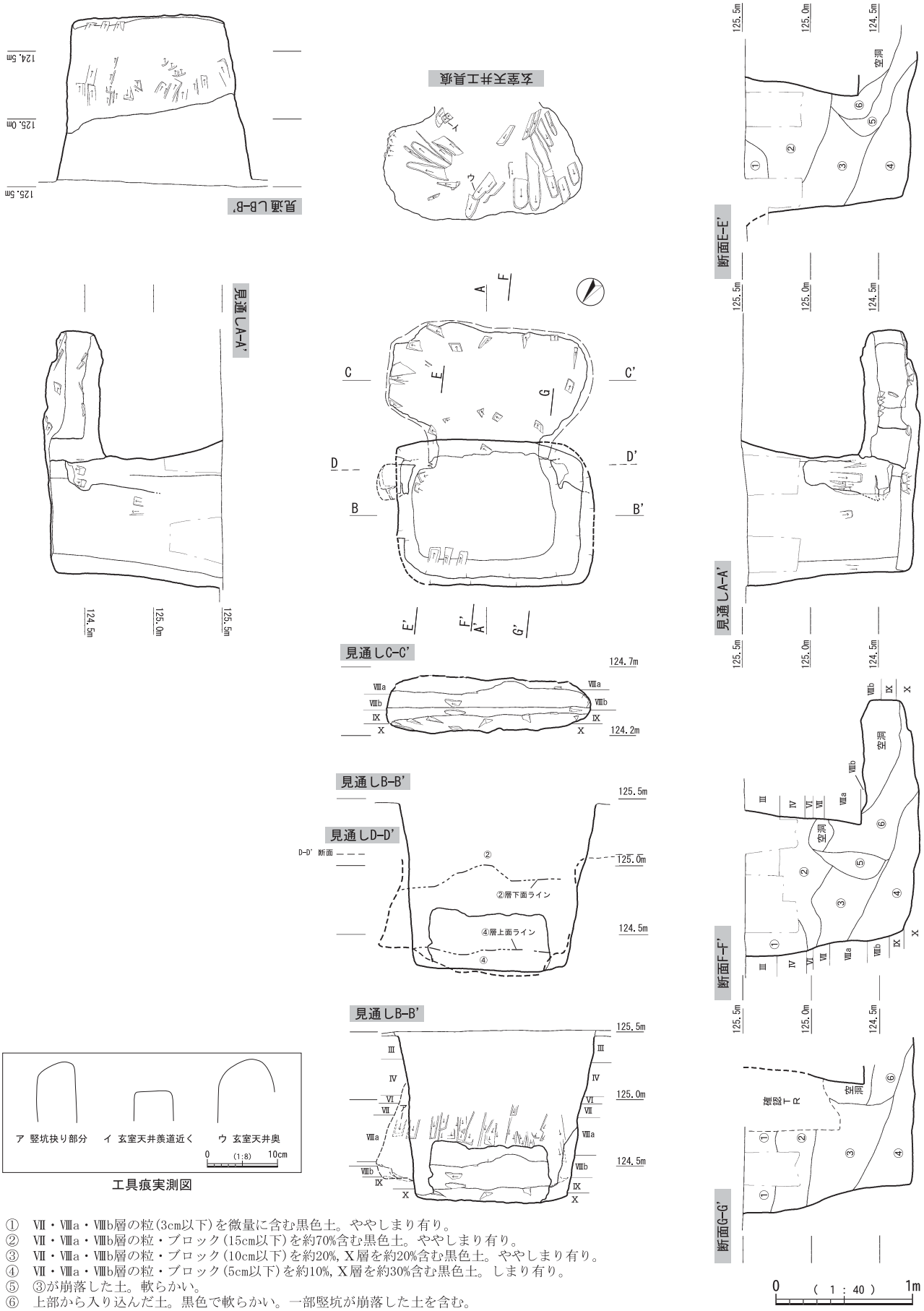
10号地下式横穴墓	検出区	J-33	玄室開口方向	南東
	分　類	A		

検出状態	わずかなⅦ・Ⅷ層が混在する付近のトレンチャーによる攪乱部分を取り除き検出した。羨道から玄室にかけ，良好な状態で残存していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	106	144	123	86	42	23	76	152	99	39
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室へ向かって若干下がる。Ⅲ層上面で検出するなど，残存状況は良好であった。羨門側には，幅 20cm 程度の空洞や軟らかい埋土があり，閉塞材との関係が想定される。 【玄室】 玄室の床面は竪坑床面より低い。高さがほぼ一定に構築されている。軟らかい黒色土が上部から流れ込んでいた。
工具痕	玄室・竪坑側面など，多くの工具痕が残っていた。 ア・イは方形状で，アは幅 6.2 ㎝，イは幅 5.8 ㎝である。アは明瞭に残っており，竪坑の抉り部分や羨門上側などの掘削に使用されている。イは天井部分に少量残っており，幅や先端の違いから，アと同一でない可能性が高い。ウは竪坑・玄室いずれにもみられるU字形のもので，幅は約８～９㎝である。
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。年代測定では 217calAD-351calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



工具痕実測図

① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約70%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約20%, Ⅹ層を約20%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%, Ⅹ層を約30%含む黒色土。しまり有り。
⑤ ③が崩落した土。軟らかい。
⑥ 上部から入り込んだ土。黒色で軟らかい。一部竪坑が崩落した土を含む。

第93図　10号地下式横穴墓

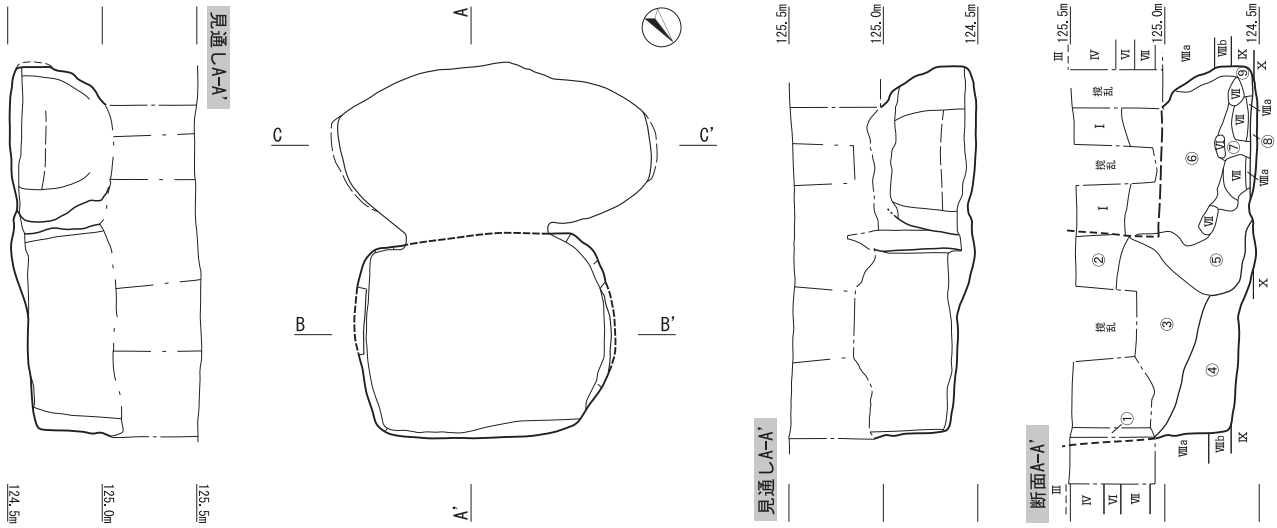
11号地下式横穴墓	検出区	J-33	玄室開口方向	南南西
	分　類	A		

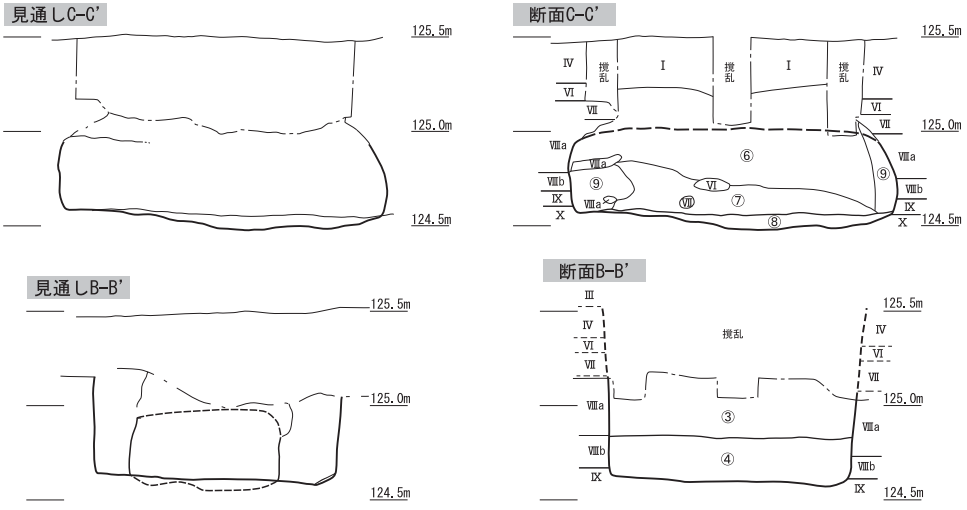
検出状態	わずかなⅦ・Ⅷ層が混在する付近のトレンチャーによる攪乱部分を取り除き，竪坑のプランを検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	108	140	48	78	－	8	84	172	92	－
推　定	115	140	95	－	50	－	－	－	－	55

竪坑最下層	Ⅸ	竪坑平面形	長方形（正方形に近い）	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室より少し高い。上半部は削平されており不明であるが，下半部はⅧ層を多く含む埋土である。埋土④の上面が閉塞時の床面と考えられる。竪坑の床面は玄室より一段高く，羨道部は凹んでいる。 【玄室】 右側に若干張り出す形状である。埋土⑥は天井が崩落した黒色土であり，竪坑埋土と明瞭に分かれる。天井が崩落したブロックの観察から，天井はⅧa層の上面付近と考えられる。埋土⑧はしまりがあり，屍床と考えられる。
工具痕	天井は完全に崩壊しており，崩落したブロックにもはっきりしたものはみられなかった。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－





① Ⅶ・ⅧaⅧb層の粒（3cm以下）を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・ⅧaⅧb層の粒・ブロック（10cm以下）を約80%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・ⅧaⅧb層の粒・ブロック（10cm以下）を約60%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・ⅧaⅧb層の粒・ブロック（10cm以下）を約80%，Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。しまり有り。
⑤ Ⅶ・ⅧaⅧb層の粒・ブロック（10cm以下）を約40%含む黒色土。やや軟らかい。③が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。
⑥ 黒色土。Ⅳ層の天井が崩落した土。軟らかいが他の天井が崩落した土よりしまり有り。
⑦ Ⅵ・Ⅶ層の粒（3cm以下）を多く含む黒色土。天井が崩落した土。軟らかい。
⑧ Ⅶ・ⅧaⅧb層の粒（1cm以下）を少量，Ⅸ・Ⅹ層を約50%含む黒色土。しまり有り。屍床と思われる。
⑨ 少量のⅦ・ⅧaⅧb層の粒（3cm以下）を含む黒色土。軟らかい。側壁の剥離。

0 （1：40） 1m

第94図　11号地下式横穴墓

12号地下式横穴墓

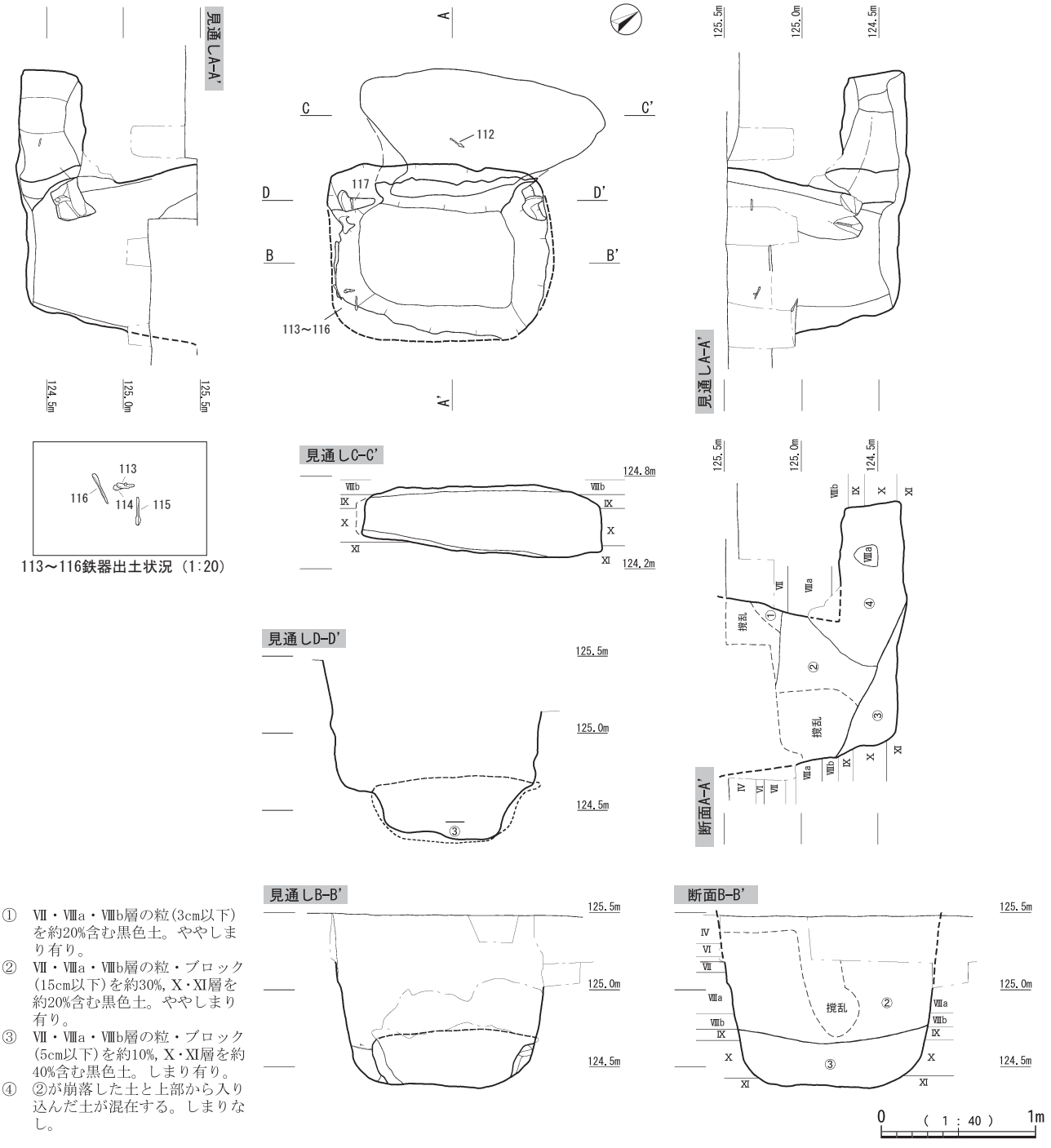
検出区	J-33	玄室開口方向	北西
分　類	B２		

検出状態	調査区域南側の調査範囲を拡張した部分で検出した。玄室は羨道付近が崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	110	144	80	104	－	19	63	154	82	44
推　定	115	150	115	－	40	－	－	－	－	－

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	長方形（正方形に近い）	羨門正面形	台形？
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 羨門から玄室の床面は低くなる。埋土上部から鉄鏃が５点出土し，玄室に流れ込んだ埋土内からも１点出土している。埋土③は硬くしまっており，この層の上面が閉塞時の床面と考えられる。断面Ｄをみると，羨門付近の両側壁に高さ 30cm 程度の段が形成されており，断面上部の高さは羨道上部とほぼ同じである。 【玄室】 平面形は右側へ偏る片袖状である。埋土にはⅦ・Ⅷ層が多く入って軟らかいことから，大半は竪坑からの流れ込みと考えられる。天井部には工具痕はみられなかった。
工具痕	樹痕などの影響もあり，壁面に明瞭なものはみられなかった。天井から崩落したブロックに，工具痕が残っており，ともに方形状と思われる。幅は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	鉄鏃５点（短頸鏃５点）が出土した。
出土遺物　玄室内	鉄鏃１点（短頸鏃１点）が出土した。
備　考	－



113～116鉄器出土状況（1:20）

① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約30%, X・XI層を約20%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%, X・XI層を約40%含む黒色土。しまり有り。
④ ②が崩落した土と上部から入り込んだ土が混在する。しまりなし。

第95図　12号地下式横穴墓

13号地下式横穴墓

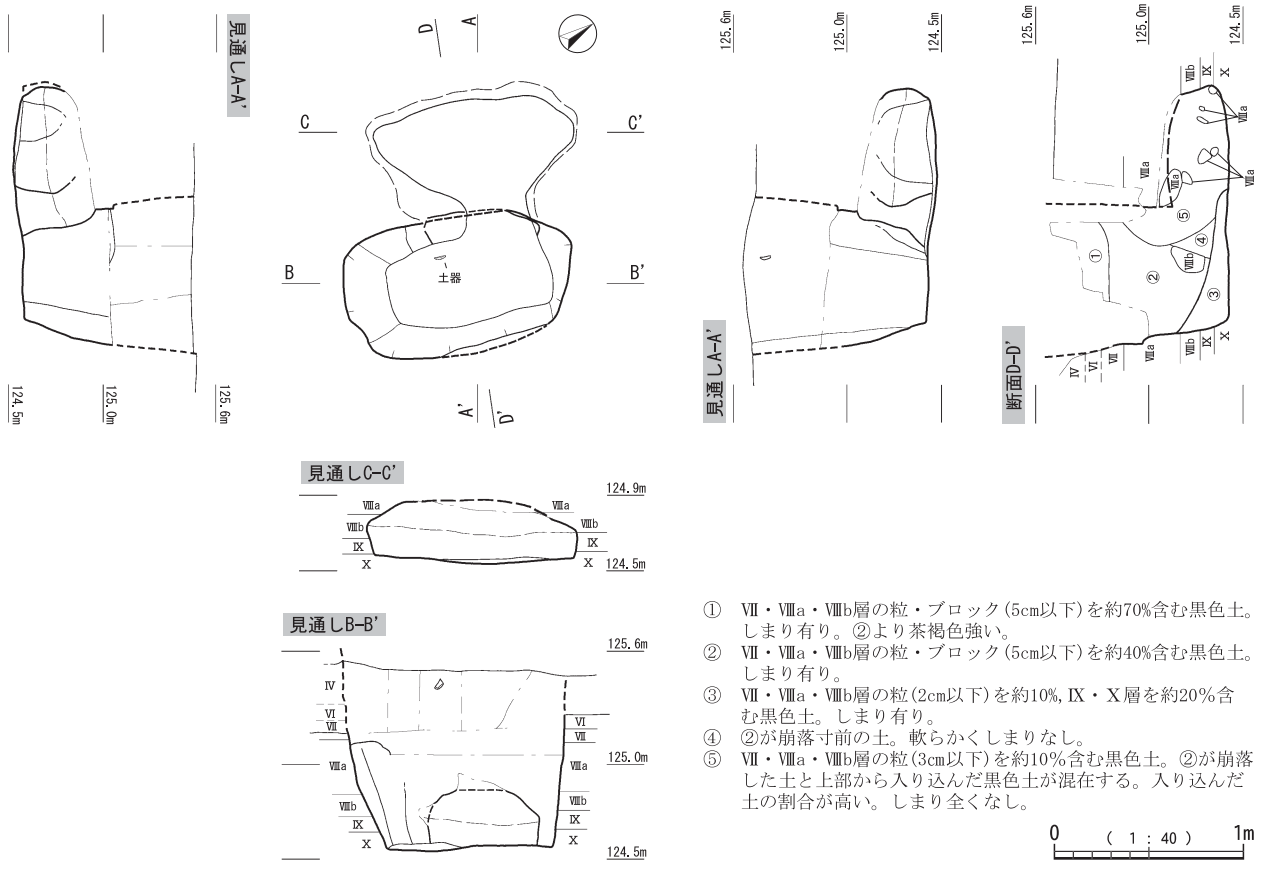
検出区	J-33	玄室開口方向	西北西
分　類	B２		

検出状態	表土を取り除き，竪坑を検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	72	115	78	60	－	18	60	116	78	－
推　定	85	120	100	－	30	－	－	－	－	35

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	台形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	台形（不整形）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面はほぼ平坦で玄室より高い。竪坑の上部は削平を受けている。埋土③はⅦ・Ⅷ層を含み，しまりのある土であり，閉塞時の床面と考えられる。12 号墓と隣接している。埋土から土器片１点が出土した。 【玄室】 羨道が竪坑の右側へ偏る形状である。羨道付近は崩落しているが，おおむね残存していた。横幅が１ｍ程度と狭く，隣接する 12 号墓よりも小型である。
工具痕	羨門から玄室中央にかけて，方向の分かる線はみられるが，幅や先端の形が分かるものはなかった。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	壺の胴部片が１点で，同一個体と覚しきものは出土していない。
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約70%含む黒色土。しまり有り。②より茶褐色強い。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約40%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約10%,Ⅸ・Ⅹ層を約20%含む黒色土。しまり有り。
④ ②が崩落寸前の土。軟らかくしまりなし。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。②が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。入り込んだ土の割合が高い。しまり全くなし。

第96図　13号地下式横穴墓

14号地下式横穴墓

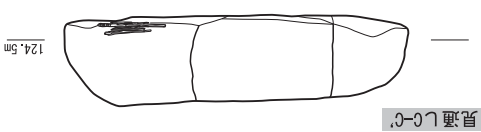
検出区	I-32・33	玄室開口方向	北北東
分　類	B 1		

検出状態	土器が集中している付近のトレンチャーによる攪乱を取り除き検出した。

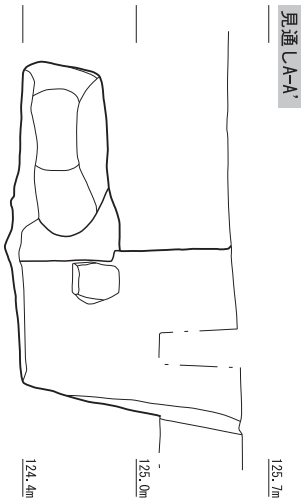
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	100	156	115	76	60	31	64	180	95	46
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

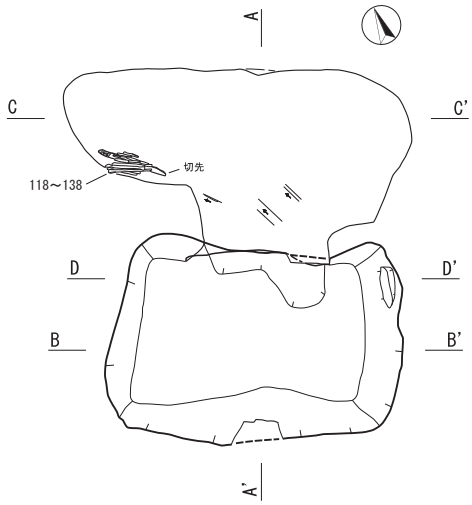
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形（正方形に近い）
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形（やや不整形）		
玄室床面層	X	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

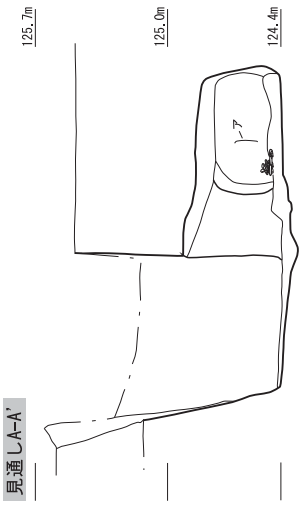
概　要	【竪坑】 羨道付近の床面が低くなる。右側面に抉りをもつ。玄室も含め，残存状況が良好である。 【玄室】 平面形は左側へ偏る片袖状である。玄室内は黒色土の入り込みが多く，ほぼ天井まで堆積していた。玄室左側に短剣と長頸鏃の束が出土した。鉄鏃のうち２点は原位置を保っていない可能性がある。
工具痕	玄室全体が丁寧に作られており，天井も工具痕の凹凸が少なく，明瞭なものはほとんどみられなかったが，アのみ検出できた。方形タイプで先端しか残っていないが，幅は推定で 15 ～ 17 ㎝とみられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	土器片（165・168）が出土した。
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	短剣１点，鉄鏃 28 点（長頸鏃 27 点，鉄鏃片１点）が出土した。
備　考	－

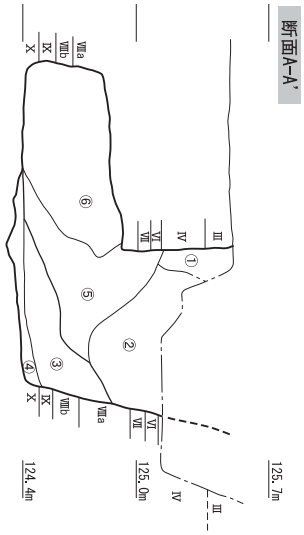


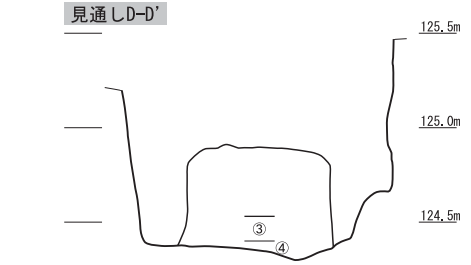
工具痕実測図

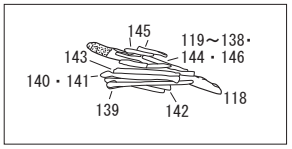




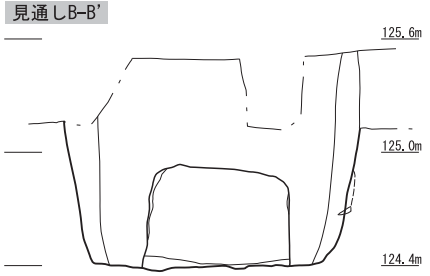


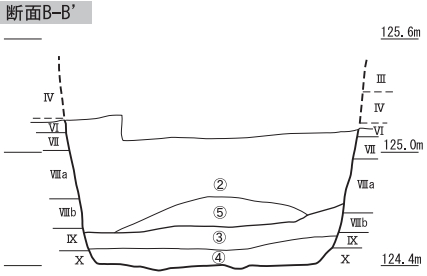


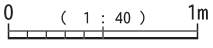




鉄器出土状況 (1:20)







① 撹乱の影響が大きい範囲。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 50% 含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm 以下）を約 70%, Ⅸ・Ⅹ層を少量含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 10%, Ⅸ・Ⅹ層を約 50%含む黒色土。しまり有り。
⑤ ②・③が崩落した土。ややしまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を少量含む黒色土。軟らかい。⑤と上部から入り込んだ黒色土。

第97図　14号地下式横穴墓

27号地下式横穴墓

検出区	I-33	玄室開口方向	東南東
分　類	B 1		

検出状態	遺物が出土した周辺の攪乱部分を取り除き検出した。竪坑調査中に，本遺構より古い溝状遺構を検出した。

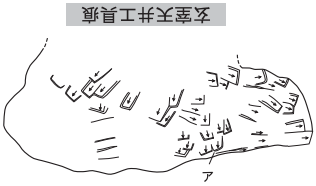
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	98	145	94	114	40	22	74	164	96	44
推　定	－	－	110	－	－	－	－	－	－	－

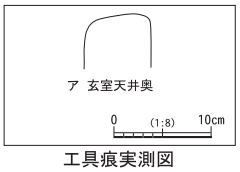
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	台形
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X・XI	玄室断面形	方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 竪坑の床面と玄室の床面はほぼ同じ高さであるが，竪坑左側は一段凹んでいる。竪坑は溝状遺構を切っている。竪坑と溝状遺構の埋土は類似しているが，両者を判別することは可能であった。竪坑右側に抉りがあり，閉塞材との関連も想定される。 【玄室】 平面形は右側へ若干偏る形状である。玄室は残存状況が良好であり，竪坑埋土が流入した黒色土が堆積している。天井には多くの工具痕が残存している。
工具痕	羨道から玄室天井中央及び左側，右側，玄室左側面にみられ，玄室床面には左右奥に向かい掘削した痕がみられる。 アは幅約７㎝の方形状であり，この工具と明確に異なるものはみられず，玄室内はこの工具のみの使用と思われる。
赤色顔料	玄室及び溝状遺構左側から検出された。玄室分はふるいで選別した。どちらもパイプ状ベンガラであった。
炭化物	玄室埋土から検出した。年代測定では64calAD-181calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	未検出

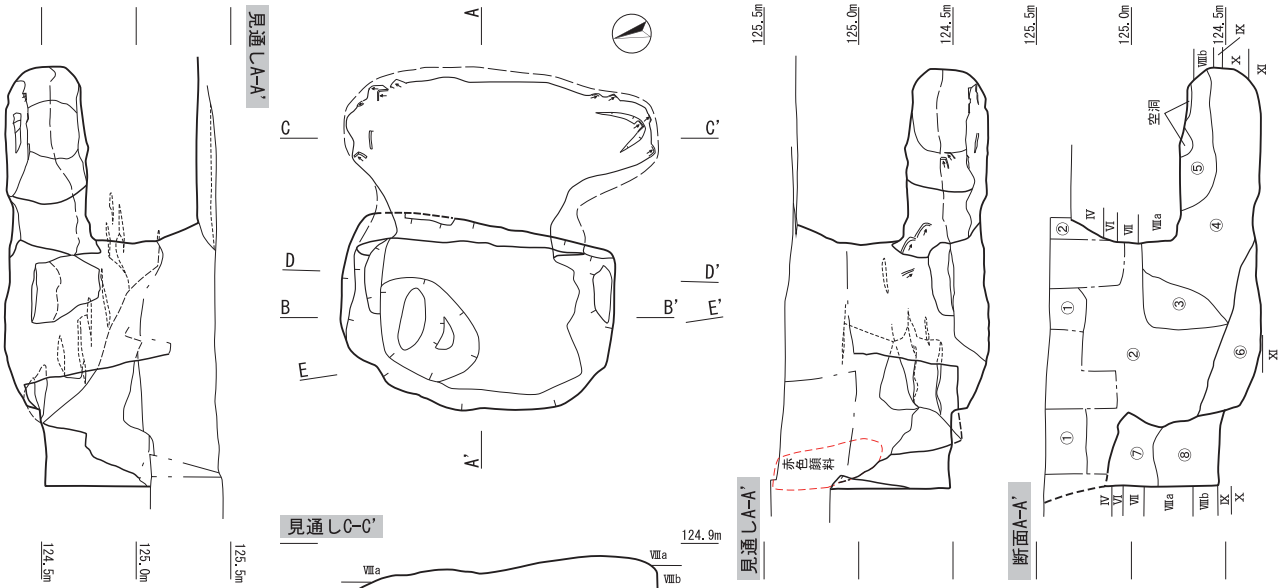
出土遺物	竪坑上面	なし
	竪坑埋土内	なし
	玄室内	なし

備　考	－





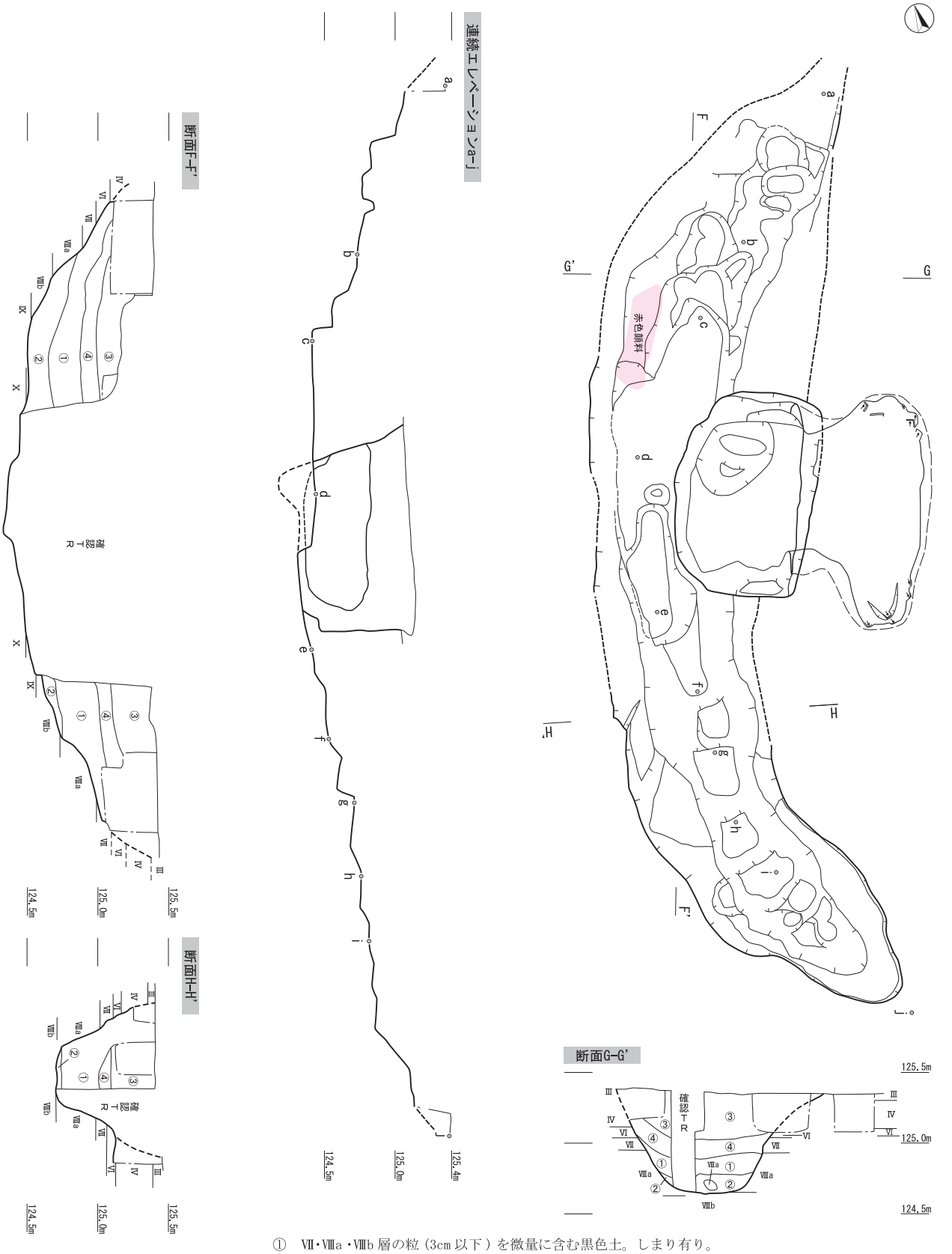
工具痕実測図



① Ⅶ・Ⅷa 層の粒（1cm 以下）を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（15cm 以下）を約 60％含む黒色土。少量のⅨ・Ⅹ層含む。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（15cm 以下）を約 30％含む黒色土。少量のⅨ・Ⅹ層含む。しまり弱い。②が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を約 5% 含む黒色土。しまりなし。上部から入り込んだ土が主体で，一部竪坑が崩落した土が混じる。
⑤ 黒色土。Ⅲ・Ⅳ層と思われる。しまりなし。上部から入り込んだ土。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（5cm 以下）を約 20％，Ⅸ・Ⅹ層を約 30% 含む黒色土。しまり有り。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を微量に含む黒色土。しまり有り。
⑧ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm 以下）を約 40% 含む黒色土。しまり有り。溝掘り上げ時の土と思われる。
⑨ やや褐色を帯びた黒色土。しまり有り。
⑩ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を約 10% 含む黒色土。27 号墓の排出土と思われる。しまり有り。

0 （1：40） 1m

第98図　27号地下式横穴墓(1)



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を微量に含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm 以下）を約 40% 含む黒色土。しまり有り。溝掘り上げ時の土と思われる。
③ やや褐色を帯びた黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm 以下）を約 10% 含む黒色土。27号墓掘り上げの際の埋土と思われる。しまり有り。

第99図　27号地下式横穴墓(2)・27号溝状遺構

２９号地下式横穴墓

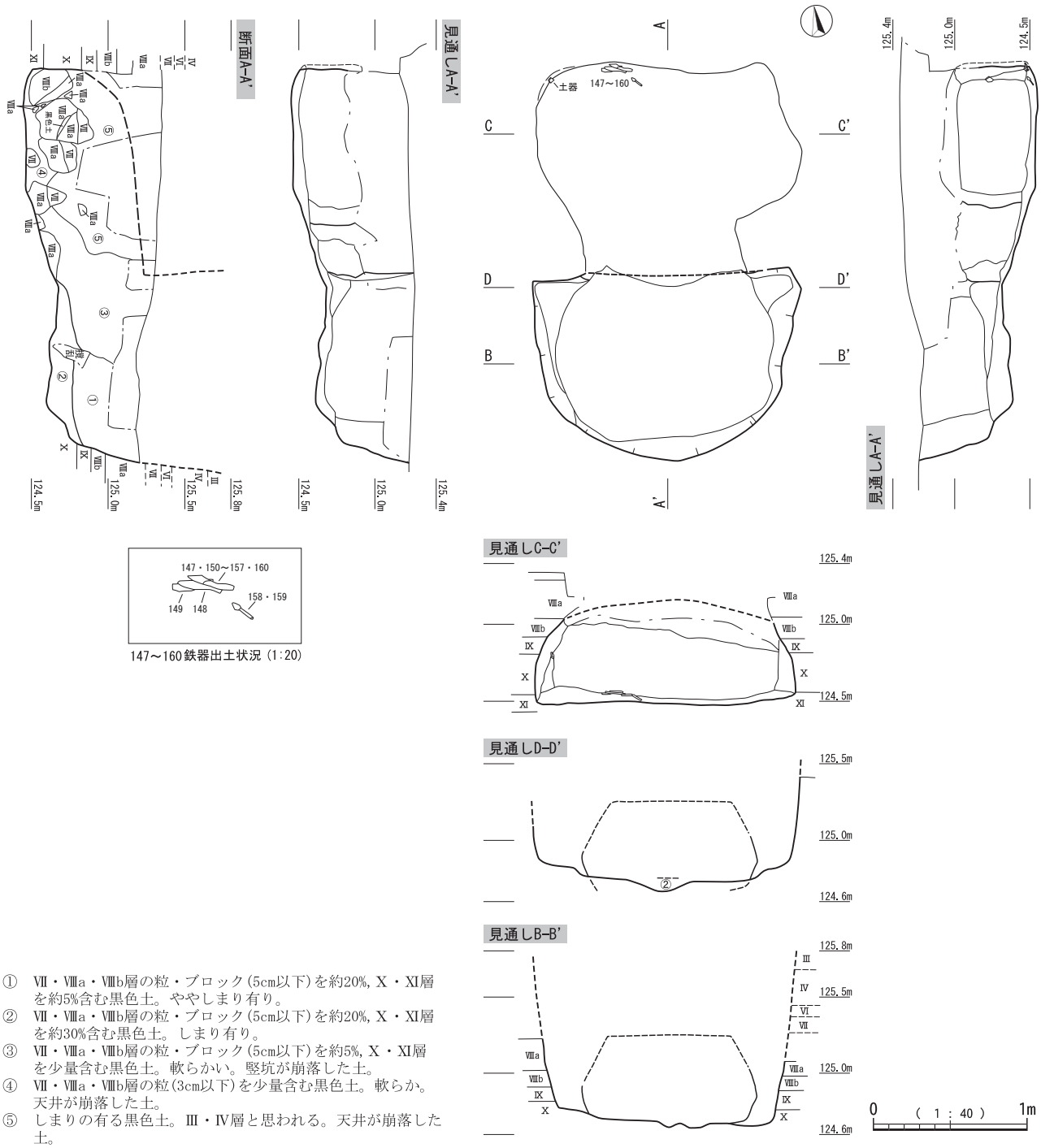
検出区	I-34	玄室開口方向	北
分　類	A		

検出状態	Ⅵ・Ⅶ層まで削平を受け，表土下のⅧa層で検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	120	156	60	110	－	31	100	170	131	－
推　定	130	170	115	－	60	－	－	－	－	70

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形（不整形）	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅺ	玄室断面形	隅丸長方形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 凸凹のある床面をもつ。Ⅷa層まで削平されており，羨門の正面形などは不明である。断面の観察から，埋土②の上面が閉塞時の床面と想定される。 【玄室】 羨門から玄室にかけて緩やかに傾斜する。羨道と玄室の境界の稜は右側が明確である。左奥で土器が１点出土したが，床面よりも高い位置から出土していることから，上位から落ち込んだものと推定される。玄室正面壁側で，鉄鏃が出土した。
工具痕	竪坑側面には下方向へ削った跡がみられるが，幅や先端が分かるものはみられない。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃 14 点（短頸鏃６点，腸抉柳葉鏃５点，鉄鏃片３点）が出土した。
備　考	大型壺の口縁部１点（非掲載）。



第100図　29号地下式横穴墓

14号地下式横穴墓周辺土器出土状況（第101図）

14号地下式横穴墓の竪坑付近に，大型壺片が出土した。周囲にⅦ・Ⅷ層の混在した土はみられなかった。

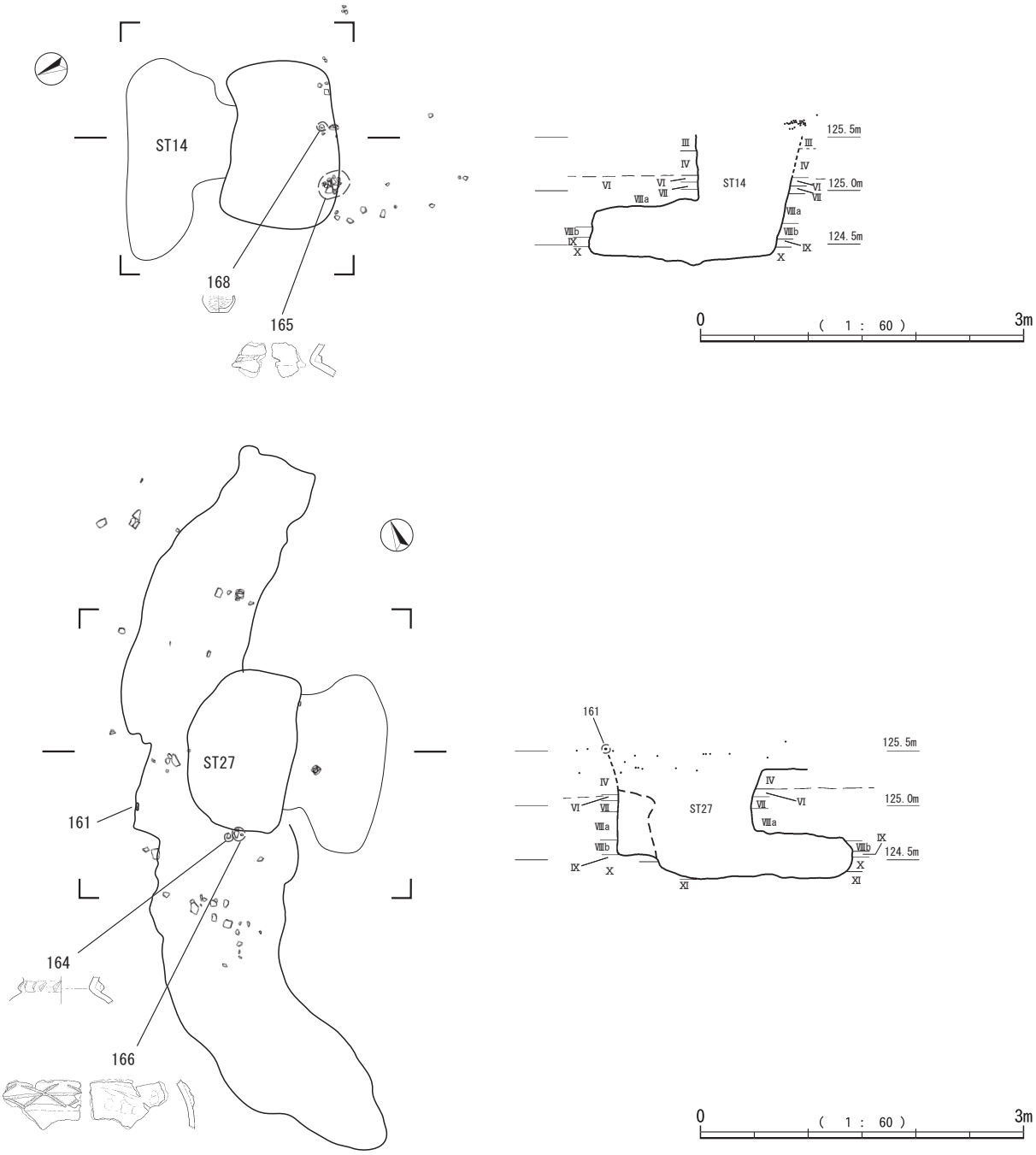
27号地下式横穴墓周辺土器出土状況（第101図）

土器は包含層からの出土だけでなく，溝状遺構内の撹乱土にも多く含まれている。特に溝状遺構上に多いが，竪坑上にはみられない。遺物のほとんどが大型壺の破片である。竪坑後方では，鉄鏃が１点出土している。

エリア４出土鉄器（第102図～第104図）

12号地下式横穴墓（第102図）

鉄器は鉄鏃６点（短頸鏃６点）が出土した。112～116は短頸鏃Ⅱ類である。113・114は銹着していたため，そのまま実測した。113は長三角形の短頸鏃である。茎部の一部が欠損する。銹化が進行しており，茎部に変形がみられる。断面形は刃部が片丸造り，頸部が長方形，茎部が方形を呈する。矢柄の痕跡はみられない。114は



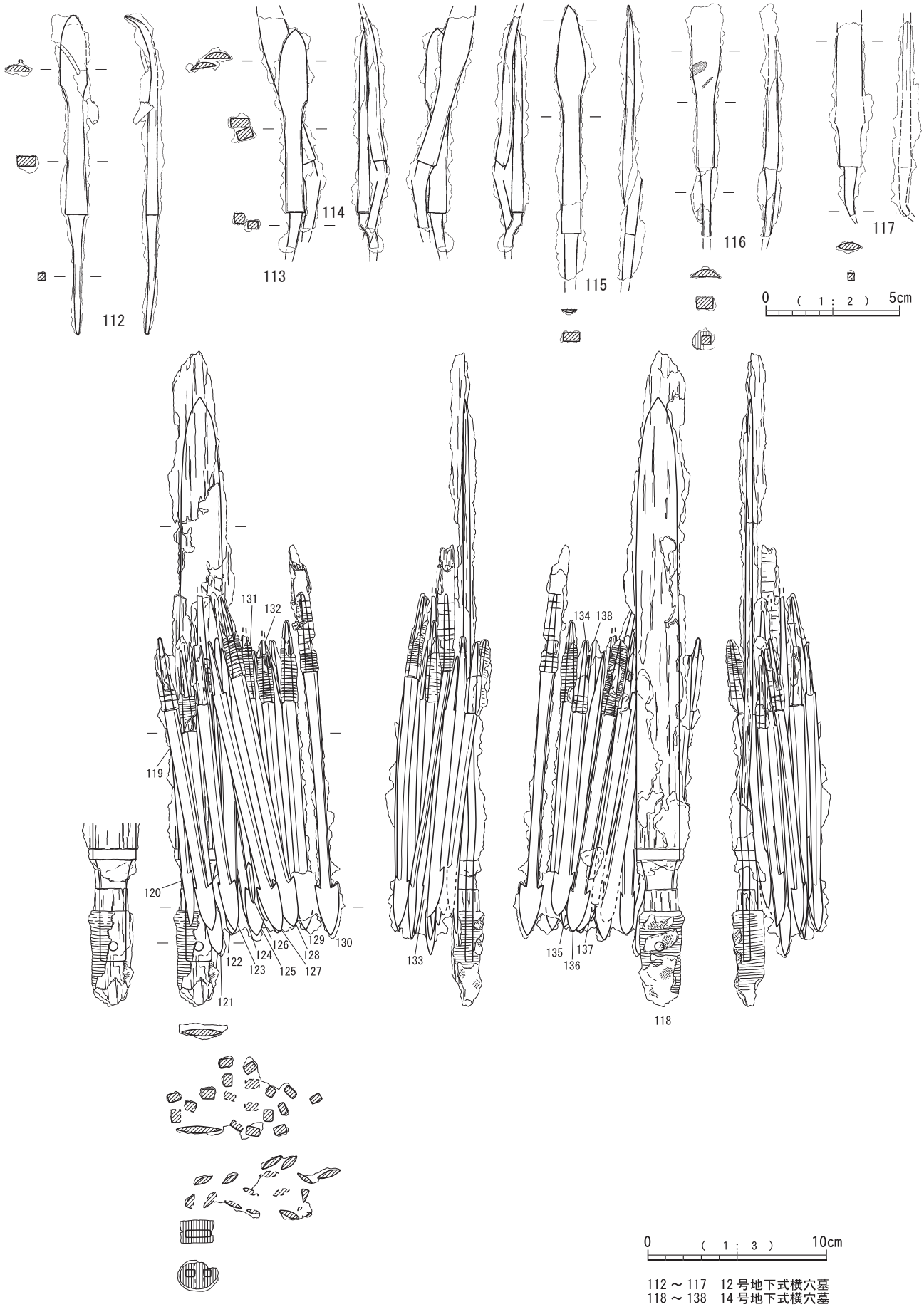
第101図　14・27号地下式横穴墓周辺遺物出土状況

長三角形の短頸鏃である。刃部の先端と茎部の一部が欠損する。錆化が進行しており，全体的に変形がみられるが，原形は保たれている。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡はみられない。112は長三角形の短頸鏃である。錆化が進行しており，刃部が変形し湾曲する。刃部に木の枝のような植物繊維が付着する。刃部の断面形は錆化のため断定できないものの，わずかに刃が偏っている部分が観察されたことから片丸造りと推定した。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄の痕跡はみられない。115は長三角形の短頸鏃である。錆化が進行しており，頸部に錆による膨張が生じているが原形は保たれている。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡はみられない。116は長三角形の短頸鏃である。刃部の先端と茎部の一部が欠損する。全体的に錆化が進行する。矢柄が残存するが，状態は悪い。117は短頸鏃である。錆化の進行や欠損から，形態は特定できない。X線写真の観察により，明瞭な頸部関は確認できたが，刃部形態が不明である。上部に刃部がわずかに確認できることから，刃部の長い形態と考えられる。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡はみられない。

14号地下式横穴墓（第104図・第105図）

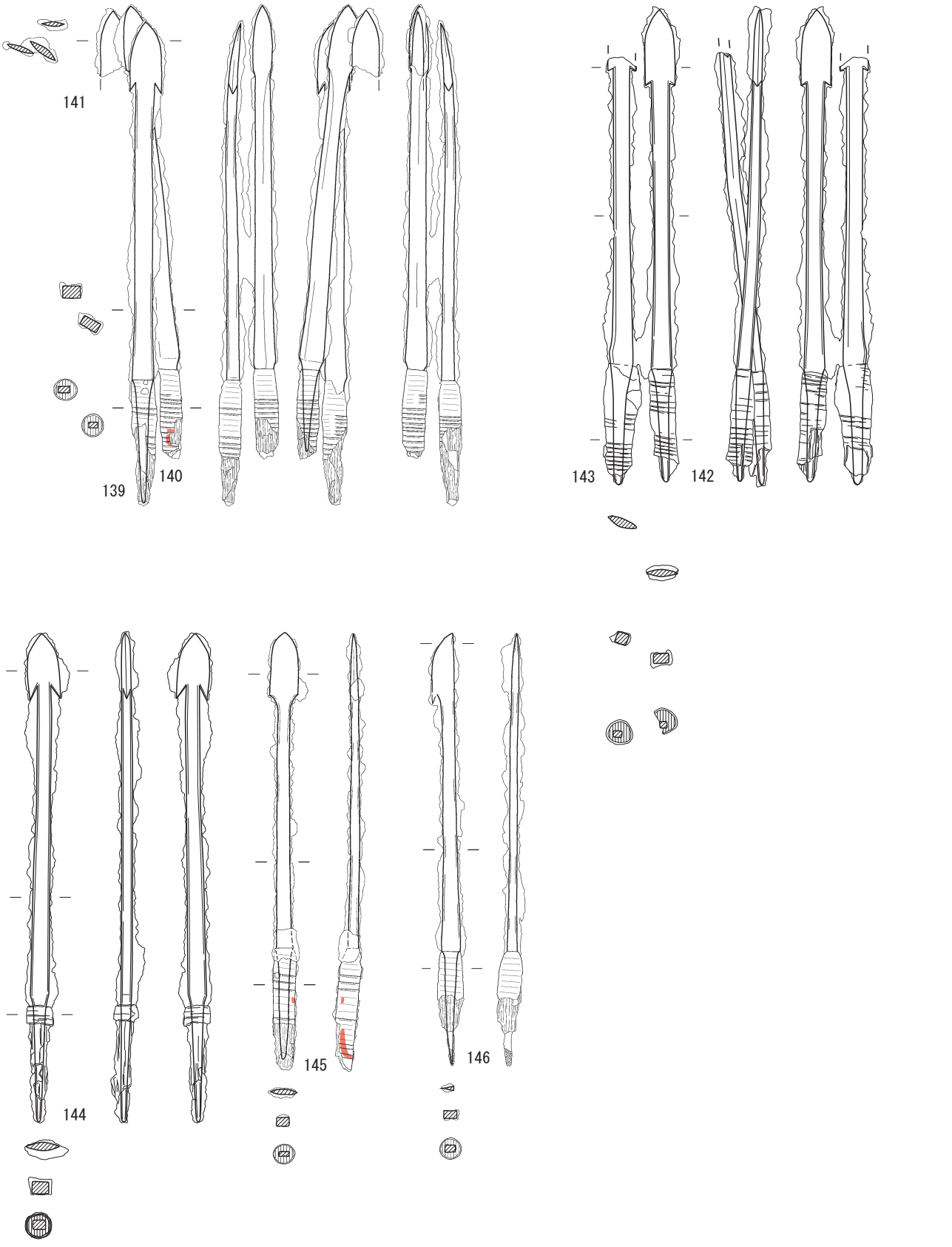
鉄器は短剣１点，鉄鏃28点（長頸鏃27点，鉄鏃片１点）が出土した。118～138は銹着していたため，そのまま実測した。118は短剣である。刃部下部がわずかに屈曲する。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の全体に鞘木が残存する。やや状態が悪いものの，端部の観察から二枚合わせ式であることが確認できる。関部から７mm上部には，鞘木の端部がみられる。関部は深さ約２mmの直角に落ちる形態である。関部直下に茎部は関部から括れたあと，直線的に伸びて茎尻に至る。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。関部直下には，鹿角製の把縁が残存する。茎部には柄木と柄巻きが良好に残存する。柄木は断面形が方形の材を二枚合わせている。柄巻きの断面はみられないが，糸に対して垂直方向の密な繊維がみられることから「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」と考えられる。柄巻きの一部には，平織の布が付着する。顕微鏡による観察から，絹と大麻が混在した繊維であるとしている。119～138は長頸鏃である。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。119は逆刺を有する長三角形である。刃部の断面形は両丸造りである。矢柄がやや良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭に確認できる。120は片刃箭式である。刃部の断面形は片平刃造りである。矢柄がわずかに残存する。121は長三角形である。刃部の断面形は両丸造りである。矢柄がやや良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭に確認できる。矢柄の一部にわずかに赤色顔料がみられる。122～125は逆刺を有する長三角形である。刃部の断面形は両丸造りである。茎部の一部が欠損する。矢柄がわずかに残存する。123は茎部の一部が欠損する。刃部の断面形は両丸造りである。矢柄が残存するが状態は悪い。124の刃部の断面形は両丸造りである。矢柄が残存するが状態は悪い。125の刃部の断面形は両丸造りである。矢柄がわずかに残存する。126は刃部と逆刺が確認できるものの，銹化により片刃か両刃かは判断できなかった。矢柄がわずかに残存する。127・128は逆刺を有する長三角形である。刃部の断面形は両丸造りである。128の刃部の断面形は両丸造りである。矢柄がやや良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭に確認できる。129は両刃であることは確認できるものの，銹化により刃部関が確認できなかった。矢柄がわずかに残存する。130は逆刺を有する長三角形である。刃部の断面形は両丸造りである。矢柄が良好に残存する。口巻きの単位が明瞭にみられ，最後の入れ込みまで観察できる。矢柄に別個体の矢柄片が付着しており，わずかに赤色顔料がみられる。131・132は銹化により鏃身部の形態が不明である。131は矢柄がやや良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭に確認できる。132は矢柄がやや良好に残存する。矢柄の一部にわずかに赤色顔料がみられる。133は片刃箭式である。刃部の断面形は片平刃造りである。矢柄がわずかに残存する。134は逆刺を有する長三角形である。刃部の断面形は両丸造りである。矢柄がやや良好に残存する。135は銹化により鏃身部の形態が不明である。矢柄がわずかに残存する。136は片刃箭式である。刃部の断面形は片平刃造りである。矢柄がやや良好に残存する。137は銹化により鏃身部の形態が不明である。138は逆刺を有する長三角形である。刃部の断面形は両丸造りである。矢柄がやや良好に残存する。139～146は長頸鏃である。139～141は銹着していたため，そのまま実測した。139は逆刺を有する長三角形である。銹化により先端部がやや湾曲する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。140は長三角形である。面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。口巻きにわずかに赤色顔料がみられる。141は刃部片である。欠損部の断面形状などから143と同一個体であるが，断面の銹化により接合できない。断面形は両丸造りを呈する。142・143は銹着していたため，そのまま実測した。どちらも逆刺を有する長三角形である。142の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。143の欠損する先端部分は141である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存しており，やや状態は悪いものの一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。144は逆刺を有する長三角形である。刃部の断面形は両丸造りである。矢柄がやや良好に残存する。鏃身部から頸部の一部にかけて銹化が進行しており，やや状態が悪い。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，状態は悪い。145は長三角形である。銹化が進行しており，わずかに変形がみられ，頸部関の一部が不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。口巻きにわずかに赤色顔料がみられる。146は片刃箭式である。銹化により，逆刺の先端が不明瞭である。断面形は刃部が片平刃造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に施された糸巻きが一部残存する。矢柄が残存するが，口巻きの単位は不明瞭である。

接合できないものの，同一個体である鉄鏃があることから，14号地下式横穴墓から出土した鉄鏃の総数は27点である。まとまった状態で出土していることや，短剣の柄巻きに付着した布から，布製の矢入れ具に収めたか，布で包むように副葬したと考えられる。

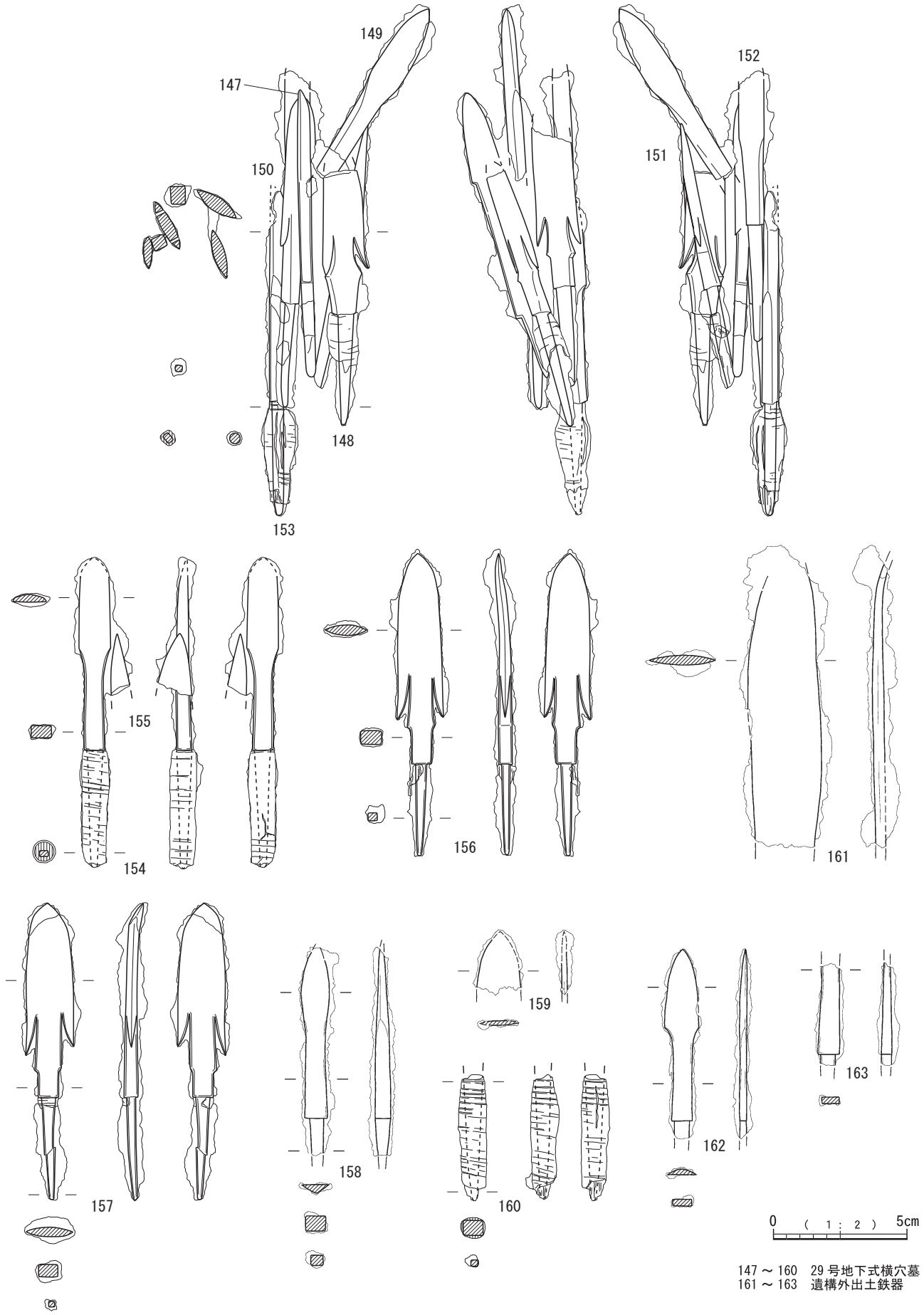


112 ～ 117　12 号地下式横穴墓
118 ～ 138　14 号地下式横穴墓

第102図　12号・14号(1)地下式横穴墓出土鉄器



第103図　14号地下式横穴墓出土鉄器(2)



147 ～ 160　29 号地下式横穴墓
161 ～ 163　遺構外出土鉄器

第104図　29号地下式横穴墓出土鉄器・エリア４遺構外出土鉄器

29号地下式横穴墓（第104図）

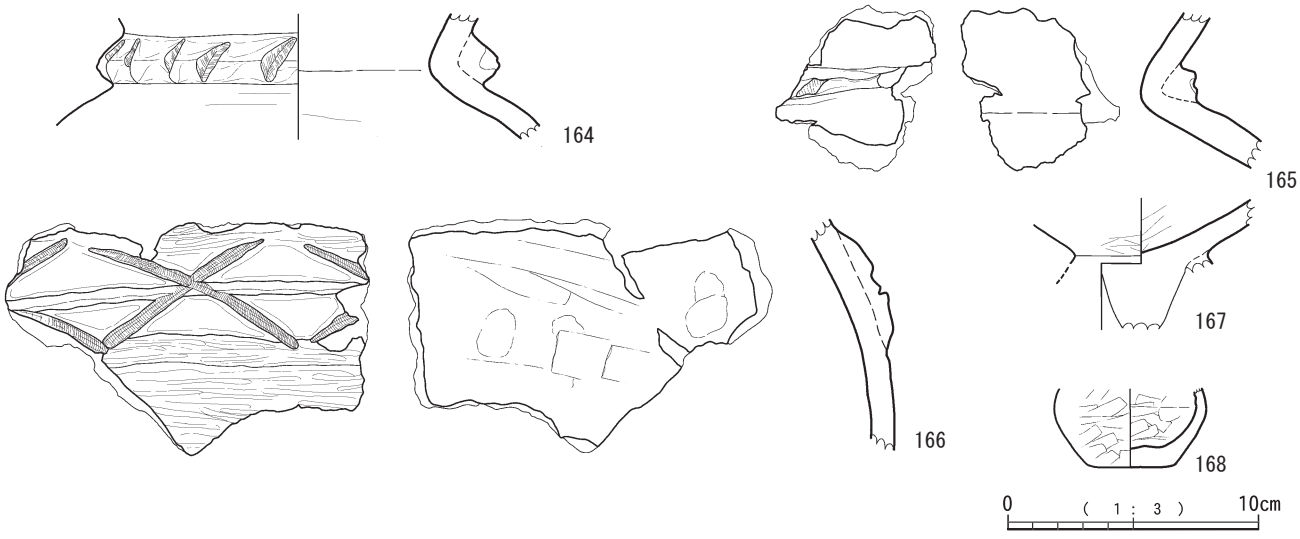
鉄器は鉄鏃14点（短頸鏃６点，腸抉柳葉鏃５点，鉄鏃片３点）が出土した。147～153は錆着していたため，そのまま実測した。全体的に錆化が進行しており，状態が悪い。147・149・152・153は長三角形の短頸鏃Ⅱ類である。147の断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に矢柄の痕跡がわずかにみられる。149は頸部の一部と茎部が欠損する。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。刃部の一部に有機質の痕跡がみられるが，状態が悪く詳細は不明である。153は刃部の一部が欠損する。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，錆化による膨張が生じている。152は刃部の一部が破損する。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。148・150・151は腸抉柳葉鏃である。148は刃部の一部が欠損する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。150の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかに残存する。151は刃部の一部が欠損する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。逆刺に別個体の矢柄片が付着する。矢柄が残存するが，状態が悪い。154・155は錆着していたため，そのまま実測した。154は長三角形の短頸鏃である。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄がやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。155は鉄鏃片である。刃部の一部であり，欠損により型式は不明である。断面形は両丸造りである。156・157は腸抉柳葉鏃である。156の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。157は先端が錆化の進行により変形する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。158は長三角形の短頸鏃Ⅱ類である。先端と茎部の一部が欠損する。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。159は鉄鏃片である。刃部の一部と考えられる。断面は平造りである。160は茎部片である。X線写真を観察したが，形状は不明瞭である。断面と先端の位置から形状を推定した。断面は長方形を呈する。矢柄が残存しており，一部では口巻きの単位が観察できる。

エリア４遺構外出土鉄器（第104図）

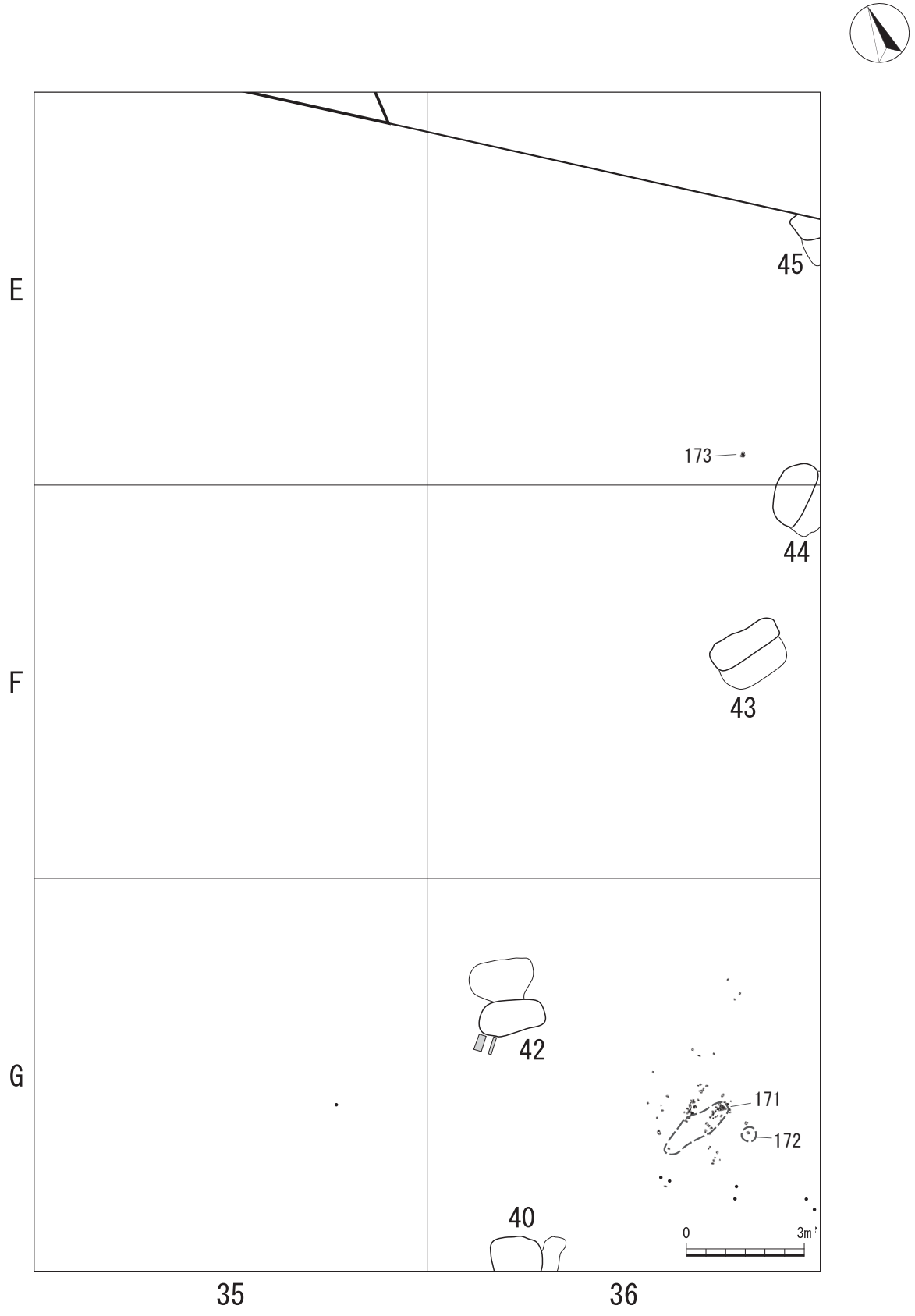
161は27号地下式横穴墓の西側付近から出土した。上下に欠損がみられる。錆化が進行しており，状態が悪いため器種は不明である。わずかに刃部が確認できることから，鉄剣，あるいは大型鉄鏃と考えられる。162・163は12号地下式横穴墓付近の撹乱部分から出土した。162は三角形の短頸鏃Ⅱ類である。茎部の一部が欠損する。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。163は鉄鏃の頸部から茎部片である。断面形は頸部・茎部が長方形を呈する。

エリア４出土土器（第105図）

164～166は壺である。164は，頸部径14.6cmで，刻目突帯を有する。165は，頸部である。刻目突帯を有する。166は，胴部に幅広突帯を有する。突帯の中心に横方向の沈線を入れた後，「×」状の刻みが施されている。外面はミガキ，内面は工具や指によるナデ調整である。167は，高坏である。坏部と脚部の接着部分である。接合痕から基部に円錐状の突起を付けて，脚部と接着させている。168は坩で，底径3.3cmの平底を呈する。内外面ともに工具によるナデ調整である。



第105図　エリア４出土土器



第106図　エリア５　遺構配置図

４０号地下式横穴墓

検出区	G・H-36	玄室開口方向	東南東
分　類	Ｂ１		

検出状態	わずかにⅦ・Ⅷ層が混在している付近の攪乱部分を取り除き検出した。崩落寸前の玄室天井は調査中に崩落した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	130	128	92	50	－	15	44	110	59	－
推　定	－	－	－	－	44	－	－	－	－	50

竪坑最下層	Ⅷb	竪坑平面形	隅丸方形（やや縦軸長い）	羨門正面形	隅丸方形
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	Ⅷb	玄室断面形	方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要

【竪坑】
　床面は中央部から玄室入口まで低くなり，玄室の床面はさらに低くなる。埋土③はほぼⅦ・Ⅷ層の土であり，玄室入口付近の床面まで覆われている。玄室はⅦ・Ⅷ層部分を掘削して構築されており，埋土③は玄室構築時の排出土と考えられる。また，上位の埋土②と明確に分かれ，しまりがあることから埋土③の上面が閉塞時の床面と考えられる。

【玄室】
　左側奥部分がやや突き出す不整形な形状である。横幅は竪坑とほぼ同じであり，右側がやや低くなっている。

工具痕

天井右奥や右背面の側壁に痕が残っている。玄室は，天井など全て羨道側から奥側の方向に削られている。天井右奥では幅 5.6 ㎝の方形状のものがみられた。幅や先端が異なるものはみられない。

赤色顔料　未検出

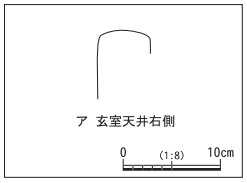
炭化物　未検出

人　骨　未検出

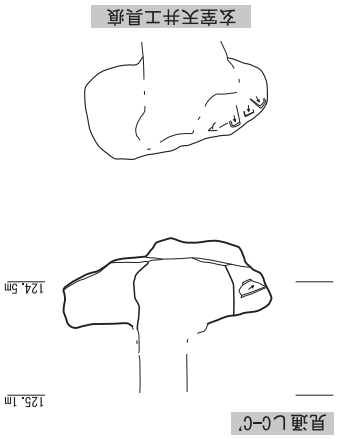
出土遺物

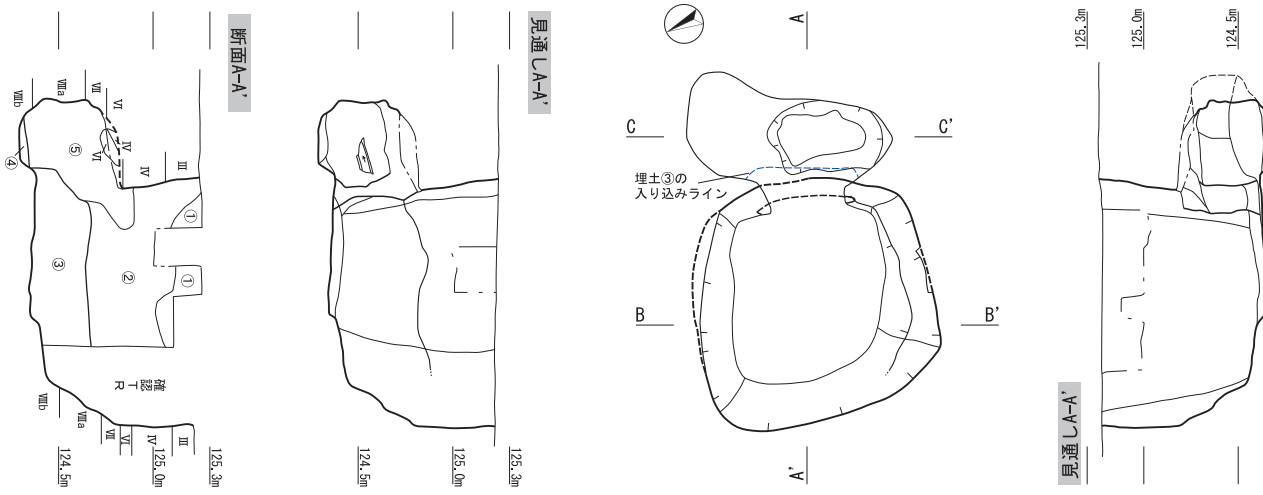
竪坑上面	なし
竪坑埋土内	なし
玄室内	なし

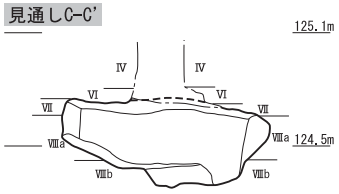
備　考　竪坑は横幅より縦幅が長い。竪坑横幅に比べ羨道横幅はかなり小さく，他にない形状である。

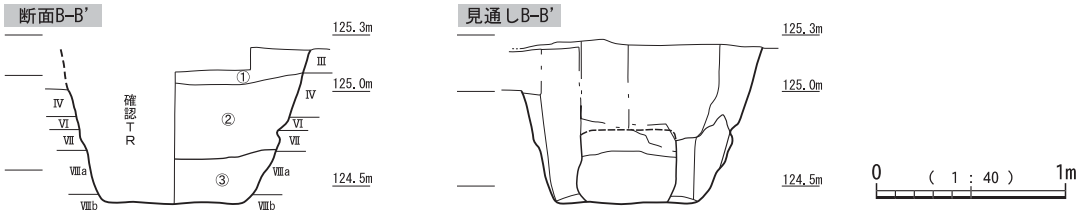


工具痕実測図









① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約90%含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約50%含む黒色土。細かいⅦ・Ⅷa層の粒多い。屍床と思われる。しまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。上部から入り込んだ土。軟らかい。

第107図　40号地下式横穴墓

４２号地下式横穴墓

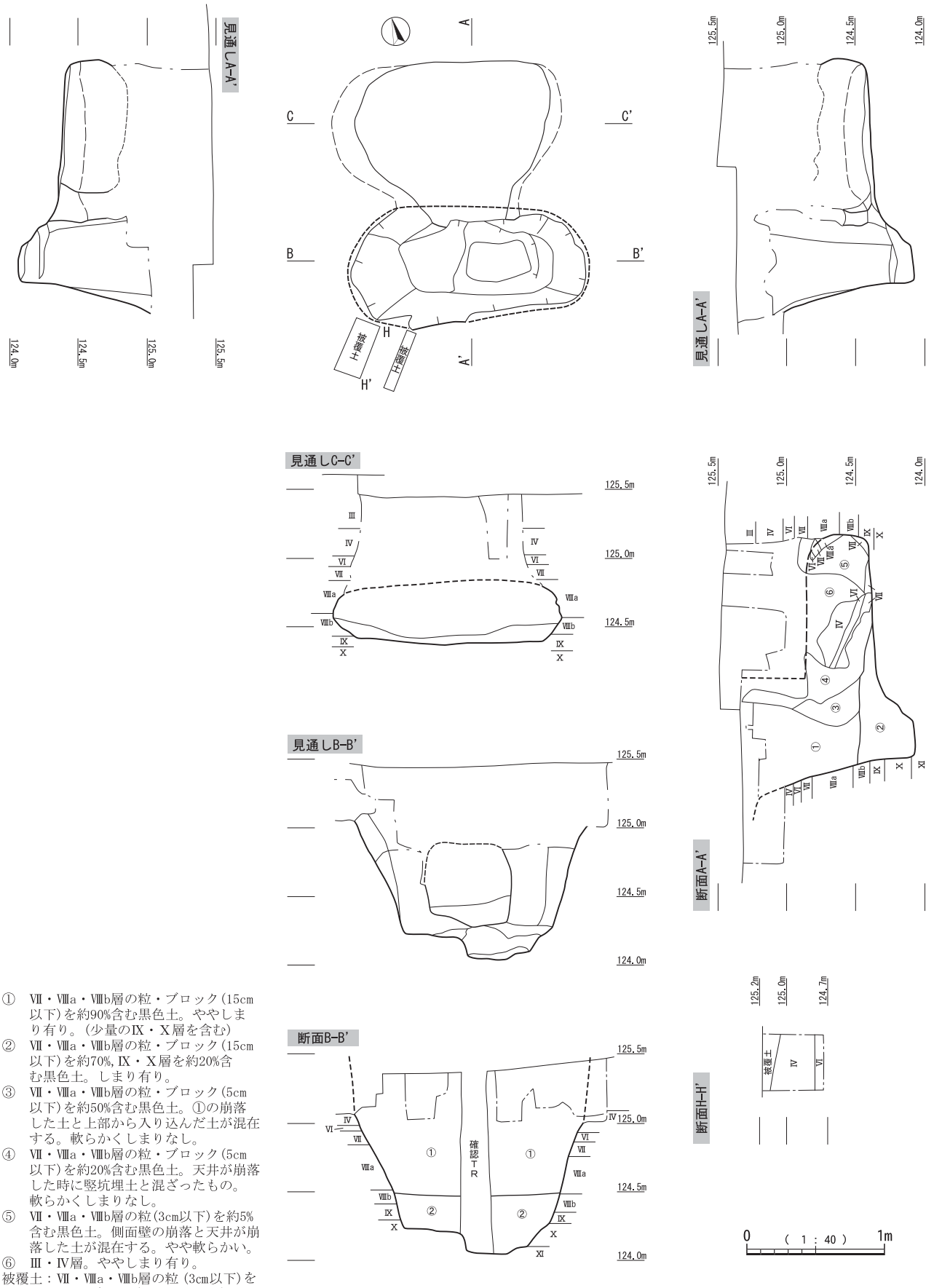
検出区	G-36	玄室開口方向	北北東
分　類	A		

検出状態	Ⅲ層中で，Ⅶ・Ⅷ層が混在する付近の攪乱部分を取り除き，竪坑プランを検出した。玄室天井は崩壊していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	84	174	94	62	－	22	96	166	118	－
推　定	105	－	125	－	50	－	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	隅丸方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形（やや不整形）		
玄室床面層	IX	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は後で一段低くなる。羨門付近から玄室奥にかけてわずかに上る。竪坑床面付近の埋土②はⅦ・Ⅷ層が多く，ややＸ層が混在する。玄室の構築層はⅧ～Ｘ層上面であることや，埋土②がしまりがあることなどから，この層の上面が閉塞時の床面と考えられる。また，埋土①はⅢ・Ⅳ層の割合が低いことから，Ⅲ・Ⅳ層の土は地上に残されたと考えられる。 【玄室】 平面形は左側の奥行きが広くなる形状である。玄室中にはⅣ～Ⅶ層が層序順に落ち込んでいた。そのため，Ⅶ層が天井であったと推定される。竪坑と横幅はほぼ同じである。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約90%含む黒色土。ややしまり有り。(少量のⅨ・Ⅹ層を含む)
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約70%,Ⅸ・Ⅹ層を約20%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒色土。①の崩落した土と上部から入り込んだ土が混在する。軟らかくしまりなし。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒色土。天井が崩落した時に竪坑埋土と混ざったもの。軟らかくしまりなし。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%含む黒色土。側面壁の崩落と天井が崩落した土が混在する。やや軟らかい。
⑥ Ⅲ・Ⅳ層。ややしまり有り。
被覆土:Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り。

第108図　42号地下式横穴墓

４３号地下式横穴墓

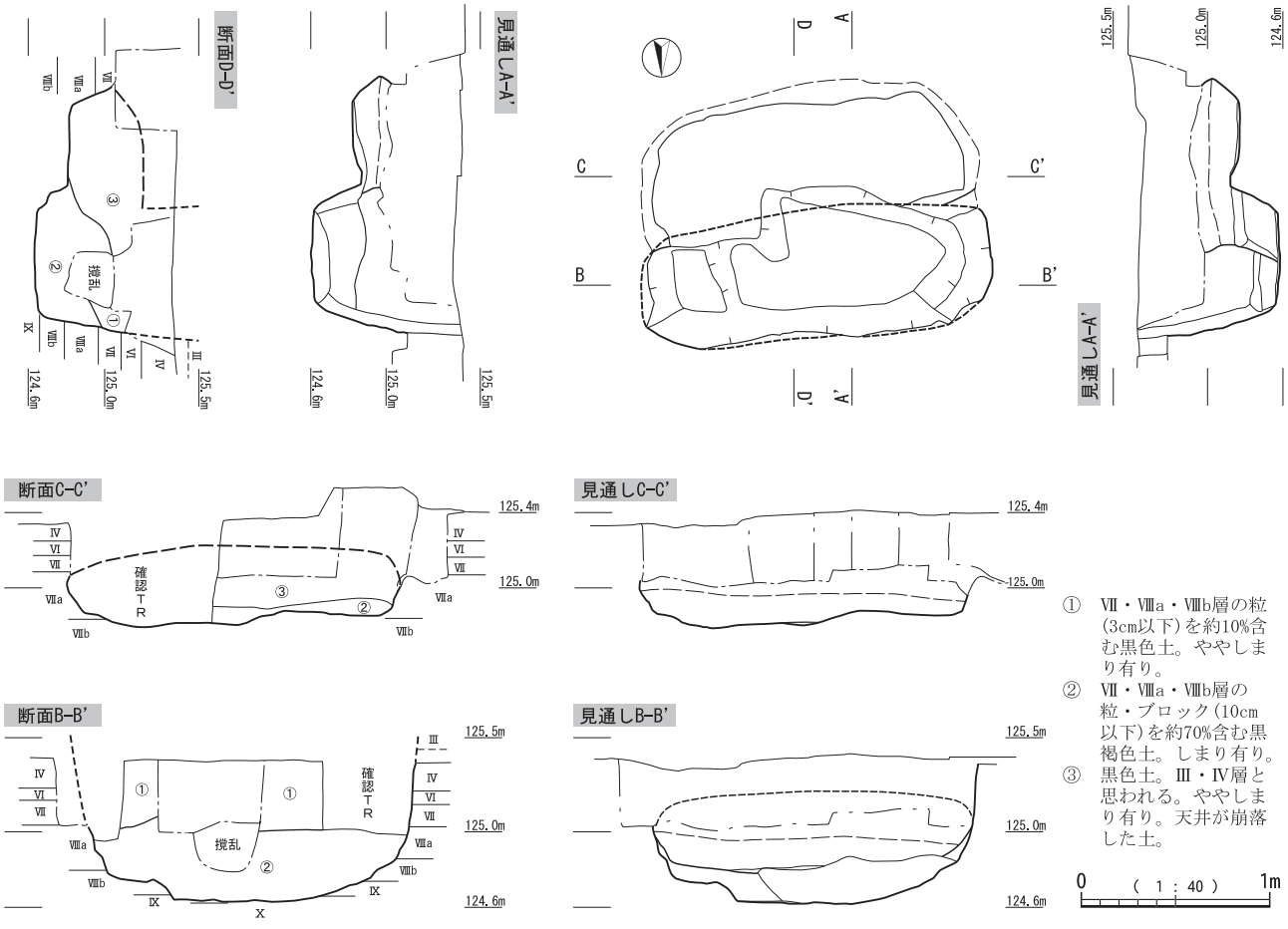
検出区	F-36	玄室開口方向	南
分　類	C		

検出状態	Ⅳ層上面で，Ⅶ・Ⅷ層が混在する攪乱部分を取り除き検出した。遺構は樹痕の影響を受けていた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	68	182	48	160	－	－	76	178	64	－
推　定	80	185	90	－	40	－	－	－	－	40

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅵ	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅷa	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面はほぼ平坦である。埋土②はⅦ・Ⅷ層の割合が高く，埋土①と明確に区別できる。玄室はⅥ～Ⅷ層部分に構築されていることから，埋土②は玄室構築時の排出土で，その上面は閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 竪坑より 20cm 程床面が高い。竪坑・羨道・玄室の横幅がほぼ同じである。北側にある 44・45 号墓も同一の形状をもつ。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



第109図　43号地下式横穴墓

４４号地下式横穴墓

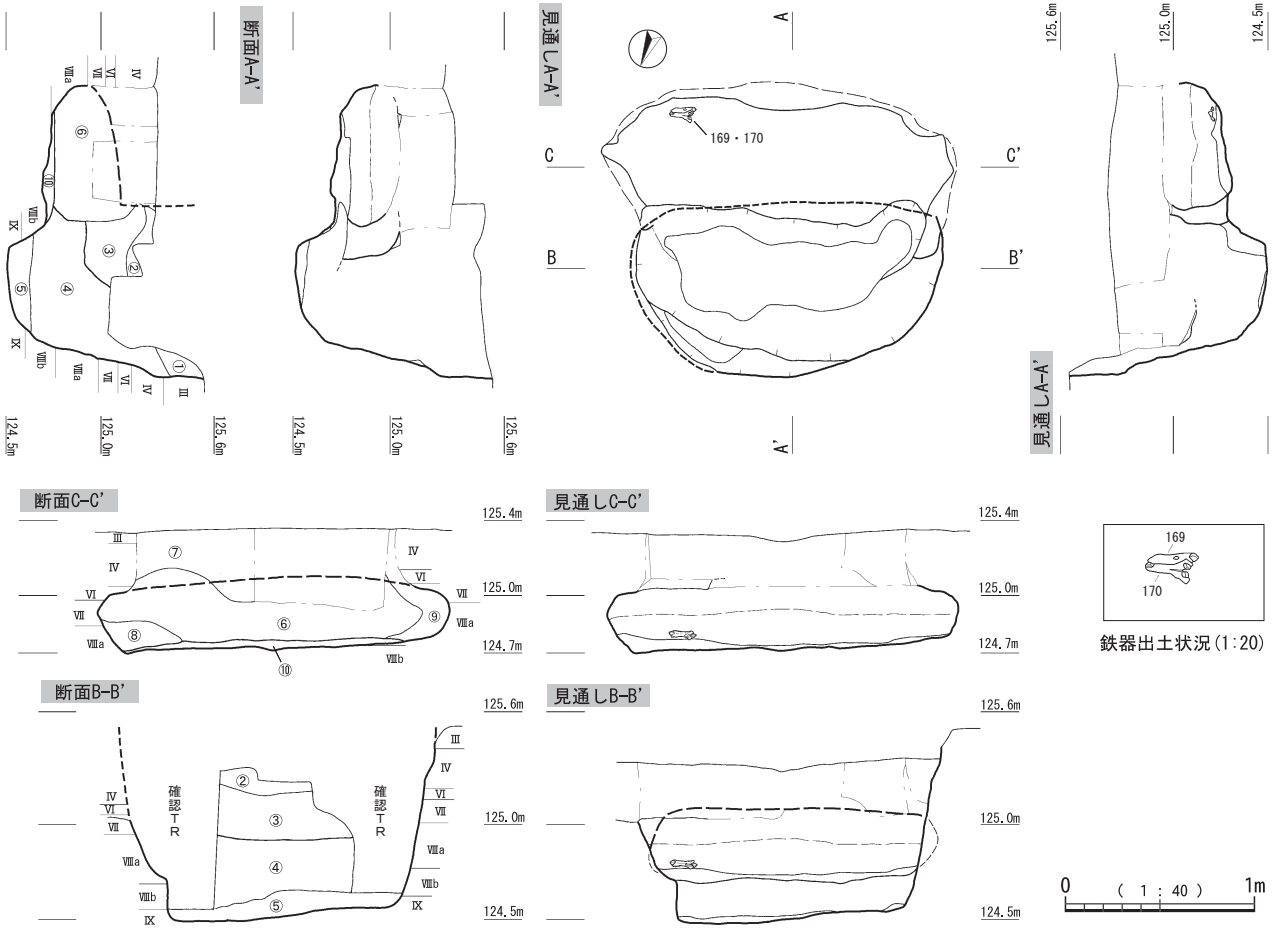
検出区	E・F-36	玄室開口方向	南南東
分　類	C		

検出状態	Ⅳ層上面で，Ⅶ・Ⅷ層が混在する攪乱部分を取り除き検出した。遺構は樹痕の影響を受けていた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	92	161	105	152	－	9	72	186	81	－
推　定	－	170	－	－	40	－	－	－	－	40

竪坑最下層	Ⅸ	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	楕円形
玄室天井層	Ⅵ	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅷa	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室の床面よりも一段低くなっている。竪坑と玄室の横幅はほぼ同じである。43 号墓と形状および埋土構成が類似している。 【玄室】 床面は左側へ低くなる形状である。埋土⑩はしまりがあり，上位の埋土と明瞭な違いがあることから，Ⅶ・Ⅷ層の土を整地して屍床としたものと考えられる。鉄鏃が２点副葬されている。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃１点（無茎大型鏃１点），異形鉄器１点が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を約20%含む黒褐色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約20%含む黒褐色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒褐色土。黒色土の割合はわずか。しまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層ブロックとⅨ層が混在する(5cm以下)。しまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。上部から入り込んだ土。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り。
⑧ Ⅶ層約70%,Ⅶ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を約10%含む黒色土。天井側壁面が崩落した部分と思われる。ややしまり有り。
⑨ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約10%含む黒色土。天井が崩落した部分の入り込み。ややしまり有り。
⑩ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約80%含む黒色土。屍床と思われる。

第110図　44号地下式横穴墓

４５号地下式横穴墓

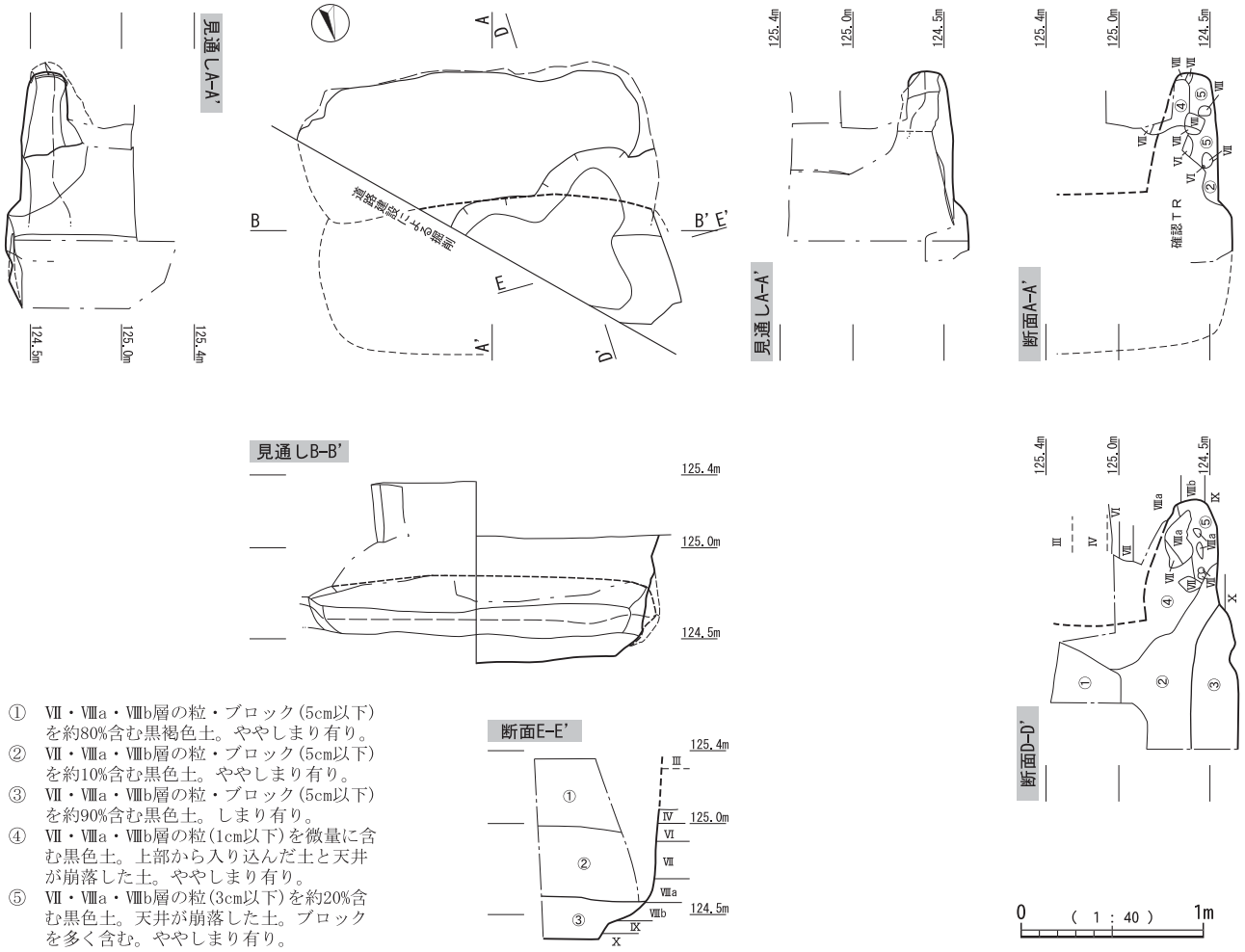
検出区	E-36・37	玄室開口方向	南
分　類	C		

検出状態	道路建設等の影響で北東側の約半分は残存していない。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	－	－	－	－	－	－	70	190	68	－
推　定	－	－	95	－	45	－	－	－	－	30

竪坑最下層	X	竪坑平面形	不明	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅸ	玄室断面形	（楕円形）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室より低い。埋土③はⅦ・Ⅷ層が主体で，しまりがあることから，この面が閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 43・44 号墓と同じ平面形状であるが，天井がⅧ層である点が異なる。玄室左側は攪乱を受けている。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約80%含む黒褐色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約90%含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。上部から入り込んだ土と天井が崩落した土。ややしまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。天井が崩落した土。ブロックを多く含む。ややしまり有り。

第111図　45号地下式横穴墓

エリア５出土鉄器(第112図)

44号地下式横穴墓(第112図)

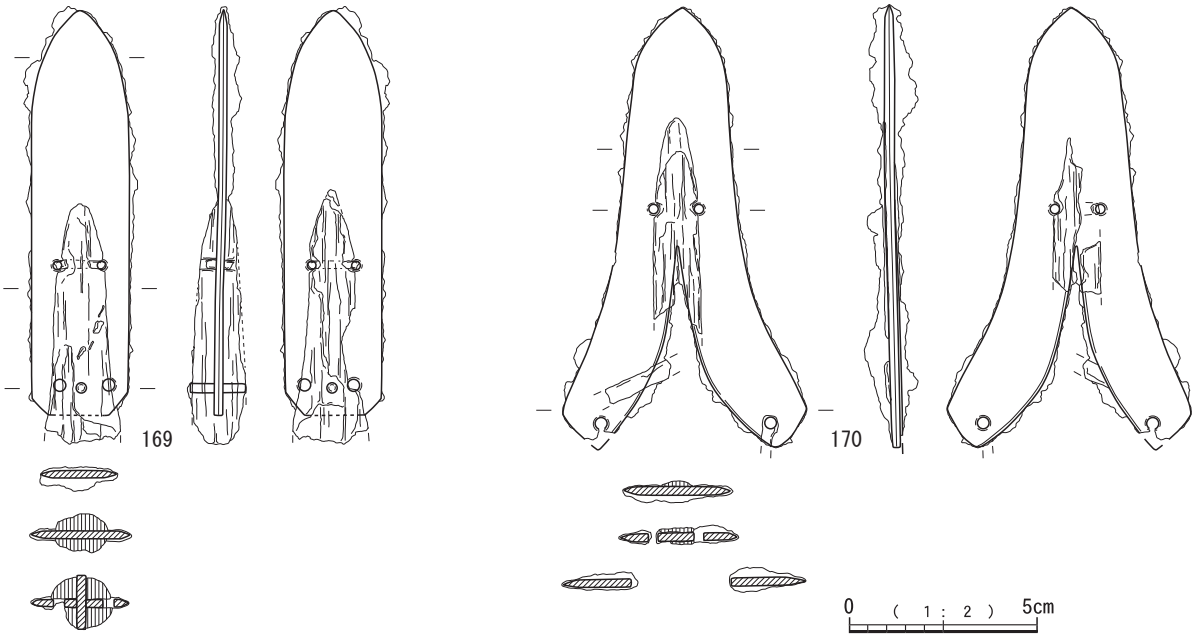
鉄器は鉄鏃１点（無茎大型鏃１点）と異形鉄器１点が出土した。169は無茎大型鏃である。先端部は柳葉形を呈し，そこから直線的に端部に伸びる形状である。下端部以外すべて刃部を造っており，断面形は平造りである。X線写真の観察から，穿孔が５孔確認できる。先端から６cm下に根挟みを挟んで２孔，9.6cm下に３孔施されている。上側の２孔は，根挟みに孔の位置に合わせた溝が確認できることから，紐状のものを通して根挟みを固定していたと考えられる。下側の中心の１孔は，鉄製の目釘状のもので根挟みが固定されている。両側の２孔はほとんど根挟みと重なっていることから，根挟みの固定用としては機能していなかった可能性がある。根挟みの残存状態は良好であり，先端を三角形に加工していることが確認できる。顕微鏡での観察から，木質の付着と植物繊維製の紐の痕跡が確認されている。

170は異形鉄器である。先端部は柳葉形を呈し，そこからゆるやかに広がり足部に至る。足部の内面以外すべて刃部を造っており，断面形は平造りである。足部の内面は逆Ｖ字状を呈しており，膨らみながら足部の端部に至る。穿孔が４孔あり，先端から5.2cm下に根挟みを挟むように２孔，足部の端部にそれぞれ１孔施されている。上側の２孔は，根挟みに孔の位置に合わせた溝が確認できることから，紐状のものを通して根挟みを固定していたと考えられる。足部の穿孔は，紐状のものを通していたと考えられる有機質の痕跡がみられる。根挟みの残存状態は悪いものの，残った輪郭から先端を三角形に加工していることが確認できる。足部の一部には，有機質製の紐のようなものが斜めに付着する。顕微鏡での観察から，身部の一部に植物繊維製の撚糸の付着が確認された。169にも同様の痕跡があることと，２個体が重なるように出土していることから，植物繊維製の紐でまとめられて副葬された可能性が考えられる。

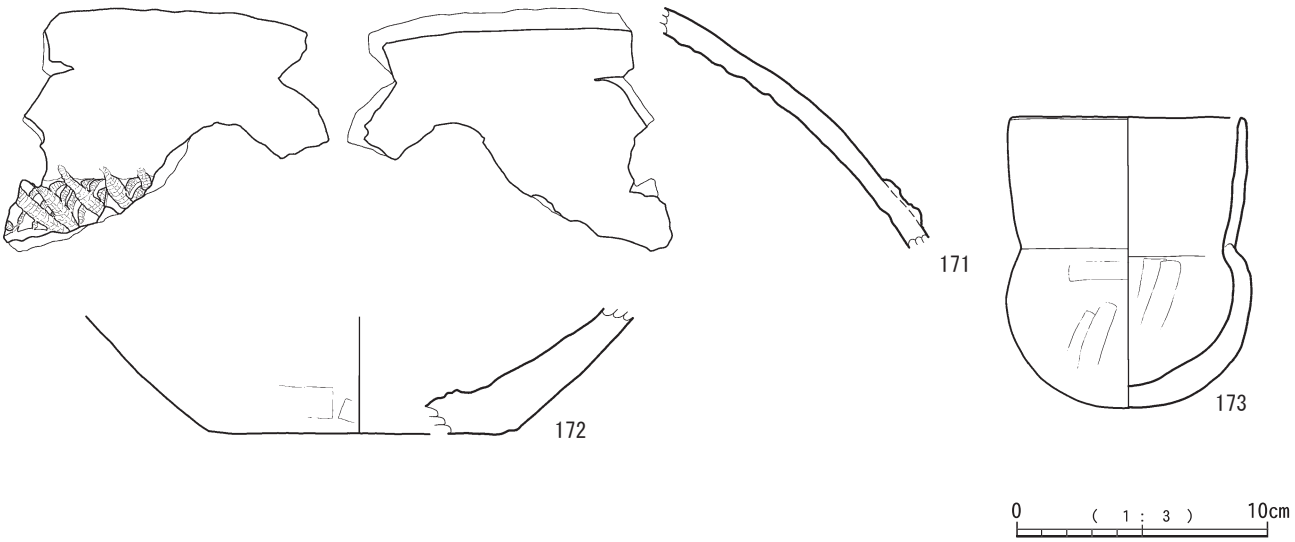
エリア５出土土器(第113図)

171・172は壺である。171は幅広突帯に斜格子状の刻みが密に施されており，刻みの切り合いが多い。刻

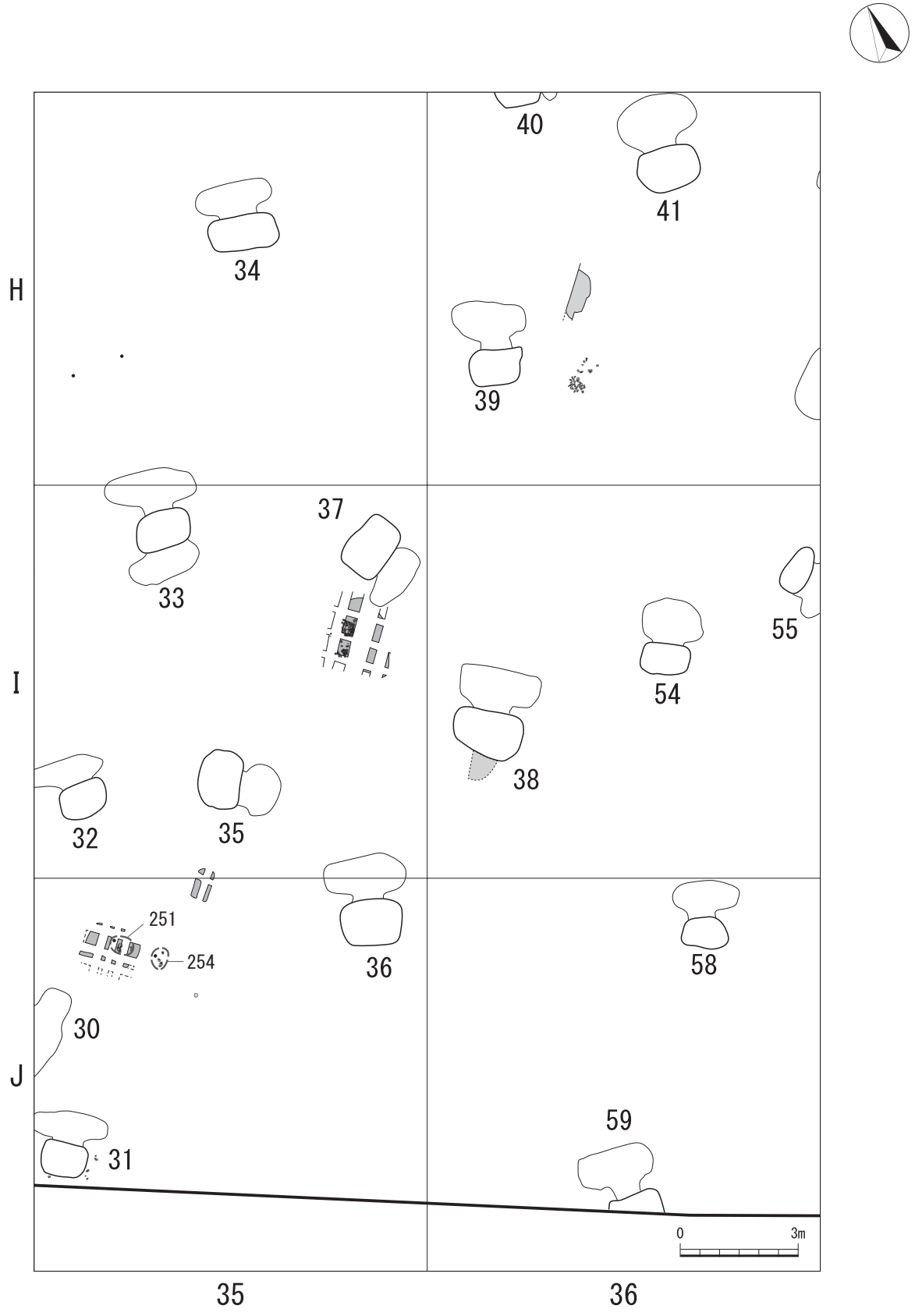
み目には布目痕が認められる。172は，平底の底部である。173は坩E類で，口径9.2cm，器高11.5cmを測る。口縁部はわずかに内湾しながら上に長く伸び，胴部は丸みを帯びる。底部は丸底である。内外面ともに工具によるナデ調整である。



第112図　44号地下式横穴墓出土鉄器



第113図　エリア５出土土器



第114図　エリア６　遺構配置図

３０号地下式横穴墓

検出区	J-34・35	玄室開口方向	南東
分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層の混在する付近の攪乱を取り除き検出した。玄室天井は羨道付近から中央部付近が崩落していた。

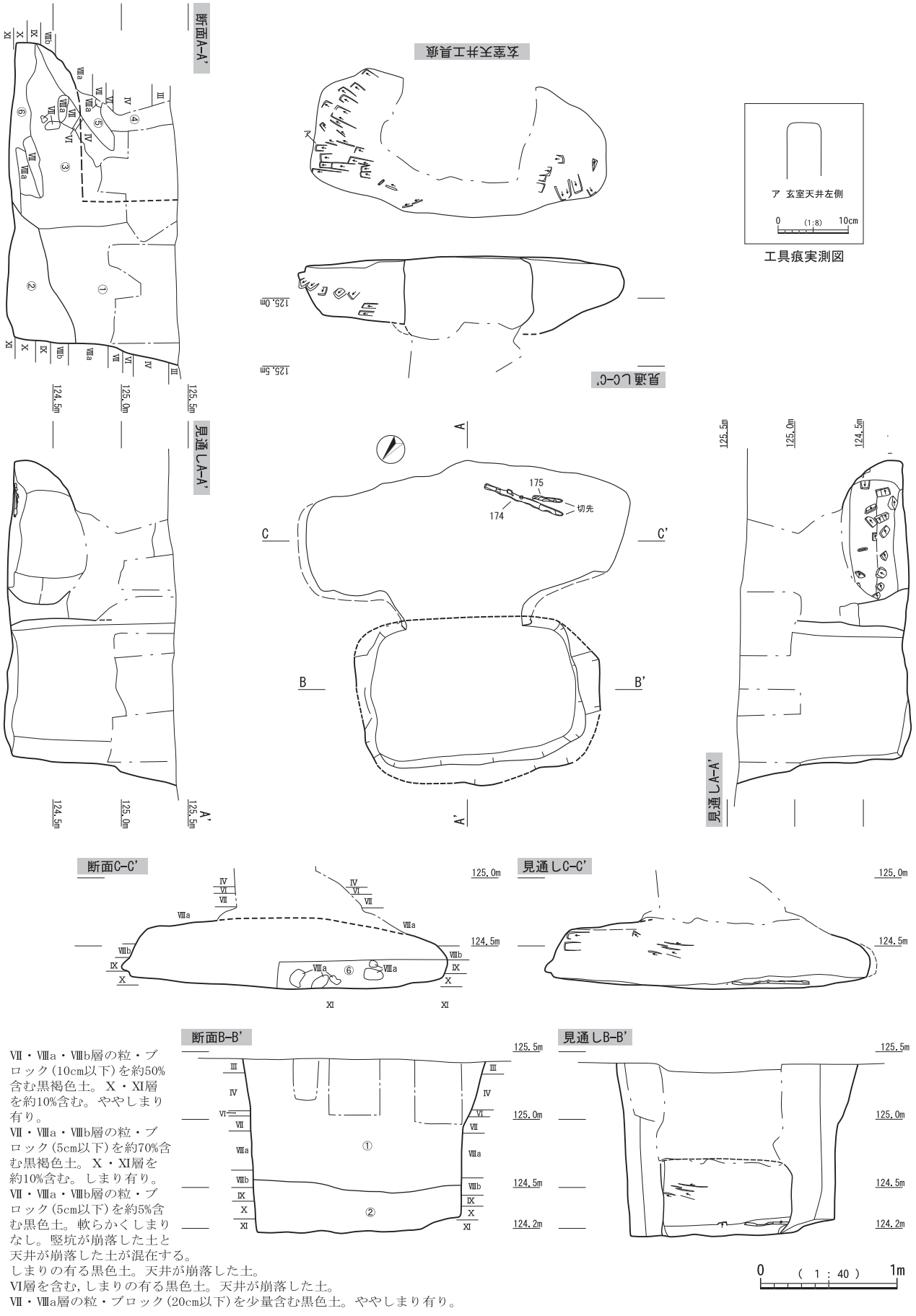
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	120	178	127	96	－	18	104	234	122	－
推　定	－	－	－	－	50	－	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 横幅は玄室より狭い。埋土全体にⅧ層の土が多く混在している。平面形は隅丸方形である。羨門は天井が崩落しているが，残存部分から長方形であったと推定される。 【玄室】 床面はほぼ平坦である。鉄器が床面直上で出土したことや床面の埋土状態から，玄室に屍床面はなかったと推定される。竪坑よりも横幅が広く，遺跡内でも大型の玄室である。天井部分に工具痕が多く残る。
工具痕	玄室内に多く，天井は主に中央から左右方向に掘削された痕が残る。 アは幅約５㎝の方形状で，玄室全体においてアと幅や刃先が明瞭に異なるものはみられず，この工具のみの使用と考えられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出

出土遺物	竪坑上面	なし
	竪坑埋土内	なし
	玄室内	鉄剣１点，短剣１点が出土した。

備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒褐色土。X・XI層を約10%含む。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約70%含む黒褐色土。X・XI層を約10%含む。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約5%含む黒色土。軟らかくしまりなし。竪坑が崩落した土と天井が崩落した土が混在する。
④ しまりの有る黒色土。天井が崩落した土。
⑤ Ⅵ層を含む,しまりの有る黒色土。天井が崩落した土。
⑥ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(20cm以下)を少量含む黒色土。ややしまり有り。

第115図　30号地下式横穴墓

31号地下式横穴墓

検出区	J-35	玄室開口方向	北東
分　類	B２		

検出状態	南側の調査区境付近で検出した。竪坑上部は攪乱を受けていた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	86	119	90	76	－	15	70	204	85	－
推　定	90	－	110	－	40	－	－	－	－	45

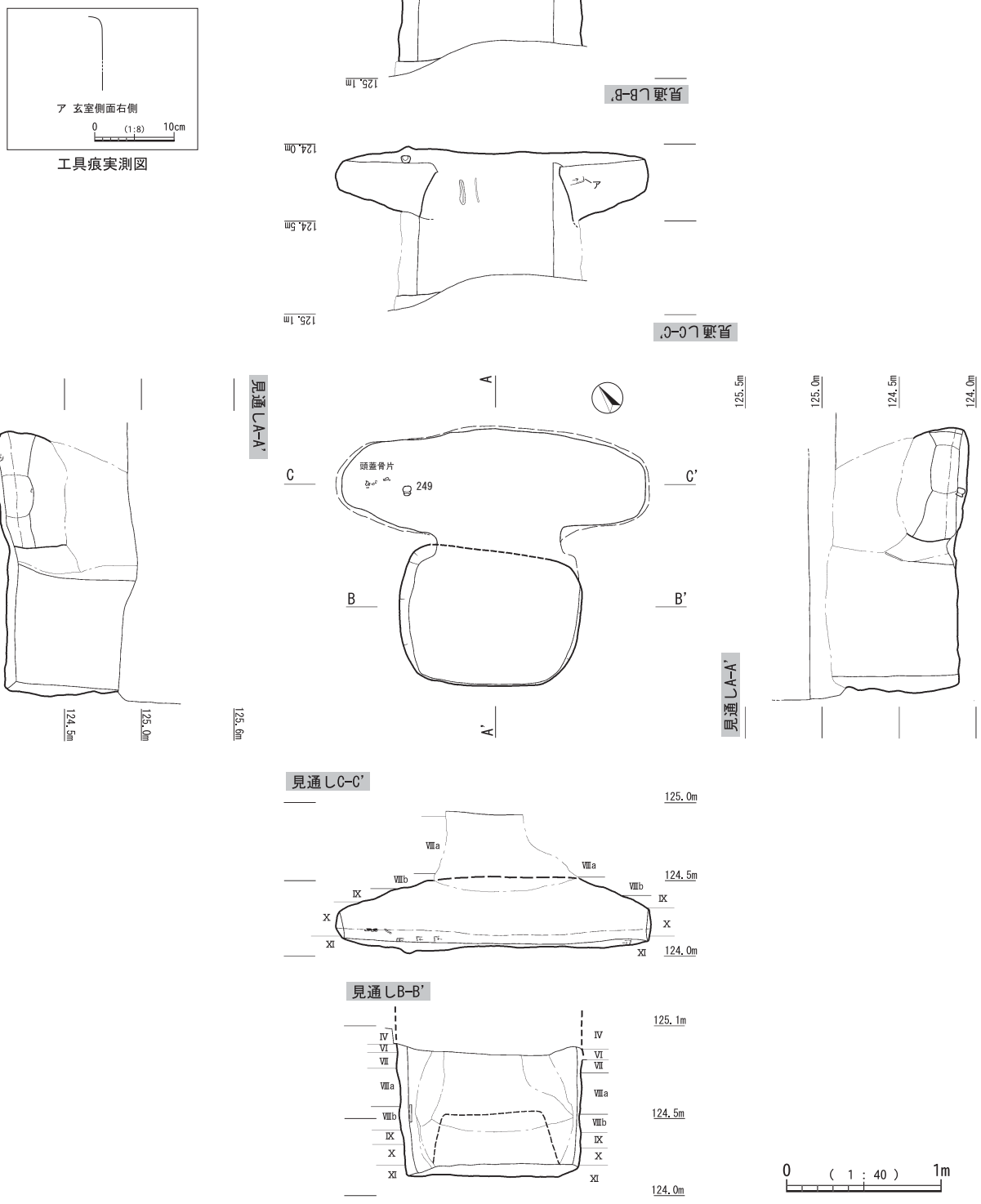
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	長方形（正方形に近い）	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X・XI	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要

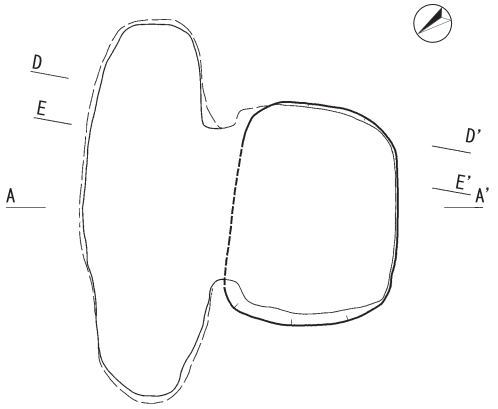
【竪坑】
床面はほぼ平坦である。玄室を含め，XI層まで掘削して構築しているが，埋土中にはⅦ～XI層の土が少なく，地表に置かれたものと推測される。埋土断面をみると，埋土③が羨道前まで続いており，閉塞材は横長と推測される。

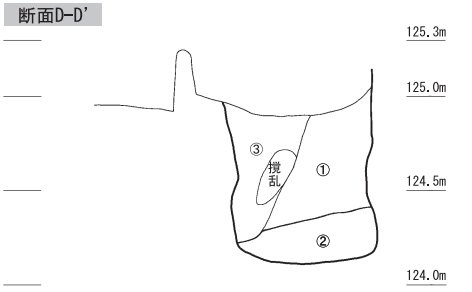
【玄室】
横幅は竪坑より広く，床面は竪坑より低い。天井の中央部分は崩落していたが，左右両側は残存していた。玄室内より坩が出土しており，出土状況から原位置を保っていると考えられる。この土器は，頭蓋骨の位置から被葬者の胸のあたりに置かれていたと推定される。

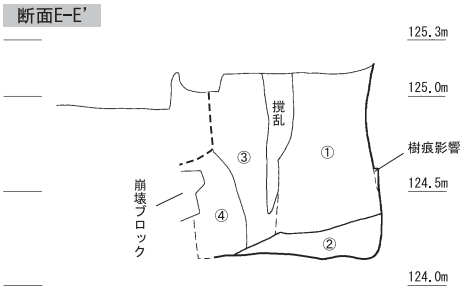
工具痕	玄室右側の側面に，左右奥方向へ削った痕が残っている。工具痕を消すように仕上げようとしたのか，明瞭なものは少なかった。 アは幅不明の方形タイプであり，右奥方向へ削られている。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	頭蓋骨片が少量残っていた。若年から壮年と推定され，性別は不明である。
出土遺物　竪坑上面	上部に壺及び高坏の土器片が多数みられたが，攪乱を受けていた。
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	坩（249）が出土した。
備　考	完形の土器が玄室内から出土したのは，この墓のみである。

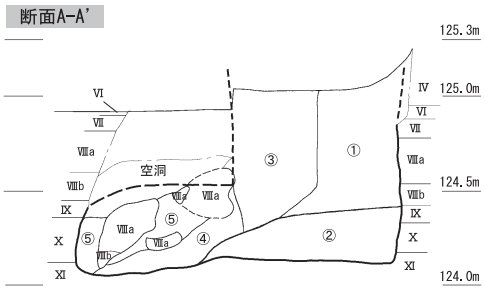


第116図　31号地下式横穴墓(1)









① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%,Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層ブロックを約20%含む黒色土。しまり有り。
③ 竪坑が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。しまりなし(①より軟らかい)
④ 上部から入り込んだ土。しまり全くなし。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量含む黒色土。
⑤ 天井が崩落した時の黒色土。少量のⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を含む。軟らかくしまりなし。

0 (1 : 40) 1m

第117図　31号地下式横穴墓(2)

３２号地下式横穴墓

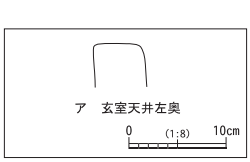
検出区	I-35	玄室開口方向	北
分　類	Ｂ１		

検出状態	わずかにⅦ・Ⅷ層の混在する付近の攪乱部分を取り除き検出した。

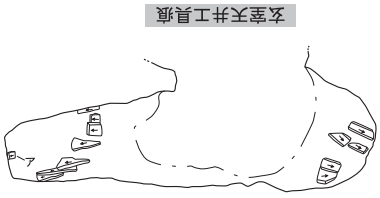
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	86	124	102	86	－	6	68	206	74	－
推　定	－	－	－	－	55	－	－	－	－	50

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形（正方形に近い）
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形（横長）		
玄室床面層	X	玄室断面形	方形（楕円形に近い）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

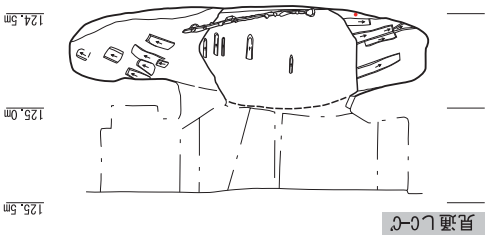
概　要	【竪坑】 床面左側が部分的に凹む。埋土②はⅦ・Ⅷ層が多くを占めており，竪坑を埋め戻した土が主体であったと考えられる。竪坑埋土内にⅢ・Ⅳ層の土はみられず，多くは地表に置かれたものと推定される。 【玄室】 横幅は竪坑の２倍ほどある。平面形は左側に偏る片袖状である。鉄剣が出土しているが，羨門前までⅦ・Ⅷ層が多く入った埋土⑧がみられ，屍床であったと考えられる。赤色顔料が玄室右側床面近くより検出されている。
工具痕	玄室天井や側面に，左右方向へ削った痕が多数みられる。 アは幅約 5.5 ㎝の方形状であり，長く突いた痕跡が多い。アと工具幅や先端の形状が異なるものはみられなかった。
赤色顔料	玄室より検出され，パイプ状ベンガラと確定した。
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点が出土した。
備　考	－



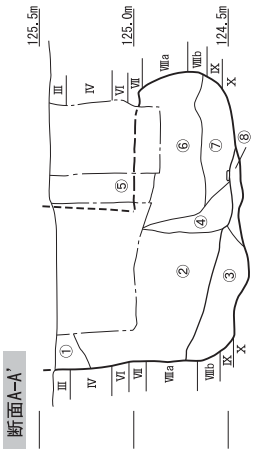
工具痕実測図

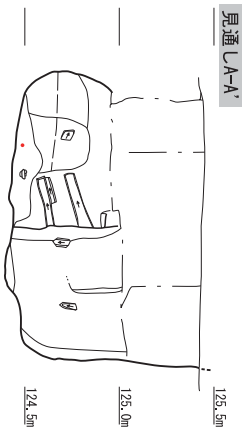


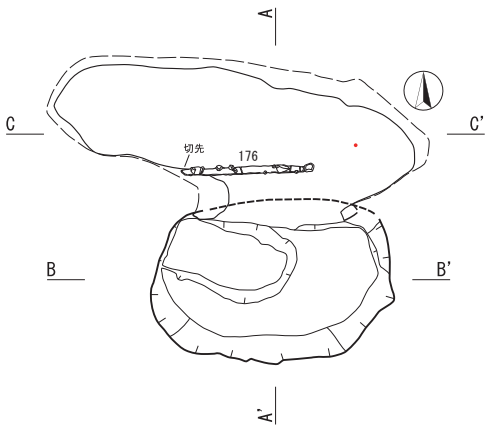
玄室天井工具痕

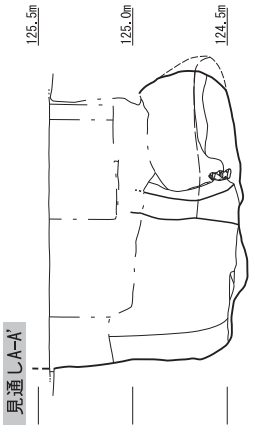


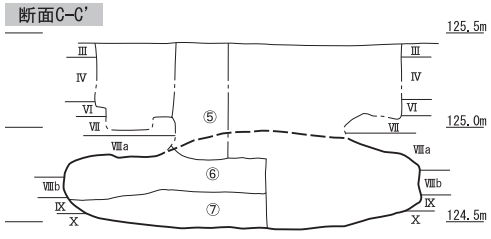
見通しC-C'

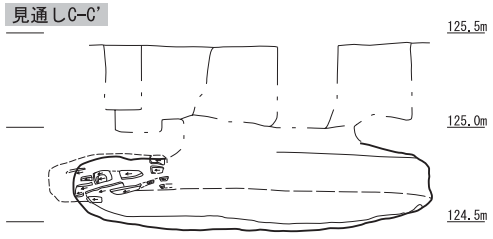


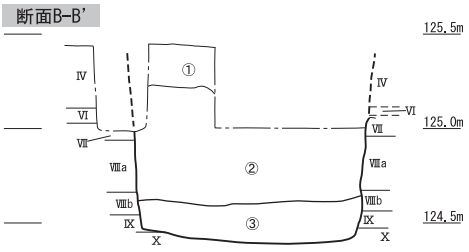


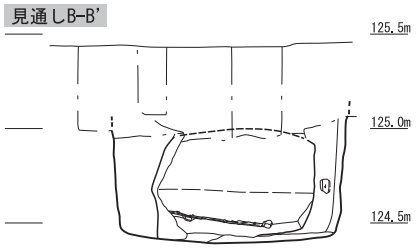












① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（5cm以下）を約30%含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（15cm以下）を約80%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（10cm以下）を約50%，Ⅸ・Ⅹ層を約20%含む黒色土。しまり有り。
④ ②が崩落した土。軟らかい。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（2mm以下）を微量に含む黒色土。天井が崩落した土。やや軟らかい。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（1cm以下）を少量含む黒色土。Ⅳ層が主体。軟らかい。天井が崩落した土。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（3cm以下）を約10%含む黒色土。軟らかい。竪坑が崩落した土と玄室に入り込んだ土が混在する。天井が崩落した土。
⑧ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（3cm以下）を約50%含む黒色土。ややしまり有り。屍床と思われる。

0　(1:40)　1m

第118図　32号地下式横穴墓

３３号地下式横穴墓

検出区	I-35	玄室開口方向	北側：北 南側：南
分　類	北側：Ｂ１　　南側：Ｂ１		

検出状態：攪乱を取り除き，Ⅶ・Ⅷ層の混在する部分を手掛かりに検出した。

	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	100	130	60	（北）78 （南）104	－	（北）19 （南）10	（北）90 （南）74	（北）232 （南）180	（北）109 （南）85	－
推定	105	150	120	－	（北）50 （南）45	－	－	－	－	（北）50 （南）50

竪坑最下層	Ⅺ	竪坑平面形	隅丸長方形
羨門正面形	（北側）長方形（正方形に近い） （南側）長方形		
玄室天井層	（北側）Ⅷa （南側）Ⅷa	玄室平面形	（北側）長方形 （南側）楕円形
玄室床面層	（北側）Ⅹ （南側）Ⅹ	玄室断面形	（北側）楕円形 （南側）楕円形
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし
竪坑掘り返し痕	なし		

概要

【竪坑】
床面は北側羨門付近が低くなる。竪坑は玄室よりやや深い位置まで掘削されており，その段差を埋めるように埋土④が入っている。埋土④はややしまりが強く，閉塞時の床面と考えられる。

【北玄室】
横幅は竪坑と比較してかなり広い。土器が１点出土しているが,床面から離れた高い位置にあることから，竪坑から流入したものと推測される。羨道入口付近と，左奥側の２か所に鉄器が副葬されている。鉄鏃の先端の多くは左側に向けられている。鉄器の下や中央付近の床面にしまりのある土の堆積がみられ，屍床と考えられる。

【南玄室】
平面形は右側に偏る片袖状である。右奥に鉄器が副葬されいる。鉄鏃の先端は右側に向けられている。床面には埋土⑦が広がっており，屍床と考えられる。

工具痕：未検出

赤色顔料：北側玄室及び竪坑埋土から検出した。北側玄室は非パイプ状ベンガラ，竪坑はパイプ状ベンガラであった。

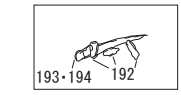
炭化物：北側玄室埋土から検出した。年代測定では 219calAD-358calAD，樹種はクスノキと同定された。

人骨：未検出

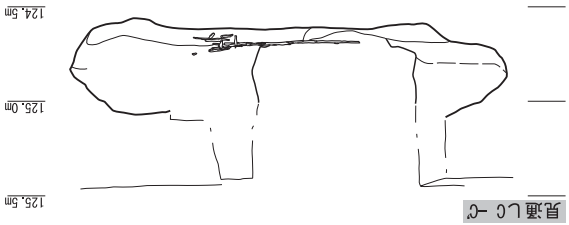
出土遺物

竪坑上面	なし
竪坑埋土内	なし
玄室内	北側:鉄剣１点，鉄鏃 17点（柳葉鏃３点，鳥舌鏃５点，腸抉柳葉鏃７点，片腸抉柳葉鏃１点，変形柳葉鏃１点）が出土した。南側：鉄鏃２点（圭頭鏃２点）が出土した。

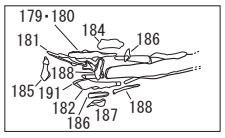
備考：遺物は年代差がほとんどなく，南北玄室を同時に作ったと推定される。玄室内の約２㎝の土器片１点は，古墳時代のものと思われるが，器種不明である。周辺に同一個体と考えられるものはみられなかった。



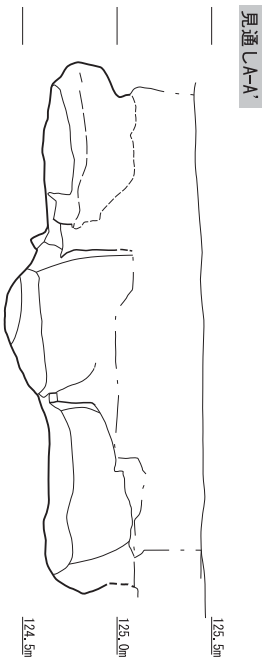
192～194 鉄器出土状況(1:20)

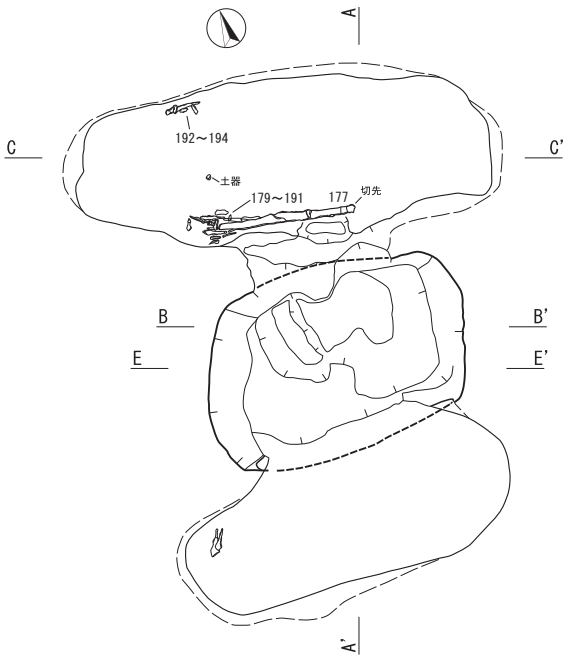


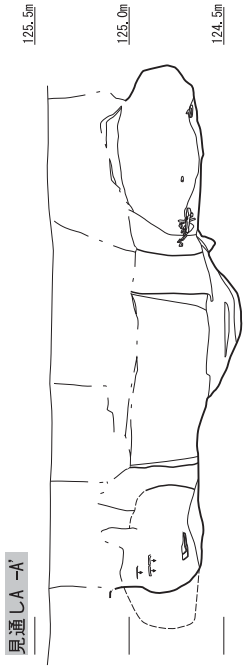
見通しC-C'

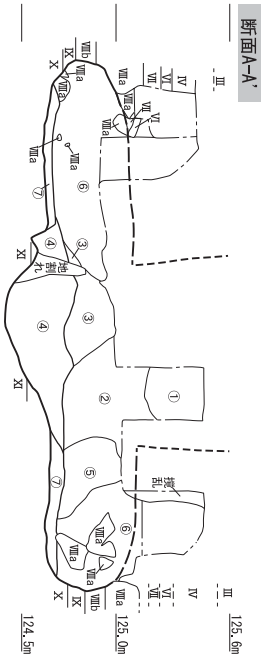


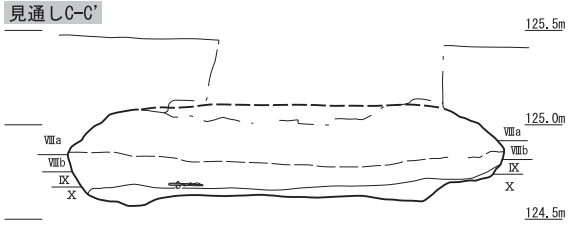
179～191 鉄器出土状況(1:20)

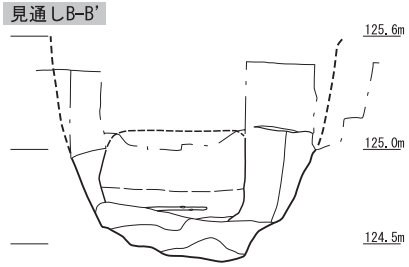


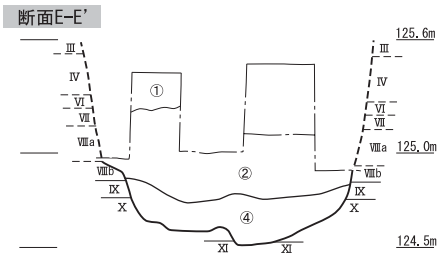








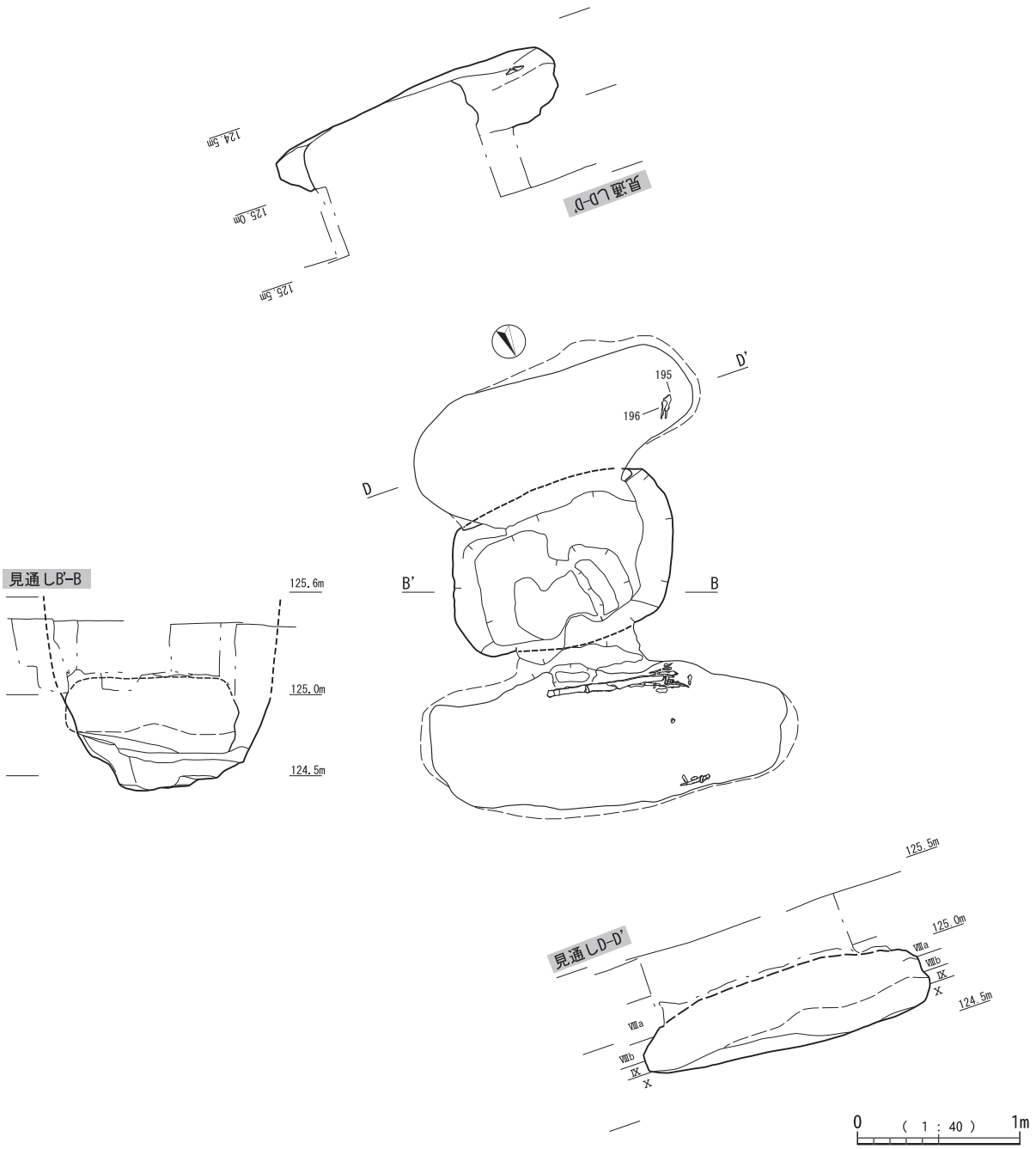




① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約40%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%,Ⅹ層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒色土。しまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。軟らかい。竪坑が崩落した土と天井が崩落した土が混在する。
⑥ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(5cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。軟らかい。
⑦ Ⅶ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。Ⅹ層も含む。しまり有り。屍床と思われる。

0 (1 : 40) 1m

第119図　33号地下式横穴墓(1)



第120図　33号地下式横穴墓(2)

３４号地下式横穴墓

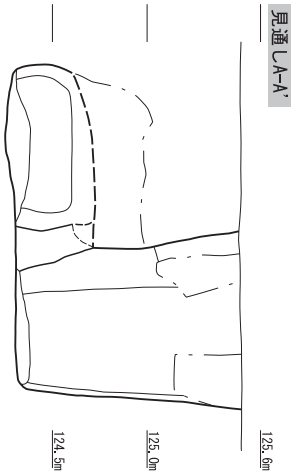
検出区	H-35	玄室開口方向	北
分　類	A		

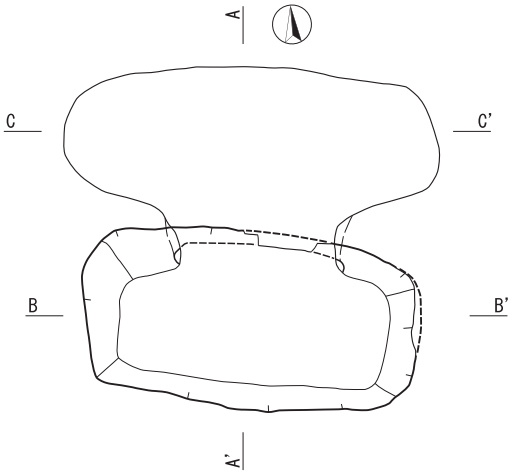
検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する付近の攪乱を取り除き検出した。玄室天井は崩落しかけており，調査中に崩落した。

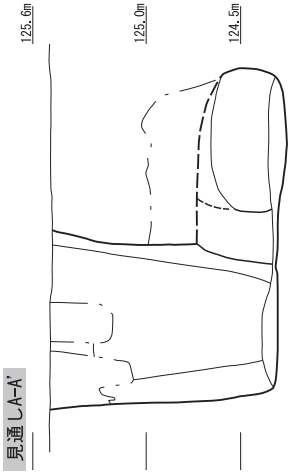
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	95	178	120	92	－	25	80	198	105	－
推　定	－	－	－	－	40	－	－	－	－	45

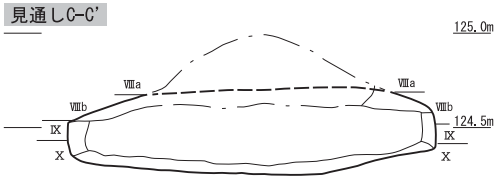
竪坑最下層	X	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

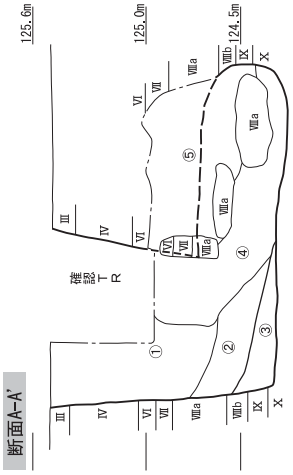
概　要	【竪坑】 床面は玄室入口付近までやや平坦である。羨道前の埋土④は，大変軟らかく範囲が広いため，上部からかなりの量の黒色土が流入したと考えられる。平面・断面とも整った長方形を呈する。 【玄室】 横幅は竪坑とほぼ同じであり，羨道はその半分程度である。床面は竪坑・羨道よりやや低い。断面形は長方形でほぼ対称である。
工具痕	左右の玄室天井残存部に，左右奥へ向けて削った跡がみられたが，幅や先端の形状が分かるものはみられなかった。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

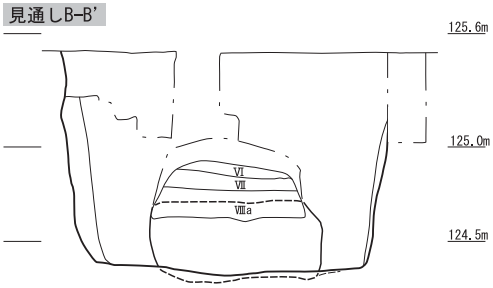


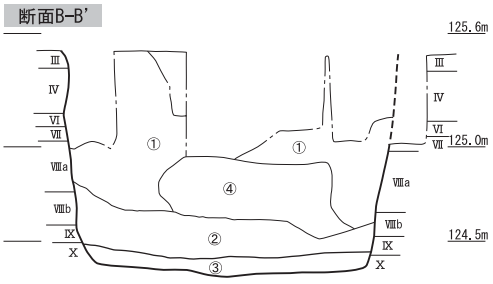




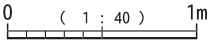








① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%,Ⅸ・Ⅹ層を少量含む黒色土。やや軟らかい。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含むⅨ・Ⅹ層の土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を微量に含む黒色土。軟らかくしまりなし。竪坑が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。
⑤ 天井が崩落した土。軟らかい黒色土にⅥ・Ⅶ・Ⅷa層の土が入る。



第121図　34号地下式横穴墓

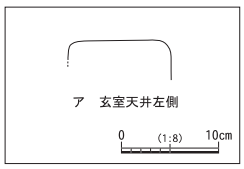
３５号地下式横穴墓	検出区	I-35	玄室開口方向	南東
	分　類	Ｂ２		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する黒色土を手掛かりに検出した。遺構は良好な状態で残存していた。

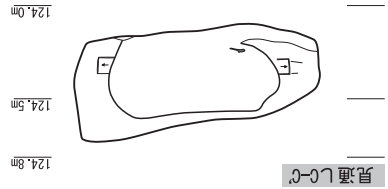
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	108	151	115	84	42	25	102	130	127	50
推　定	120	175	130	－	－	－	－	－	－	－

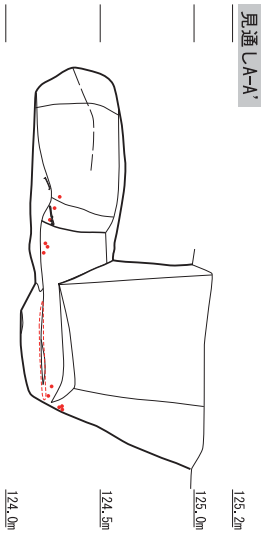
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	六角形
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X・XI	玄室断面形	方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

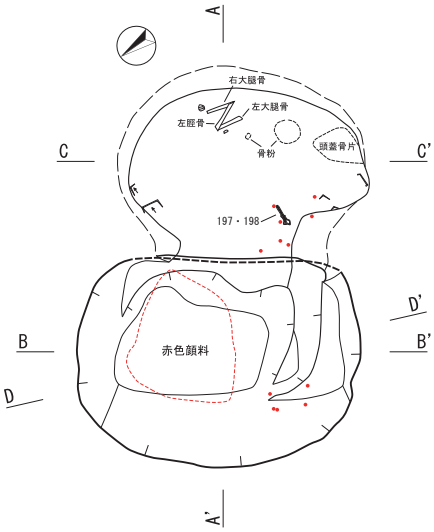
概　要	【竪坑】 床面は玄室より低く造られている。埋土④はしまりが強いことや，赤色顔料がこの上面で多量に検出されたことから，埋土④は閉塞時の床面であり，閉塞前に赤色顔料を散布するなどの行為があったと考えられる。羨道付近にも赤色顔料がみられるが，量も少なく，竪坑からの流れ込みと推定される。 【玄室】 横幅は竪坑より狭い。奥には人骨が残存していたが，状態は悪く頭蓋骨はほぼ粉状となっていた。赤色顔料は骨および周辺からは検出されなかった。羨道右側に鉄鏃が副葬されており，先端は右下を向く。
工具痕	玄室内のほとんどの壁面に残存しており，玄室正面壁には右側から左側に，玄室天井には羨道の右側から中央部，中央部から左右奥方向へ削った痕が残っていた。 アは幅約 11 ㎝の方形状である。アと明らかに幅や先端の形状が異なる痕はみられなかった。
赤色顔料	玄室及び竪坑でどちらもパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	未検出
人　骨	頭部・胸部と思われる箇所に，骨粉・脚部分の骨が遺存していた。頭部付近から赤色顔料が検出された。壮年の女性と推定されている。
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃２点（圭頭鏃２点）が出土した。
備　考	－

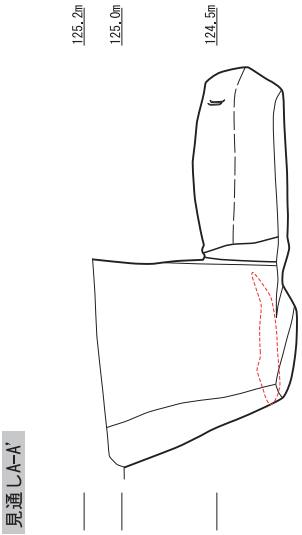


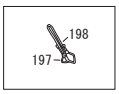
工具痕実測図



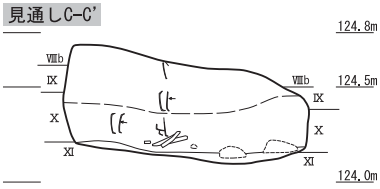


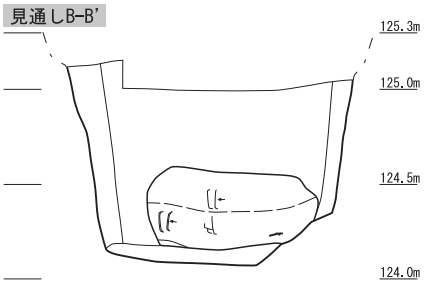


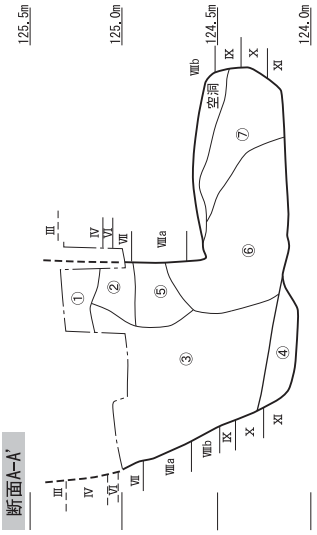


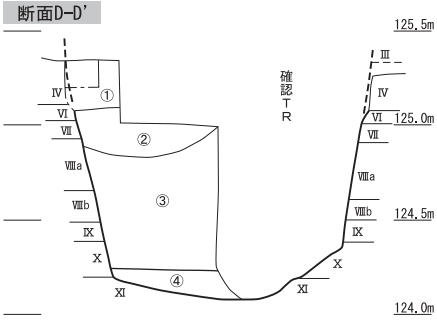


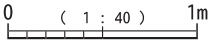
鉄器出土状況（1:20）











① Ⅶ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量，Ⅹ・Ⅺ層を少量含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%，Ⅹ・Ⅺ層を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%，Ⅹ・Ⅺ層を約20%含む黒色土。しまり有り。
⑤ ②がやや崩落しかけた土。やや軟らかい。
⑥ ③が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。軟らかい。
⑦ 上部から入り込んだ黒色土。軟らかい。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)少ない。

第122図　35号地下式横穴墓

３６号地下式横穴墓

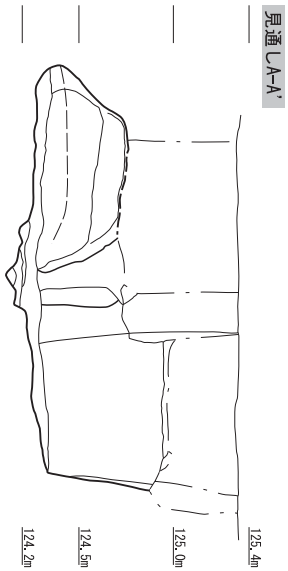
検出区	Ⅰ・J-35	玄室開口方向	北北東
分　類	Ｂ１		

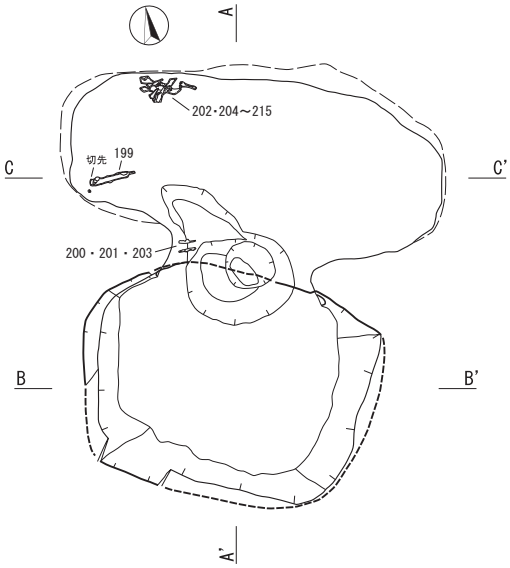
検出状態	Ⅲ層上面でⅦ・Ⅷ層が混在する付近の攪乱部分を取り除き検出した。調査中に玄室天井が崩落した。

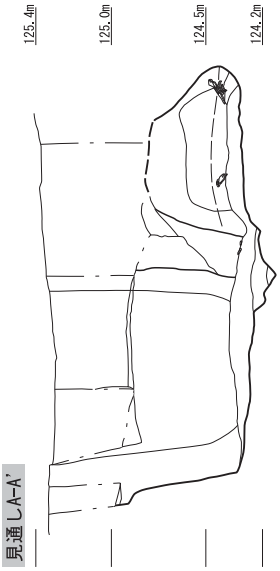
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	124	156	62	90	52	24	92	206	116	－
推　定	－	155	110	－	－	－	－	－	－	50

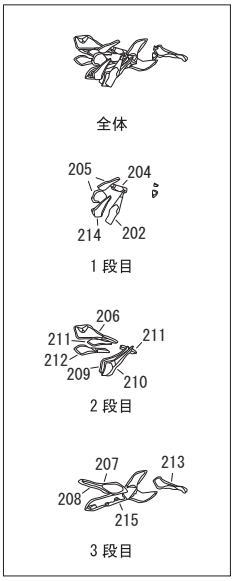
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 羨道床面は凹んだ形状となっており，その部分を埋土⑥が覆っている。これは，床面を平坦にするために敷かれたものと考えられる。床面に近い埋土③はⅦ・Ⅷ層の比率が高く，Ⅸ層も含んでいる。強くしまっており，この上面が閉塞時の床面と推定される。 【玄室】 羨門は，玄室天井より低く作られている。左側手前と奥，および羨道左側で鉄器が出土した。奥の鉄鏃束はそろってはいないが，先端はほぼ左側を向く。
工具痕	羨道から奥方向へ削った跡がみられたが，詳細は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	短剣１点，鉄鏃 15 点（短頸鏃１点，鳥舌鏃３点，圭頭鏃 10 点，鉄鏃片１点），異形鉄器１点が出土した。
備　考	－

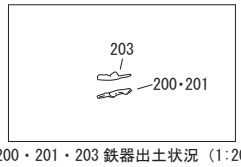




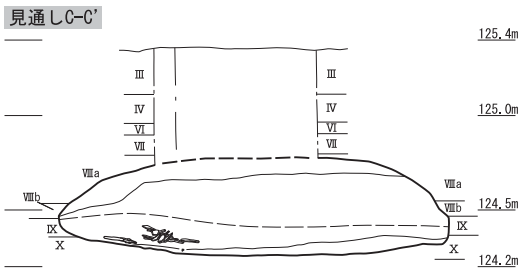


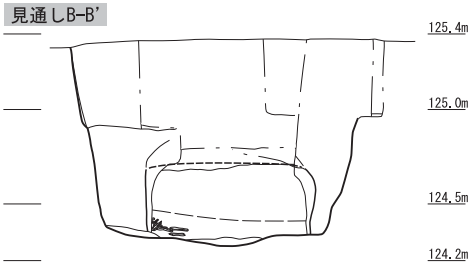


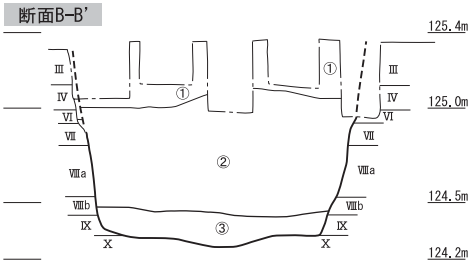
202・204 ～ 215 鉄器出土状況（1:20）

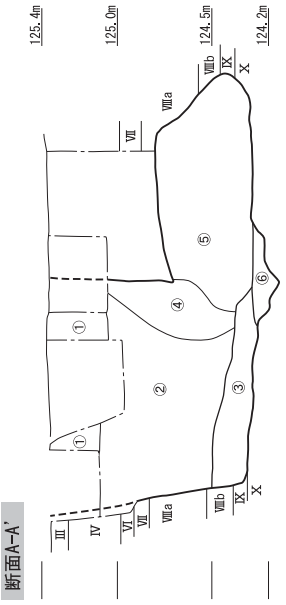


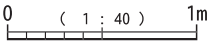
200・201・203 鉄器出土状況（1:20）











① VII・VIIIa・VIIIb層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。ややしまり有り。
② VII・VIIIa・VIIIb層の粒・ブロック(10cm以下)を約40%含む黒色土。しまり有り。
③ VII・VIIIa・VIIIb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%,IX層を多く含む黒色土。しまり有り。
④ VII・VIIIa・VIIIb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
⑤ VII・VIIIa・VIIIb層の粒・ブロック(5cm以下)を微量に含む黒色土。軟らかい。
⑥ VII・VIIIa・VIIIb層の粒・ブロック(5cm以下)を約40%含む黒色土。③に似ているが軟らかい。屍床部 。

第123図　36号地下式横穴墓

37号地下式横穴墓

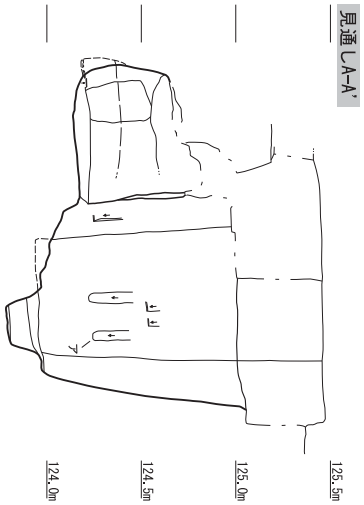
検出区	I-35	玄室開口方向	南南東
分　類	B２		

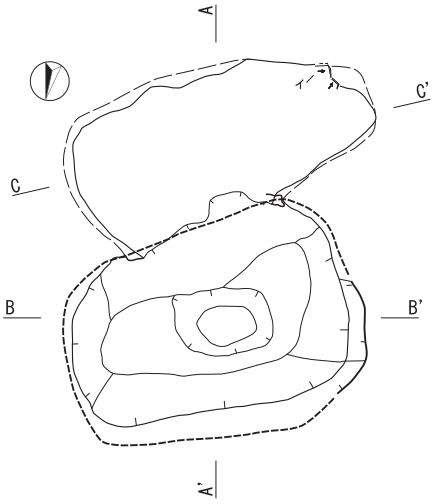
検出状態	土器が集中して出土した周辺の攪乱部分を取り除き検出した。

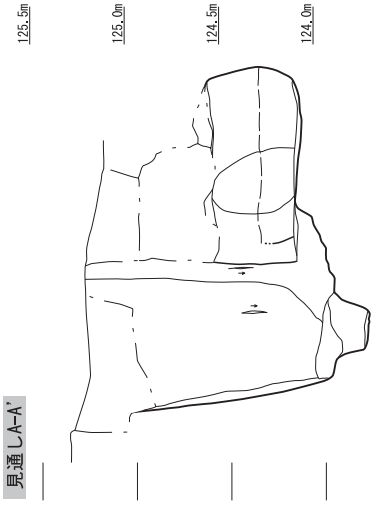
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	114	160	150	82	－	－	80	166	92	－
推　定	120	160	180	－	70	－	－	－	－	55

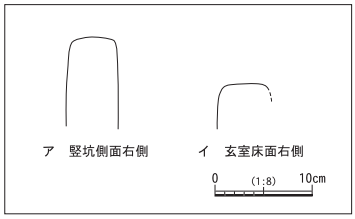
竪坑最下層	ⅩⅣ	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	逆台形
玄室天井層	Ⅸ	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	Ⅺ・Ⅻ	玄室断面形	方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室より低く造られ，さらに中央部で一段凹む。最下面はⅩⅣ層であり，全遺構の中で最も深くで構築されている。羨道前の埋土は，樹痕の影響が強くみられた。床面付近の埋土②はⅩ～Ⅻ層であり，玄室が造られている層と同じであることから，玄室の掘削土と推定される。また，玄室床面と同じ高さであることから，閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 平面形は右側に偏る片袖状となる。天井はⅨ層付近，床面はⅫ層と深い。天井は崩落しており，埋土内に大型のⅧ層ブロックが多くみられた。断面は方形を呈している。
工具痕	竪坑や玄室側面に残存しており，竪坑にア，玄室にイがみられる。ア・イとも方形状で，アは幅5.4㎝，イは幅5.6㎝と大変近く先端の形状も似ていることから，同一のものと考えられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	南側に土器集中域と被覆土が重なる部分あり。

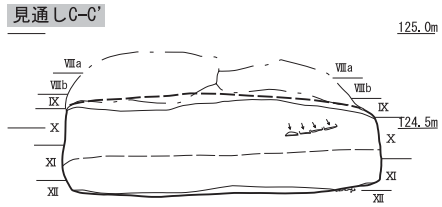


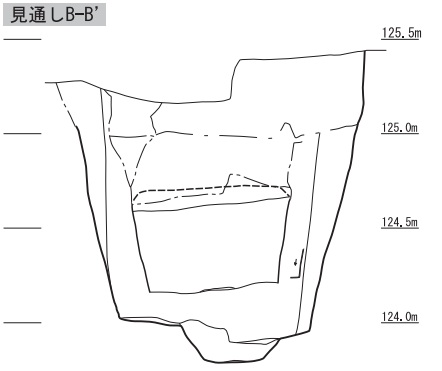


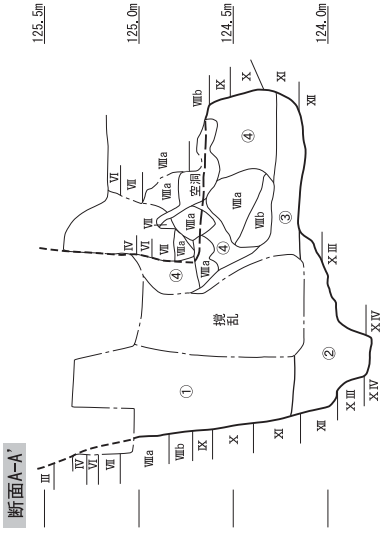


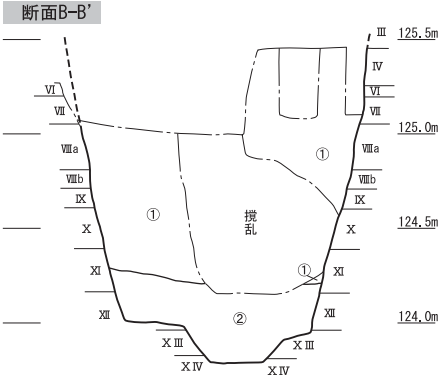


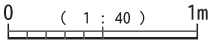
工具痕実測図











① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%, Ⅹ～Ⅻ層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒褐色土。ややしまり有り。
② Ⅹ～Ⅻ層の粒・ブロック(10cm以下)を約90%含む黒色土。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層はほとんどなし。しまり有り。
③ 竪坑埋土①が崩落した土。軟らかくしまりなし。とても軟らかい黒色土にⅦ・Ⅷa・Ⅷb・Ⅹ層ブロックが混在する。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。③より軟らかい黒色土が入る。上部から入り込んだ土。

第124図　37号地下式横穴墓

３８号地下式横穴墓

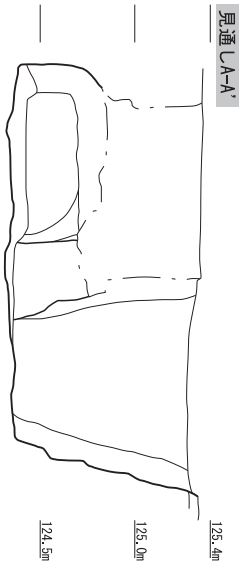
検出区	I-36	玄室開口方向	北東
分　類	A		

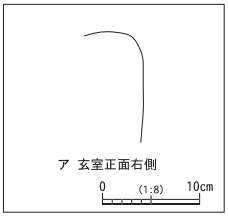
検出状態	Ⅳ層上面でⅦ・Ⅷ層が混在する付近の攪乱部分を取り除き検出した。玄室の天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	116	178	101	110	－	32	94	206	126	－
推　定	－	－	－	－	50	－	－	－	－	50

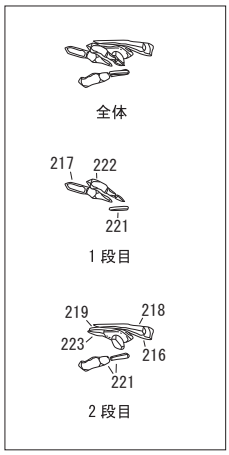
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は竪坑から玄室までほぼ同じ高さに造られている。玄室前の埋土⑤と⑥は軟らかく，広く堆積している。竪坑も玄室もⅦ・Ⅷ層土を掘り下げており，埋土中にも多く含まれている。 【玄室】 羨道との境には明確な稜が形成される。横幅２m，縦幅も１m近くあり，大型である。左側奥に土器片がみられ，その位置から上位から流れ込んできたと考えられる。左中央部に鉄鏃が出土しており，先端は左側を向いている。
工具痕	玄室正面壁に，中央から右方向に削った痕のみ確認できた。アは方形状で幅は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃８点（鳥舌鏃６点，圭頭鏃１点，鉄鏃片１点）が出土した。
備　考	玄室内から出土した土器２点は，縄文土器であった。

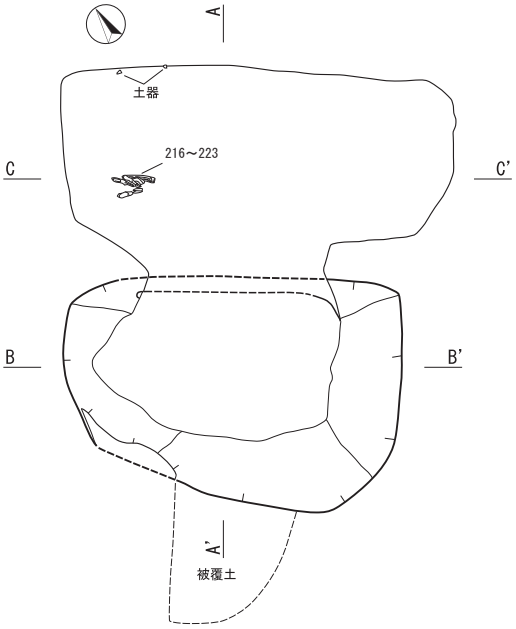


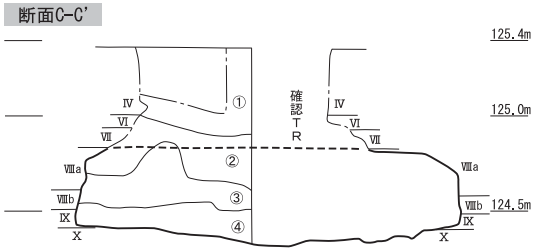


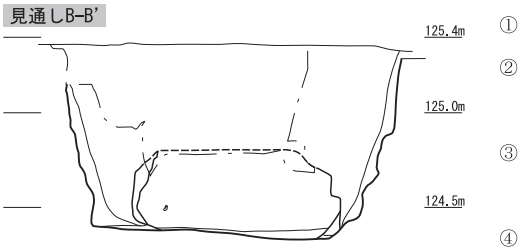
工具痕実測図

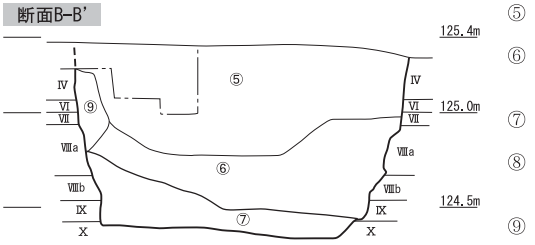


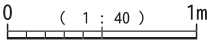
216～223 鉄器出土状況 (1:20)



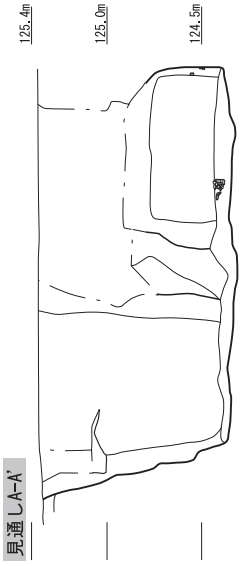


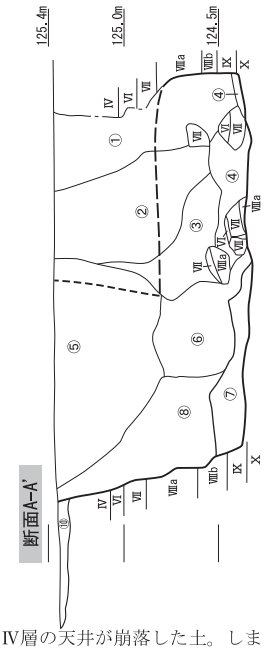






第125図　38号地下式横穴墓





① 黒色土。Ⅳ層の天井が崩落した土。しまり弱く軟らかい。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。しまり弱く軟らかい。竪坑が崩落した土と天井が崩落した土が混在すると思われる。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約10%含む黒色土。しまり弱く軟らかい。竪坑が崩落した土と天井が崩落した土が混在したと思われる。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約80%含む黒色土。しまり弱い。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約40%含む黒色土。しまり弱くやや軟らかい。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒色土。しまり弱く軟らかい。(⑤より軟らかい)
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒色土。しまり有り。やや硬い。
⑧ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(20cm以下)を約80%含む黒色土。⑦よりブロック大きい。ややしまり有り。
⑨ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量含む黒色土。しまり有り。
⑩ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒 (1cm以下) を少量含む黒色土。しまり有り。

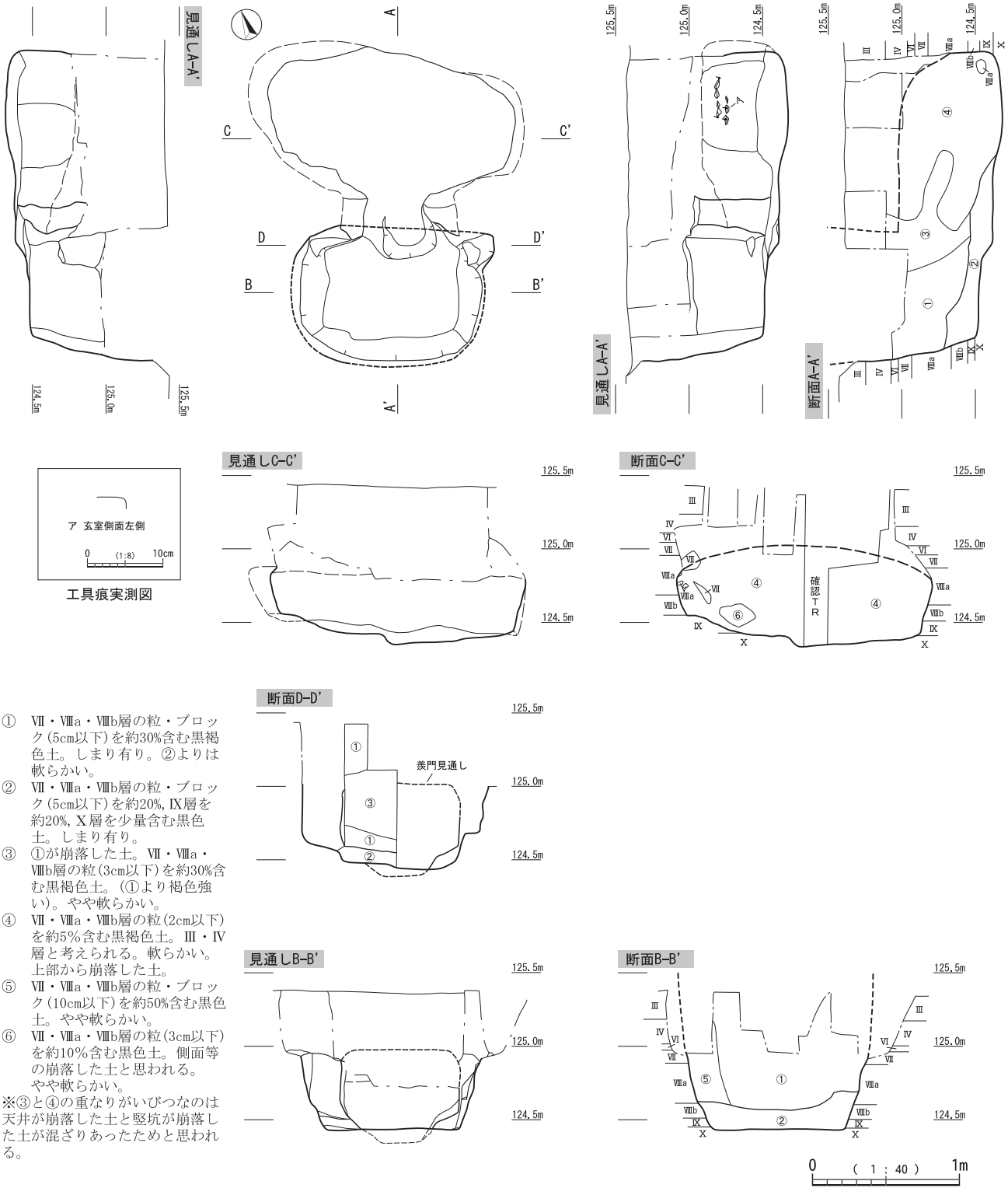
39号地下式横穴墓	検出区	H-36	玄室開口方向	北北東
	分　類	B 1		

検出状態	Ⅲ層上面でⅦ・Ⅷ層が混在する周辺の攪乱部分を取り除き検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	96	132	94	80	－	18	100	184	118	－
推　定	90	135	105	－	65	－	－	－	－	70

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	逆台形？
玄室天井層	Ⅵ・Ⅶ	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は羨門付近で一段低くなる。埋土①はⅦ・Ⅷ層のブロックがほぼ均等に混在している。床面近くの埋土②はしまりがあり，埋土①とに明確な違いがみられる。左側の抉り部分の床面と同じ高さであることから，埋土②の上面が閉塞時の床面と考えられる。抉り部分は軟らかい埋土で覆われていた。 【玄室】 平面形は左側に偏る片袖状である。天井部分を含む上部層の崩落土と考えられる埋土④は，Ⅲ・Ⅳ層が主体であるため，玄室天井はⅣ層付近であったと考えられる。
工具痕	玄室内の左側面に，中心から奥方向へ削った方形状の工具痕が残っている。
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒褐色土。しまり有り。②よりは軟らかい。

② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%,Ⅸ層を約20%,Ⅹ層を少量含む黒色土。しまり有り。

③ ①が崩落した土。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約30%含む黒褐色土。(①より褐色強い)。やや軟らかい。

④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約5%含む黒褐色土。Ⅲ・Ⅳ層と考えられる。軟らかい。上部から崩落した土。

⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒色土。やや軟らかい。

⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。側面等の崩落した土と思われる。やや軟らかい。

※③と④の重なりがいびつなのは天井が崩落した土と竪坑が崩落した土が混ざりあったためと思われる。

第126図　39号地下式横穴墓

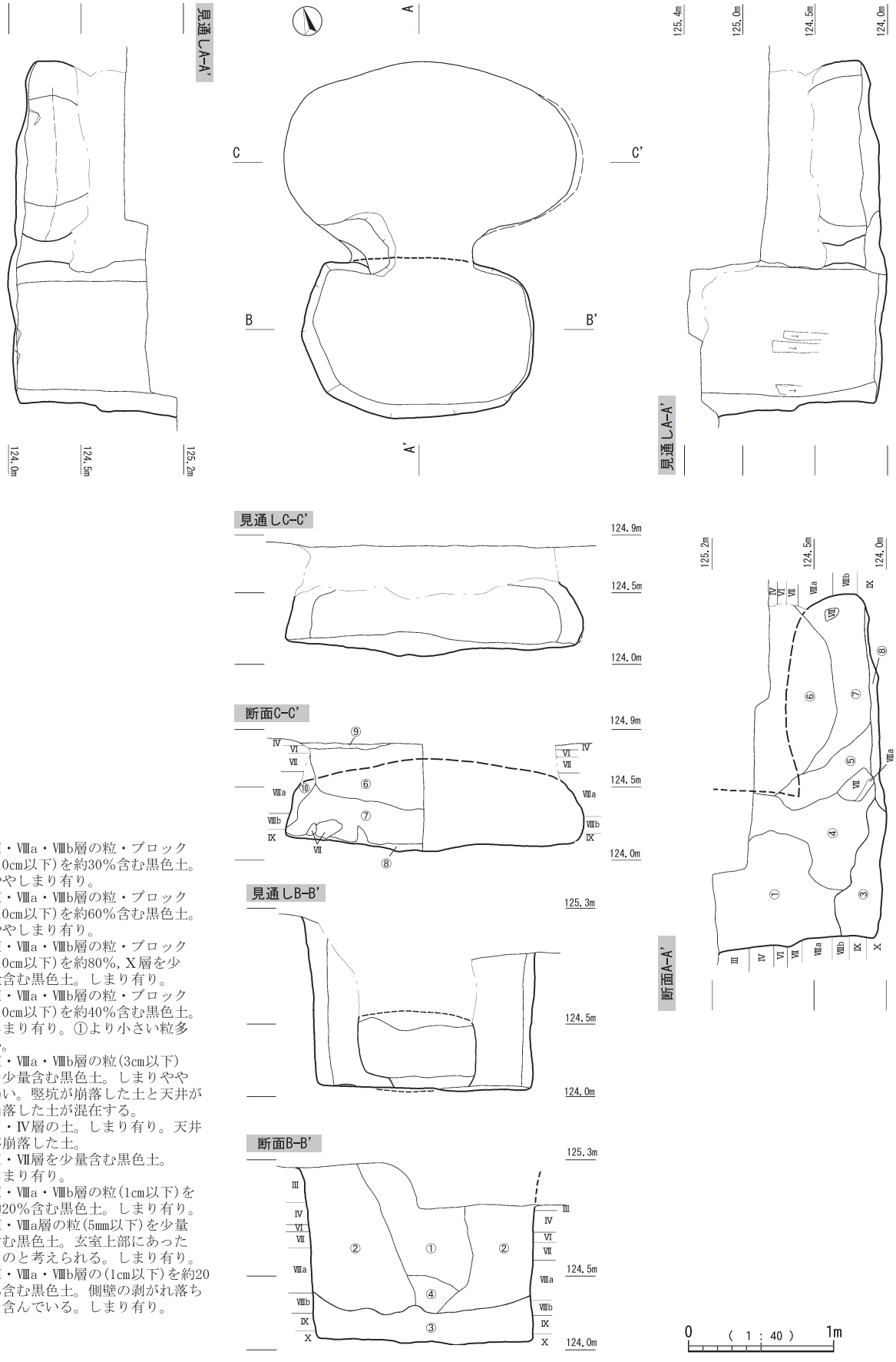
41号地下式横穴墓	検出区	H-36	玄室開口方向	北北東
	分　類	A		

検出状態	表土下で，Ⅶ・Ⅷ層が混在する竪坑埋土と玄室の崩壊部分を検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 深さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	111	160	115	80	－	17	123	206	140	－
推　定	－	－	－	－	60	－	－	－	－	65

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅸ	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室中央付近までほぼ平坦であるが，玄室奥で一段高くなる。埋土③はⅦ・Ⅷ層の割合が高くしまりがあり，埋土①や④と明瞭に区別できるため，埋土③の上面が閉塞時の床面と考えられる。埋土④は羨道前から竪坑の中心部分にかけて広い範囲に及ぶ。 【玄室】 平面形は楕円形を呈し，側面にも明確な稜はもたない。埋土⑦にⅥ・Ⅶ層の土が入っていたため，Ⅵ～Ⅶ層上面付近が玄室天井であったと考えられる。また羨道入口にはⅦ・Ⅷa層のブロックが崩落していたため，Ⅷa層上面が天井であったと考えられる。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%,X層を少量含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約40%含む黒色土。しまり有り。①より小さい粒多い。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。しまりやや弱い。竪坑が崩落した土と天井が崩落した土が混在する。
⑥ Ⅲ・Ⅳ層の土。しまり有り。天井が崩落した土。
⑦ Ⅵ・Ⅶ層を少量含む黒色土。しまり有り。
⑧ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約20%含む黒色土。しまり有り。
⑨ Ⅶ・Ⅷa層の粒(5mm以下)を少量含む黒色土。玄室上部にあったものと考えられる。しまり有り。
⑩ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の(1cm以下)を約20%含む黒色土。側壁の剥がれ落ちを含んでいる。しまり有り。

第127図　41号地下式横穴墓

５４号地下式横穴墓

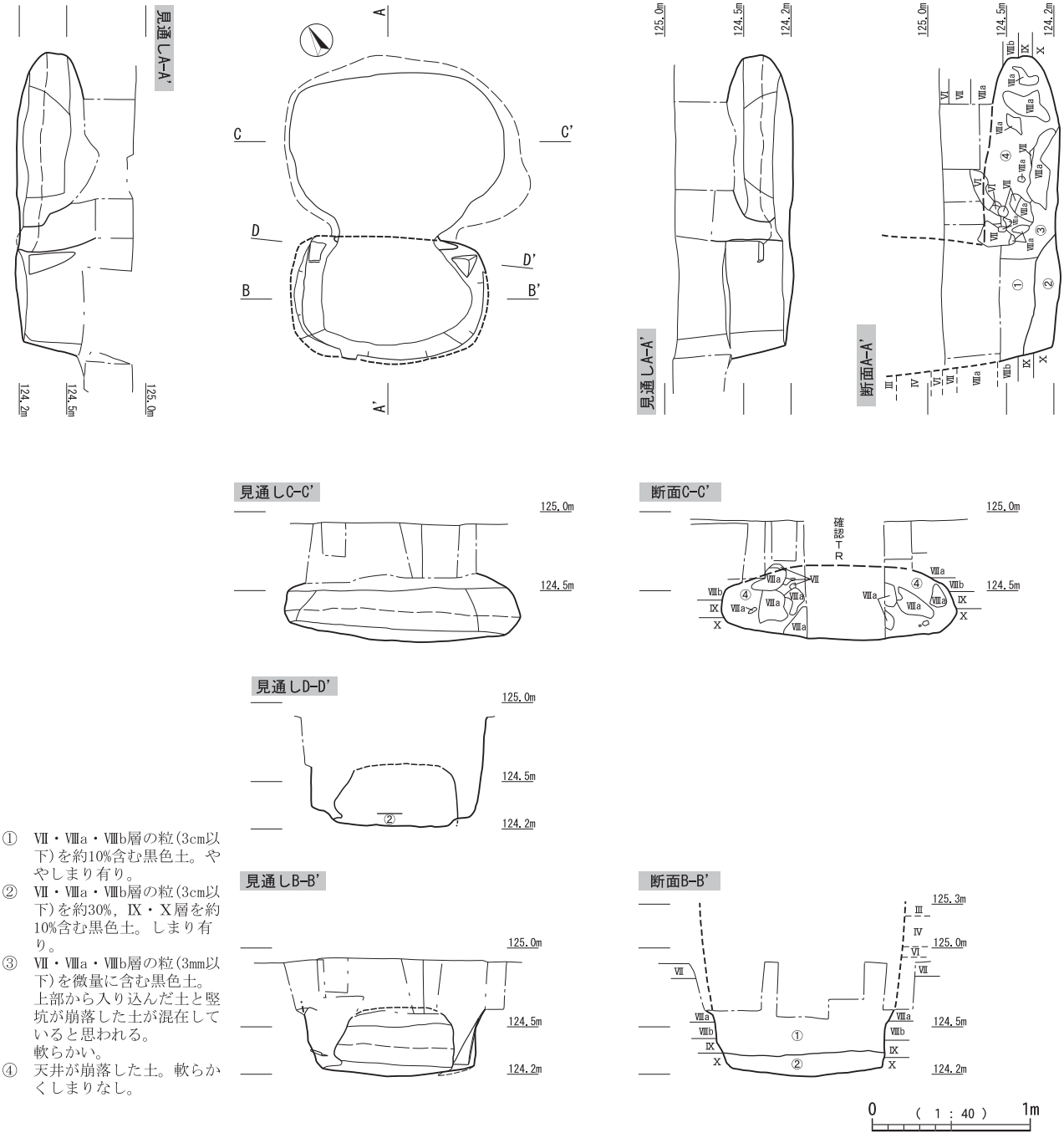
検出区	I-36	玄室開口方向	北北東
分　類	A		

検出状態	トレンチャーによる攪乱部分を取り除き検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	81	124	70	78	－	16	114	150	130	－
推　定	110	150	110	－	45	－	－	－	－	50

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	台形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は羨道・玄室までほぼ平坦に造られている。羨道両側に抉りがあり，断面Ｄより，抉られた場所の段差と埋土②の上面がほぼ同じ高さであることから，この面が閉塞時の床面である可能性が高い。 【玄室】 縦軸は竪坑と比較し，かなり長い。埋土にはⅦ・Ⅷ層のブロックが多く，攪乱を受ける前にすでに玄室天井が崩落していたものと考えられる。崩落したブロックより，天井はⅧa層であると考えられる。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約30%，Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3mm以下)を微量に含む黒色土。上部から入り込んだ土と竪坑が崩落した土が混在していると思われる。軟らかい。
④ 天井が崩落した土。軟らかくしまりなし。

第128図　54号地下式横穴墓

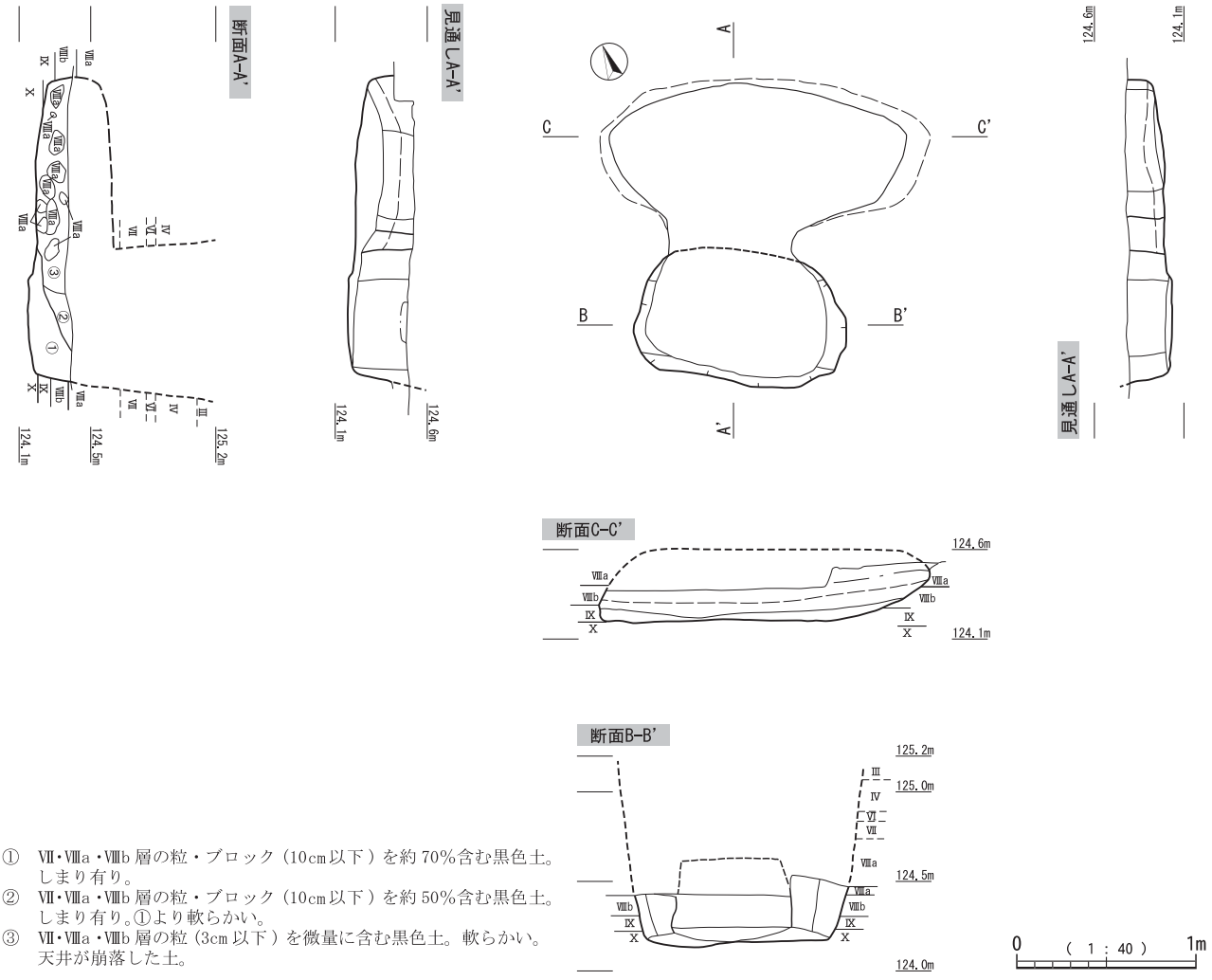
５８号地下式横穴墓	検出区	J-36	玄室開口方向	北北東
	分　類	Ｂ２		

検出状態	確認調査時にⅧ層で検出した。玄室天井は崩落している。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	76	118	25	66	－	10	80	184	90	－
推　定	90	135	105	－	40	－	－	－	－	40

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	長方形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室より低い。床面近くの埋土①はしまりがあり硬いため，この上面が閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 横幅は竪坑より広く，平面形は多少右側へ張り出す形状である。Ⅷa層のブロックが床面近くに確認できたため，竪坑内から埋土が入り込む前には天井は崩落していたと考えられる。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	H20 年度の確認トレンチ内。



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm以下）を約 70%含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒・ブロック（10cm以下）を約 50%含む黒色土。しまり有り。①より軟らかい。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb 層の粒（3cm 以下）を微量に含む黒色土。軟らかい。天井が崩落した土。

第129図　58号地下式横穴墓

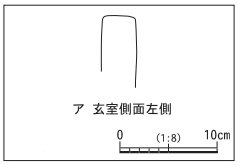
５９号地下式横穴墓	検出区	J-36	玄室開口方向	北
	分　類	A		

検出状態	南側の調査区境付近で，Ⅷ層まで玄室を掘り下げ検出した。竪坑後ろ半分は調査区外であった。

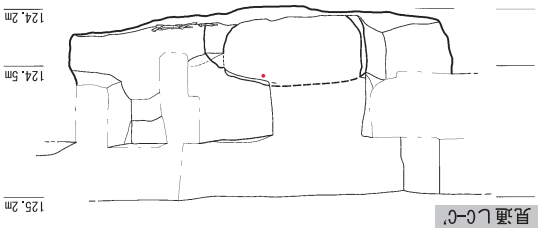
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	－	131	26	74	－	22	94	200	116	－
推　定	－	145	105	－	35	－	－	－	－	45

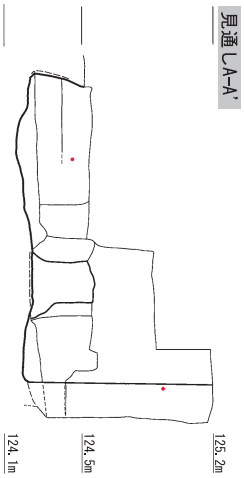
竪坑最下層	Ⅸ	竪坑平面形	不明	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅷb	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

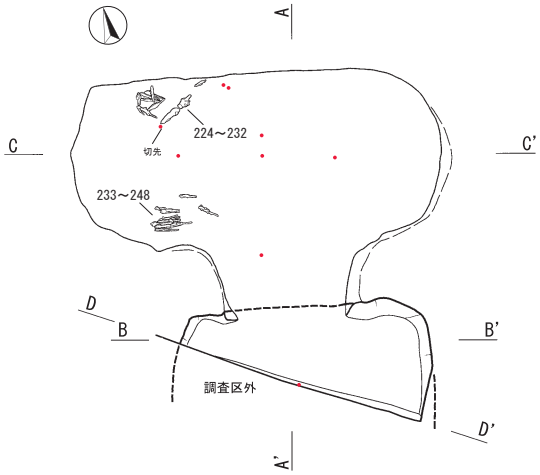
概　要	【竪坑】 埋土⑤はⅦ・Ⅷ層の土の比率が高い。玄室がこれらの層に構築されていることから，玄室構築時の排出土と推測される。赤色顔料が１点検出された。 【玄室】 床面は中央部付近で低くなる。平面形は左側に偏る片袖状である。鉄器が玄室左奥側と左手前側の２か所で出土した。玄室内の赤色顔料は検出位置が高いため，原位置を保っていないと考えられる。
工具痕	玄室側面に１点のみ残存していた。幅は3.7㎝の方形である。
赤色顔料	玄室及び竪坑からパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	竪坑埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	短剣１点，鉄鏃24点（腸抉柳葉鏃８点，柳葉鏃16点）が出土した。
備　考	－

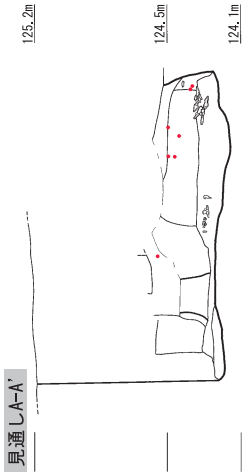


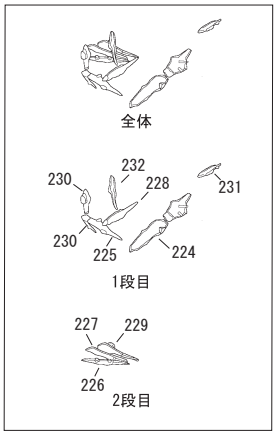
工具痕実測図



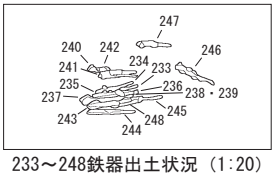




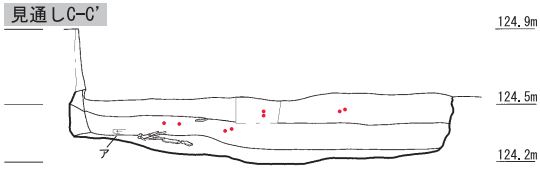


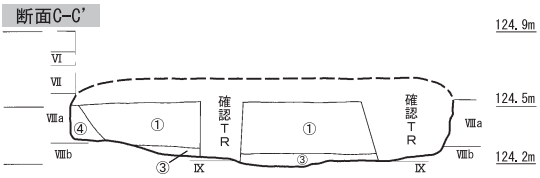


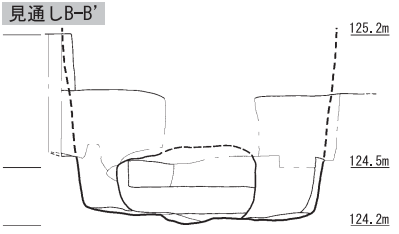
224～232鉄器出土状況（1:20）

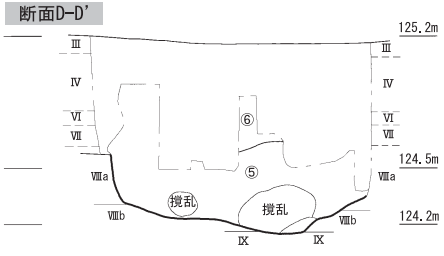


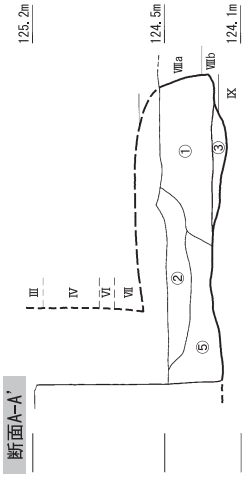
233～248鉄器出土状況（1:20）











0 (1 : 40) 1m

① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約5%含む黒色土。軟らかい。ややしまり有り。ほぼ均等に粒入る。上部から入り込んだ土と思われる。

② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。軟らかい。ややしまり有り。1cm以下の粒多い。

③ ①よりⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を多く含む黒色土。しまり有り。①と区別が難しいが遺物の位置が高いためⅦ・Ⅷ層を埋め戻し，床面として整地したものと考えられる。

④ 側壁が崩落した土。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)多い。軟らかい。

⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約70%含む黒色土。ややしまり有り。

⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。

第130図　59号地下式横穴墓

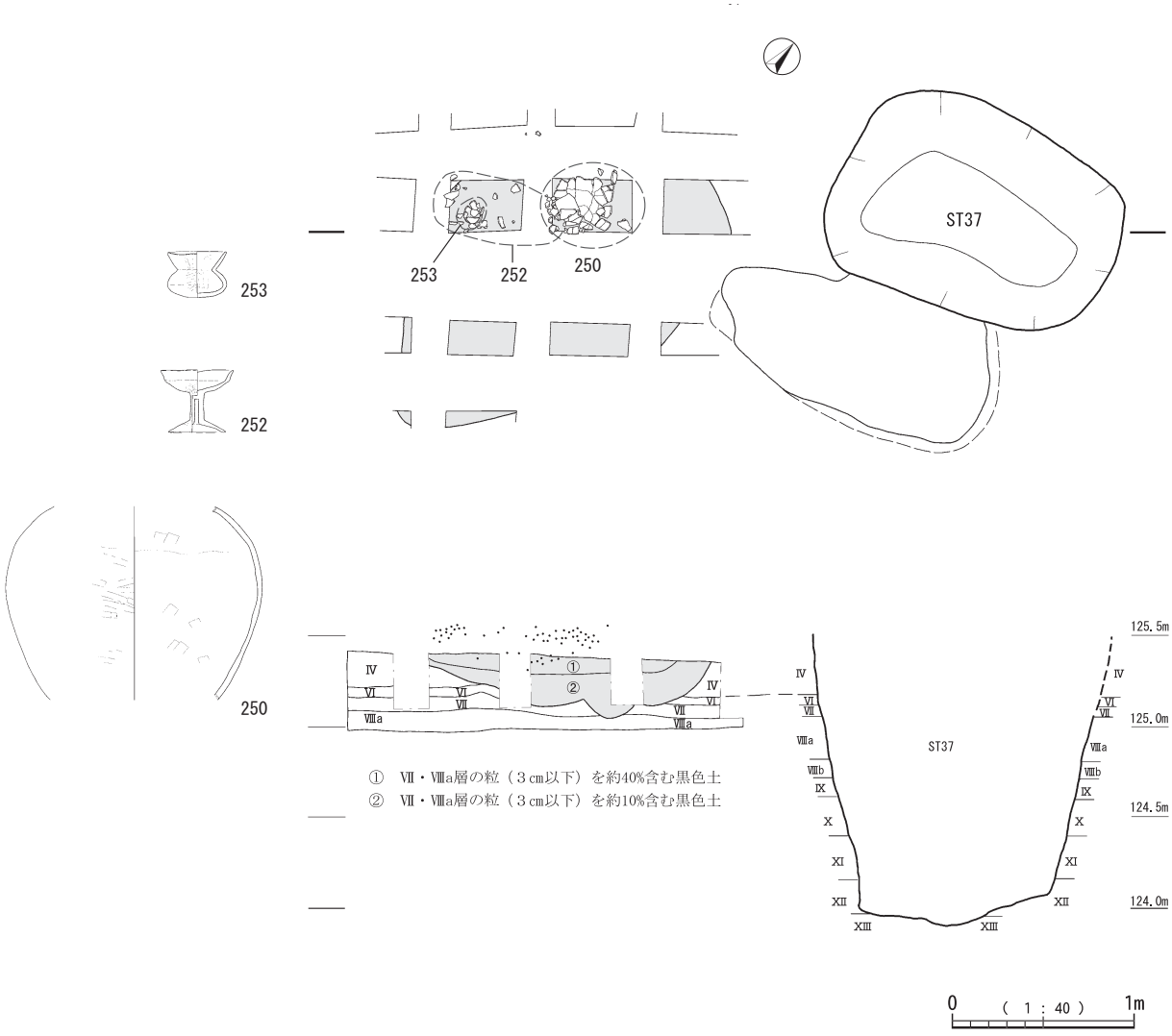
37号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況（第131図）

遺構の西側のⅣ層中に，Ⅶ・Ⅷ層の土が混在した箇所があった。この状況を断面で観察すると，溝状を呈していた。しかし，トレンチャーによる撹乱のため，その広がりについては不明である。

混在した土の上位から，大型壺・小型壺・高坏等の土器片が多量に出土した。

39号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況（第132図）

遺構の東側の撹乱を免れたわずかな範囲に，Ⅶ・Ⅷ層が混在する土がⅣ層まで溝状に入り込んでいた。トレンチャーによる撹乱のため，広がりについては不明である。遺構の南東側には土器片がまとまって出土した。



第131図　37号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況

第132図　39号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況

エリア６出土鉄器（第133図～第142図）

30号地下式横穴墓（第133図）

鉄器は鉄剣１点，短剣１点が出土した。174は鉄剣である。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の上部には鉄鏃の矢柄が付着する。刃部の一部に錆化した平織布と葉が付着する。関部は深さ約５mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かってわずかに幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。茎部のほぼ全体に錆化した有機質がみられるが，錆化が進行しており，材質は不明である。関部のやや上と茎部の上部に水平方向の痕跡がみられる。明瞭な木質は確認できないことから布巻きの痕跡と考えられる。175は短剣である。錆化が進行しており，刃部の所々に欠損がみられる。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部は深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かってわずかに幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。茎部に柄木の木質が残存する。柄木の状態は悪いものの，関部に上端があることが確認できる。柄木の一部に糸巻きの痕跡が確認できる。顕微鏡での観察から，絹のＺ撚りの糸によるものとしている。

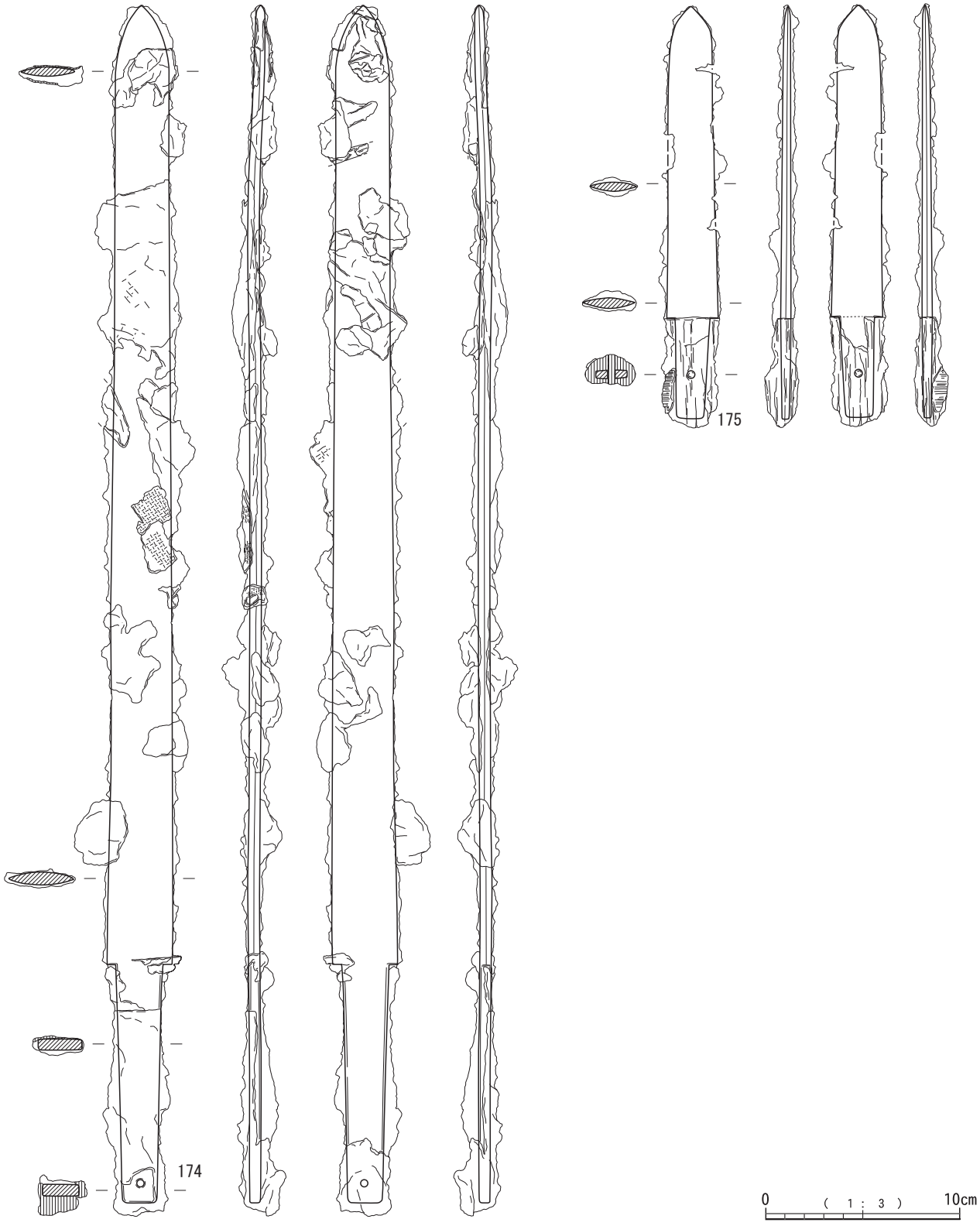
32号地下式横穴墓（第134図）

鉄器は176の鉄剣１点が出土した。刃部の中心付近から，「くの字」状に曲がっている。原因になるような錆化がみられないため，人為的に曲げた可能性がある。茎部の下部が錆化のため不明瞭である。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の一部に錆化した平織布が付着しており，折り返した部分が確認できる。布の上には矢柄片が付着する。明瞭な木質は認められないため，鞘に収めた状態ではなく布を巻くなどして副葬されたと考えられる。関部は欠損がみられるものの，深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かってやや幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。目釘孔が２孔みられる。茎部に柄木と思われる木質が付着するが，状態が悪く詳細は不明である。

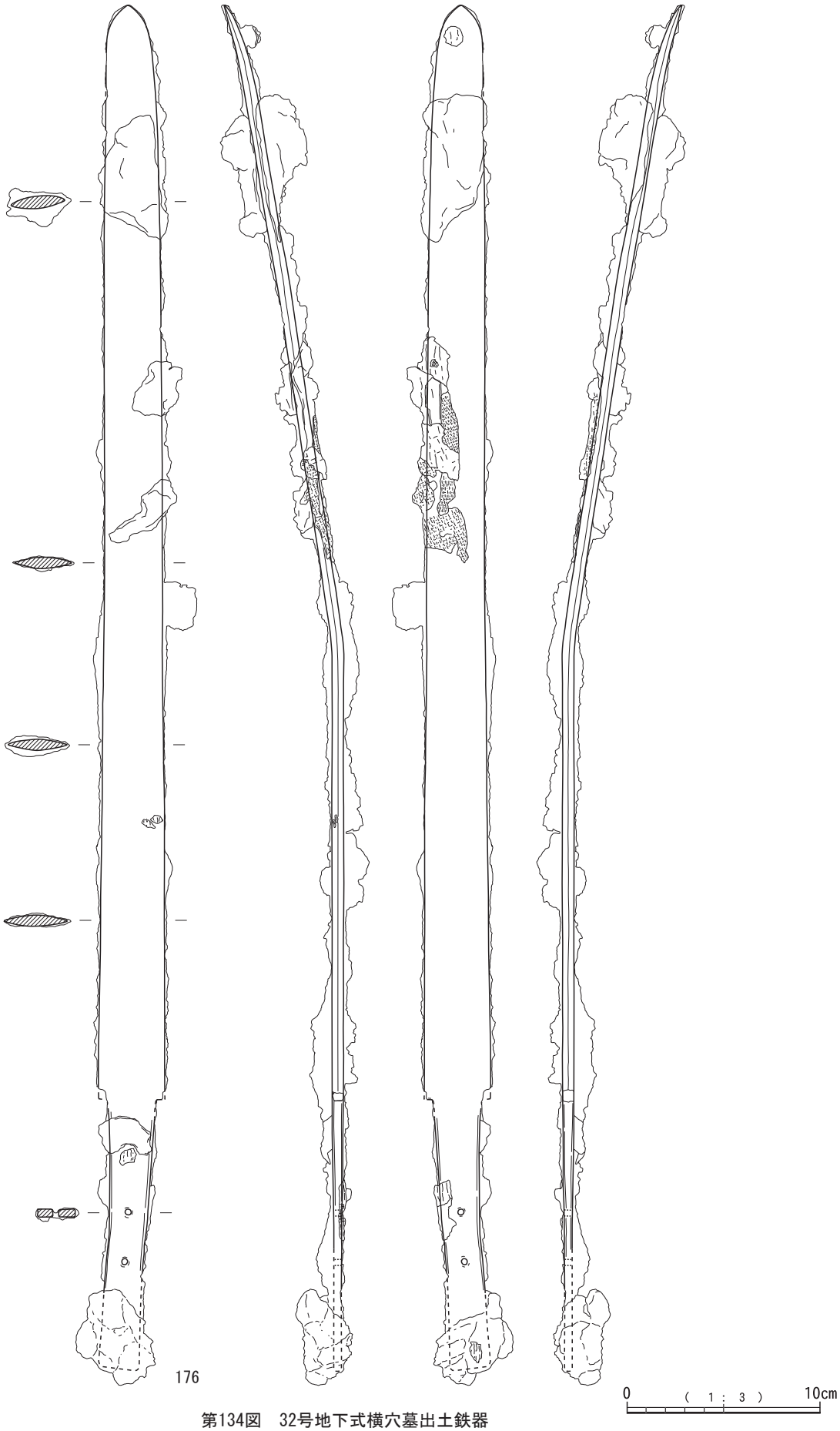
33号地下式横穴墓（第135図～137図）

北側の玄室入口からは，鉄剣１点，鉄鏃14点（柳葉鏃３点，鳥舌鏃２点，腸抉柳葉鏃７点，片腸抉柳葉鏃１点，変形柳葉鏃１点）が出土した。177・178は錆着していたため，そのまま実測した。177は鉄剣である。刃部に錆による歪みが生じている。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の一部に鞘木の痕跡がみられる。状態は悪いものの，関部から約1.3cm上に端部が確認できる。関部は直角に落ちる形態だが，一方が深さ約５mm，もう一方が深さ７mmと左右非対称である。茎部は茎尻に向かってわずかに幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。茎部の一部に柄木の痕跡がみられる。状態は悪いものの，関部から５mm上に端部が確認できる。柄木の下端に紐巻きの痕跡がみられる。顕微鏡による観察では，茎部に樹皮巻の痕跡が確認されている。179は柳葉鏃である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，状態が悪い。

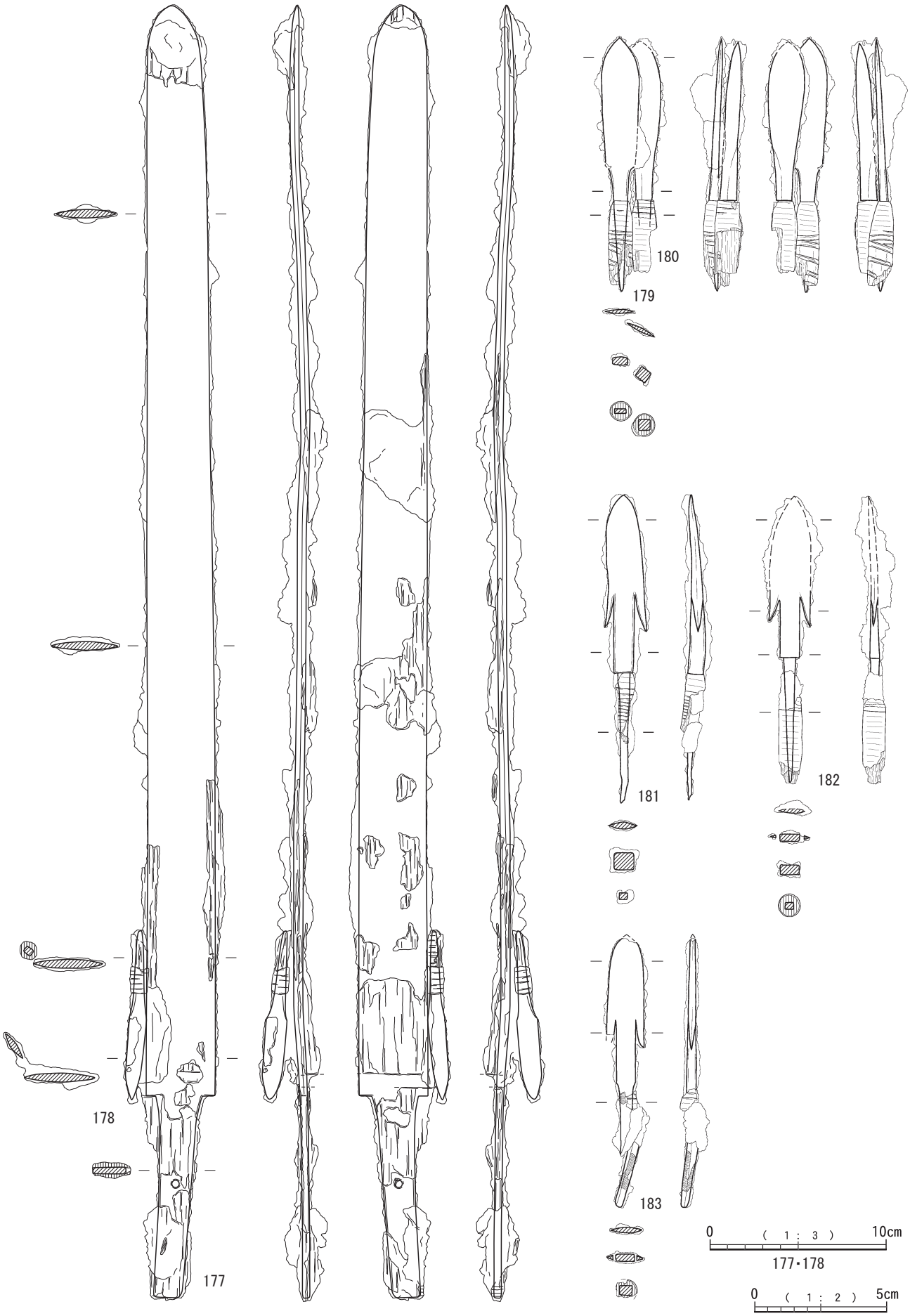
179・180は柳葉鏃である。錆着していたため，そのまま実測した。179の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は短いがやや良好に残存しており，端部では口巻きが緩んでいる様子がみられる。180は錆化が進行しており，先端がやや不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，やや状態が悪い。181～187は腸抉柳葉鏃である。181は錆化によりわずかに湾曲する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，状態が悪い。182は錆化が進行しており，刃部形が不明瞭である。Ｘ線写真の観察から，ふくらを有する形態と推定した。刃部の断面形は，片面の残存状態から，両丸造りと考えられる。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄が残存するものの，やや状態は悪く，口巻きの単位が不明瞭である。183は刃部先端と逆刺の一部が欠損し，頸部は錆による膨張が生じている。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きがみられる。矢柄がわずかに残存する。184は錆化により刃部先端が不明瞭である。錆が厚い部分があるものの，原形は保っている。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄がやや良好に残存する。口巻きの単位は不明瞭だが，巻きの端部が確認できる。口巻きを施している範囲が長さ1.4cmと比較的短い。185は先端が一部欠損する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄がやや良好に残存する。口巻きの単位は一部不明瞭だが，巻きの端部が確認できる。186は逆刺の先端が欠損する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。最大厚が1.6mmと，非常に薄い造りである。山形突起を有するが，左右非対称でややいびつである。側面をみると，鏃身の位置が矢柄の一方に寄っている状態がみられるが，錆化により詳細な造りは不明である。茎部にＳ撚りの糸による糸巻きが施されている。187は茎部の一部が欠損する。やや幅広で，山形突起から下が長い形態である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きが施されている。矢柄が残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。



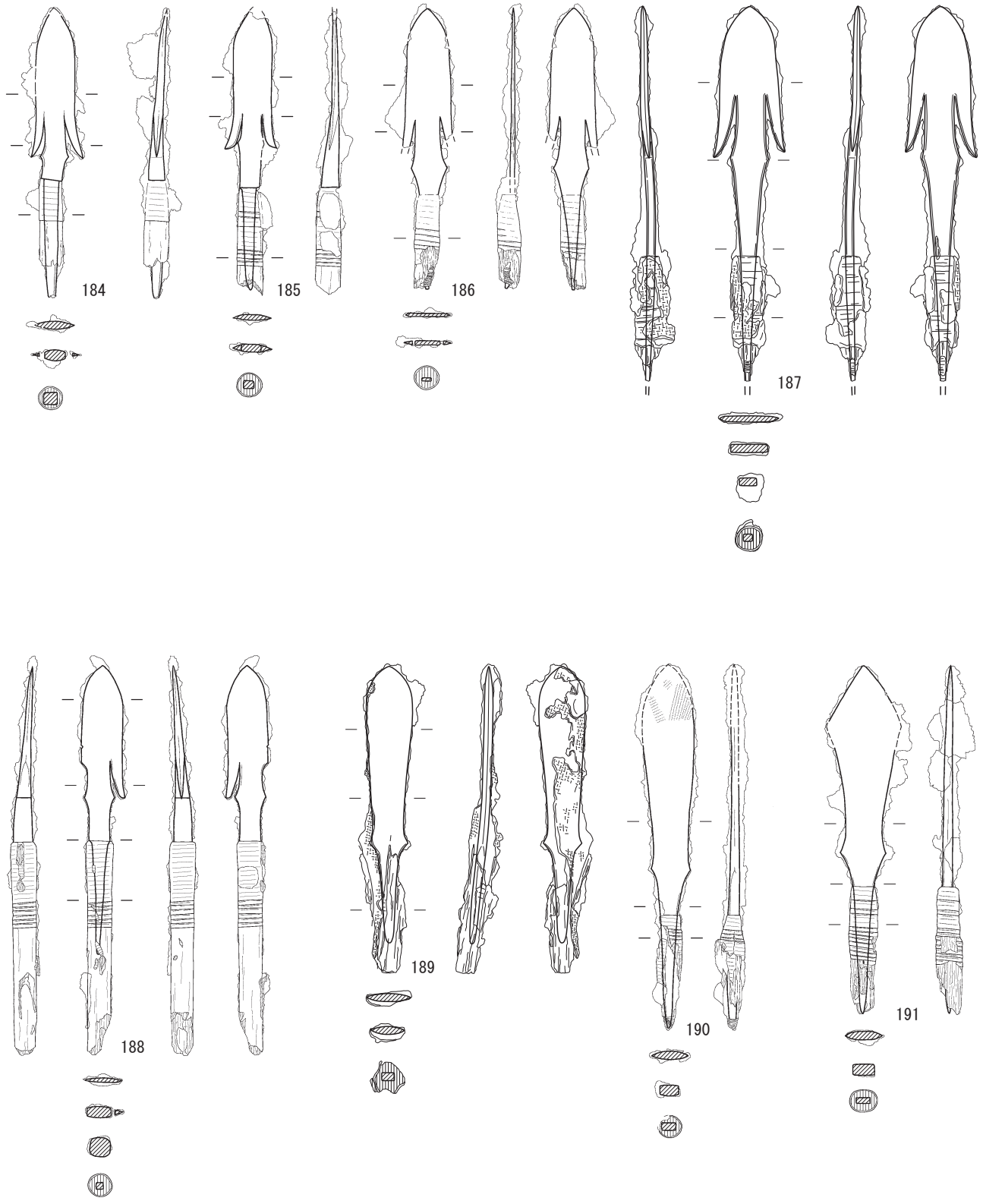
第133図　30号地下式横穴墓出土鉄器



第134図　32号地下式横穴墓出土鉄器



第135図　33号地下式横穴墓出土鉄器(1)



第136図　33号地下式横穴墓出土鉄器(2)

矢柄に錆化した平織布が付着する。顕微鏡での観察から，絹糸としている。188は片腸抉柳葉鏃である。断面形は刃部が両丸造り，頸部が丸みをおびた方形，茎部が方形を呈する。矢柄が良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。矢柄には６点の蛆殻の痕跡がみられた。189・190は鳥舌鏃である。189の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，状態が悪い。錆化した平織布が付着する。顕微鏡での観察から，生糸の絹としている。190は先端部が錆により不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。刃部先端に錆化した布が付着する。茎部に糸巻きが施されている。矢柄が残存するが，状態が悪い。191は変形柳葉鏃である。錆化が進行しており，刃部の角が不明瞭である。断面形は，刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。山形突起まで刃部を造ることから分類上は柳葉鏃としたが，先端の形態は圭頭形であり山形突起を有する。

北側の玄室の奥からは鉄鏃３点（鳥舌鏃３点）が出土した。192の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄がやや良好に残存する。矢柄の上部は樹皮巻きがなく，糸による口巻きが間隔を空けて二段施されている。一段目は錆化によりやや不明瞭だが２～３回，二段目は４回巻かれている。一段目の撚りは不明瞭，二段目はＳ撚りである。糸による口巻きから間隔を空けて樹皮による口巻きが施されている。下部には錆化した葉が付着する。193は錆化が進行しており，刃部先端が不明瞭である。山形突起の一部が欠損する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。194は刃部先端に欠損，頸部に剥離がみられる。断面形は刃部が両丸造り，頸部がやや丸みをおびた長方形，茎部が長方形を呈する。刃部に錆化した葉が付着する。矢柄がやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。口巻きの端部が明瞭にみられ，長さ4.5cm口巻きを施していることが確認できる。矢柄の下部に，別個体の矢柄片が付着する。

南側の玄室からは，195・196の鉄鏃２点（圭頭鏃２点）が出土した。195は圭頭鏃Ⅲa類である。錆化が進行しており，切先に変形がみられる。刃部先端に緩い角を有する。刃部の断面形は錆化が進行しているが，面が確認できる部分から平造りと推定した。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄が残存するが，状態が悪い。196は圭頭鏃Ⅲa類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかに残存する。

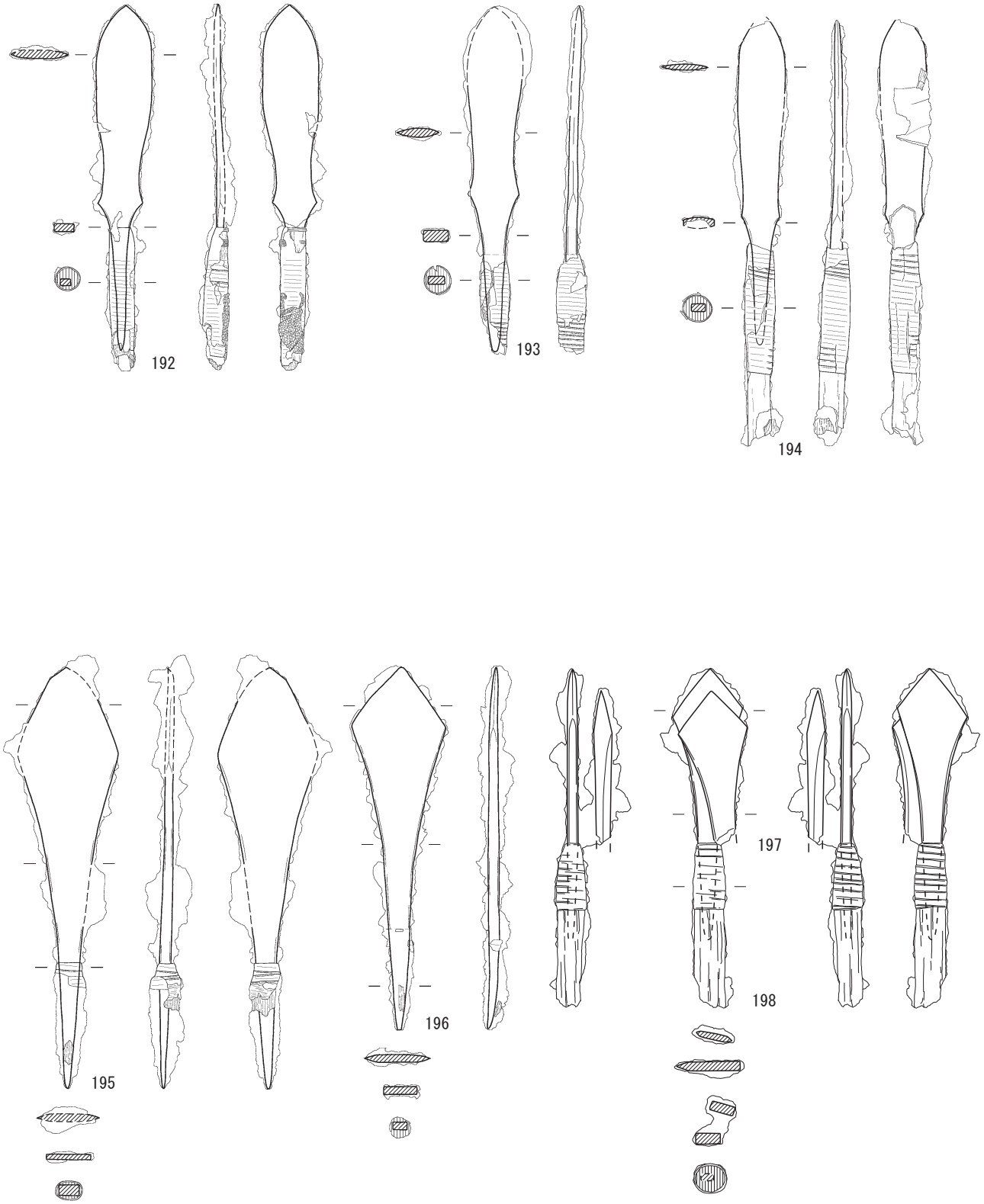
35号地下式横穴墓（第137図）

鉄器は鉄鏃２点（圭頭鏃２点）が出土した。197・198は圭頭鏃Ⅱb類である。197は鏃身部の一部から茎部が欠損する。断面形は刃部が平造り，頸部が長方形を呈する。198は先端が左右非対称な，ややいびつな造りである。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部の形態が不明瞭である。矢柄が良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。

36号地下式横穴墓（第138図・第139図）

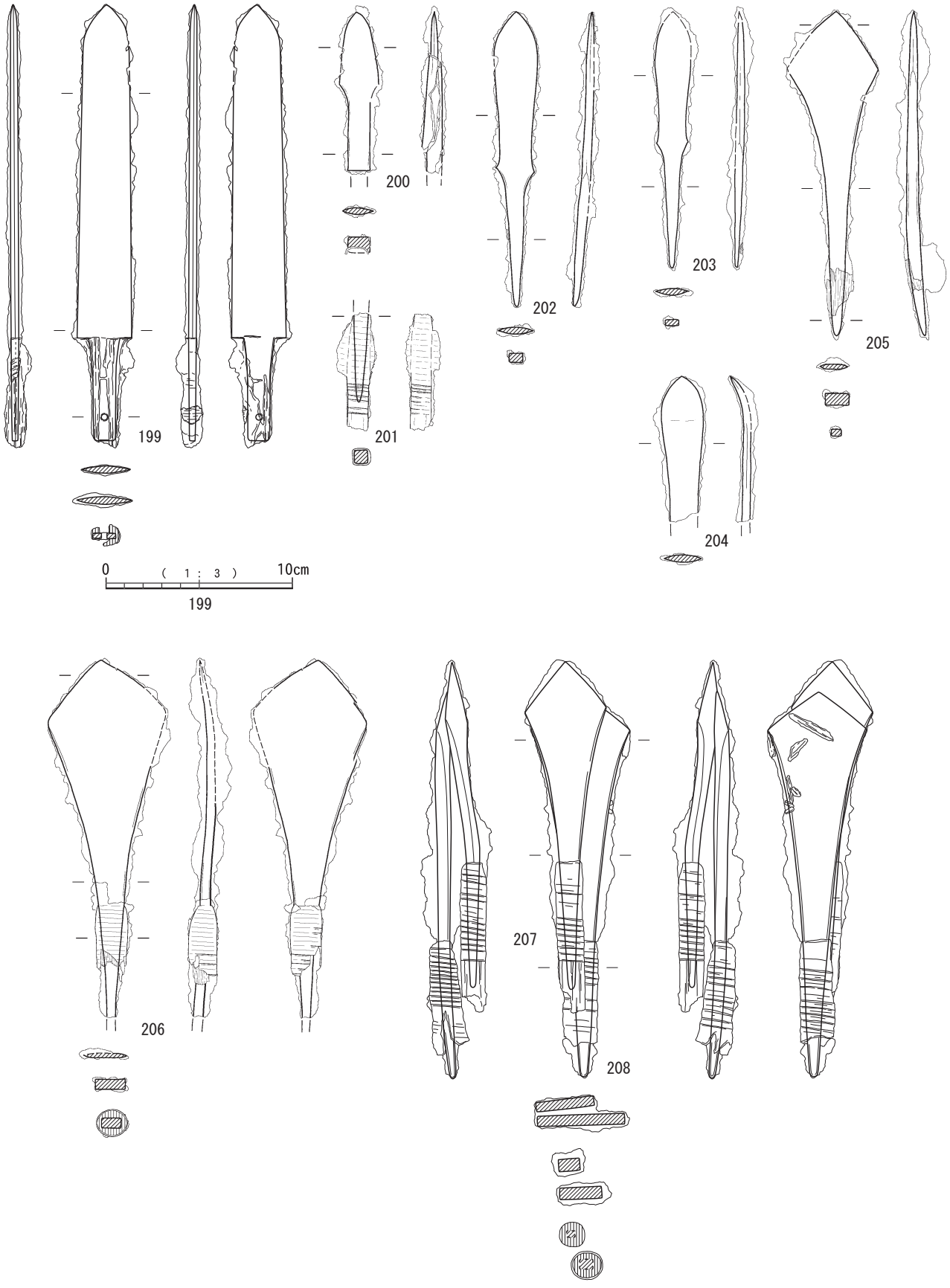
鉄器は短剣１点，鉄鏃15点（短頸鏃１点，鳥舌鏃３点，圭頭鏃10点，鉄鏃片１点），異形鉄器１点が出土した。199は短剣である。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部は深さ約６㎜の直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。茎部に柄木の痕跡がみられる。状態は悪いものの，関部よりやや上に端部が確認できる。造りは二枚合わせである。柄木の側面に紐巻きのような痕跡がみられるが，状態が悪く詳細は不明である。

200は短頸鏃Ⅱ類である。茎部の一部が欠損する。錆化が進行しており状態が悪いが，原形はとどめている。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部にわずかに矢柄の痕跡がみられる。破損後の断面錆化により接合できないが，201と同一個体と考えられる。201は茎部片である。断面形は方形を呈する。矢柄は一部に錆による膨張が生じているものの，やや良好に残存する。一部では口巻きの単位が明瞭であり，巻きの端部が確認できる。202～204は鳥舌鏃である。202は錆化が進行しており，やや状態が悪い。断面形は刃部が両丸造り，茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。203は刃部の一部が錆化の進行により不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。204は刃部片である。先端が錆化により湾曲する。断面形は両丸造りを呈する。205～207は圭頭鏃である。205は圭頭鏃Ⅲa類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。206は圭頭鏃Ⅲa類である。茎部の一部が欠損する。錆化が進行しており，わずかに湾曲がみられる。先端形が左右非対称で，いびつな造りである。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，やや状態が悪い。207・208は錆着していたため，そのまま実測した。207は錆化が進行しており，変形がみられる。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄がやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。208は錆化の進行により，わずかに湾曲する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄がやや良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。一部に有機質が付着するが，状態が悪く材質は不明である。209～211は圭頭鏃Ⅲa類である。



192 ～ 196　33 号地下式横穴墓
197・198　35 号地下式横穴墓

第137図　33号(3)・35号地下式横穴墓出土鉄器



第138図　36号地下式横穴墓出土鉄器(1)

209の断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きを施している。矢柄の痕跡がわずかにみられる。210は茎部の一部が欠損する。銹化により先端にやや歪みが生じている。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存しており，やや状態が悪いものの一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。211は銹化が進行しており，一部に不明瞭な部分や変形がみられる。先端形は，銹化により不明瞭なものの，X線写真の観察から左右非対称のいびつな造りと推定した。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，状態が悪い。212は圭頭鏃Ⅲb類である。茎部の一部が欠損する。銹化が進行しており，わずかに湾曲がみられる。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。213は圭頭鏃Ⅱc類である。銹化が進行しており，やや状態が悪い。刃部形は左右非対称のいびつな造りである。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きを施している。矢柄の痕跡がわずかにみられる。214は圭頭鏃Ⅱc類である。銹化が進行しており，状態が悪い。刃部形は左右非対称のいびつな造りである。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。

215は異形鉄器である。先端部は柳葉形を呈し，そこからわずかに広がり足部に至る。足部の内面以外すべて刃部を造っており，断面形は平造りである。足部は一方は曲線的，一方は直線的な造りで，左右非対称である。足部の内面は逆Ｖ字状を呈しており，わずかに内湾しながら足部の端部に至る。穿孔が５孔あり，先端から12.4cm下に根挟みを挟むように２孔，その下に軸からややずれるように１孔，足部の端部にそれぞれ１孔施されている。上側の２孔は，紐状のものを通して根挟みを固定していたと考えられる。一部では孔を通るように有機質が残存する。下の１孔は長さ1.8cm，直径約２mmの鉄製の目釘状のもので根挟みが固定されている。足部の穿孔は，紐状のものを通していたと考えられる有機質の痕跡がみられる。根挟みが残存するものの，状態が悪い。身部の先端や足部の一部にイネ科植物らしき植物繊維の付着痕がみられる。顕微鏡での観察からは，足部に布の痕跡がみられたが，状態が悪く材質は不明である。

38号地下式横穴墓（第140図）

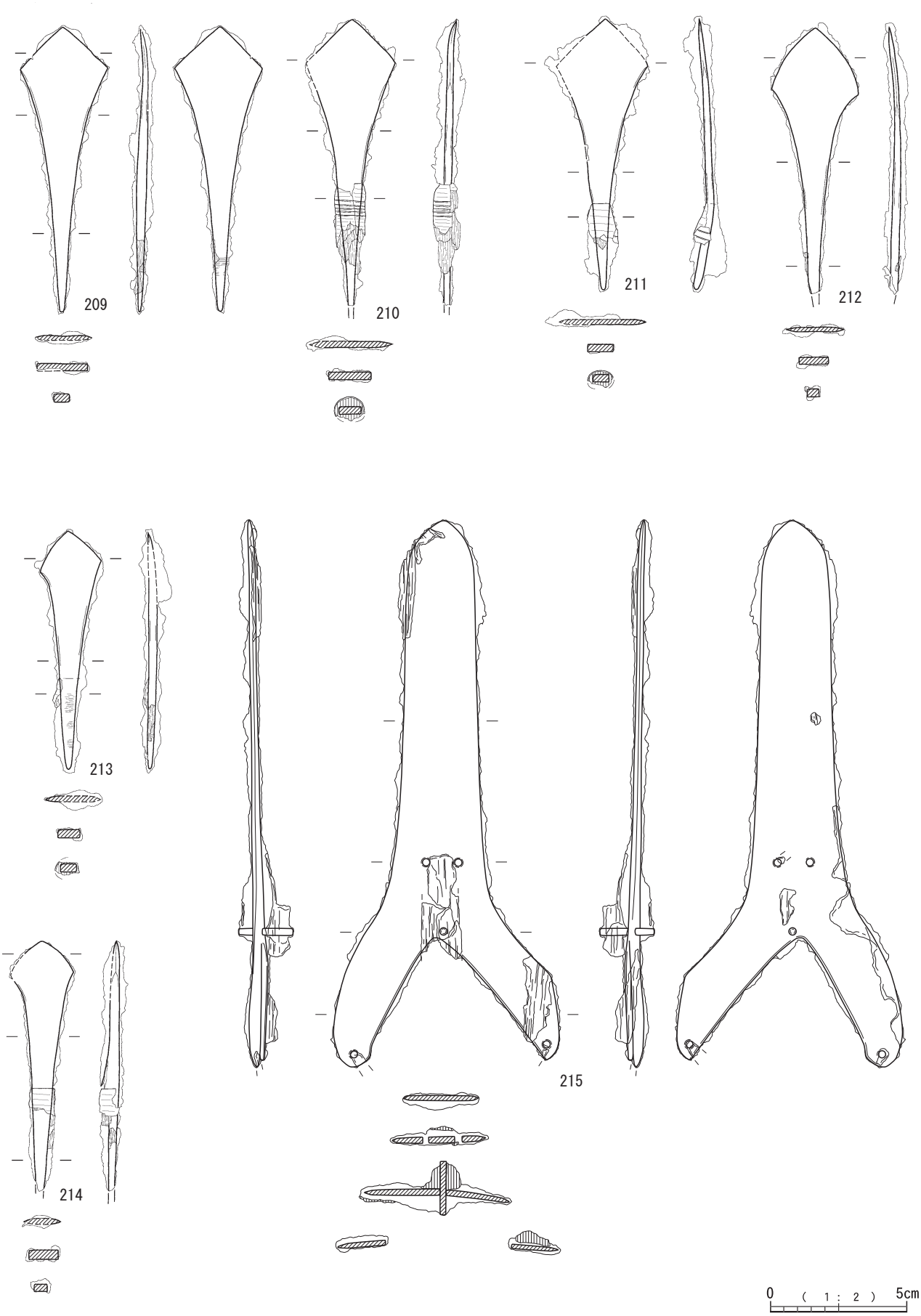
鉄器は鉄鏃８点（鳥舌鏃６点，圭頭鏃１点，鉄鏃片１点）が出土した。216～222は鳥舌鏃である。216は銹化が進行しており，刃部の一部が不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きを施した痕跡がみられる。矢柄が残存するが，状態が悪い。217は銹化が進行しており，一部が不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，状態が悪い。218は銹化が進行しており状態が悪いが，原形は保っている。断面形は刃部が両丸造り，茎部が長方形を呈する。矢柄がわずかに残存する。219は出土時に223と銹着していたが，整理作業の過程ではずれている。剥離した表面の一部は，223に付着している。銹化が進行しており，一部が不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するもののやや状態が悪く，口巻きの単位は不明瞭である。220は茎部が欠損する。銹化が進行しており，一部が不明瞭である。断面形は刃部が両丸造りを呈する。221は茎部片である。断面形は長方形を呈する。矢柄がやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。破損後の銹化により接合できないものの，220と同一個体と考えられる。222は刃部が銹による膨張のため分離する。断面形は刃部が両丸造り，茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きを施す。223は圭頭鏃である。219の剥離した表面が付着する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。

59号地下式横穴墓（第140図～142図）

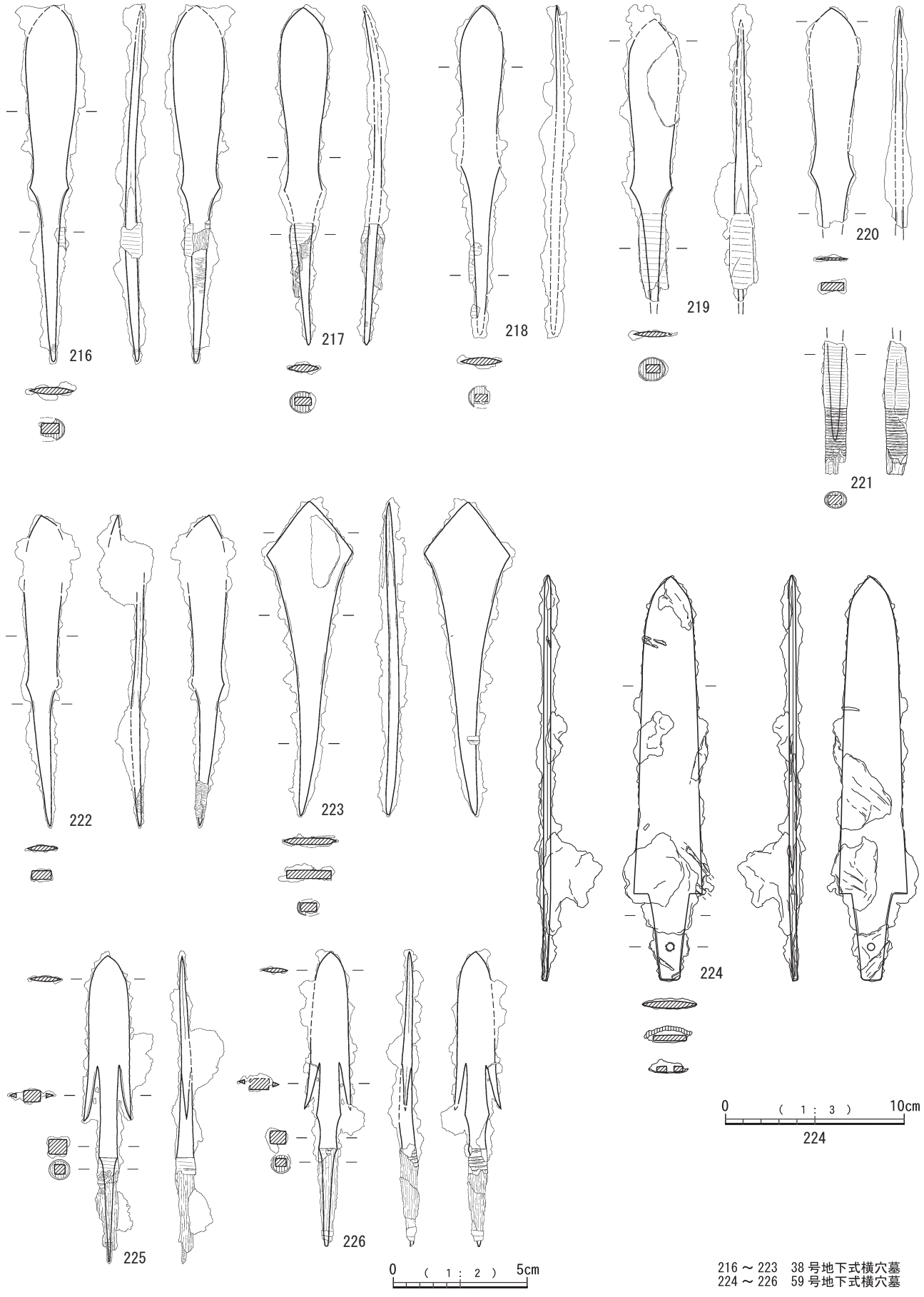
鉄器は，短剣１点，鉄鏃24点（腸抉柳葉鏃８点，柳葉鏃16点）が出土した。

224は短剣である。全長22.3cm，最大厚４mmを測る。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部は深さ約７mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かってわずかに内湾しながら幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。X線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。広い範囲に皮革と有機質，紐状の有機質が斜めに付着する様子が観察できる。これらの有機質は直に付着していることから，抜き身の状態で皮革で包むなどして副葬したと考えられる。

225～229は腸抉柳葉鏃である。225～227は頸部関が斜関である。225は銹化が進行しており一部不明瞭だが，原形は保っている。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が方形を呈する。茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存するが，状態が悪い。口巻きの上に有機質が付着する。226は銹化が進行しており，一部に分離や屈曲がみられる。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，状態が悪い。227は頸部に銹による膨張が生じているが，原形は保っている。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。やや薄い造りである。一部にイネ科と思われる植物繊維が付着する。茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存するものの，状態が悪い。228～231は頸部関が角関である。228は一方の逆刺の先端が欠損する。銹化が進行しており，変形や銹による膨張が生じている。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻

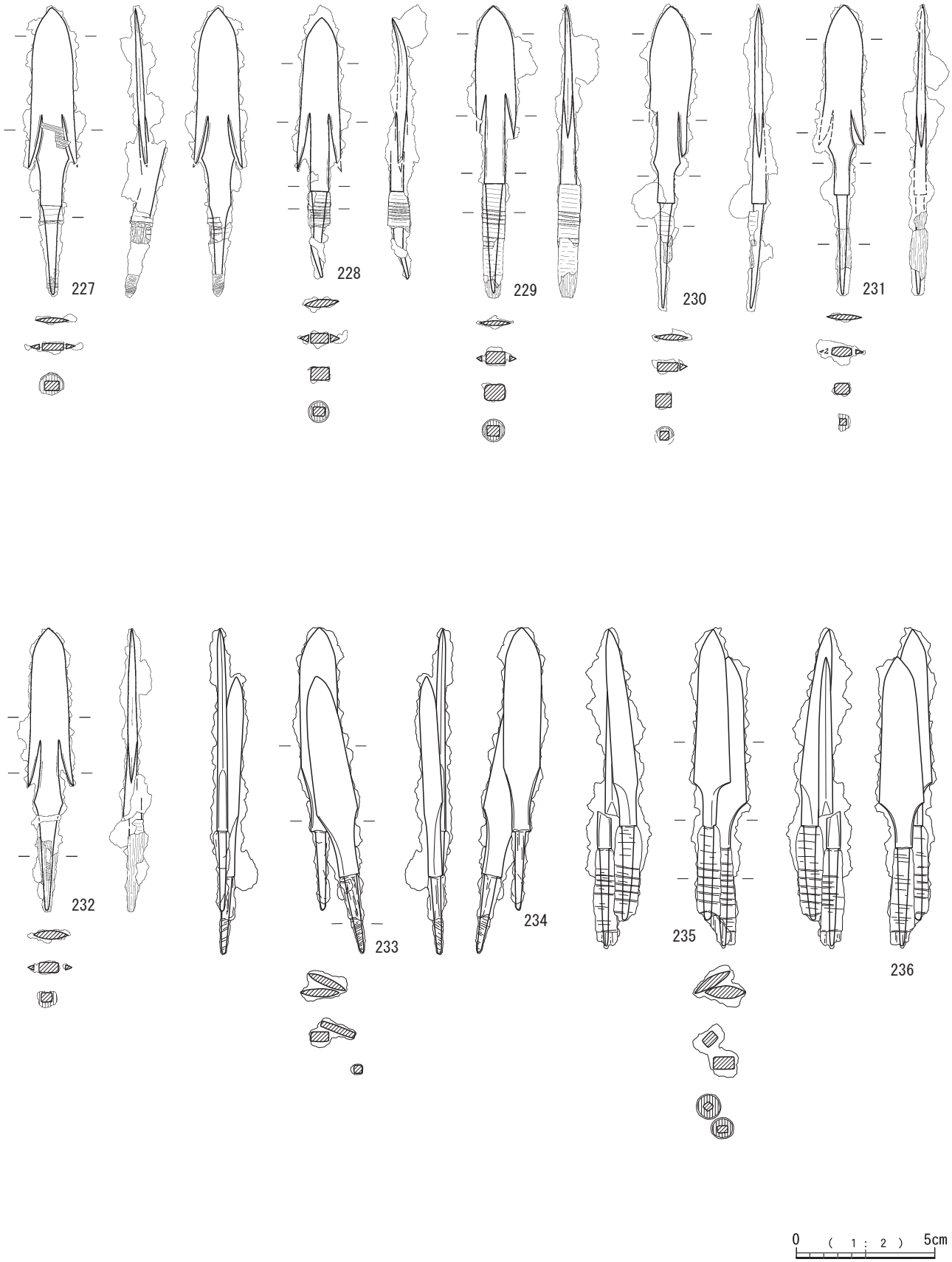


第139図　36号地下式横穴墓出土鉄器(2)



216 ～ 223　38 号地下式横穴墓
224 ～ 226　59 号地下式横穴墓

第140図　38号・59号(1)地下式横穴墓出土鉄器



第141図　59号地下式横穴墓出土鉄器(2)

きの単位が明瞭にみられる。229は一方の逆刺の先端が欠損する。断面形は刃部が両丸造り，頸部が隅丸長方形，茎部が長方形を呈する。矢柄が良好に残存する。矢柄の上部は口巻きが明瞭にみられるが，下部は口巻きが剥離した痕跡がみられる。230は一方の逆刺が欠損する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。231は錆化が進行しており，一部不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，頸部が隅丸長方形，茎部が方形を呈する。矢柄が残存するが，状態が悪い。232は頸部関をもたない。頸部に錆による膨張が生じている。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，状態が悪い。233 ～ 248は柳葉鏃である。233・234は錆着していたため，そのまま実測した。233の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存するものの，状態が悪い。234の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。235・236は錆着していたため，そのまま実測した。235の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。236は頸部に錆による分離が生じているが，原形は保っている。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。237 ～ 239は錆着していたため，そのまま実測した。237の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。刃部先端に有機質が付着する。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。238の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。刃部先端に有機質が付着する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。239の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。240 ～ 242は錆着していたため，そのまま実測した。240は錆化が進行しており，茎部の形状が不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，頸部が長方形を呈する。顕微鏡での観察から布の痕跡が確認されているが，状態が悪く材質は不明である。矢柄の痕跡がわずかにみられる。241の断面形は刃部が両丸造り，頸部が長方形を呈する。顕微鏡での観察から布の痕跡が確認されているが，状態が悪く材質は不明である。茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存するもののやや状態が悪く，口巻きの単位は不明瞭である。242の断面形は刃部が両丸造り，頸部が長方形を呈する。刃部先端に有機質が付着する。茎部に糸巻きを施している。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。243は錆化が進行しており，刃部先端が不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかに残存する。244は錆化が進行しており，変形がみられる。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が方形を呈する。茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存するが，状態が悪い。245の断面形は刃部が両丸造り，頸部が長方形，茎部が方形を呈する。矢柄が残存するものの，やや状態が悪い。246は茎部の一部が欠損する。錆化が進行しており，頸部と茎部が錆の膨張により分離する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が方形を呈する。刃部にイネ科と思われる植物繊維が付着する。茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存するものの，やや状態が悪い。247は茎部の一部が欠損する。錆化が進行しており，刃部に変形がみられる。断面形は刃部が両丸造り，頸部が長方形，茎部が方形を呈する。矢柄が残存するものの，やや状態が悪い。248の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。

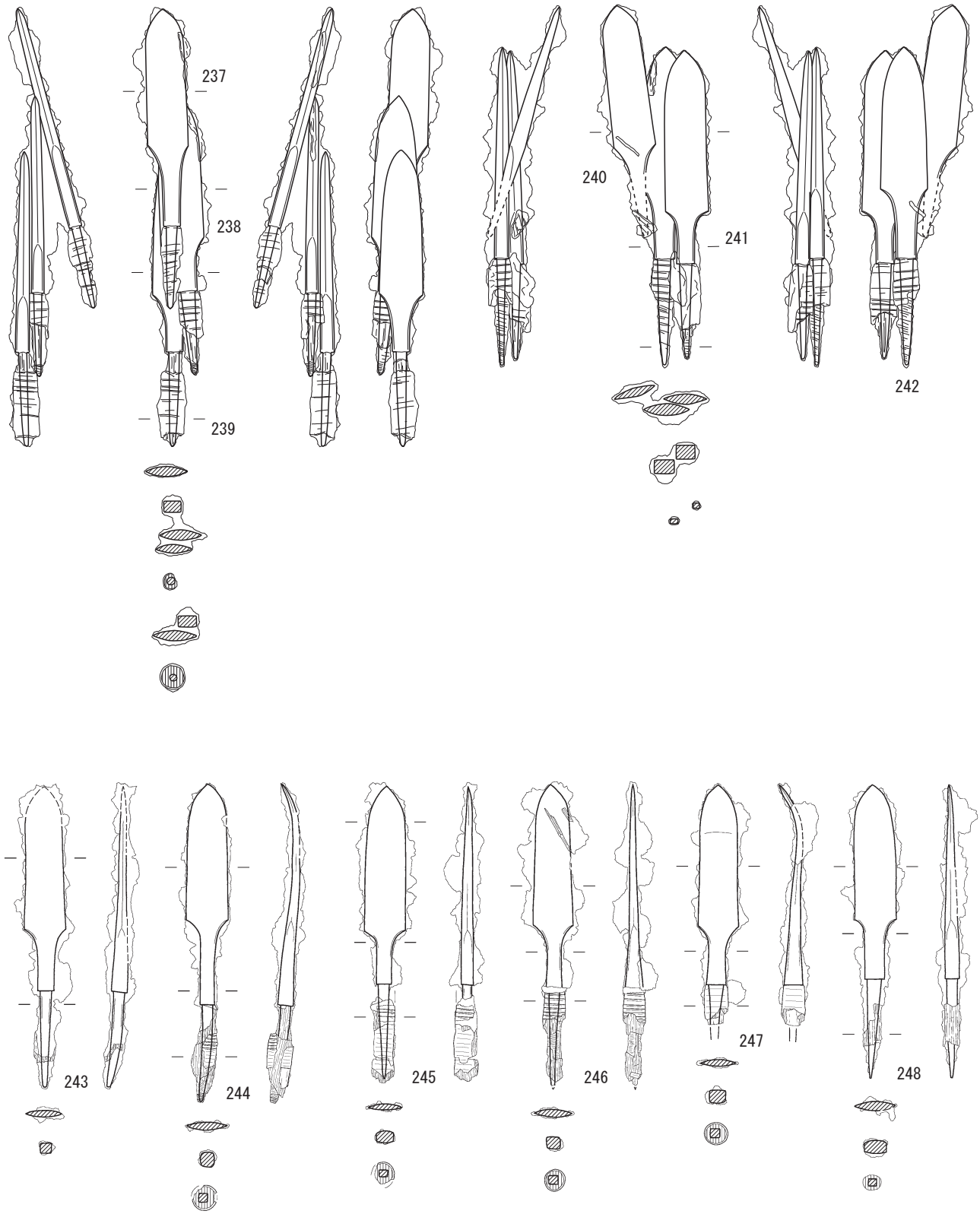
エリア６出土土器（第143図・第144図）

249は31号地下式横穴墓の玄室内から出土した坩で，口径4.4cm，器高5.7cmを測る小型の完形品である。口縁部にのみ内外面に赤色顔料が塗布されている。口縁部は直線的に開き，口唇部を丸く収める。胴部は，胴部最大径の位置が中位よりやや下にあり，下膨らみを呈する。底部は小さな平底で，３cm程の平坦面をもつ。外面は丁寧にミガキ調整され，内面は工具によるナデ調整である。

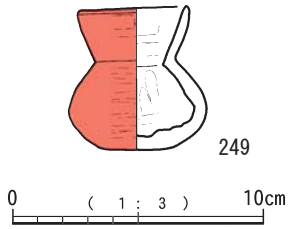
250・251は，壺の胴部である。250は，内外面ともに工具によるナデ調整である。251は，250よりも小型で，最大径は21.8cmである。内面には指頭圧痕が認められる。

252は小型の高坏である。口縁部は屈曲が強く，外反しながら先細りに伸びる。坏部は浅く，中程に稜線が入る。脚柱部が細いのが特徴で，脚柱部の輪切り直径は2.3cm程と，他の高坏よりも小さく細い。外面は丁寧で密なミガキ調整である。類似のものが町田堀遺跡からも出土しており，地下式横穴墓の埋葬儀礼との関連が示唆される。

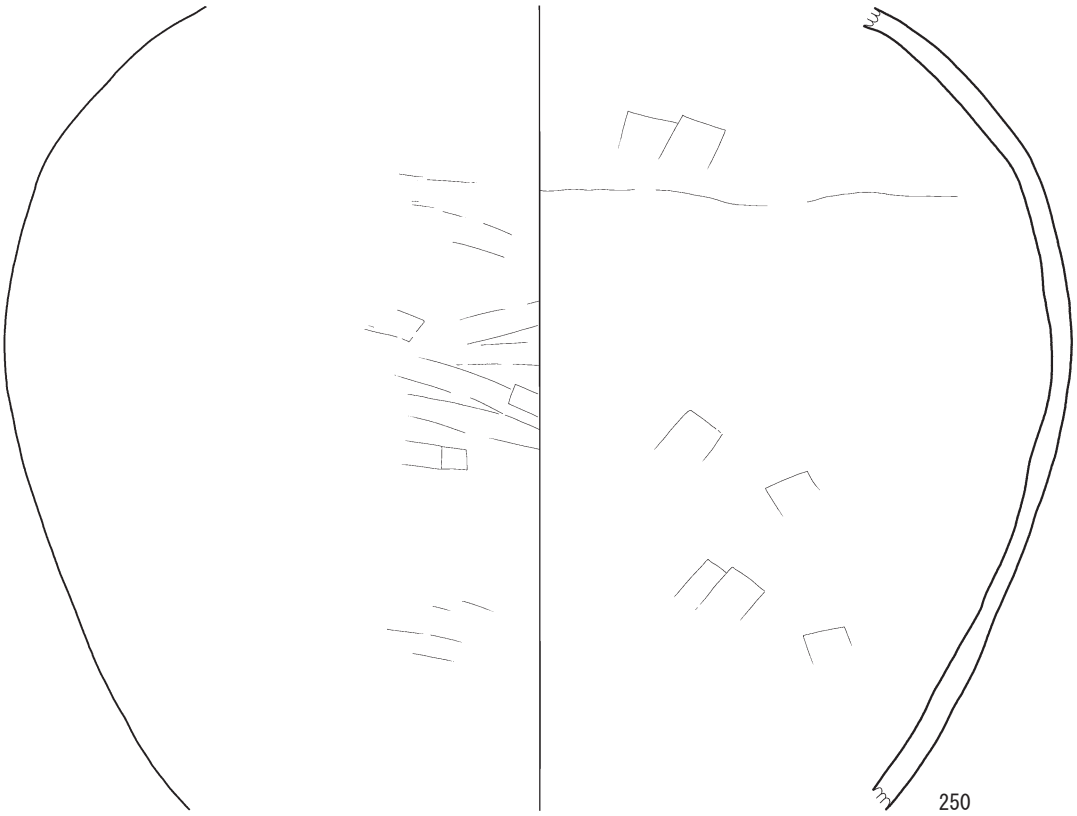
253・254は小型の坩E類である。253は，口径9.5cm，器高７cmを測る。口縁部は直線的に外傾し，口唇部を丸く収める。胴部最大径は9.6cmで，偏球状を呈し，底部は丸底である。254は，口径8.6cm，器高8.9cmを測る。口縁部はやや内湾しながら外傾して先細りに開き，口唇部を丸く収める。胴部は，胴部最大径の位置が中位よりやや下がって張り，丸みを帯びている。胴部最大径は8.4cmである。底部は丸底である。

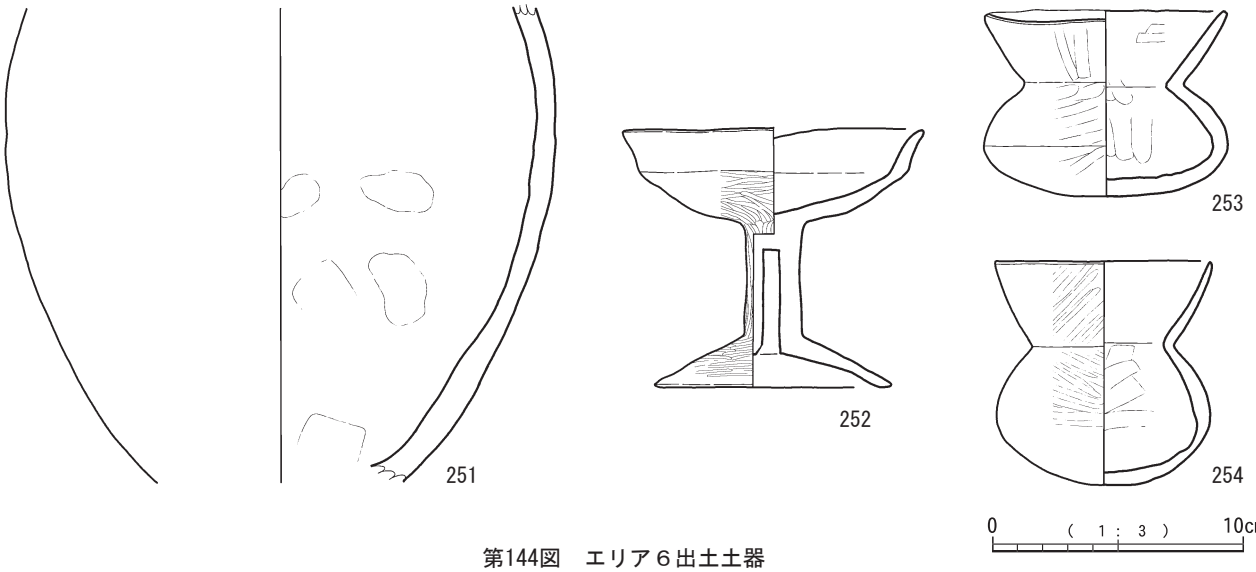


第142図　59号地下式横穴墓出土鉄器(3)

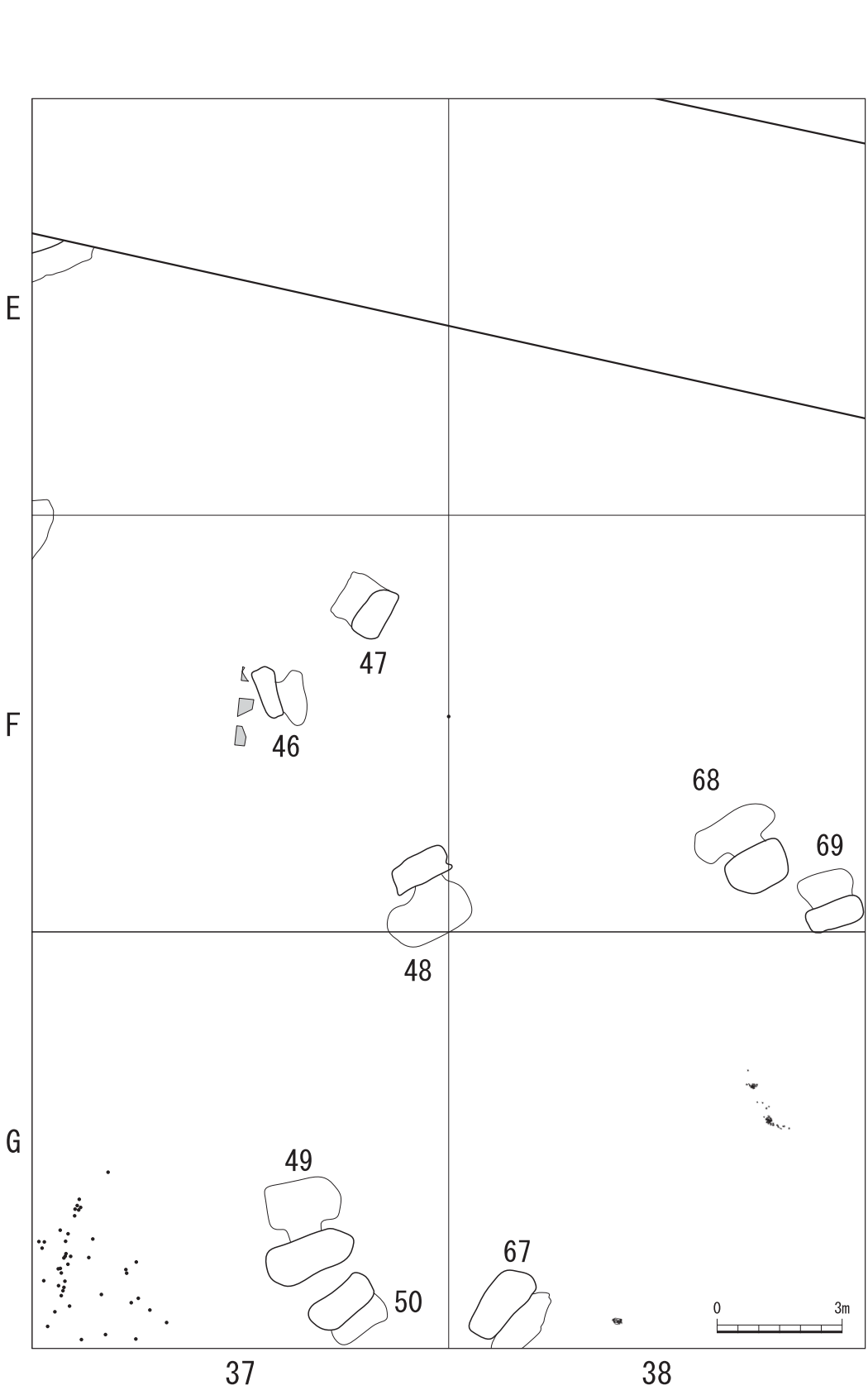


第143図　31号地下式横穴墓出土土器





第144図　エリア６出土土器



第 145 図　エリア 7　遺構配置図

４６号地下式横穴墓

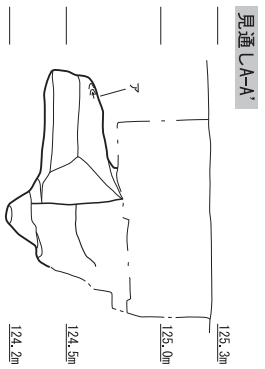
検出区	F-37	玄室開口方向	東
分　類	Ｂ２		

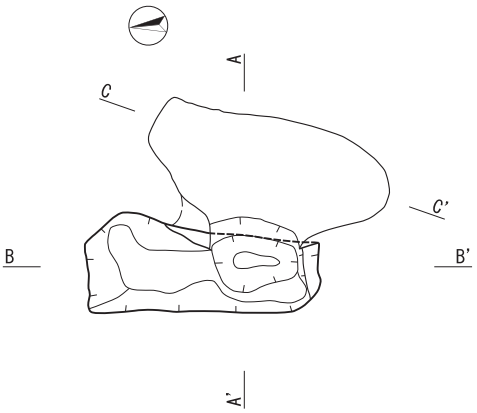
検出状態	Ⅵ層及びⅦ層の攪乱部分を取り除き検出した。羨門がやや崩落していたが，玄室は概ね残存していた。

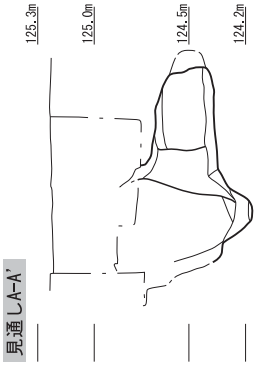
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	42	122	68	78	－	20	60	128	80	30
推　定	60	130	110	－	50	－	－	－	－	－

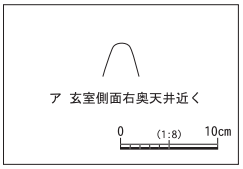
竪坑最下層	Ⅺ	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	逆台形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅸ	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 　玄室の天井近くの深さまで削平を受けている。検出面でも縦幅が 40cm 程度と小型である。羨門は竪坑正面壁の右側に寄っている。埋土②は，Ⅶ・Ⅷ層土の割合が高く，上位の埋土①と明確に分かれる。玄室は，Ⅷ層～Ⅸ層部分に構築されていることから，埋土②は玄室構築時の埋土で，その上面は閉塞時の床面であると考えられる。 【玄室】 　竪坑と縦横の大きさはほぼ同じであるが，軸が異なる。竪坑より 20cm ほど床面が高くなっている。
工具痕	玄室天井は残存していたが，天井壁に明瞭な痕は残っていなかった。玄室右側面に，右奥方向に削られた痕が少量みられる。確認できた工具痕は幅約４㎝以上のＶ字状のものである。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

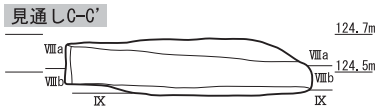


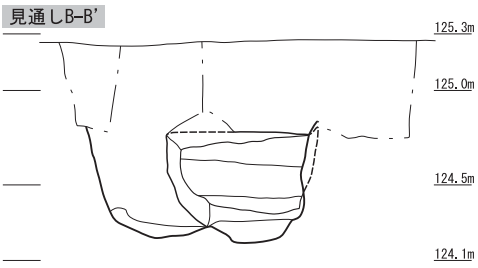


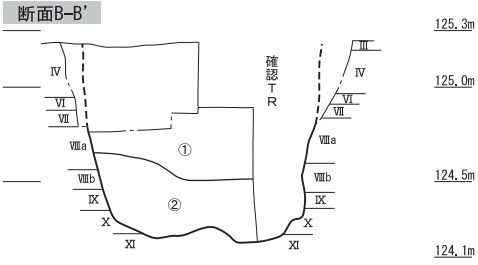


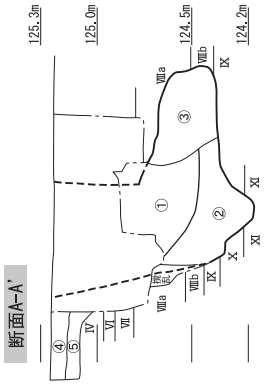


工具痕実測図

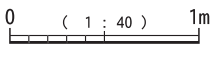








① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。少量のⅩ層を含む。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約90%含む黒色土。しまり有り。
③ ①のしまりの弱い埋土。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。しまり有り。排出土と思われる。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り。排出土と思われる。



第146図　46号地下式横穴墓

47号地下式横穴墓

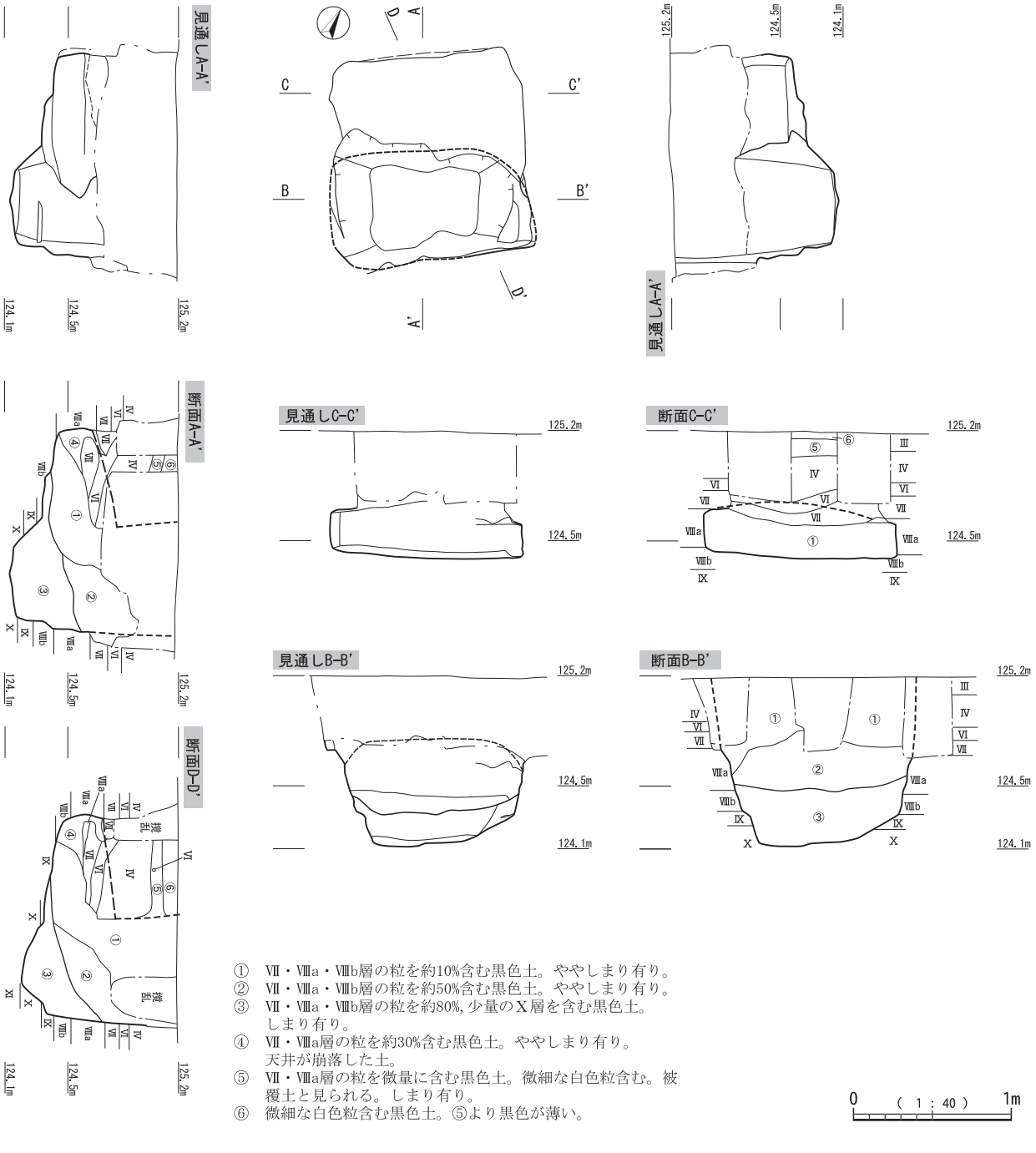
検出区	F-37	玄室開口方向	北北西
分　類	C		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する付近の攪乱部分を取り除き検出した。玄室中央部の天井は崩落しかけていた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	68	122	52	112	－	－	58	122	66	－
推　定	70	130	100	－	50	－	－	－	－	35

竪坑最下層	X	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	楕円形
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	Ⅷb	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室より一段低く造られている。床面付近の埋土③はしまりがあり，玄室床面の高さと同じであることから，玄室閉塞時の床面と考えられる。埋土②とは明らかに異なる。竪坑と玄室が横長で，羨道がほとんどない形状は，43 ～ 45 号墓と共通する。 【玄室】 横幅は竪坑と同じである。天井部分がそのまま崩落し，埋土①の上に乗った状態であった。玄室天井は約 20cm 落ち込んでいる。
工具痕	天井の崩壊ブロックに，羨道から奥方向に掘削した痕がみられた。幅は約４cmで先端の形状は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒を約80%,少量のⅩ層を含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa層の粒を約30%含む黒色土。ややしまり有り。天井が崩落した土。
⑤ Ⅶ・Ⅷa層の粒を微量に含む黒色土。微細な白色粒含む。被覆土と見られる。しまり有り。
⑥ 微細な白色粒含む黒色土。⑤より黒色が薄い。

第147図　47号地下式横穴墓

４８号地下式横穴墓

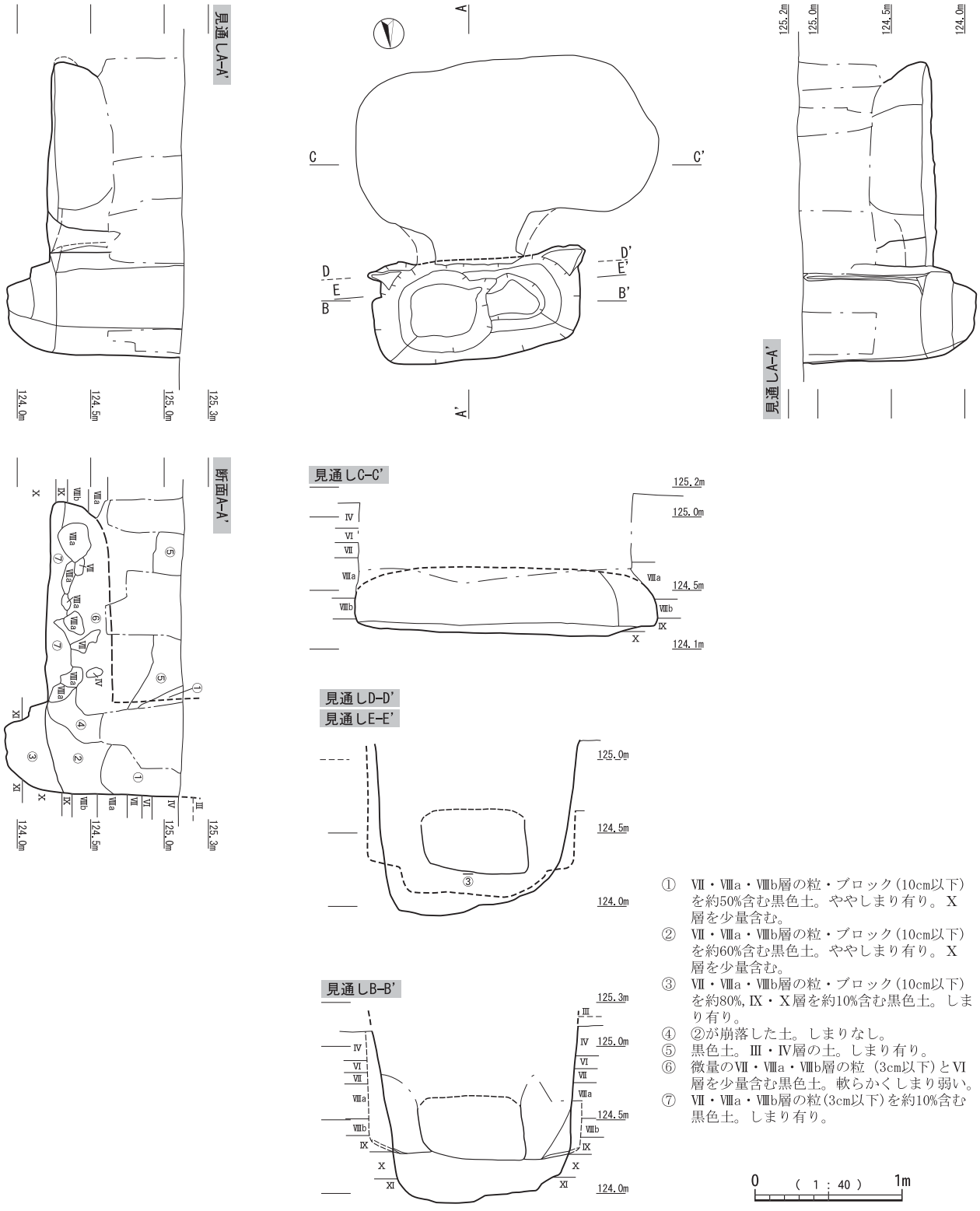
検出区	F-37	玄室開口方向	南
分　類	Ｂ１		

検出状態	Ⅳ層上面で攪乱部分を取り除き，竪坑と天井が崩落した玄室を検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	68	140	120	70	－	18	108	206	126	－
推　定	－	－	130	－	45	－	－	－	－	45

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形（やや楕円形に近い）		
玄室床面層	X	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 竪坑床面は玄室より 30㎝ほど低い。埋土③はⅦ・Ⅷ層主体で，玄室床面と同じ高さである。羨門左右に抉り部分がみられ，断面Ｄをみると，この抉り部分の段と埋土③の上面はほぼ同じ高さであるため，閉塞時の床面の可能性が高い。また，抉り部分の下面には，黒色の軟らかい土が入っている。上部から流入した土と考えられる。 【玄室】 床面はほぼ平坦で，平面形は右側に張り出す形状である。横幅は２ｍ，縦幅が１ｍ以上あり，大変広い。床面の埋土⑦は，竪坑から流入した土と天井が崩落した土が混ざったものと考えられる。
工具痕	竪坑側壁に上から下方向に削った痕は確認できたが，幅等は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。X層を少量含む。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む黒色土。ややしまり有り。X層を少量含む。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%,Ⅸ・X層を約10%含む黒色土。しまり有り。
④ ②が崩落した土。しまりなし。
⑤ 黒色土。Ⅲ・Ⅳ層の土。しまり有り。
⑥ 微量のⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)とⅥ層を少量含む黒色土。軟らかくしまり弱い。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り。

0 (1 : 40) 1m

第148図　48号地下式横穴墓

４９号地下式横穴墓

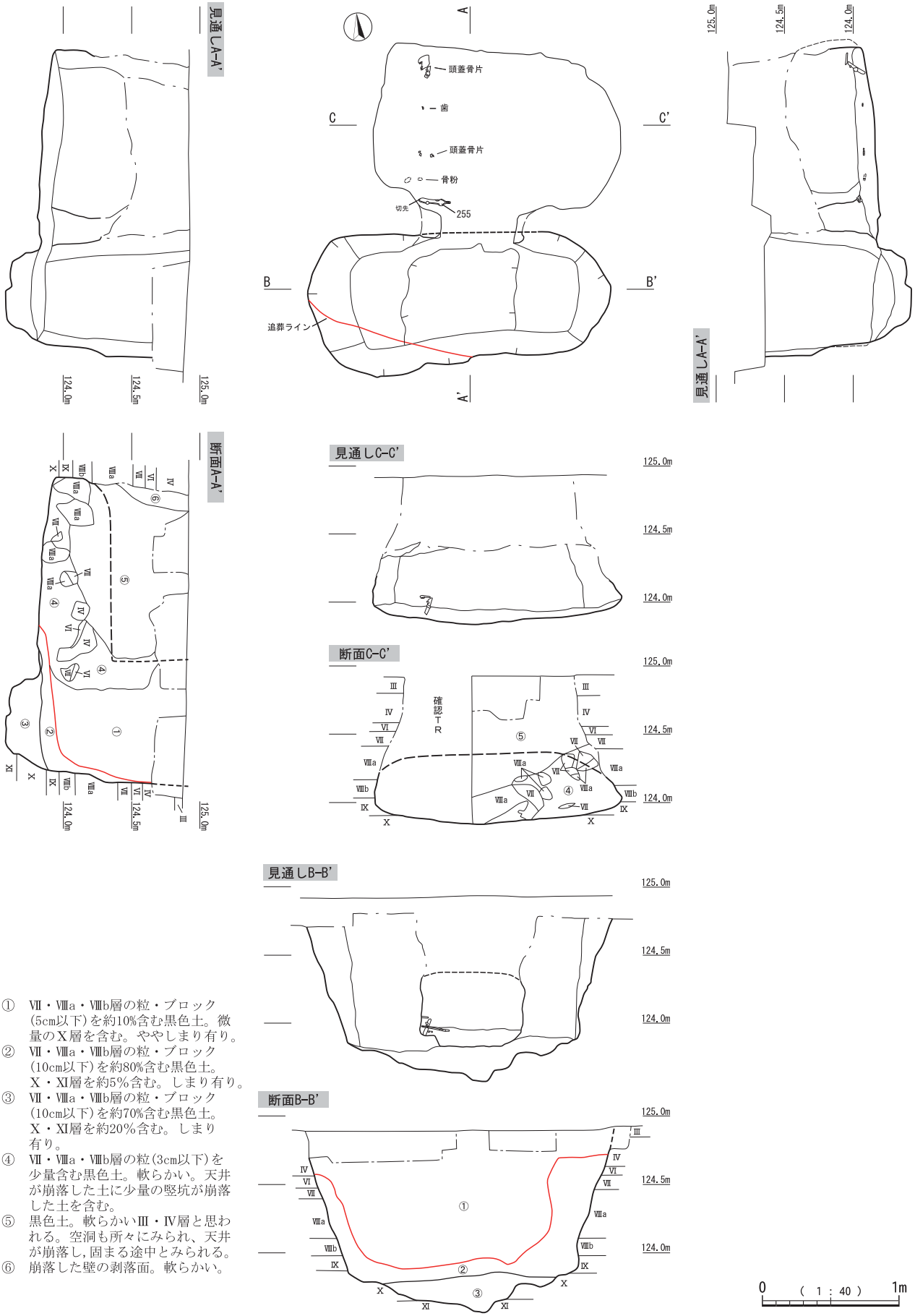
検出区	G-37	玄室開口方向	北
分　類	A		

検出状態	トレンチャーによる攪乱部分を取り除き竪坑を検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	91	222	110	76	－	21	122	180	143	－
推　定	95	－	135	－	50	－	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形（やや楕円形に近い）		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	あり

概　要	【竪坑】 羨門横幅は狭く，竪坑横幅の半分以下である。埋土②はほとんどがⅦ・Ⅷ層であり，竪坑左後ろ側と左右の側面近くにみられた。埋土①とⅦ・Ⅷ層土との混合比率に差があり，埋土①は追葬時のものと考えられる。 【玄室】 床面はほぼ平坦で，平面形はやや右側へ偏る形状である。２体分の頭蓋骨が遺存していた。羨道左側に鉄器が副葬されており，埋土②の上面に位置することから，追葬時に副葬された可能性が高い。
工具痕	崩壊ブロックの天井面に，幅約４～５㎝のＶ字状のものがみられた。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	２体分の頭蓋骨片のみ遺存している。頭蓋骨片の間にある歯は，どちらの頭蓋骨に伴うかは不明である。両人骨とも年齢・性別は不明である。
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	短剣１点が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。微量のⅩ層を含む。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒色土。Ⅹ・Ⅺ層を約5%含む。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約70%含む黒色土。Ⅹ・Ⅺ層を約20%含む。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。軟らかい。天井が崩落した土に少量の竪坑が崩落した土を含む。
⑤ 黒色土。軟らかいⅢ・Ⅳ層と思われる。空洞も所々にみられ、天井が崩落し,固まる途中とみられる。
⑥ 崩落した壁の剥落面。軟らかい。

第149図　49号地下式横穴墓

５０号地下式横穴墓

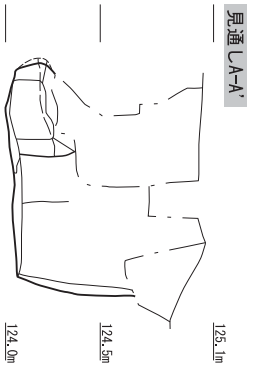
検出区	G-37	玄室開口方向	南南東
分　類	C		

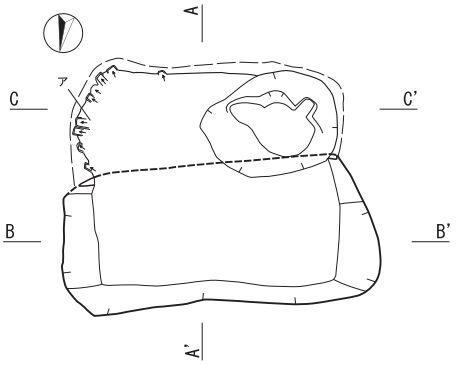
検　出 状　態	Ⅲ層上面で，Ⅶ・Ⅷ層が混在する付近の攪乱部分を取り除き検出した。

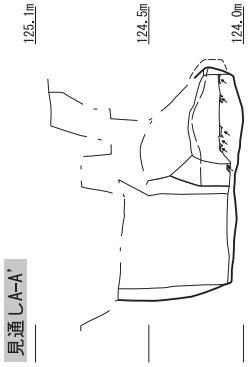
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	72	166	62	134	－	－	58	142	56	－
推　定	80	170	100	－	35	－	－	－	－	40

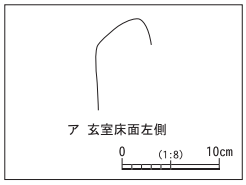
竪坑最下層	Ⅷb	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	Ⅷb・Ⅸ	玄室断面形	長方形（不整形）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 羨道横幅が広く，玄室横幅とほぼ同じである。埋土②はほとんどがⅦ・Ⅷ層であり，上位にある黒色土が多い埋土①と明確に区別できる。玄室は，Ⅷ層部分に構築されており，埋土②は玄室を掘削した排出土であり，埋土②の上面は閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 竪坑と玄室の深さはほぼ同じである。右側がやや凹んでいる。玄室左奥の床面には，工具痕が残る。
工具痕	玄室左側に，左奥方向に削った痕がみられる。 幅は約６cm程度の方形状のものと思われる。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

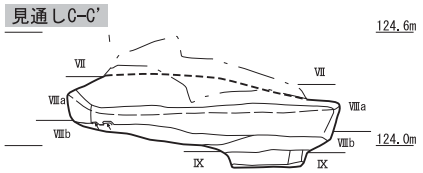


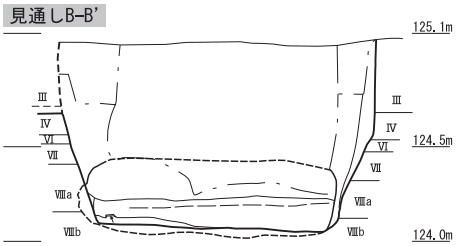


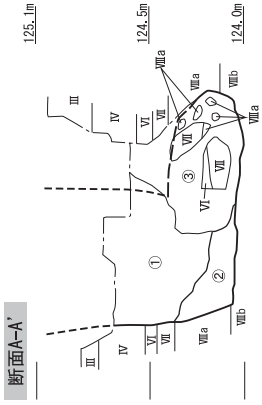


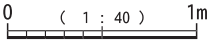


工具痕実測図









① Ⅶ・Ⅶa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅶa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約90%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅶa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を少量含む黒色土。黒色土はブロック状になるところ有り。天井が崩落した土。やや軟らかい。

第150図　50号地下式横穴墓

６７号地下式横穴墓

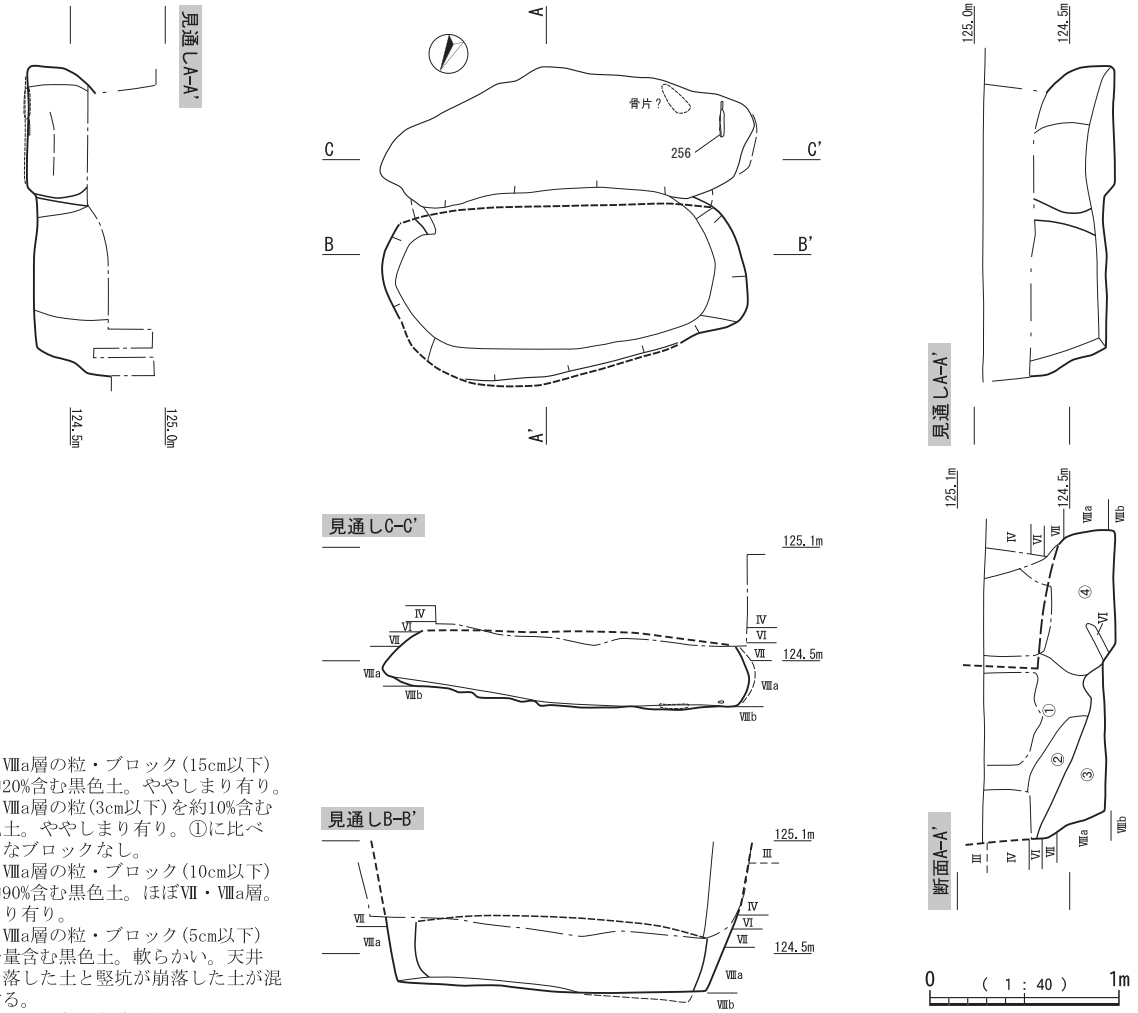
検出区	G-38	玄室開口方向	南南東
分　類	C		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する付近のトレンチャーによる攪乱部分を取り除き検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	94	190	40	154	－	12	74	194	86	－
推　定	100	180	75	－	35	5	－	－	－	40

竪坑最下層	Ⅷa	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅵ・Ⅶ	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅷb	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 横長で羨道がほとんどないタイプである。ほぼⅦ・Ⅷa層の埋土③と，黒色土に少量のⅦ・Ⅷ層が入る埋土①・②は明瞭に区別できる。玄室は，Ⅶ・Ⅷ層を掘削して構築されていることから，埋土②は玄室を掘削した排出土であり，埋土②の上面は閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 床面は竪坑より低く造られている。鉄鏃が玄室右側から，茎部が壁側を向いた状態で出土したが，原位置を保っているかは不明である。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	骨粉らしき白色の粒が玄室右側でみられたが，骨かどうかは不明。
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃１点（大型柳葉鏃１点）が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(15cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。①に比べ大きなブロックなし。
③ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(10cm以下)を約90%含む黒色土。ほぼⅦ・Ⅷa層。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(5cm以下)を少量含む黒色土。軟らかい。天井が崩落した土と竪坑が崩落した土が混在する。
※②と③ははっきりと分かれる。

第151図　67号地下式横穴墓

６８号地下式横穴墓

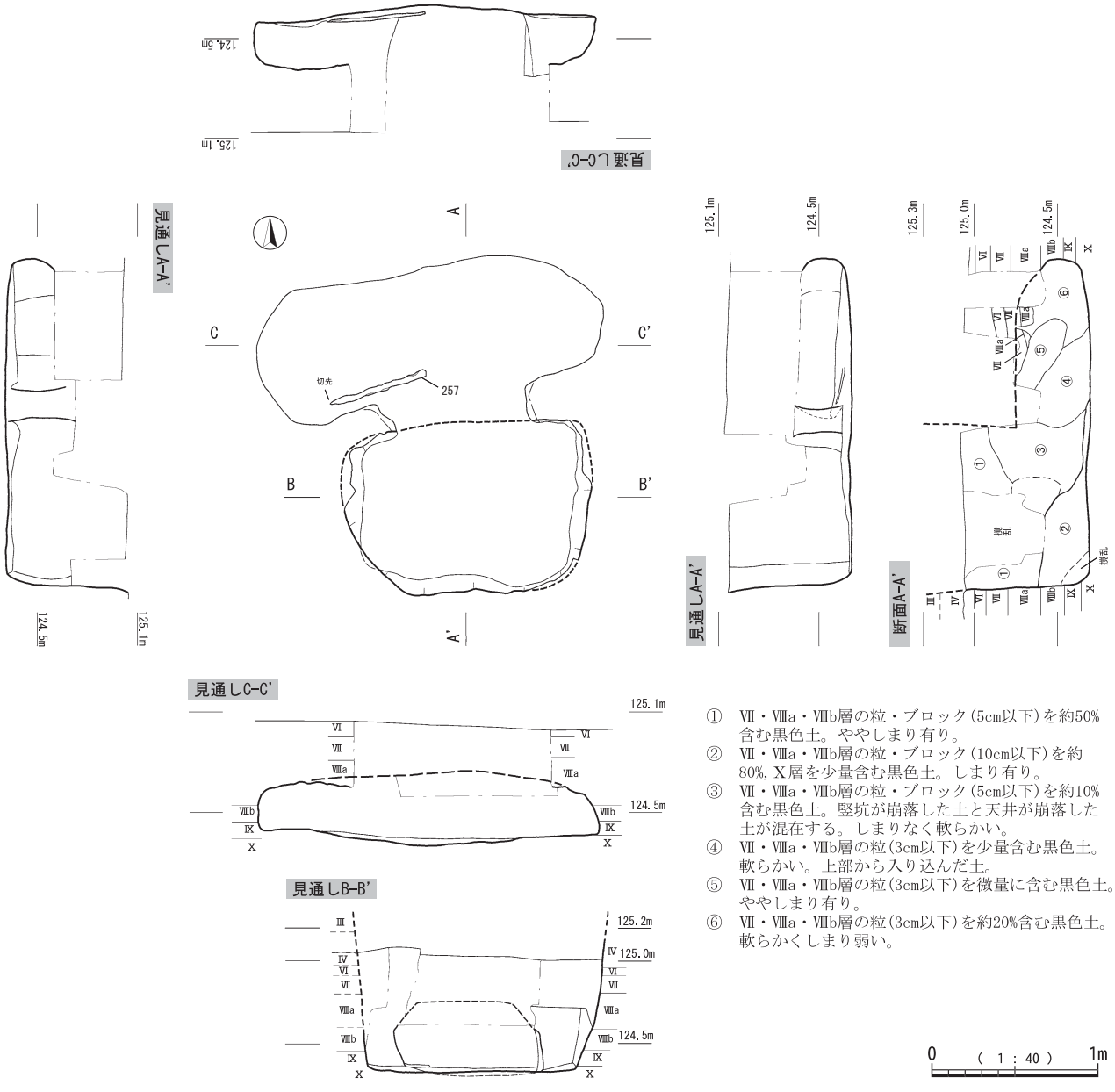
検出区	F-38	玄室開口方向	北
分　類	Ｂ１		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する付近の攪乱を取り除き検出した。玄室天井は一部残存していたが，調査中に崩落した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	102	140	75	88	－	16	79	210	95	－
推　定	105	150	100	－	45	－	－	－	－	45

竪坑最下層	X	竪坑平面形	長方形（やや正方形に近い）	羨門正面形	台形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室まで平坦である。竪坑内は大きく攪乱を受けていた。床面近くの埋土②は，Ⅶ・Ⅷ層の割合が高く，しまりがあり，閉塞時の床面と推測される。 【玄室】 平面形は左側へ張り出しが強くなる形状である。断面をみると，内部に竪坑からの埋土が入り込んでおり，その上に崩落した天井のブロックが落ちた状態であった。玄室横軸は竪坑横軸より長い。鉄剣が玄室入り口付近で１点出土した。剣の下に埋土はなく，屍床はなかったと考えられる。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%,Ⅹ層を少量含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。竪坑が崩落した土と天井が崩落した土が混在する。しまりなく軟らかい。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。軟らかい。上部から入り込んだ土。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。軟らかくしまり弱い。

第152図　68号地下式横穴墓

６９号地下式横穴墓

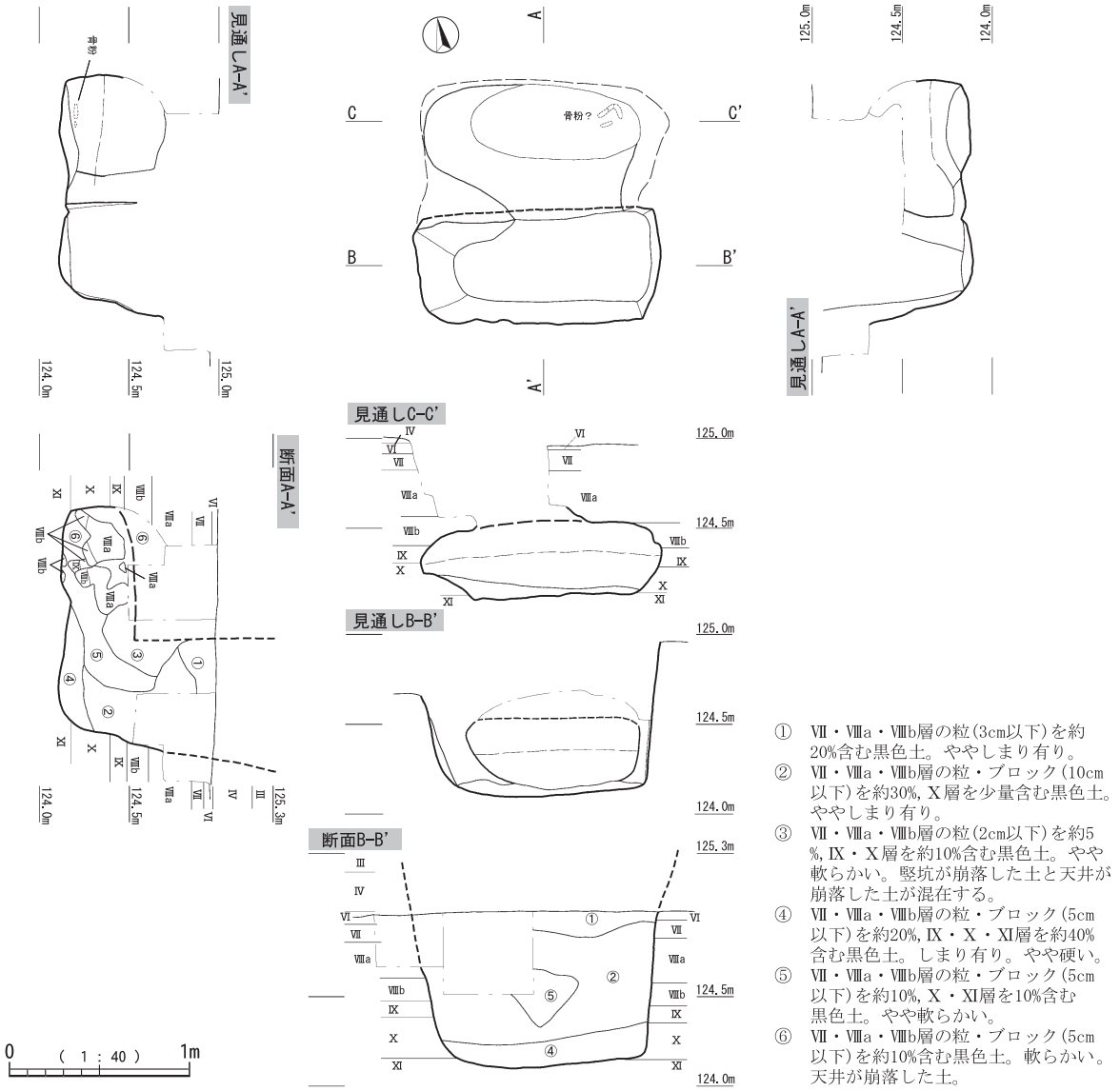
検出区	F-38	玄室開口方向	北
分　類	C		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する付近のトレンチャーによる攪乱部分を取り除き，竪坑と天井の崩落した羨道を検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	64	133	87	96	－	16	62	136	78	－
推　定	75	150	120	－	40	－	－	－	－	45

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	逆台形
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	楕円形（やや不整形）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 横幅は玄室とほぼ同じである。埋土④に含まれるⅧ層の土は，圧縮されたように横長に広がっており，この上面が閉塞時の床面と考えられる。羨門は竪坑に対しやや右側に寄っている。 【玄室】 平面形は左側に偏る片袖状である。玄室天井は攪乱を受ける前に崩落している。左側の床面がやや高い。
工具痕	未検出
赤色顔料	玄室埋土から水銀朱を検出した。
炭化物	未検出
人　骨	骨粉らしき白色の粒を玄室右側で検出した。人骨かどうかは不明である。
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



第153図　69号地下式横穴墓

エリア７出土鉄器（第154図）

49号地下式横穴墓（第154図）

鉄器は255の短剣１点が出土した。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部は深さ約３mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。木質が残存するが，状態が悪いため構造は不明である。

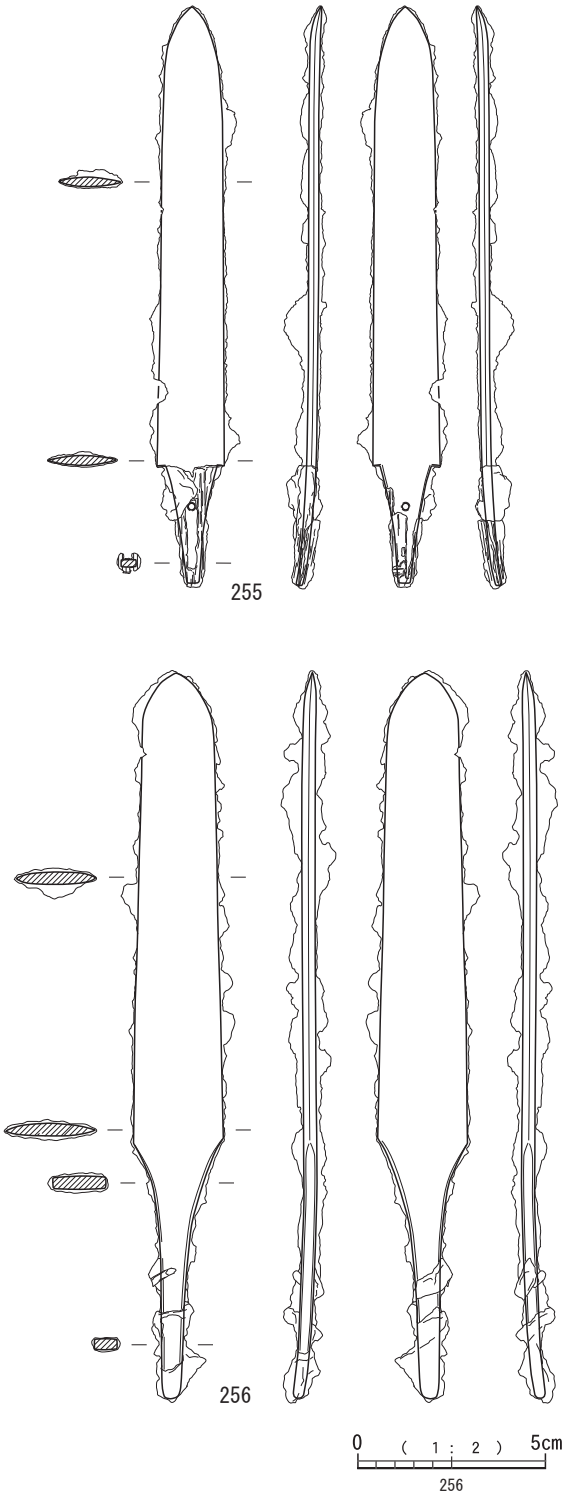
67号地下式横穴墓（第154図）

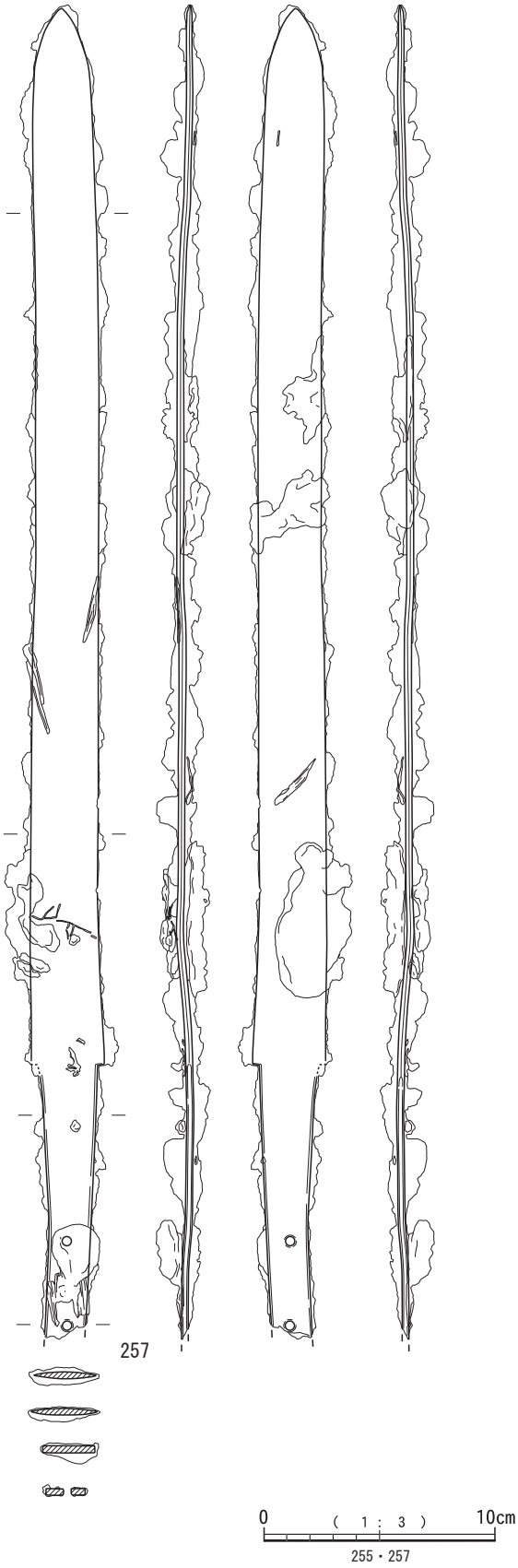
鉄器は256の大型柳葉鏃１点が出土した。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部はナデ形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。茎部の一部に有機質の痕跡がみられるが，状態が悪く材質は不明である。

68号地下式横穴墓（第154図）

鉄器は257の鉄剣１点が出土した。茎部の一部が欠損する。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の一部にイネ科植物らしき植物繊維が付着した痕跡がみられる。繊維方向が一定ではないため，蓆の可能性は低い。関部は一方が錆により不明瞭なものの，深さ約2.5mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅がやや狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔が確認できる。上側の目釘孔は中心を通っておらず，一方にやや寄っている。茎部の一部に有機質が付着するが，状態

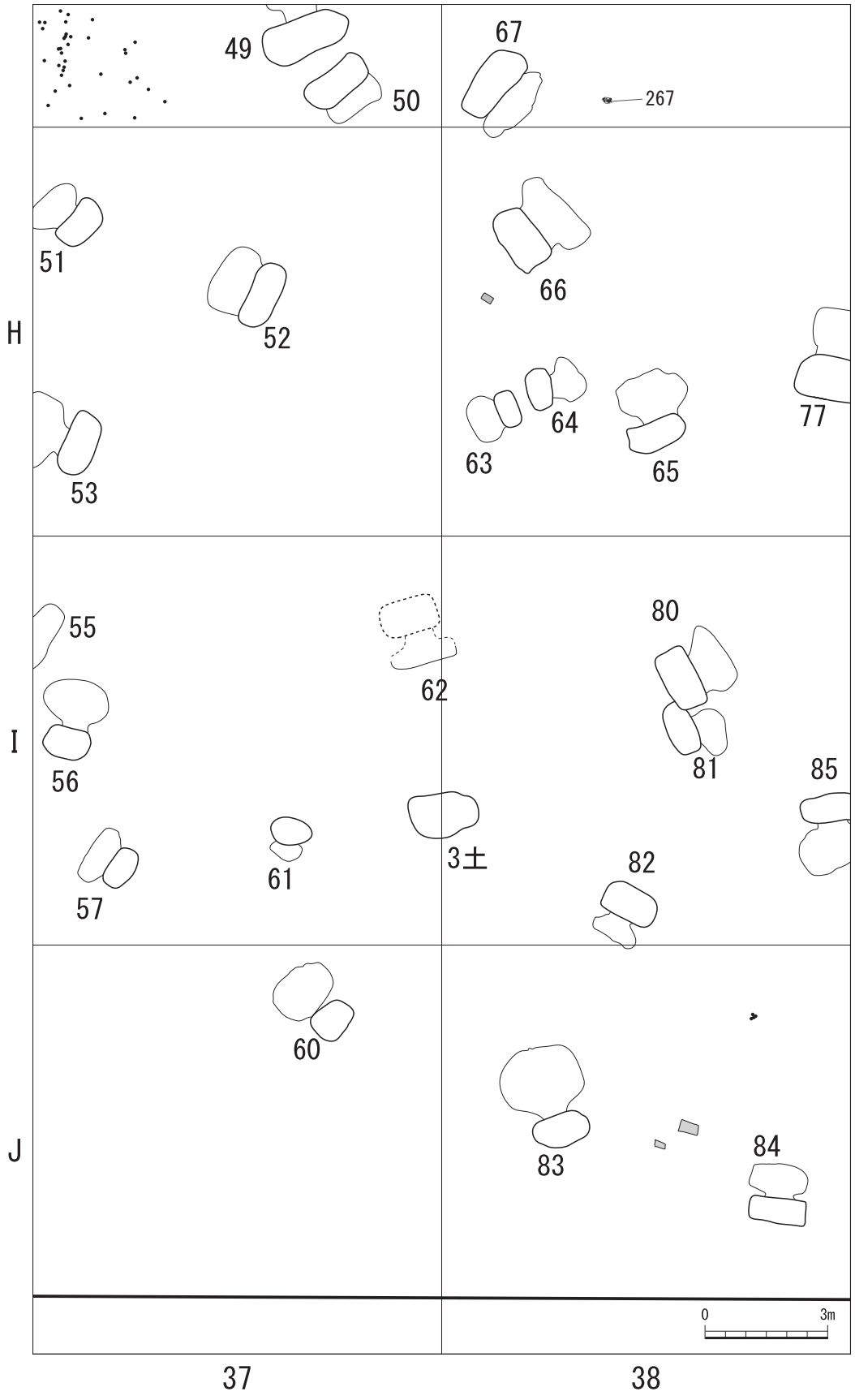
が悪く科学分析からも種類は不明である。繊維方向が不揃いのため，柄木の痕跡ではなく刃部と同様の植物繊維が付着していると考えられる。また，茎部の一部にわずかに銹化した布の痕跡が確認された。こちらも状態は悪く，材質は不明である。





255　49号地下式横穴墓
256　67号地下式横穴墓
257　68号地下式横穴墓

第154図　49号・67号・68号地下式横穴墓出土鉄器



第 155 図　エリア８　遺構配置図

51号地下式横穴墓

検出区	H-37	玄室開口方向	北北西
分　類	A		

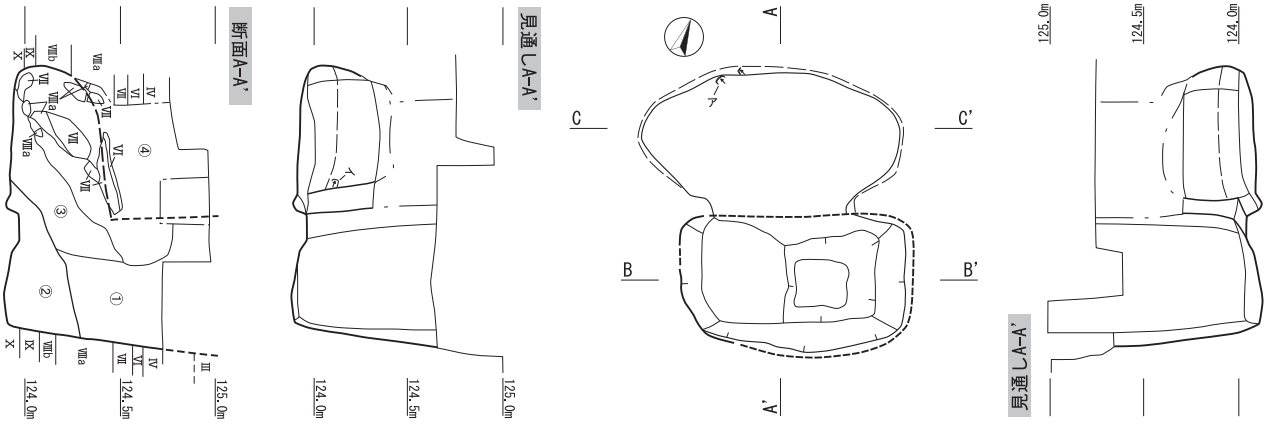
検出状態	表土下から約10cm掘り下げ，Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺の攪乱を取り除いて検出した。玄室は，竪坑調査後に位置が判明した。

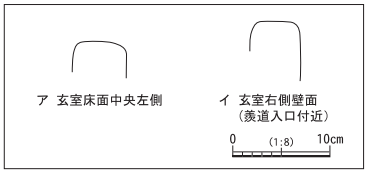
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	74	122	85	74	－	12	70	140	82	－
推　定	－	125	115	－	55	－	－	－	－	50

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

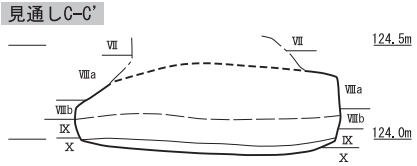
概　要	【竪坑】 床面は右側がやや深く，羨門付近で高くなる。埋土②は，X層を少量含んでおり，硬くしまっている。玄室は，Ⅷ～X層部分に構築されている。埋土②は玄室を掘削した排出土であり，その上面は閉塞時の床面であったと考えられる。 【玄室】 羨道は竪坑に対してやや左側へ偏って構築されている。竪坑の崩落土である埋土③が流入し，その上位にⅦ・Ⅷ層の天井が崩落したブロックがある。平面は楕円形を呈する。
工具痕	玄室左奥や右側面に，奥方向へ削った痕が残る。ア・イとも切先は方形を呈し，アは幅5.5cm，イは幅5.4cmである。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出

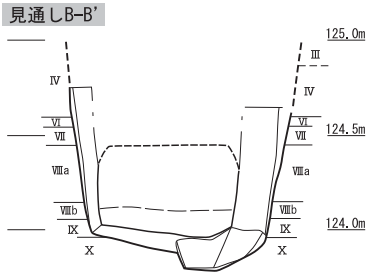
出土遺物	竪坑上面	なし
	竪坑埋土内	なし
	玄室内	なし
備　考		－





工具痕実測図





① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(20cm以下)を約80%, X層を約10%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。軟らかくしまりなし。
④ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(天井が崩落した土)を含む黒色土。ややしまり有り。

0 (1 : 40) 1m

第156図　51号地下式横穴墓

５２号地下式横穴墓

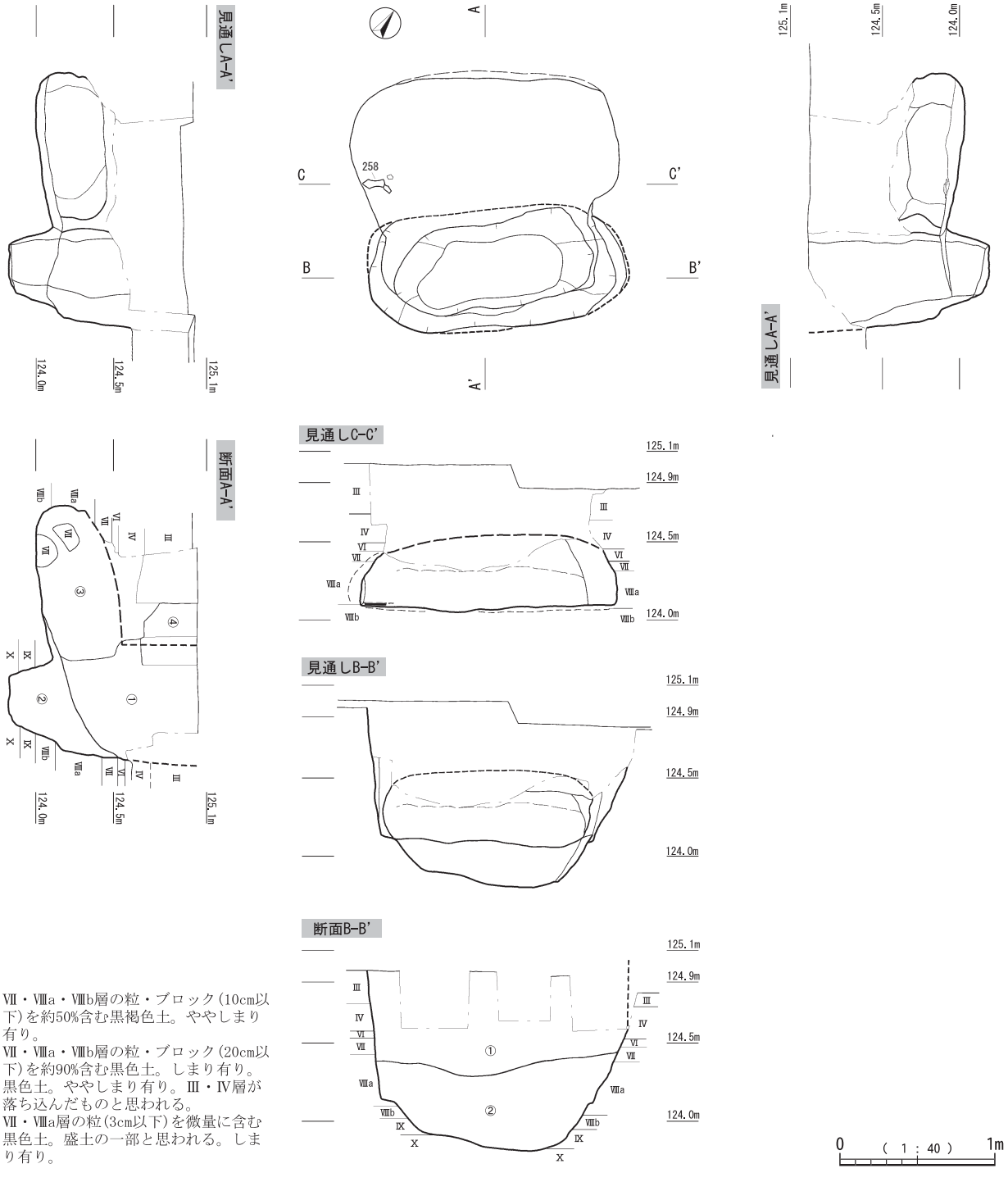
検出区	H-37	玄室開口方向	北西
分　類	C		

検出状態	表土を掘り下げ，Ⅶ・Ⅷ層の混在する部分が明瞭に確認できた。玄室は，竪坑調査後に位置が判明した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	80	168	120	132	－	6	88	176	94	－
推　定	－	－	－	－	45	－	－	－	－	50

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	楕円形
玄室天井層	Ⅳ	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅷa・Ⅷb	玄室断面形	隅丸長方形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 玄室より床面が 30 ㎝深い。Ⅶ・Ⅷ層が主体の埋土②は，強いしまりがあり，玄室床面と同じ高さまで入っている。玄室は，Ⅶ・Ⅷ層を掘削して構築されており，埋土②は玄室構築時の排出土であり，その上面は閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 床面は奥に向かってゆるやかに下る。奥にⅦ層ブロックがみられ，天井部分が崩落したと考えられる。羨道から玄室中央まではⅣ～Ⅵ層が天井付近であったと推定される。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	異形鉄器１点が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒褐色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(20cm以下)を約90%含む黒色土。しまり有り。
③ 黒色土。ややしまり有り。Ⅲ・Ⅳ層が落ち込んだものと思われる。
④ Ⅶ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を微量に含む黒色土。盛土の一部と思われる。しまり有り。

第157図　52号地下式横穴墓

５３号地下式横穴墓

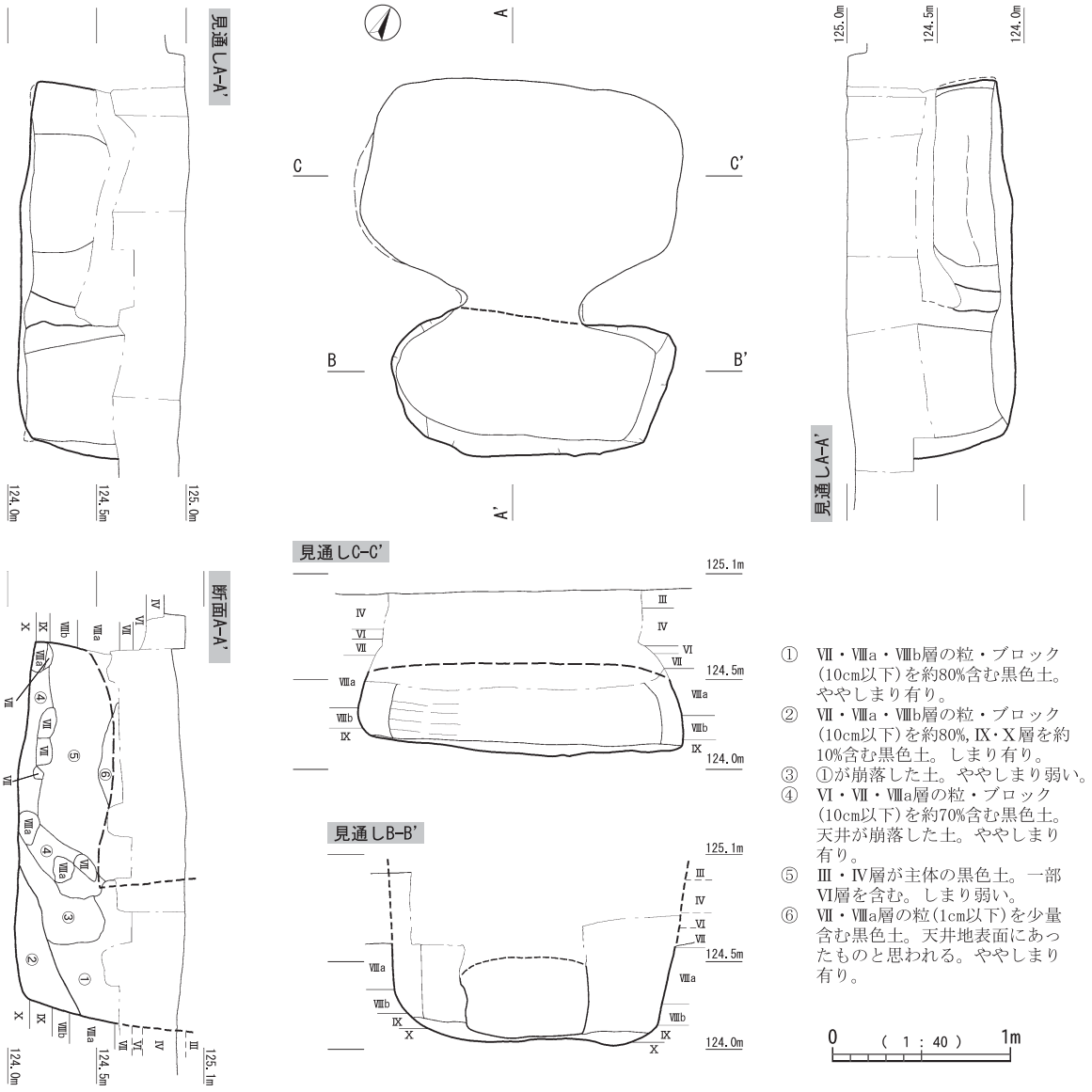
検出区	H-36・37	玄室開口方向	北北西
分　類	Ｂ２		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層の混在する部分を確認し，攪乱を取り除いて検出した。玄室の天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	81	159	65	72	－	11	118	182	129	－
推　定	85	170	100	－	45	－	－	－	－	55

竪坑最下層	X	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅸ・X	玄室断面形	長方形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室にかけてほぼ同じ高さで構築されている。埋土は①～③とも，Ⅶ・Ⅷ層を含む割合が高く，玄室を掘削した排出土も含めて入っていると推定される。埋土②は①と比較するとつぶれたブロックが多く，この上面が閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 羨門の横幅は竪坑の横幅の半分程度である。羨道から玄室にかけてⅧ層のブロックが多くみられることから，竪坑埋土が崩落し，入り込んだ可能性が高い。
工具痕	玄室正面壁は平坦になっており，水平方向に削った痕跡がみられた。幅は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%,Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。しまり有り。
③ ①が崩落した土。ややしまり弱い。
④ Ⅵ・Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(10cm以下)を約70%含む黒色土。天井が崩落した土。ややしまり有り。
⑤ Ⅲ・Ⅳ層が主体の黒色土。一部Ⅵ層を含む。しまり弱い。
⑥ Ⅶ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を少量含む黒色土。天井地表面にあったものと思われる。ややしまり有り。

第158図　53号地下式横穴墓

５５号地下式横穴墓

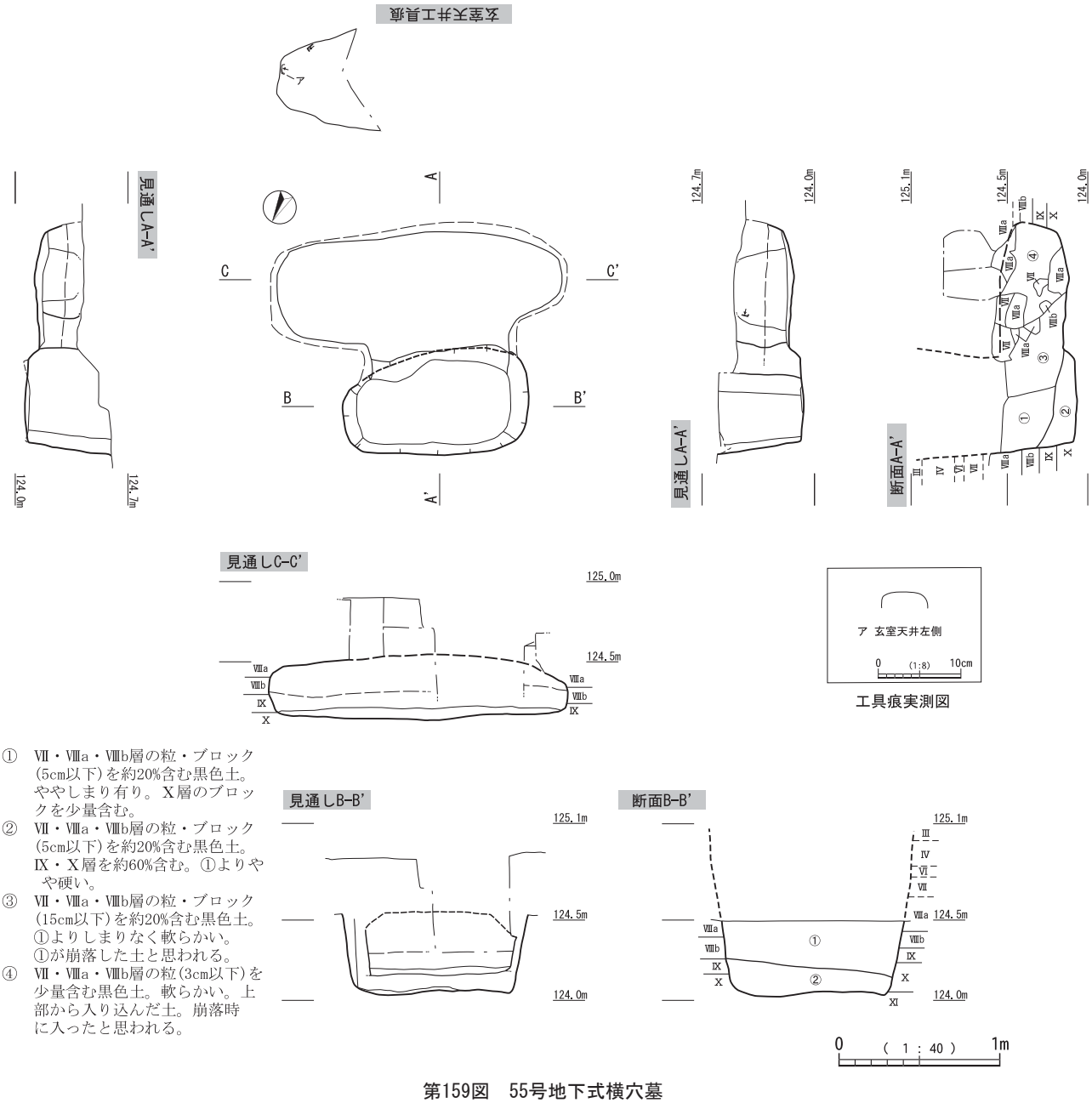
検出区	I-36・37	玄室開口方向	南東
分　類	A		

検出状態	表土下は，トレンチャーによる攪乱が全面に広がっていた。隣接する 56 号墓の玄室断面を調査した際に玄室を検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	65	114	45	92	－	17	70	186	87	－
推　定	70	130	100	－	45	－	－	－	－	40

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	長方形 （やや不整形）	羨門正面形	台形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	IX	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室より低くほぼ平坦である。Ⅷa層上面まで攪乱を受けている。埋土②はIX・X層が多く含まれていることや埋土①より硬いことから，その上面が閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 竪坑の幅と羨門の幅はほぼ同じで，玄室横幅はその倍に近い。天井が崩落したブロックを観察した結果，Ⅷa層が天井であったと確認できた。
工具痕	玄室天井の左側に少数残存していた。アは，幅 5.7 ㎝で方形を呈する。天井から崩壊したブロックにも少数であるが認められた。いずれも幅不明であるがアよりは確実に大きく，幅の異なる工具を使用していると考えられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。Ⅹ層のブロックを少量含む。

② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒色土。Ⅸ・Ⅹ層を約60%含む。①よりやや硬い。

③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約20%含む黒色土。①よりしまりなく軟らかい。①が崩落した土と思われる。

④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。軟らかい。上部から入り込んだ土。崩落時に入ったと思われる。

第159図　55号地下式横穴墓

５６号地下式横穴墓

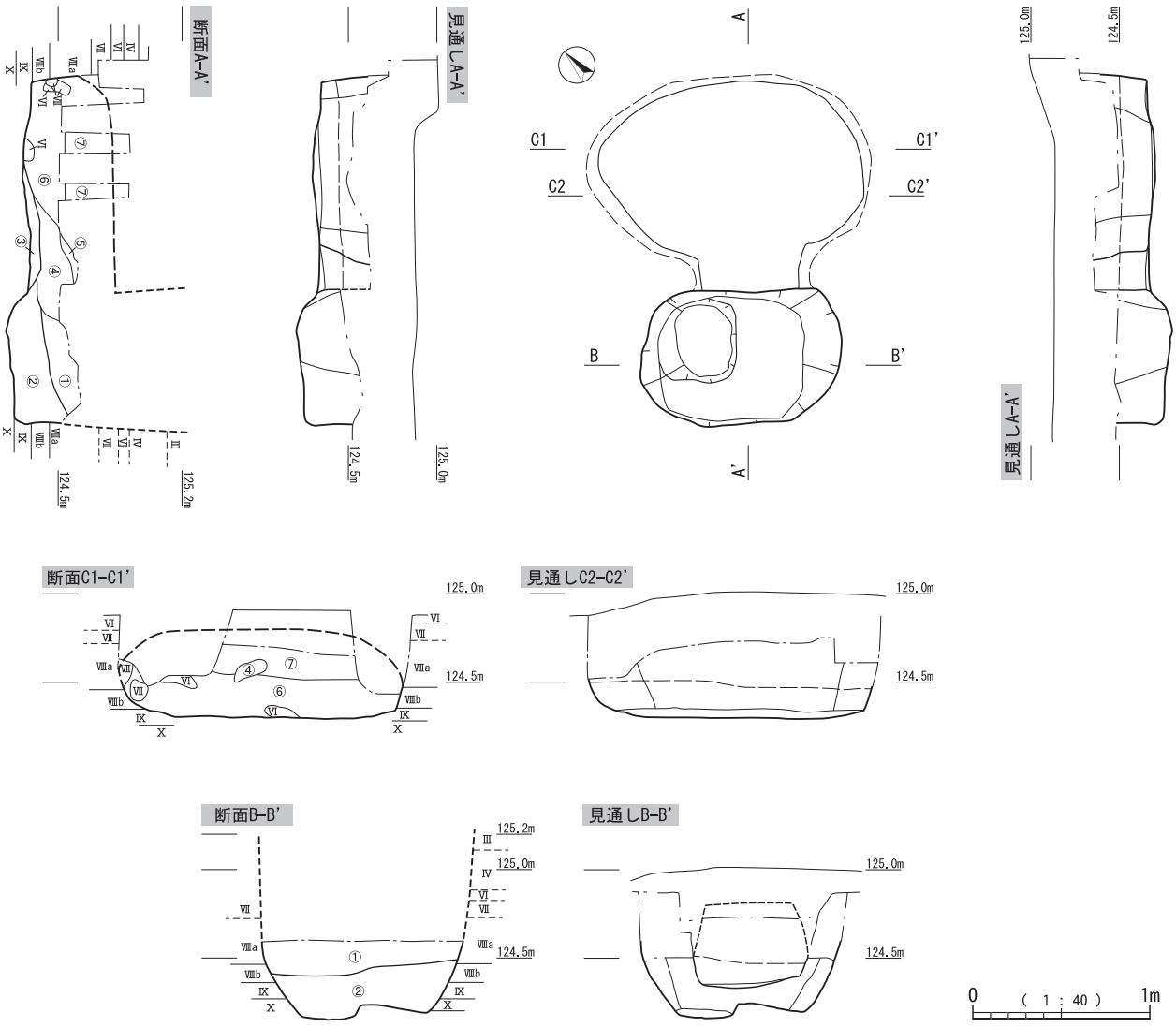
検出区	I-37	玄室開口方向	北東
分　類	A		

検出状態	表土下は全て攪乱が入っており，攪乱部分を数か所掘り上げた後に検出した。玄室の天井部は全て削平されていた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	75	112	40	62	－	21	106	161	127	－
推　定	80	120	100	－	50	－	－	－	－	50

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅸ	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面より約 50cm 上の部分までしか残存していない。床面はほぼ平坦だが，左側がやや凹む形状である。埋土は，①・②ともⅦ・Ⅷ層を多く含む。玄室が主にⅦ・Ⅷ層を掘り込んで構築されており，埋土②はその排出土と考えられる。また，埋土②はつぶされ固まったブロックが多く，その上面が閉塞時の床面であったと考えられる。 【玄室】 羨道との境には明瞭な稜を形成する。埋土③はしまりがあり，屍床と考えられる。埋土下部にはⅥ層の池田降下軽石がふくまれることから，Ⅵ層付近が天井であったと考えられる。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約90%含む土。黒色土はブロック粒として少しずつ入る。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む土。①よりⅦ・Ⅷa・Ⅷb層のブロック大きく,黒色土多く入り,しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約10%含む黒色土。玄室床面の埋土と思われる。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)をわずかに含む黒色土。軟らかい。入り込んだ土と天井が崩落した土と思われる。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約50%含む黒色土。竪坑が崩落した土。軟らかい。
⑥ 天井が崩落した土。Ⅳ層が主体。軟らかい。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2mm以下)を約3%含む黒色土。軟らかい。盛土の一部が流れ込んだものと思われる。

第160図　56号地下式横穴墓

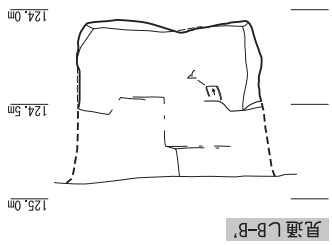
５７号地下式横穴墓	検出区	I-37	玄室開口方向	北北西
	分　類	C		

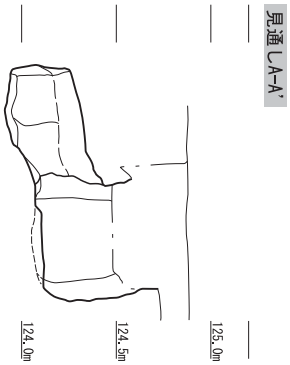
検出状態	表土下にわずかにⅦ・Ⅷ層を含む部分があり，その周辺の攪乱を一部取り除いて検出した。玄室天井は10cm程度残存していた。

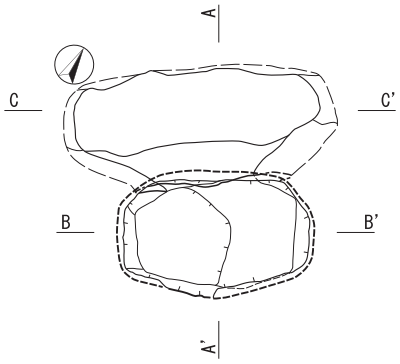
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	68	106	82	81	40	－	56	145	64	40
推　定	－	－	105	－	－	－	－	－	－	－

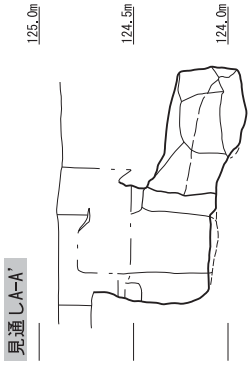
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不整形
玄室天井層	Ⅸ	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅺ	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

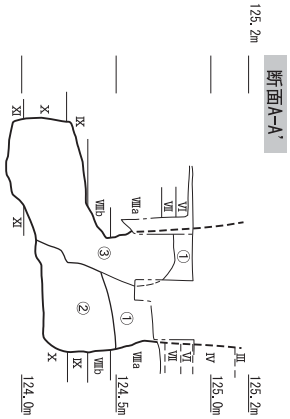
概　要	【竪坑】 床面はほぼ平坦である。埋土②は，Ⅸ・Ⅹ層が主体で，Ⅷ層の割合が低い。玄室がⅨ・Ⅹ層を掘削して構築されていることから，玄室構築時の排出土と考えられる。 【玄室】 横幅は竪坑より広い。小型であるが，玄室の天井はⅧb・Ⅸ層面に構築されており，掘削が深い。埋土は軟らかく，埋土①と似ており，竪坑埋土が崩落して入ったものと推定される。床面は竪坑より30cm程度低く作られている。
工具痕	玄室天井は残存していたが，樹痕などの影響もあり明瞭なものはみられず，竪坑に１か所のみ残っていた。アの工具痕は幅約６cmの方形を呈する。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備　考	－

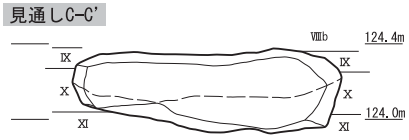


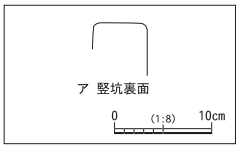




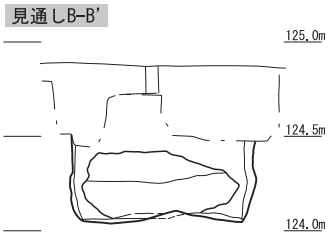


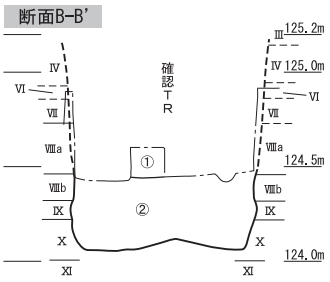






工具痕実測図





① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%含む黒色土。Ⅹ層を少量含む。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約5%,Ⅸ・Ⅹ層を約50%含む黒色土。しまり有り。
③ ①と②の竪坑が崩落した土。軟らかい。Ⅷa層の粒は小さい(1cm以下)。

0 (1 : 40) 1m

第161図　57号地下式横穴墓

６０号地下式横穴墓

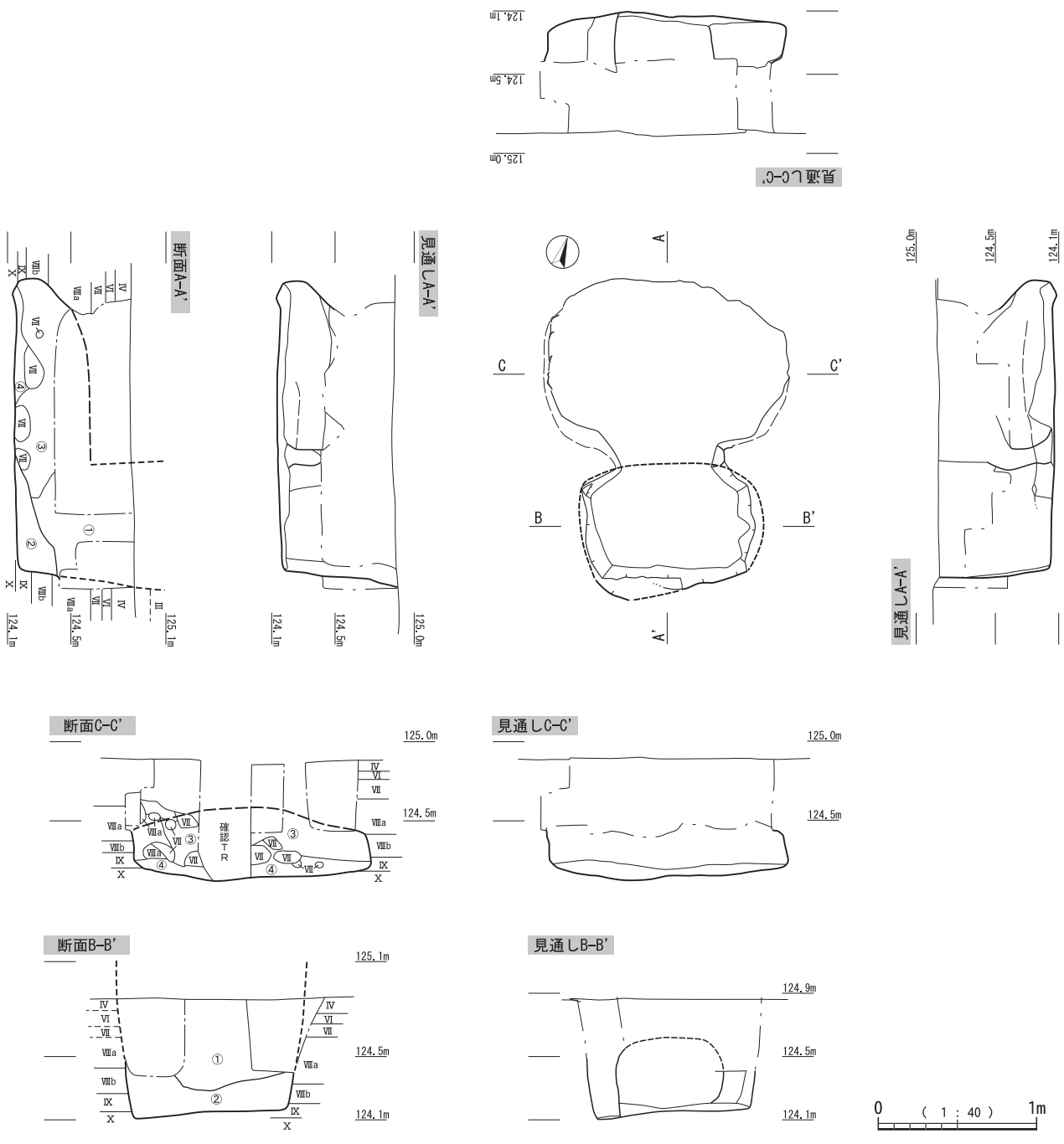
検出区	J-37	玄室開口方向	北北西
分　類	A		

検出状態	表土下のわずかにⅦ・Ⅷ層が混在する部分周辺の攪乱を取り除き，検出した。玄室は黒色土で埋まっていた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	82	116	25	67	－	9	106	154	115	－
推　定	80	120	95	－	50	－	－	－	－	50

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	長方形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 玄室から竪坑までの床面は平坦になっており，段差がほとんどみられない。埋土中に，Ⅶ・Ⅷ層が多いことから，玄室を構築する際に掘削した排出土が含まれていると考えられる。埋土②はⅨ層が含まれ，しまりがあることから，この上面が閉塞時の床面と推定される。 【玄室】 縦横幅とも竪坑より広い。天井が崩落したブロックはⅦ層であるため，この層付近が天井部分と考えられる。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約80%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%含む黒色土。黒色土はⅨ層が主体。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。天井が崩落した土。軟らかい。
④ Ⅵ・Ⅶ層を多く含む黒褐色土。天井が崩落した土。ややしまり有り。

第162図　60号地下式横穴墓

61号地下式横穴墓	検出区	I-37	玄室開口方向	南西
	分　類	C		

検出状態	トレンチャーによる攪乱部分を取り除き，玄室部分を確認した。竪坑床面がⅧb層であり，その面まで攪乱を受けていることから，竪坑および羨道の残存部分は少ない。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	64	98	32	－	－	－	42	76	50	－
推　定	65	100	65	－	30	－	－	－	－	35

竪坑最下層	Ⅷb	竪坑平面形	不明	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	不明		
玄室床面層	X	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 平面の形状などは不明である。残存している埋土は少ないが，埋土②にⅦ・Ⅷ層が多く含まれることを確認した。一方で，埋土①には少なかった。 【玄室】 竪坑より約40cm深く，床面が左から右側へ傾斜している。埋土は黒色土が主体である。横幅が80cm未満ととても狭い。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

６２号地下式横穴墓

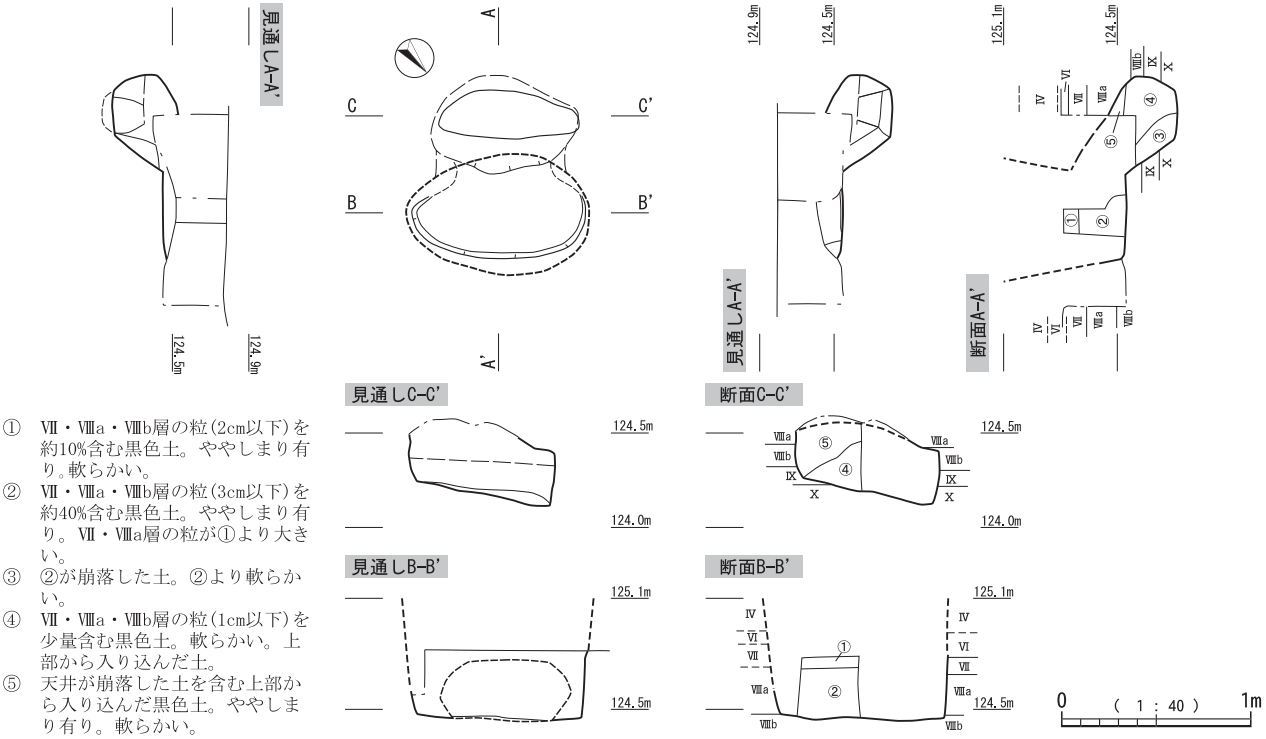
検出区	I-37	玄室開口方向	南南西
分　類	A		

検出状態	確認調査の際に，竪坑部分は検出されていた。最下層がⅧ層と浅く，トレンチャーによる攪乱部分が多い。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	90	140	45	－	－	－	60	160	84	－
推　定	90	140	65	70	35	25	－	－	－	35

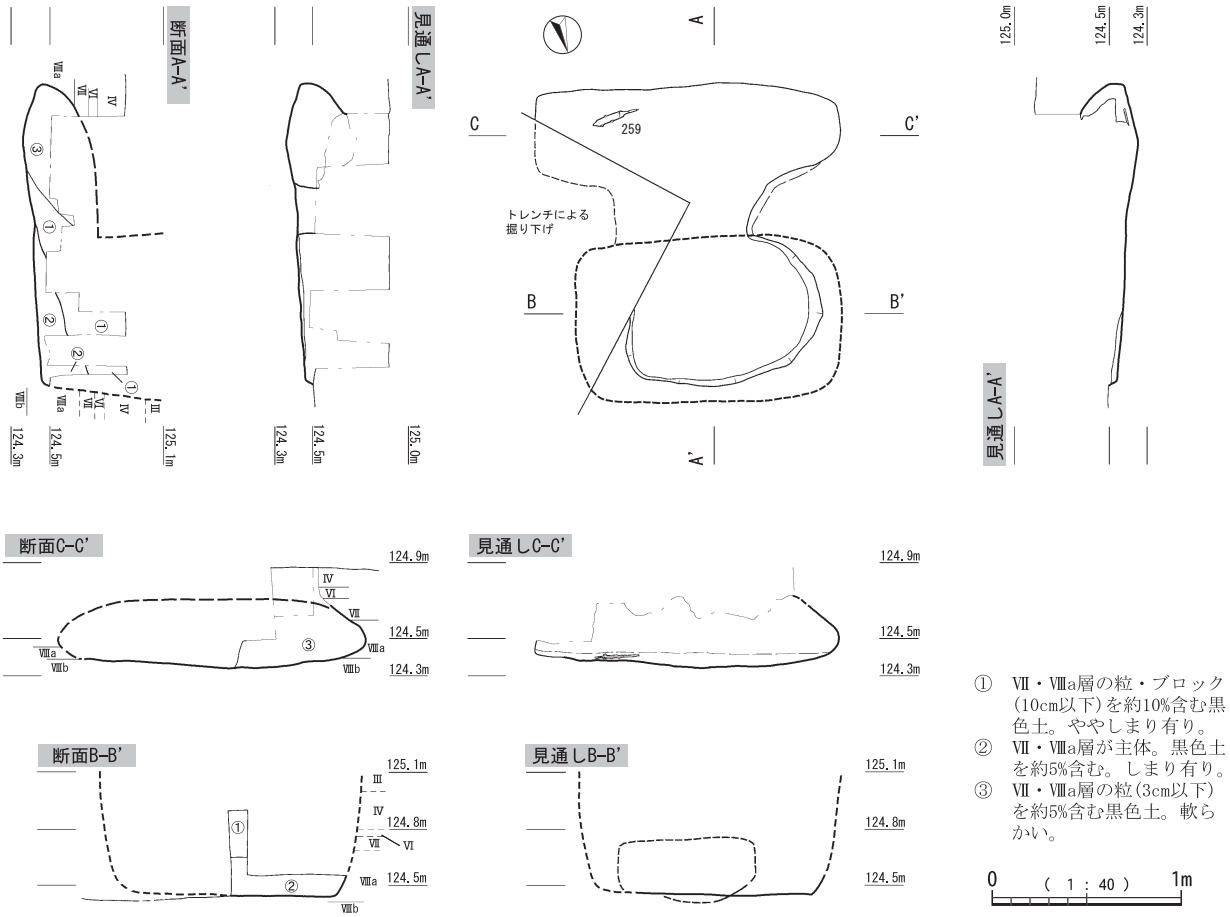
竪坑最下層	Ⅷa	竪坑平面形	不明	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	隅丸長方形？		
玄室床面層	Ⅷb	玄室断面形	不明		
閉塞推定	不明	竪坑抉り	不明	竪坑掘り返し痕	不明

概　要	【竪坑】 トレンチャーにより竪坑は床面近くまでほぼ削平されていた。図の平面形は推定である。床面近くの埋土②は，Ⅶ・Ⅷ層が主体で硬く，この上面が閉塞時の床面と考えられる。上位の埋土①は黒色土の割合が高く，埋土②と明瞭に区分できる。床面付近しか残存しておらず，形状は不明である。 【玄室】 残存する範囲から判断して，隅丸長方形になると考えられる。羨道との境はゆるやかな稜をなす。埋土は黒色土で，天井が崩落したブロックがみられないため，攪乱を受けるまで玄室天井は残存していた可能性が高い。玄室の左側に鉄鏃１点が副葬されており，先端は左側を向いていた。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃１点（大型柳葉鏃１点）が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。軟らかい。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約40%含む黒色土。ややしまり有り。Ⅶ・Ⅷa層の粒が①より大きい。
③ ②が崩落した土。②より軟らかい。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量含む黒色土。軟らかい。上部から入り込んだ土。
⑤ 天井が崩落した土を含む上部から入り込んだ黒色土。ややしまり有り。軟らかい。

第163図　61号地下式横穴墓



① Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa層が主体。黒色土を約5%含む。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を約5%含む黒色土。軟らかい。

第164図　62号地下式横穴墓

６３号地下式横穴墓

検出区	H-38	玄室開口方向	西
分　類	C		

検出状態	確認調査で検出されていた。Ⅷa層上面まで削平を受けている。削平前に玄室天井は崩落している。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	50	93	30	74	－	10	70	108	80	－
推　定	60	105	85	－	35	35	－	－	－	30

竪坑最下層	Ⅸ	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅷb	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要

【竪坑】
　竪坑は小型であり，玄室よりも小さい。床面近くの埋土①はⅦ・Ⅷ層が主体で硬く，この上面が閉塞時の床面と考えられる。玄室は，Ⅶ・Ⅷ層部分に構築されており，埋土①は玄室構築時の排出土と推定される。羨道付近は黒色土を含む埋土②が主体で，竪坑が崩落した土と上位から流入した黒色土が混在したものと考えられる。

【玄室】
　小型で横幅は１ｍ程度しかない。天井は崩落しており，ブロックからⅦ層が天井であったと推定される。床面は羨道部分から玄室の中心にかけて一段高くなり，玄室奥にかけて低くなる。隣接する 64 号墓とは形状や大きさが類似しているが，玄室は逆方向である。

工具痕	竪坑内で縦方向に削った痕が残るが，幅等がわかるものはみられない。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	H20 年度の確認トレンチ内。

６４号地下式横穴墓

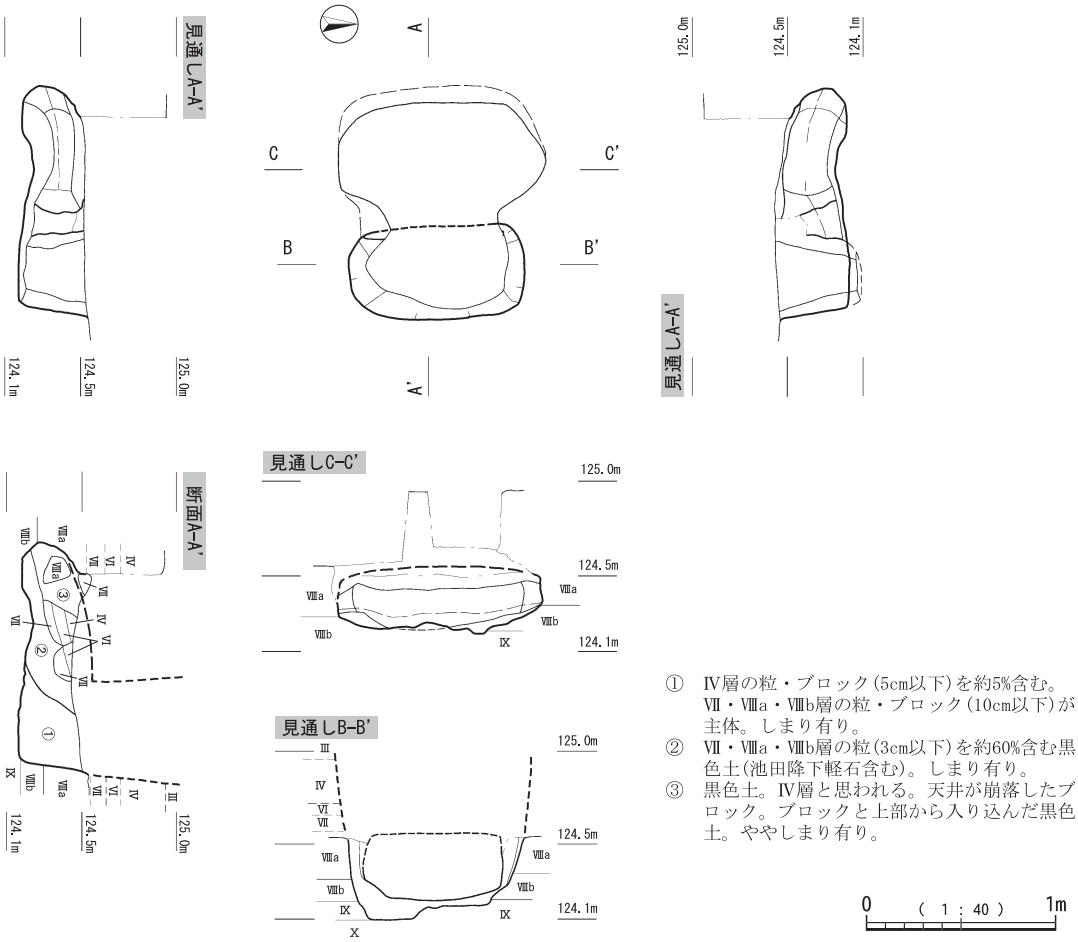
検出区	H-38	玄室開口方向	東
分　類	Ｂ１		

検出状態	確認調査で検出されていた。Ⅷ層まで削平を受けている。削平以前に玄室天井は崩落している。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	60	100	28	56	－	8	68	110	76	－
推　定	70	115	80	－	30	30	－	－	－	30

竪坑最下層	Ⅷb	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	Ⅷb	玄室断面形	隅丸長方形？		
閉塞推定	土塊	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

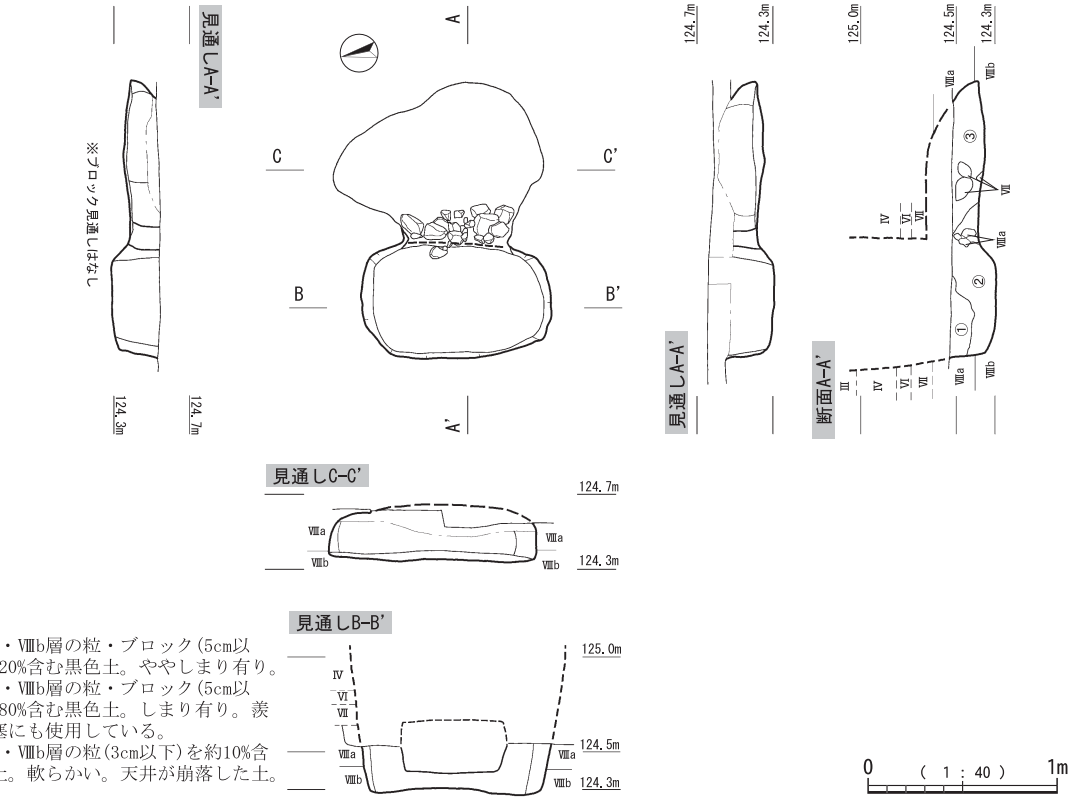
概　要	【竪坑】 床面より 30cm 上位まで残存していた。竪坑床面は玄室より一段深い。竪坑・玄室とも小型である。埋土②はⅧ層が主体である。玄室は，Ⅷ層を掘削して構築されているため，これらの埋土は玄室構築時の排出土と考えられる。羨道部分にはⅧ層のブロックが集中していることから，土塊閉塞と考えられる。 【玄室】 玄室はやや左側に張り出す不整形である。規模が小さい点で 63 号墓と類似するが，玄室の向きは反対である。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	H20 年度の確認トレンチ内。



① Ⅳ層の粒・ブロック(5cm以下)を約5%含む。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)が主体。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約60%含む黒色土(池田降下軽石含む)。しまり有り。
③ 黒色土。Ⅳ層と思われる。天井が崩落したブロック。ブロックと上部から入り込んだ黒色土。ややしまり有り。

0 (1 : 40) 1m

第165図　63号地下式横穴墓



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約80%含む黒色土。しまり有り。羨道の閉塞にも使用している。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。軟らかい。天井が崩落した土。

0 (1 : 40) 1m

第166図　64号地下式横穴墓

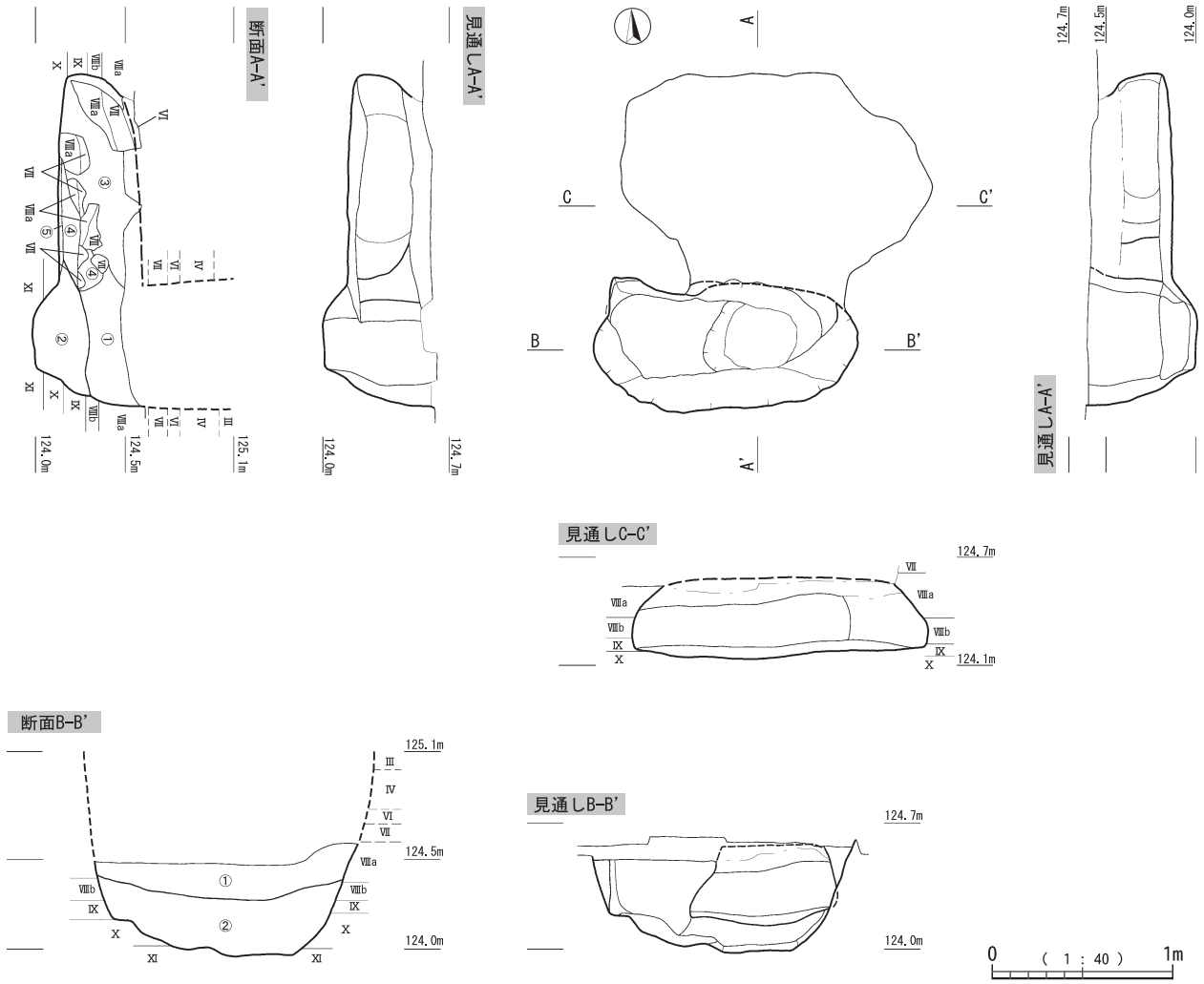
６５号地下式横穴墓	検出区	H-38	玄室開口方向	北北東
	分　類	Ｂ２		

検出状態	確認調査で検出されていた。Ⅷa層まで削平されており，それ以前に玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	69	146	50	76	－	22	110	176	132	－
推　定	75	160	115	－	45	45	－	－	－	45

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	台形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	Ⅸ・Ⅹ	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 竪坑の床面は羨道・玄室より一段深い。竪坑の右側の偏った位置に羨道が造られている。埋土①は黒色土主体で，埋土②はⅦ・Ⅷ層が主体でしまりがある。玄室は，Ⅷa～Ⅹ層上面を掘削して構築されていることから，埋土②は玄室構築時の排出土であり，上面は閉塞時の床面と考えられる。羨道は竪坑の右側に偏っており，羨門前の床面は低くなる。 【玄室】 玄室は竪坑に対して大きく，不整形である。床面は羨道とほぼ同じで平坦である。玄室は完全に崩落しており，床面にみられる崩落したブロックの観察から，Ⅶ・Ⅷ層の境目付近が天井部分と考えられる。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	H20 年度の確認トレンチ内。



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約70%,Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。下位ほどⅩ層を含む割合が高い。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%,池田降下軽石を微量に含む黒色土。軟らかい。天井が崩落した土。Ⅷa層の粒は,ほぼ天井が崩落した時のもの。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約50%,池田降下軽石を約5%含む黒色土。竪坑が崩落した土。軟らかい。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。屍床と思われる。

第167図　65号地下式横穴墓

６６号地下式横穴墓

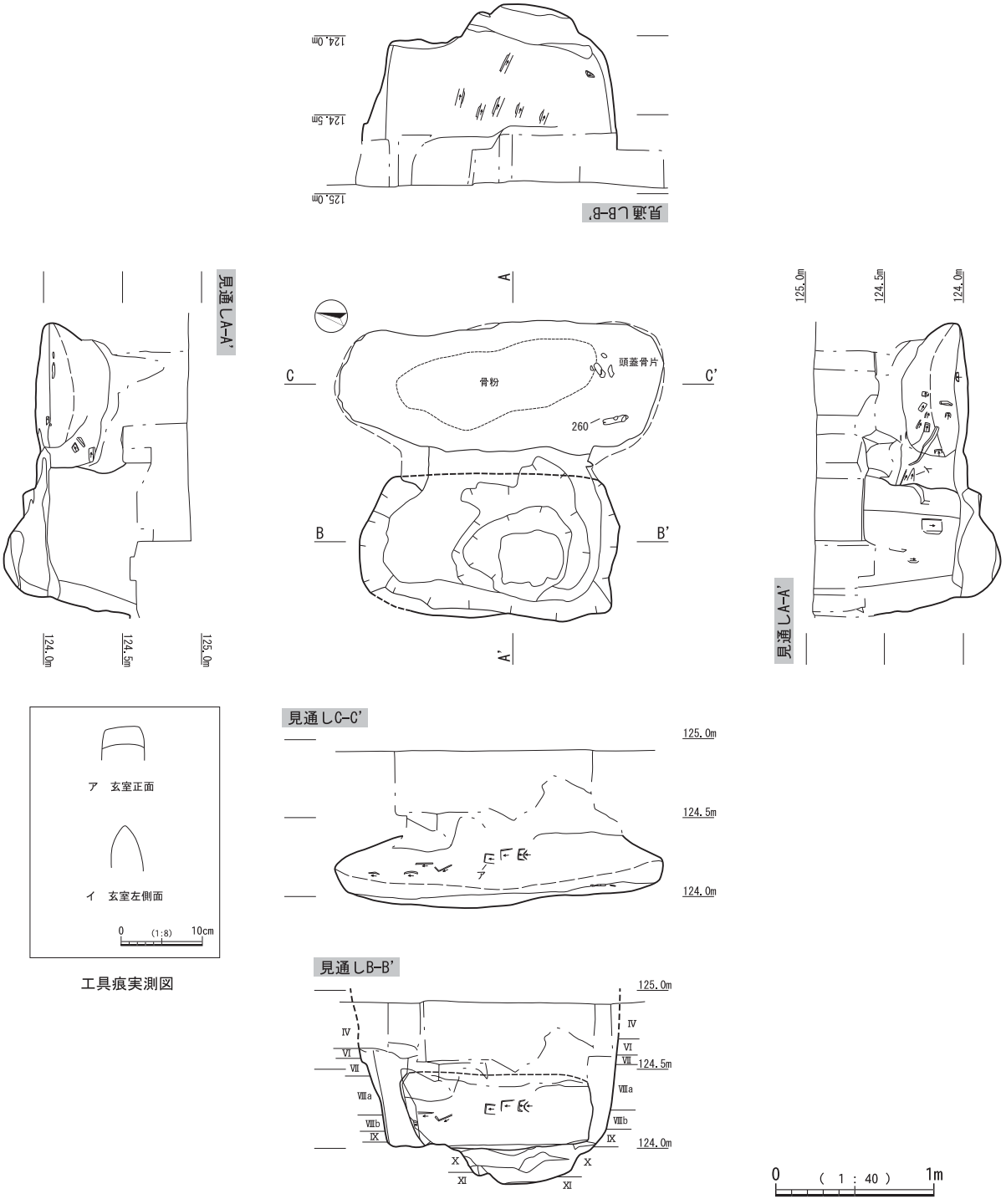
検出区	H-38	玄室開口方向	東北東
分　類	A		

検出状態	確認トレンチの左側の隅でⅦ・Ⅷ層が混在する部分を確認し，周辺のトレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。玄室天井は一部崩落していたが，落下したブロックの上に空洞がみられることから，崩落から長い時間は経過していないと推定される。

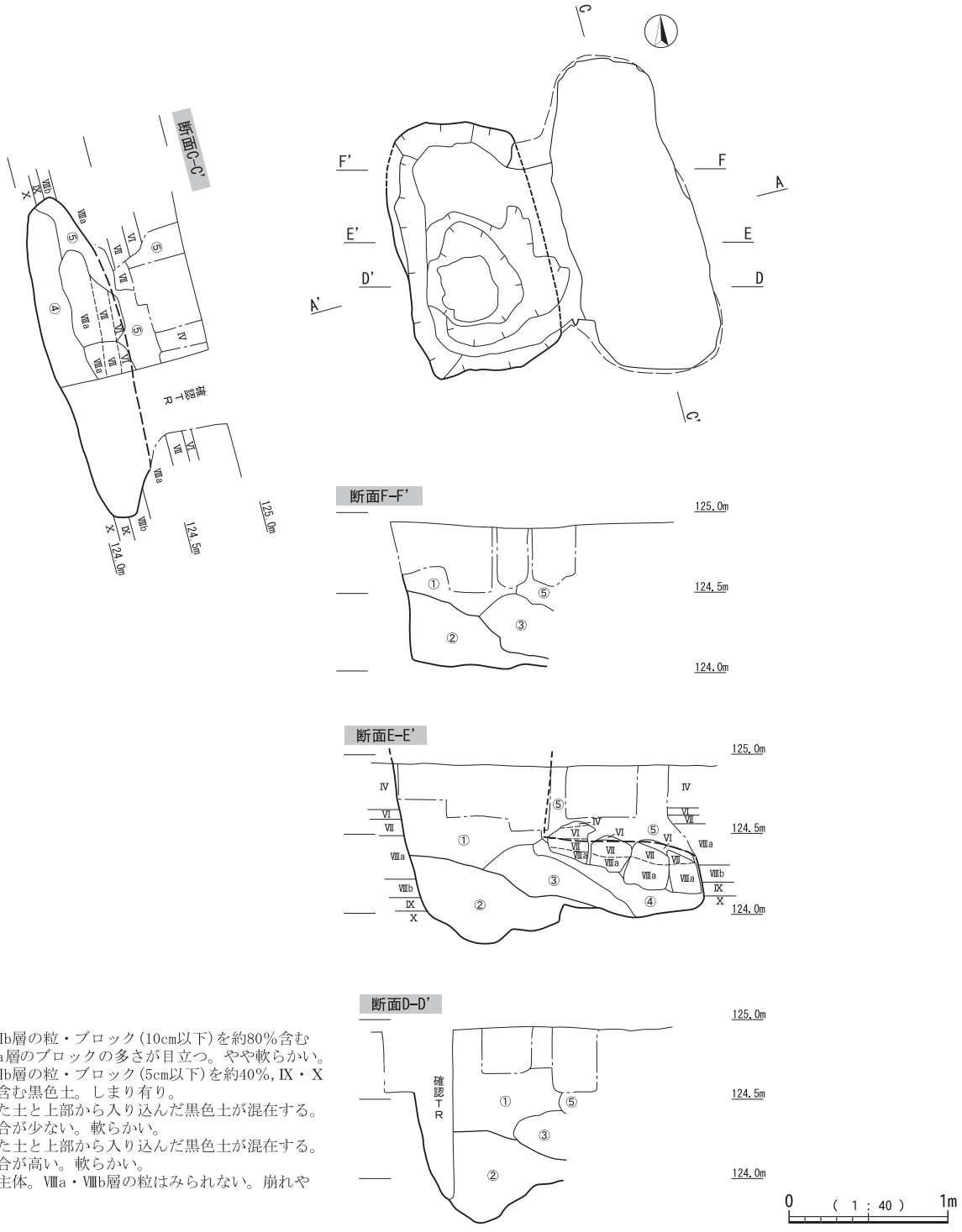
	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	88	160	96	118	－	21	90	208	111	－
推定	105	170	125	－	55	55	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概要	【竪坑】 右側の床面が羨道・玄室に対して一段深くなる。埋土①はほぼⅦ・Ⅷ層が主体である。埋土②はⅦ・Ⅷ層とⅨ・X層が混在しており，しまりがある。玄室はⅧa～X層を掘削して構築されていることから，埋土②は玄室を掘削した際の排出土で，この上面は閉塞時の床面と考えられる。羨道前に，竪坑の埋土が崩落した軟らかい土が入り込んでいる部分があった。 【玄室】 右側の羨道との境には，明瞭な稜がつく。玄室の埋土の堆積状況をみると，羨道前の埋土③の下面はほぼ同じ高さである。また，崩落ブロックから，玄室から羨道にかけてはⅧ層が天井であったと考えられる。
工具痕	竪坑側面は下方向，玄室側面には奥方向に削った痕が残る。 アは幅5.7㎝の方形である。イはV字状を呈する。また，天井が崩落したブロックからも，同じくV字状の工具痕がみられた。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人骨	頭蓋骨片が少量と，体部分と思われる箇所に骨粉が遺存している。成人であると推定された。性別は不明である。
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	鉄鏃１点（無茎大型鏃１点）が出土した。
備考	－



第168図　66号地下式横穴墓(1)



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒色土。Ⅷa層のブロックの多さが目立つ。やや軟らかい。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約40%,Ⅸ・Ⅹ層を約30%含む黒色土。しまり有り。
③ ①が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。黒色土の割合が少ない。軟らかい。
④ ①が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。黒色土の割合が高い。軟らかい。
⑤ Ⅳ・Ⅵ層が主体。Ⅷa・Ⅷb層の粒はみられない。崩れやすい。

第169図　66号地下式横穴墓(2)

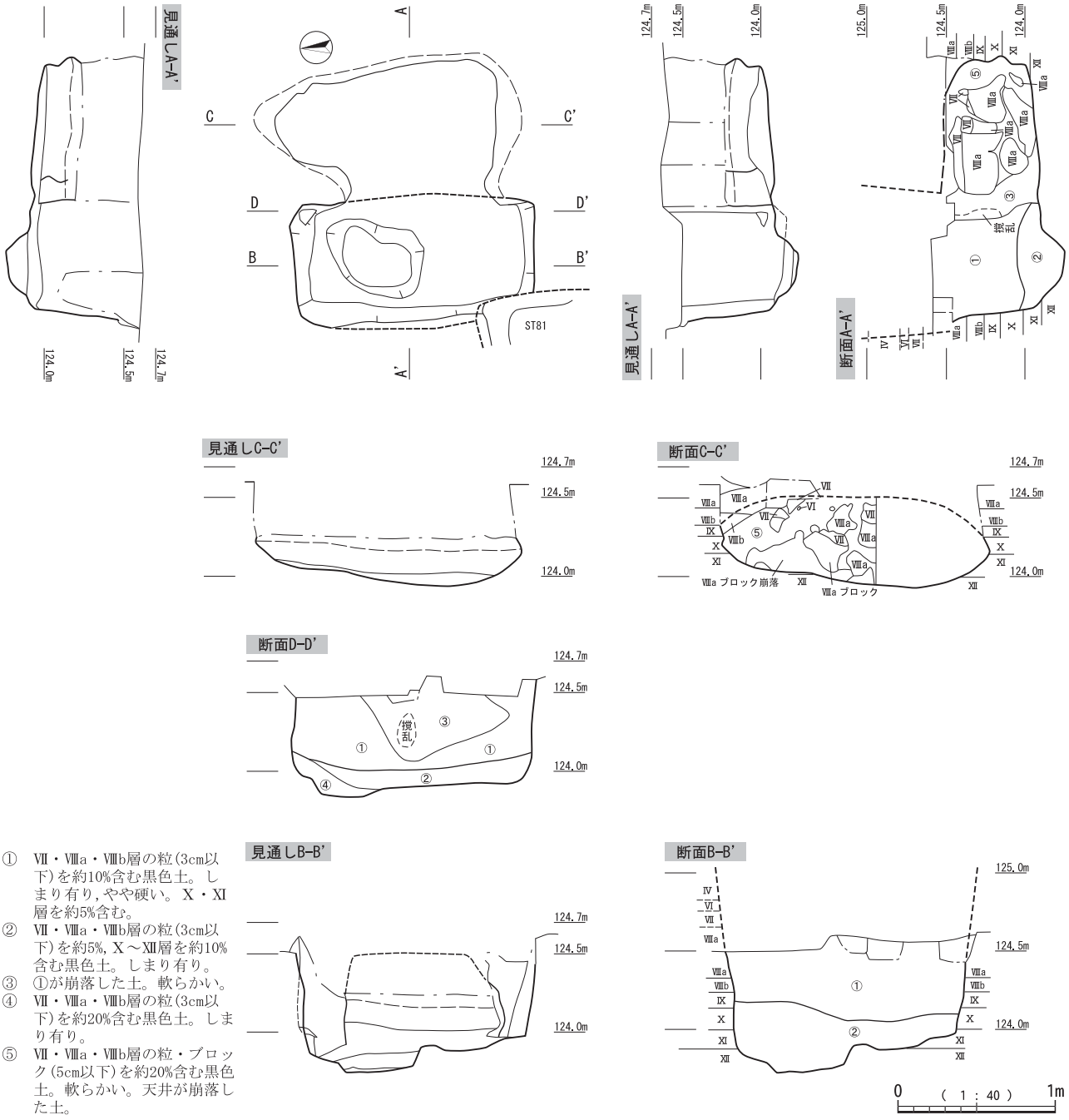
８０号地下式横穴墓	検出区	I-38	玄室開口方向	東
	分　類	A		

検出状態	トレンチャーによる攪乱を取り除いた結果，方形の竪坑と羨道上部を検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	86	152	84	100	－	22	72	168	94	－
推　定	95	115	130	－	60	－	－	－	－	60

竪坑最下層	Ⅻ	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	逆台形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅻ	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 平面形は比較的形状の整った長方形を呈しており，床面の左側が一段低くなっている。埋土のほとんどが黒色土であり，他の墓と異なりしまりが強い。玄室を含めⅧ～Ⅻ層を掘削しているが，埋土中にはほとんど含まれていない。そのため，排出土のほとんどが地表に残されたと考えられる。81 号墓に竪坑床面の一部が切られているため，80 号墓の方が先に造られていたと推定される。 【玄室】 平面形は左側に偏る片袖状を呈し，右側はほぼ直線的である。玄室に入り込んだ埋土の上に，天井が崩落していた。
工具痕	未検出
赤色顔料	玄室埋土から非パイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	玄室埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り,やや硬い。Ⅹ・Ⅺ層を約5%含む。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%,Ⅹ～Ⅻ層を約10%含む黒色土。しまり有り。
③ ①が崩落した土。軟らかい。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。しまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒色土。軟らかい。天井が崩落した土。

第170図　80号地下式横穴墓

８１号地下式横穴墓

検出区	I-38	玄室開口方向	東
分　類	Ｂ２		

検出状態	80 号墓の竪坑を調査中に検出した。天井は調査中に崩落した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	68	130	70	70	－	5	66	117	71	－
推　定	80	130	100	－	30	－	－	－	－	30

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	楕円形？
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X・XI	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 80 号墓の竪坑を切って造られている。竪坑の床面は玄室よりもやや深い。上部のほとんどが攪乱を受けている。埋土①・②は，黒色土でしまりがある。 【玄室】 80 号墓に近接しているが，玄室は切り合っていない。羨門および玄室は右側に偏っており，玄室・羨道との境には明瞭な稜がある。
工具痕	天井左側に幅7.5㎝のものがみられた。形状は不明である。位置は実測していない。天井から崩壊したブロックにも認められたが，天井左側のものと同一か不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

８２号地下式横穴墓

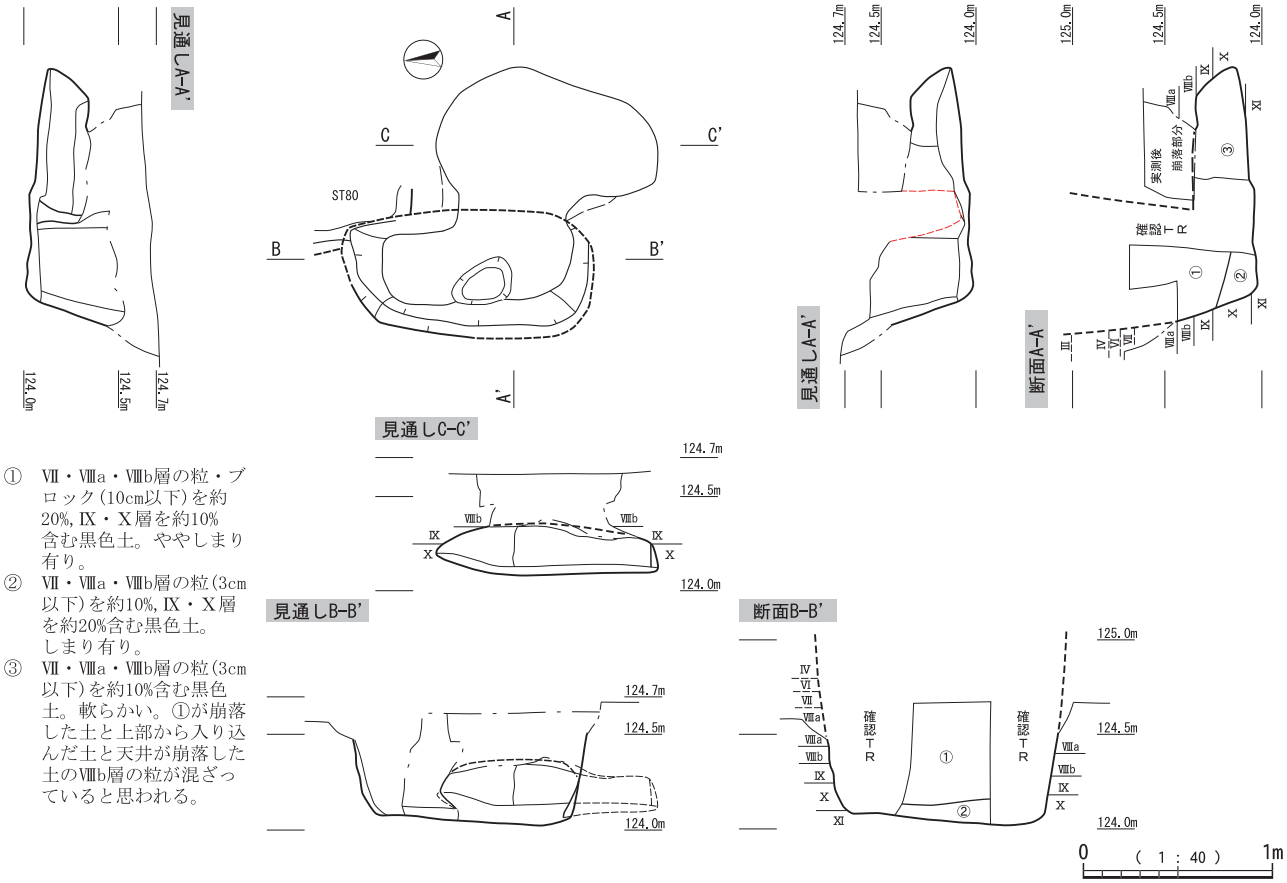
検出区	I-38	玄室開口方向	西南西
分　類	A		

検出状態	トレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。竪坑上部のほとんどは削平されている。天井部分は羨道入口のみ崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	78	132	52	60	－	7	48	120	55	24
推　定	90	135	110	－	30	－	－	－	－	－

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	X	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は羨道・玄室よりも一段深く，竪坑内の左右においても右側がやや深くなる。埋土④の上面はしまりがあり，上部の埋土③とは明瞭に分かれるため，埋土④が閉塞時の床面と考えられる。羨道は横幅60cmしかなく，竪坑幅が同規模の墓と比較してかなり狭い。 【玄室】 竪坑に対し，玄室は小型である。埋土②および埋土①は竪坑側から流れ込んだ土であり，上下に重なるような堆積状況である。X～XI層まで掘り込まれ，小型の墓の中では深い層まで掘削して構築されている。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備　考	－

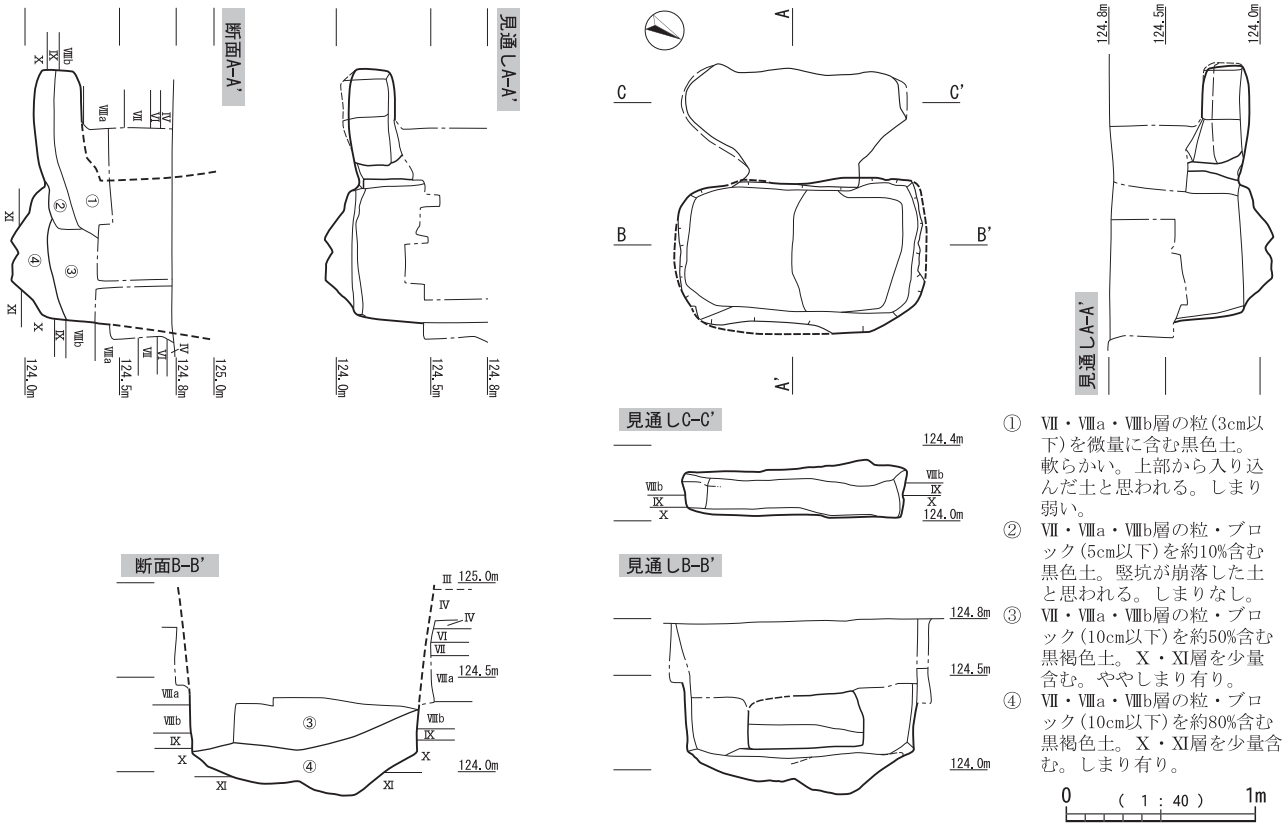


① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約20%,Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。ややしまり有り。

② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%,Ⅸ・Ⅹ層を約20%含む黒色土。しまり有り。

③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。軟らかい。①が崩落した土と上部から入り込んだ土と天井が崩落した土のⅧb層の粒が混ざっていると思われる。

第171図　81号地下式横穴墓



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を微量に含む黒色土。軟らかい。上部から入り込んだ土と思われる。しまり弱い。

② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。竪坑が崩落した土と思われる。しまりなし。

③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒褐色土。Ⅹ・Ⅺ層を少量含む。ややしまり有り。

④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒褐色土。Ⅹ・Ⅺ層を少量含む。しまり有り。

第172図　82号地下式横穴墓

８３号地下式横穴墓

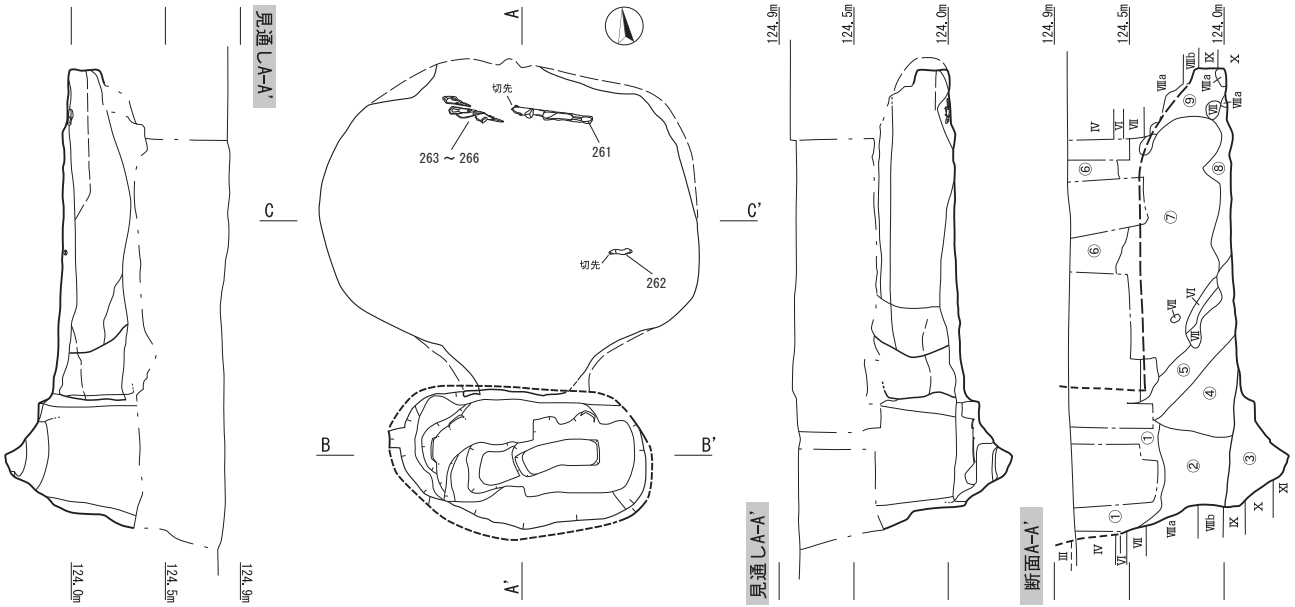
検出区	J-38	玄室開口方向	北
分　類	A		

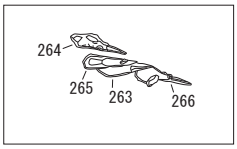
検出状態	わずかに残るⅦ・Ⅷ層の混在する部分周辺の攪乱を取り除いて検出した。玄室は完全に崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	80	140	89	64	－	21	152	200	173	－
推　定	80	－	125	－	50	－	－	－	－	50

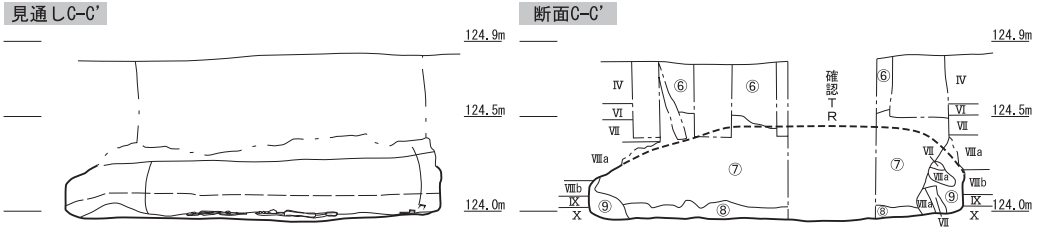
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	方形
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	長方形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

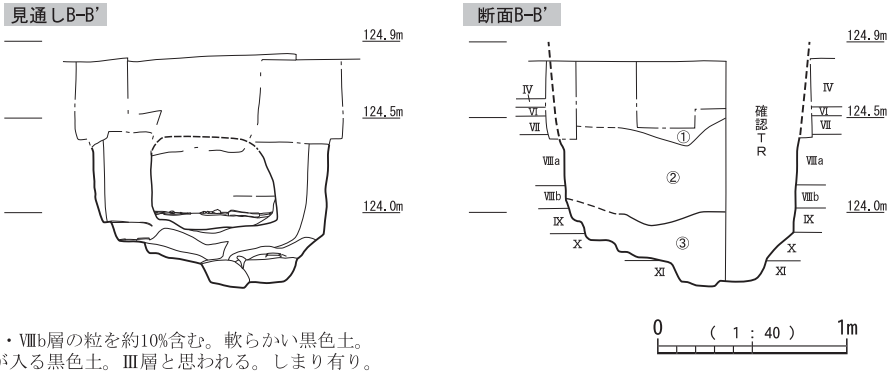
概　要	【竪坑】 竪坑は中心から右側の床面が深くなっており，XI層まで掘削されている。深い部分を埋めるように埋土③が入っている。墓の構築時に掘削された層にはⅧ層が含まれるが，埋土中にはⅧ層の土が少ないことから，その多くは地表に残されたと考えられる。 【玄室】 玄室は竪坑に比べ大きく，Ⅷ層を掘削して構築されている。玄室の面積は広いが，天井の高さは50cmほどしかないと推定される。鉄器が２か所に分かれて出土した。鉄器の先端は全て左側を向いていた。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，刀子１点，鉄鏃４点（圭頭鏃２点，大型柳葉鏃１点，平根系大型鏃１点）が出土した。
備　考	－





鉄器出土状況(1:20)





① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。少量のⅩ・Ⅺ層を含む。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約40%,Ⅸ～Ⅺ層を約30%含む黒色土。しまり有り。
④ ②が崩落した土。軟らかい。
⑤ ②が崩落した土と上部から入り込んだ土が混在する。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒を約10%含む。軟らかい黒色土。
⑥ やや褐色が入る微小な白層の粒が入る黒色土。Ⅲ層と思われる。しまり有り。
⑦ 微小なⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。Ⅲ・Ⅳ層が主体。
⑧ Ⅵ・Ⅶ層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒色土。天井が崩落した土。しまり有り。
⑨ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約20%含む黒色土。天井が崩落した土と黒色土が混ざっている。やや軟らかい。

第173図　83号地下式横穴墓

８４号地下式横穴墓

検出区	J-38	玄室開口方向	北東
分　類	A		

検出状態	遺跡の中でも窪地状の地形に位置する。トレンチャーによる攪乱部分でⅦ・Ⅷ層の土を確認し，掘り下げて検出した。玄室天井は一部崩落がある程度で，ほとんどは残存していた。

	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	62	144	97	82	36	18	76	140	94	－
推定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	40

竪坑最下層	X	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要

【竪坑】
　平面形は長方形であり，右側は角がはっきりしている。床面までほぼ垂直に掘り下げられている。羨道入口の埋土は，床面付近まで軟らかい。羨道の天井は残存していた。

【玄室】
　竪坑と玄室はほぼ同じ大きさで，平面形は隅丸方形を呈する。主軸を中心として左右対称に近い。竪坑・羨道および床面は，ほぼ同じ高さである。

工具痕

玄室天井の，中央から左側にかけて，工具痕がみられた。
アは方形を呈する。幅は不明である。

赤色顔料　未検出

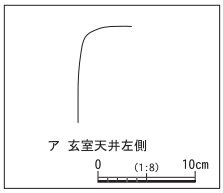
炭化物　竪坑埋土から検出した。

人骨　未検出

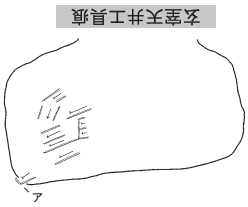
出土遺物

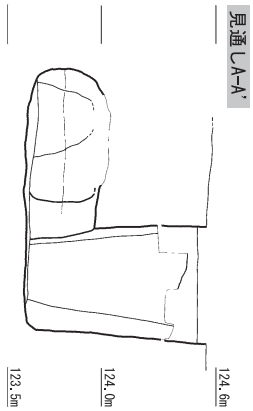
竪坑上面	なし
竪坑埋土内	なし
玄室内	なし

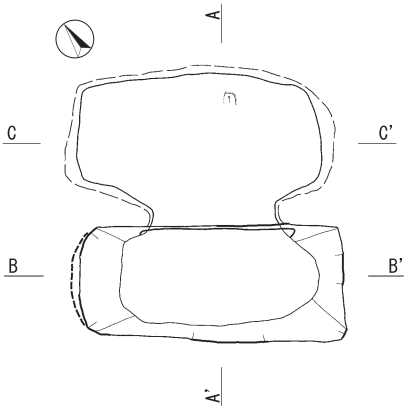
備　考　－

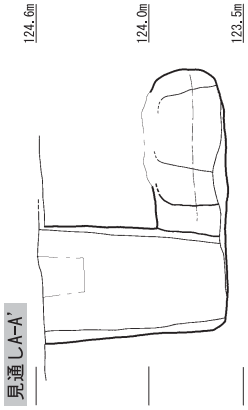


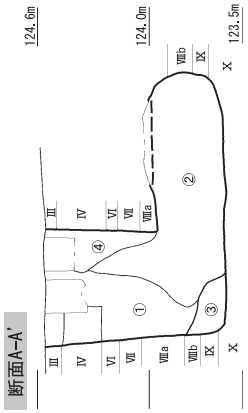
工具痕実測図

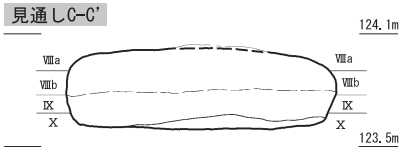










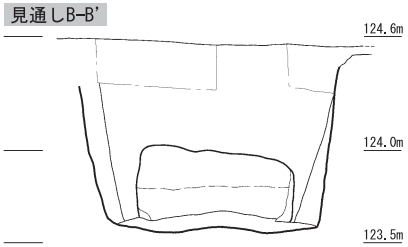


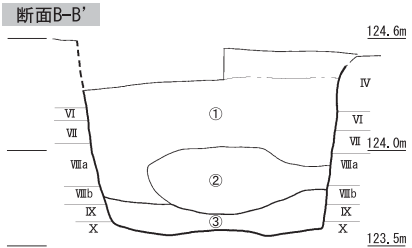
① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む茶褐色土。ややしまり有り。

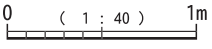
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。軟らかい。①が崩落した土と上部から入り込んだ土が混在する。

③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約30%,Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。しまり有り。

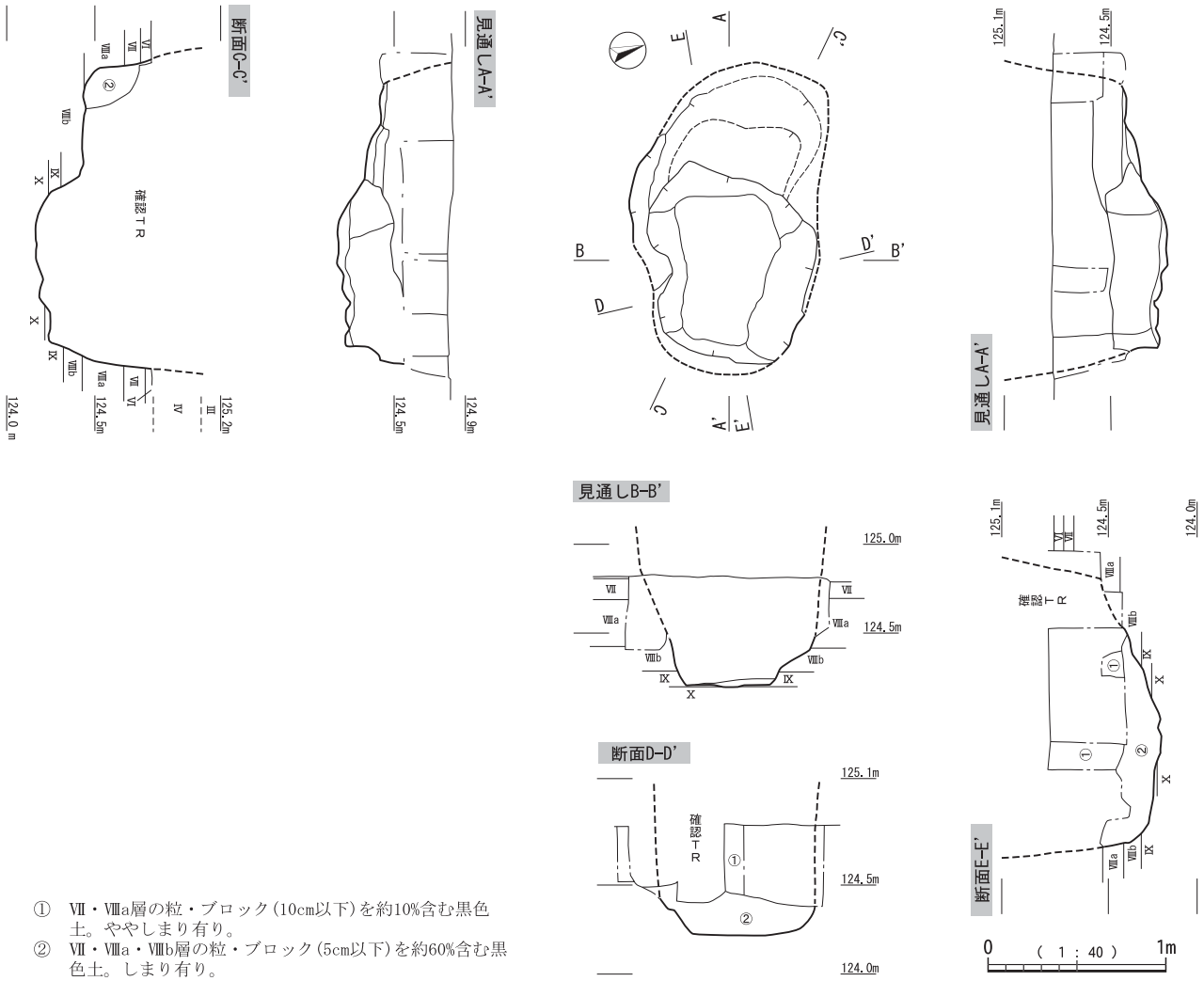
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。軟らかい。上部から入り込んだ土。







第174図　84号地下式横穴墓



① Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約60%含む黒色土。しまり有り。

第175図　３号土坑墓

３号土坑墓(第175図)

Ⅰ－37・38区で検出した。わずかにⅦ・Ⅷ層が混在する部分を確認し，その周辺に広がる攪乱を取り除くことによって検出することができた。埋土が他の地下式横穴墓の竪坑部分と類似していること，底面が段差のある掘り込みになっていることなどから土坑墓と判断した。床面が二段となる形状は，１基のみである。工具痕は攪乱が多いため,確認できなかった。埋土からは赤色顔料(パイプ状ベンガラ）と炭化物を検出した。遺物は出土していない。

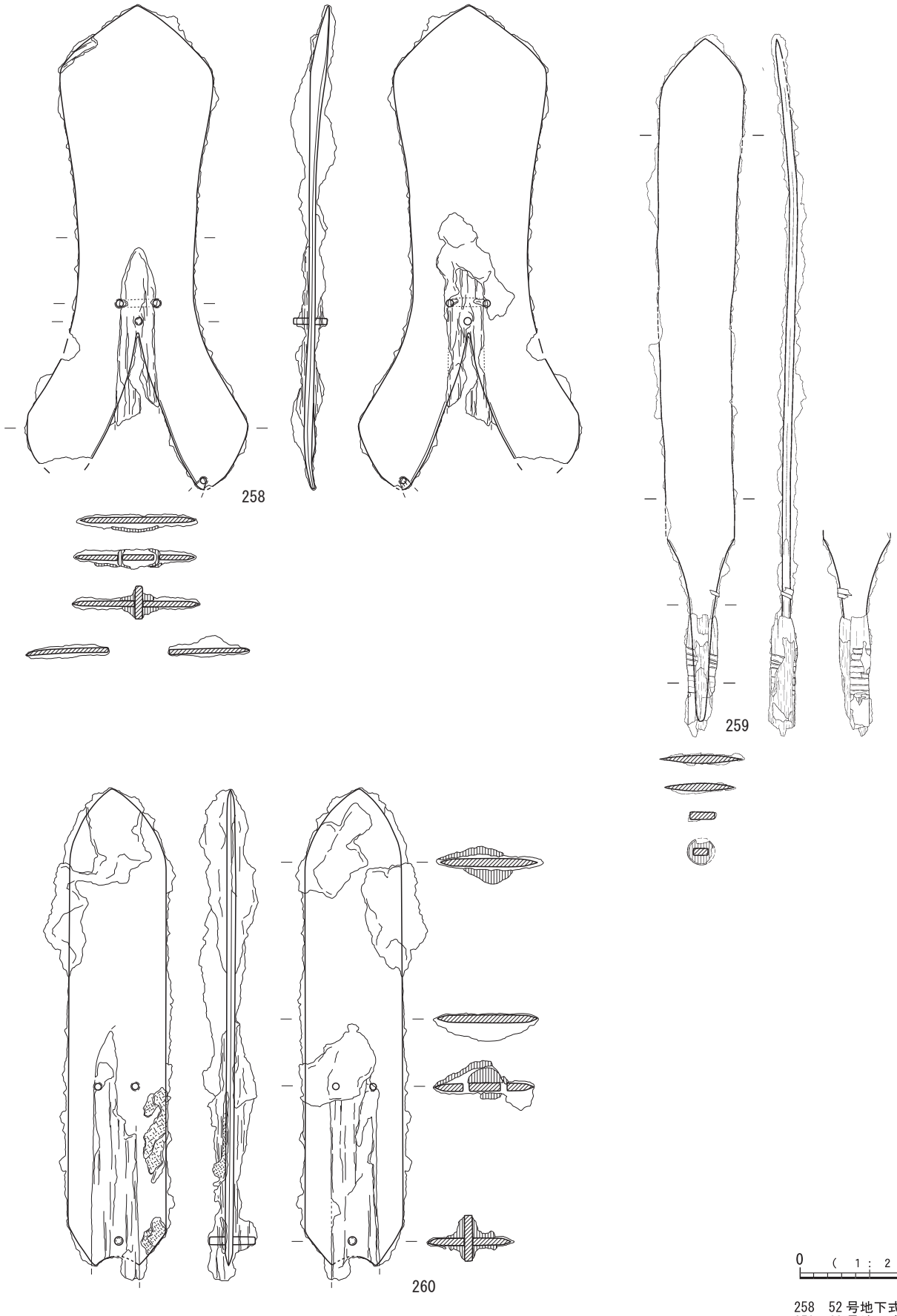
エリア８出土鉄器(第176図・第177図)

52号地下式横穴墓(第176図)

鉄器は258の異形鉄器１点が出土した。先端部は圭頭形を呈し，そこからゆるやかにくびれ足部に至る。足部の内面以外すべて刃部を造っており，断面形は平造りである。根挟み下は逆Ｖ字状を呈しており，やや膨らみながら足部の端部に至る。Ｘ線写真の観察から穿孔が４孔みられる。先端から10.4cm下に根挟みを挟んで２孔，11.1cm下の中心に１孔，足部の端部に１孔施されている。一方の端部は欠損しているため不明だが，同様の穿孔があったと考えられる。上側の２孔は，根挟みに孔の位置に合わせた溝が確認できることから，紐状のものを通して根挟みを固定していたと考えられる。直下の１孔は，長さ1.2cm，直径約２mmの鉄製の目釘状のもので根挟みが固定されている。足部の穿孔は一方が一部欠損するものの，紐状のものを通したと考えられる有機質の痕跡がみられる。顕微鏡での観察から，先端の一部に布と動物性の毛が付着しているのが確認された。副葬時に敷いた，あるいは包んでいたものの痕跡と考えられる。根挟みの残存状態はやや悪いものの，残存した輪郭から先端を三角形に加工していることが確認できる。

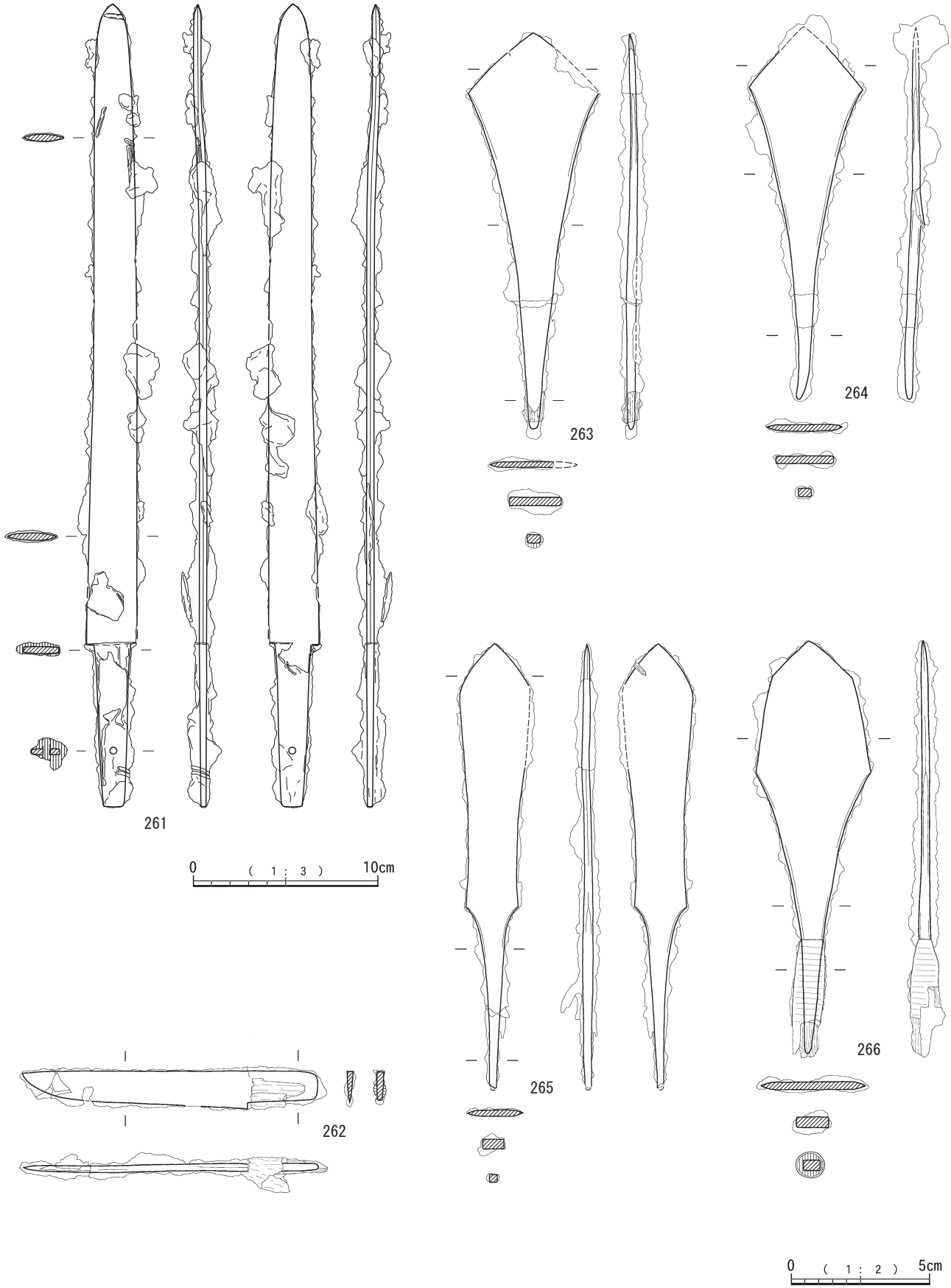
62号地下式横穴墓(第176図)

鉄器は259の大型柳葉鏃１点が出土した。全体的に薄手で，錆による変形がみられる。刃部先端に向かってわずかに広がる形態であり，先端部に最大幅をもつ。刃部



258　52号地下式横穴墓
259　62号地下式横穴墓
260　66号地下式横穴墓

第176図　52号・62号・66号地下式横穴墓出土鉄器



第177図　83号地下式横穴墓出土鉄器

先端はややいびつで，左右非対称である。刃部断面は両丸造りである。関は緩やかなナデ関であり，断面は長方形を呈する。頸部の一部に口巻きを直に巻いた痕跡がみられる。矢柄が残存するものの，やや状態は悪い。

66号地下式横穴墓（第176図）

鉄器は260の無茎大型鏃１点が出土した。先端部はふくらを有し，そこから直線的に端部に伸びる形状である。下端部以外すべて刃部を造っており，断面形は平造りである。Ｘ線写真の観察から，穿孔が３孔確認できる。先端から10.5cm下に根挟みを挟んで２孔，15.9cm下に１孔施されている。上側の２孔は，根挟みに溝は確認できないものの，紐状のものを通して根挟みを固定していたと考えられる。下側の中心の１孔は，鉄製の目釘状のもので根挟みが固定されている。根挟みの残存状態は悪いものの，残存した輪郭から先端を三角形に加工していることが確認できる。根挟みの先端部に被さるように，布と考えられる有機質が付着する。刃部の一部には，二重に重なった布が付着する。顕微鏡観察から，練糸の平織布であることが確認された。

83号地下式横穴墓（第177図）

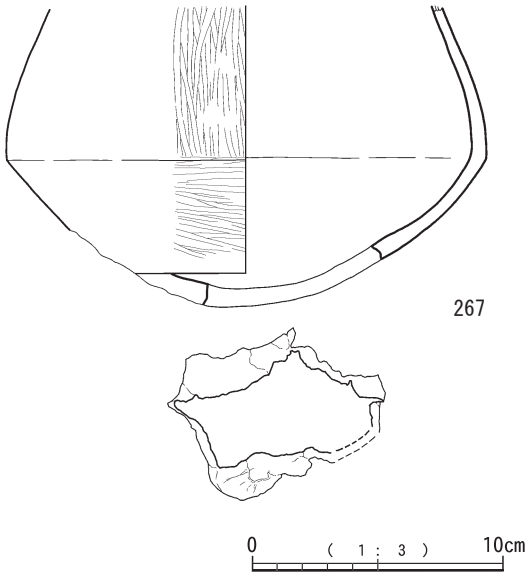
鉄器は鉄剣１点，刀子１点，鉄鏃４点（圭頭鏃２点，大型柳葉鏃１点，大型圭頭鏃１点）が出土した。261は鉄剣である。刃部の上部に錆によるわずかな歪みが生じている。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の一部に有機質が付着するが，木の根のような植物繊維であり，鞘木の木質は確認できない。関部は一方が欠損するものの，深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。柄木の木質が残存しており，状態は悪いものの関部に柄の端部が確認できる。茎部下部には，柄巻の糸巻きが残存する。顕微鏡での観察から，「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」であることが確認された。茎部からはわずかに平織布の痕跡も観察されている。

262は刀子である。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面は平造りを呈する。関部は深さ約2mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅がやや狭くなり，茎断面は台形状を呈する。状態が悪いものの，鹿角製の柄がわずかに残存する。鹿角の下から断面半円形の木質が両面でみられた。柄装着後の固定のための楔と考えられる。

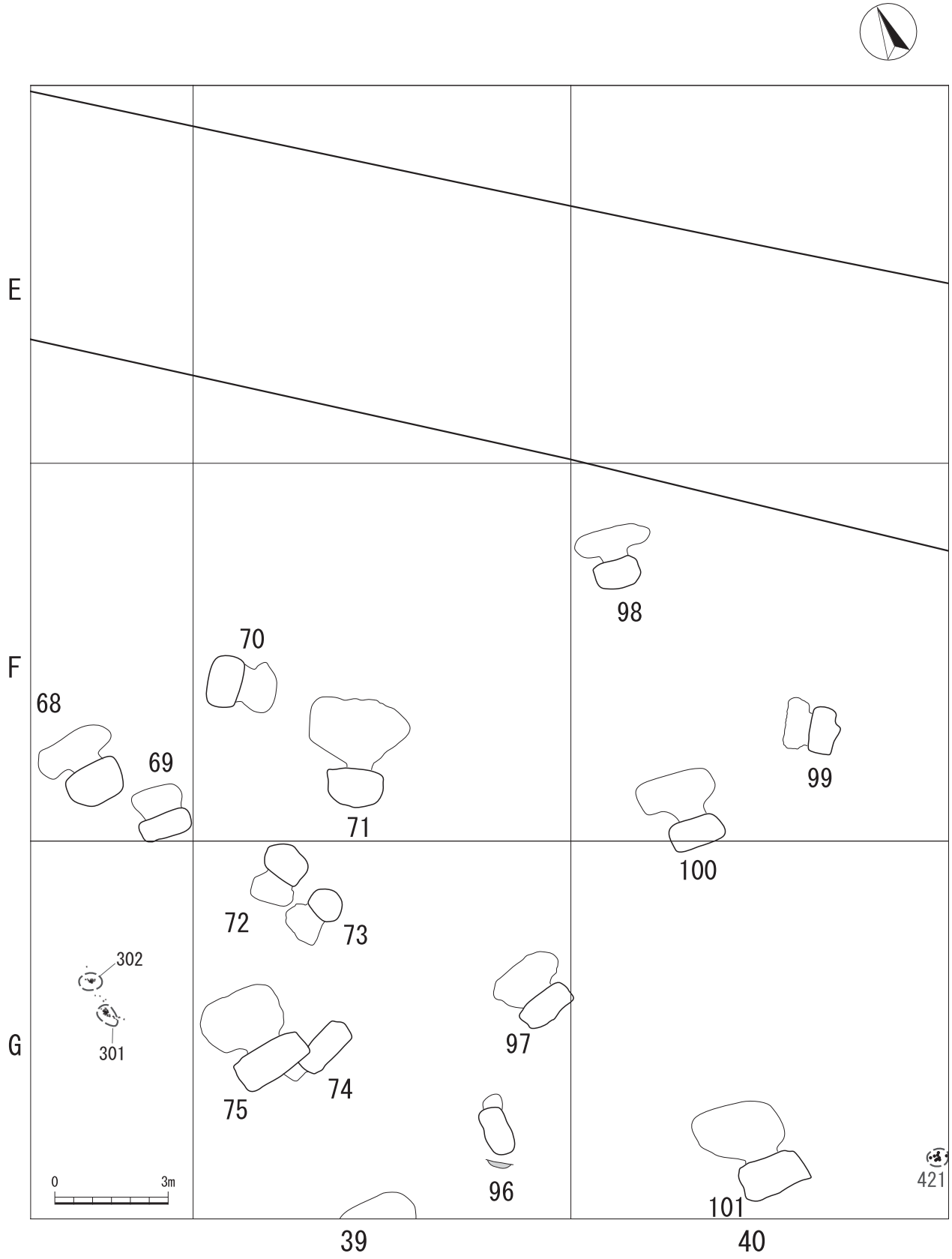
263・264は圭頭鏃Ⅲa類である。どちらも錆化が進行しており，状態が悪い。263は刃部の一部が欠損する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の残存は見られない。264は先端が錆の進行により不明瞭である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の残存は見られない。265は大型柳葉鏃である。先端部はわずかにふくらをもち，ややくびれて関部に至る。切先にイネ科植物らしき植物繊維が付着する。矢柄の残存はみられない。266は大型圭頭鏃である。刃部に角を有する。矢柄が残存するもののやや状態は悪く，口巻きの単位は不明瞭である。

エリア８出土土器（第178図）

267は大型の坩の胴部だと思われる。胴部最大径は18.9cmで，弱い稜線を有する。外面は，胴部最大径から上は縦方向，下は横方向のミガキ調整が丁寧にされている。底部には煤が付着しており，なんらかの用途で火を受けたことがわかる。被熱によって状態が脆くなっている。



第178図　エリア８出土土器



第179図　エリア９　遺構配置図

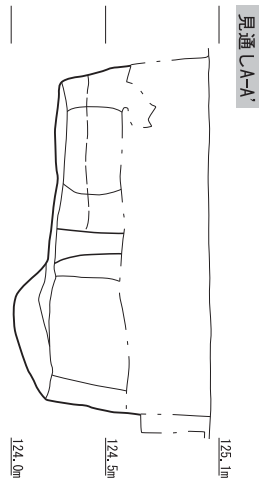
70号地下式横穴墓	検出区	F-39	玄室開口方向	東南東
	分　類	A		

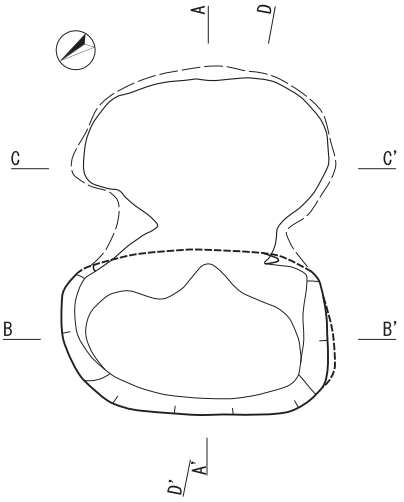
検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺の攪乱を取り除いて検出した。

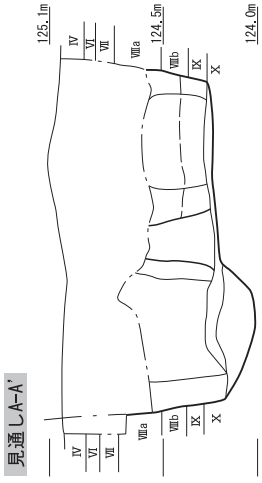
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	88	140	98	96	－	21	88	138	109	－
推　定	100	150	115	－	40	－	－	－	－	40

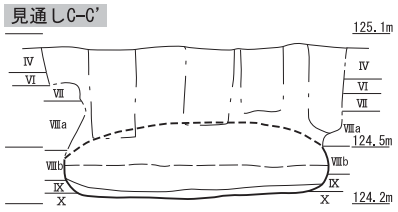
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

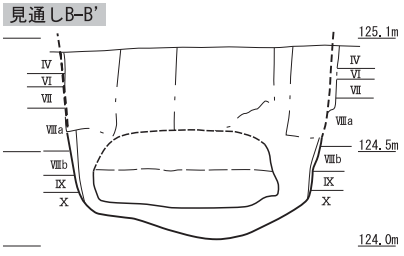
概　要	【竪坑】 床面は羨道・玄室よりも一段深くなっている。玄室を含め，主にⅦ・Ⅷ層に構築されているが，埋土内にはそれらの層の土は少量しか含まれないことから，ほとんどが地表に残されたと考えられる。 【玄室】 平面形は左側がやや不整形な楕円形を呈する。内部に崩落したブロックがみられることから，天井面はⅧa層と考えられる。横幅は，竪坑とほぼ同じである。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

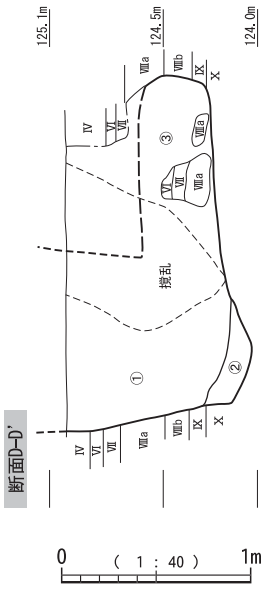












① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。ほぼ均一にⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒が混じる。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%, X層を約10%含む黒色土。ややしまり有り。①よりⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒が多い。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(20cm 以下)を含む黒色土。軟らかくしまりなし。天井が崩落した土。

第180図　70号地下式横穴墓

71号地下式横穴墓

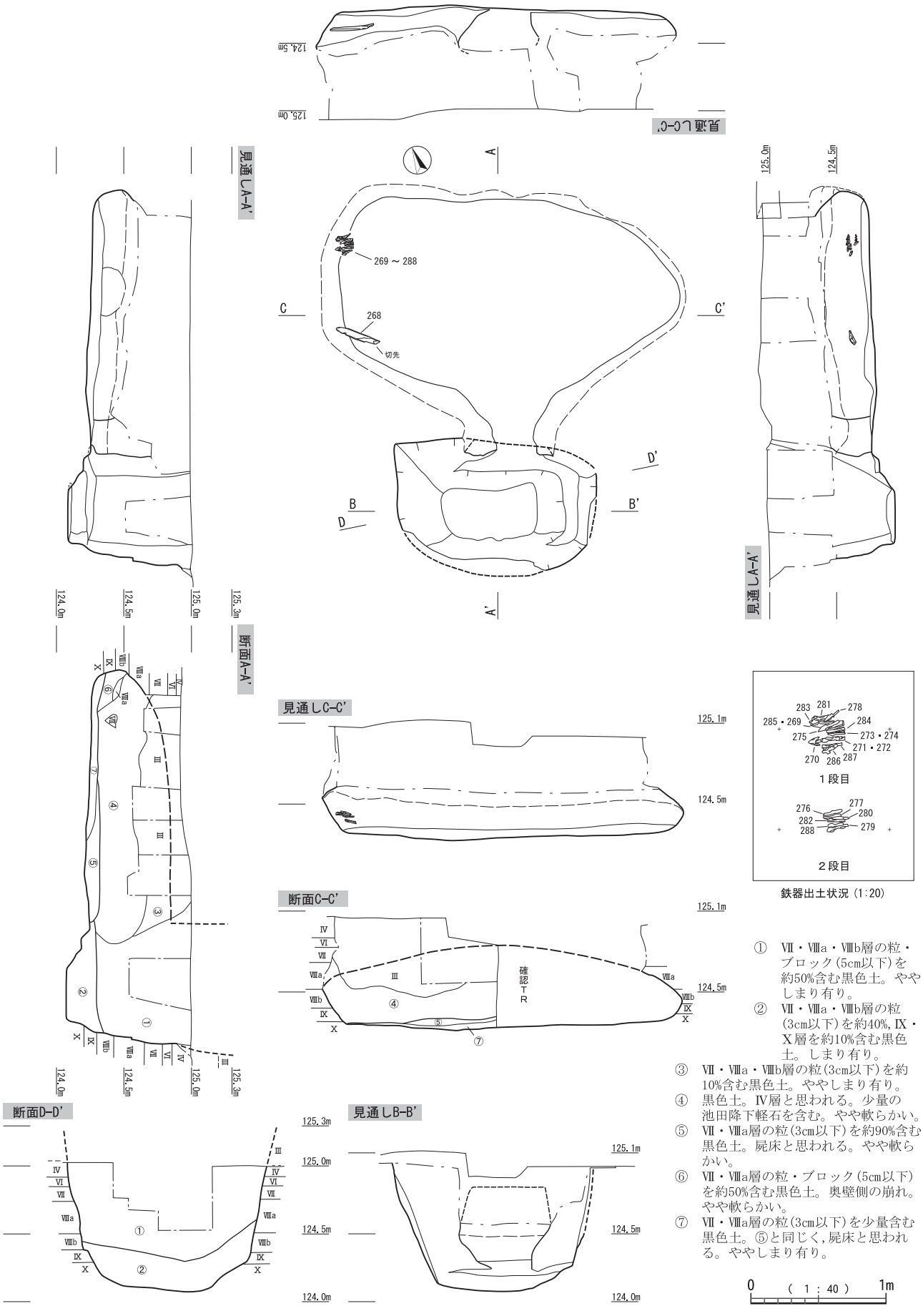
検出区	F-39	玄室開口方向	北北東
分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺のトレンチャーによる攪乱を取り除いて検出した。玄室の天井は崩落しており，玄室内に入っていた黒色土にはしまりがみられなかった。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	100	146	83	64	－	26	170	266	196	－
推　定	100	150	120	－	60	－	－	－	－	60

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 上半部は削平されているが，残存する部分から平面は隅丸長方形と考えられる。竪坑の床面は羨道・玄室に比べて一段深くなっており，その部分を埋めるように埋土②が堆積している。 【玄室】 玄室はⅦ・Ⅷ層を掘削して構築されており，竪坑と比較して極めて大きいため，搬出された土の大半が地表に残されたと推定される。竪坑横幅の半分程度の幅の明瞭な羨門を有する。埋土④の観察により，天井はⅣ及びⅥ層付近と推定される。埋土断面を観察した結果，床面には屍床が造られていた可能性が高い。鉄鏃束の先端はほぼそろって出土した。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	短剣１点，鉄鏃 20 点（短頸鏃 10 点，二段腸抉柳葉鏃１点，圭頭鏃６点，柳葉鏃１点，短茎鏃２点）が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約40%, Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
④ 黒色土。Ⅳ層と思われる。少量の池田降下軽石を含む。やや軟らかい。
⑤ Ⅶ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を約90%含む黒色土。屍床と思われる。やや軟らかい。
⑥ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒色土。奥壁側の崩れ。やや軟らかい。
⑦ Ⅶ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。⑤と同じく,屍床と思われる。ややしまり有り。

第181図　71号地下式横穴墓

72号地下式横穴墓

検出区	G-39	玄室開口方向	西南西
分　類	B２		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺の攪乱を取り除いて検出した。Ⅷa層より上位はほとんど攪乱を受けていた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	85	120	50	80	－	11	64	114	75	－
推　定	90	125	110	－	55	－	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	不明	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形（やや不整形）		
玄室床面層	X	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 横軸１ｍ程度しかなく，小型である。埋土②はしまりがあり，閉塞時の床面と考えられる。玄室ともに他の墓と比較し，縦軸と横軸の比が小さい。 【玄室】 横軸は竪坑に対して右奥に傾く。規模は竪坑よりやや小さい。内部は竪坑から流れ込んだ埋土と天井崩落によるブロック・土で占められていた。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

73号地下式横穴墓

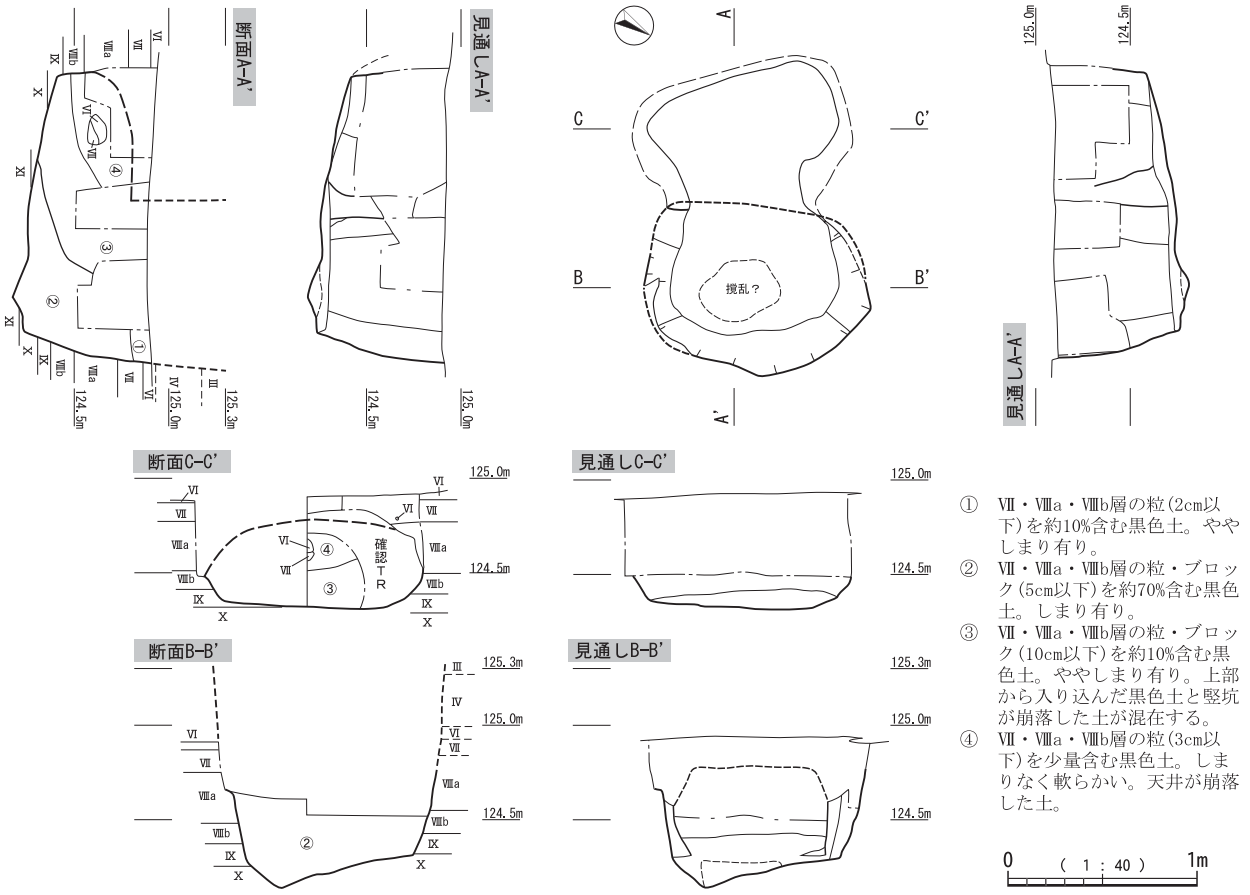
検出区	G-39	玄室開口方向	西
分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺の攪乱を取り除いて検出した。Ⅷa層より上位は攪乱を受けているが，玄室天井の攪乱は一部にとどまる。72号墓と同時に検出した。

	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	75	91	70	64	44	10	68	110	78	28
推定	85	100	90	－	－	－	－	－	－	－

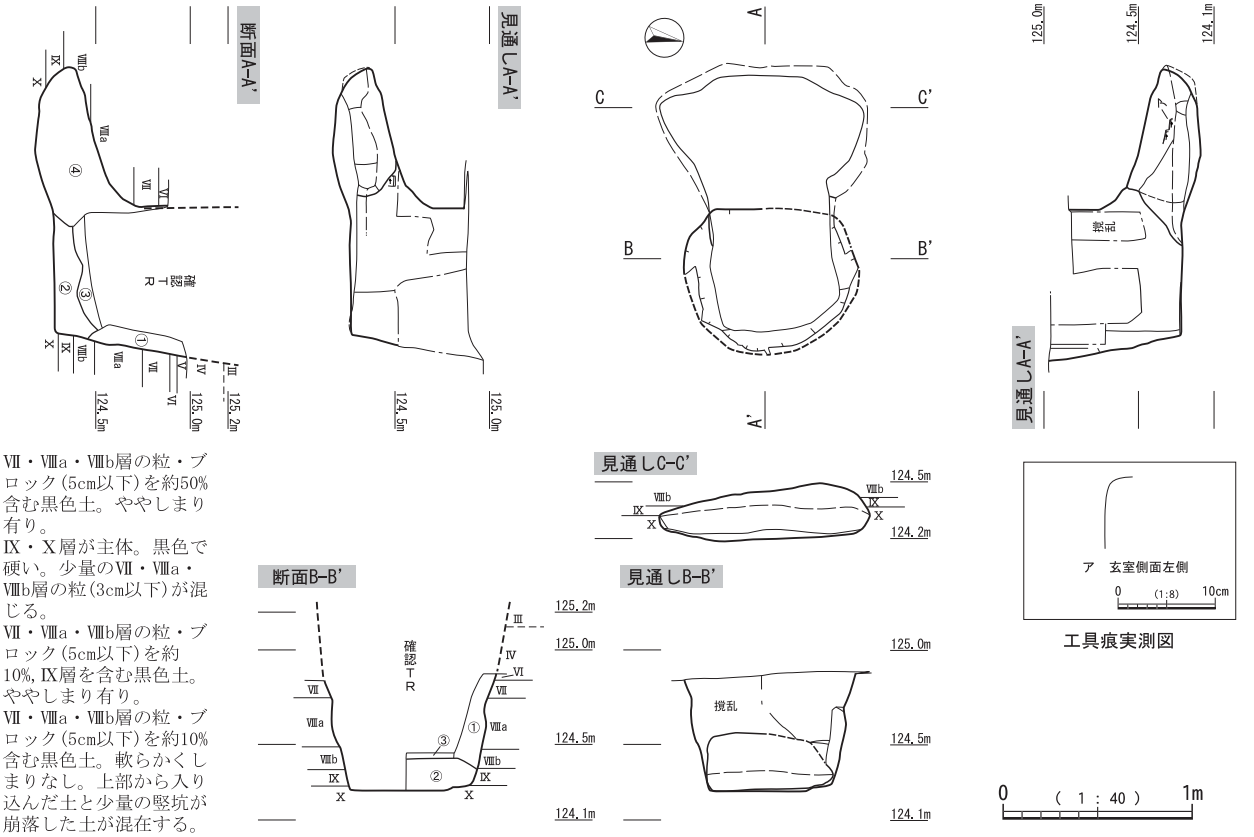
竪坑最下層	X	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 竪坑・玄室とも小型である。竪坑床面はほぼ平坦である。床面近くの埋土②は，Ⅸ・X層を主体としてⅧ層を含む。玄室はⅧ～X層を掘削して構築されていることから，埋土②は玄室を掘削した排出土であり，この上面が閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 床面は竪坑より深く，左側面は玄室と羨道の稜がみられず，直線状となる。竪坑と玄室の大きさに，さほど差がみられない。平面形は断面C軸が最も幅広くなる不整形である。
工具痕	玄室側面にみられ，アは方形を呈する。明確な幅は不明であるが，位置や重なりなどから５㎝以下と推測される。
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約70%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。上部から入り込んだ黒色土と竪坑が崩落した土が混在する。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。しまりなく軟らかい。天井が崩落した土。

第182図　72号地下式横穴墓



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅸ・Ⅹ層が主体。黒色で硬い。少量のⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)が混じる。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%,Ⅸ層を含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。軟らかくしまりなし。上部から入り込んだ土と少量の竪坑が崩落した土が混在する。

工具痕実測図

第183図　73号地下式横穴墓

74号地下式横穴墓

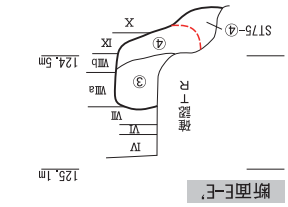
検出区	G-39	玄室開口方向	西南西
分　類	D		

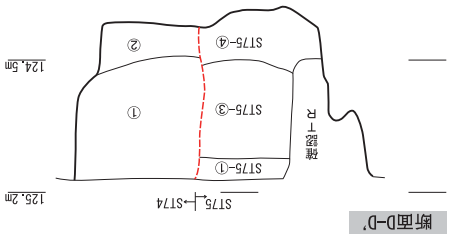
検出状態	75号墓の調査中に検出した。玄室および羨道部分の右側は75号墓と切りあっていたため，平面プランが極めて不明瞭であった。

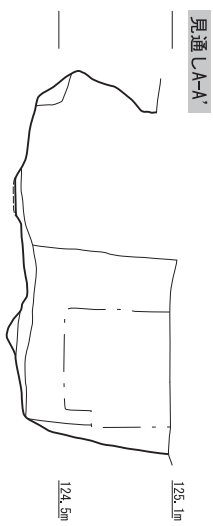
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	160	70	80	36	－	－	46	46	40	－
推　定	－	－	90	－	45	－	－	－	－	40

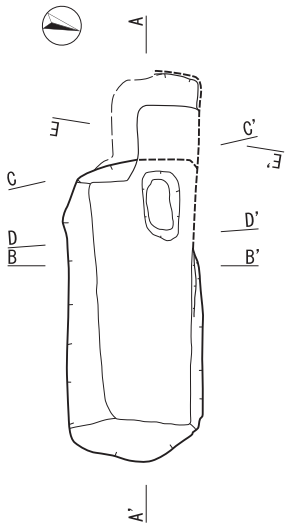
竪坑最下層	X	竪坑平面形	長方形（縦長）	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	方形		
玄室床面層	Ⅸ	玄室断面形	方形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし （右側は不明）	竪坑掘り返し痕	なし

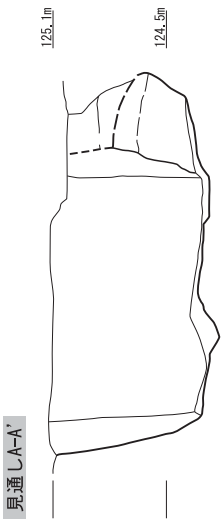
概　要	【竪坑】 墓域でもほとんど例のない縦長の竪坑である。断面Dの観察により，75号墓より後に造られていることが判明した。羨門前の床面にやや凹みがみられる。 【玄室】 竪坑の大きさに対し，玄室は非常に小型である。また，明確な羨道をもたない。竪坑短軸側に75号墓の竪坑と切り合って玄室が造られている。羨門前の上部と玄室の埋土は軟らかい。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

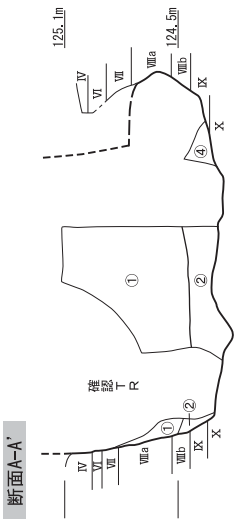


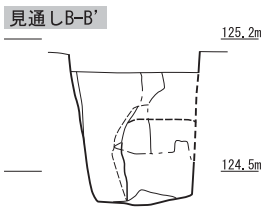


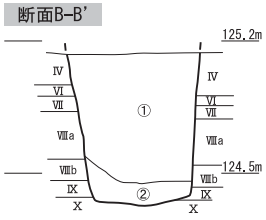




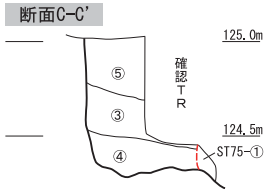


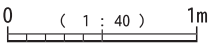






① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約60%含む黒色土。しまり有り。黒色強く,Ⅷb層の粒が多い。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒　(1cm以下)を約10%含む黒色土。やや軟らかい。





第184図　74号地下式横穴墓

75号地下式横穴墓

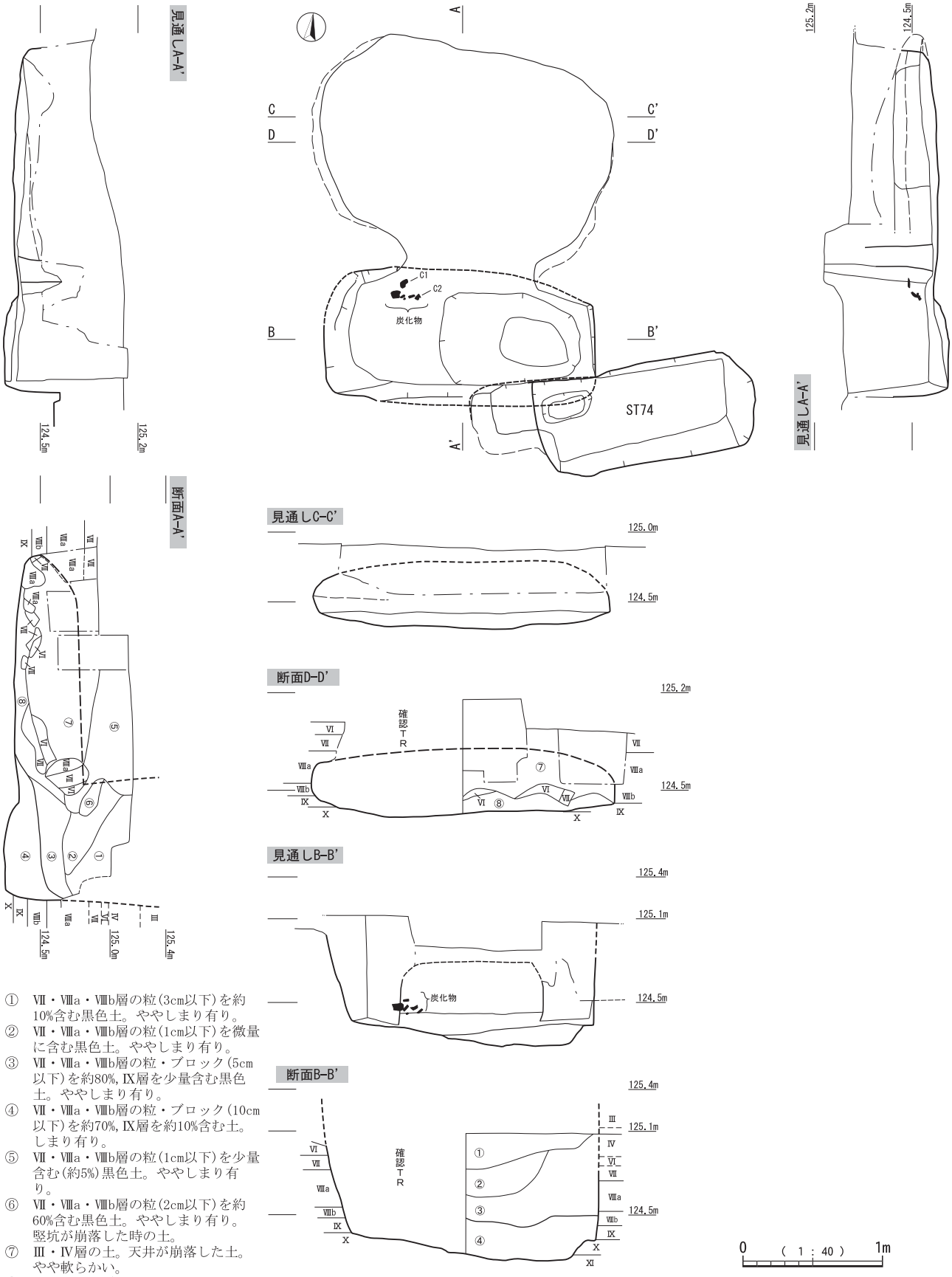
検出区	G-39	玄室開口方向	北
分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺の攪乱を取り除いて検出した。Ⅷa層より上位のほとんどに攪乱を受けている。玄室天井は崩落し，土塊が玄室内に多くみられた。74 号墓と切りあっていたため，平面プランが不明瞭であった。

	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	95	195	90	103	－	19	146	218	165	－
推定	－	200	110	－	50	－	－	－	－	45

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形？	羨門正面形	長方形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形（楕円形に近い）		
玄室床面層	IX	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概要	【竪坑】 74 号墓に右背面の一部を切られている。横幅は２ｍ，縦幅は１ｍ近くあり大型である。竪坑床面は，羨道・玄室より一段深くなっている。羨門前の左側に炭化物を検出した。埋土中にⅦ・Ⅷ層が多量に含まれており，玄室を構築した際の排出土が含まれていると考えられる。 【玄室】 崩落したブロックから，天井面はⅧ層上面からⅦ層下面と考えられる。縦幅約 1.5 ｍ，横幅 2.2 ｍと大きい玄室をもつが，副葬品は検出されなかった。
工具痕	天井崩壊ブロックに方形の工具痕の一部が観察された。
赤色顔料	未検出
炭化物	羨道付近から検出した。年代測定では 218calAD － 352calAD・136calAD-260calAD，樹種はクスノキと同定された。
人骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約80%,Ⅸ層を少量含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約70%,Ⅸ層を約10%含む土。しまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量含む(約5%)黒色土。ややしまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約60%含む黒色土。ややしまり有り。竪坑が崩落した時の土。
⑦ Ⅲ・Ⅳ層の土。天井が崩落した土。やや軟らかい。
⑧ Ⅶ層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒色土。天井が崩落した土。やや軟らかい。

第185図　75号地下式横穴墓

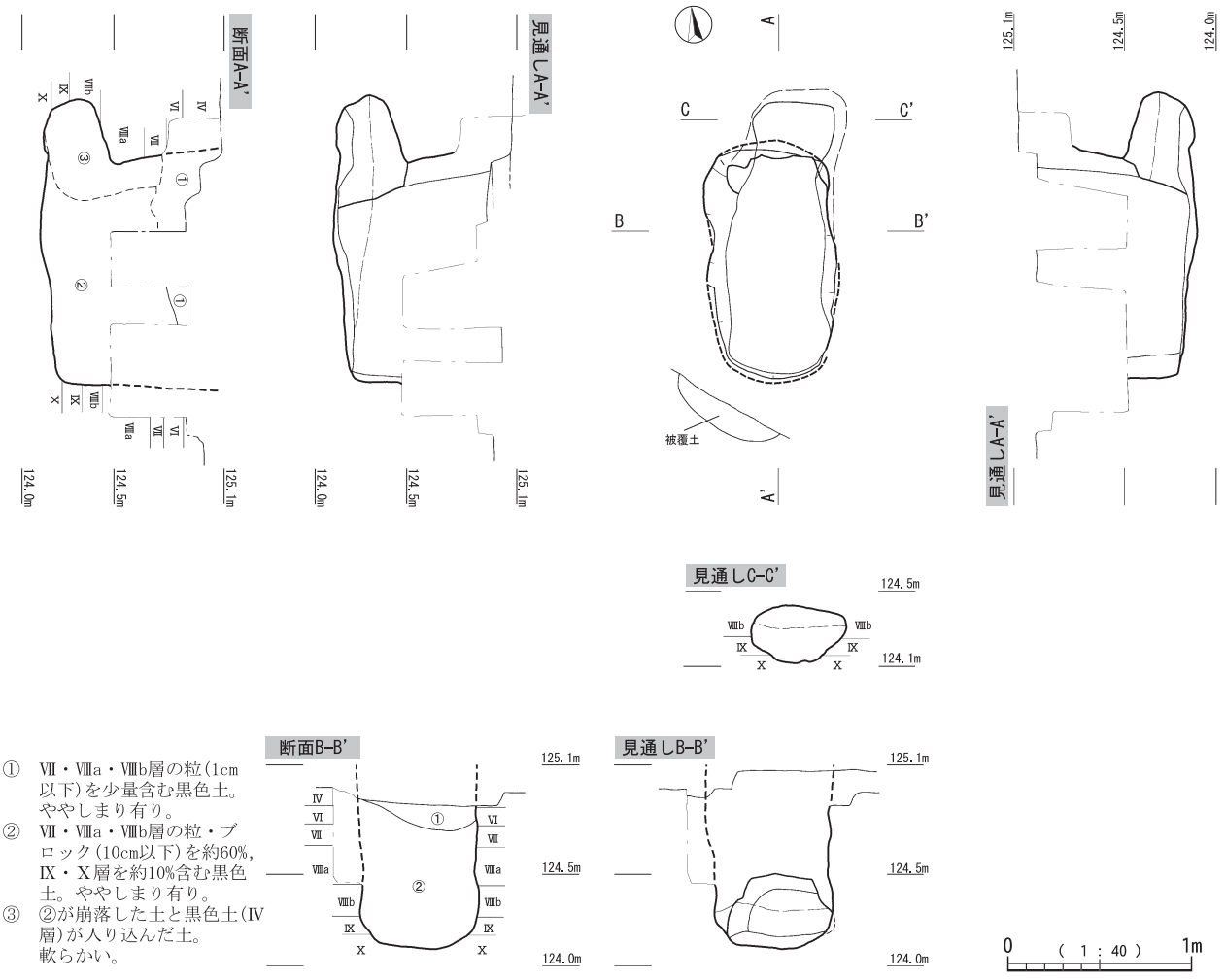
９６号地下式横穴墓	検出区	G-39	玄室開口方向	北
	分　類	D		

検出状態	畑境に検出されたため，周囲の墓と比べて攪乱を受けた部分が少ない。玄室は天井も含め，良好に残存していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	130	72	80	56	37	－	36	52	34	32
推　定	130	65	100	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形（縦長）	羨門正面形	不整形
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb	玄室平面形	隅丸方形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 縦長の隅丸長方形であり，床面は羨道付近から玄室がやや深くなる。埋土①はⅦ・Ⅷ層をほとんど含まず，黒色土を主体とする。 【玄室】 玄室内は 40cm 四方程度の大きさしかなく，乳児程度しか埋葬できないであろう。74・149 号墓と類似する。埋土③は大変軟らかく，竪坑からの流入土と推定できる。床面に屍床はみられない。竪坑短軸に玄室が造られているタイプで，玄室は羨門からやや右方向に造られている。
工具痕	未検出
赤色顔料	竪坑埋土からパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%, Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
③ ②が崩落した土と黒色土(Ⅳ層)が入り込んだ土。軟らかい。

第186図　96号地下式横穴墓

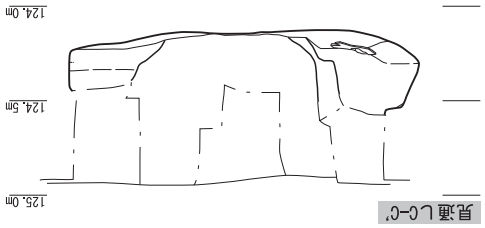
９７号地下式横穴墓	検出区	G-39	玄室開口方向	北
	分　類	A		

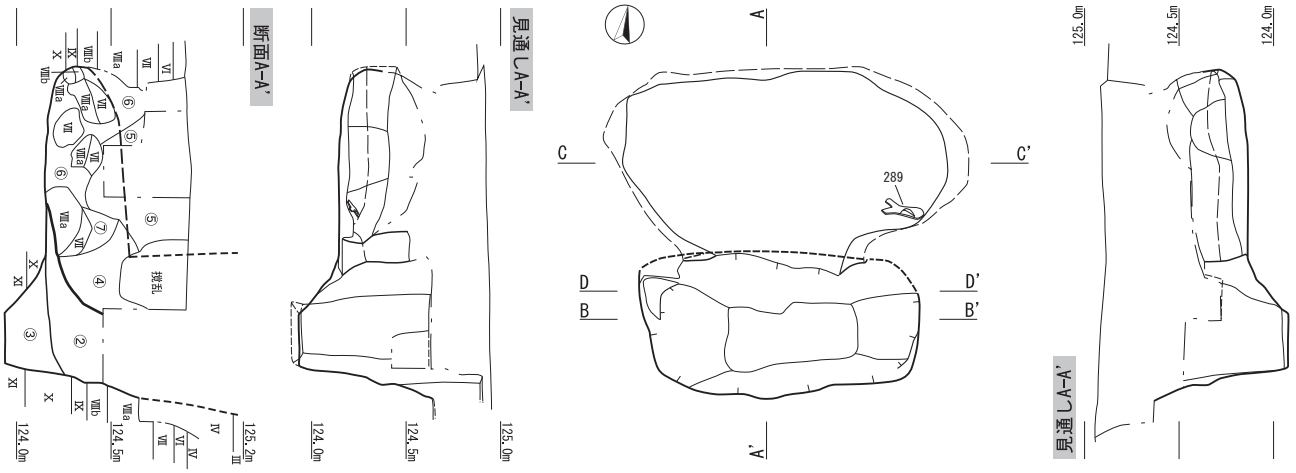
検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺の攪乱を取り除いて検出した。トレンチャーによる攪乱をあまり受けていない。天井は攪乱を受ける前に崩落していた。

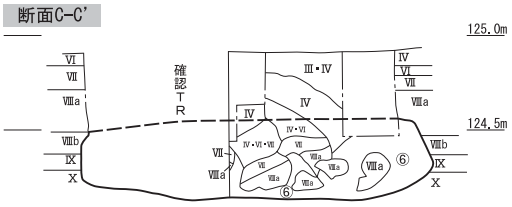
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	77	145	70	98	－	13	86	190	99	－
推　定	85	160	125	－	45	－	－	－	－	40

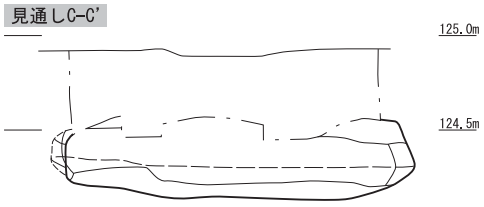
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	楕円形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

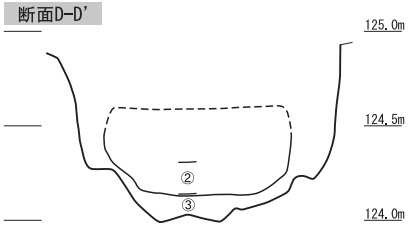
概　要	【竪坑】 上面での大きさに対し，最下面は半分以下である。羨道・玄室に対し，竪坑床面は一段深くなっており，その段を埋めるように埋土③が堆積している。左側に抉り部分があり，断面Ｄでみると埋土②とほぼ同じ高さであるため，この面が閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 天井は完全に崩落しているが，内部に落下しているブロックの観察により，Ⅷa層に比定できる。羨道近くの右側はゆるやかな稜があり，異形鉄器が１点副葬されていた。
工具痕	未検出
赤色顔料	玄室埋土からパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	異形鉄器１点が出土した。
備　考	－

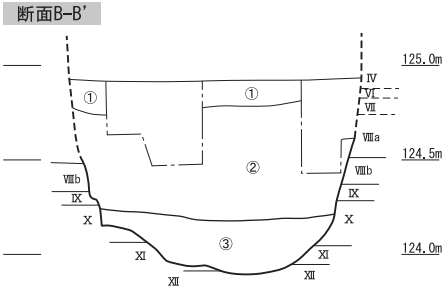


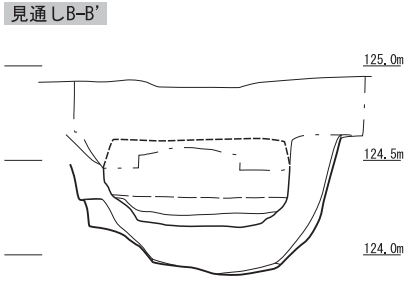












① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)とⅨ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
⑤ Ⅳ層が主体。天井が崩落した土。軟らかい。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。天井が崩落した土。
⑦ Ⅵ層(池田降下軽石)を多く含む黒色土。天井が崩落した土。軟らかい。

0 (1 : 40) 1m

第187図　97号地下式横穴墓

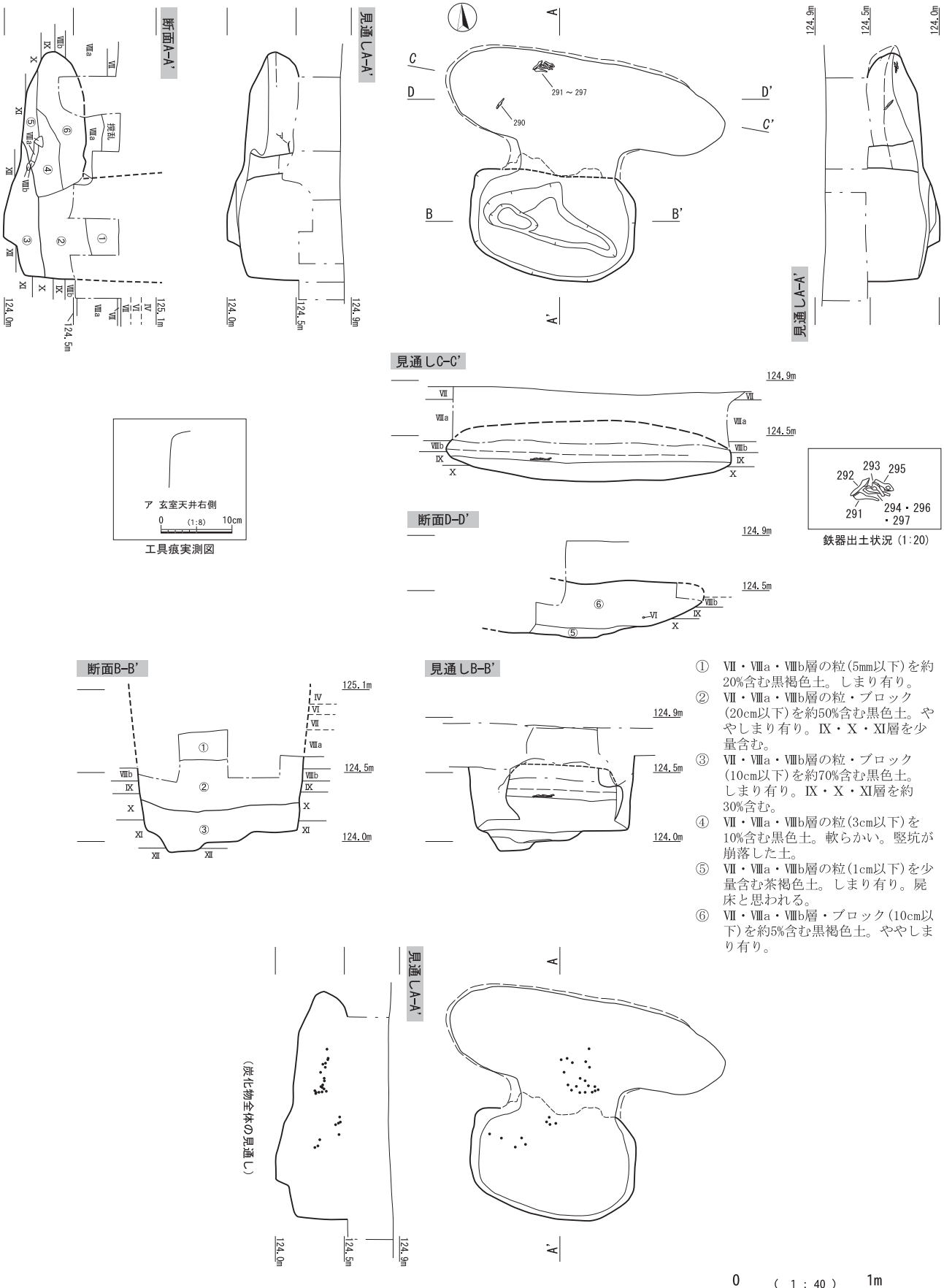
９８号地下式横穴墓	検出区	F-40	玄室開口方向	北
	分　類	Ｂ２		

検出状態	玄室は残存していたが，トレンチャーによる攪乱を受け，天井の一部が削平されている。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	76	120	86	84	48	15	66	206	81	－
推　定	80	135	125	－	－	－	－	－	－	45

竪坑最下層	Ⅻ	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅹ・Ⅺ	玄室断面形	楕円形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は左側が二段深くなっている。この段を含め，床面から堆積する埋土③はしまりが強いことから，この上面が閉塞時の床面と考えられる。また，玄室はⅧ～Ⅹ層を掘削しており，埋土③はほぼ同じであるため，この層は玄室を掘削した際の排出土であると考えられる。 【玄室】 竪坑に比べ，玄室の横幅が長く，羨道との境に稜がみられる。羨道から玄室にかけて細かい炭化物を検出した。鉄鏃は先端がそろっていない。
工具痕	玄室天井右奥でみられた。アは方形を呈し，幅は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	羨道付近から検出した。年代測定では 249calAD-385calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃８点（鳥舌鏃１点，圭頭鏃５点，鉄鏃片２点）が出土した。
備　考	－



第188図　98号地下式横穴墓

９９号地下式横穴墓

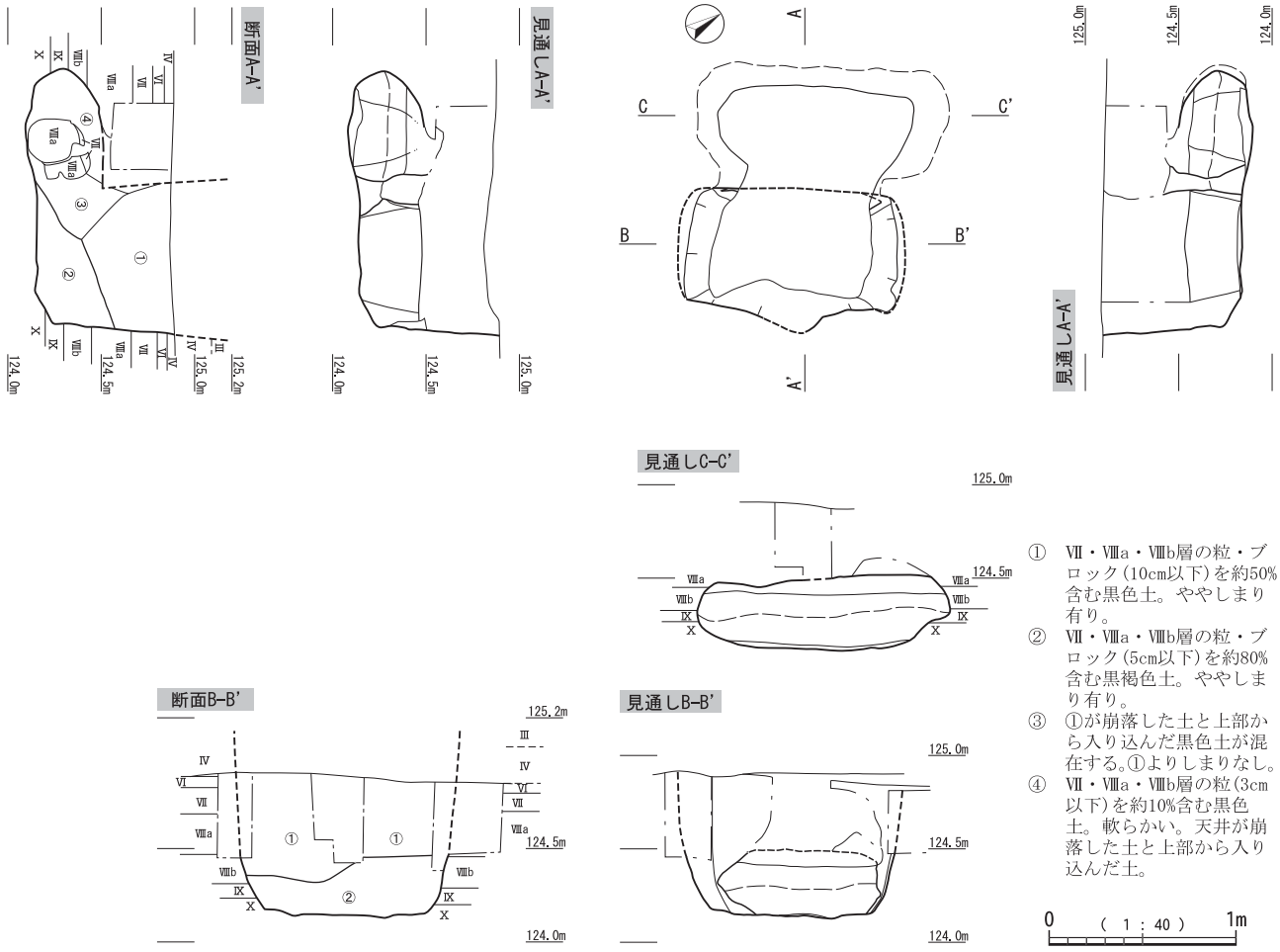
検出区	F-40	玄室開口方向	北西
分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が多量に混在する部分周辺の攪乱を取り除いて検出した。樹痕の影響を受け，玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	76	112	75	84	－	12	56	134	68	38
推　定	85	120	100	－	35	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 横幅が1.2ｍ程度で小型であるが，明瞭な羨道をもつ。埋土②は，Ⅶ・Ⅷ層土を多く含むしまりのある土で，閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 平面形は方形であり，竪坑の平面とほぼ同じ大きさである。床面は中央付近が低くなる。崩落しているブロックの観察から，Ⅷa層が天井面と考えられる。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	羨道付近の埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



第189図　99号地下式横穴墓

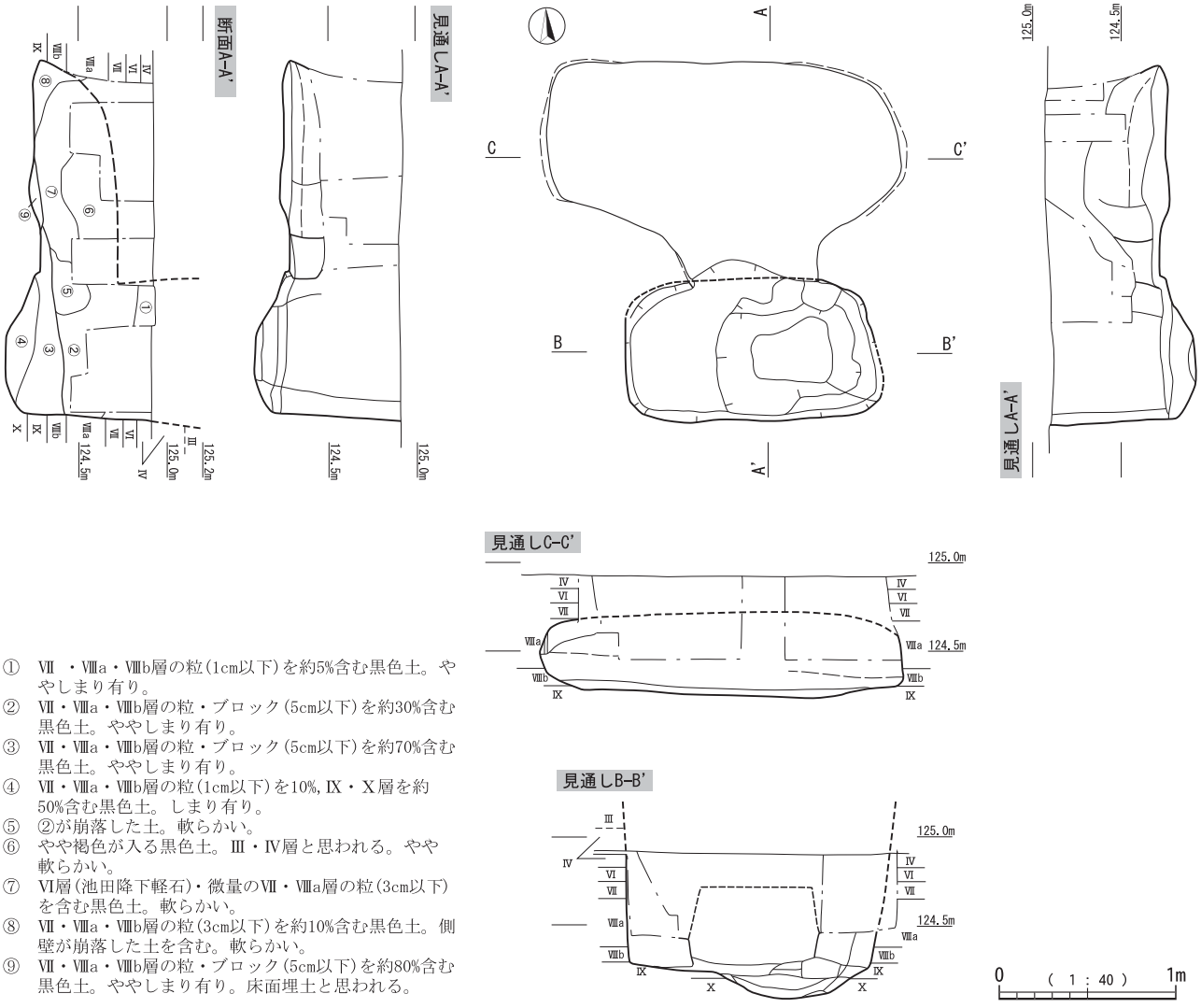
100号地下式横穴墓	検出区	F-40	玄室開口方向	北
	分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が多量に混在する部分を確認し，掘り下げた結果検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	81	142	82	72	－	22	100	208	122	－
推　定	90	155	110	－	50	－	－	－	－	40

竪坑最下層	X	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅸ	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面の右側部分が玄室よりやや深くなる。埋土③は羨道付近まで入っており，しまりがあり硬く，この上面が閉塞時の床面と考えられる。埋土③と④は，玄室構築時に掘削した排出土と推定される。 【玄室】 羨道との境の稜は明瞭である。玄室は竪坑に対して比較的大型である。平面形は左側に偏る片袖状である。天井面は，埋土の観察によりⅥ・Ⅶ層付近と推定される。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約70%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を10%,Ⅸ・Ⅹ層を約50%含む黒色土。しまり有り。
⑤ ②が崩落した土。軟らかい。
⑥ やや褐色が入る黒色土。Ⅲ・Ⅳ層と思われる。やや軟らかい。
⑦ Ⅵ層(池田降下軽石)・微量のⅦ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を含む黒色土。軟らかい。
⑧ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。側壁が崩落した土を含む。軟らかい。
⑨ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約80%含む黒色土。ややしまり有り。床面埋土と思われる。

第190図　100号地下式横穴墓

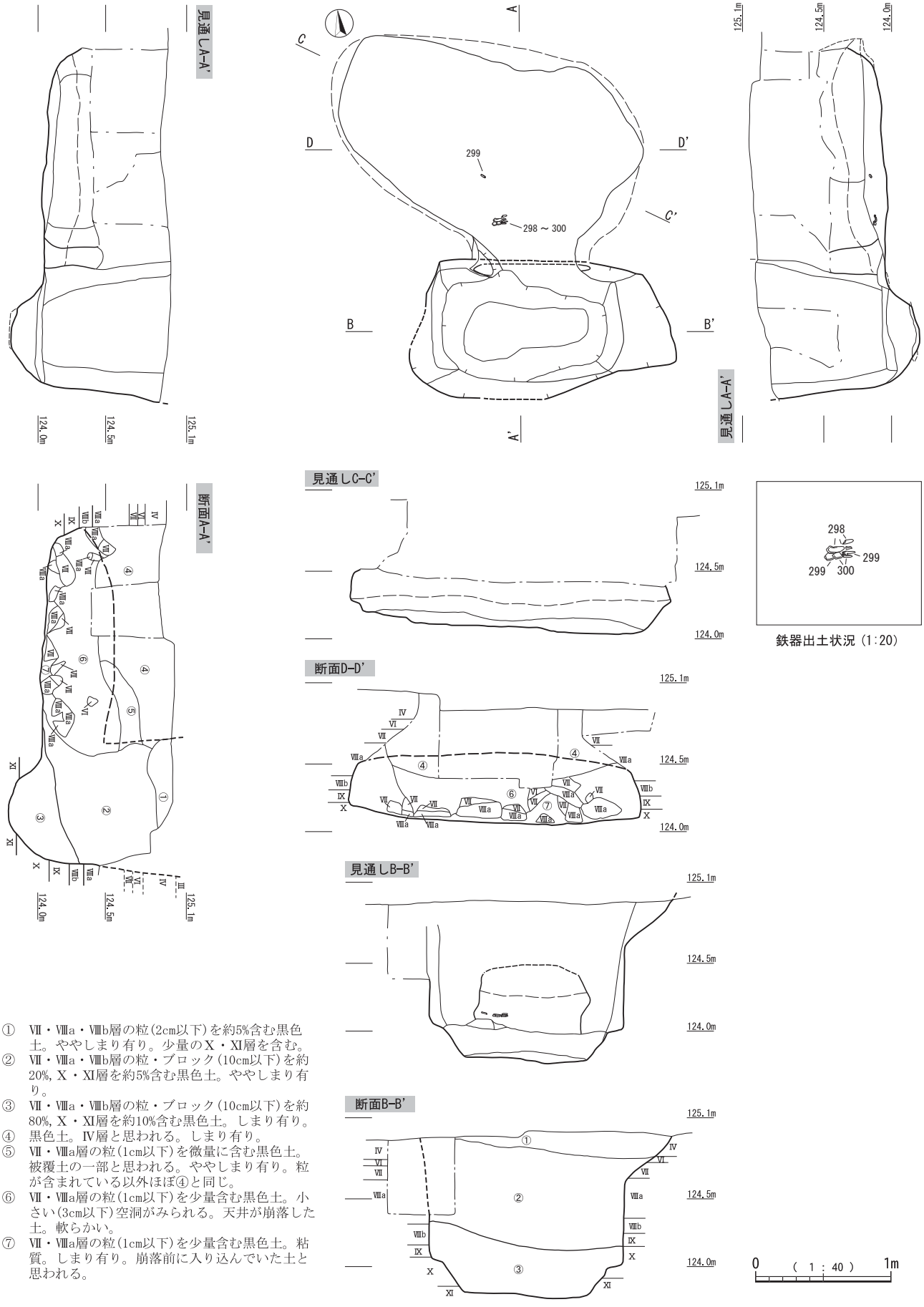
101号地下式横穴墓	検出区	G-40	玄室開口方向	北
	分　類	B１		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が多量に混在する部分の攪乱を取り除いて検出した。玄室天井は完全に崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	104	189	122	82	－	6	140	238	146	－
推　定	－	－	130	－	45	－	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形？	羨門正面形	長方形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は全体的に凹む形状である。埋土③は硬くしまった状態であり，この上面が閉塞時の床面であると推測される。 【玄室】 竪坑の横軸と玄室の横軸はずれており，左側に偏る。床面はほぼ平坦である。玄室入口付近で鉄鏃が出土した。天井面は崩落したブロックの観察により，Ⅷa層と推定される。
工具痕	天井崩壊ブロックに先端がU字形を呈するものが残存していた。
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃３点（圭頭鏃３点）が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。少量のⅩ・Ⅺ層を含む。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約20%, Ⅹ・Ⅺ層を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%, Ⅹ・Ⅺ層を約10%含む黒色土。しまり有り。
④ 黒色土。Ⅳ層と思われる。しまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。被覆土の一部と思われる。ややしまり有り。粒が含まれている以外ほぼ④と同じ。
⑥ Ⅶ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を少量含む黒色土。小さい(3cm以下)空洞がみられる。天井が崩落した土。軟らかい。
⑦ Ⅶ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を少量含む黒色土。粘質。しまり有り。崩落前に入り込んでいた土と思われる。

第191図　101号地下式横穴墓

エリア９出土鉄器（第192図～第195図）

71号地下式横穴墓（第192図・第193図）

鉄器は短剣１点，鉄鏃20点（短頸鏃10点，二段腸抉柳葉鏃１点，圭頭鏃６点，柳葉鏃１点，短茎鏃２点）が出土した。268は短剣である。刃部の先端が欠損しており，刃部上部には錆化による歪みも生じている。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。鞘木が一部良好に残存する。鞘木の合わせ目の観察から，二枚合わせ式であることが確認できる。鞘木の端部らしき痕跡が関部から1.5cm上部にみられるが，不明瞭である。鞘木の一部では平織布による鞘巻がみられる。関部は深さ約５mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。目釘孔が１孔確認でき，長さ約1.3cm，直径約3.5mmの鉄製の目釘が残存する。柄木の木質が残存しており，状態は悪いものの関部に柄の端部が確認できる。

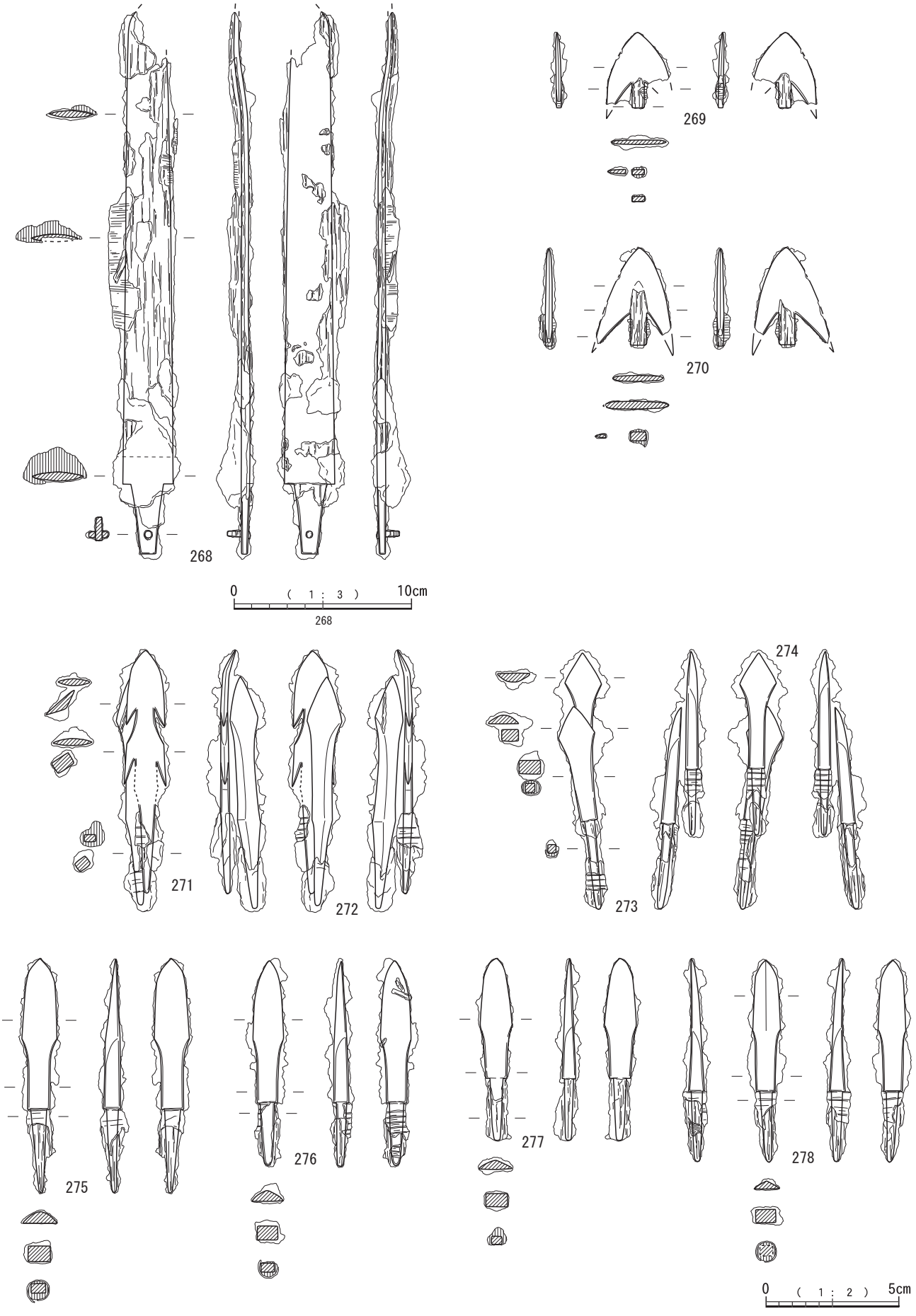
269・270は鏃身が三角形の短茎鏃である。269は逆刺が一部欠損する。断面形は刃部が平造り，茎部が長方形を呈する。根挟みが残存しており，糸巻きの痕跡がみられる。270は逆刺が一部欠損する。269と形態は類似するが，先端の角度がより鋭い。断面形は刃部が平造り，茎部が長方形を呈する。根挟みが残存しており，わずかに糸巻きの痕跡がみられる。271・272は錆着していたため，そのまま実測した。271は二段腸抉柳葉鏃である。山形突起の上下が錆化により不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，茎部が長方形を呈する。腸抉の深さは上段約６mm，下段約９mmを測り，下段が深い。山形突起は不明瞭だが，X線写真の観察から，緩い山形突起を有すると推定した。矢柄が残存するものの，状態は悪い。272は短頸鏃Ⅰ類である。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。273・274は錆着していたため，そのまま実測した。273・274は圭頭形の短頸鏃である。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。275～281は短頸鏃Ⅰ類である。275～278は長三角形を呈する。275の断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。276の断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。一部に植物の根と思われる植物繊維が付着する。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。茎部に糸巻きを施した痕跡が残存する。277の断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。278の断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存するものの，状態が悪い。279は錆化が進行しており，やや湾曲する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。刃部から頸部にかけて皮革と思われる有機質が付着する。矢柄はやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。280は錆の膨張により茎部が変形する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。281は錆化が進行しており，茎部が変形する。断面形は刃部が両丸造り，頸部が長方形，茎部が方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。282は柳葉鏃である。刃部の一部が欠損する。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかに残存する。283は圭頭鏃Ⅰc類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。先端に水平方向の植物繊維が付着する。矢柄はやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。284・285は圭頭鏃Ⅱa類である。284は茎部の一部が欠損する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。285の断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかに残存する。286～288は圭頭鏃類Ⅰa類である。錆化が進行している。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の残存は短いものの一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。287は錆化が進行しており，先端がやや湾曲する。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。先端に植物繊維が付着する。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が方形を呈する。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。288の断面形は刃部が片丸造り，頸部が長方形，茎部が方形を呈する。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。

97号地下式横穴墓（第194図）

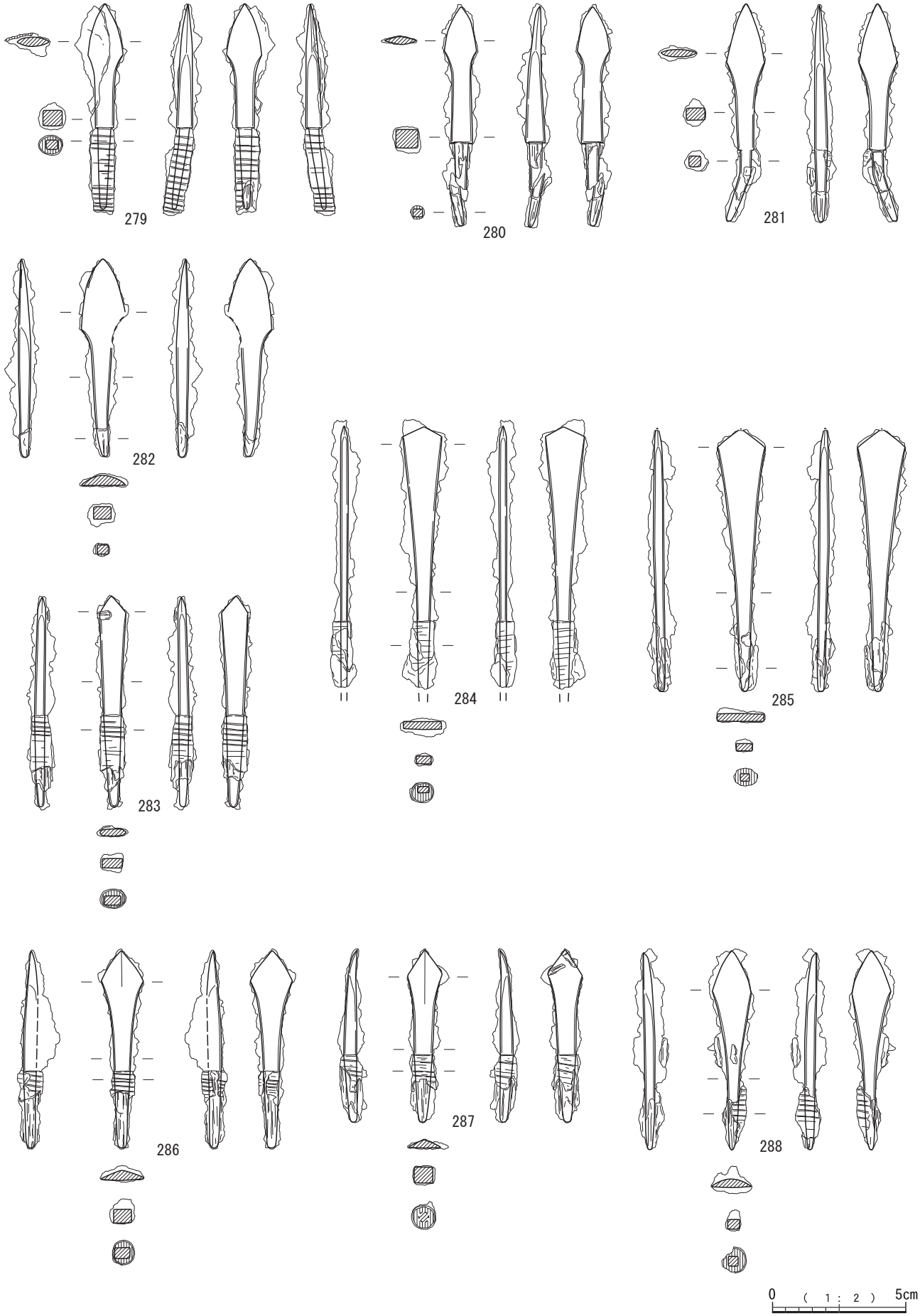
鉄器は289の異形鉄器１点が出土した。先端部は圭頭形を呈し，そこからゆるやかにくびれ足部に至る。足部の内面以外すべて刃部を造っており，断面形は平造りである。足部の内面は逆Ｖ字状を呈しており，やや膨らみながら足部の端部に至る。穿孔が４孔あり，先端から13.5cm下の中心部に２孔，足部の端部にそれぞれ１孔施されている。上側の２孔周辺に錆化した布が直に付着しているため，根挟みは施されていないと考えられる。足部の端部の穿孔には紐を通した痕跡がみられる。

98号地下式横穴墓（第194図・第195図）

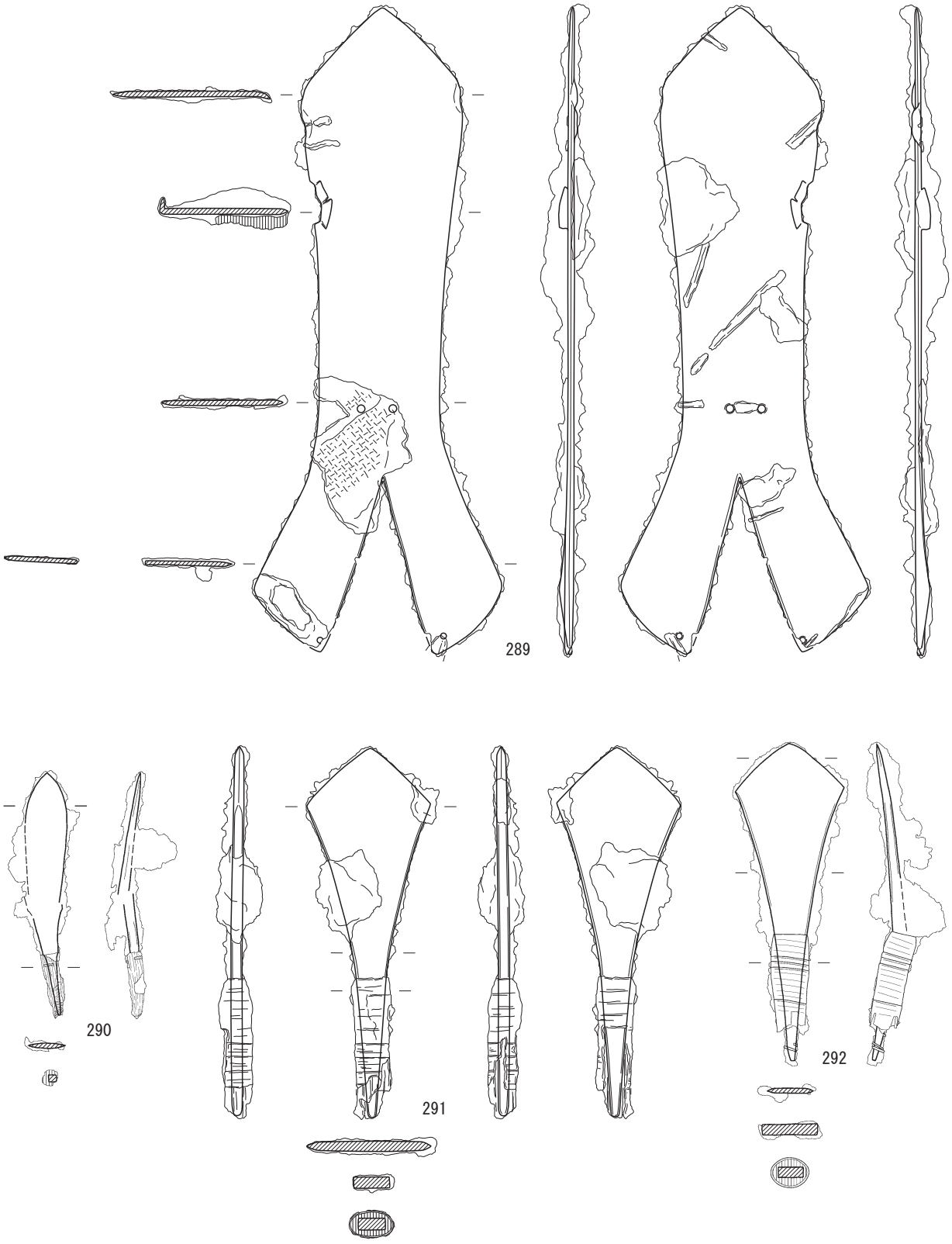
鉄器は鉄鏃８点（鳥舌鏃１点，圭頭鏃５点，鉄鏃片２点）が出土した。290は鳥舌鏃である。錆化が進行しており，中心部は錆の膨張により変形している。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存するが，状態が悪い。291～294は圭頭鏃である。291は圭頭鏃Ⅲa類である。



第192図　71号地下式横穴墓出土鉄器(1)

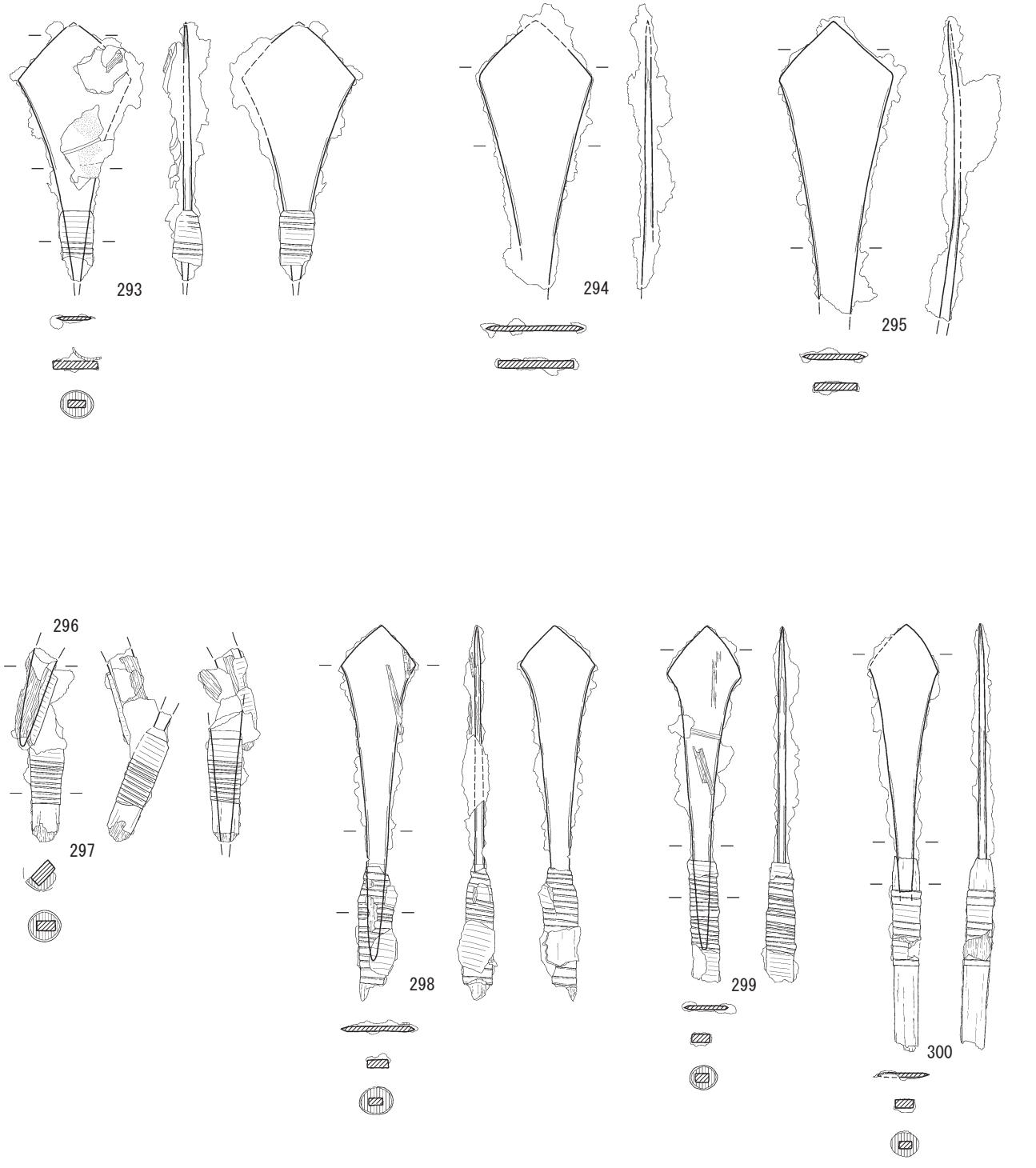


第193図　71号地下式横穴墓出土鉄器(2)



289　97号地下式横穴墓
290 ～ 292　98号地下式横穴墓

第194図　97号・98号(1)地下式横穴墓出土鉄器



293 ～ 297　98 号地下式横穴墓
298 ～ 300　101 号地下式横穴墓

第195図　98号(2)・101号地下式横穴墓出土鉄器

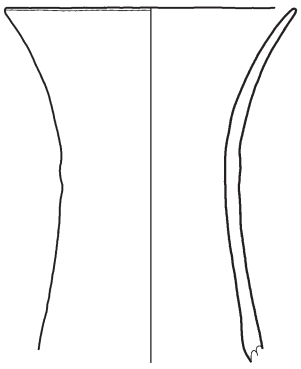
断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は良好に残存するが，口巻きの単位は一部不明瞭である。顕微鏡での観察により，刃部と矢柄の上から錆化した布が確認されている。292～295は圭頭鏃Ⅲa類である。292は錆化が進行しており，茎部から「くの字」状に屈曲する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は良好に残存するが，口巻きの単位は一部不明瞭である。茎部に糸巻きを施した痕跡がみられる。293は茎部の一部が欠損する。錆化が進行しており，一方の角周辺が不明瞭である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。一部に皮革が付着する。294は茎部が欠損する。錆化が進行しており，刃部の一部が不明瞭である。断面形は刃部が平造り，頸部が長方形を呈する。破損後の錆化により接合できないものの，297と同一個体である。297は茎部片である。断面形は長方形を呈する。矢柄が良好に残存する。口巻きの単位が明瞭にみられ，最後の入れ込みまで観察できる。295は茎部が欠損する。錆化が進行しており，やや湾曲する。断面形は刃部が平造り，頸部が長方形を呈する。破損後の錆化により接合できないものの，296と同一個体である。296は茎部片である。断面形は長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。

101号地下式横穴墓（第195図）

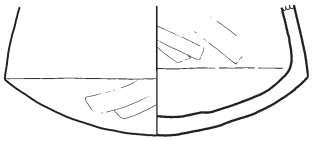
鉄器は298～300の鉄鏃３点（圭頭鏃３点）が出土した。298・299は圭頭鏃Ⅱc類である。298の断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。刃部から頸部にかけて，イネ科と思われる植物繊維が付着する。矢柄はやや良好に残存する。一部に錆化による膨張がみられるものの，口巻きの単位は明瞭に確認できる。299の断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。刃部から頸部にかけて，イネ科と思われる植物繊維が付着する。矢柄は良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。300は圭頭鏃Ⅱb類である。刃部に錆化による剥離がみられ，茎部は一部欠損する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。口巻きを矢竹上端の１cm下から長さ約2.4cmにわたって施していることが確認できる。矢竹の加工時の切れ込みがわずかにみられる。

エリア９出土土器（第196図）

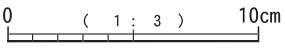
301・302は坩である。301は，坩A類の頸部である。口径11.6cmで，くびれをもって先細りに外反する。内外面ともにナデ調整である。302は，丸底の底部である。外面には強い稜線が入る。内外面ともに工具によるナデ調整である。



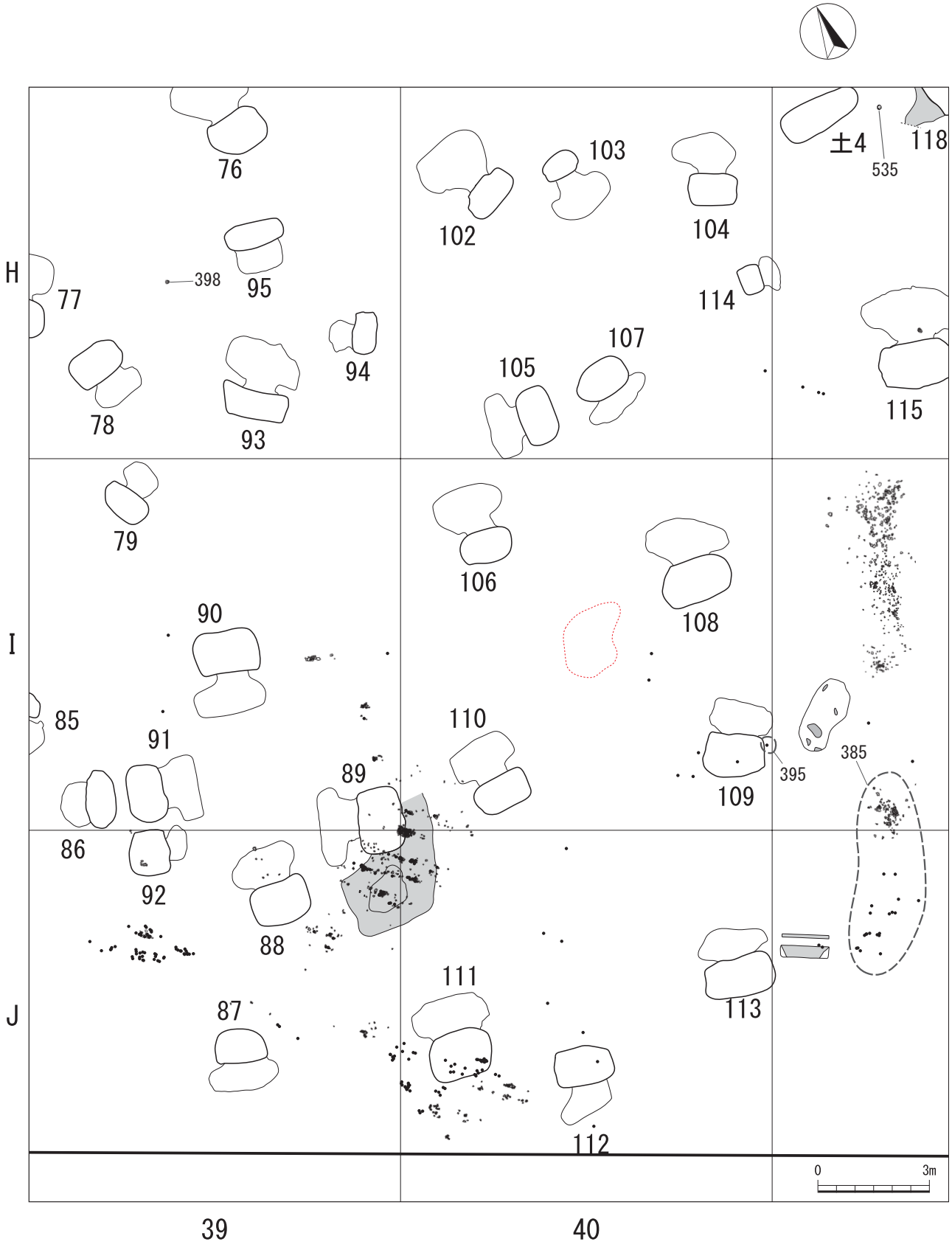
301



302



第196図　エリア９出土土器



第 197 図　エリア 10　遺構配置図

76号地下式横穴墓

検出区	G・H-39	玄室開口方向	北
分　類	B 1		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在した部分周辺の攪乱部分を取り除いて検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	110	148	100	80	－	1	124	212	140	－
推定	115	155	140	－	50	－	－	－	－	50

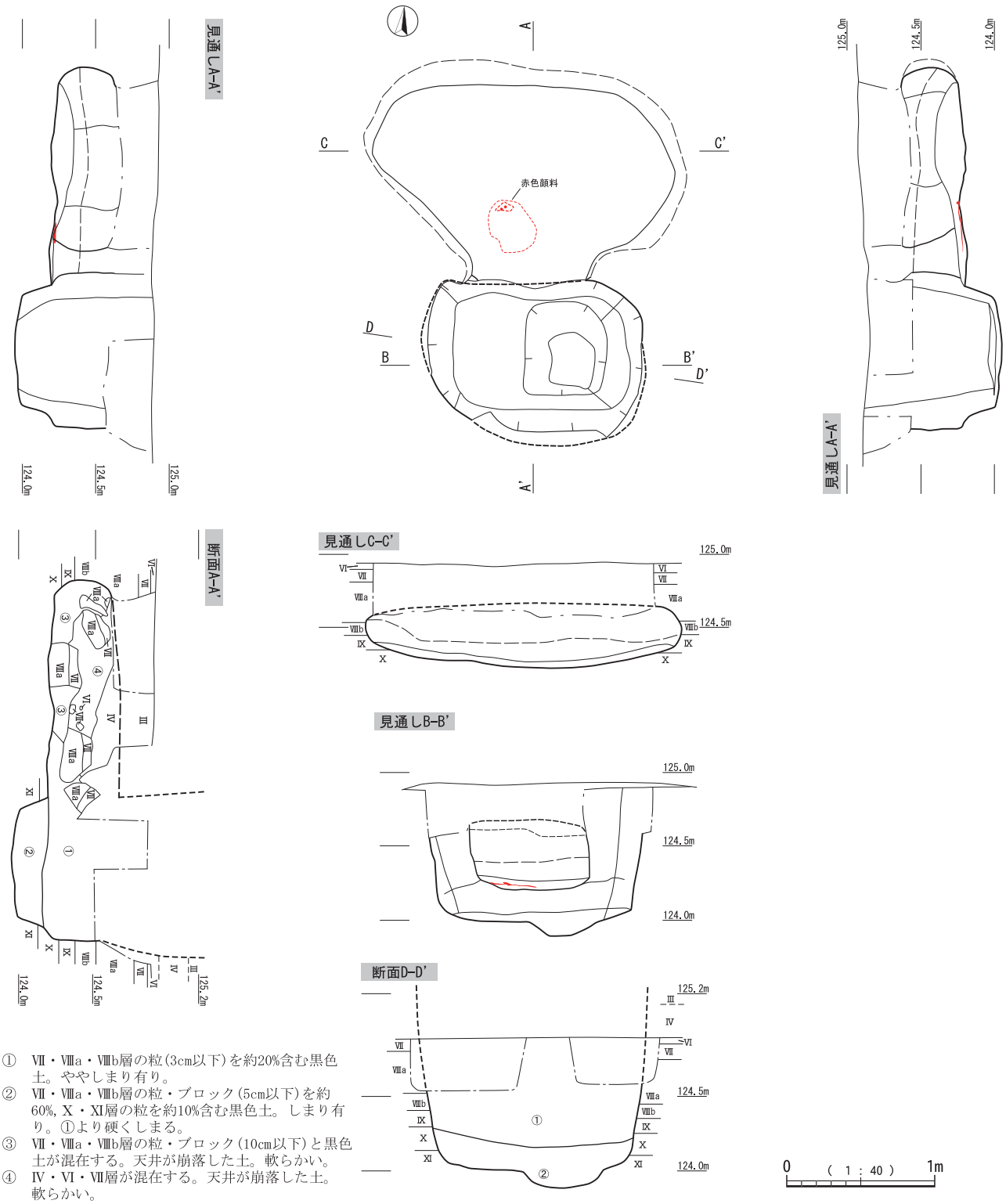
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要

【竪坑】
床面には右側に凹みがあり，玄室より低く造られている。床面近くの埋土②は，X・XI層が混在し，Ⅶ・Ⅷ層を主体とする。埋土②の上面はしまりがあり，玄室床面と同じ高さである。玄室はⅧ～X層を掘削して構築されていることから，埋土②は玄室を掘削した際の排出土で，その正面は閉塞時の床面と考えられる。

【玄室】
玄室は広く，左側に張り出している。天井は崩落したブロックの観察からⅧa層と考えられる。堆積状況から，攪乱を受ける前に崩落していたと分かる。羨道に近い位置で，少量の赤色顔料が残存していた。

工具痕	天井が崩落した際のブロックにみられた。 U字形を呈し，幅は不明である。
赤色顔料	玄室から水銀朱を検出した。
炭化物	未検出
人骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約60%, X・XI層の粒を約10%含む黒色土。しまり有り。①より硬くしまる。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)と黒色土が混在する。天井が崩落した土。軟らかい。
④ Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ層が混在する。天井が崩落した土。軟らかい。

第198図　76号地下式横穴墓

77号地下式横穴墓

検出区	H-38・39	玄室開口方向	北東
分　類	A		

検出状態	トレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	108	175	90	94	－	15	106	158	121	－
推　定	115	185	120	－	45	－	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	台形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	不明？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要

【竪坑】
　床面は玄室より低く，羨門付近で一段高くなり，玄室まで続く。構築時にXI層上面まで掘削しているが，Ⅶ・Ⅷ層は埋土に少量しか入っておらず，X層の土もほぼみられない。そのため，多くは地表に残されたと推察される。埋土は，ほぼ黒色土で占められている。この黒色土は硬くしまりがあり，開聞岳を起源とするコラの成分を多く含んでいたためと考えられる。埋土①～③には，Ⅶ・Ⅷ層の粒の割合以外の明瞭な差はみられない。

【玄室】
　玄室は左側が直線状であるのに対し，右側は張り出す形状である。崩落したブロックから，天井面はⅧa層であると考えられる。

工具痕

天井が崩落した際のブロックにみられた。
方形を呈し，幅は不明である。

赤色顔料　未検出

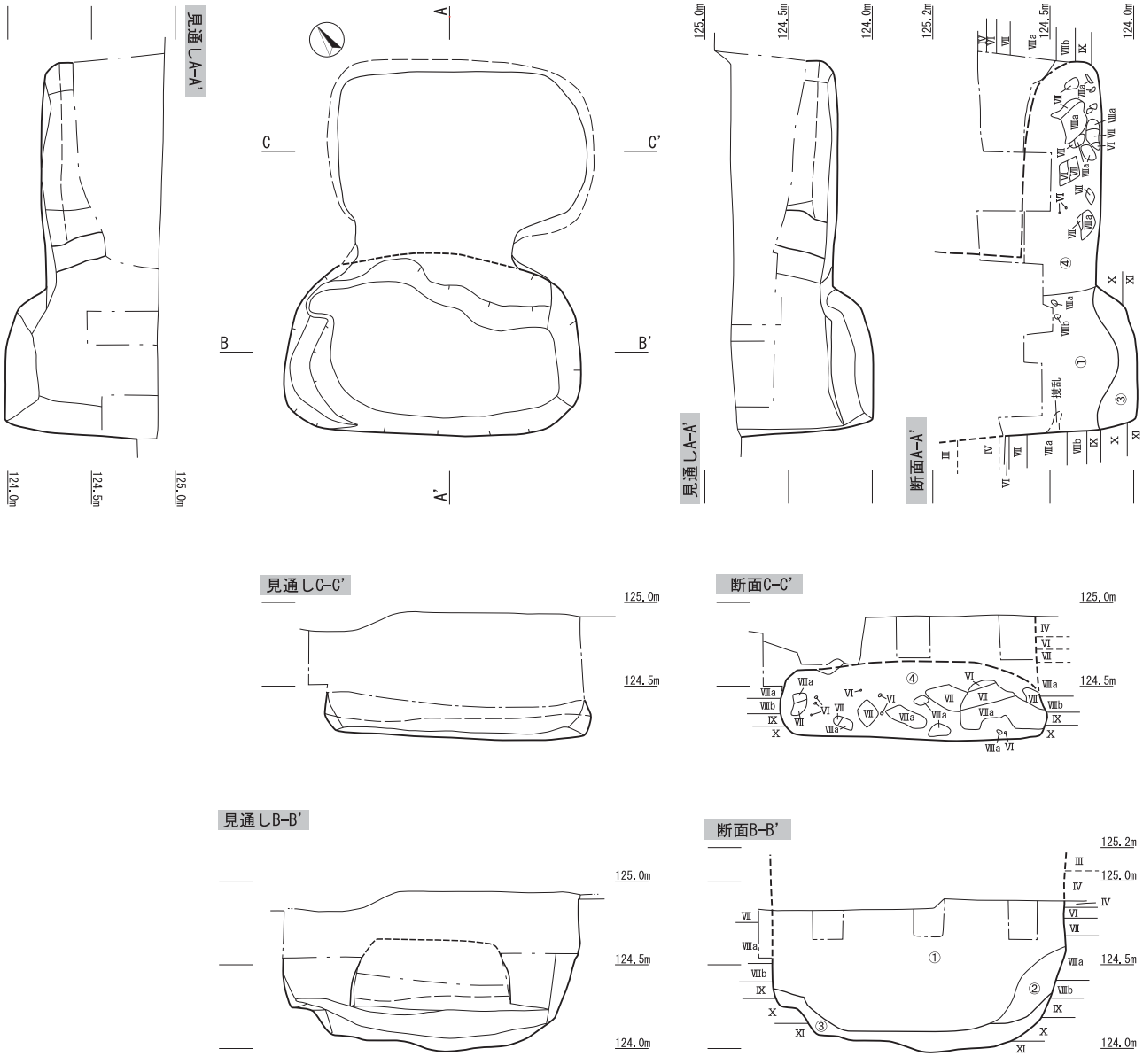
炭化物　未検出

人　骨　未検出

出土遺物

竪坑上面	なし
竪坑埋土内	なし
玄室内	なし

備　考　－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(5mm以下)を微量に含む黒色土。他の墓よりもかなり硬い。開聞岳を起源とするコラを多く含んでいると考えられる。Ⅶ・Ⅷa層の粒は3cm大のものが数個みられるのみ。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り。①と同じく硬い。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約50%含む黒色土。しまり有り。①と同じく硬い。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒,Ⅵ層(池田降下軽石)を微量に含む黒色土。Ⅳ層が主体。天井が崩落した土。ややしまり有り。

第199図　77号地下式横穴墓

78号地下式横穴墓

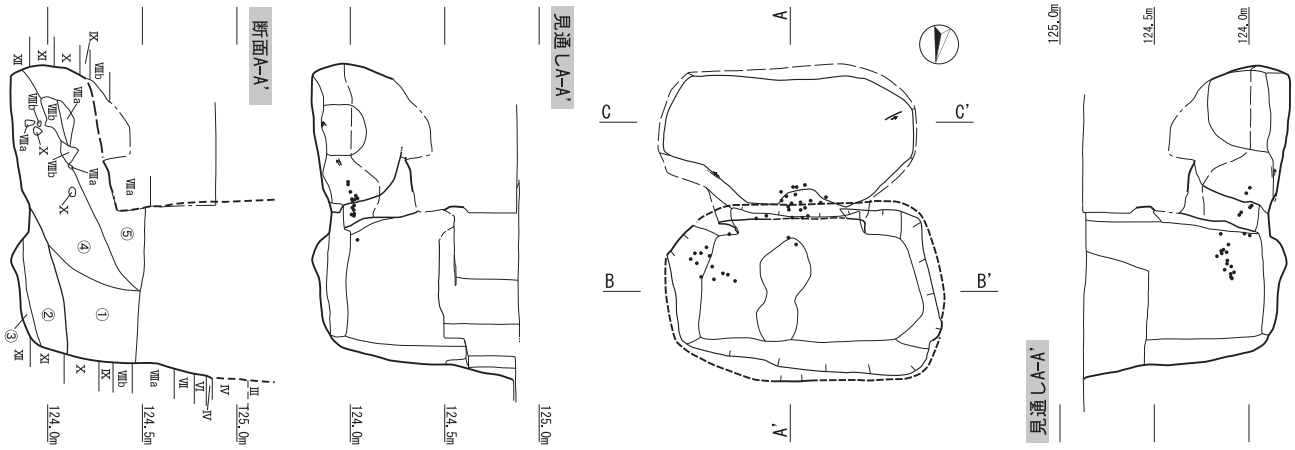
検出区	H-39	玄室開口方向	南
分　類	A		

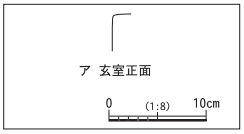
検出状態	トレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。玄室天井は一部崩落していたが，概ね残存していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	93	148	60	76	－	13	74	136	87	－
推　定	100	150	140	－	45	－	－	－	－	50

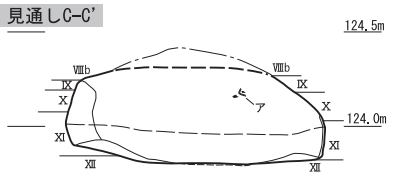
竪坑最下層	Ⅻ	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不整形
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	長方形（楕円形に近い）		
玄室床面層	Ⅻ	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

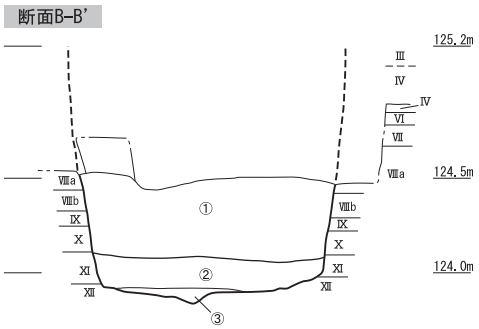
概　要	【竪坑】 床面は羨道に向かって低くなる。玄室はⅩ～Ⅻ層を掘削して構築されており，埋土全体に排出土が含まれている。羨道部は軟らかい黒色土が堆積していた。竪坑の埋土が崩れた際のものと考えられる埋土④の下層には，しまりがある埋土②があるため，埋土②が閉塞時の床面と考えられる。竪坑左側の正面壁近くで炭化物を検出した。 【玄室】 床面は羨道から奥に向かって低くなる。羨道部分に炭化物が入り込んでいた。竪坑より玄室がやや低くなる。崩落したブロックの観察から，天井はⅧb層付近と考えられる。
工具痕	玄室正面の右側に掘削した痕跡が残る。 アは方形を呈し，幅は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑左側および羨道付近から検出した。年代測定では 245calAD-381calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

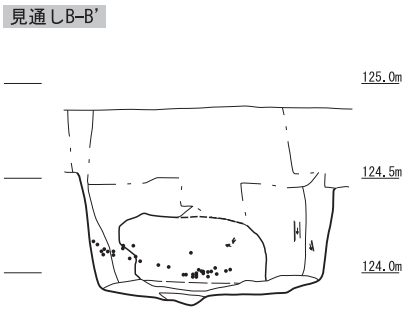




工具痕実測図







① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%, Ⅹ～Ⅻ層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。

② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%, Ⅹ～Ⅻ層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%含む黒色土。しまり有り。

③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%, Ⅹ～Ⅻ層の粒・ブロック(10cm以下)を約90%含む黒色土。しまり有り。

④ ①が崩落した土。ややしまり有り。

⑤ 少量のⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を含む黒色土。軟らかい。上部から入り込んだ土。

0 (1 : 40) 1m

第200図　78号地下式横穴墓

７９号地下式横穴墓

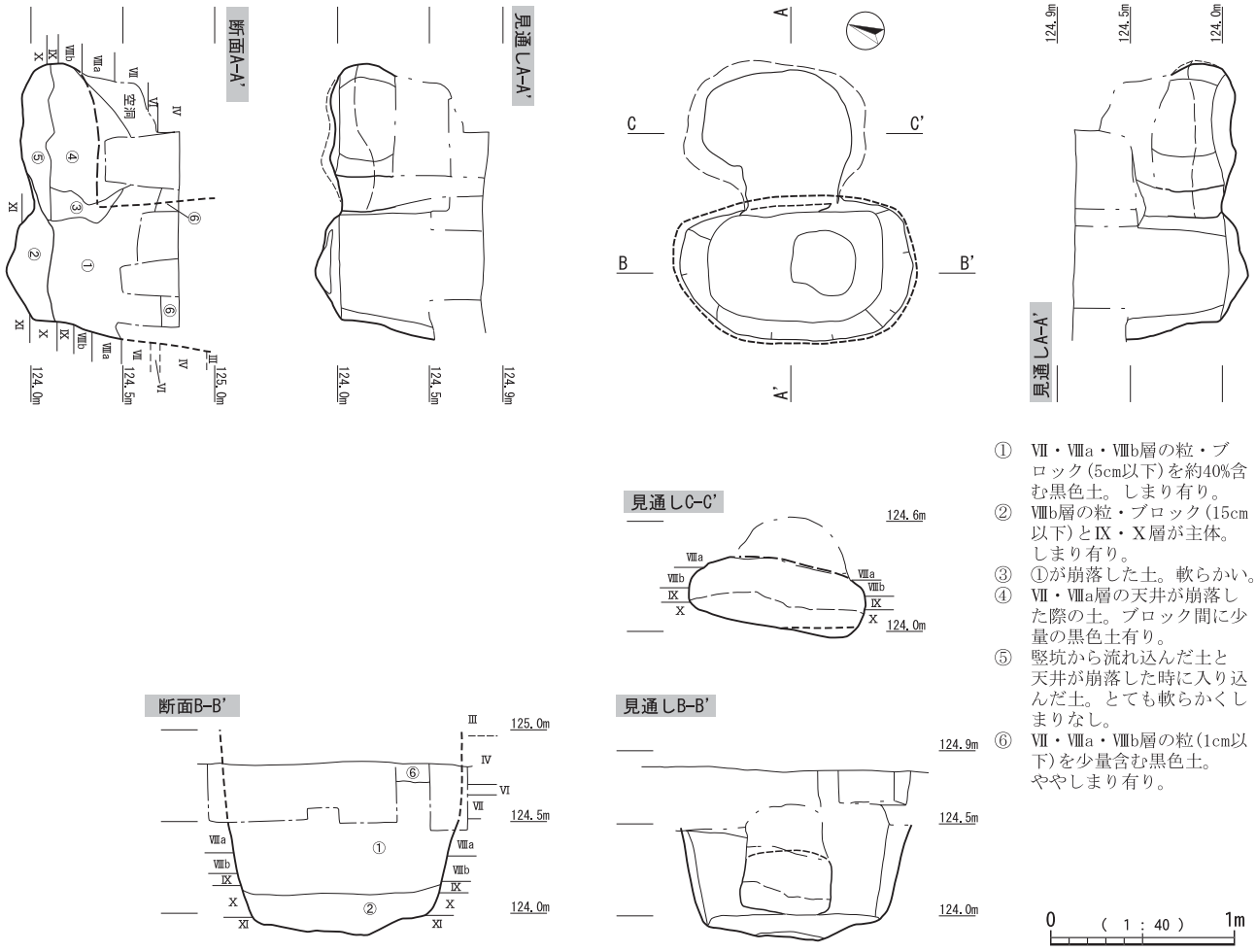
検出区	I-39	玄室開口方向	東北東
分　類	A		

検出状態	トレンチャーによる攪乱を取り除いて検出した。調査中に玄室天井は崩落した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	80	132	95	48	－	14	66	96	80	－
推　定	80	130	110	－	35	－	－	－	－	40

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は全体的に凹む。床面近くの埋土②は，Ⅷb～X層が混在しており，玄室はⅧ～X層を掘削して構築されていることから，埋土②は玄室を掘削した排出土と考えられる。しまりがあり，埋土①と明瞭に分けられるため，上面が閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 玄室横幅は 80cm 程度しかなく，小型である。玄室床面が水平ではなく，右側が深くなっている。
工具痕	天井が崩落した際のブロックにみられた。Ｖ字状を呈し，幅は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約40%含む黒色土。しまり有り。
② Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)とⅨ・Ⅹ層が主体。しまり有り。
③ ①が崩落した土。軟らかい。
④ Ⅶ・Ⅷa層の天井が崩落した際の土。ブロック間に少量の黒色土有り。
⑤ 竪坑から流れ込んだ土と天井が崩落した時に入り込んだ土。とても軟らかくしまりなし。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量含む黒色土。ややしまり有り。

第201図　79号地下式横穴墓

８５号地下式横穴墓

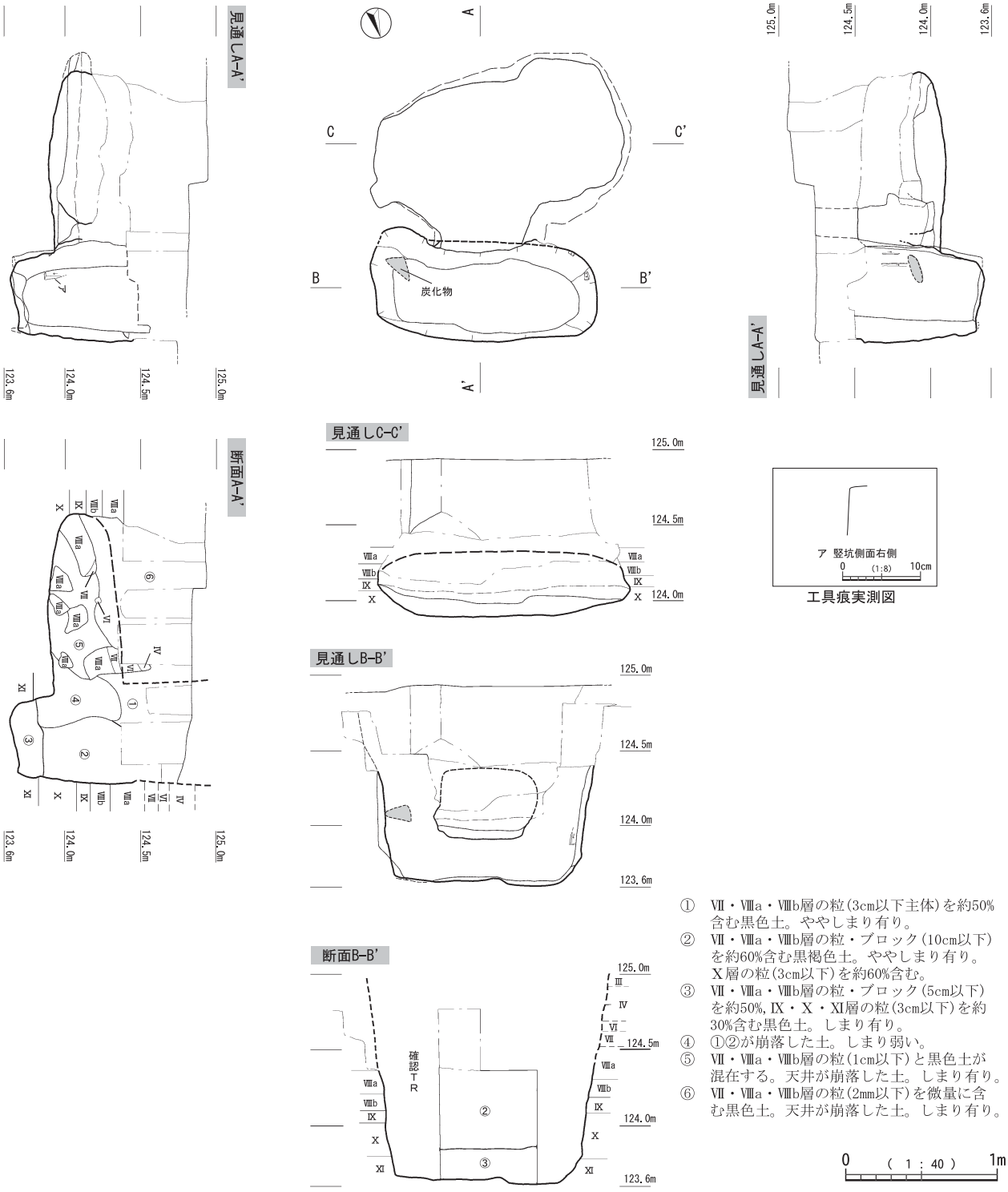
検出区	I-38	玄室開口方向	南南西
分　類	Ｂ１		

検出状態	一部Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分のトレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	66	147	90	62	－	10	106	170	112	－
推　定	70	160	130	－	45	－	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形（不整形）		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 埋土③はしまりがあり，この上面が閉塞時の床面と考えられる。羨門が竪坑や玄室の幅に比べてかなり狭く造られている。炭化物が竪坑左側から検出された。 【玄室】 右側の奥行きが広い。崩落したブロックの観察から天井面はⅧa層と考えられる。
工具痕	竪坑右側面に下方向へ掘削した痕がみられた。 アは方形を呈する。幅は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑で検出した。年代測定では 80calAD-224calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下主体)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む黒褐色土。ややしまり有り。Ⅹ層の粒(3cm以下)を約60%含む。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%,Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層の粒(3cm以下)を約30%含む黒色土。しまり有り。
④ ①②が崩落した土。しまり弱い。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)と黒色土が混在する。天井が崩落した土。しまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2mm以下)を微量に含む黒色土。天井が崩落した土。しまり有り。

第202図　85号地下式横穴墓

８６号地下式横穴墓

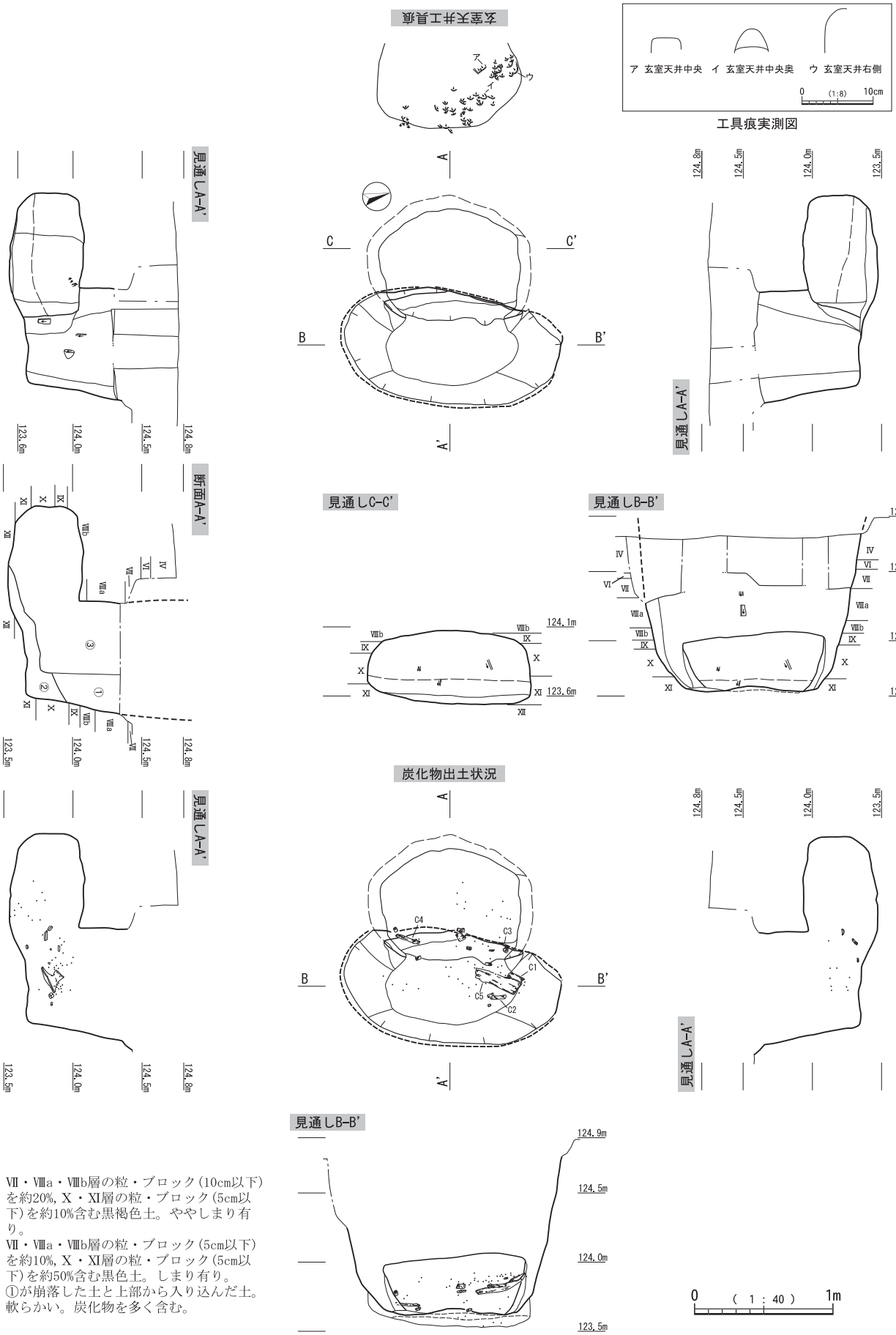
検出区	I-39	玄室開口方向	西北西
分　類	C		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分のトレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。玄室天井は残存していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	84	160	68	100	51	－	86	118	70	52
推　定	－	165	120	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	Ⅺ	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅺ・Ⅻ	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室より高く，ほぼ平坦である。羨道付近で多量の炭化物を検出した。埋土②はしまりがあり，炭化物より下位に位置するため，これが閉塞時の床面であったと考えられる。 【玄室】 玄室横幅と羨道横幅はほぼ同じであり，竪坑に比べると小型である。
工具痕	玄室天井の奥方向に掘削した痕がみられ，竪坑や玄室の側面にも少量残っている。 アは方形を呈し，幅は4.3㎝である。竪坑右側面と正面，玄室天井の中央付近にわずかにみられる。イはＶ字形を呈し，幅は4.8㎝である。玄室天井の多くはこの工具痕である。ウはＵ字形を呈するが，幅は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑と羨道付近から多量に検出した。年代測定では251calAD-395calAD・214calAD-349calAD，樹種はクスノキ科と同定された。炭化物は木材の樹皮や小さい枝状のものがみられた。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約20%, Ⅹ・Ⅺ層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒褐色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%, Ⅹ・Ⅺ層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒色土。しまり有り。
③ ①が崩落した土と上部から入り込んだ土。軟らかい。炭化物を多く含む。

第203図　86号地下式横穴墓

８７号地下式横穴墓

検出区	J-39	玄室開口方向	南南西
分　類	C		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分のトレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	90	134	115	102	－	20	74	188	94	－
推　定	100	135	－	－	40	－	－	－	－	40

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要

【竪坑】
　床面は玄室床面とほぼ直線的に造られている。床面近くの埋土④は，Ⅶ～Ⅷ層を主体とし，Ｘ層の土が混在する。玄室はⅧ～Ｘ層を掘削して構築されていることから，埋土④は玄室を掘削した際の排出土と考えられる。また，しまりがあり，埋土③・⑤と明瞭に分けられることから，埋土④の上面が閉塞時の床面であったと考えられる。羨道天井が崩落した際のブロックには，赤色顔料が付着しており，羨道入口に赤色顔料を塗布していたと想定される。

【玄室】
　玄室天井は一部崩落しかかっており，床面は一部で凹む。頭蓋骨が残存していた。奥と手前に人骨に沿うように鉄器が副葬されていた。

工具痕

玄室天井の，羨道付近から玄室の奥方向へ掘削した痕が残っている。
ア～ウはU字形を呈し，幅は推定 12 ～ 14 ㎝あり，天井に多い。エはＶ字形を呈し，幅約３～４㎝で，玄室中央奥にみられる。エを先に，ア～ウを後に使用したと考えられる。

赤色顔料

玄室でパイプ状ベンガラを検出した。

炭化物

羨道付近から検出した。

人　骨

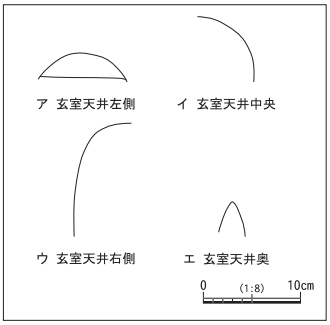
頭蓋骨や肩甲骨が残存していた。下顎や肩甲骨に赤色顔料が付着していた。伸展葬かどうかは不明だが，仰向けであったと推定される。壮年の男性と推定。

出土遺物

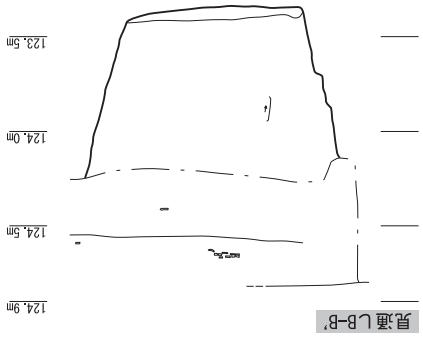
竪坑上面	壺の胴部片と赤色顔料を塗布した坩（399）の口縁部片が出土した。壺は確実に同一個体といえるものは周囲にみられなかった。
竪坑埋土内	なし
玄室内	鉄剣１点，短剣１点が出土した。

備　考

－

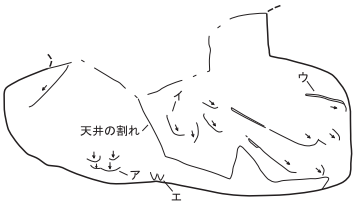


工具痕実測図

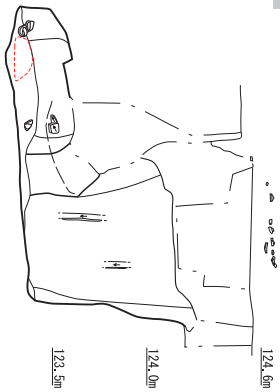


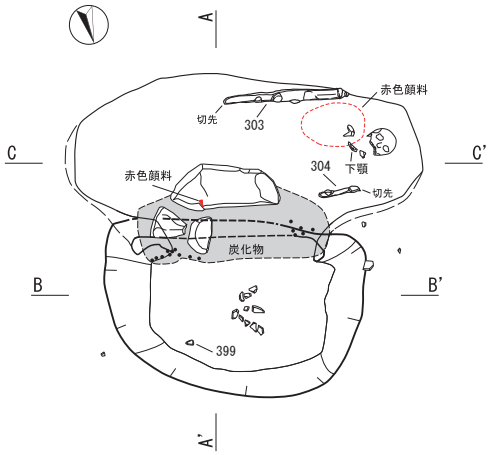
見通しB-B'

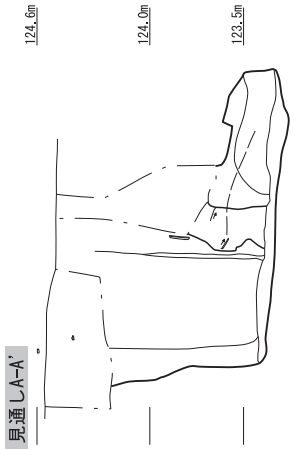
玄室天井工具痕



見通しA-A'

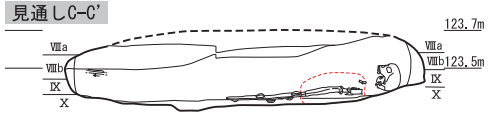


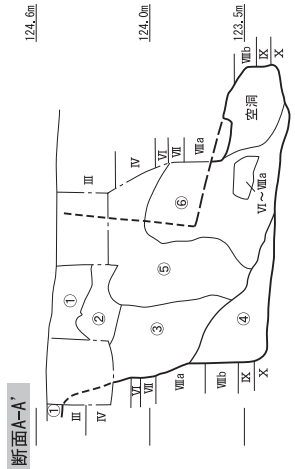




見通しA-A'

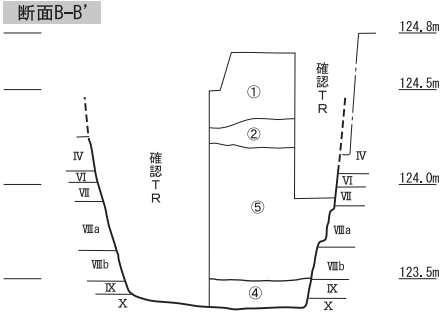
見通しC-C'





断面A-A'

断面B-B'



見通しB-B'

0 (1 : 40) 1m

① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約50%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約30%, Ⅹ層を少量含む黒色土。しまりやや弱い。
⑤に近い部分ほど軟らかい。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約90%, Ⅹ層を少量含む黒色土。しまり有り。
⑤ ③がやや崩落しかけている埋土。③よりやや軟らかい。
⑥ ⑤が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。軟らかく, しまりなし。

第204図　87号地下式横穴墓

８８号地下式横穴墓

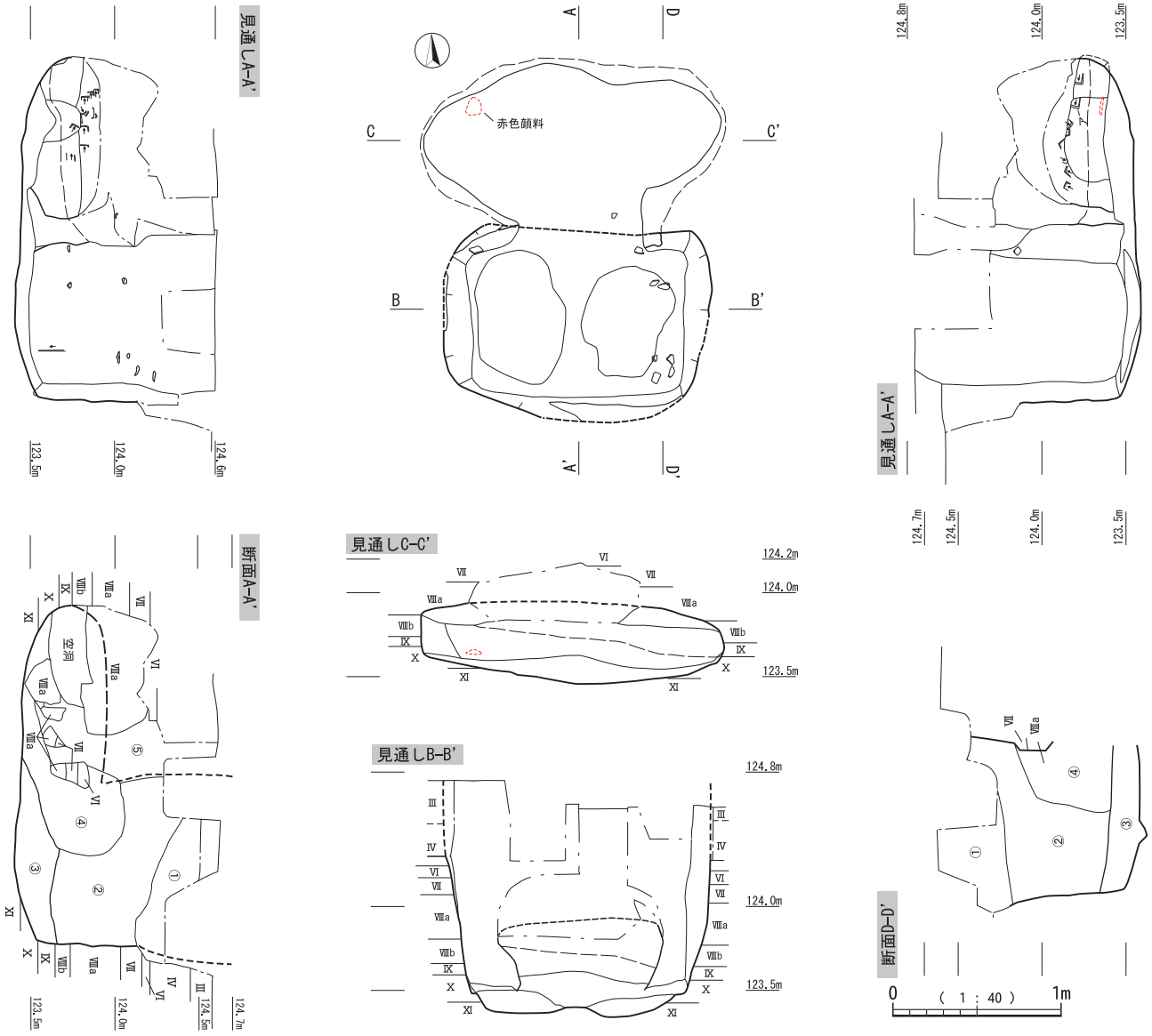
検出区	J-39	玄室開口方向	北
分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分のトレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。玄室の天井の羨道付近は崩落し，奥は落ちかかった状態であった。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	114	156	120	100	－	16	86	180	102	－
推　定	－	－	130	－	50	－	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	X・XI	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 竪坑の横幅と玄室の横幅はほぼ同じである。埋土②と③は明瞭に分かれ，埋土③はしまりがあり硬いことから，閉塞時の床面と考えられる。埋土中のⅧ層ブロックは小さく，刃幅の狭い鉄器で掘削されたと考えられる。 【玄室】 床面は先端付近でゆるやかに立ち上がる。左側には赤色顔料が残存しており，頭蓋骨部分のものの可能性もある。
工具痕	玄室側面を中心に，奥方向へ掘削した痕が残る。 アは方形を呈する。幅は5.6㎝である。
赤色顔料	玄室で水銀朱を検出した。
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	壺の胴部片と思われる土器片が出土したが，周辺に確実に同一個体と考えられるものは出土していない。
出土遺物　玄室内	－
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約5%含む黒色土。しまり有り。
② Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%, X層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。しまり有り。
④ ②が崩落土と上部から入り込んだ土。軟らかくしまりなし。
※②と土の構成は同じ。
⑤ Ⅲ・Ⅳ層の土。天井が崩落した土。やや軟らかい。

第 205 図　88 号地下式横穴墓

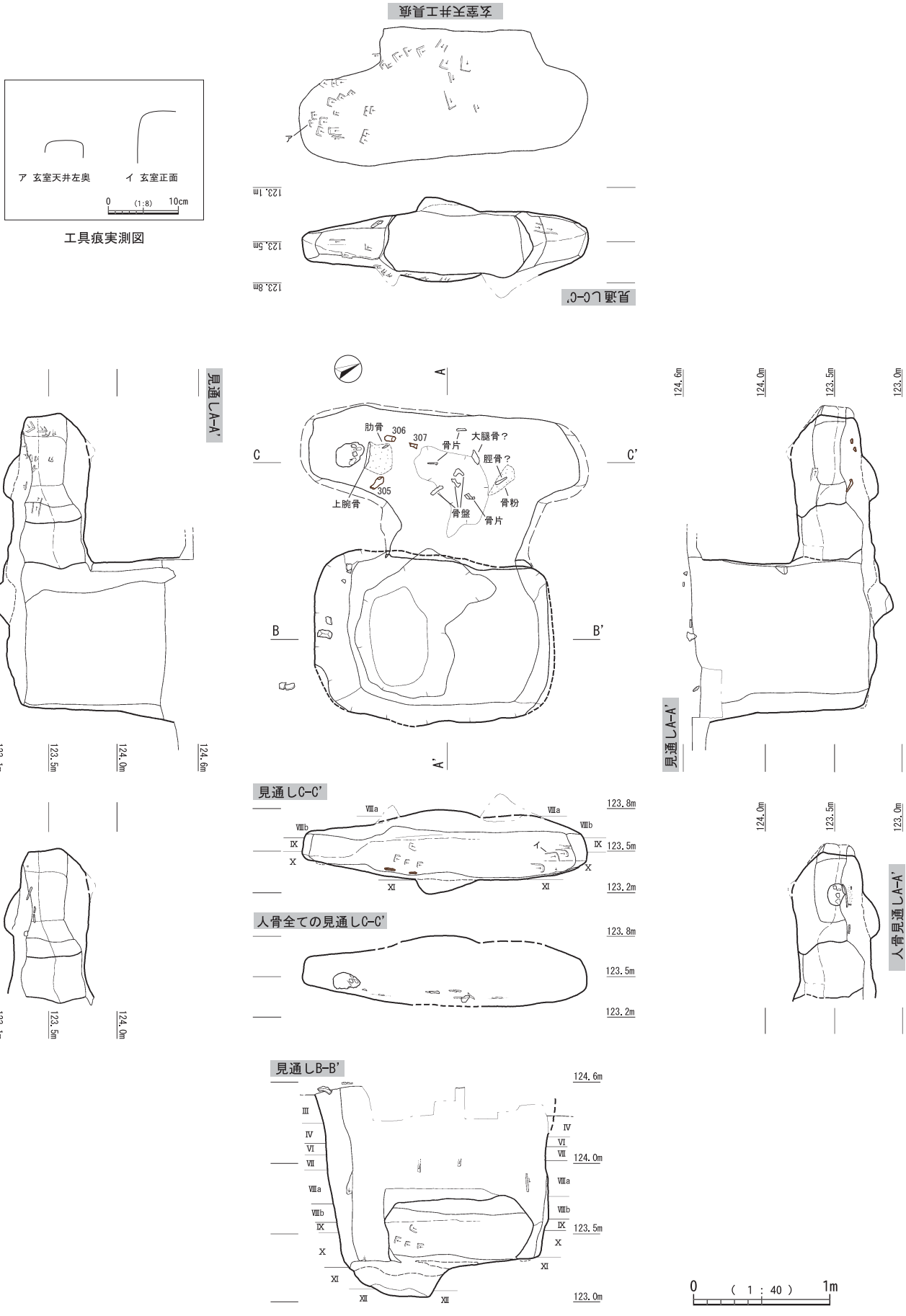
８９号地下式横穴墓	検出区	Ⅰ・J-39	玄室開口方向	西北西
	分　類	Ｂ２		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分のトレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。

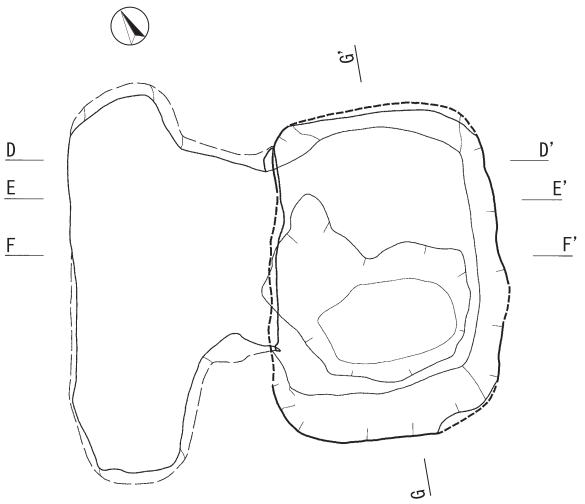
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	122	174	132	108	－	39	72	210	110	52
推　定	－	－	－	－	60	－	－	－	－	－

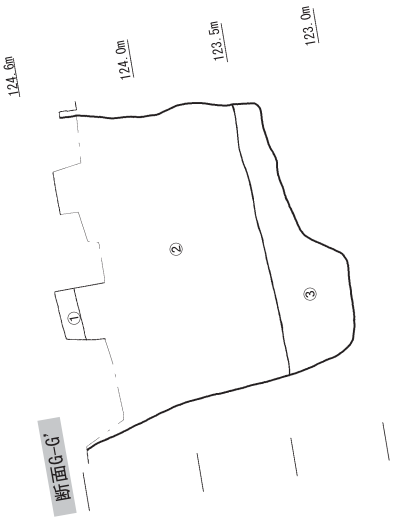
竪坑最下層	Ⅻ	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	Ⅹ・Ⅺ	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

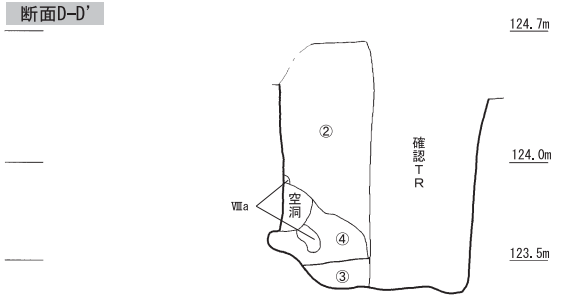
概　要	【竪坑】 横幅は玄室の横幅より幾分狭い。床面の左側は一段深くなる。断面Ｄ軸をみると，空洞が竪坑正面右側に部分的に確認され，閉塞材との関連も想定される。 【玄室】 羨道が右寄りに構築されている。羨道入口から中央にかけて，屍床が造られている。断面Ｆにみられる埋土⑤は，Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層を埋め戻して，床面としたものと考えられる。人骨は原位置を保っていなかった。
工具痕	玄室天井には奥方向と中央から左方向にかけて掘削した痕が残る。玄室側面にも多い。 アは方形を呈し，幅は5.5㎝である。玄室天井にみられるイも方形を呈し，幅は不明だがアよりは確実に大きく，玄室正面や側面に残っていた。
赤色顔料	頭蓋骨から検出した。分析を行ったが微量のため，同定できなかった。
炭化物	未検出
人　骨	頭蓋骨が残存していた。顔面部に微量の赤色顔料が付着していた。左耳部分に外耳道骨腫がみられる。頭蓋骨以外の骨は原位置を保っていない。熟年の男性と推定。
出土遺物　竪坑上面	壺の胴部片（387）など，壺片が多く出土した。
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	異形鉄器３点が出土した。
備　考	－

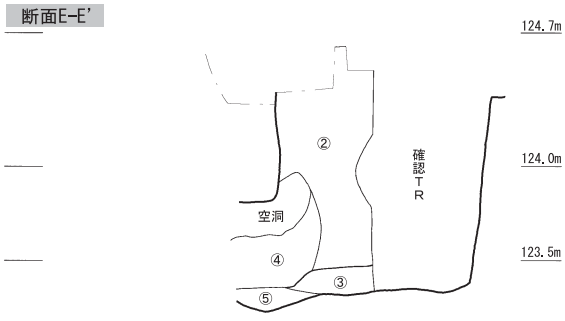


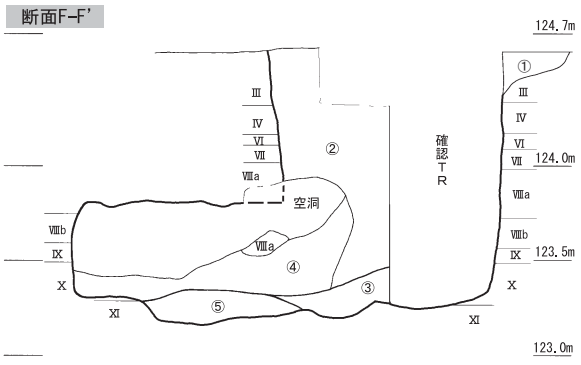
第 206 図　89 号地下式横穴墓(1)











① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%, Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有るが, 硬いブロック混じりのため崩れやすい。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%, Ⅹ・Ⅺ層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む黒色土。しまり有り。
④ ②が崩落した土。かなり軟らかい。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約60%, Ⅹ・Ⅺ層の粒・ブロック(10cm以下)を少量含む黒色土。しまり有り。

0 (1 : 40) 1m

第 207 図　89 号地下式横穴墓(2)

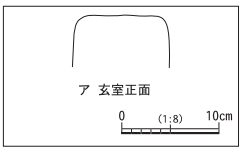
９０号地下式横穴墓	検出区	I-39	玄室開口方向	南南西
	分　類	Ｂ１		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分のトレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。調査中に玄室天井が崩落した。

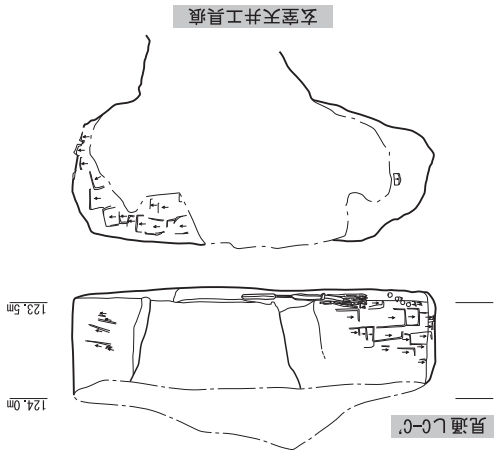
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	113	174	138	86	－	26	78	192	104	－
推　定	－	－	－	－	60	－	－	－	－	70（50）

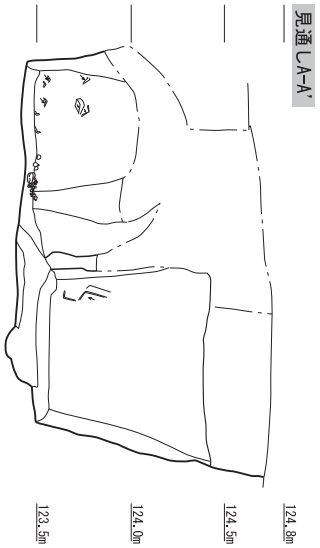
竪坑最下層	Ⅻ	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形？
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb ？	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅺ	玄室断面形	長方形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

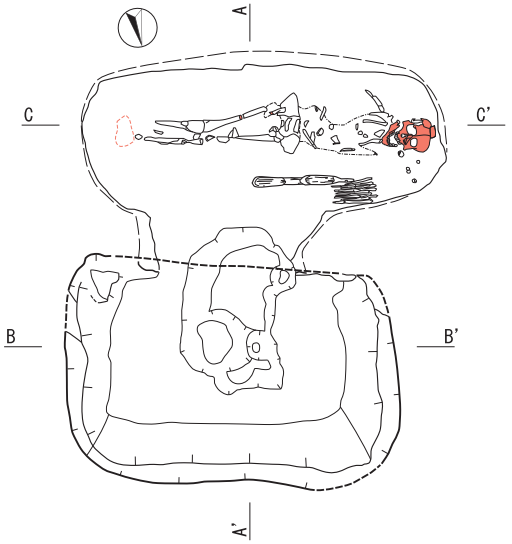
概　要	【竪坑】 床面は中央付近から羨道入口付近にかけて一段深くなる。埋土⑥はⅩ層以下の土が主体を占めており，その上の埋土②・③とは明らかに異なる。埋土⑦はⅧb層のブロックを主体とする土であり，埋土⑥の中に入っている。玄室はⅧb～Ⅺ層部分を中心に構築されており，埋土⑥・⑦は玄室構築時の排出土と考えられる。炭化物が出土し，埋土⑥の上面にほぼ並んでいる状態であった。 【玄室】 羨道と玄室の境が明瞭であり，右側に張り出しが強い形状である。鉄鏃はほぼ同じ場所でそろっており，胡禄等に入っていた可能性が考えられる。鈴は，頭部左側から出土した。最大のものは首付近から出土している。赤色顔料は頭蓋骨と足元付近で検出された。
工具痕	玄室内には工具痕が多数残存しており，正面壁には中央付近から左右奥方向へ削った痕が明瞭に残る。アは幅 10.1 ㎝で方形を呈する。他の工具痕はみられない。
赤色顔料	玄室で検出した。頭蓋骨と脚元に残存していたものは，非パイプ状ベンガラと同定された。
炭化物	羨道付近で検出した。年代測定では 137calAD-265calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	赤色顔料が全身に付着しており，特に頭部・大腿骨に顕著に認められる。手を腹部に置いた伸展葬と考えられる。壮年の男性と推定。
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，鉄鏃 28 点（長頸鏃 22 点，圭頭鏃２点，腸抉柳葉鏃１点，鉄鏃片３点），青銅鈴５点が出土した。
備　考	－

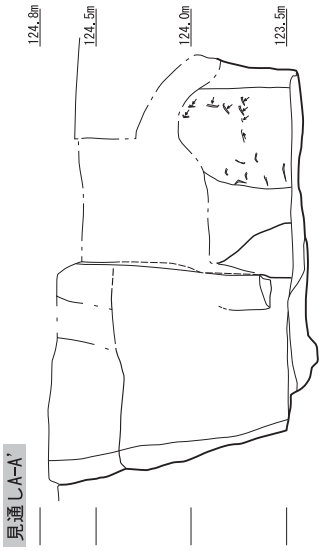


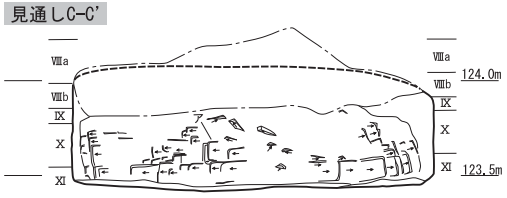
工具痕実測図

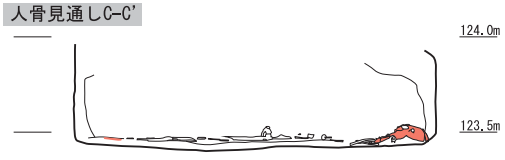




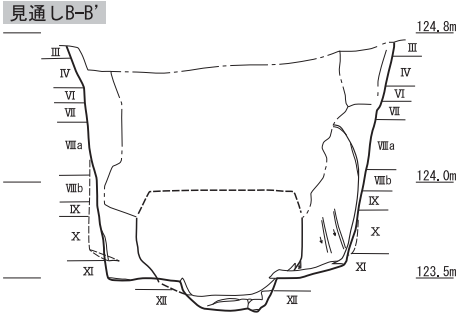


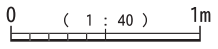




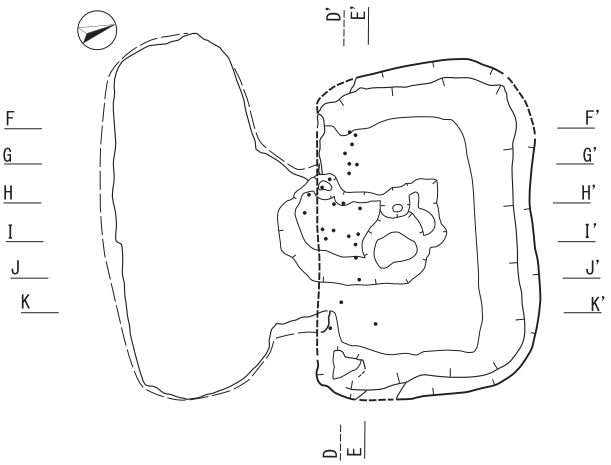


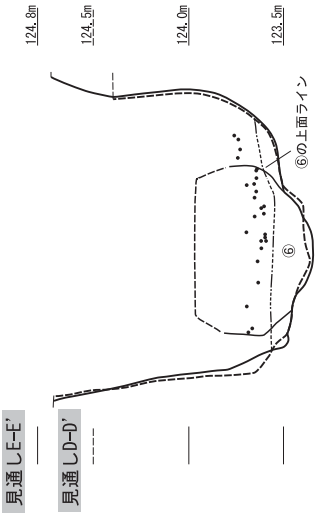
人骨全ての見通し



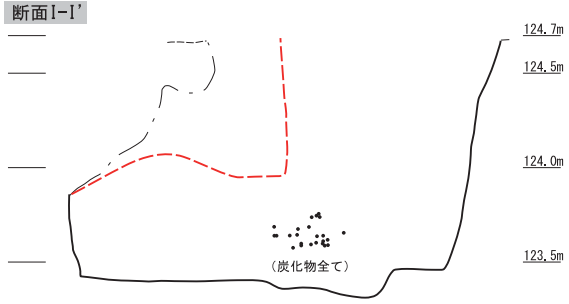


第 208 図　90 号地下式横穴墓(1)

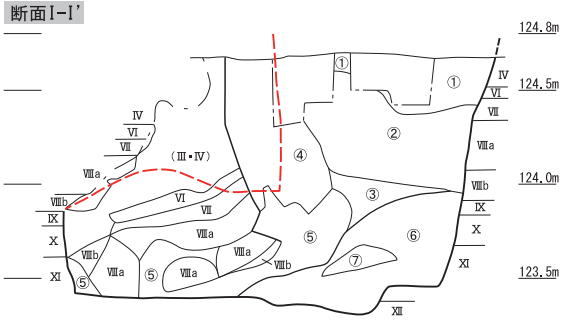




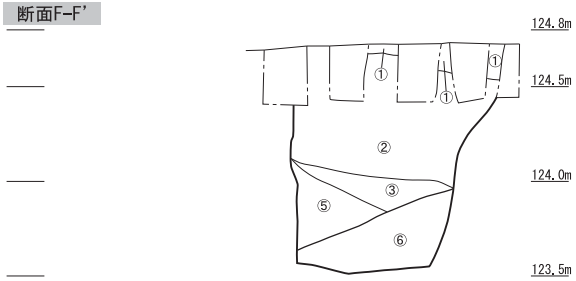
断面I-I'



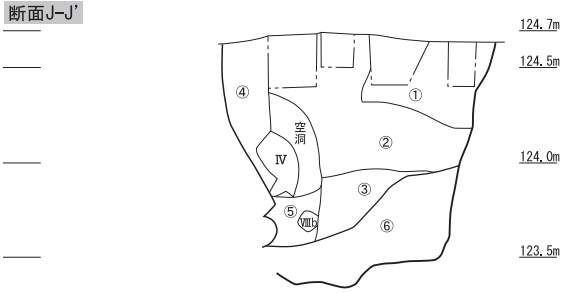
断面I-I'



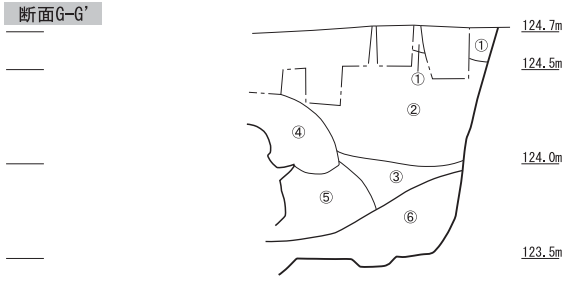
断面F-F'



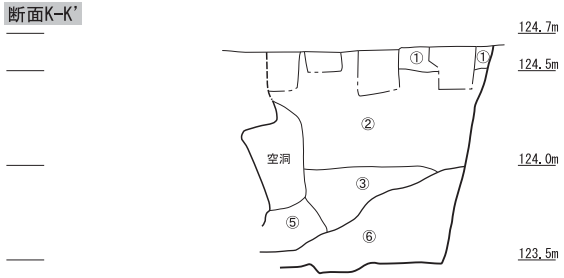
断面J-J'



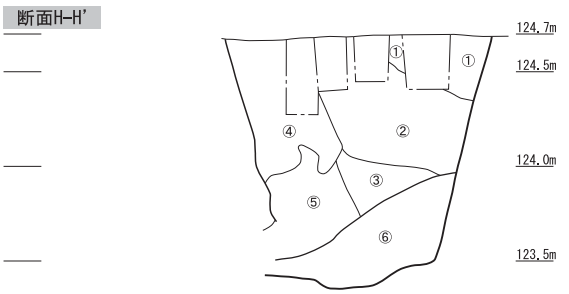
断面G-G'



断面K-K'



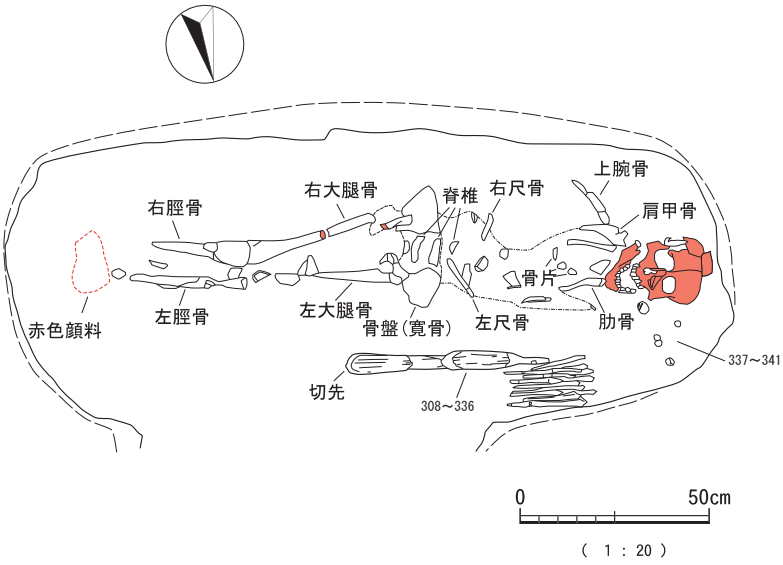
断面H-H'

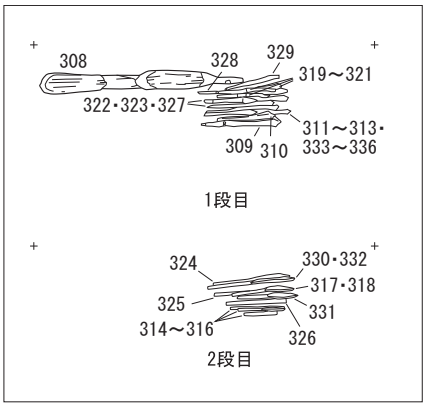


① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒色土。しまり有り。Ⅹ・Ⅺ層のブロック(10cm以下)を約10%含む。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%, Ⅸ・Ⅹ層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒褐色土。②よりしまり弱い。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。軟らかくしまりなし。上部から入り込んだ土と思われる。
⑤ ②③が崩落した土(竪坑埋土崩れ)。軟らかい。
⑥ Ⅹ・Ⅺ層の粒・ブロックが主体(約90%)。少量の黒色土含む。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含む。硬い。
⑦ Ⅷb層のブロックが主体。Ⅹ・Ⅺ層を少量含む。硬い。

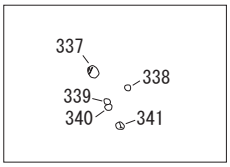
0 (1 : 40) 1m

第 209 図　90 号地下式横穴墓(2)





鉄器出土状況(1:20)



青銅鈴出土状況(1:20)

第 210 図　90 号地下式横穴墓(3)

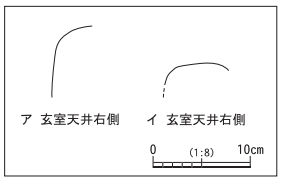
91号地下式横穴墓	検出区	I-39	玄室開口方向	東南東
	分　類	B 1		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分のトレンチャーによる攪乱部分を取り除いて検出した。

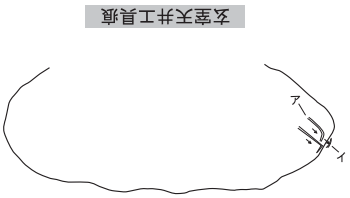
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	96	158	75	116	42	24	66	170	90	30
推　定	100	160	120	－	－	－	－	－	－	－

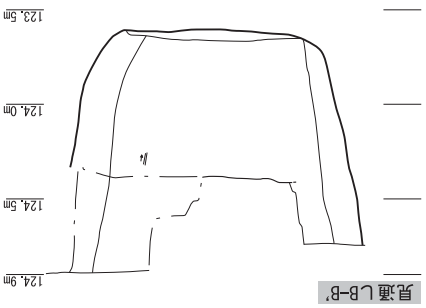
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	楕円形？
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

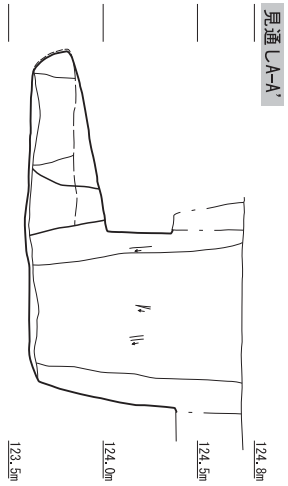
概　要	【竪坑】 床面はほぼ平坦となる。床面近くの埋土⑤はⅨ・X層を多く含み，玄室はⅨ・X層を掘削して構築されていることから，玄室を掘削した際の排出土と考えられる。また，しまりが強いことから，この上面が閉塞時の床面と推定される。埋土③は埋土①・④が混在したもので，玄室まで流れ込んでいる。 【玄室】 玄室は右側へ張り出しが強くなる形状である。また奥に向かって低くなり，最奥部では20cm程度の高さしかない。
工具痕	玄室天井や竪坑に少量残存している。 ア・イは同一工具と思われ，幅7.5㎝で方形を呈する。玄室天井右奥にのみ明瞭な跡が残っている。
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備　考	－

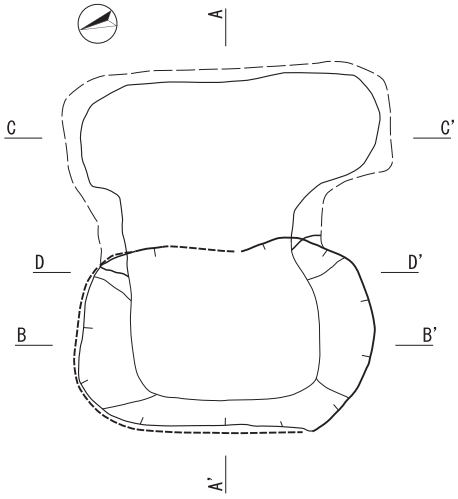


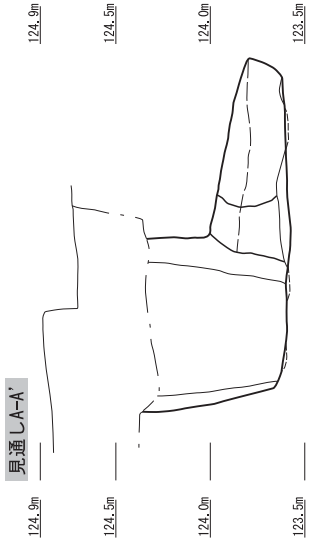
工具痕実測図

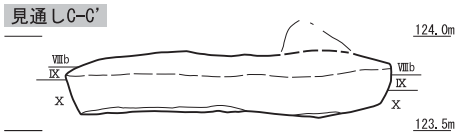


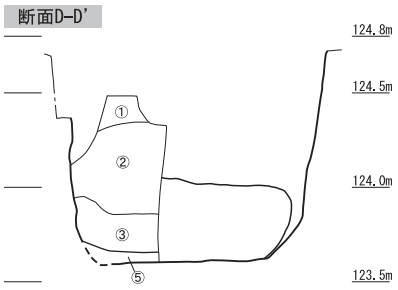


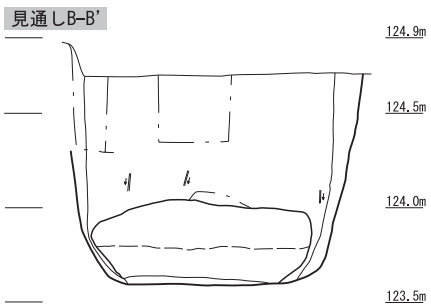


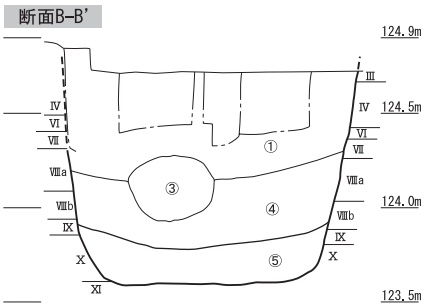


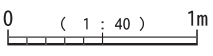












① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒褐色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。軟らかくしまりなし。竪坑が崩壊した土と上部から入り込んだ土と思われる。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%, Ⅹ層の粒(3cm以下)を約20%含む黒色土。しまり弱い。①④が崩落した土。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%, Ⅹ層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒色土。しまりやや弱い。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%, Ⅸ・Ⅹ層を約60%含む黒色土。しまり有り。

第211図　91号地下式横穴墓

９２号地下式横穴墓	検出区	J-39	玄室開口方向	東南東
	分　類	Ｂ１		

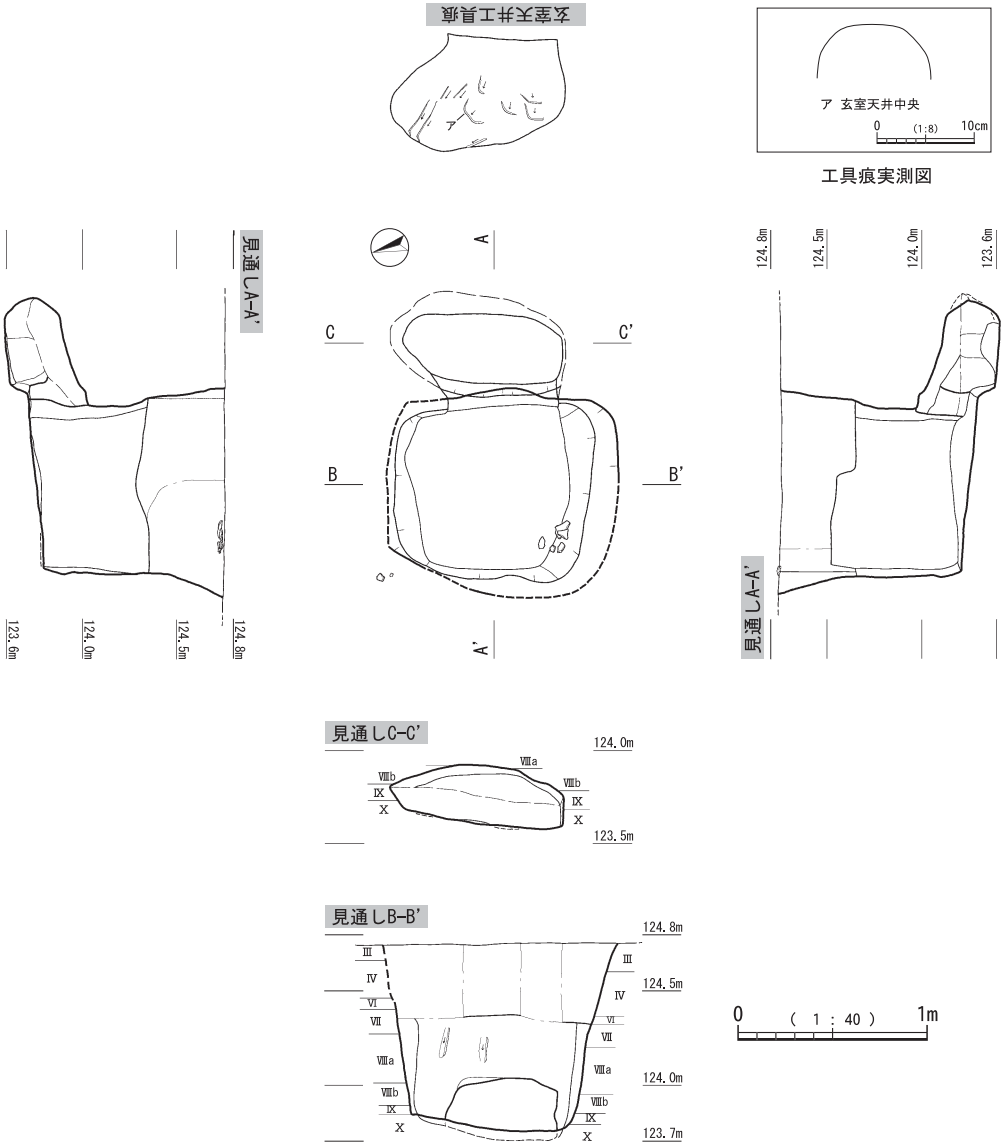
検　出 状　態	91 号墓と同時に検出した。玄室天井は良好な状態で残存していた。

	竪　　坑（cm）			羨　　道（cm）			玄　　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨　門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	112	122	100	56	32	6	54	92	60	30
推　定				－	－	－	－	－	－	－

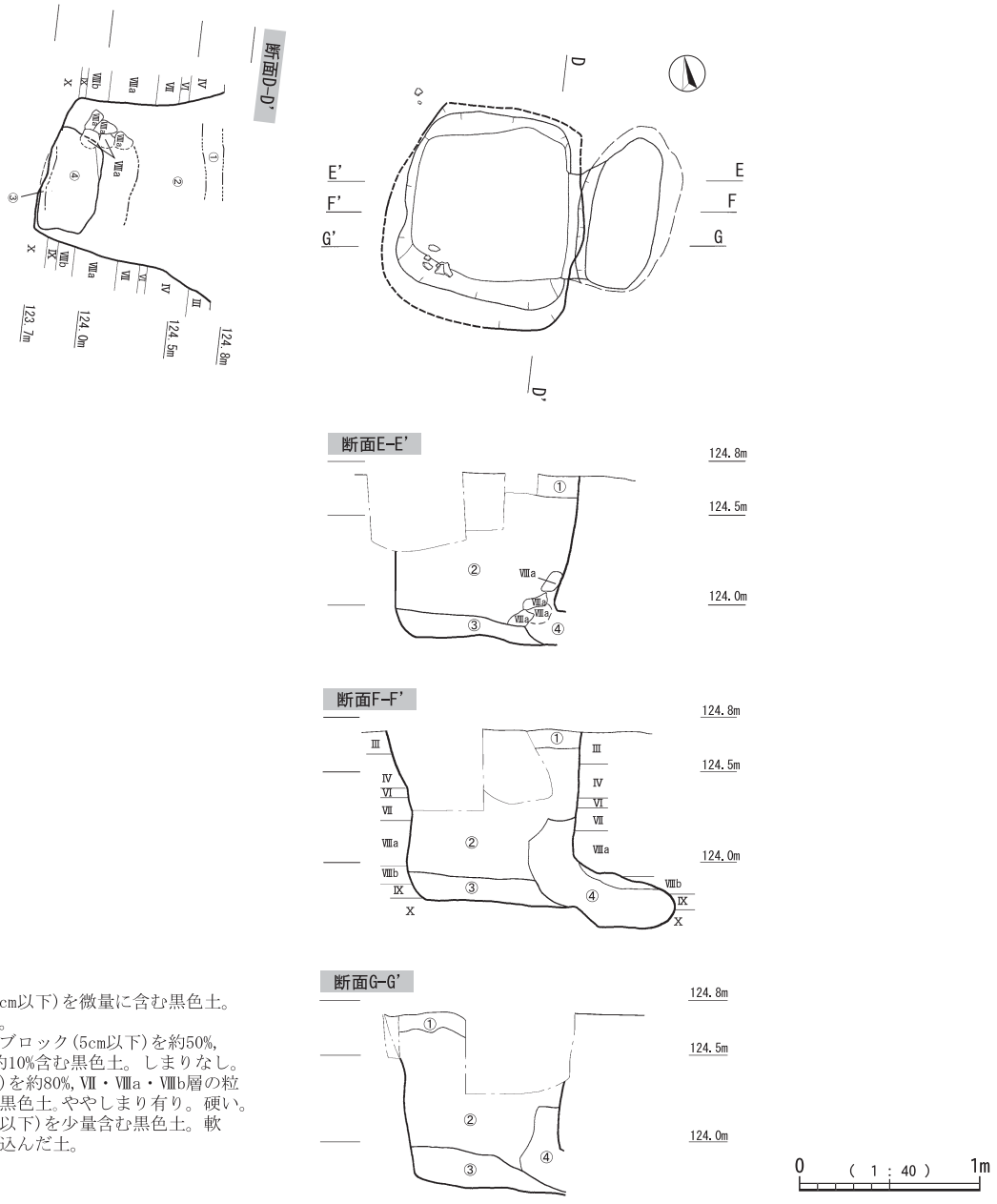
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	ⅧaⅧb	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　　要	【竪坑】 床面は右側へ向かって低くなっている。Ｄ軸断面において，羨門の左側にⅧa層のブロックがみられ，硬い埋土③の上に位置しており，閉塞材との関連性が想定される。 【玄室】 竪坑よりも一段深くなっており，竪坑の大きさと比較して規模が小さい。
工　具　痕	玄室天井の羨道から奥方向へ掘削した痕が残っている。 アは幅約 12 ㎝で方形を呈する。
赤色顔料	未検出
炭　化　物	未検出
人　　骨	未検出

出土遺物	竪坑上面	全て壺，または坩と考えられる胴部片である（非掲載）。同一個体は周辺では出土していない。
	竪坑埋土内	なし
	玄　室　内	なし
備　　考		－



第 212 図　92 号地下式横穴墓(1)



第 213 図　92 号地下式横穴墓(2)

９３号地下式横穴墓

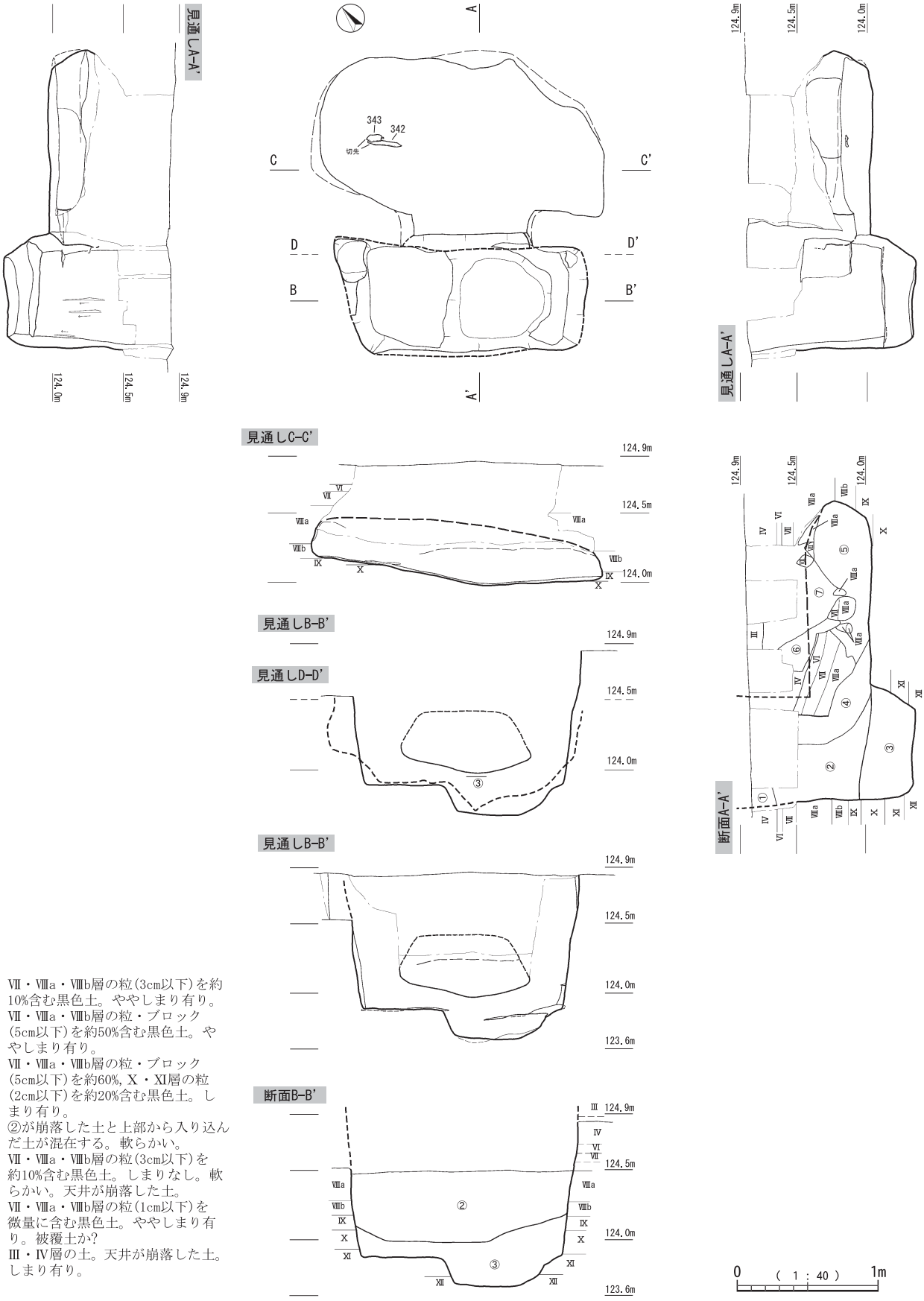
検出区	H-39	玄室開口方向	北東
分　類	Ｂ１		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分の攪乱を取り除いて検出した。羨道の天井部分は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	76	170	110	90	－	25	120	206	145	－
推　定	80	165	125	－	45	－	－	－	－	45

竪坑最下層	Ⅻ	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形（やや不整形）		
玄室床面層	Ⅸ・Ⅹ	玄室断面形	方形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は右側が深くなっており，それを埋めるように埋土③が入っている。埋土③は硬くしまりがあり，この上面が閉塞時の床面と考えられる。左右には，抉りがみられる。羨道は横幅が狭く，玄室との境が明瞭である。 【玄室】 横幅２ｍ，縦幅が 1.5 ｍ以上ある規模の大きい玄室である。左側に短剣と異形鉄器を副葬していた。鉄器は床面と同じ高さにあり，床面には硬い埋土はみられなかった。
工具痕	天井が崩壊したブロックでみられた。幅は不明だが，先端は方形を呈していた。
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	短剣１点，異形鉄器１点が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約60%, Ⅹ・Ⅺ層の粒(2cm以下)を約20%含む黒色土。しまり有り。
④ ②が崩落した土と上部から入り込んだ土が混在する。軟らかい。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。しまりなし。軟らかい。天井が崩落した土。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。被覆土か?
⑦ Ⅲ・Ⅳ層の土。天井が崩落した土。しまり有り。

第214図　93号地下式横穴墓

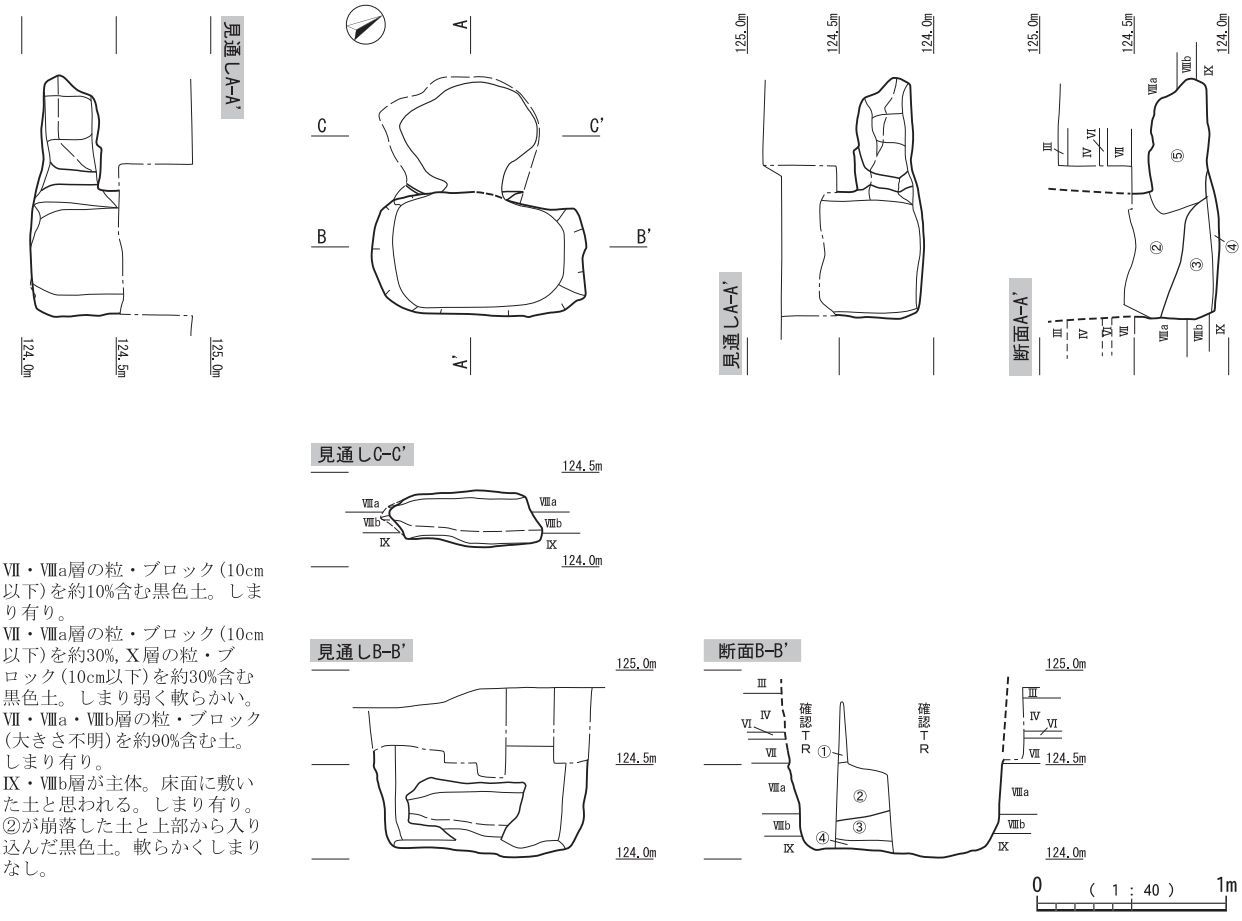
９４号地下式横穴墓	検出区	H-39	玄室開口方向	西北西
	分　類	Ｂ２		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分の攪乱を取り除いて検出した。羨道天井が一部分は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	65	115	80	60	32	6	56	80	62	30
推　定	70	120	90	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	Ⅸ	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	Ⅸ	玄室断面形	長方形？		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 横幅は玄室の横幅より広い。床面に近い埋土③はⅧ層を主体としており，硬くしまっている。玄室はⅧ層を掘削して構築されており，埋土③は玄室を掘削した際の排出土と考えられる。その硬さなどから，上面が閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 羨道・玄室とも小規模である。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%, X層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%含む黒色土。しまり弱く軟らかい。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(大きさ不明)を約90%含む土。しまり有り。
④ Ⅸ・Ⅷb層が主体。床面に敷いた土と思われる。しまり有り。
⑤ ②が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土。軟らかくしまりなし。

第215図　94号地下式横穴墓

９５号地下式横穴墓

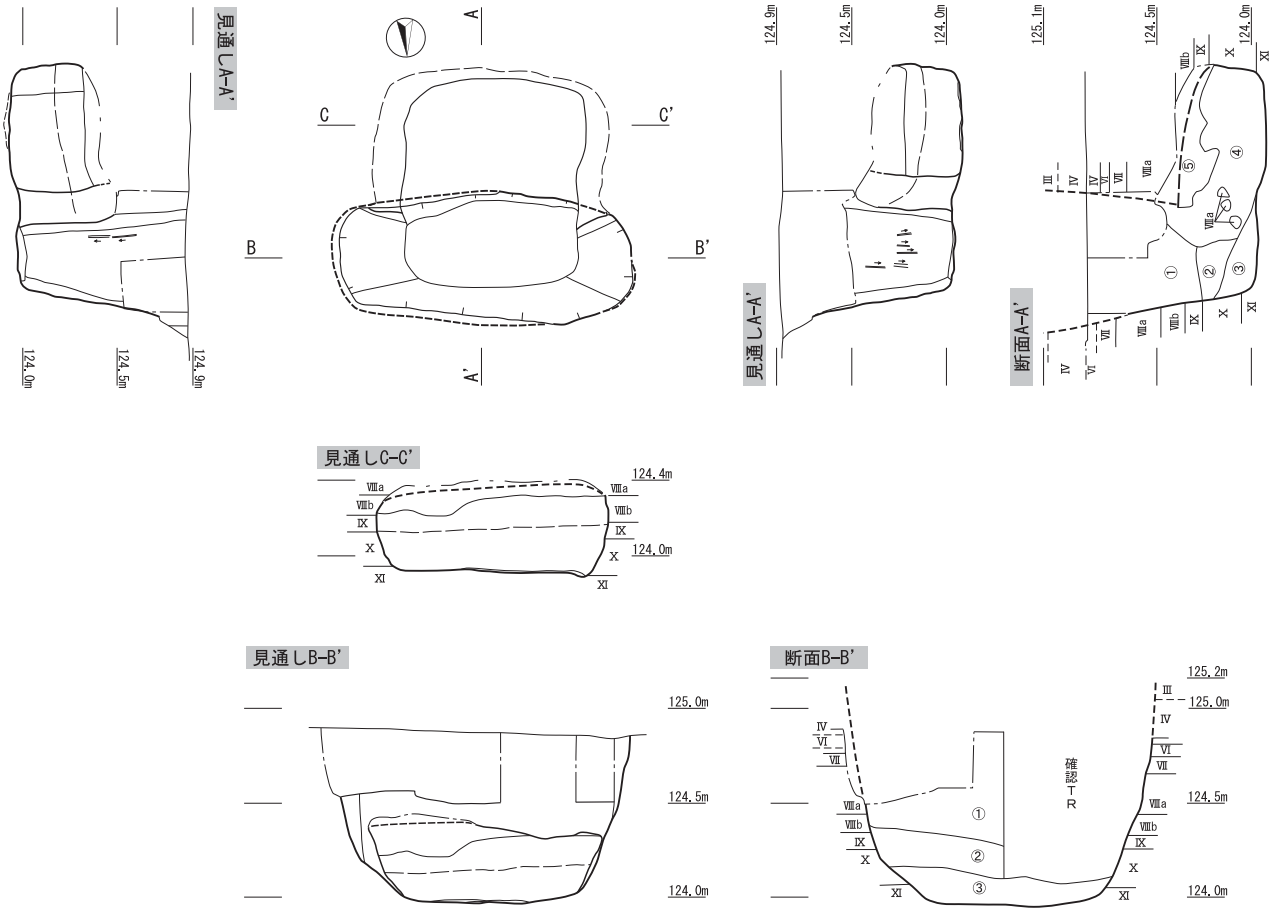
検出区	H-39	玄室開口方向	南南西
分　類	C		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が多く混在する部分周辺の攪乱を取り除いて検出した。玄室天井は，実測後に崩落した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	72	160	70	120	－	－	64	124	79	－
推　定	75	165	110	－	40	－	－	－	－	40

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	逆台形？
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 横幅は玄室と比べて広い。床面近くの埋土③はX・XI層を主体とし，大変硬くしまっている。玄室はX・XI層を掘削して構築しており，埋土③はその排出土と考えられる。 【玄室】 羨門とほぼ同じ幅である。羨道との境界は不明瞭である。竪坑と床面はほぼ同じである。羨道の床面は一段高い。
工具痕	竪坑側面に下方向へ削った痕がみられるが，先端の形状が分かる明瞭な工具痕はみられない。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。X層ブロックを少量含む。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%,Ⅸ・X層を約20%含む黒色土。しまり有り。
③ X・XI層が主体。少量のⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒含む。非常にしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を少量含む黒色土。軟らかくややしまりがある。①より軟らかい。
上部から入り込んだ土と竪坑が崩落した土。
⑤ 崩落ブロック。天井から落ちたⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の土。

第216図　95号地下式横穴墓

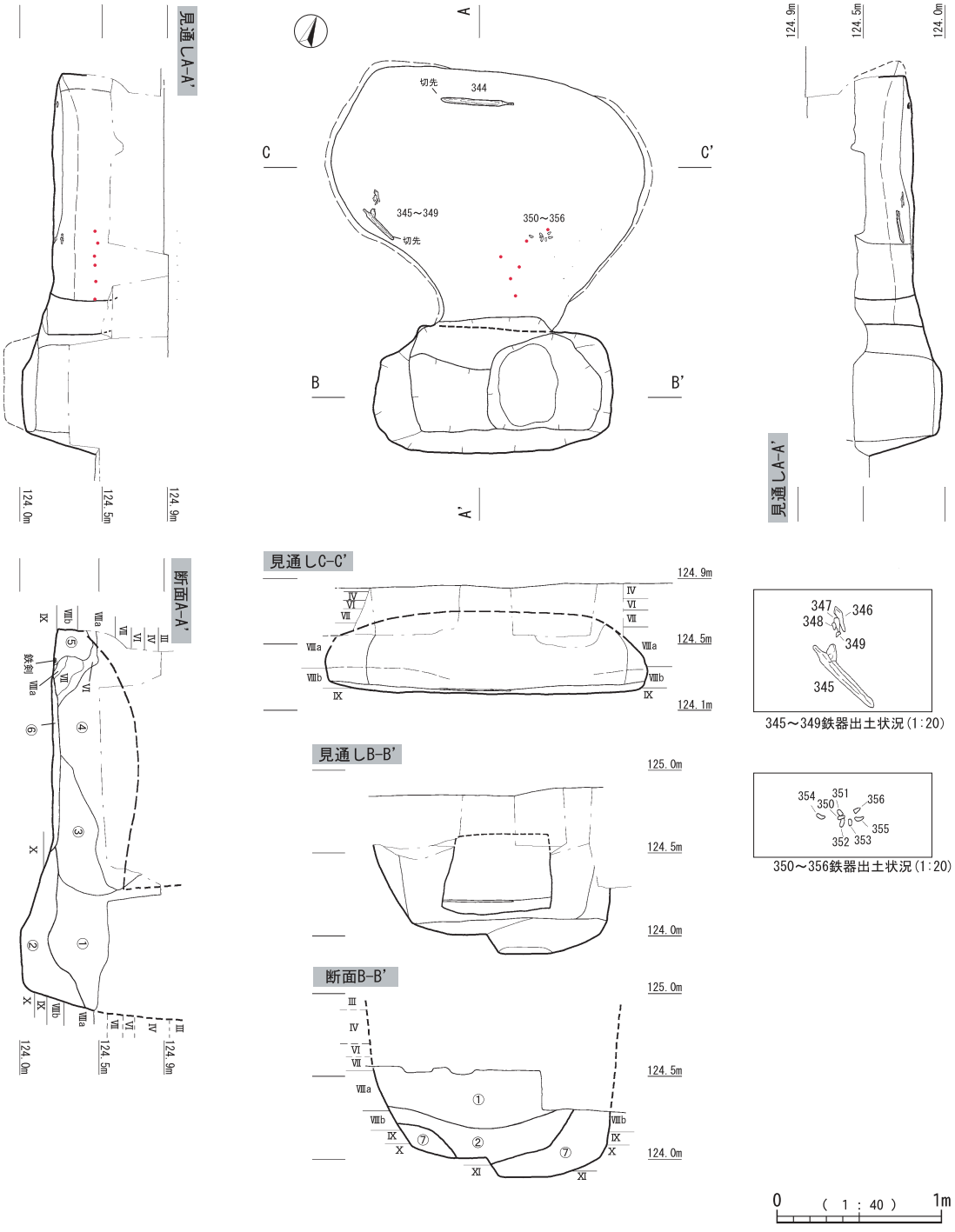
102号地下式横穴墓	検出区	H-40	玄室開口方向	北北西
	分　類	B１		

検出状態	確認調査で竪坑部分を検出し，玄室はトレンチャーによる攪乱を取り除き検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	76	144	54	64	－	16	128	200	144	－
推　定	80	155	100	－	50	－	－	－	－	50

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸方形
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	隅丸長方形（楕円形に近い）		
玄室床面層	Ⅸ	玄室断面形	隅丸長方形（レンズ状）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	あり

概　要	【竪坑】 床面の右側は一段深くなっている。横幅は玄室と比較し，狭い。埋土⑦はⅦ・Ⅷ層の土を主体であり，Ⅶ・Ⅷ層の土を含む割合が埋土②とは明らかに異なる。竪坑を埋め戻した際の土と考えられる。これらの埋土の違いから，掘り返しが行われた可能性がある。 【玄室】 床面はほぼ平坦である。竪坑から玄室に流れ込んだと考えられる埋土から，赤色顔料が検出された。検出位置から，竪坑埋土中にあったものが流入したと考えられる。鉄器は３か所に分かれて出土しており，最も羨道に近い円錐状鉄器７点は，軟らかい黒色土の上から出土した。玄室床面はⅧ層などを削った土を整地して構築されていた。天井が崩落した際の土を観察すると，奥側と羨門側ではⅥ層が含まれ，中央部分では含まれないため，本来の玄室天井は中央部分が高くなっていたと推定される。
工具痕	天井が崩落したブロックに方形状のものが残存していた。幅は約 4.5 ㎝で方形を呈していた。
赤色顔料	玄室でパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	未検出
人　骨	骨粉と思われる白い粒が検出されたが，人骨と同定することはできなかった。
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，短剣１点，鉄鏃４点（圭頭鏃４点），円錐形鉄器７点が出土した。
備　考	一部平成 20 年度の確認トレンチ内で検出。



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。少量のⅩ層を含む。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%含む黒色土。上部から入り込んだ土と竪坑が崩落した土が混在する。軟らかい。ややしまり有り。
④ 黒色土。Ⅳ層が主体。軟らかい。ややしまり有り。天井が崩落した土。
⑤ Ⅶ・Ⅷa層の粒が混在する。黒色土が少量含む。ややしまり有り。天井と側壁の崩れ。
⑥ Ⅶ・Ⅷa層が主体。ややしまり有り。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約90%含む黒色土。しまり有り。少量のⅩ層を含む。

第 217 図　102 号地下式横穴墓

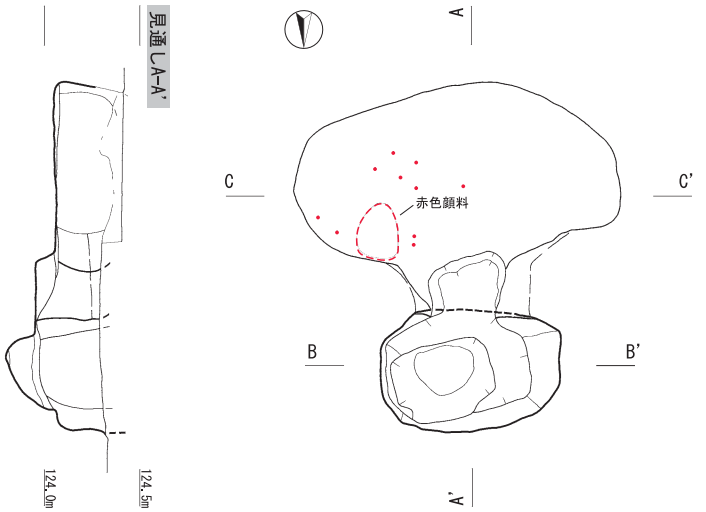
103号地下式横穴墓	検出区	H-40	玄室開口方向	南
	分　類	A		

検出状態	確認調査で検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	65	94	54	60	－	22	88	172	110	－
推　定	75	115	120	－	50	－	－	－	－	40

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅶ・Ⅷa ？	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅸ・Ⅹ	玄室断面形	隅丸長方形（レンズ状）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 Ⅷb層まで削平を受けている。床面は玄室より深く，竪坑左側は一部低くなっている。埋土②は，Ⅷ層が主体でⅨ・Ⅹ層の土を少量含んでおり，玄室が構築されている層と同一である。そのため，埋土②は玄室を掘削した排出土で，その上面は閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 羨道床面は玄室と比べ一段深い。玄室左側を中心に赤色顔料を検出した。埋土④の中の，床面から 20cm の高さの範囲に点在していた。比較的量が多く，粒も大きい。
工具痕	未検出
赤色顔料	玄室でパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備　考	H20 年度の確認トレンチ内で検出。



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む黒褐色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒褐色土。しまり有り。Ⅹ・Ⅺ層を少量含む。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む褐色土。Ⅶ層の割合が高く褐色強い。上部から入り込んだ土。①が崩落した土を主体とする。軟らかい。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を少量含む黒色土。しまり弱く軟らかい。
※①②③は竪坑埋土。④は竪坑,地表などから入り込んだ土。

0 (1 : 40) 1m

第 218 図　103 号地下式横穴墓

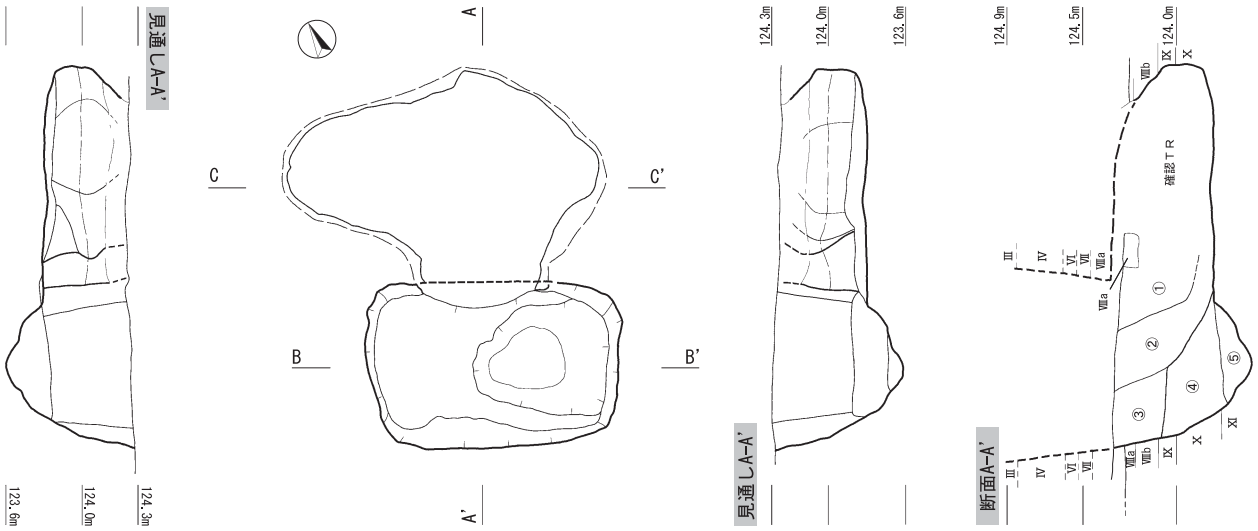
104号地下式横穴墓	検出区	H-40	玄室開口方向	北北東
	分　類	A		

検出状態	確認調査で検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	88	133	74	72	－	22	88	170	110	－
推　定	100	150	130	－	55	－	－	－	－	50

竪坑最下層	Ⅻ	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa？	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面の右側が一段深くなっている。断面Ａ軸でみると，竪坑から埋土②が玄室に流れ込んだ後に，黒色土の埋土①が流れ込んでいる。 【玄室】 羨道と玄室の境が明瞭であり，左側に張り出しが強い形状である。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備　考	H20 年度の確認トレンチ内で検出。



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を微量に含む黒色土。しまり弱く軟らかい。上部から入り込んだ土。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。軟らかい。③が崩落した土を主体とし,上部から入り込んだ黒色土が混ざったと考えられる。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約40%含む黒色土。ややしまり有り。少量のⅩ・Ⅺ層を含む。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約70%含む黒色土。少量のⅩ．Ⅺ層を含む。ややしまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%,Ⅹ・Ⅺ層を約40%含む黒色土。しまり有り。やや硬い。

0 (1 : 40) 1m

第219図　104号地下式横穴墓

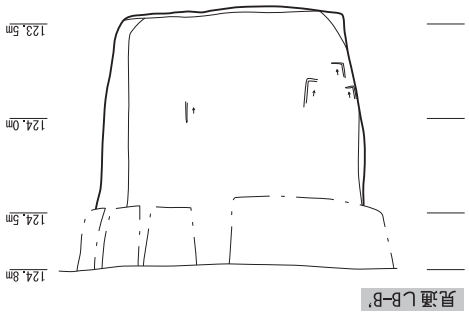
105号地下式横穴墓	検出区	H-40	玄室開口方向	西
	分　類	B１		

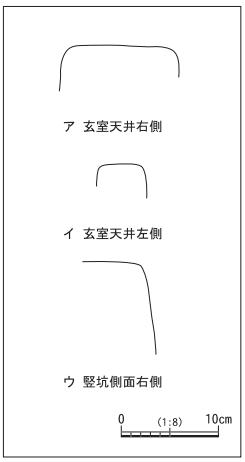
検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分の攪乱を取り除き検出した。ほぼ良好な状態で残存していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	100	158	130	82	58	40	66	174	106	40
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

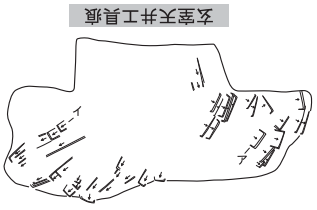
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	X	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	XII	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

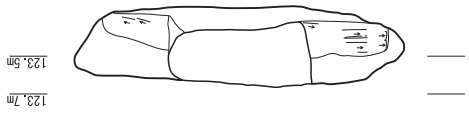
概　要	【竪坑】 XI層下面までほぼ直線的に掘り込まれている。断面Ａ・Ｄ・Ｅ・Ｆをみると，羨道前の中央付近は埋土が崩れており，玄室内に流れ込んでいる。閉塞材が消失した後に流れ込んだものと推定される。 【玄室】 天井はX層でこの墓域中でもかなり深い層に構築されており，良好な状態で残存していた。竪坑より羨道および玄室が 20cm ほど低く造られている。
工具痕	玄室天井は，中央から左奥付近や右方向に掘削した痕がみられる。玄室・竪坑側面にも多く残っている。いずれも方形状のものである。玄室天井と竪坑側面にはア・ウが，玄室天井と竪坑の羨道近くにはイがみられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

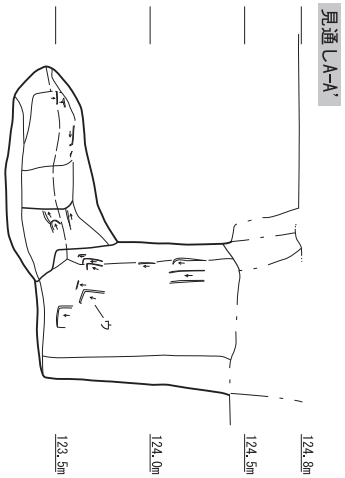


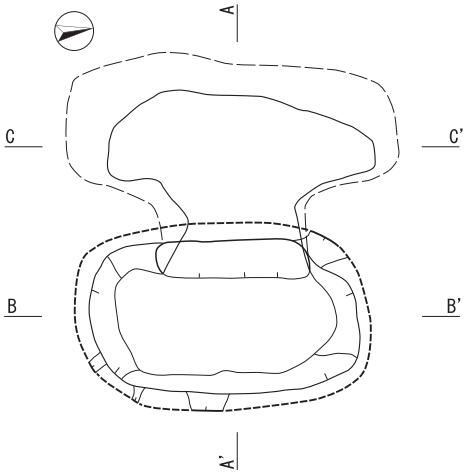


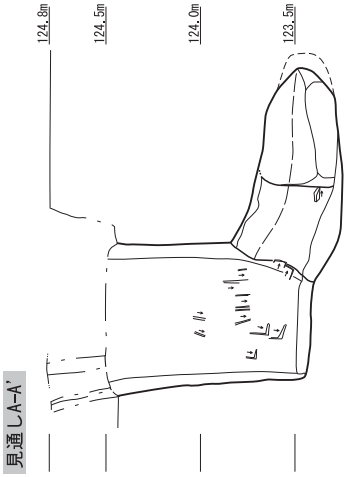
工具痕実測図

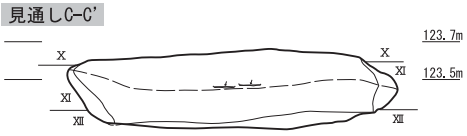


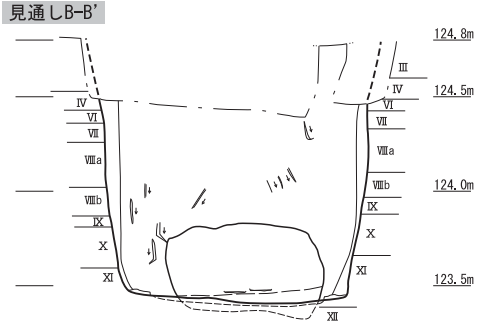


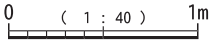




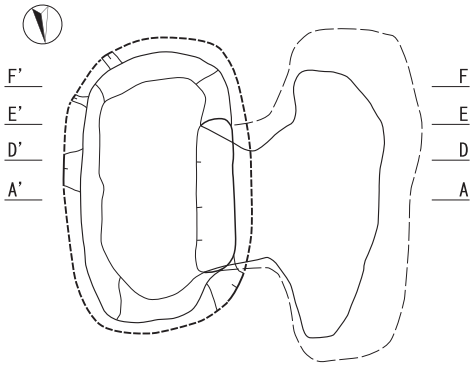


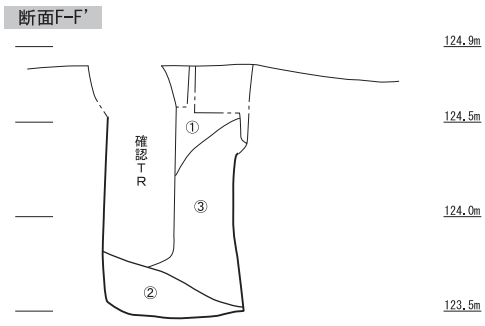


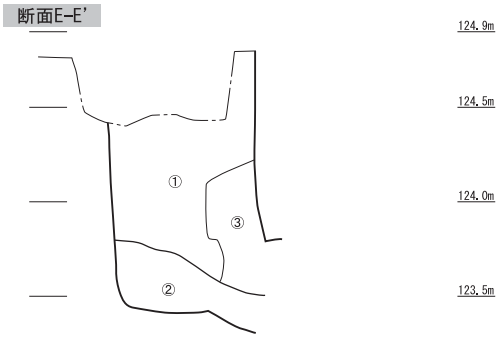


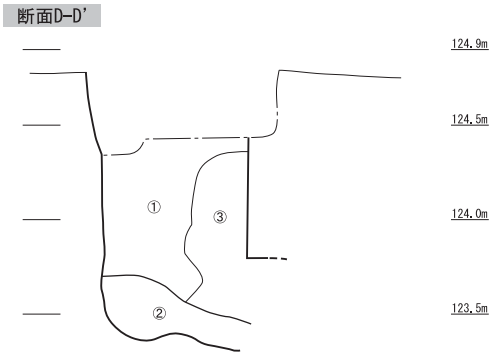


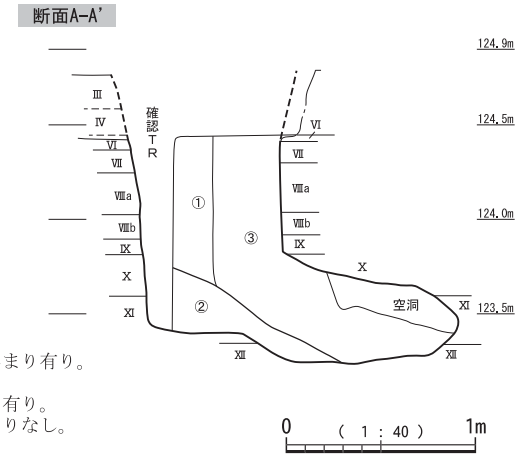
第220図　105号地下式横穴墓(1)











① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒褐色土。ややしまり有り。
(③よりは明白に硬い)
② Ⅹ・Ⅺ層の粒・ブロック(10cm以下)主体の埋土。黒色土も含む。しまり有り。
③ ①が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。軟らかくしまりなし。

0 (1 : 40) 1m

第221図　105号地下式横穴墓(2)

106号地下式横穴墓

検出区	I-40	玄室開口方向	北
分　類	B１		

検出状態	耕作土下の土器が集中する部分周辺の攪乱部分を取り除き検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	98	144	110	84	－	12	100	190	112	－
推　定	100	150	120	－	45	－	－	－	－	40

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅸ	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要

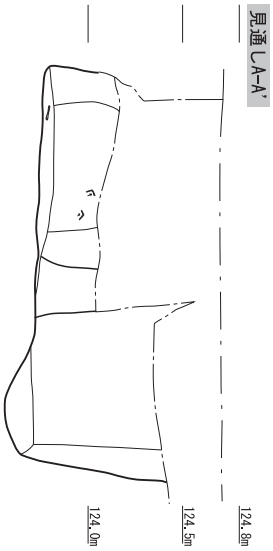
【竪坑】
床面左側が一段深い。上面はほぼ黒色土で覆われている。埋土⑤はややしまりがあり，Ⅶ・Ⅷ層を主体としてⅨ・X層を少量含んでいる。これらは，玄室を構築する層とほぼ同じであることから，埋土⑤は玄室を構築した際の排出土と考えられる。また，その上面は閉塞時の床面と推定される。遺構はⅧ層部分に構築されているが，埋土中に混在するⅧ層が少ないことから，地表に残されたものと推定される。

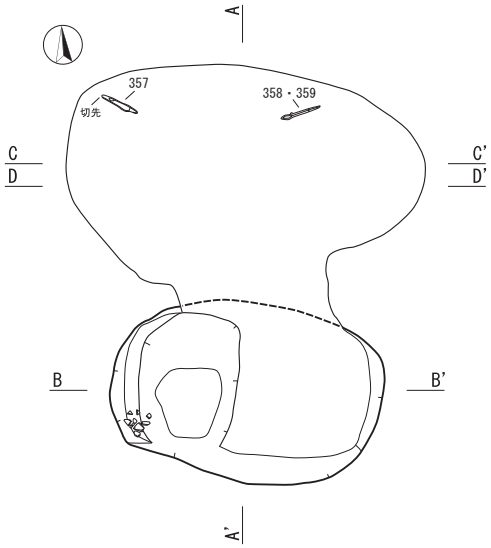
【玄室】
羨道の左右壁の長さに違いがある。天井が崩落したブロックは玄室の床面付近にあり，玄室に竪坑の埋土が流入する前に，天井は崩落していたと考えられる。短剣と鉄鏃が出土した。玄室の床面が竪坑より高く造られている。

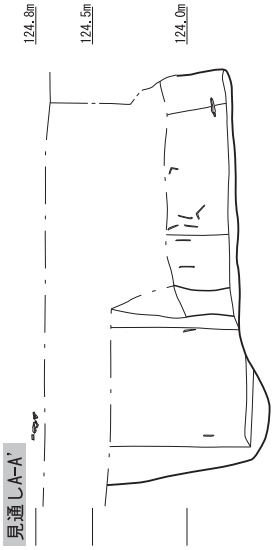
工具痕	玄室内に方形状のものが多く残っているが，幅がわかるものはみられなかった。
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。
人　骨	未検出

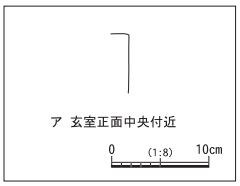
出土遺物	
竪坑上面	坩または高坏の小片が出土した（非掲載）。
竪坑埋土内	なし
玄室内	短剣１点，鉄鏃２点（鳥舌鏃１点，矢柄片１点）が出土した。

備　考	－

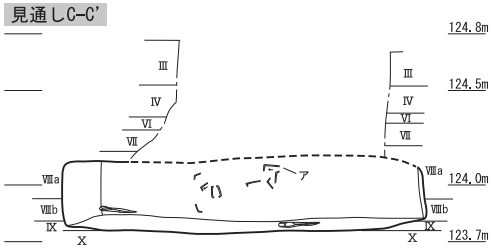


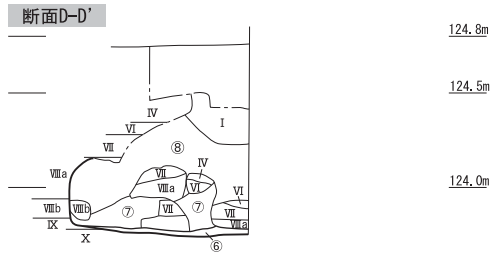


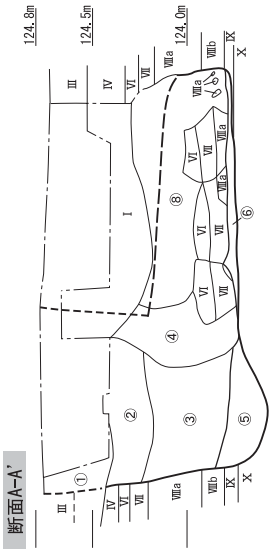


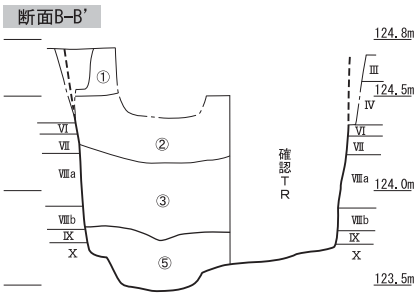


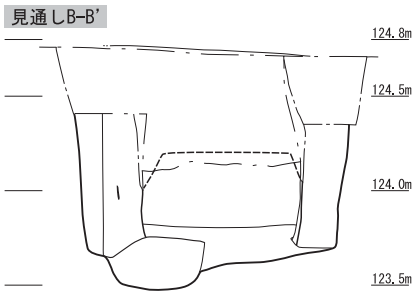
工具痕実測図

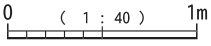












① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（5mm以下）を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（5cm以下）を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（10cm以下）を約40%含む黒色土。ややしまり有り。
④ ②⑤が崩落した土。しまり弱い。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（10cm以下）を約50%, Ⅸ・Ⅹ層を約20%含む黒色土。しまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（3cm以下）を少量含む黒色土。屍床と思われる。しまり有り。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（3cm以下）を約10%含む黒色土。天井が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。ややしまり有り。
⑧ Ⅲ・Ⅳ層が主体の黒色土。天井が崩落した土。ややしまり有り。

第222図　106号地下式横穴墓

107号地下式横穴墓

検出区	H-40	玄室開口方向	南南東
分　類	C		

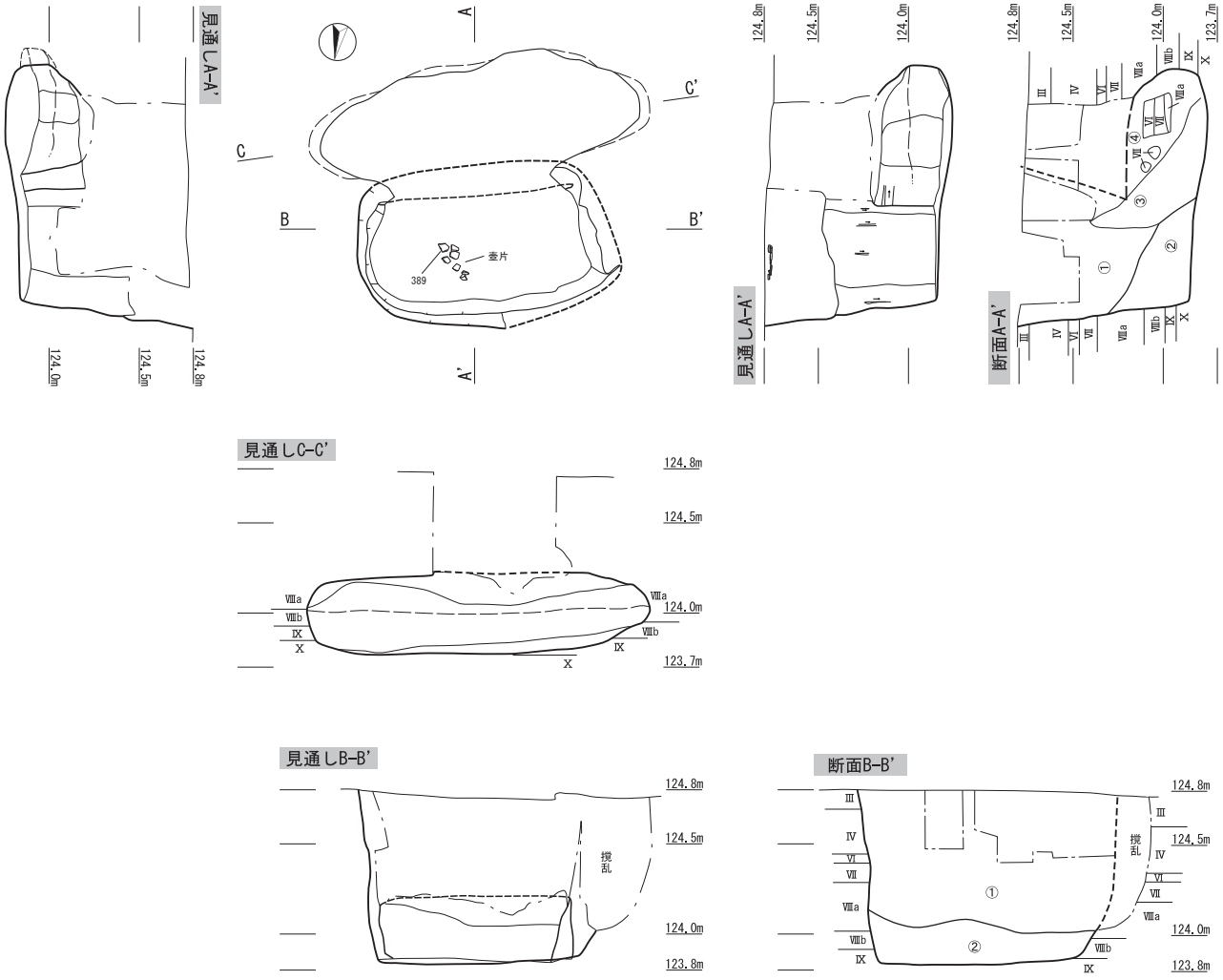
検出状態	耕作土下の土器出土付近の攪乱部分を取り除き検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	90	140	98	105	－	10	64	190	74	－
推　定	－	－	－	－	40	－	－	－	－	45

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅸ・X	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室に向かって徐々に低くなる。床面に近い埋土②は，Ⅶ・Ⅷ層が主体で硬くしまった状態であり，この上面が閉塞時の床面であったと考えられる。 【玄室】 横幅は竪坑より広く造られている。埋土中には，Ⅵ～Ⅷa層が層序のままブロックで落下しており，このことから，天井はⅧa層であったと推定される。
工具痕	竪坑壁に下方向に削った跡のみ残っており，先端の形状が分かるものはみられなかった。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出

出土遺物		
	竪坑上面	竪坑検出面で壺片が出土した。そのうち1点は389である。
	竪坑埋土内	なし
	玄室内	なし
備　考		－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。Ⅹ層の粒(3cm以下)を少量含む。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約80%,Ⅹ層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り。
③ ①が崩落した土と上部埋土が混在する。しまり弱くやや軟らかい。
④ 黒色土。微量のⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)含む。上部にあった土(Ⅲ・Ⅳ層)と思われる。ややしまり有り。

第223図　107号地下式横穴墓

108号地下式横穴墓

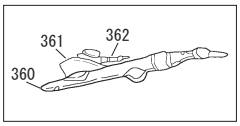
検出区	I-40	玄室開口方向	北
分　類	B１		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺の攪乱を取り除き検出した。玄室天井は崩落していた。

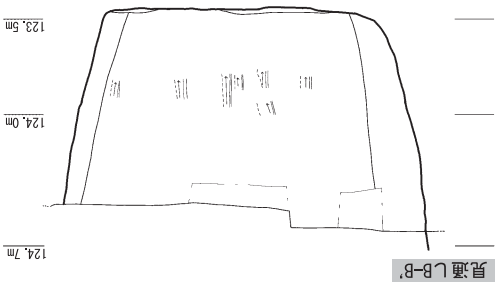
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	120	193	107	104	－	17	108	222	125	－
推　定	－	－	120	－	65	－	－	－	－	60

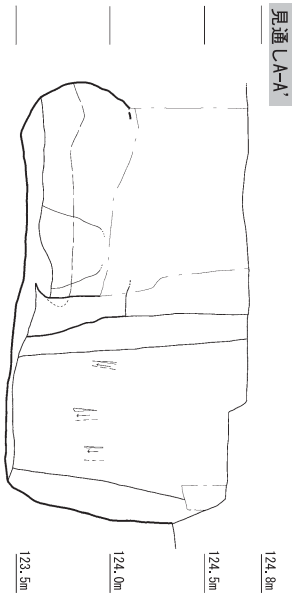
竪坑最下層	X	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅳ・Ⅵ	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅸ・X	玄室断面形	隅丸長方形（レンズ状）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

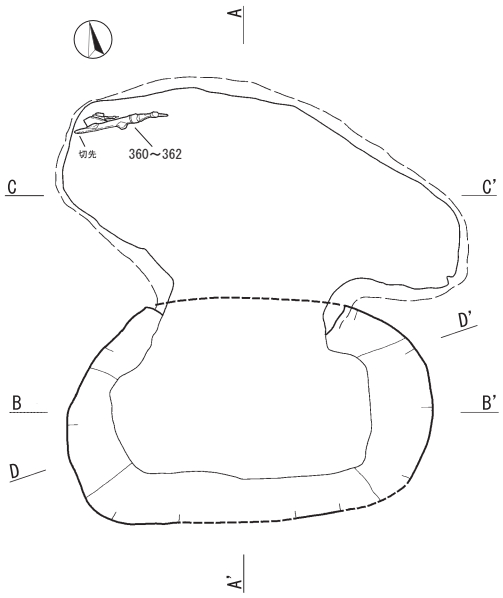
概　要	【竪坑】 床面は玄室より低く構築されている。床面に近い埋土②はⅦ・Ⅷ層が圧縮された状態であった。玄室が構築される主な層はⅦ～Ⅸ層であり，埋土②とほぼ同じである。そのため，埋土②は玄室を掘削した際の排出土であり，その上面は閉塞時の床面と考えられる。竪坑の埋土内には，Ⅶ・Ⅷ層の土が多く含まれる。 【玄室】 横軸は竪坑のものとずれており，左側の奥行きが広くなる。床面に屍床が造られている。玄室と竪坑の横軸はずれている。玄室左奥で鉄剣と鉄鏃が出土した。
工具痕	竪坑壁に下方向に削った跡のみ残る。先端の形状がわかるものはみられなかった。
赤色顔料	玄室及び竪坑埋土からパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	竪坑埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，鉄鏃２点（圭頭鏃２点）が出土した。
備　考	－

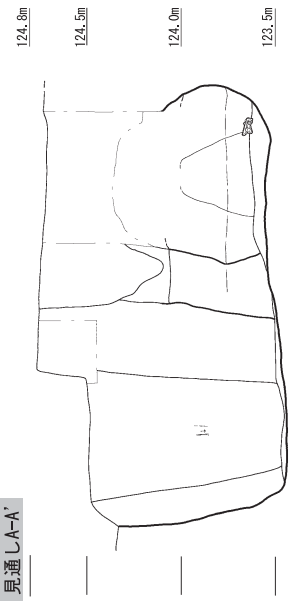


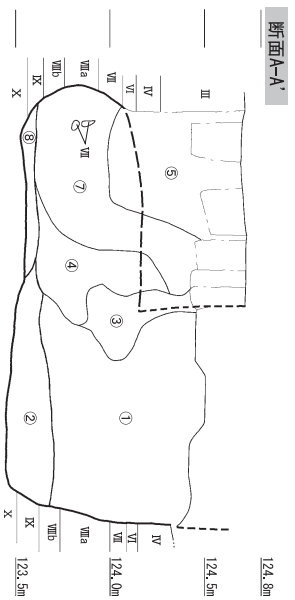
360～362鉄器出土状況（1:20）

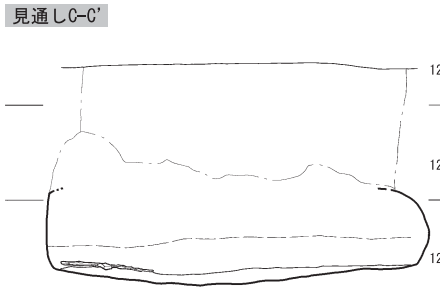


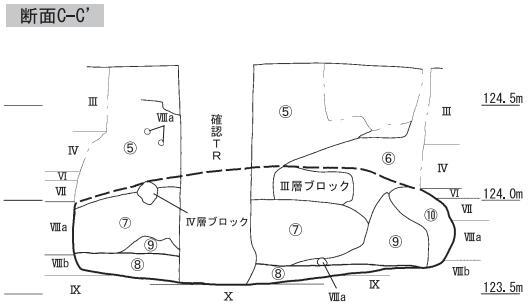


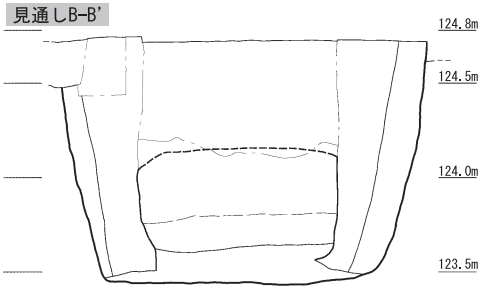


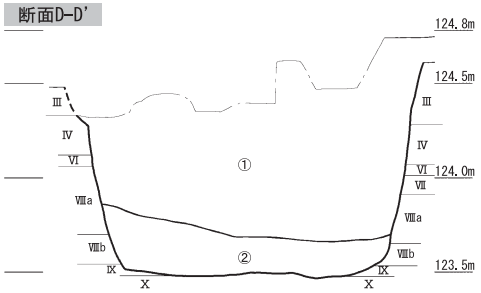


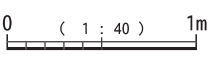












① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約90%含む黒色土。しまり有り。
③ ①が崩落した土。①より黒色強く,軟らかい。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
⑤ Ⅲ層を主体とする。微量のⅦ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を含む。やや茶褐色。しまり有り。
⑥ Ⅳ層を主体とする。微量のⅦ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を含む。黒色。しまり有り。
⑦ Ⅲ・Ⅳ層が混在する。しまり弱い。
⑧ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。屍床と思われる。
⑨ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約0%含む黒色土。壁崩れの土が混在する。しまり弱い。
⑩ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約30%含む黒色土。側壁が崩落した土。しまり弱い。

第224図　108号地下式横穴墓

１０９号地下式横穴墓

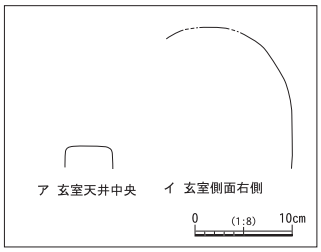
検出区	I-40	玄室開口方向	北東
分　類	A		

検出状態	トレンチャーによる攪乱部分を取り除き，竪坑を検出した。概ね残存状態は良好であった。

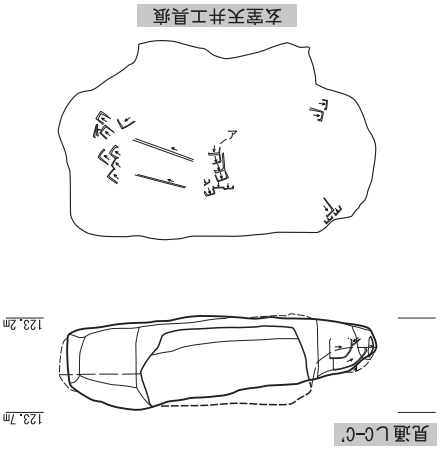
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	120	161	130	88	46	30	84	164	114	44
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

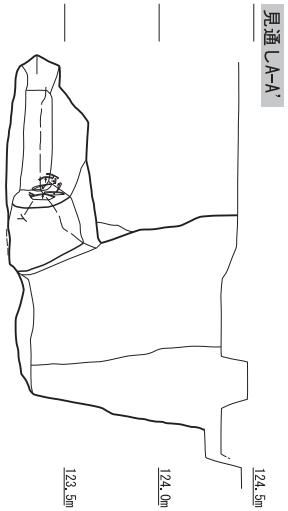
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形（楕円形に近い）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

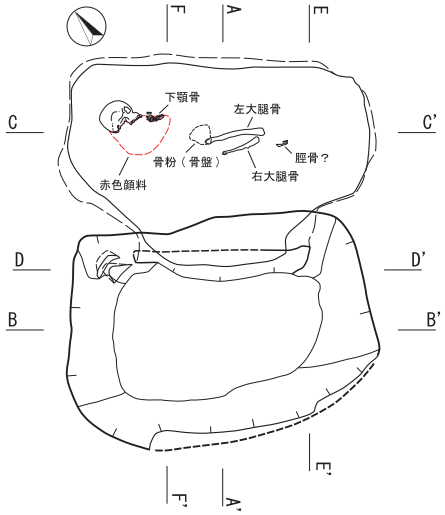
概　要	【竪坑】 横幅は玄室とほぼ同じである。断面Ｄをみると，左側面に抉りが確認できることから，閉塞材との関連性が考えられる。 【玄室】 床面は竪坑より低く掘り込まれている。人骨は大腿骨および頭蓋骨が遺存しており，頭蓋骨付近には赤色顔料がみられた。
工具痕	天井や竪坑抉り部分に方形状の工具痕が，玄室側面にU字形の工具痕が残っていた。
赤色顔料	玄室頭蓋骨付近から水銀朱，右大腿骨付近からパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	未検出
人　骨	頭蓋骨と大腿骨を検出した。伸展葬と考えられる。頭蓋骨付近で赤色顔料を検出した。成人の男性と推定。
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

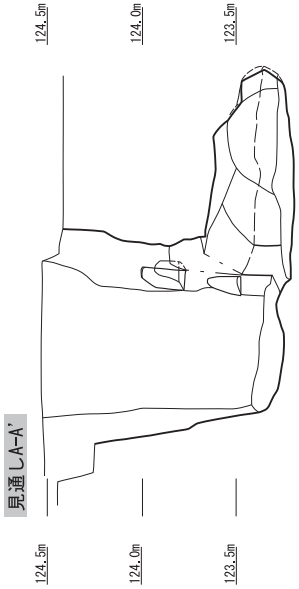


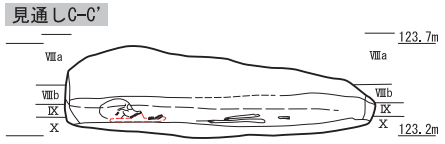
工具痕実測図

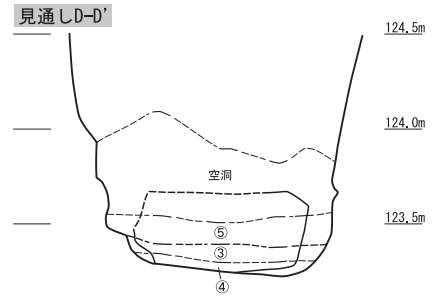


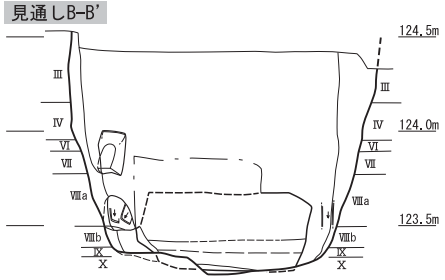


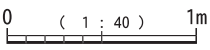




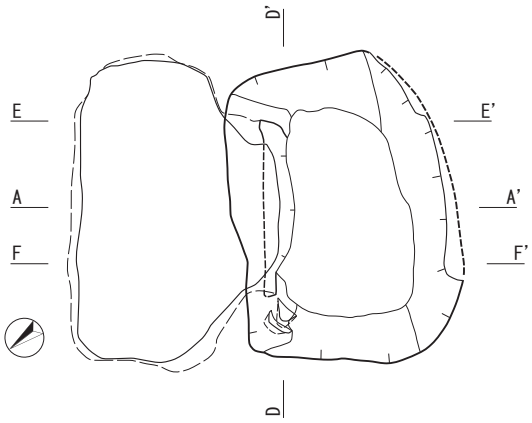


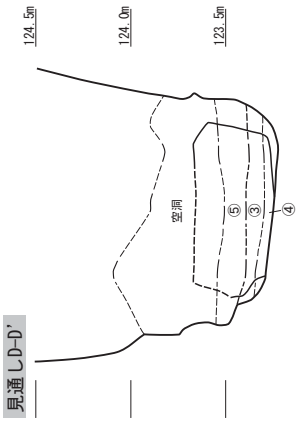


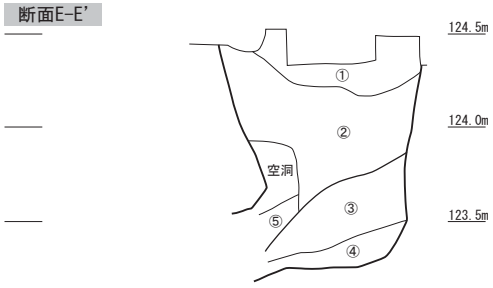


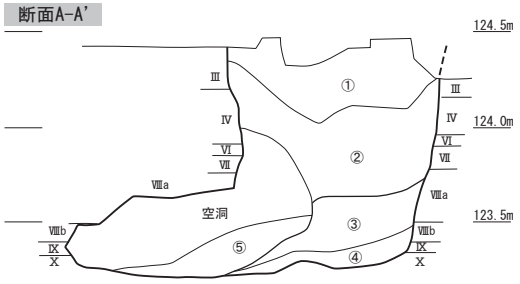


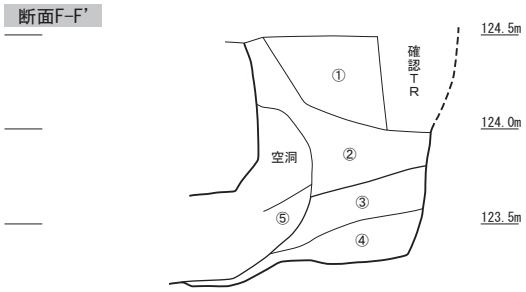
第225図　109号地下式横穴墓(1)











① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。Ⅹ層を少量含む。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約40%含む黒色土。Ⅹ層を少量含む。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約20%含む黒色土。Ⅸ層を含み②よりしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%，Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。しまり有り。
⑤ ②が崩落した土。しまり全くなし。

0 (1 : 40) 1m

第226図　109号地下式横穴墓(2)

110号地下式横穴墓

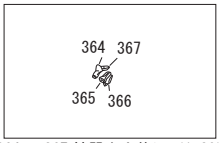
検出区	I-40	玄室開口方向	北
分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺の攪乱を取り除き検出した。玄室天井は崩落していた。

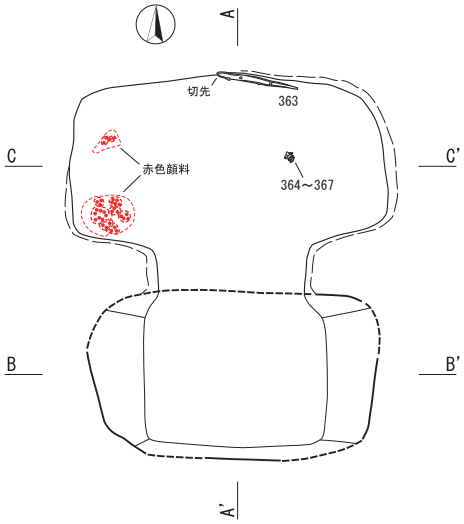
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	88	150	110	88	－	23	98	173	121	－
推　定	－	－	－	－	55	－	－	－	－	55

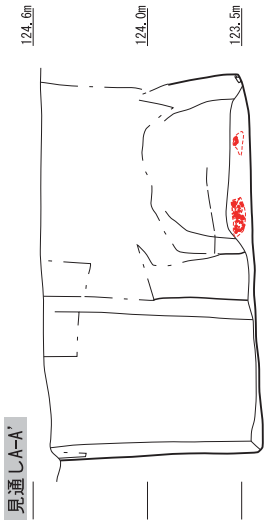
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅸ・X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

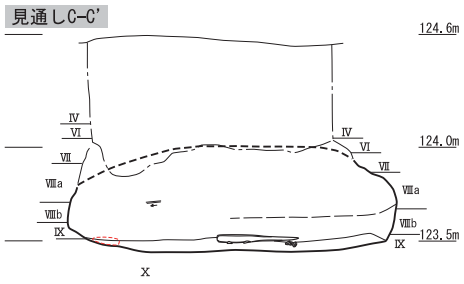
概　要	【竪坑】 床面は玄室の深さとほぼ平坦となる。埋土③はⅦ・Ⅷ層が主体であり，埋土②はⅨ層を主体とするしまりの強い土である。玄室はⅦ～Ⅸ層に構築されているため，埋土②･③は玄室構築時の排出土と考えられる。 【玄室】 横幅は竪坑よりやや広い。赤色顔料が大量にまとまって出土しており，特に，左側に多い。遺跡内で最も出土量が多い。玄室中央部には鉄剣，中央よりやや右に円錐状鉄器が副葬されていた。
工具痕	玄室側面には方形の小さい工具痕が残っていた。
赤色顔料	玄室からパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，円錐形鉄器４点が出土した。
備　考	－

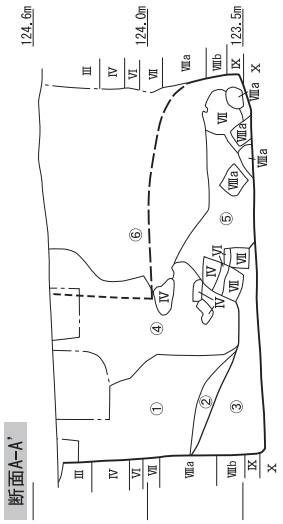


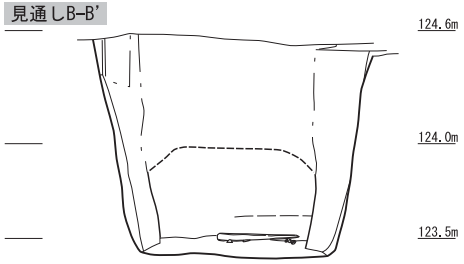
364 ～ 367 鉄器出土状況（1:20）

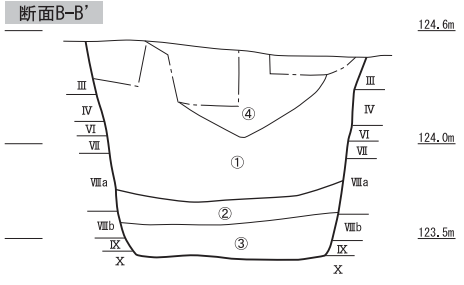


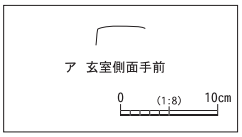






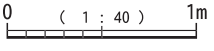






工具痕実測図

① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（15cm以下）を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒（3cm以下）を少量，Ⅸ層を約70%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（10cm以下）を約60%，Ⅸ層を少量含む黒色土。しまり有り。
④ 上部から入り込んだ黒色土が混在する。ややしまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa層の粒（3cm以下）を少量含む黒色土。軟らかい。
⑥ Ⅲ・Ⅳ層と天井が崩落した土。Ⅶ・Ⅷa層の粒などほとんど含まない。ややしまり有り。



第227図　110号地下式横穴墓

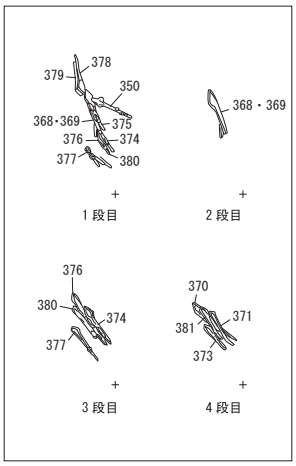
111号地下式横穴墓	検出区	J-40	玄室開口方向	北
	分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層をわずかに含んだ黒色土付近のトレンチャーによる攪乱部分を取り除き検出した。

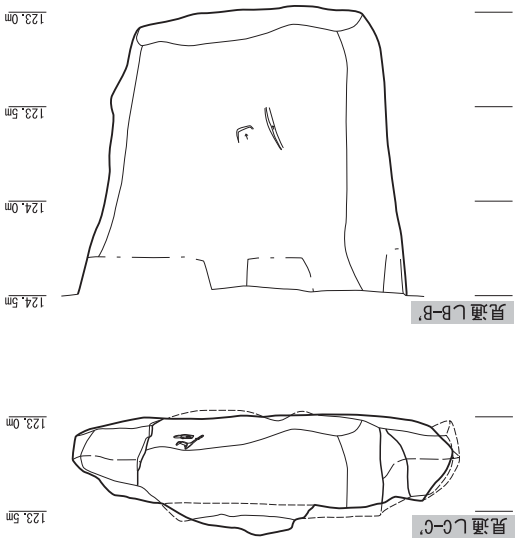
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	124	174	150	130	60	17	94	206	111	－
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	50

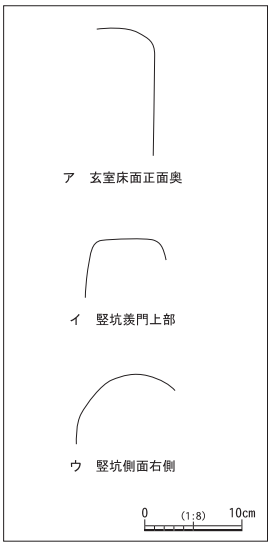
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	台形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 羨道前の埋土⑤は②・③が崩落した土で，上部から流れ込んだ軟らかい黒色土ある。閉塞材が消失した後に，玄室に流れ込んだものと推定される。埋土④は玄室が構築された層と同じであり，玄室構築時の排出土と考えられる。 【玄室】 土の流れ込みがない部分では，頭蓋骨が残存していた。羨道付近で炭化物が出土した。また，土器が１点みられるが埋土中からの出土であり，流れ込んだものと考えられる。鉄鏃が出土したが，調査時に動いた可能性があることから，一部は原位置を保っていないと思われる。
工具痕	竪坑側面や玄室側壁に多く残っている。方形状のものとU字状のものがある。
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室内で検出した。年代測定では，130calAD-245calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	頭蓋骨のみ残存する。成人の男性と推定。
出土遺物　竪坑上面	壺の破片が出土した（非掲載）。
出土遺物　竪坑埋土内	玄室及び竪坑右側で１点ずつ出土した土器片は，いずれも高坏か坩の破片と思われる。竪坑左側羨道近くで出土した小片は，胎土や色調，調整などから，周辺にみられる須恵器片（401・402）と同一個体と考えられる。
出土遺物　玄室内	鉄鏃 14 点（圭頭鏃 13 点，腸抉三角形鏃１点）が出土した。
備　考	－

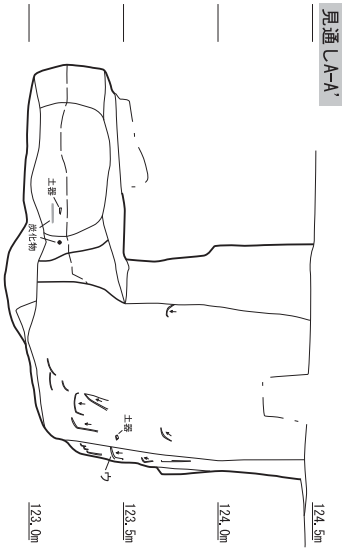


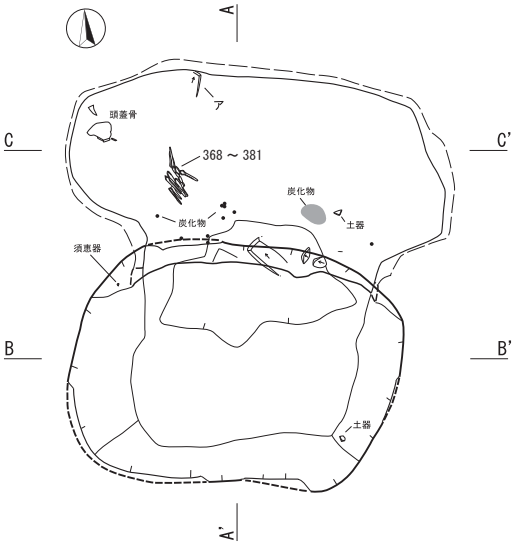
鉄器出土状況（1:20）

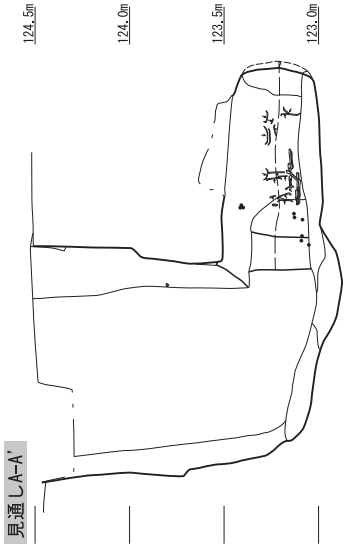


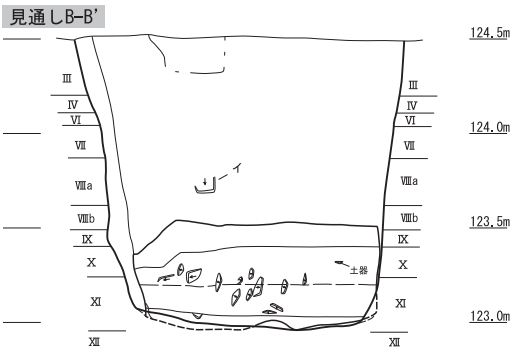


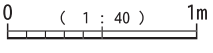
工具痕実測図



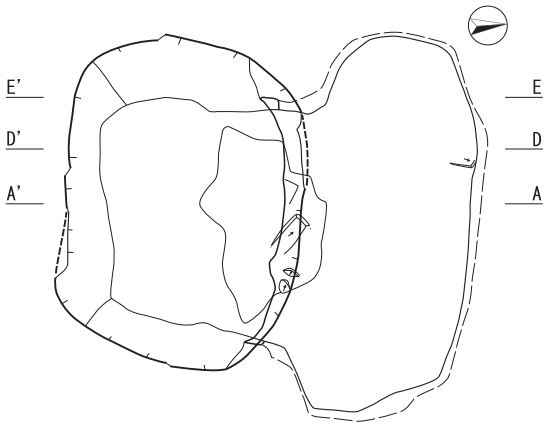


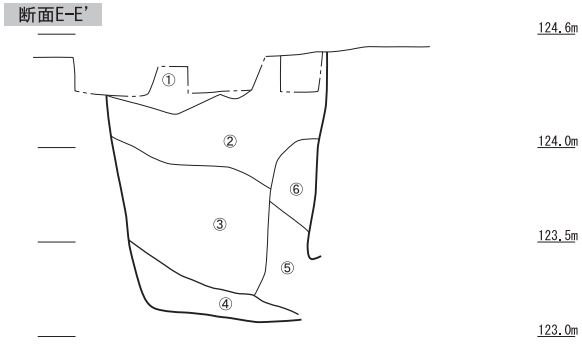


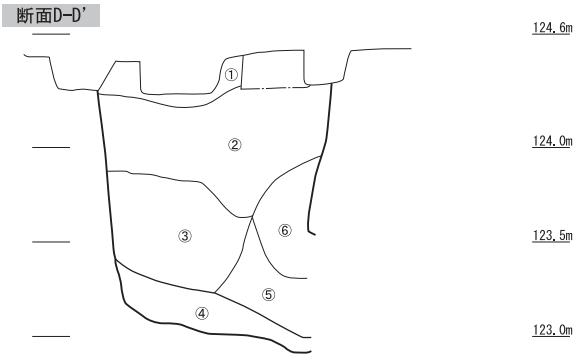


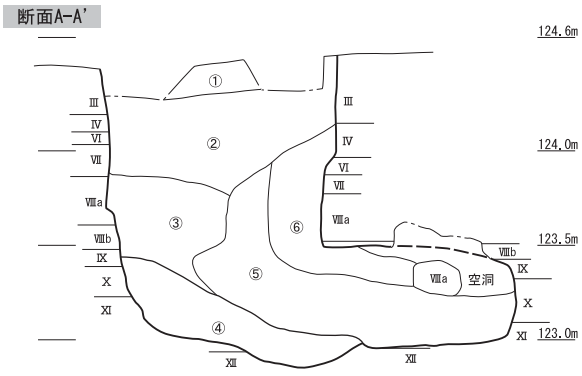


第228図　111号地下式横穴墓(1)









① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)と,Ⅹ層の粒を約5%含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%,Ⅹ・Ⅺ層の粒・ブロック(15cm以下大型多い)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%,Ⅹ・Ⅺ層ブロックを約20%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含みⅨ・Ⅹ・Ⅺ層を主体とする。しまり有り。
⑤ ②③が崩落した土。下位にⅩ・Ⅺ層のブロック目立つ。軟らかくしまりなし。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を微量に含む黒色土。軟らかい。上部から入り込んだ土と思われる。

0 (1 : 40) 1m

第229図　111号地下式横穴墓(2)

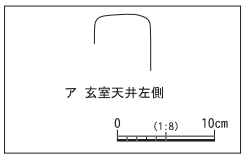
112号地下式横穴墓	検出区	J-40	玄室開口方向	南
	分　類	B 1		

検出状態	わずかなⅦ・Ⅷ層が混在した周辺のトレンチャーによる攪乱を取り除き検出した。羨道付近が一部崩落していた。

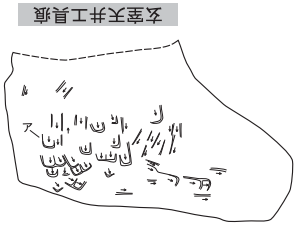
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	108	162	110	86	52	26	72	154	98	48
推　定	－	－	125	－	－	－	－	－	－	－

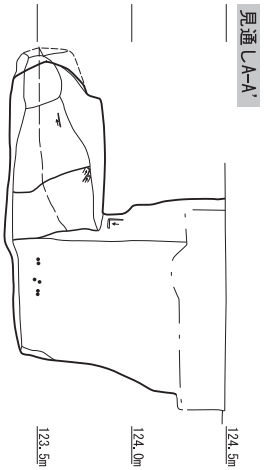
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形（不整形）		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

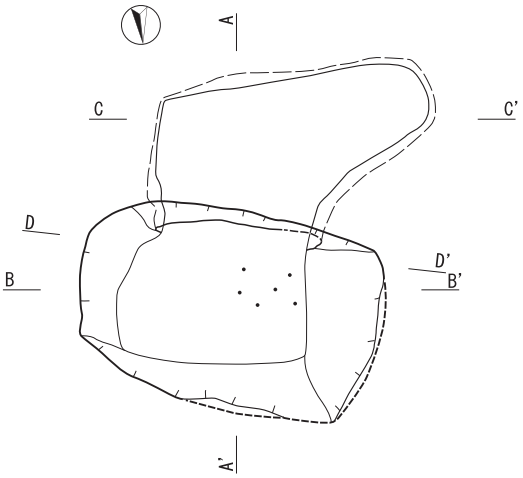
概　要	【竪坑】 床面は玄室とほぼ同じであり，羨道部分が低くなる。玄室は上部から入り込んだ土と，竪坑が崩落した土が堆積していた。羨道近くで炭化物が少量出土した。 【玄室】 右側に偏る片袖形である。天井工具痕より，羨道から正面壁側へ向けてほぼまっすぐ掘削し，内部中央から右側天井へ向けて掘削していることが分かる。
工具痕	玄室天井に多くの工具痕が残存している。工具は幅６㎝の方形状と思われる。
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑内で検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

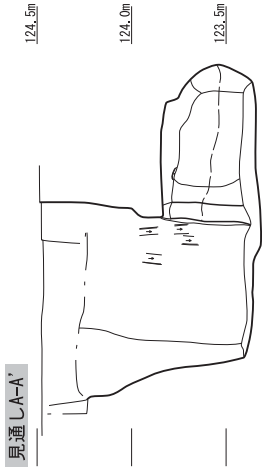


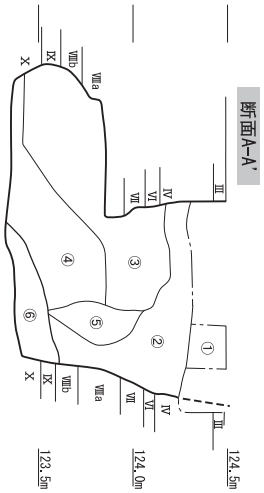
工具痕実測図

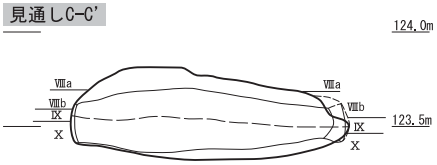


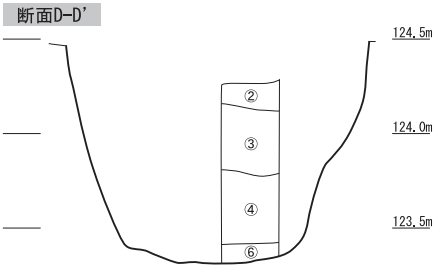


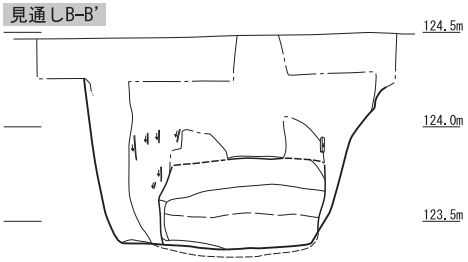


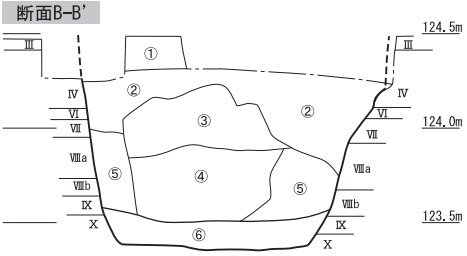


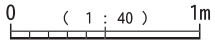












① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約40%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を少量含む黒色土。軟らかい。上部から入り込んだ黒色土に竪坑が崩落した土を少量含む。
④ ⑤が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%含む。軟らかい。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(20cm以下。大きいもの多い)を約60%含む黒色土。しまりが弱く崩落しやすい。X層の土を少量含む。
⑥ IX・X層の粒(3cm以下)を約50%,Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り。

第230図　112号地下式横穴墓

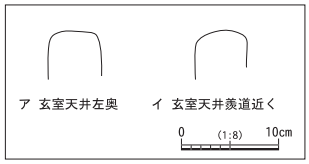
113号地下式横穴墓	検出区	J-40	玄室開口方向	北
	分　類	A		

検出状態	わずかにⅦ・Ⅷ層の混在する部分周辺の攪乱を取り除き検出した。羨道部分の天井は崩落していた。

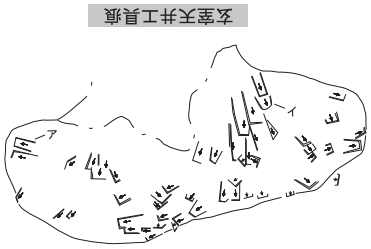
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	104	192	103	100	－	－	90	184	94	42
推　定	115	－	125	－	50	－	－	－	－	－

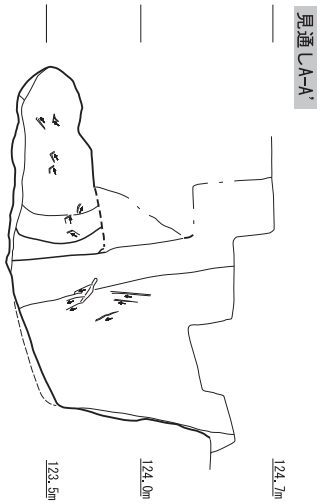
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X	玄室断面形	台形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

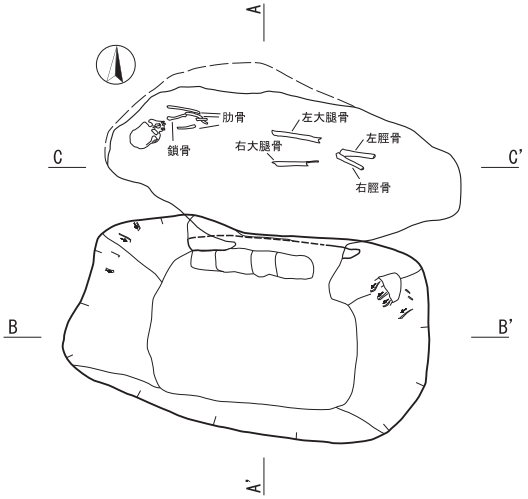
概　要	【竪坑】 左右壁の傾斜は緩やかに造られている。埋土⑤は硬くしまっており，埋土④と明瞭に区別できる。玄室を構築した層と，埋土⑤の組成がほぼ同じであることから，これは玄室を掘削した際の排出土と考えられる。また，その上面は閉塞時の床面と推定される。 【玄室】 床面は羨道に向かって低くなり，そこから竪坑へは高くなる。人骨は奥付近でまとまって検出された。玄室天井には多くの工具痕が残っていた。
工具痕	玄室天井や側面にはやや小さい方形の工具で削った跡がみられた。 玄室天井や竪坑側面には幅 5.7 ㎝と 5.5 ㎝の工具痕が残り，ともに方形状の工具と思われる。
赤色顔料	頭蓋骨に水銀朱が付着していた。
炭化物	玄室埋土から検出した。年代測定では 237calAD-354calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	頭蓋骨・大腿骨・脛骨が残存していた。顔面から右側頭部，歯や顎にかけては赤色顔料が付着していた。壮年の女性と推定。
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

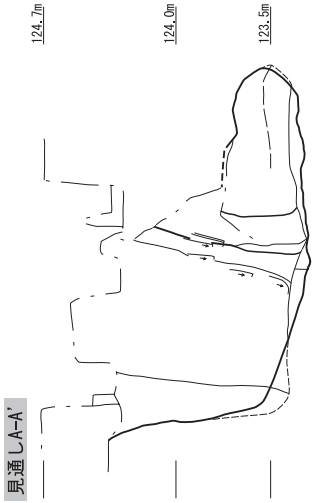


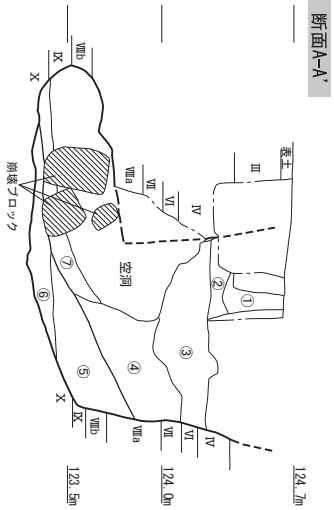
工具痕実測図

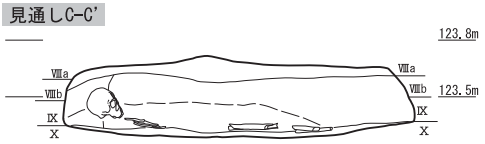


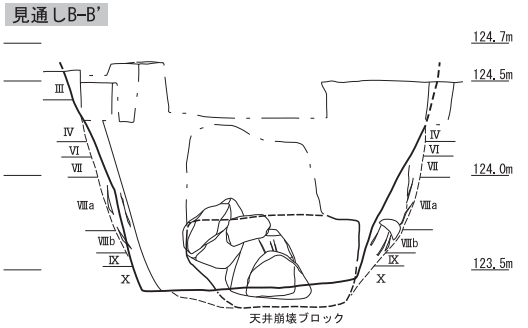


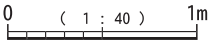












① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を少量含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約20%含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒色土。しまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%, X層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒色土。しまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%, X層のブロックを約60%含む黒色土。しまり有り。
⑦ ③④が崩落した土。軟らかくしまりなし。

第231図　113号地下式横穴墓

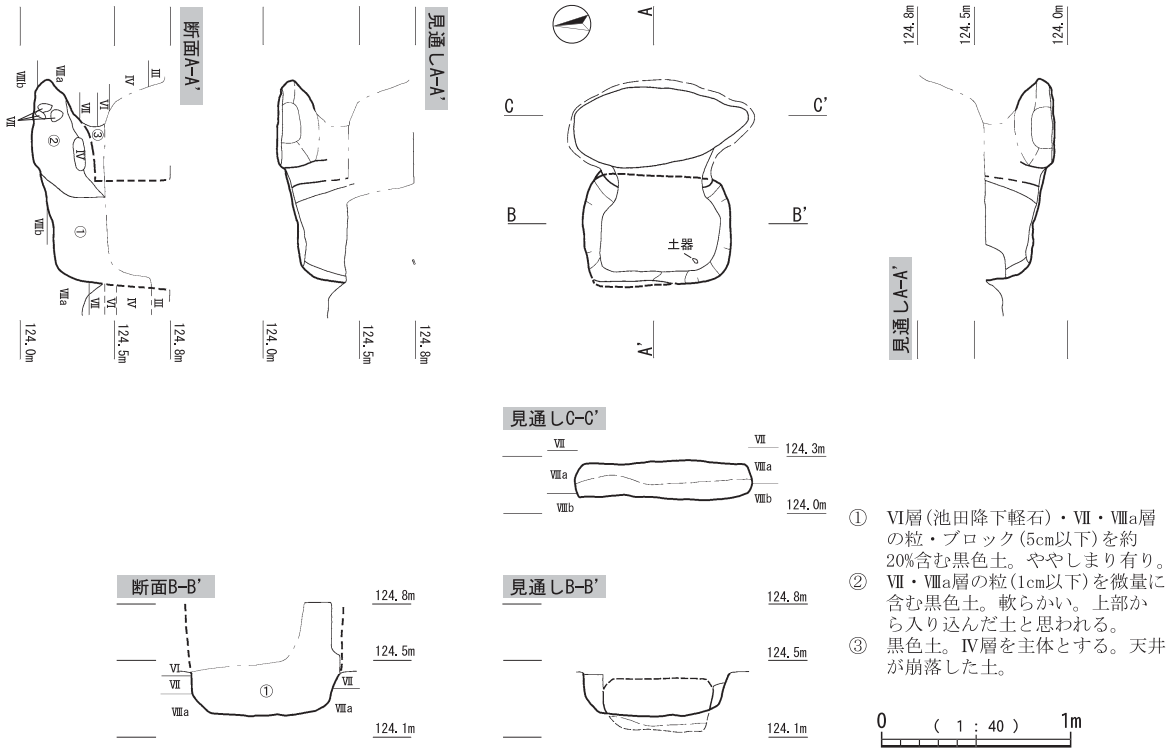
114号地下式横穴墓	検出区	H-40	玄室開口方向	東
	分　類	B 1		

検出状態	確認トレンチの壁面で竪坑の一部を確認し検出した。116 号墓と同じく小型の墓である。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	56	78	30	58	－	10	47	100	57	24
推　定	60	85	60	－	30	－	－	－	－	－

竪坑最下層	Ⅷa	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	長方形？
玄室天井層	Ⅶ・Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅷb	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 小型の墓である。羨道前の埋土は黒色土の割合が高い。上部で土器が１点出土した。 【玄室】 小型であり，玄室床面が竪坑の床面よりも一段低い。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	高坏の口縁部が１点出土した。
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



第232図　114号地下式横穴墓

88号～92号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況（第233図･第234図）

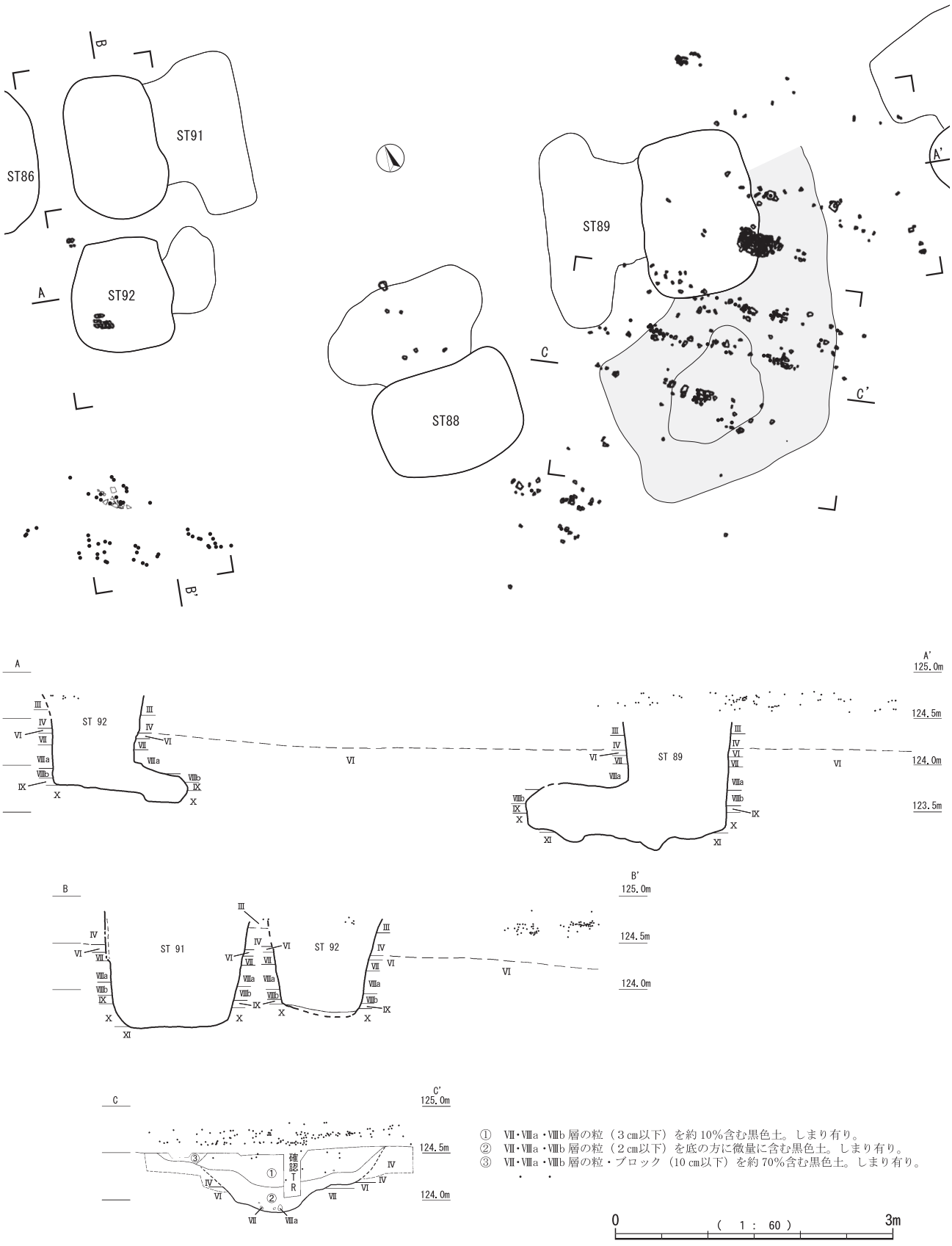
88号～92号地下式横穴墓の５基はいびつながらも円形状に竪坑が位置しており，玄室は内側を向いている。89号墓の南側では部分的に，Ⅶ・Ⅷ層が混在する土がみられた。この土は断面観察により，Ⅷ層上面まで溝状に入り込んでいる。また，その埋土中からは坩が出土した。

遺物の出土状況は，竪坑上面ないしその外側に弧を描くように分布している。一方で５基の墓が位置している中心付近では，遺物の出土はみられない。

111号・112号地下式横穴墓周辺土器出土状況（第235図）

隣接する112号地下式横穴墓は，玄室竪坑の向きが111号地下式横穴墓と逆であり，周辺からは遺物がほとんどみられなかった。

第 233 図　88 号～92 号地下式横穴墓周辺遺物出土状況（1）



第 234 図　88 号～92 号地下式横穴墓周辺遺物出土状況（2）・土層堆積状況

第 235 図　111号・112号地下式横穴墓周辺遺物出土状況

エリア10出土鉄器（第236図～第249図）

87号地下式横穴墓（第236図）

鉄器は鉄剣１点，短剣１点が出土した。303は鉄剣である。刃部の一部から茎部が欠損する。断面はレンズ状を呈する。鞘木が多く残存するが，状態は悪い。合わせ目の観察から二枚合わせ式であることが確認できる。刃部下部にわずかに紐による鞘巻きが確認できるが，状態は悪く材質は不明である。鞘木は樹種同定からヒノキであるとしている。関部から1.5cm上部に鞘口装着のための段差が観察できるが，鞘口はわずかに痕跡が残る程度で状態が悪い。関部は深さ約2.5mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。残存部分には目釘孔はみられない。茎部に柄木の木質が残存しており，状態は悪いものの関部に柄の端部が確認できる。関部から１cm下部に把縁の痕跡が残るが状態は悪い。304は短剣である。全体に錆化が原因とみられる歪みが生じている。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の一部に錆化した平織布が付着するが，明瞭な木質は認められないため，鞘木はなく布を巻くなどして副葬したと考えられる。関部はナデの形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。目釘孔が１孔施されている。茎部に柄木の木質が残存しており，状態は悪いものの二枚合わせであることが確認できる。

89号地下式横穴墓（第237図）

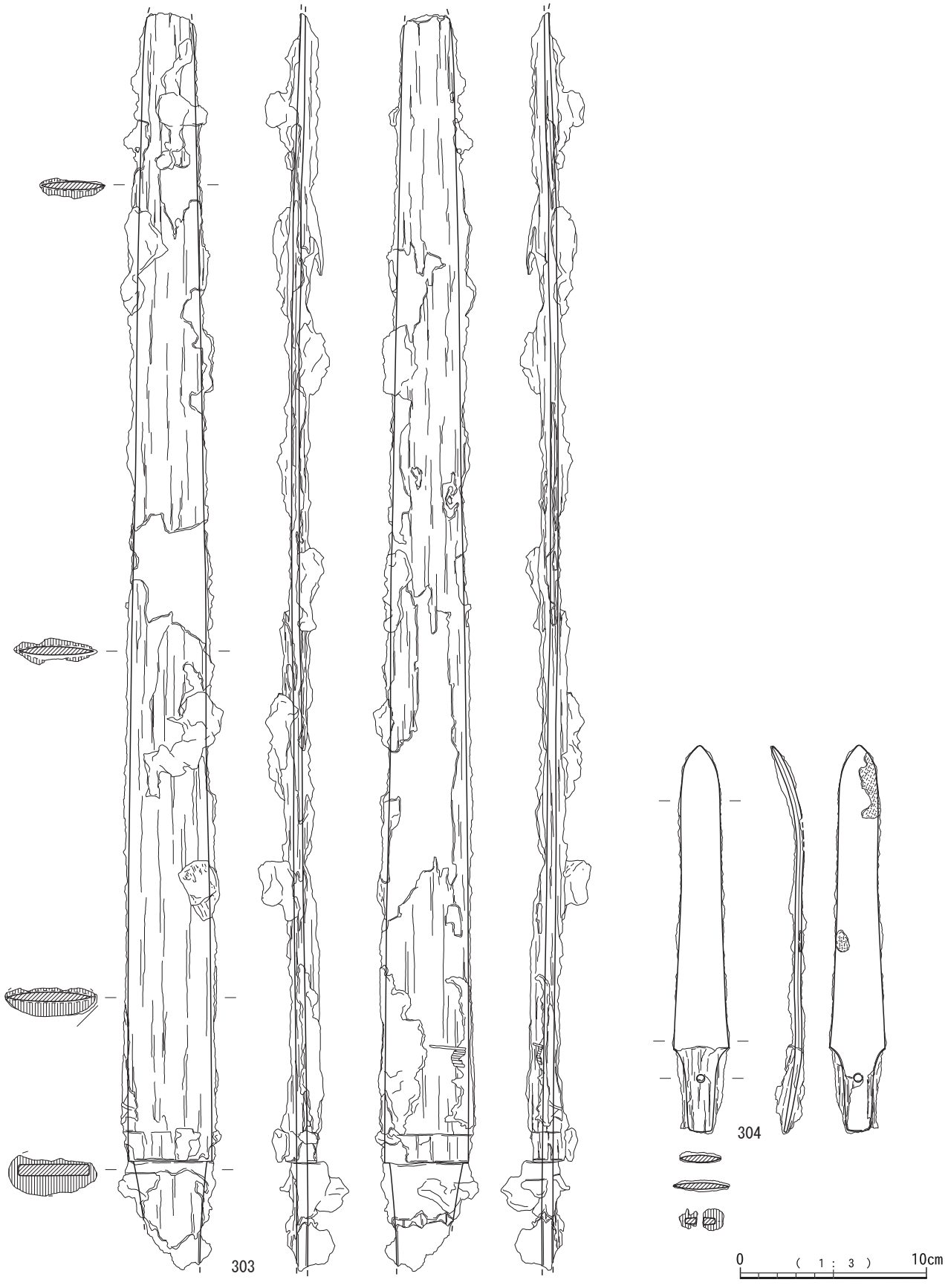
鉄器は異形鉄器３点が出土した。３点とも下部が欠損する。305の先端部はややゆがんだ柳葉形を呈し，そこからわずかに狭まる。端部すべて刃部を造っており，断面形は平造りである。根挟みの痕跡がわずかに残るが，状態が悪く形態は不明である。306の先端部は圭頭形を呈し，そこから直線的に狭まる。端部すべて刃部を造っており，断面形は平造りである。有機質の残存はみられない。307は先端部を欠損する。残存する先端部は錆により不明瞭であるが，Ｘ線写真の観察から圭頭式と推定した。先端部からややくびれたのち外に広がっていることから，足部があったと考えられる。端部すべて刃部を造っており，断面形は平造である。穿孔が２孔施されている。紐を通して根挟みを固定するための孔と考えられる。下部に有機質が付着する。根挟みと考えられるが，状態が悪い。

90号地下式横穴墓（第237図～第242図）

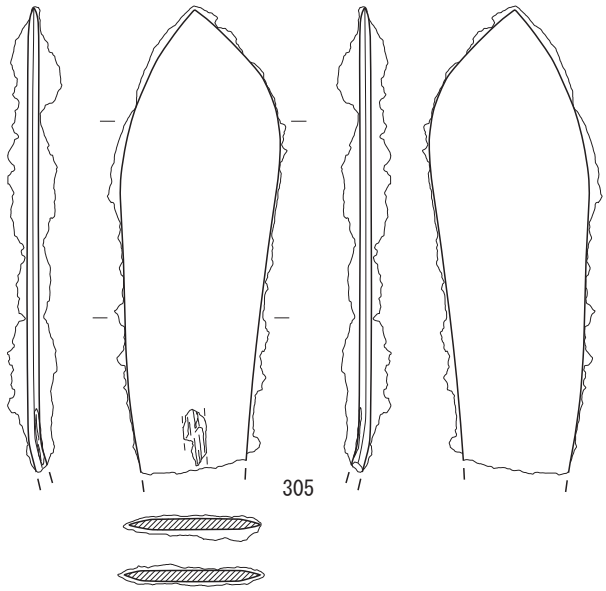
鉄器は鉄剣１点，鉄鏃28点（長頸鏃22点，圭頭鏃２点，腸抉柳葉鏃１点，鉄鏃片３点），青銅鈴５点が出土した。鉄鏃には，鉄鏃に伴わない木質や皮革などの有機質が多く付着する。多量副葬であることから，矢入れ具の痕跡と考えられる。

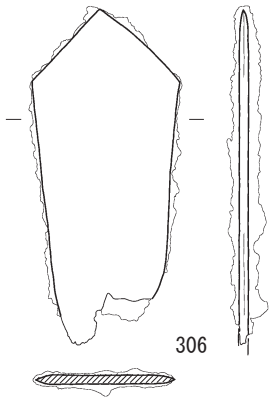
308は鉄剣である。関部の周辺から錆化による歪みが生じている。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。鞘木が一部良好に残存しており，鞘木の先端には，ほぞ状に加工した痕跡がみられることから，キャップ状に鞘尻装具が装着されていた可能性がある。鞘木の合わせ目の観察から，二枚合わせ式であることが確認できる。関部の７mm上部に鞘木の端部が確認できる。鞘木の上に重なって，幅の広い組紐を斜めに巻いた鞘巻きがみられる。顕微鏡での観察から，斜行縄連組織の組紐としている。関部は深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔が確認できる。関部直下には，はばきの痕跡がみられ，さらにその直下には鹿角製の把縁が残存する。茎部には柄木と柄巻きが良好に残存する。茎部に対して柄木が一方に片寄り，柄巻きのみの部分があることから，落とし込み式と考えられる。柄巻きは顕微鏡での観察から，「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」であることが確認された。

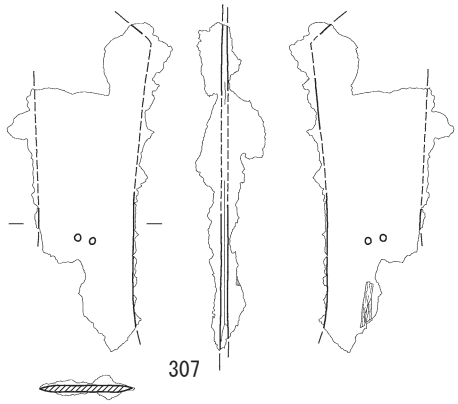
309・310は錆着していたため，そのまま実測した。309は長三角形の長頸鏃である。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。矢柄に幅広い植物組織と直交縄連組織の付着が観察されている。310は圭頭鏃Ⅲa類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。Ｘ線写真の観察からも茎部が不明瞭である。矢柄が良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。311～313は錆着していたため，そのまま実測した。311は圭頭鏃Ⅲa類である。頸部の一部と茎部が欠損する。断面形は刃部が平造り，頸部が長方形を呈する。312は長三角形の長頸鏃である。頸部の一部から茎部を欠損する。断面形は刃部が片丸造り，頸部が長方形を呈する。313は長三角形の長頸鏃である。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。314～316は錆着していたため，そのまま実測した。314は三角形，315は長三角形の長頸鏃である。314は茎部の一部が欠損する。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は短いものの良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。315は茎部の一部が欠損しており，刃部下部から錆化が原因とみられる変形が生じている。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は短いものの良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。316は刃部から頸部の一部が欠損する。断面形は頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。317・318は錆着していたため，そのまま実測した。

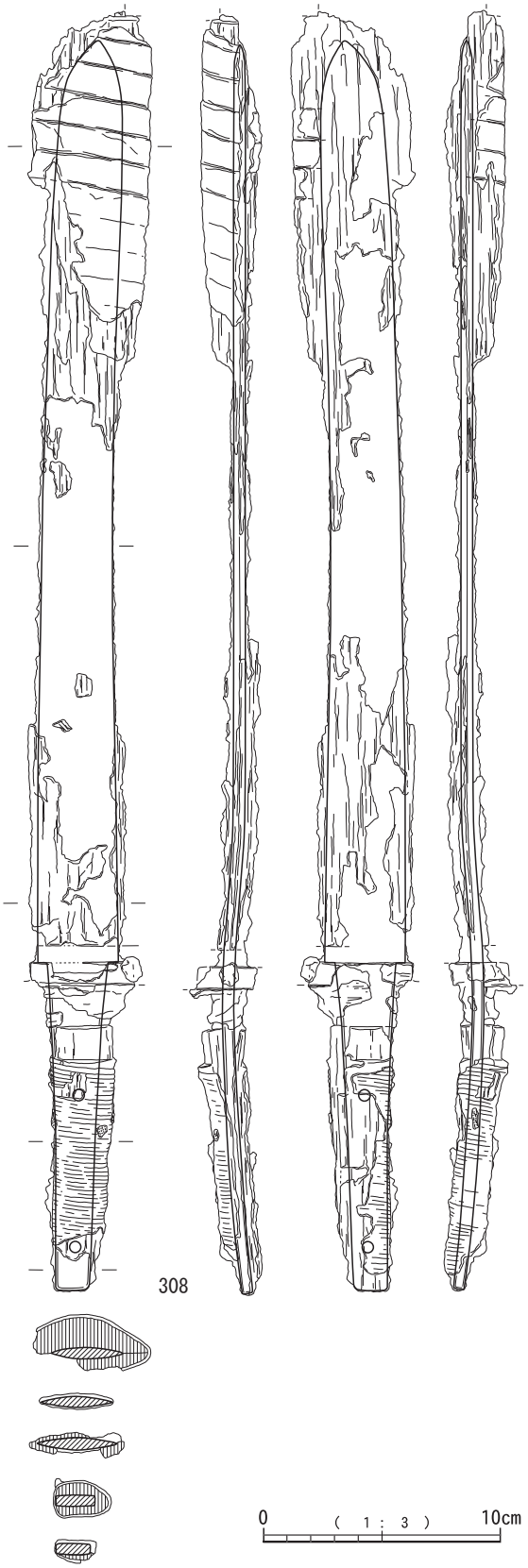


第 236 図　87 号地下式横穴墓出土鉄器







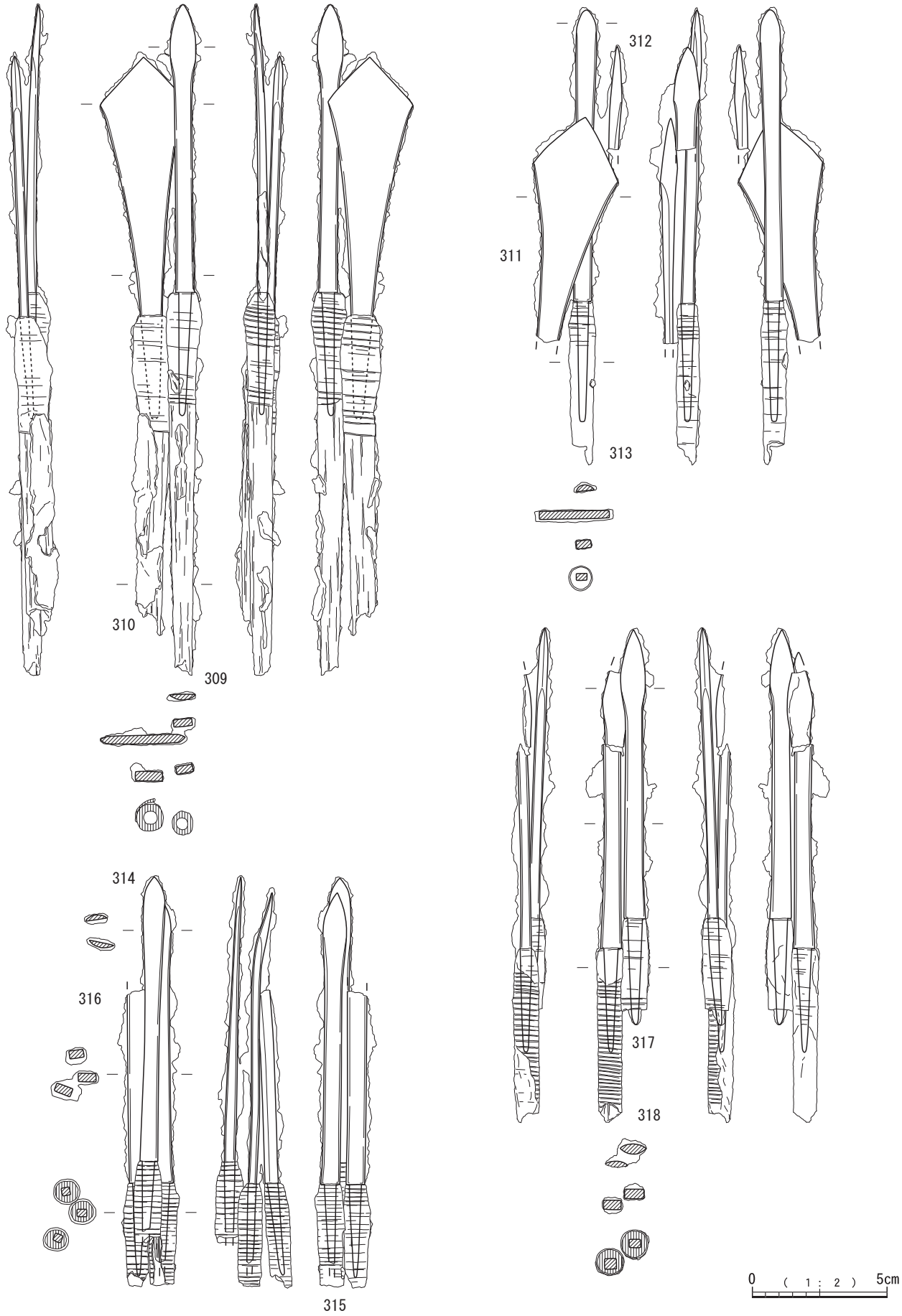


0 (1 : 2) 5cm

0 (1 : 3) 10cm

305 ～ 307　89 号地下式横穴墓
308　90 号地下式横穴墓

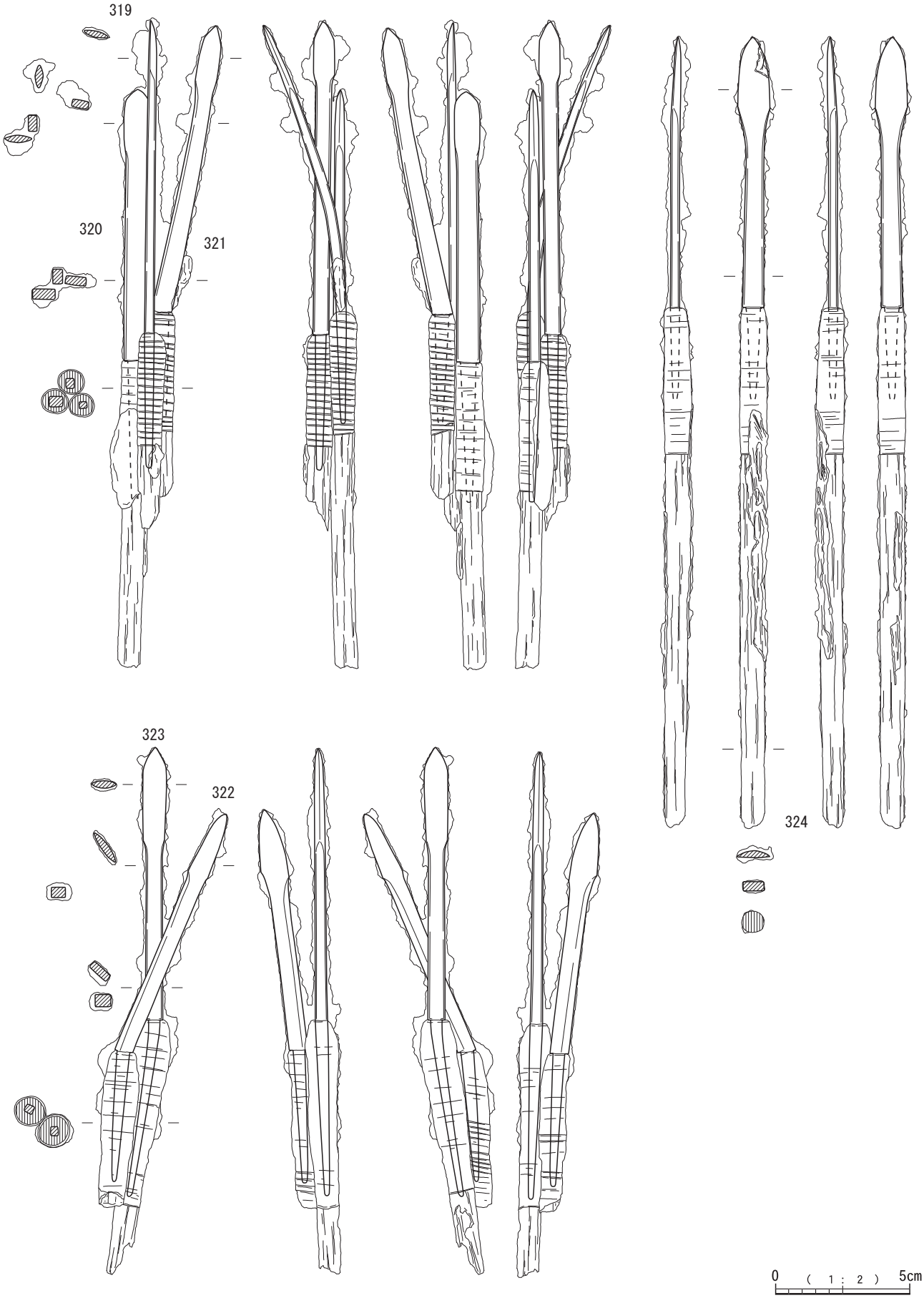
第 237 図　89 号・90 号(1)地下式横穴墓出土鉄器



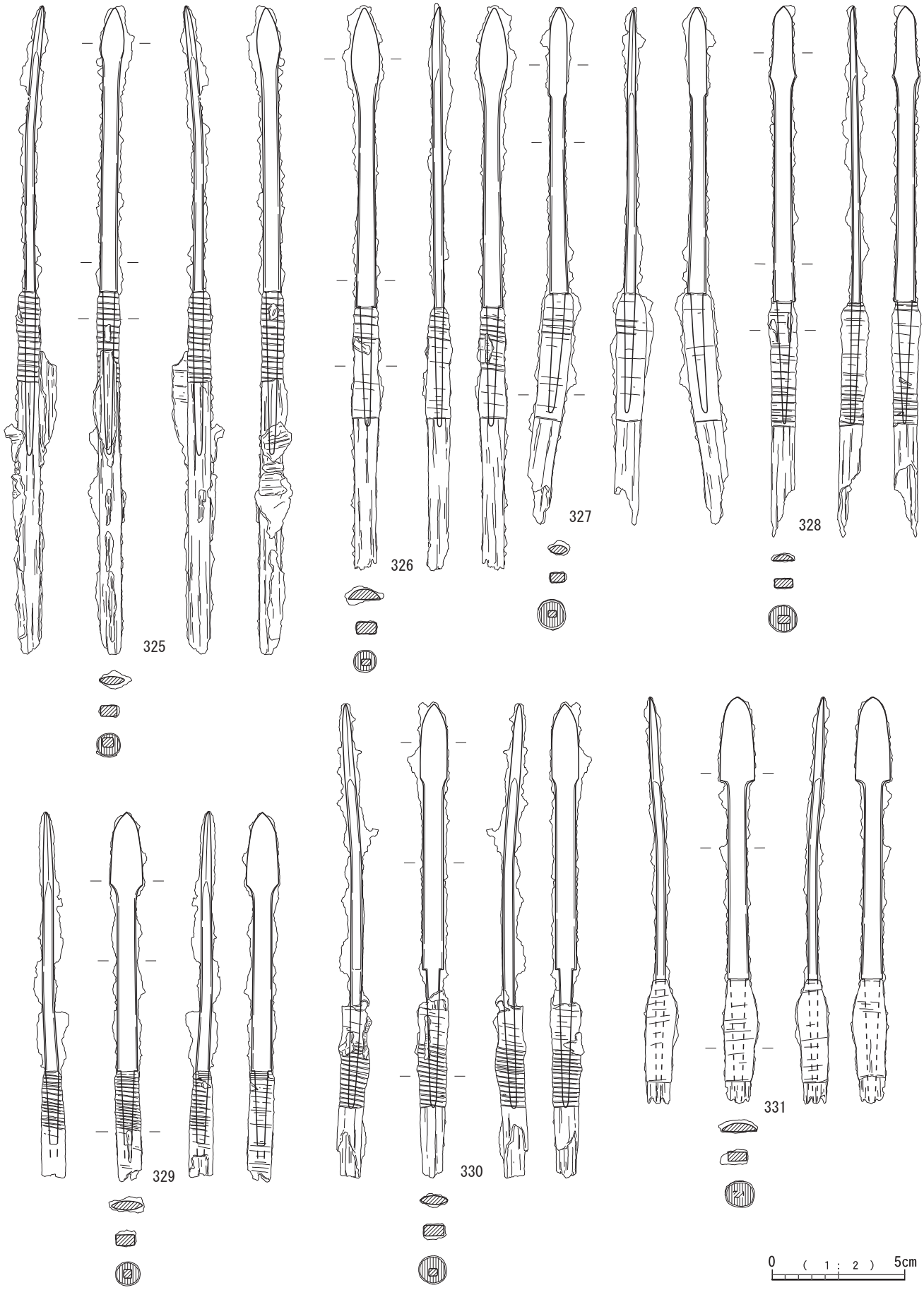
第 238 図　90 号地下式横穴墓出土鉄器(2)

長三角形の長頸鏃である。317の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するもののやや状態は悪く，口巻きは不明瞭である。318は先端が欠損，刃部下に割れが生じている。断面形は刃部が剥離しているが，残存する面が丸造りを呈しているので，両丸造りか片丸造りである。頸部・茎部は長方形を呈する。矢柄が良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。319～321は錆着していたため，そのまま実測した。長三角形の長頸鏃である。319の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。顕微鏡での観察から，矢柄に皮革が付着することが確認された。320の断面形は刃部が両丸造り，頸部が長方形を呈する。Ｘ線写真の観察からも茎部が不明瞭である。矢柄が長く残存するが，口巻きの単位は不明瞭である。321は頸部が屈曲する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。頸部の下部に骨，あるいは鹿角が付着する。残存状態が悪く，人骨が付着したものか，矢入れ具に伴うものかは不明である。矢柄が良好に残存する。口巻きの単位が明瞭にみられ，最後の入れ込みまで観察できる。322・323は錆着していたため，そのまま実測した。322は長三角形の長頸鏃である。頸部関で屈曲する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，錆化が進行しており口巻きの単位は不明瞭である。323は長三角形の長頸鏃である。頸部関からわずかに屈曲する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，錆化が進行しており口巻きの単位は不明瞭である。324～326は長三角形の長頸鏃である。324は刃部の先端に葉が付着する。断面形は刃部が片丸造り，頸部が長方形を呈する。Ｘ線写真の観察からも茎部が不明瞭である。矢柄が長く残存するが，口巻きの単位は不明瞭である。矢柄に皮革と毛のようなものが付着する。毛のようなものは状態が悪く，顕微鏡による観察でも断定はできていない。325は鏃身部がやや湾曲する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が良好に残存する。口巻きの単位が明瞭にみられ，最後の入れ込みまで観察できる。矢柄に対して垂直方向の木目をもつ木質が付着する。鉄鏃は一方向にそろって出土していることから，他の鉄鏃の矢柄などが付着したものではなく，矢入れ具の痕跡と考えられる。顕微鏡での観察から，状態が悪いもののイネ科植物である可能性を指摘している。326の断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。顕微鏡での観察から，矢柄にわずかな布の付着が観察されたが，状態が悪く詳細は不明である。327は長三角形の長頸鏃である。頸部関からわずかに屈曲する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，錆化が進行しており口巻きの単位は不明瞭である。328は長三角形の長頸鏃である。断面形は刃部が両片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。329は長三角形の長頸鏃である。茎部の一部が欠損する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は短いもののやや良好に残存する。矢柄の上部には，撚糸による口巻きが施されている。一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。330は長三角形の長頸鏃である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の端部は欠損するものの，口巻きの単位が明瞭にみられ，最後の入れ込みまで観察できる。331は長三角形の長頸鏃である。刃部が片丸造り，頸部が長方形を呈する。Ｘ線写真の観察からも茎部が不明瞭である。矢柄が残存するが，錆化が進行しており口巻きの単位は不明瞭である。332は腸抉柳葉形の長頸鏃である。断面形は刃部が平造り，頸部が長方形，茎部が方形を呈する。矢柄が残存するが状態は悪く，口巻きの単位が不明瞭である。333は腸抉柳葉鏃である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが状態は悪く，口巻きの単位が不明瞭である。334～336は茎部片であるが，Ｘ線写真の観察からも茎部が不明瞭である。337は矢柄が良好に残存する。口巻きの単位が明瞭にみられ，最後の入れ込みまで観察できる。335は口巻きの痕跡はみられない。336は矢柄が残存する。矢柄に対して垂直方向の木目をもつ木質が付着する。325と同様の植物繊維と考えられる。

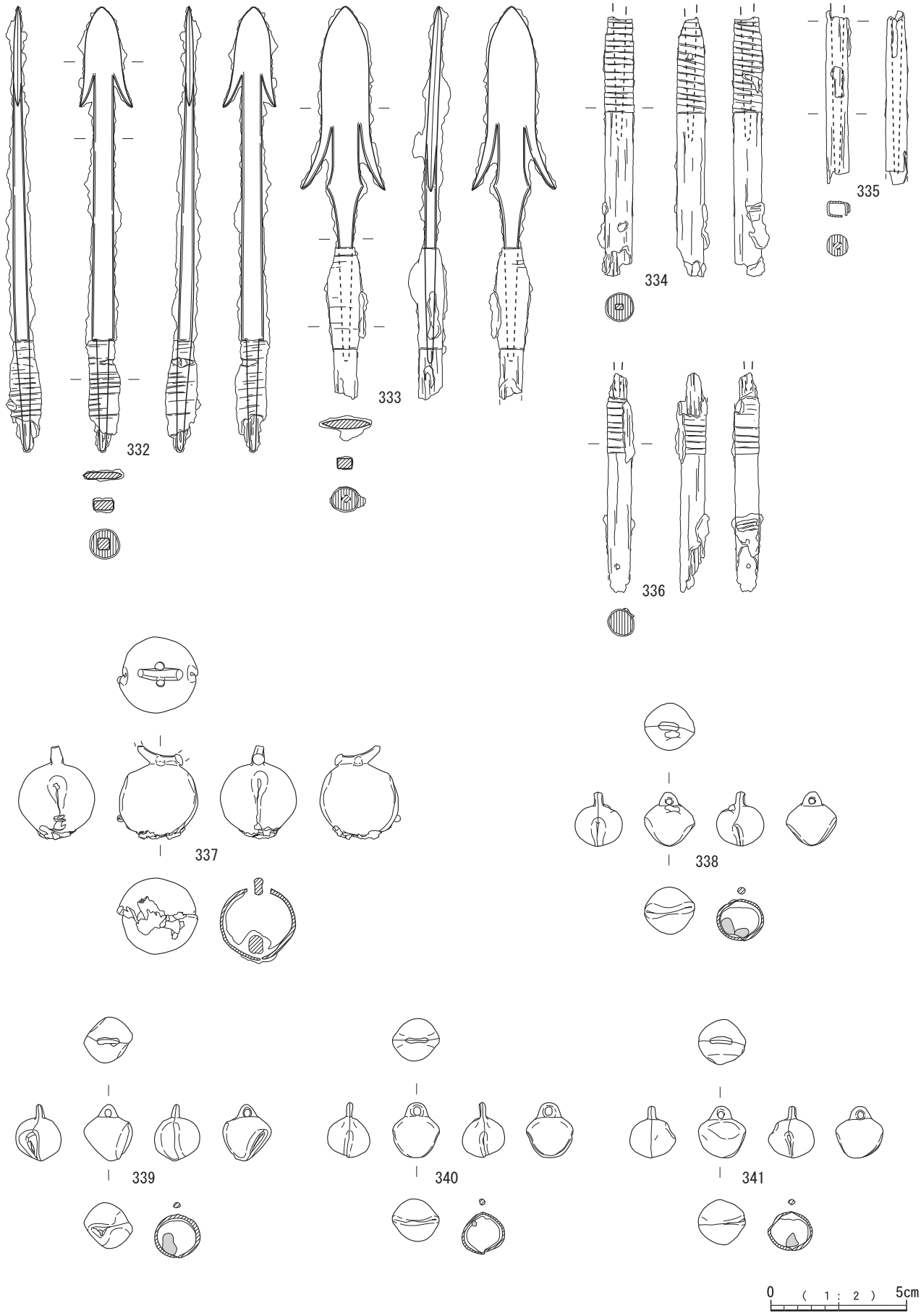
337 ～ 341は青銅鈴である。青銅鈴はすべて九州国立博物館の協力によりＸ線ＣＴスキャンをおこなった。337は環鈴の転用品である。正面形はややゆがんだ円形を呈する。鈴口はややずれて重なっており，側面両側から押圧を受けたと考えられる。環部分の残存部は厚さ２～３mmとかなり細く，片方は先に向け細くなる。環を挟んだ接合部両側に円形の穿孔が施されており，環部分にもその際の削痕がみられる。穿孔は環と鈴口の直線軸に対し垂直ではなく，やや斜めに施されている。環と鈴の間の脚部はもたない。丸は鉄製である。鈴口付近の外面に錆がみられ，重さも30.7gと非常に重い。立小野堀遺跡で出土した鈴のなかで唯一の鉄丸である。338 ～ 341は，正面形が栗形を呈し，合わせ目は鈴口と平行になる形状である。鈴体の大きさが1.5 ～ 2 cm程度の小型の鈴である。338は鈴口がほぼ閉じるが，口端のみ約0.5mm空く。Ｘ線ＣＴスキャン画像の観察から，丸を２点確認した。複数入るのはこの鈴のみである。339は鈴口がほぼ閉じるが鈴口の片側が約３mm押し開けられている。鈕は細く，鈕孔は楕円形を呈し他と比較するとやや大きい。Ｘ線ＣＴスキャン画像の観察から，断面が



第 239 図　90 号地下式横穴墓出土鉄器(3)



第 240 図　90 号地下式横穴墓出土鉄器(4)



第 241 図　90 号地下式横穴墓出土鉄器(5)・青銅鈴

ひょうたん型の丸を確認した。340は鈴口が完全に閉じている。鈕孔は縦３mm，横2.2mmの隅丸方形を呈する。Ｘ線ＣＴスキャン画像の観察から，丸と考えられる直径約1.5mmの円形を1点確認した。ただし，他の鈴と比較し小さすぎるため，丸ではない可能性がある。341は肩部にやや凹みがみられる。338と鈴口の閉じ方が似ており，口端がやや開き，真ん中が完全に閉じる。Ｘ線ＣＴスキャン画像の観察から，不整形の丸を確認した。

93号地下式横穴墓（第243図）

鉄器は短剣１点，異形鉄器１点が出土した。342は短剣である。切先がわずかに欠損する。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の一方の面にイネ科植物のような植物繊維の付着がみられる。繊維方向が一定ではないため，蓆の可能性は低い。反対の面には，皮革と獣毛が付着する。顕微鏡での観察から，獣毛は鹿毛としている。関部は深さ約2.5mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。茎部の一方の面にも刃部と同様の植物繊維が付着する。反対の面には平織布が付着する。有機質が直に付着していることや，明瞭な木質はみられないことから，抜き身の状態の短剣を皮革や布で包んで副葬したと考えられる。

343は異形鉄器である。根挟み付近がわずかに欠損する。先端部はいびつな圭頭形を呈し，そこからゆるやかに狭まり端部に至る。根挟み下を除きすべてに刃部を造っており，断面形は平造りである。穿孔が５孔あり，およそ中心に根挟みを挟む２孔，そこから1.2cm下に１孔，その直下に根挟みを挟んで２孔施されている。上側の２孔は，根挟みに孔の位置に合わせた溝が確認できることから，紐状のものを通して根挟みを固定していたと考えられる。下の１孔は，有機質製の目釘状のもので根挟みを固定する。下側の２孔は根挟みと重なっていることから，根挟みの固定用としては機能していなかった可能性がある。また，穿孔はないが鉄器端部から３mm下も有機質製の目釘状のもので根挟みを固定しており，鉄器端部はそれに合わせるように丸く加工されている。根挟みは一方の面が良好に残存しており，先端を三角形に加工していることが確認できる。根挟みの表面に異なる有機質が付着する。反対の面の根挟みは残存状態が悪いが，一部に皮革と獣毛が付着する。顕微鏡での観察から，獣毛は鹿毛としている。342にも同様の付着物があることと，２個体が重なるように出土していることから，皮革でつつまれて副葬された可能性が考えられる。

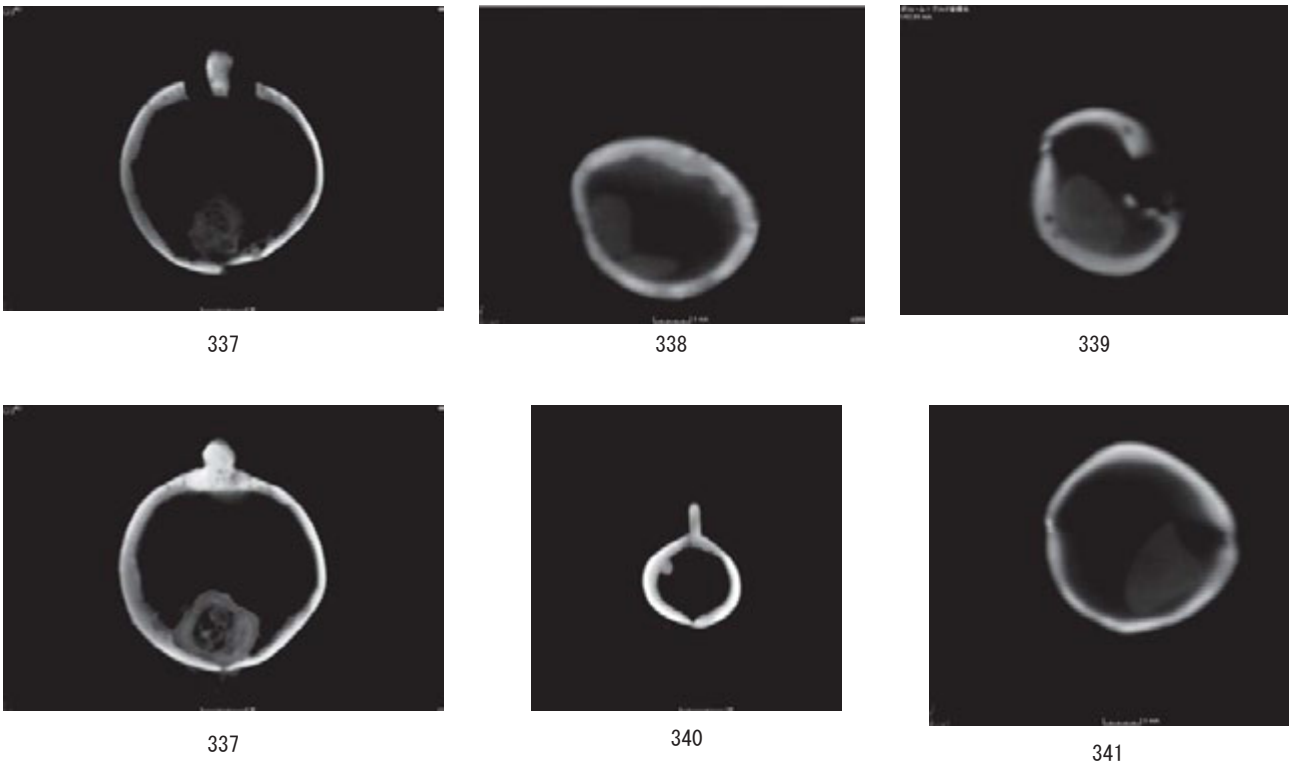
102号地下式横穴墓（第244図・第245図）

鉄器は鉄剣１点，短剣１点，鉄鏃４点（圭頭鏃４点），円錐形鉄器７点が出土した。

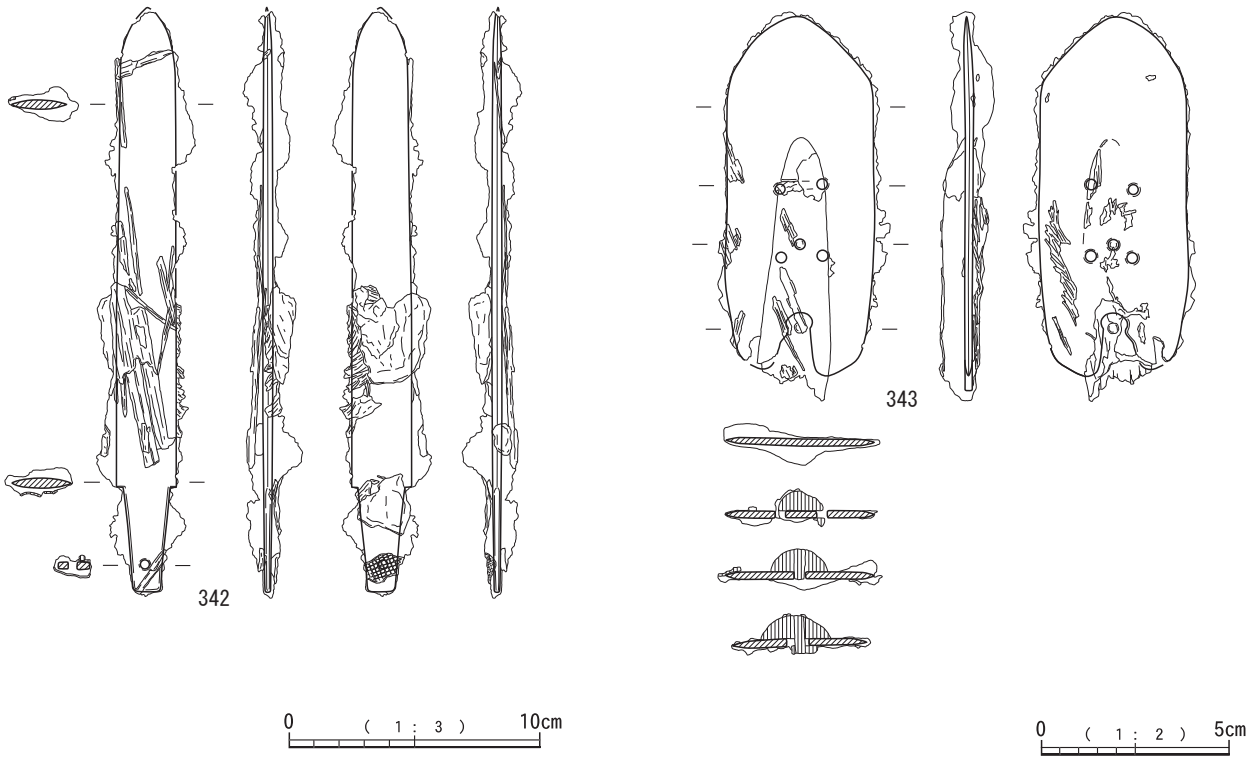
344は鉄剣である。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の先端にイネ科植物のような植物繊維が付着する。刃部下部には，鉄鏃の矢柄が付着していた痕跡がみられる。関部は深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔は明確に確認できるが，下部の１孔は不鮮明である。茎部に刃部の先端と同様のイネ科植物のような植物繊維が付着する。顕微鏡での観察から，平織布の付着が観察された。すべての付着物がほとんど直に付着していることから，装具がない状態で副葬されたと考えられる。345は短剣である。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。鞘木が一部良好に残存しており，二枚合わせであることが観察できる。鞘木の端部が関部から1.1cm上部にみられる。関部から３mm上部には把縁の痕跡がわずかに観察できる。関部はナデの形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。目釘孔が２孔施されている。茎部に柄木の木質が残存しており，状態は悪いものの関部から３mm上部に柄の端部が確認できる。茎部に付着する錆塊は把縁の突起と考えられるが，錆化が進行しており詳細は不明である。

346 ～ 349は圭頭鏃である。346は圭頭鏃Ⅲa類である。錆化が進行しており，先端が不明瞭である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に施された糸巻きが良好に残存する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。347は圭頭鏃Ⅱd類である。錆化によりやや全体が反っている。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。348は圭頭鏃Ⅰb類である。錆化によりやや全体が反る。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。角の矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。349は圭頭鏃Ⅰb類である。錆化が進行しており，頸部が分離し，「くの字」状に屈曲する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。

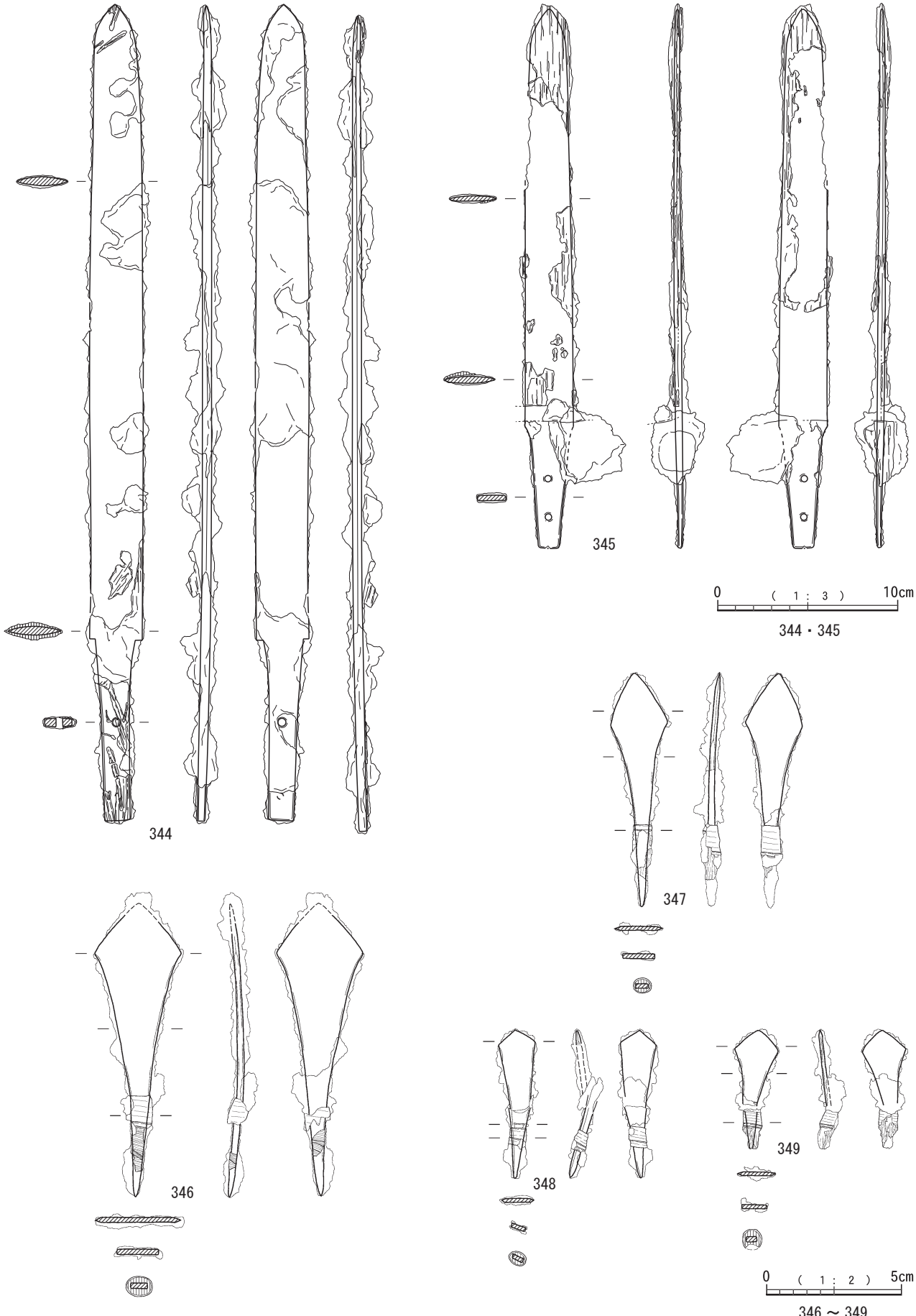
350 ～ 354は円錐形鉄器である。円錐形鉄器は九州国立博物館の協力によりＸ線ＣＴスキャンをおこなった。端部の合わせ方は，Ｘ線ＣＴスキャン画像の観察から判断した。350・351は直線的に広がる形態である。350は最も小型である。端部の合わせ方は，重ね型である。351の端部の合わせ方は，合わせ型である。両端部がやや開いている。352 ～ 356はハの字状に広がる形態である。352の端部の合わせ方は，端部同士を合わせる合わせ型である。下半部の端部は開いている。353の端部の合わせ方は，端部同士を合わせる合わせ型である。両



第 242 図　90 号地下式横穴出土青銅鈴 X 線 CT 画像



第 243 図　93 号地下式横穴墓出土鉄器



第 244 図　102 号地下式横穴墓出土鉄器(1)

端部がやや開いている。354はややスカート状に裾が広がる形態である。端部の合わせ方は合わせ型である。両端部がやや開いている。355の端部の合わせ方は重ね型である。356の端部の合わせ方は合わせ型である。

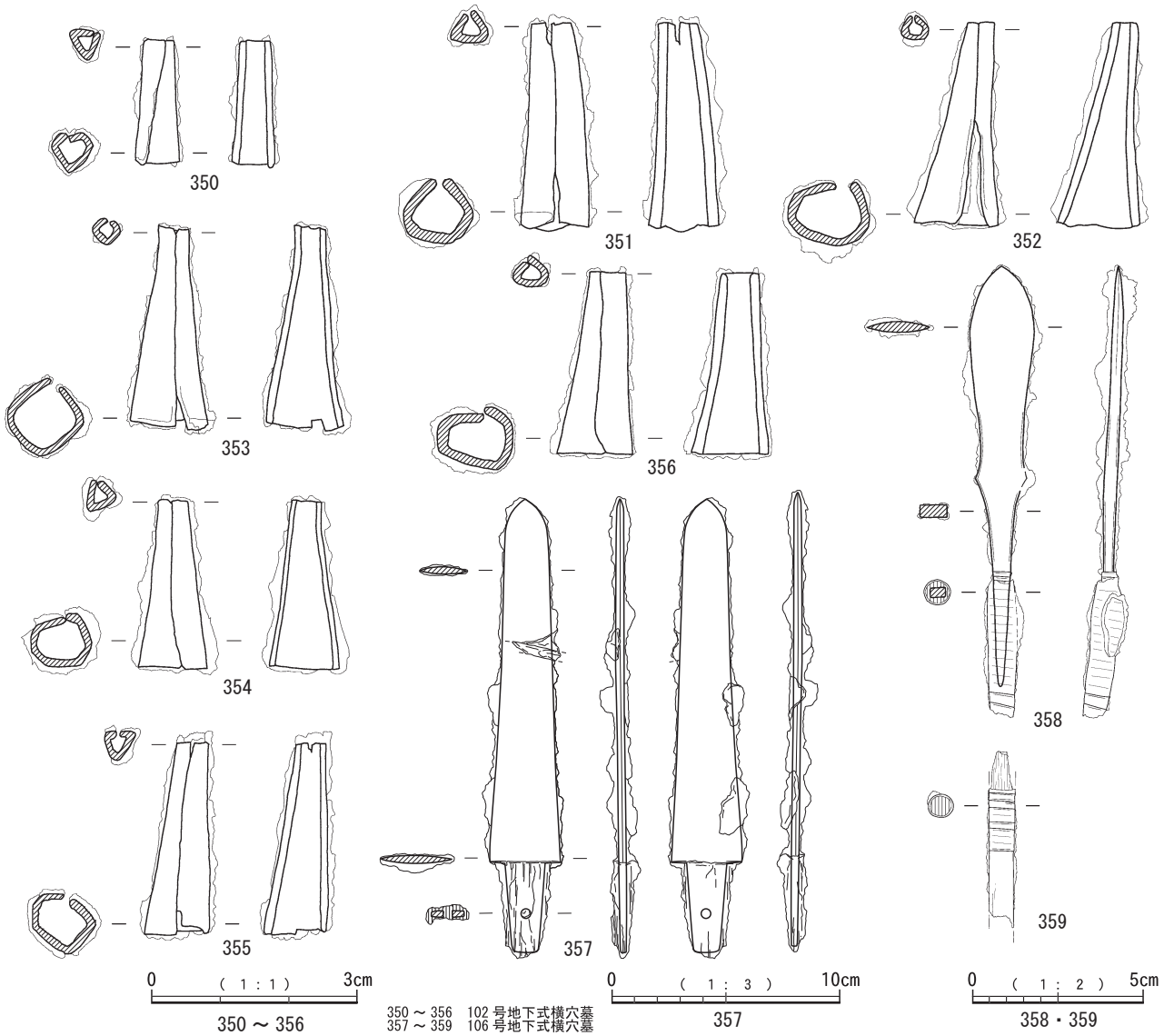
106号地下式横穴墓（第245図）

鉄器は短剣１点，鉄鏃２点（鳥舌鏃１点，矢柄片１点）が出土した。357は短剣である。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部は深さ約６mmの直角に落ちる形態である。刃部の一部に木の根のような植物繊維が付着する。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。茎部に柄木の木質が残存しており，状態は悪いものの関部に柄の端部が確認できる。

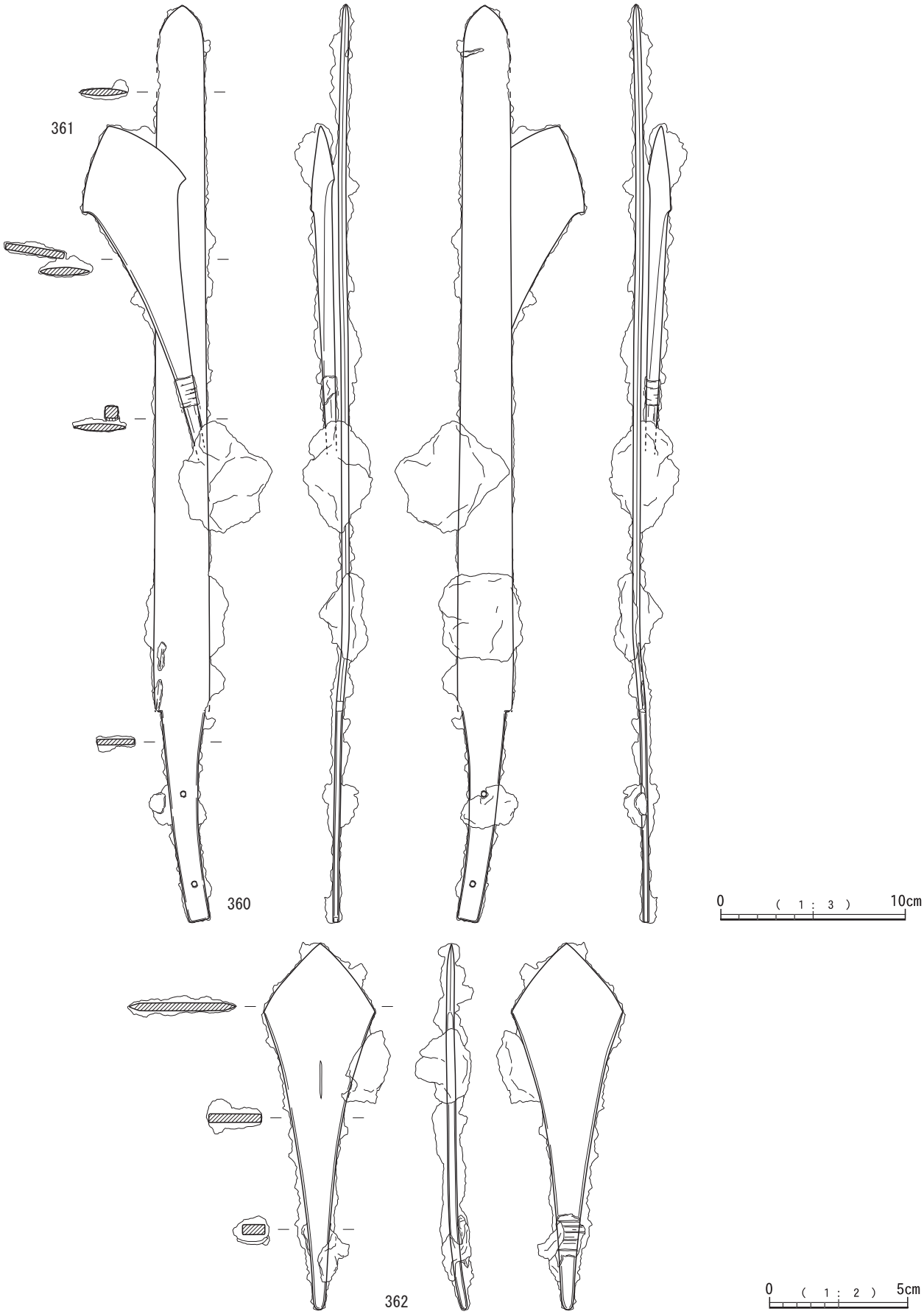
358は鳥舌鏃類である。銹化の進行により，刃部の終わりが不明瞭である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するもののやや状態は悪く，口巻きは不明瞭である。359は矢柄片である。やや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。358と同一個体と考えられる。

108号地下式横穴墓（第246図）

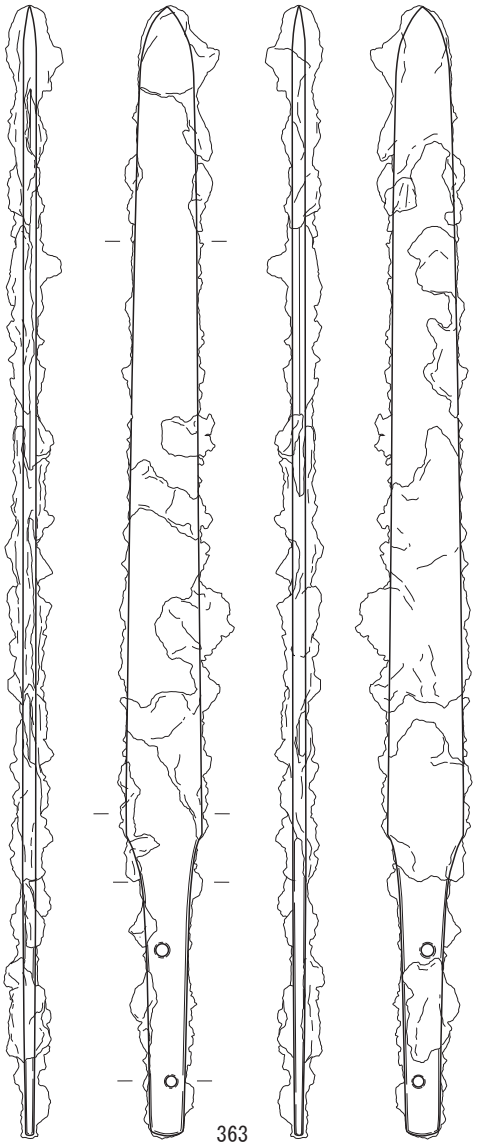
鉄器は鉄剣１点，鉄鏃２点（圭頭鏃２点）が出土した。360・361は銹着していたため，そのまま実測した。360は鉄剣である。関部付近から茎部に歪みが生じている。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部付近に鉄鏃の矢柄が付着していた痕跡がみられる。顕微鏡での観察から，皮革と推定される有機質と，その上に重なった布が観察されている。関部は一部欠損するものの，深さ約３mmの直角に落ちる形態である。茎部は湾曲しながら茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，２孔のの目釘孔は明確に確認できるが，間の１孔は不鮮明である。茎部に黒色の有機質が付着する。科学分析の

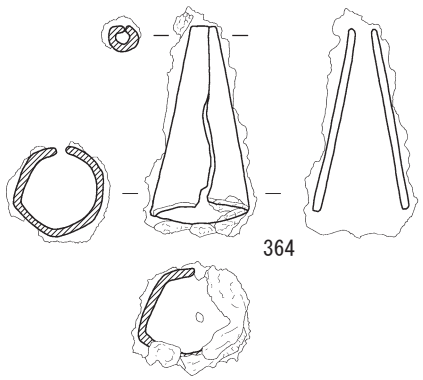


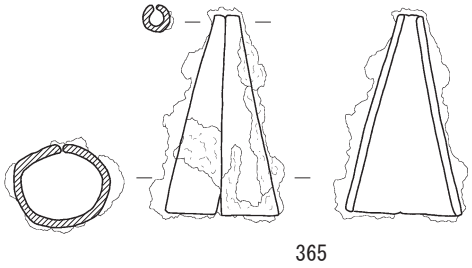
第 245 図　102 号(2)・106 号地下式横穴墓出土鉄器

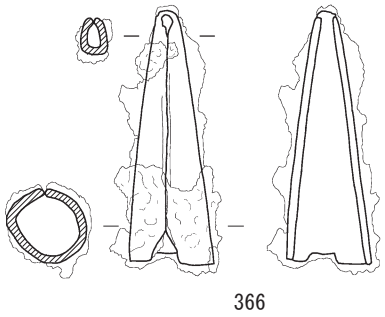


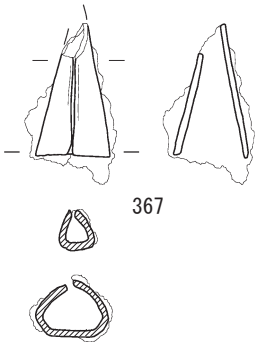
第 246 図　108 号地下式横穴墓出土鉄器

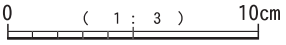


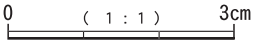




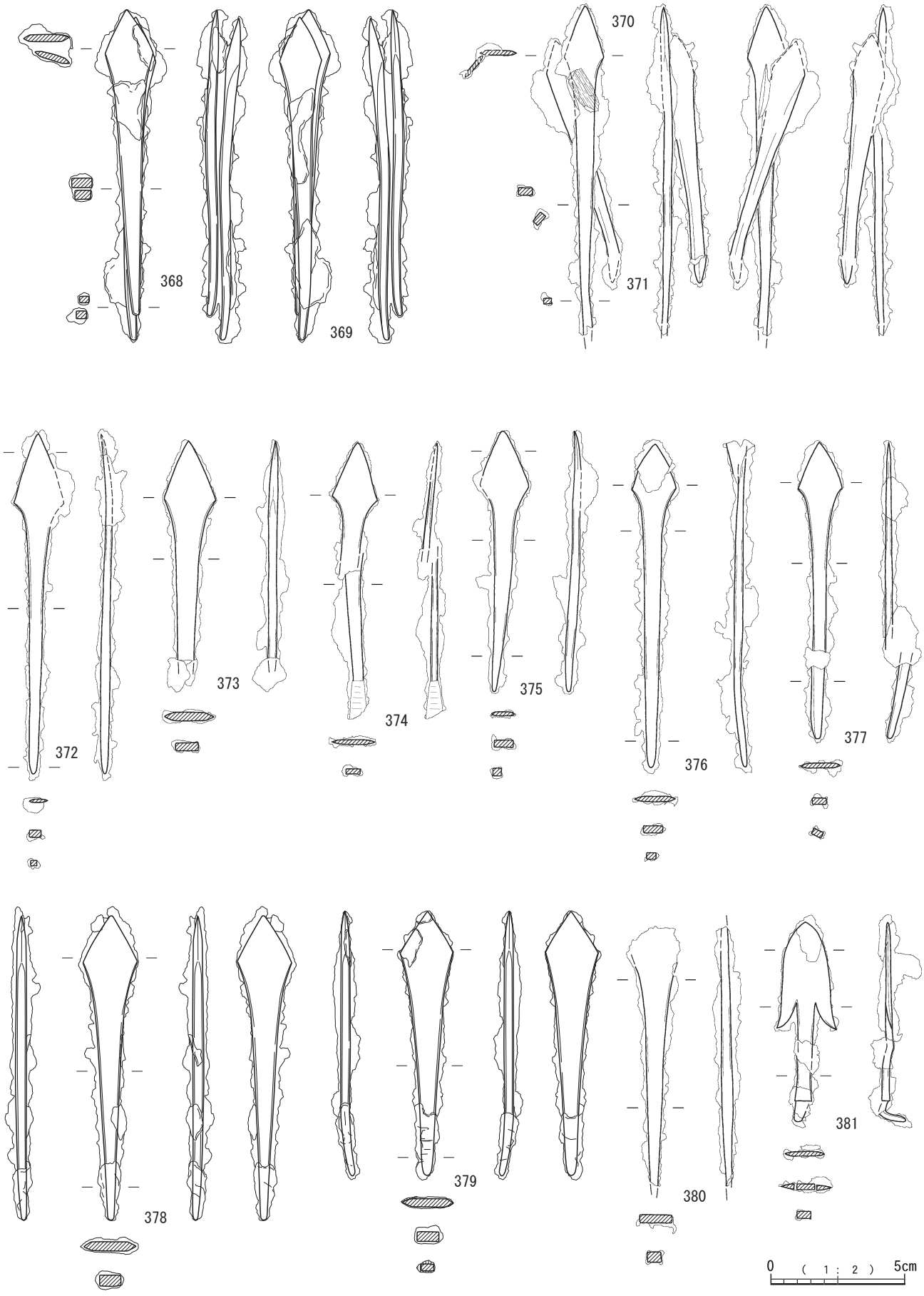








第 247 図　110 号地下式横穴墓出土鉄器



第 248 図　111 号地下式横穴墓出土鉄器

結果，たんぱく質が検出された。皮革や布が黒色化したものとしている。明瞭な木質は認められないことから，木製の装具はなく，皮革や布を巻くなどして副葬したと考えられる。

361は圭頭鏃Ⅲb類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。360と同様の皮革と推定される有機質と，その上に重なった布が観察されている。362は圭頭鏃Ⅲa類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の状態は悪いものの，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。362からは皮革・布は検出されなかったものの，出土状態から３点は一つに包まれた状態で副葬されていたと考えられる。Ｘ線写真の観察から，中央付近に線刻がみられた。縦方向のやや直線状である。

110号地下式横穴墓（第247図）

鉄器は鉄剣１点，円錐形鉄器４点が出土した。363は鉄剣である。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部はナデの形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔が確認できるが，どちらも茎部の中心から互い違いにずれている。全体的に有機質が付着した痕跡がみられるが，材質は不明である。

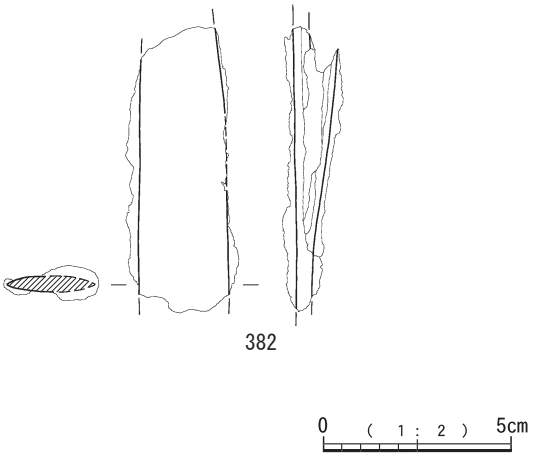
364 ～ 367は円錐形鉄器である。すべて直線的に広がる形態で，端部の合わせ方は端部同士を合わせる合わせ型である。364の下半部の端部は開いている。下面部に皮革のような有機質が付着する。365は比較的しっかりと端部を合わせている。表面に皮革のような有機質が付着する。366は両端部がやや開くが，下端部は角を落とす加工がみられる。表面に皮革のような有機質が付着する。367は先端が欠損するものの，最も小型である。端部の合わせにやや隙間が生じている。

111号地下式横穴墓（第248図）

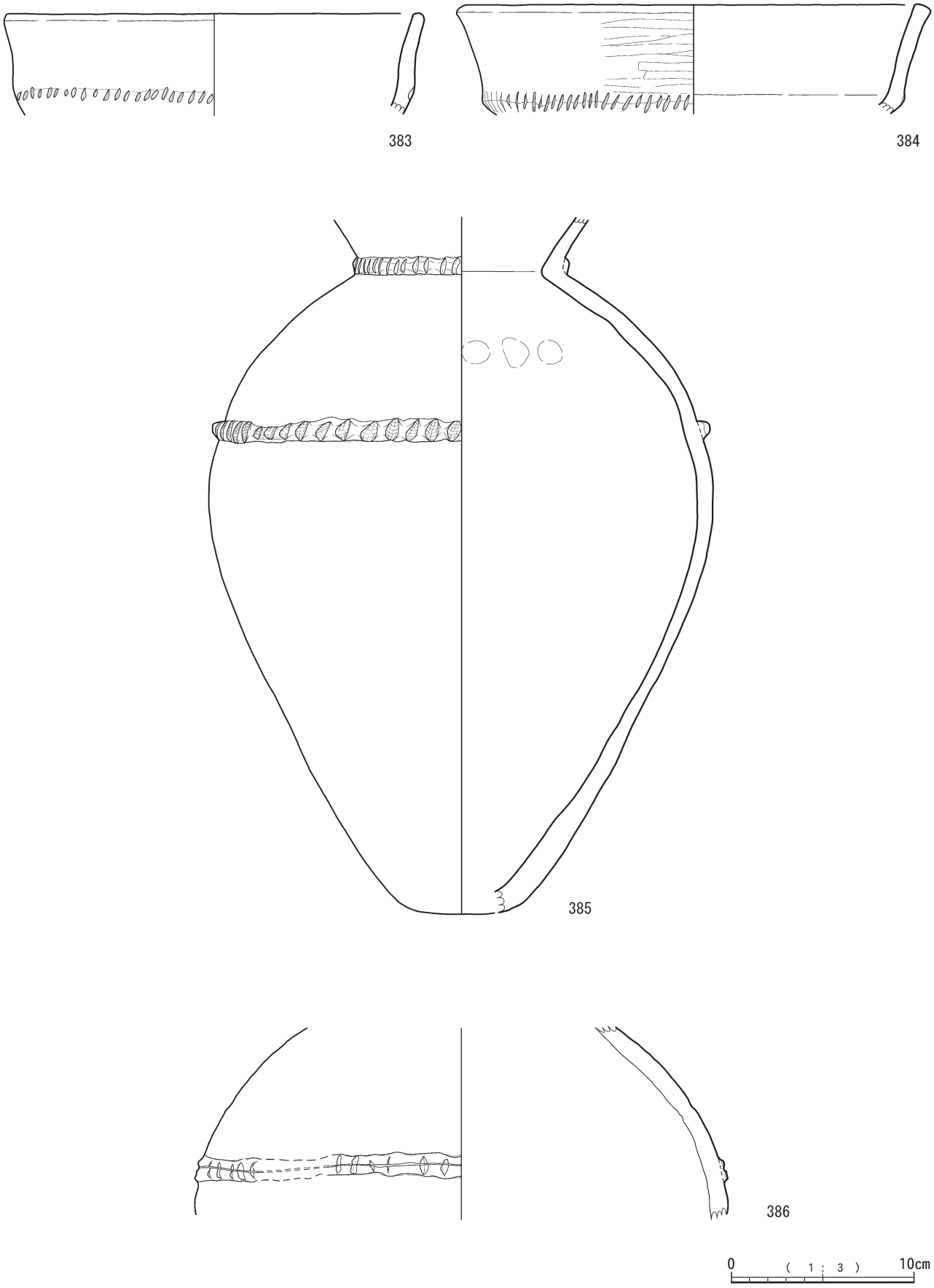
鉄器は鉄鏃14点（圭頭鏃13点，腸抉三角形鏃１点）が出土した。368 ～ 380は圭頭鏃である。断面形は錆化により不明瞭なものを除いて，刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。368・369は錆着していたため，そのまま実測した。368・369は圭頭鏃Ⅱb類である。有機質の付着がみられるが，状態が悪く材質は不明である。錆化が進行しており，やや変形するが原形は保たれている。370・371は錆着していたため，そのまま実測した。錆化が進行しており，やや変形するが原形は保たれている。370は圭頭鏃Ⅱc類である。錆化により刃部の一部が不明瞭である。茎部の一部が欠損する。木質が付着するが，他の鉄鏃の矢柄が付着したと考えられる。371は錆化により刃部が不明瞭であるが，Ｘ線写真の観察から圭頭鏃Ⅱb類と推定した。372～377は圭頭鏃Ⅱc類である。372は錆化により刃部の一部が不明瞭である。茎部の一部が欠損する。373は頸部の一部から茎部が欠損する。374は錆化により頸部に分離が生じている。矢柄がわずかに残存するが，口巻きの単位は不明瞭である。375は錆化により刃部の一部が不明瞭である。わずかに湾曲する。376は錆化が進行しており，先端部に剥離が生じているが原形は復元できる。茎部にも変形がみられる。377は錆化により頸部に分離が生じている。378・379は圭頭鏃Ⅱb類である。378は頸部に皮革状の有機質が付着する。茎部に矢柄の痕跡がわずかにみられる。379は先端と頸部の一部に皮革状の有機質が付着する。茎部に矢柄の痕跡がわずかにみられる。380は刃部のほとんどと茎部の一部が欠損する。頸部から先端に向けての広がり方から圭頭鏃の可能性が高い。矢柄の痕跡はみられない。381は腸抉三角形鏃である。錆化が進行しており，変形がみられる。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。先端に有機質と思われるものが付着するが，状態が悪く材質は不明である。

エリア10遺構外出土鉄器（第249図）

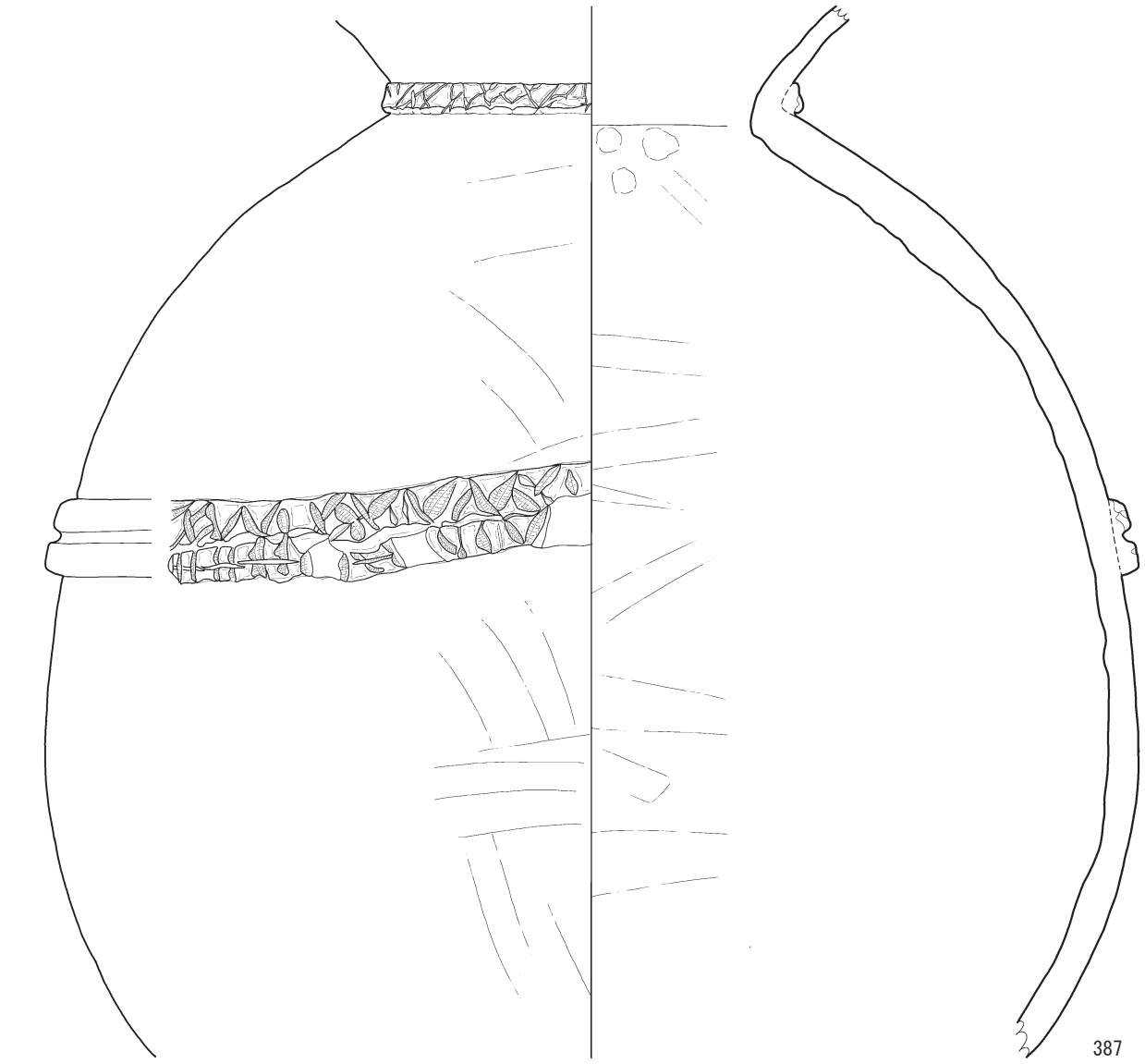
382は111号地下式横穴墓の南側付近から出土した。上下に欠損がみられ，状態が悪く器種は不明である。わずかに刃部が確認でき，断面形は両丸造りであることから，鉄剣，あるいは大型鉄鏃と考えられる。

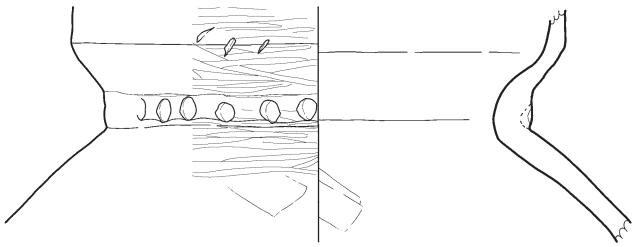


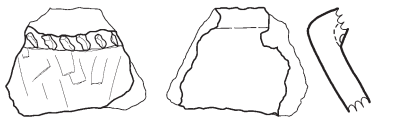
第 249 図　エリア 10 遺構外出土鉄器

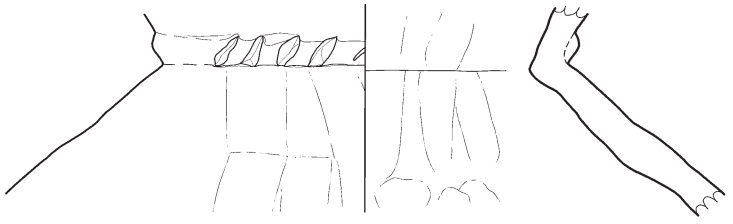


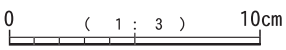
第250図　エリア10出土土器(1)



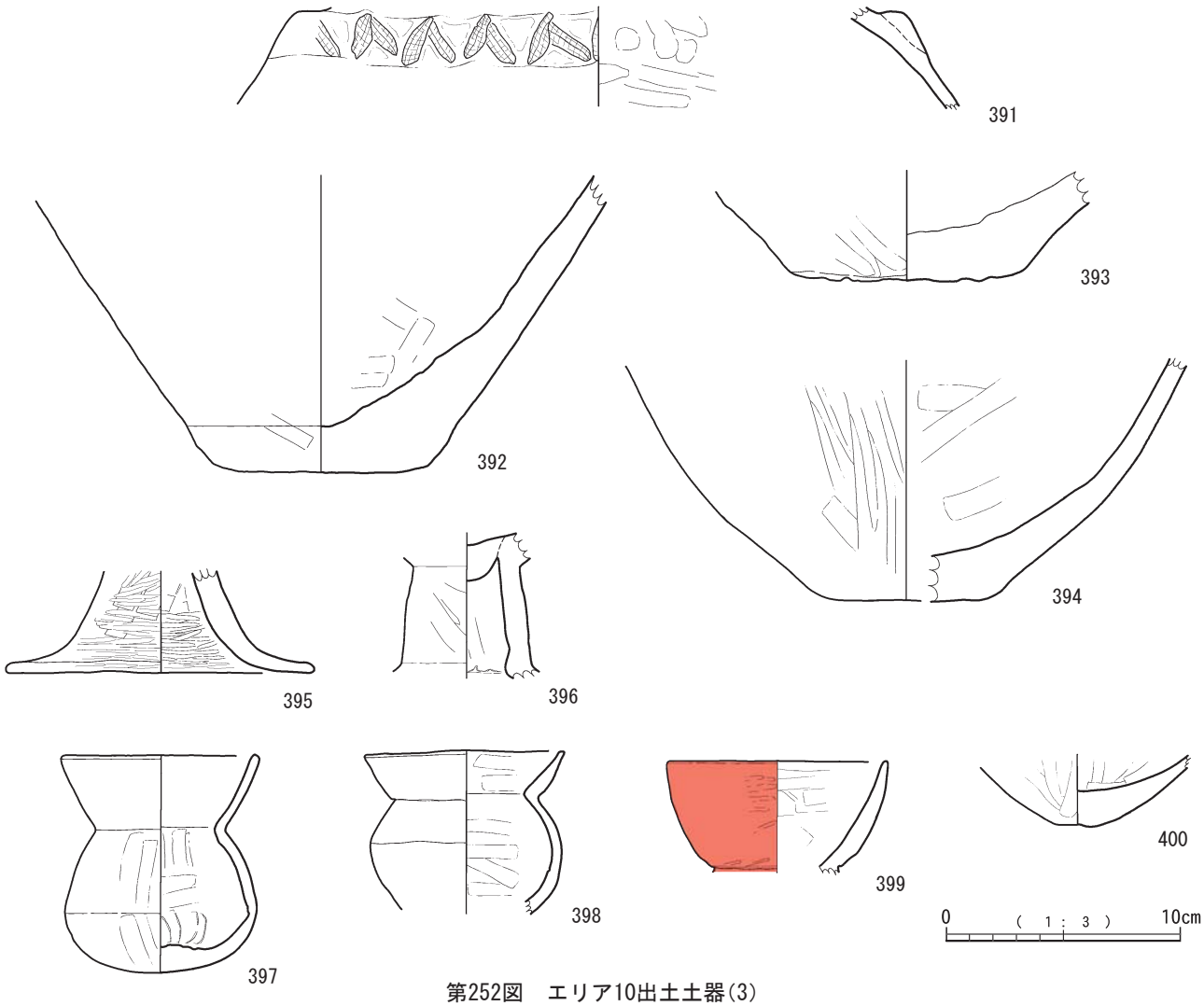








第251図　エリア10出土土器(2)



第252図　エリア10出土土器(3)

エリア10出土土器(第250図～第253図)

383～394は壺である。383・384は，壺E類の口縁部である。屈曲部外面には弱い稜線が入り，浅い刻みが施される。383の口径は22.8cmで，屈曲部から端部にかけてやや外反し，口唇部は丸く収める。384は口径25.8cmで，屈曲部からやや外反して開く。口唇部は平坦でやや厚くなる。外面はヘラ状工具でミガキがなされている。385は，胴部最大径が27.4cmで，頸部と胴部に刻目突帯を有するものである。刻み目には布目痕が認められる。肩部付近内面には指頭圧痕が認められるが，外面は風化が顕著であり，調整等は不明である。386は，385と同程度の小型のものである。肩部に一条の突帯を有し，突帯の中心には横方向の沈線を引いたあと刻みが施されている。387は壺A類である。胴部最大径は46.8cmで，頸部に一条，胴部に二条の刻目突帯を有する。胴部突帯は，基本的にまず上の突帯を貼付して刻みを施した後，下の突帯を貼付して刻みを施しているが，ランダムに２本同時に刻みを入れている箇所や，下の突帯に横方向の沈線を施している箇所もみられる。内外面ともに工具によるナデ調整で，頸部内面付近には指頭圧痕が認められる。388～390は，壺の頸部付近である。いずれも刻目突帯を有するものである。388は二重口縁壺で，円みのある刺突文様が施される。口縁屈曲部外面には少なくとも３つの浅い刻みが認められる。外面はミガキで，内面には工具によるナデ調整がなされる。389は，小型の壺の頸部である。外面は工具によるナデ調整である。390は，外面は工具によるナデ調整で，内面には指頭圧痕が顕著に認められる。391は壺の幅広突帯で，突帯の刻み目には布目痕が認められる。392～394は壺の底部で，全て平底を呈するものである。392は底径9.1cmで，器壁が厚い。内外面ともに工具によるナデ調整である。393は，外面は工具によるナデ調整であるが，内面は風化が顕著で，器面が剥離している。394は底径7.8cmで，外面は縦方向のミガキ，内面は工具によるナデ調整である。

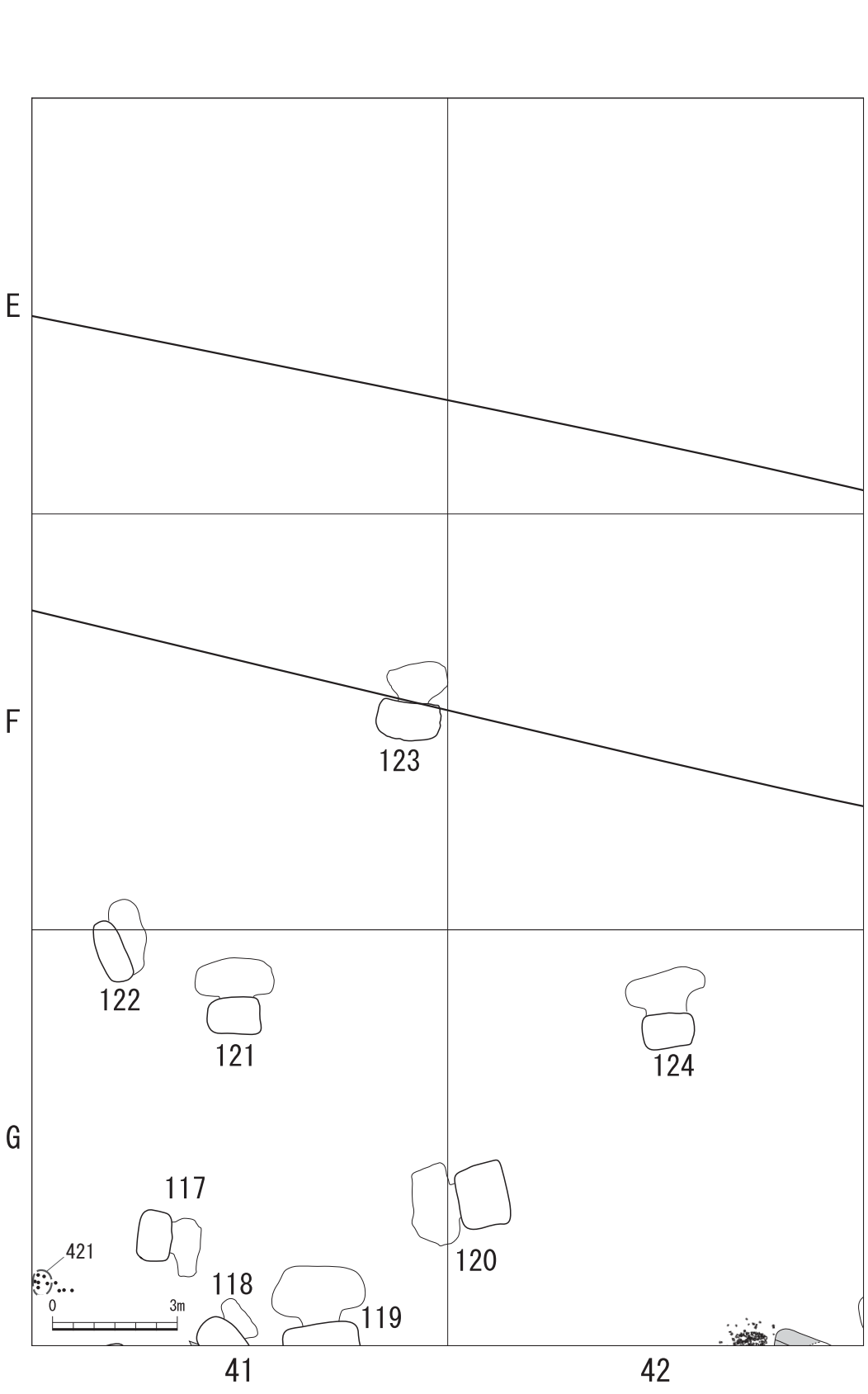
395・396は，高坏の脚部である。395は，スカート状に開くもので，裾部で屈曲しさらに大きく開く。内外面ともに工具によるナデの後にミガキ調整されるが，内

面の上部は工具によるナデ調整のみである。396は，ややエンタシス状を呈する脚柱部である。坏部との接着方法として，円盤型の粘土塊を充填している。裾部との境には屈曲部を持ち，裾部でさらに開くものと思われる。内外面ともに工具によるナデ調整である。

397～400は坩である。397は坩D類である。口径8.4cmで，やや内湾しながら開き，口唇部は丸く収める。胴部は胴部最大径の位置が中位よりやや下がり，下膨らみを呈する。底部は丸底である。内外面ともに工具によるナデ調整である。398は，口径8.5cmで，短い口縁をもつ。端部にかけて先細りに伸び，口唇部は平坦を呈する。胴部は歪みが顕著で，胴部外面には稜線が部分的に入る。外面はナデ，内面は工具によるナデ調整である。399は口縁部で，口径9.2cmである。内湾しながら先細りに開き，口唇部は丸みを帯びる。外面はミガキ，内面は工具によるナデ調整である。400は坩の底部で，内外面ともに工具によるナデ調整である。

401・402は初期須恵器の甕である。401は甕の口頸部である。口径23.4cmで，他の甕と比べて小型である。胴部は欠損して不明だが，頸部から大きく広がる。402は底部で，外面は平行タタキで，内面は同心円状のタタキの痕をナデ消している。401・402は同一個体と思われる。TK73～216型式に該当し，古墳時代中期中葉に位置づけられる。原産地は不明である。

第253図　エリア10出土土器(4)



第 254 図　エリア 11　遺構配置図

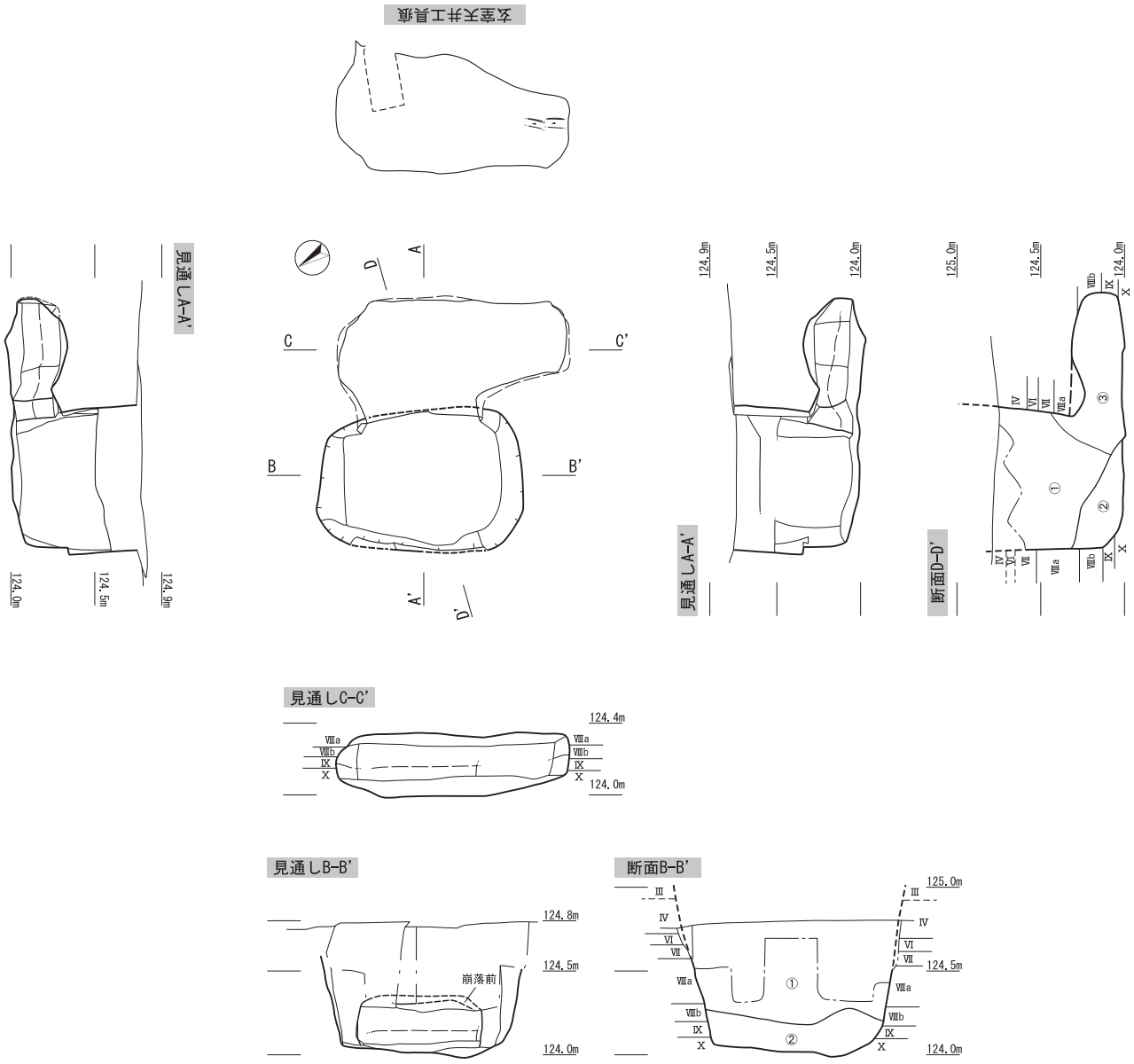
117号地下式横穴墓	検出区	G-41	玄室開口方向	東南東
	分　類	Ｂ１		

検出状態	攪乱部分を取り除いて検出したが，玄室の天井は攪乱除去時に崩落した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	84	120	78	74	22	11	62	138	70	30
推　定	90	140	100	－	30	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 埋土は床面近くにⅦ・Ⅷ層が多い。平面形は方形である。 【玄室】 検出時は天井の一部が崩落していた。右片袖状である。
工具痕	天井に右奥に向けて削った工具痕が確認できる。天井が崩落したブロックに幅約5.4㎝の工具痕がみられたが，先端の形状は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
①より軟らかく,ブロック小さい。

0 (1 : 40) 1m

第255図　117号地下式横穴墓

118号地下式横穴墓

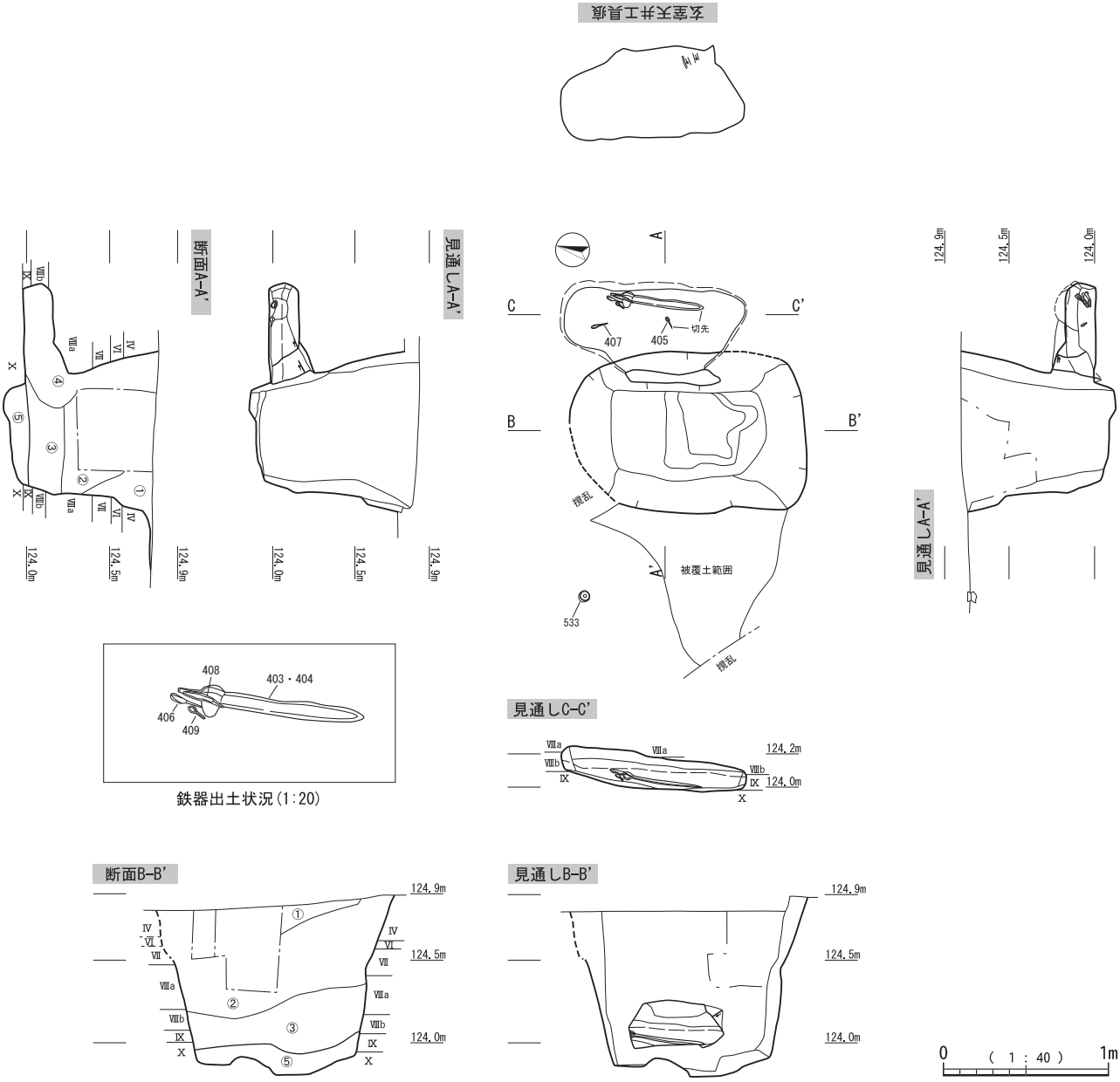
検出区	G・H-41	玄室開口方向	東北東
分　類	B２		

検出状態	４号土坑墓周辺のトレンチャーによる攪乱部分を取り除いた際に検出した。小型であるが，良好な状態で残存していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	98	142	105	56	28	9	40	114	49	20
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室よりやや低いが，その段差をなくすように水平に埋土⑤が入っている。これが，閉塞に関連する埋土であるかは不明である。検出面では，竪坑後方にⅦ・Ⅷ層が含まれた黒色土が広がっている。 【玄室】 内部の高さは20cm程度しかなく，大変低い。また，横幅も１m程度と小さい。鉄剣や鉄鏃が出土している。
工具痕	玄室内の天井や側面に削った方向がわかるものはあるが，工具の幅や先端の形状がわかるものはみられない。
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，刀子１点，鉄鏃５点（腸抉柳葉鏃２点，鳥舌鏃１点，圭頭鏃２点）が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%含む黒色土。軟らかい。上部から入り込んだ土。しまりなし。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を微量に含むⅨ・Ⅹ層が混在する土。しまり有り。

第256図　118号地下式横穴墓

119号地下式横穴墓

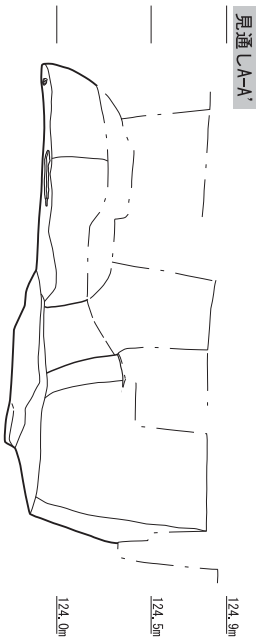
検出区	G・H-41	玄室開口方向	北北東
分　類	B２		

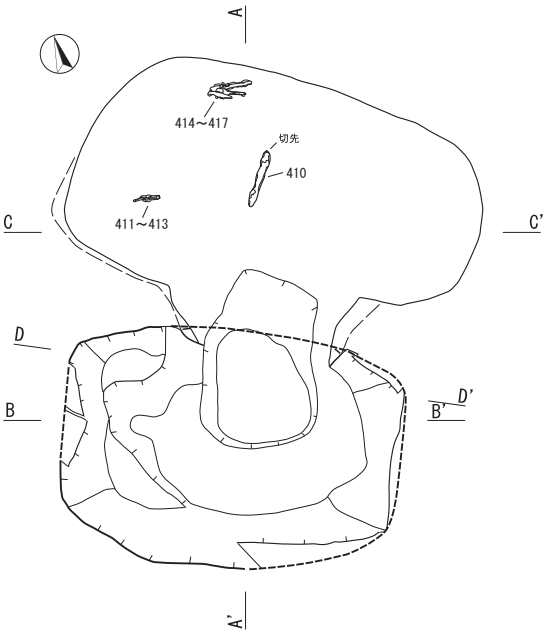
検出状態	Ⅶ・Ⅷ層の混在する部分周辺のトレンチャーによる攪乱を取り除き検出した。玄室の天井は崩落していた。

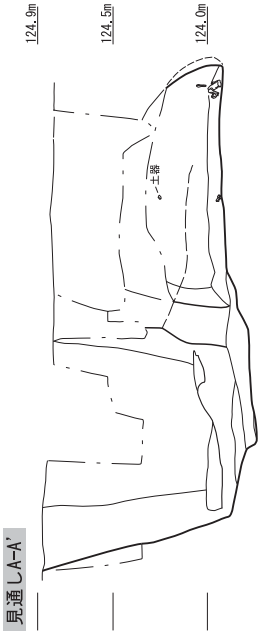
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	126	180	98	86	－	30	114	214	144	－
推　定	125	180	120	－	70	－	－	－	－	60

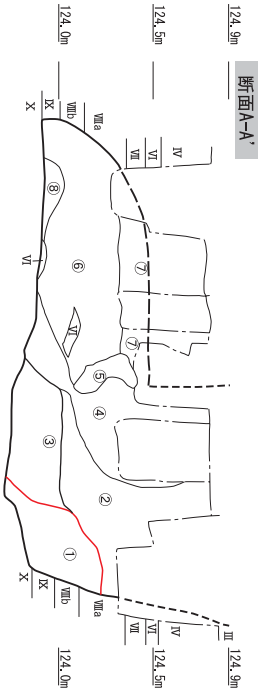
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	逆台形？
玄室天井層	Ⅵ・Ⅶ	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅸ	玄室断面形	（不明）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	あり

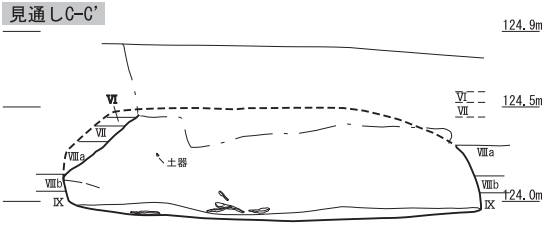
概　要	【竪坑】 羨道前の床面が一部低くなっている。埋土②③④は，Ⅶ・Ⅷ層の土の量が埋土①と明確に異なることから，掘り返し後埋め戻し土と考えられる。羨道近くに，土塊ブロックがみられたが，量が少ないため土塊閉塞ではないと考えられる。 【玄室】 羨道との境に明瞭な稜をもつ。横軸は玄室と 15 度程度ずれる。天井が崩落して入り込んだ埋土⑥は，Ⅷ層やⅥ層の池田降下軽石が微量含まれ，玄室上位に掘り上げ土の一部を置いたものと考えられる。鉄器は３か所で出土し，ほぼ床面上であった。中央の鉄剣は，その位置から遺体の上に置かれていた可能性がある。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，鉄鏃７点（短頸鏃４点，二段腸抉柳葉鏃１点，大型三角形鏃１点，大型鏃１点）が出土した。
備　考	玄室内で出土した土器片は縄文土器でる。玄室天井が崩落した際に流れ込んだと考えられる。

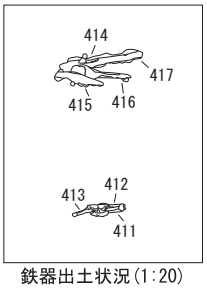




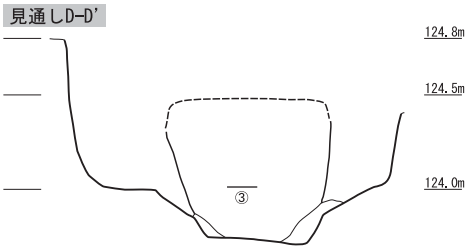


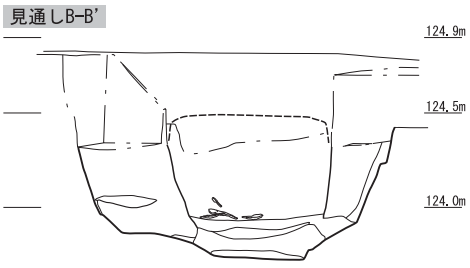


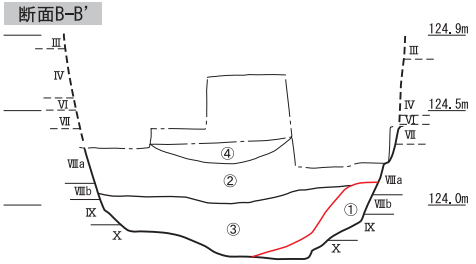


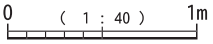


鉄器出土状況(1:20)









① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約80%，Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。しまり有り。②③よりブロック大きい。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約20%，Ⅸ・Ⅹ層を微量に含む黒色土。やや軟らかい。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約40%，Ⅸ・Ⅹ層を微量に含む黒色土。②よりしまり有り。
④ ②が崩落した土。軟らかい。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(20cm以下)を約80%含む黒色土。硬い。
⑥ 黒色土。Ⅳ層と思われる。天井が崩落した土。微量のⅦ・Ⅷa層の粒(1cm以下)が入る。地表に少量Ⅶ・Ⅷa層の粒があったと思われる。やや軟らかい。
⑦ やや褐色を帯びた黒色土。Ⅲ層と思われる。天井が崩落した土。微量のⅦ・Ⅷa層の粒(1cm以下)が入る。地表に少量Ⅶ・Ⅷa層の粒があったと思われる。やや軟らかい。
⑧ Ⅵ・Ⅶ層の粒を少量含む黒色土。しまり有り。天井が崩落した土。

第257図　119号地下式横穴墓

120号地下式横穴墓

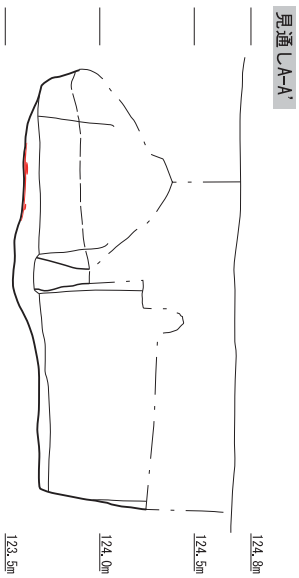
検出区	G-41・42	玄室開口方向	西北西
分　類	B 1		

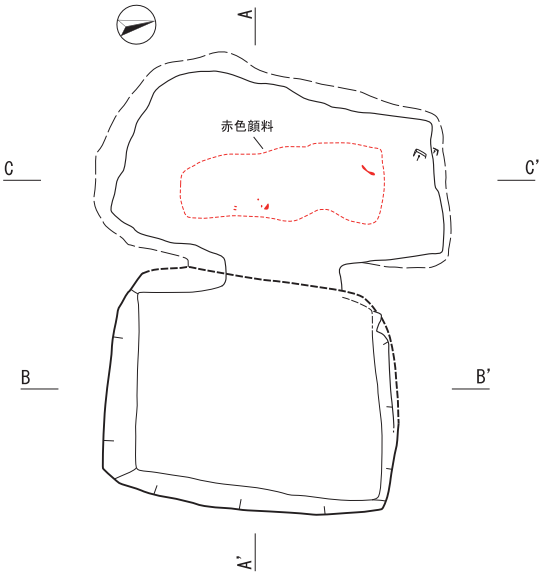
検出状態	わずかに残るⅦ・Ⅷ層の混在する部分周辺の攪乱を取り除いて検出した。玄室の天井は，完全に崩落していた。

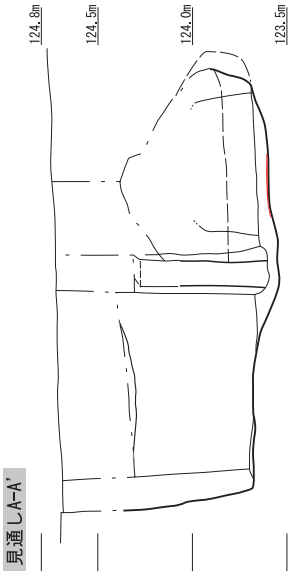
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	123	152	103	－	－	－	98	186	130	－
推　定	－	155	－	90	50	－	－	－	－	50

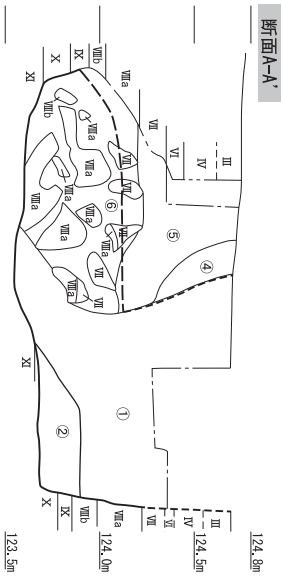
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

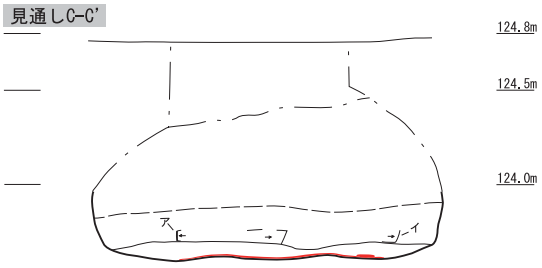
概　要	【竪坑】 床面はほぼ平坦で羨道部分が一段深い。埋土②は，X層が主体となっており，大変硬くしまっているため，この上面が閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 やや右側に張り出す形状である。天井はほぼ完全に崩落しており，崩落したブロックからⅧa層が天井面と考えられる。玄室の中央部に赤色顔料が横方向に広がっており，埋葬者の全身に塗布されていた可能性が高い。
工具痕	玄室内には小さな方形の工具痕がみられた。 ア，イはいずれも方形を呈し，アの幅は4.4㎝，イは不明である。
赤色顔料	玄室でパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	竪坑埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

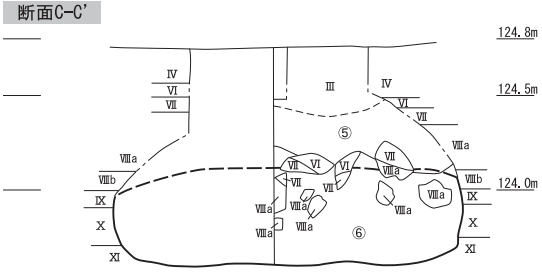


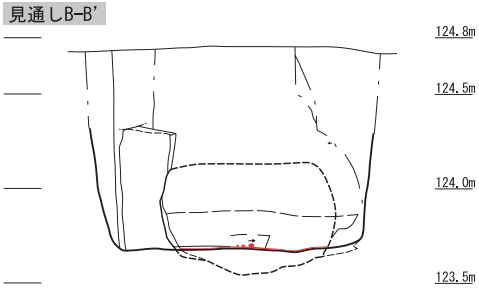


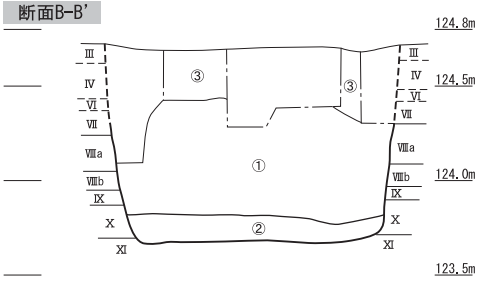


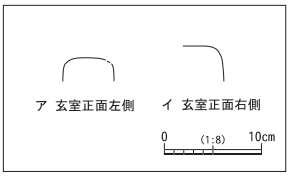












工具痕実測図

① Ⅶ層・Ⅷa層・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ層・Ⅷa層・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量含むⅨ・Ⅹ・Ⅺ層の土が混在する。しまり有り。
③ Ⅶ層・Ⅷa層・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%, Ⅹ・Ⅺ層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
④ ⑤に微量のⅦ層・Ⅷa層の粒(1cm以下)を含む黒色土。しまり有り。
⑤ Ⅲ層・Ⅳ層が主体の黒褐色土。ややしまり有り。天井が崩落した土。
⑥ Ⅶ層・Ⅷa層・Ⅷb層の粒・ブロック(天井が崩落した土)が混在する黒褐色土。軟らかくしまりなし。

0 (1 : 40) 1m

第258図　120号地下式横穴墓

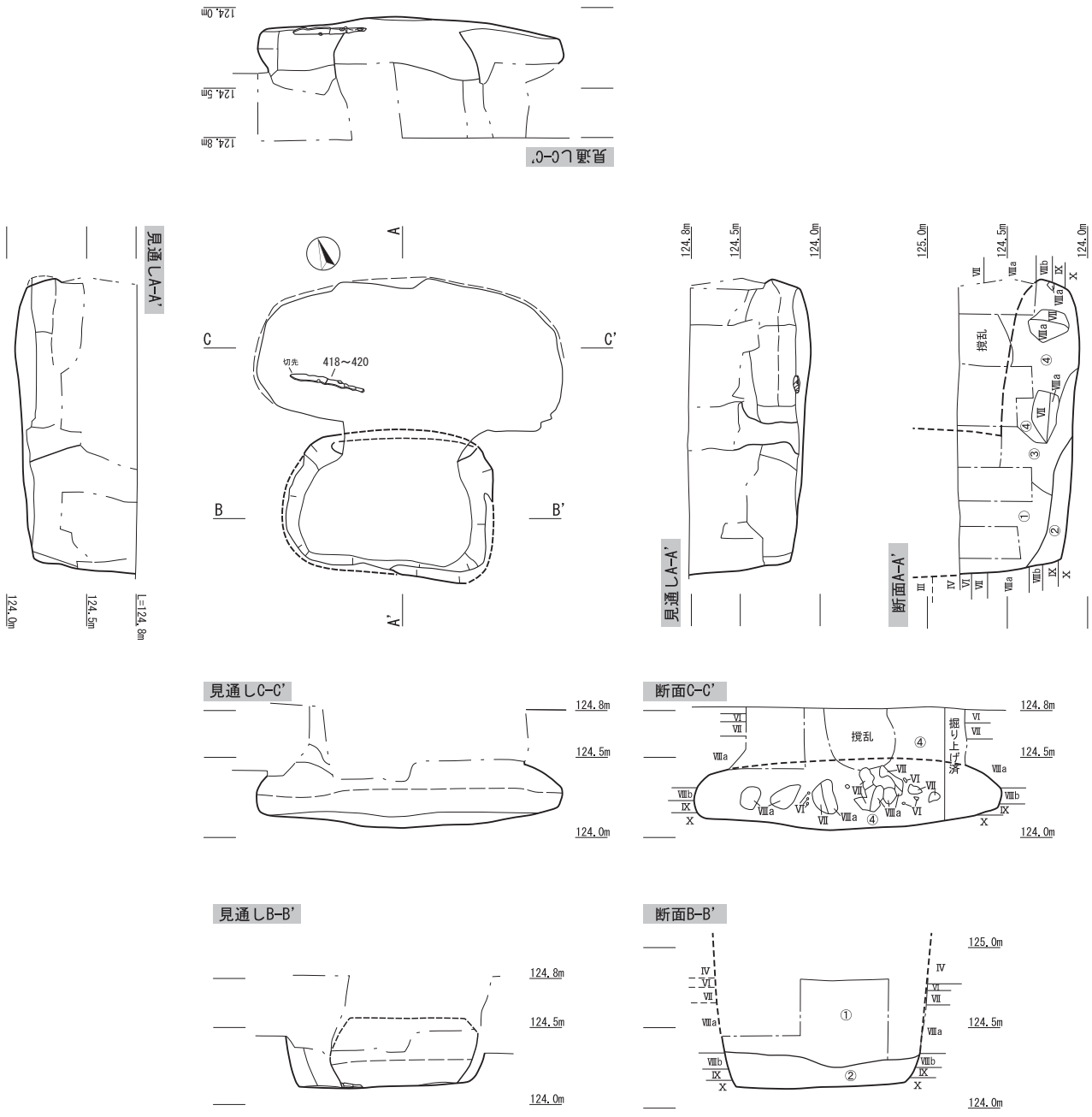
121号地下式横穴墓	検出区	G-41	玄室開口方向	北北東
	分　類	A		

検出状態	トレンチャーによる攪乱を取り除いた結果，竪坑と玄室を確認した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	90	130	68	88	－	13	90	190	103	－
推　定	95	135	100	－	45	－	－	－	－	45

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室に向かってやや低くなる。埋土はⅧ層を多く含んでおり，遺構を構築する際にこの層を中心に掘削したためと考えられる。 【玄室】 攪乱を受ける前に天井が崩落している。竪坑より横幅が長い。左側に鉄器が副葬されていた。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，茎部片２点が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%，Ⅸ・Ⅹ層を約20%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。ややしまり有り。天井が崩落した土。

第259図　121号地下式横穴墓

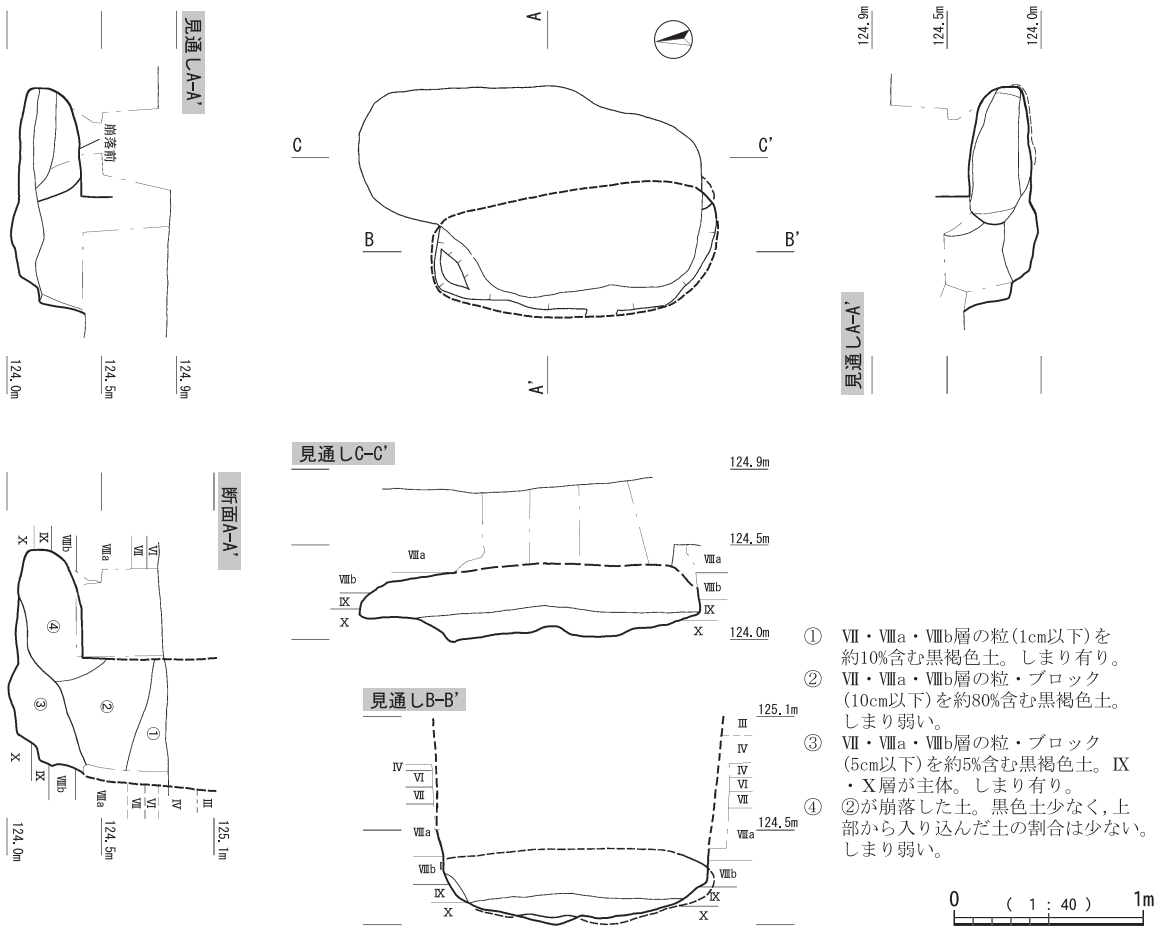
122号地下式横穴墓	検出区	F・G-41	玄室開口方向	東
	分　類	C		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層の混在する部分周辺のトレンチャーによる攪乱を取り除いて検出した。玄室の天井は残存していたが，調査中に崩落した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	70	152	80	134	34	－	68	180	58	－
推　定	－	－	110	－	－	－	－	－	－	30

竪坑最下層	X	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	楕円形？
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	X	玄室断面形	不整形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は羨門付近が低くなる。床面近くの埋土③は，Ⅸ・X層を主体としており，硬くしまっている。この埋土は玄室を構築した際の排出土であり，上面が閉塞時の床面と考えられる。 【玄室】 左片袖状であり，羨道はほぼみられない。竪坑と玄室の床面の高さはほぼ同じである。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約10%含む黒褐色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒褐色土。しまり弱い。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約5%含む黒褐色土。Ⅸ・Ⅹ層が主体。しまり有り。
④ ②が崩落した土。黒色土少なく,上部から入り込んだ土の割合は少ない。しまり弱い。

第260図　122号地下式横穴墓

123号地下式横穴墓

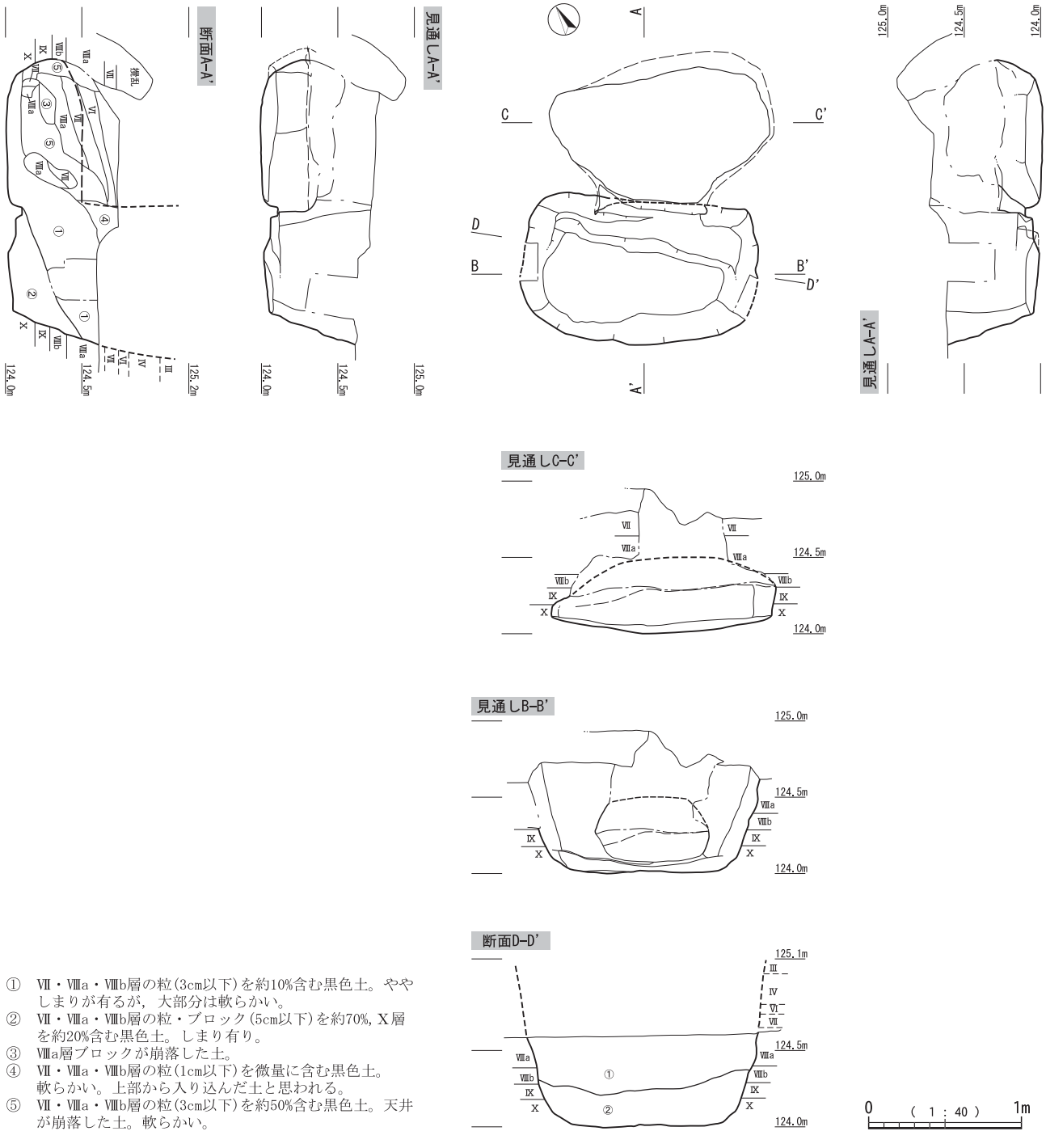
検出区	F-41	玄室開口方向	北北東
分　類	B 1		

検出状態	玄室は崩落していた。標高が高い位置にあり，Ⅷa層まで攪乱を受けている。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	94	154	58	74	－	9	82	136	91	－
推　定	100	165	110	－	50	－	－	－	－	50

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa・Ⅷb	玄室平面形	楕円形（不整形）		
玄室床面層	X	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は羨道前が一段高くなっている。床面近くの埋土②は，Ⅷ層からX層を多く含むことから，埋土②は玄室を掘削した際の排出土と考えられる。また，しまりがあることから，この上面は閉塞時の床面と推定される。 【玄室】 天井部分は崩落し，玄室に入り込んだ埋土①の上に乗った状態であった。竪坑と玄室の掘削した深さはほぼ同じであり，羨道に対して一段深い。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまりが有るが，大部分は軟らかい。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約70%，X層を約20%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅷa層ブロックが崩落した土。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。軟らかい。上部から入り込んだ土と思われる。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約50%含む黒色土。天井が崩落した土。軟らかい。

第261図　123号地下式横穴墓

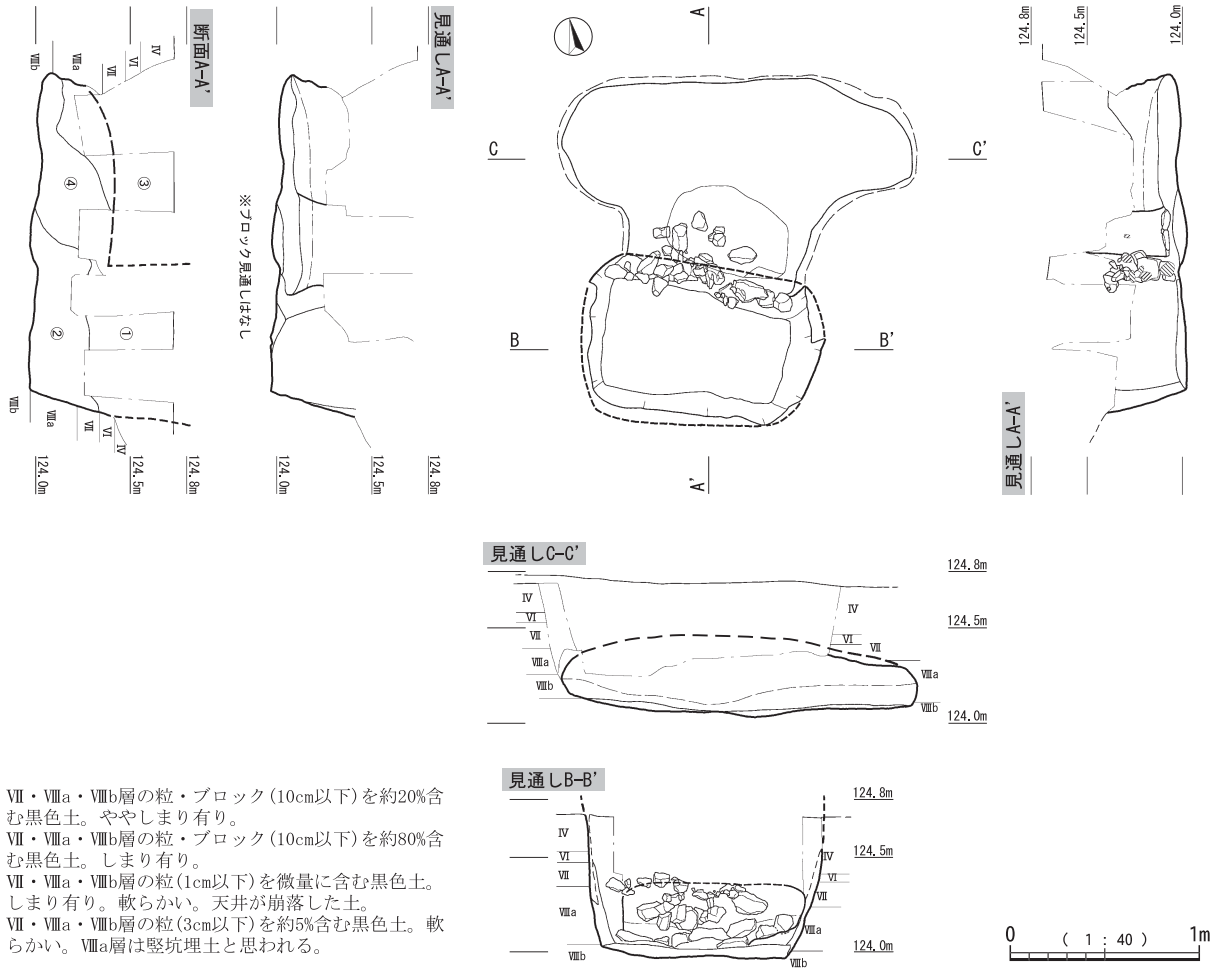
124号地下式横穴墓	検出区	G-42	玄室開口方向	北北東
	分　類	B１		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分で，トレンチャーによる攪乱を取り除いて検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	84	126	76	96	－	23	78	190	101	－
推　定	－	130	85	－	40	－	－	－	－	40

竪坑最下層	Ⅷb	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形？
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	Ⅷb	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	土塊	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 羨道入口付近にⅧ層のブロックが多く残っていることから，硬いⅧ層を利用した土塊閉塞と考えられる。ただし，整然と並べられた痕跡はない。 【玄室】 羨道との間に明確な稜をもち，竪坑や羨道より横幅が長い。
工具痕	未検出
赤色顔料	玄室及び竪坑でパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



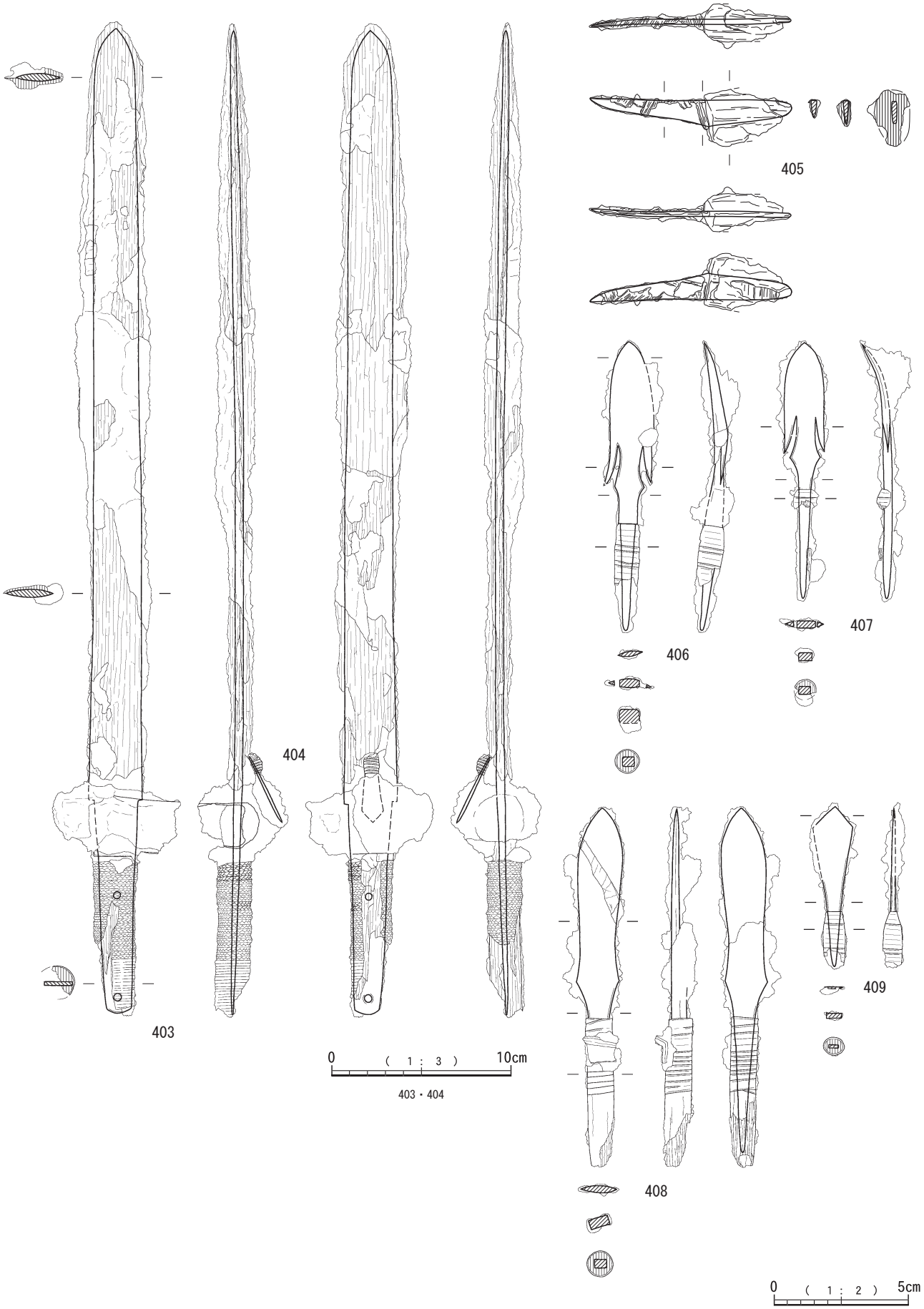
第262図　124号地下式横穴墓

エリア11出土鉄器（第263図～第265図）

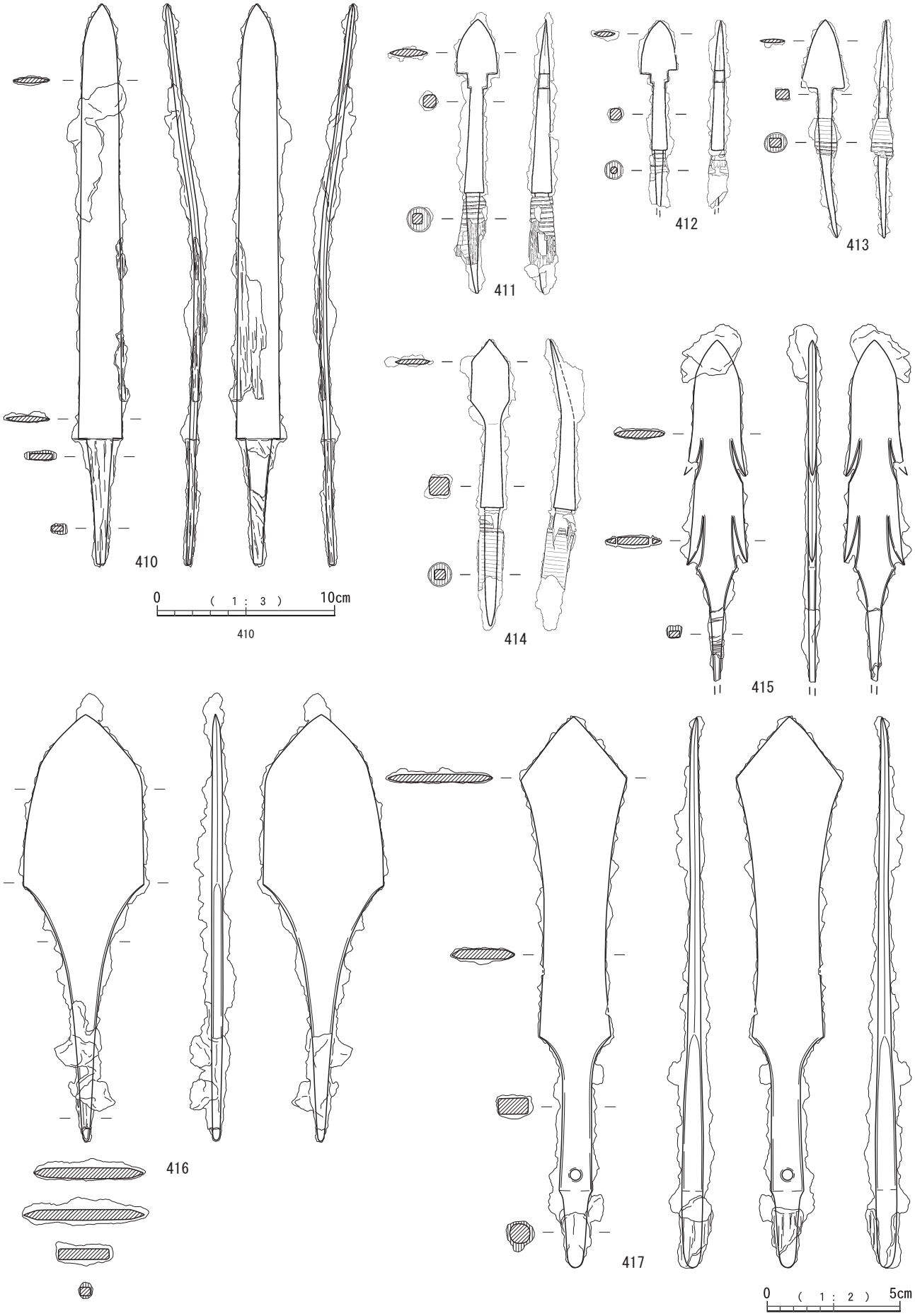
118号地下式横穴墓（第263図）

鉄器は鉄剣１点，刀子１点，鉄鏃５点（腸抉柳葉鏃２点，鳥舌鏃１点，圭頭鏃２点）が出土した。403・404は錆着していたため，そのまま実測した。403は鉄剣である。刃部に錆による歪みがわずかに生じている。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。鞘木が良好に残存しており，合わせ目の観察から二枚合わせ式であることが確認できる。鞘木に重なって，斜めに巻かれた鞘巻きの痕跡がみられる。顕微鏡での観察から，布が確認されたが，状態が悪く詳細は不明である。関部は一方が錆により不明瞭なものの，深さ約２mmの直角に落ちる形態である。関部直下に把縁とその突起部の痕跡がみられるが，錆化して輪郭は不明瞭である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔が確認できる。茎部には柄木と柄巻きが良好に残存する。茎部に対して柄木が一方に片寄り，糸巻きのみの部分があることから，落とし込み式と考えられる。柄巻きは，上から5.4cmまでは三つ組紐巻き，残りは異なる紐巻きと，途中から柄巻きの紐の種類が変わっている。顕微鏡での観察から，上部の紐は２畝平組紐，下部の紐は「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」であることが確認された。ただし，上部からも「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」が観察されていることから，「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」を施した後，重ねて三つ組紐巻きを施した可能性がある。404はＸ線写真の観察から圭頭鏃と推定した。おそらく圭頭鏃Ⅰb類と考えられる。錆が厚いため刃部の断面形は不明である。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。

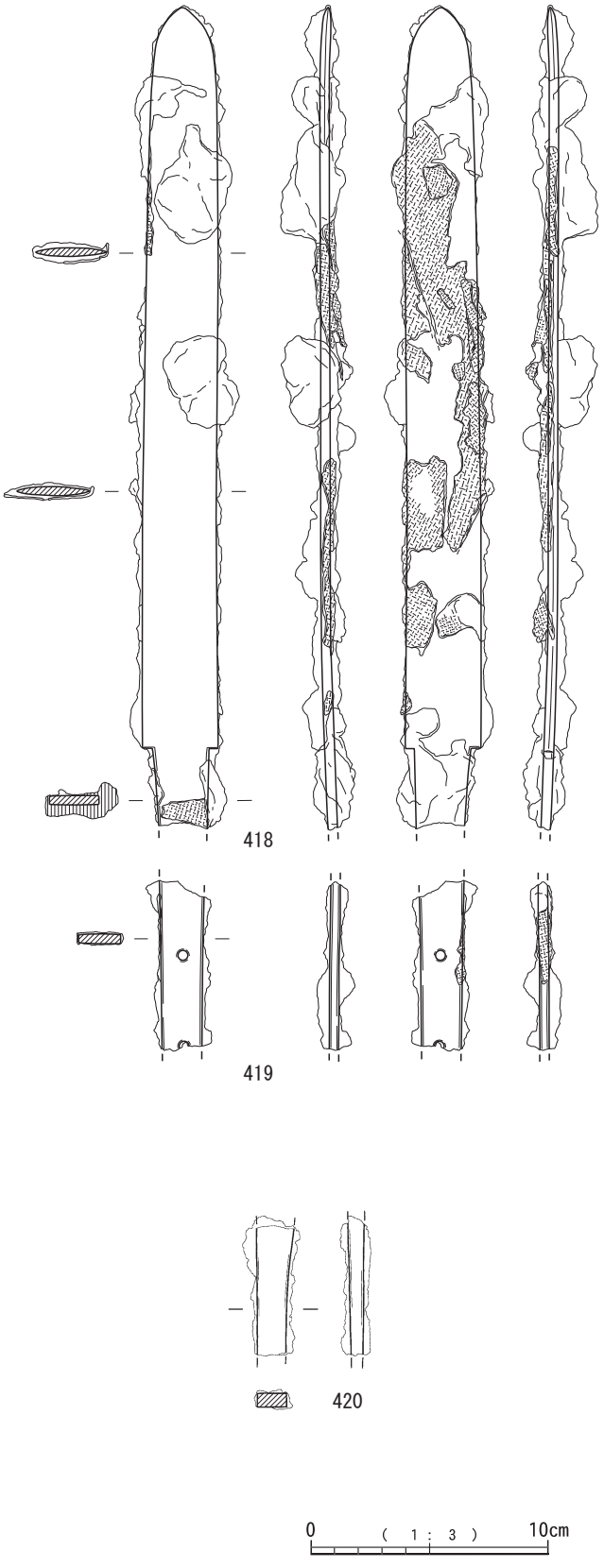
405は刀子である。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先である。刃部にくびれがみられるが，研ぎ減りによるものと考えられる。断面は平造りを呈する。刃部に斜め方向の有機質の痕跡がみられる。刃部に紐を巻き付けたと考えられる。関部は片関であり，緩やかなナデの形態である。茎部は



第263図　118号地下式横穴墓出土鉄器



第264図　119号地下式横穴墓出土鉄器



第265図　121号地下式横穴出土鉄器

茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は台形状を呈する。鹿角製の柄が良好に残存しており，関部に柄の端部がみられる。柄の破損部から，茎部に施された糸巻きが確認できる。

406 ～ 409は鉄鏃である。406・407は腸抉柳葉鏃である。銹化が進行しており，銹による変形がみられる。406の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するもののやや状態は悪く，口巻きは不明瞭である。407の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。わずかに口巻きの残存がみられる。408は鳥舌鏃である。山形突起の周辺に特に銹化が進行しており，一部に剥離が生じているが原形は留めている。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。刃部の一部に銹化した葉が付着する。矢柄が良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。長さ３cmにわたって口巻きが施されており，最後の入れ込みまで観察できる。口巻きの表面に，断面Ｌ字状の有機質が付着する。409は圭頭鏃Ⅰb類である。銹化が進行しており，刃部から頸部の一部が不明瞭である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。

119号地下式横穴墓（第264図）

鉄器は鉄剣１点，鉄鏃７点（短頸鏃４点，二段腸抉柳葉鏃１点，大型三角形鏃１点，大型鉄鏃１点）が出土した。

410は鉄剣である。刃部に銹による歪みが生じている。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部に状態が悪いものの鞘木が残存しており，関部から1.5cmの位置に端部があることが確認できる。関部は深さ約５mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察からも目釘孔はみられなかった。茎部に柄木の木質が残存しており，状態は悪いものの関部に柄の端部が確認できる。

411 ～ 414は短頸鏃である。411・412は短頸鏃Ⅱ類である。411の断面形は刃部が両丸造り，頸部が隅丸方形，茎部が方形を呈する。矢柄の残存状態は悪いが，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。412の断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が隅丸方形を呈する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。わずかに口巻きの残存がみられる。413は長三角形である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するもののやや状態は悪く，口巻きの単位は不明瞭である。刃部の一部が欠損するものの左右非対称のいびつな造りであり，頸部が非常に短く明瞭な頸部関をもたないため，在地産とみられる。414は銹化の進行による歪

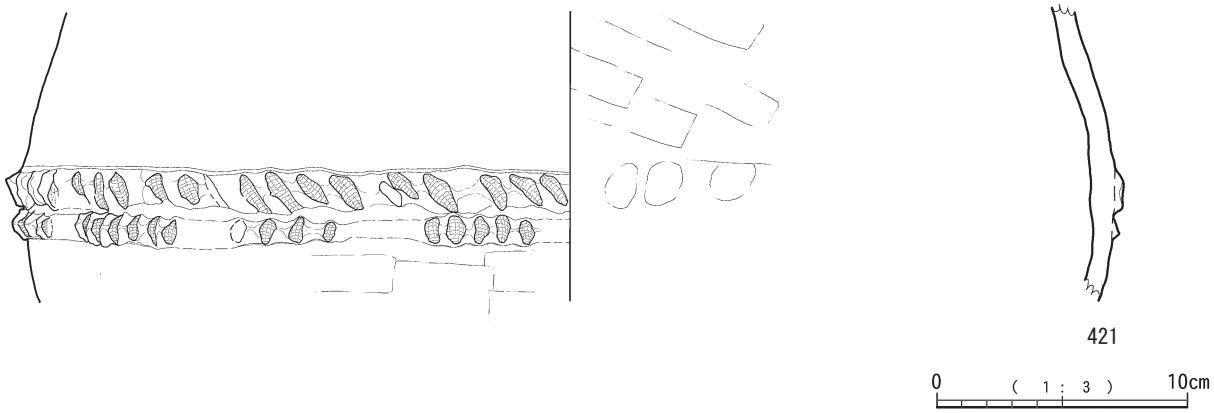
みが生じている。ふくら切先をもたない直線的な造りである。刃部の端部は，錆により確認できない。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が隅丸方形を呈する。矢柄が残存するもののやや状態は悪く，口巻きの単位は不明瞭である。415は二段腸抉柳葉鏃である。逆刺の先端と茎部の端部が欠損する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。腸抉の深さは上段約1.3cm，下段約1.8cmを測り，下段が深い。明瞭な山形突起を有する。茎部に施された糸巻きが残存する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。416は大型三角形鏃である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部付近に矢柄とみられる有機質が残存するが，状態が悪く詳細は不明である。417は大型鏃である。切先は圭頭形を呈し，そこからくびれて関部に至る。刃部先端に最大幅をもつ。断面形は刃部が平造り，頸部が長方形，茎部が隅丸方形を呈する。刃部関はナデの形態である。X線写真の観察から，頸部に穿孔がみられた。穿孔の下にナデ形がみられることから，ここを頸部関とした。全長に対して茎部が非常に短いが，頸部関を有し頸部と異なる断面形をもつことから茎部とした。矢柄とみられる木質が付着するが，状態が悪く形態は不明である。

121号地下式横穴墓（第265図）

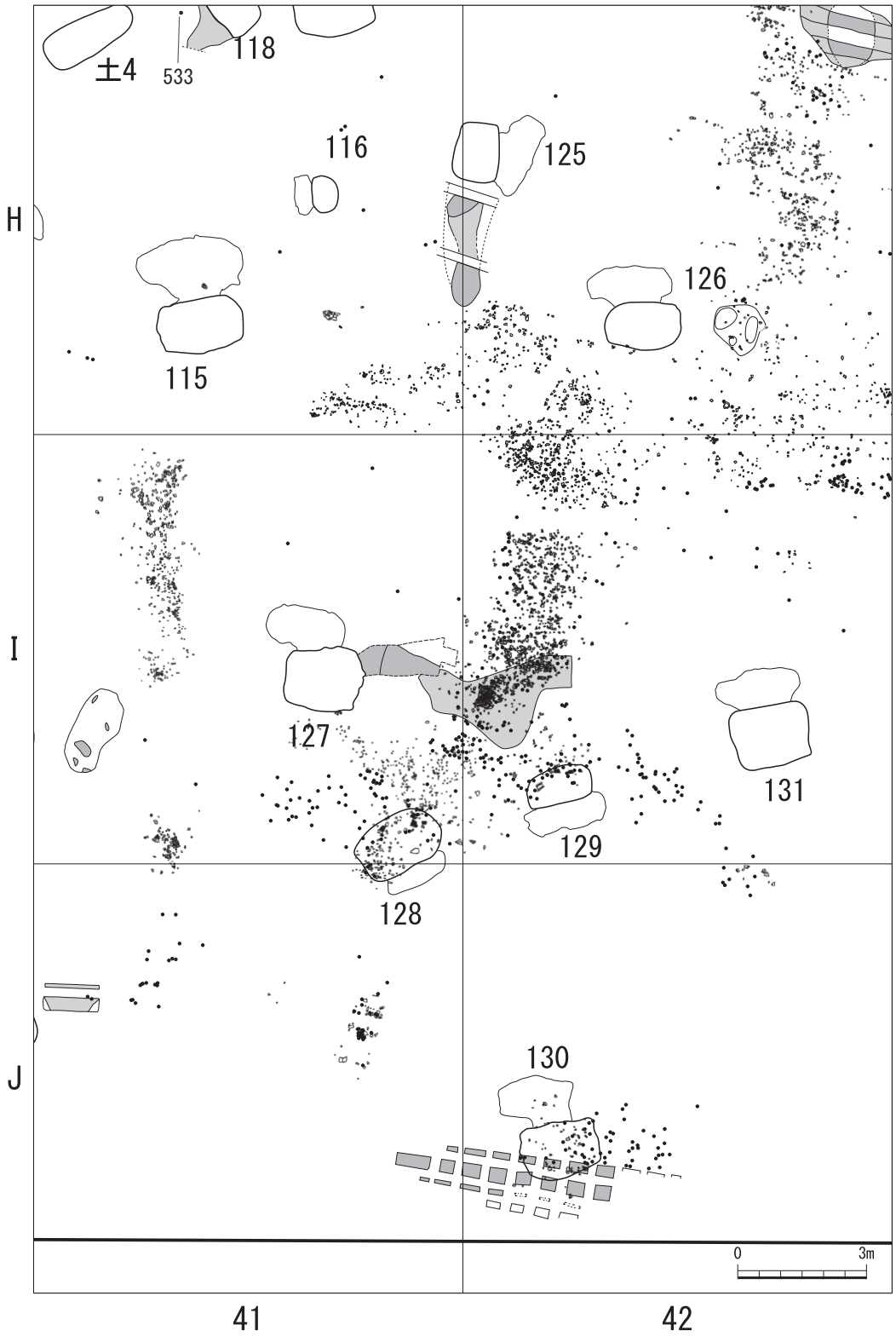
鉄器は鉄剣１点と茎部片２点出土した。同一個体と考えられるが，断面の錆化により接合できない。418は茎部の一部が欠損する。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部は深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部断面は長方形を呈する。刃部の一部から茎部にかけて錆化した平織布が付着する。平織布は表面から側面にかけて付着しており，二重になる部分もみられる。明瞭な鞘木の痕跡が認められないことからも，鞘木はなく布を巻くなどして副葬したと考えられる。419は両端部を欠損する。断面形は長方形を呈する。一部破損するものの，目釘孔が２孔みられる。側面に418と同様の平織布が付着する。420は両端部を欠損する。断面形は長方形を呈する。

エリア11出土土器（第266図）

421は壺A類の胴部である。二条の突帯を有し，それぞれに刻みが施されている。刻みには布目痕が認められる。内外面ともに工具によるナデ調整で，内面には指頭圧痕も認められる。



第266図　エリア11出土土器



第 267 図　エリア 12　遺構配置図

115号地下式横穴墓

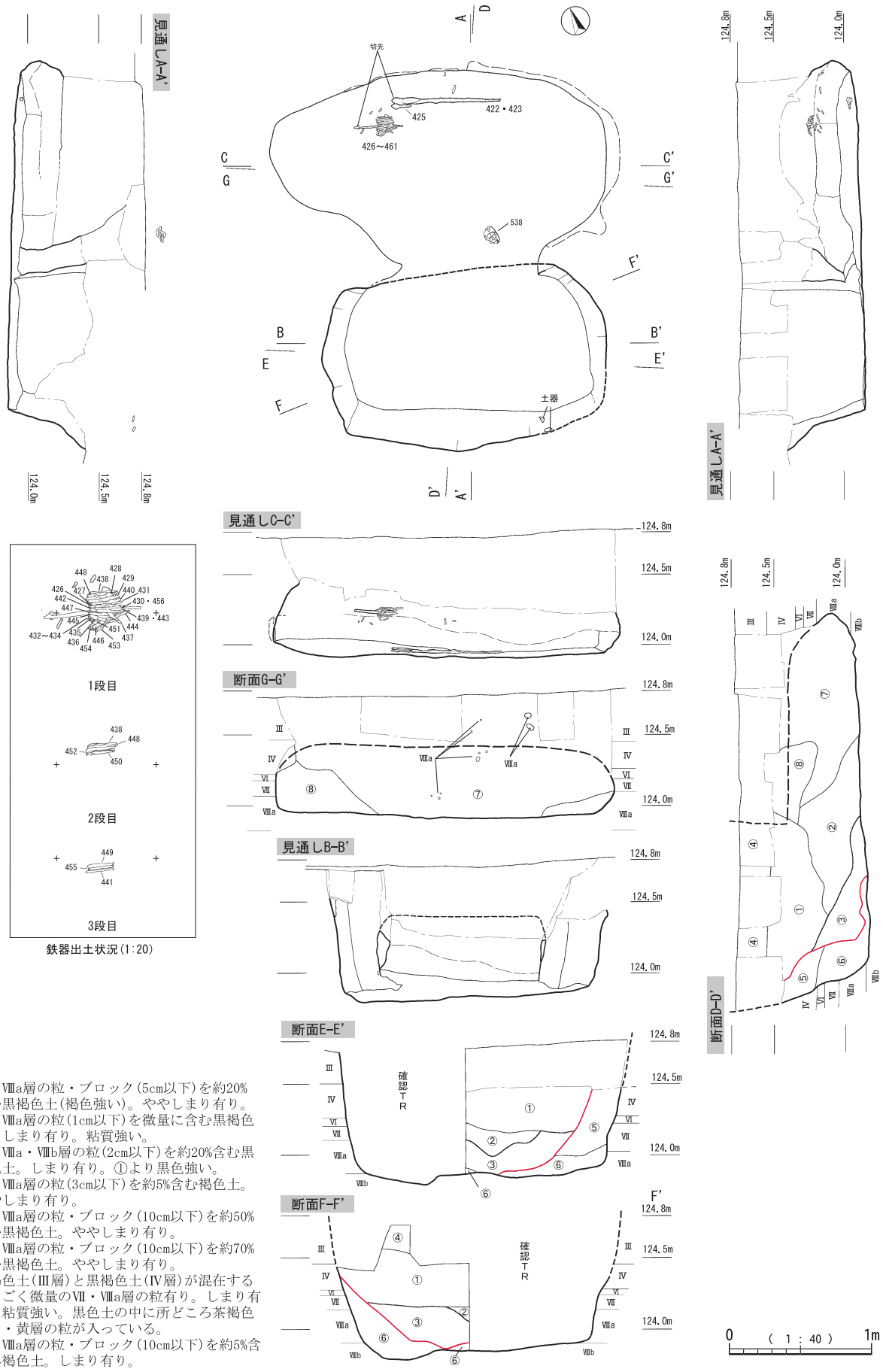
検出区	H-41	玄室開口方向	北北東
分　類	Ｂ１		

検出状態	坩が出土した周辺の攪乱部分を取り除き検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	128	199	92	120	－	18	122	246	140	－
推　定	135	205	100	－	50	－	－	－	－	50

竪坑最下層	Ⅷb	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅳ	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅷa	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	あり

概　要	【竪坑】 床面は竪坑から玄室にかけて平坦である。埋土⑤・⑥はⅦ・Ⅷ層の土の割合が高く，内側の埋土①～③は低いため，①～③は掘り返した後の埋め戻し土と考えられる。床面がⅧb層の上面と，他の墓と比較しても浅い層に構築されている。 【玄室】 横幅は竪坑より広い。埋土⑧は，Ⅶ・Ⅷ層の土を含んでおり，玄室埋土の上位に一部みられた。床面および床面より 30cm ほど高い位置で鉄器が出土した。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。年代測定では 132calAD-259calAD，樹種はクスノキ科と同定された。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	羨道付近の検出面で坩（538），竪坑上面に壺の胴部片と思われる土器片２点が出土した（非掲載）。
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄刀１点，短剣１点，鉄鏃 38 点（短頸鏃 29 点，圭頭鏃２点，不明１点，鉄鏃片６点）が出土した。
備　考	－



鉄器出土状況(1:20)

① Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む黒褐色土(褐色強い)。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を微量に含む黒褐色土。しまり有り。粘質強い。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約20%含む黒褐色土。しまり有り。①より黒色強い。
④ Ⅶ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を約5%含む褐色土。ややしまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒褐色土。ややしまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(10cm以下)を約70%含む黒褐色土。ややしまり有り。
⑦ 茶褐色土(Ⅲ層)と黒褐色土(Ⅳ層)が混在する土。ごく微量のⅦ・Ⅷa層の粒有り。しまり有り。粘質強い。黒色土の中に所どころ茶褐色の白・黄層の粒が入っている。
⑧ Ⅶ・Ⅷa層の粒・ブロック(10cm以下)を約5%含む黒褐色土。しまり有り。

第268図　115号地下式横穴墓

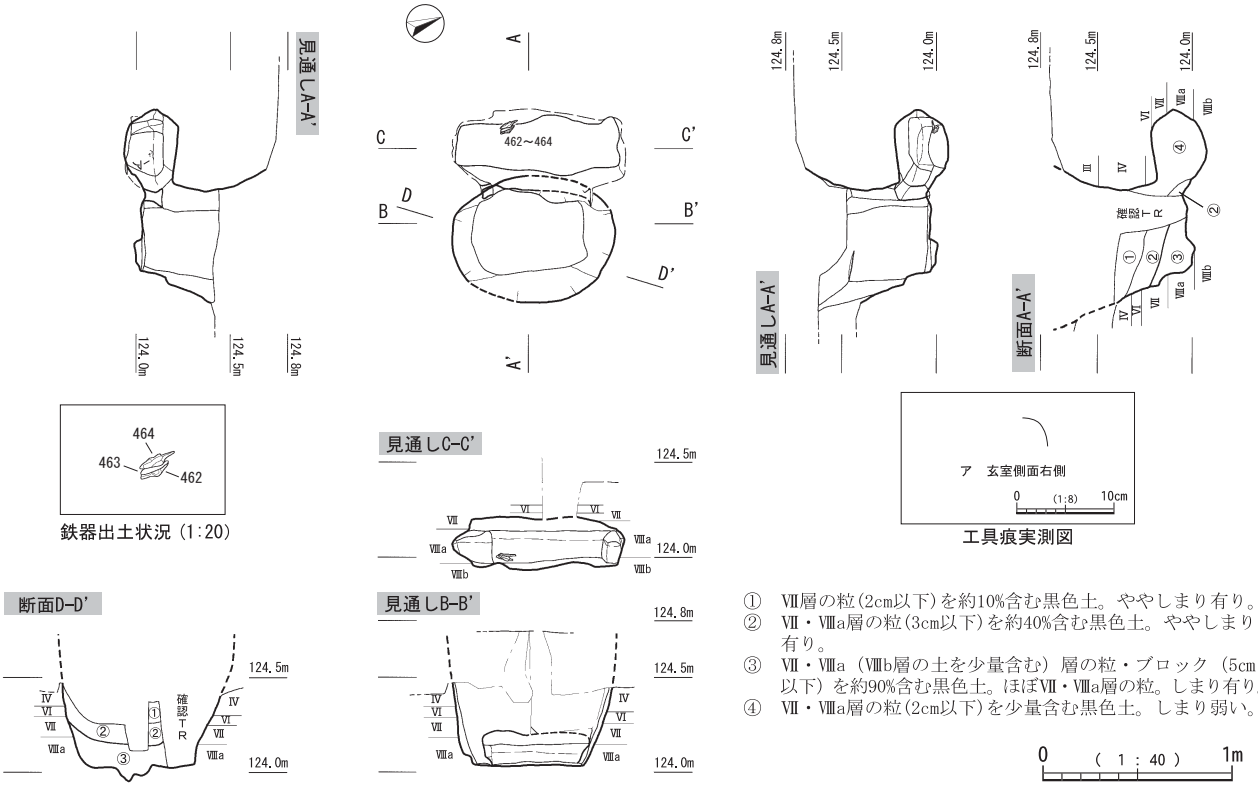
116号地下式横穴墓	検出区	H-41	玄室開口方向	西北西
	分　類	C		

検出状態	攪乱部分を取り除き，竪坑のプランを検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	67	86	41	57	16	7	40	90	47	28
推　定	90	90	80	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	Ⅷa	竪坑平面形	楕円形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	Ⅷb	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 後方の壁付近の床面が一部低い。埋土③はほぼⅦ・Ⅷ層の土であり，玄室構築層と同じであるため，玄室構築時の排出土と考えられる。 【玄室】 小型であり，形態は異なるものの 114 号墓と規模が類似する。玄室は長方形で，玄室床面が竪坑床面より深いという特徴がある。鉄鏃が出土した。
工具痕	U字状と考えられる工具痕が一部確認された。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃３点（鳥舌鏃３点）が出土した。
備　考	－



第269図　116号地下式横穴墓

125号地下式横穴墓

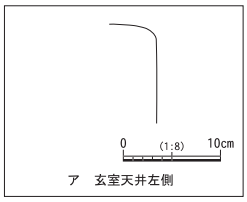
検出区	H-42	玄室開口方向	南東
分　類	B 1		

検出状態	トレンチャーによる攪乱部分を取り除き，Ⅶ・Ⅷ層の混在する部分を手掛かりに検出した。

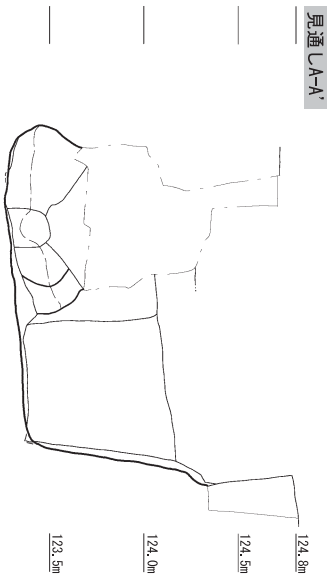
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	110	134	100	110	－	18	78	186	96	－
推　定	－	155	110	－	50	－	－	－	－	50

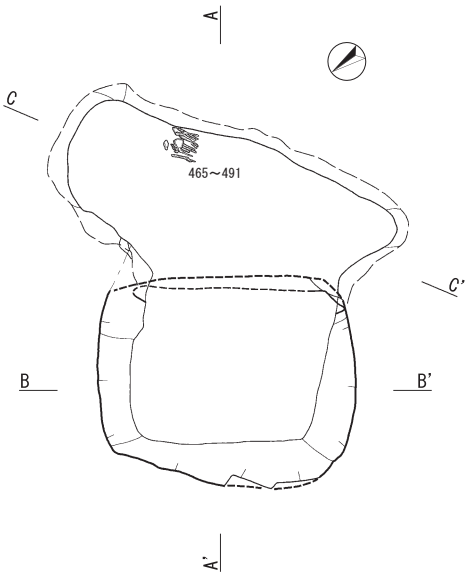
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

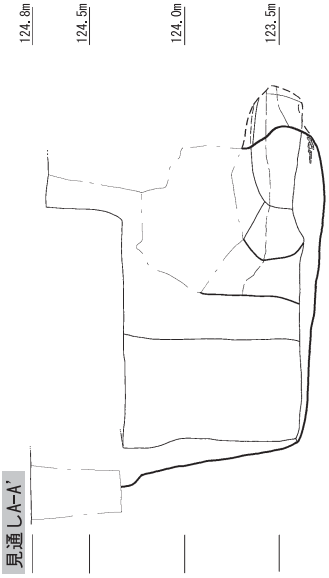
概　要	【竪坑】 床面は玄室に向かって深くなる構造である。床面近くの埋土④はⅧ～XI層が主体であり，この層が玄室が構築される層とほぼ同一であることから，玄室構築時の排出土と考えられる。 【玄室】 横軸が主軸に対し斜めとなる形状である。玄室奥では，鉄鏃が出土した。
工具痕	玄室天井に方形状のものをわずかに確認した。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄鏃 27 点（短頸鏃 15 点，柳葉鏃４点，腸抉柳葉鏃４点，圭頭鏃２点，鉄鏃片２点）が出土した。
備　考	－

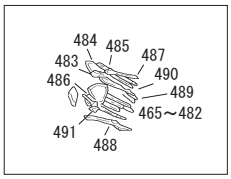


工具痕実測図

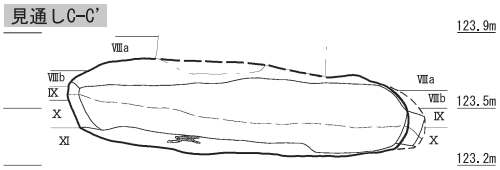


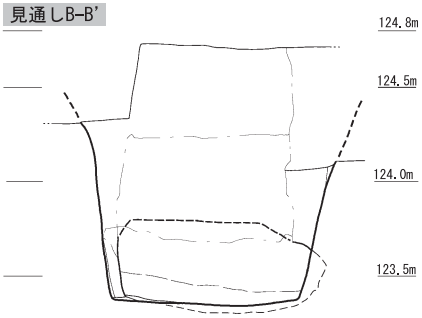


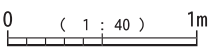




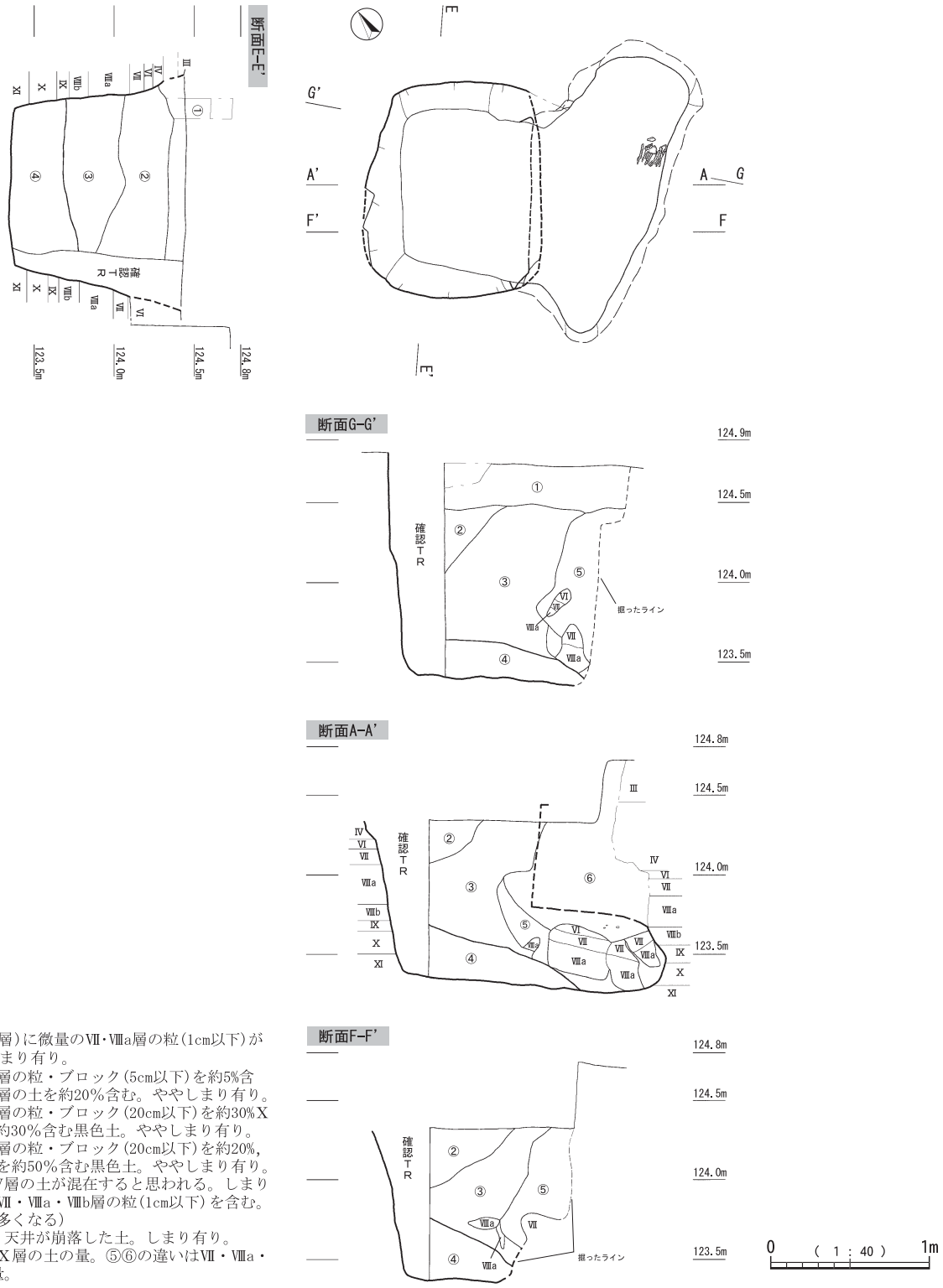
鉄器出土状況(1:20)







第270図　125号地下式横穴墓(1)



① 黒色土(Ⅲ・Ⅳ層)に微量のⅦ・Ⅷa層の粒(1cm以下)が入る。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約5%含む黒色土。Ⅹ層の土を約20%含む。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(20cm以下)を約30%Ⅹ・Ⅺ層の土を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(20cm以下)を約20%, Ⅹ・Ⅺ層の土を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
⑤ 黒色土。Ⅲ・Ⅳ層の土が混在すると思われる。しまり有り。少量のⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を含む。(下の方ほど多くなる)
⑥ Ⅲ・Ⅳ層の土。天井が崩落した土。しまり有り。
※ ③④の違いはⅩ層の土の量。⑤⑥の違いはⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒の量。

第271図　125号地下式横穴墓(2)

126号地下式横穴墓

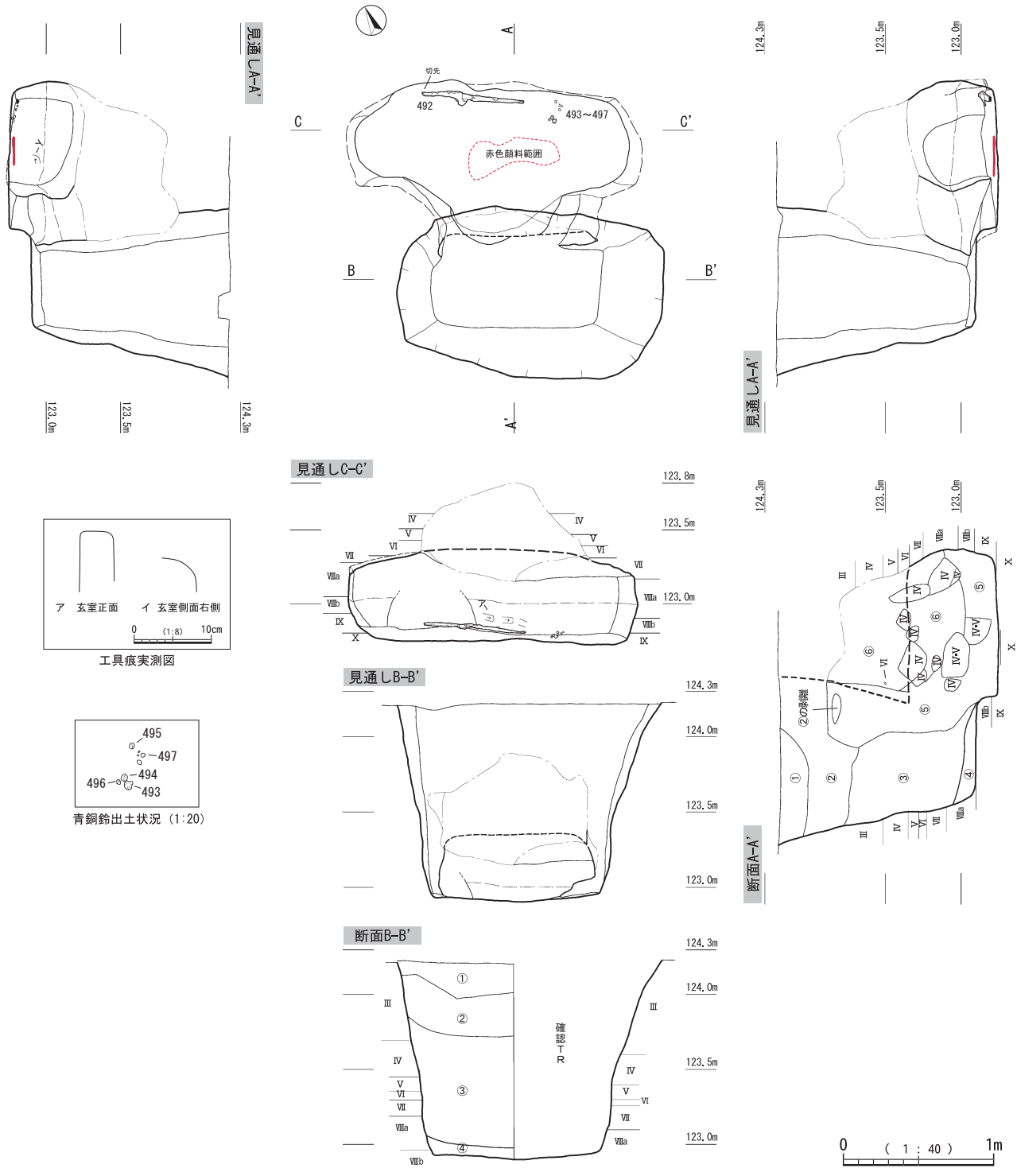
検出区	H-42	玄室開口方向	北北東
分　類	A		

検出状態	土器の集中して出土した付近でⅦ・Ⅷ層の混在する部分を手掛かりに検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	112	177	132	104	－	29	82	194	111	－
推　定	－	－	－	－	60	－	－	－	－	60

竪坑最下層	Ⅷb	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅵ・Ⅶ	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	Ⅸ・Ⅹ	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面はほぼ平坦である。羨道前の埋土は崩落し，上部から大量の黒色土が流入している。 【玄室】 床面はほぼ平坦であり，竪坑より一段深い。中央に赤色顔料が多量にみられるが，頭位は不明である。埋土の状況から，天井はⅥ・Ⅶ層付近と推定した。中央奥で鉄刀，右側で青銅鈴が出土した。鈴を副葬する墓は，90 号墓とこの墓のみである。
工具痕	玄室正面で幅 4.5 ㎝の方形状のもの，右側で幅不明のＶ字状のものがみられた。
赤色顔料	玄室（鈴の下含む）からパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄刀１点，青銅鈴５点が出土した。
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
⑤ 上部から入り込んだ黒色土に竪坑が崩落した土を少量含む。しまりなく軟らかい。
⑥ 天井が崩落した土。Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層の土と考えられる。

第 272 図　126 号地下式横穴墓

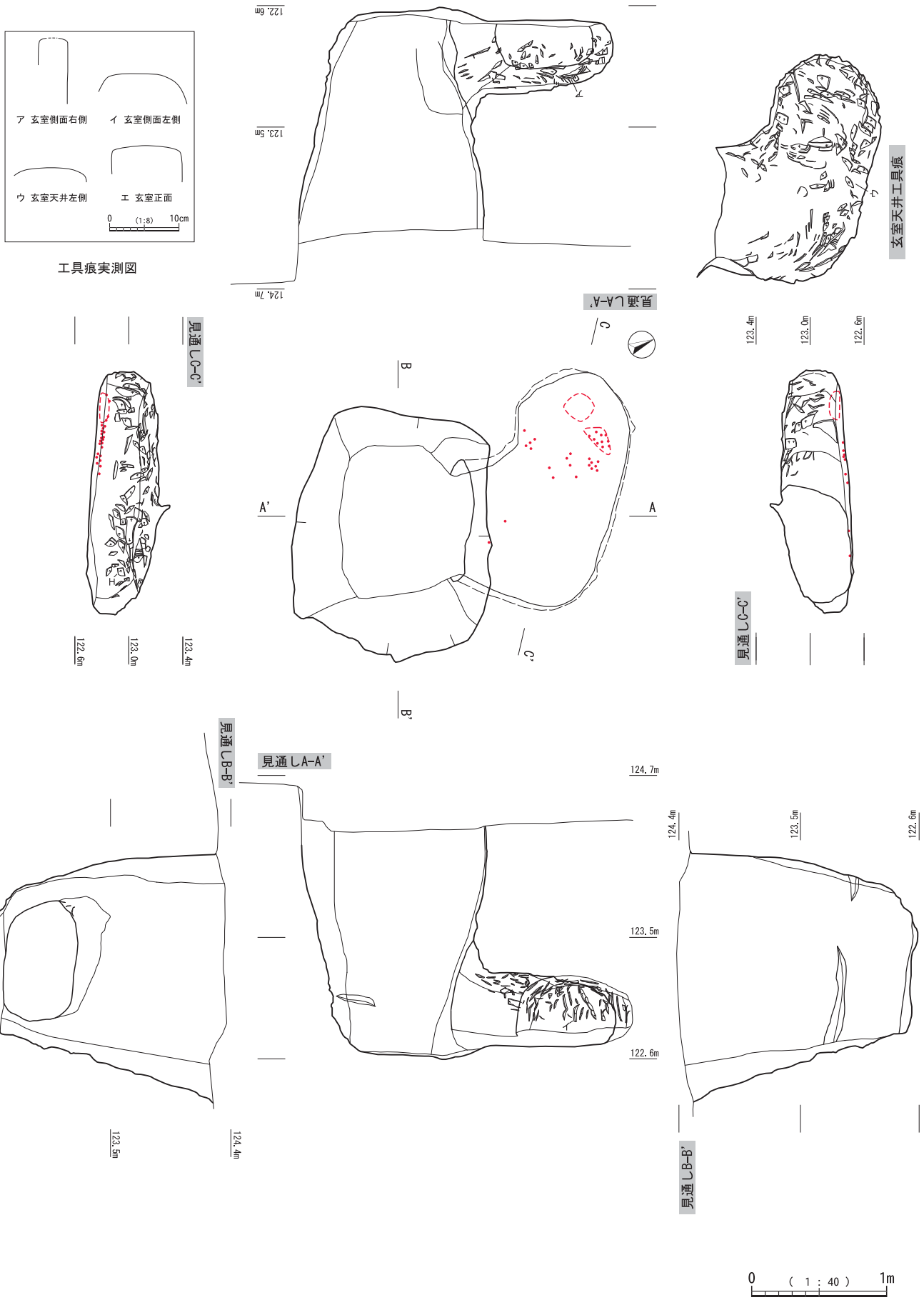
127号地下式横穴墓	検出区	I-41	玄室開口方向	北北東
	分　類	B２		

検出状態	確認トレンチを設定し，検出した。

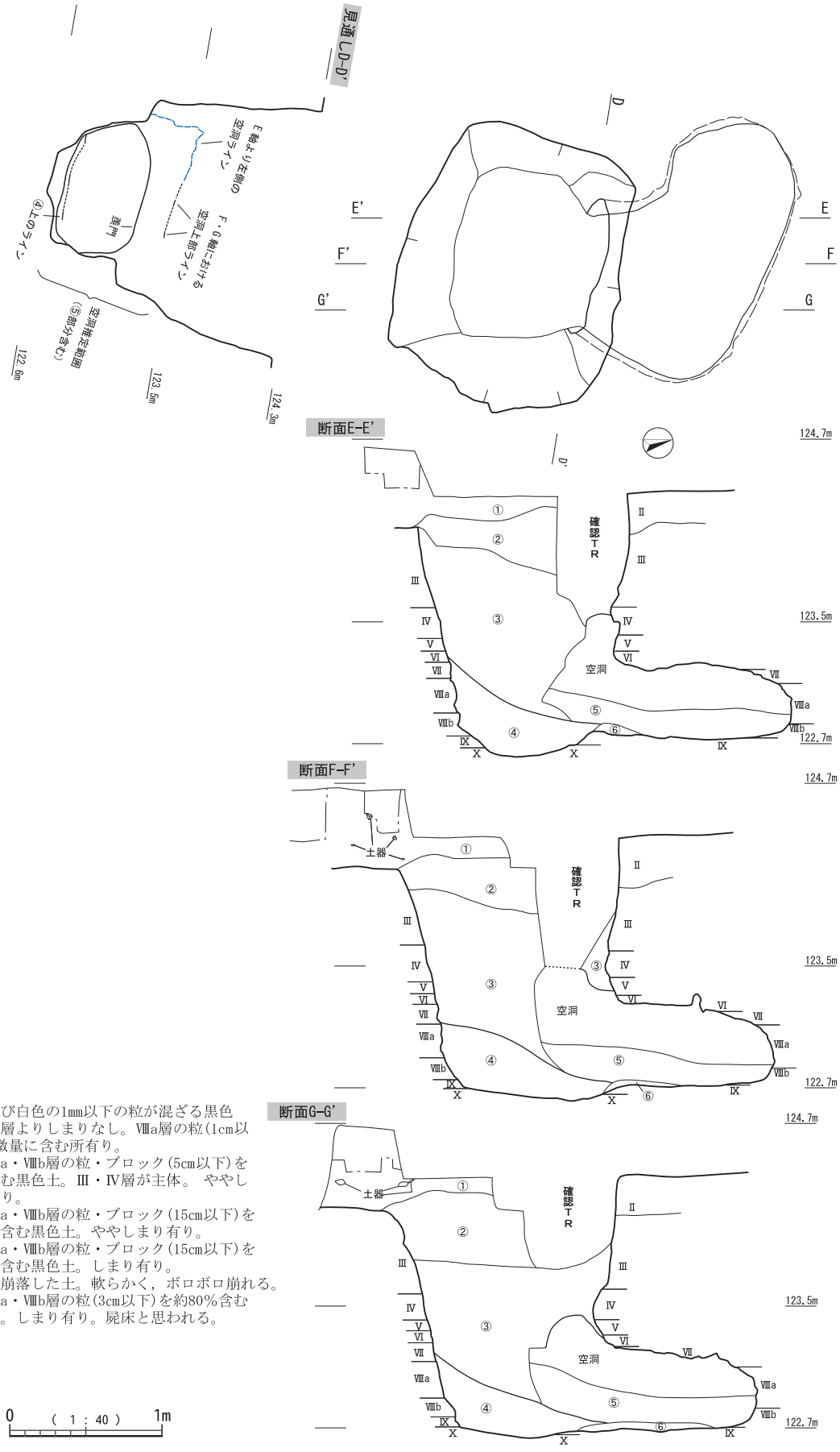
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	146	184	156	88	60	50	88	182	138	50
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅵ	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅷb・Ⅸ	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は玄室より低く構築されている。竪坑床面に近い埋土④は，Ⅶ・Ⅷ層の土であり，玄室を構築する層の土と同じであるため，玄室構築時の排出土と考えられる。また，埋土④は硬くしまった状態であり，この上面が閉塞時の床面と考えられる。羨門付近の空洞やその周辺の埋土の残存状況から，木材閉塞の可能性も想定できる。 【玄室】 旧地形において標高が低い位置であり，残存状況も良好であった。玄室は左側へ張り出す形状である。玄室左側の床面では赤色顔料がみられ，頭部も左側にあった可能性が高い。玄室内から刀子が出土したが，原位置を保っていないと判断し，一括で取り上げた。工具痕の残存状況が良く，３Ｄ実測をおこなった。
工具痕	玄室内に明瞭な工具痕が多量に残る。 アは幅 4.3 ㎝の方形状のものであり，竪坑右側面や正面にみられる。イ・ウはおそらく同一工具であり，幅約 12 ～ 13 ㎝である。方形状のものと思われ，最も多く残る。エは幅 10.2 ㎝の方形状のものである。切合い関係から，アとエの工具の後にイが使われたと考えられる。
赤色顔料	玄室からパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	竪坑埋土から検出した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	竪坑の後背面側で壺（549）の口縁部が出土した。
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	刀子１点が出土した。
備　考	３Ｄ実測を実施



第 273 図　127 号地下式横穴墓(1)



① 茶色及び白色の1mm以下の粒が混ざる黒色土。Ⅲ層よりしまりなし。Ⅷa層の粒(1cm以下)を微量に含む所有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を少量含む黒色土。Ⅲ・Ⅳ層が主体。 ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約60%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約90%含む黒色土。しまり有り。
⑤ ②③の崩落した土。軟らかく，ボロボロ崩れる。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約80%含む黒色土。しまり有り。屍床と思われる。

0 (1 : 40) 1m

第 274 図　127 号地下式横穴墓(2)

128号地下式横穴墓

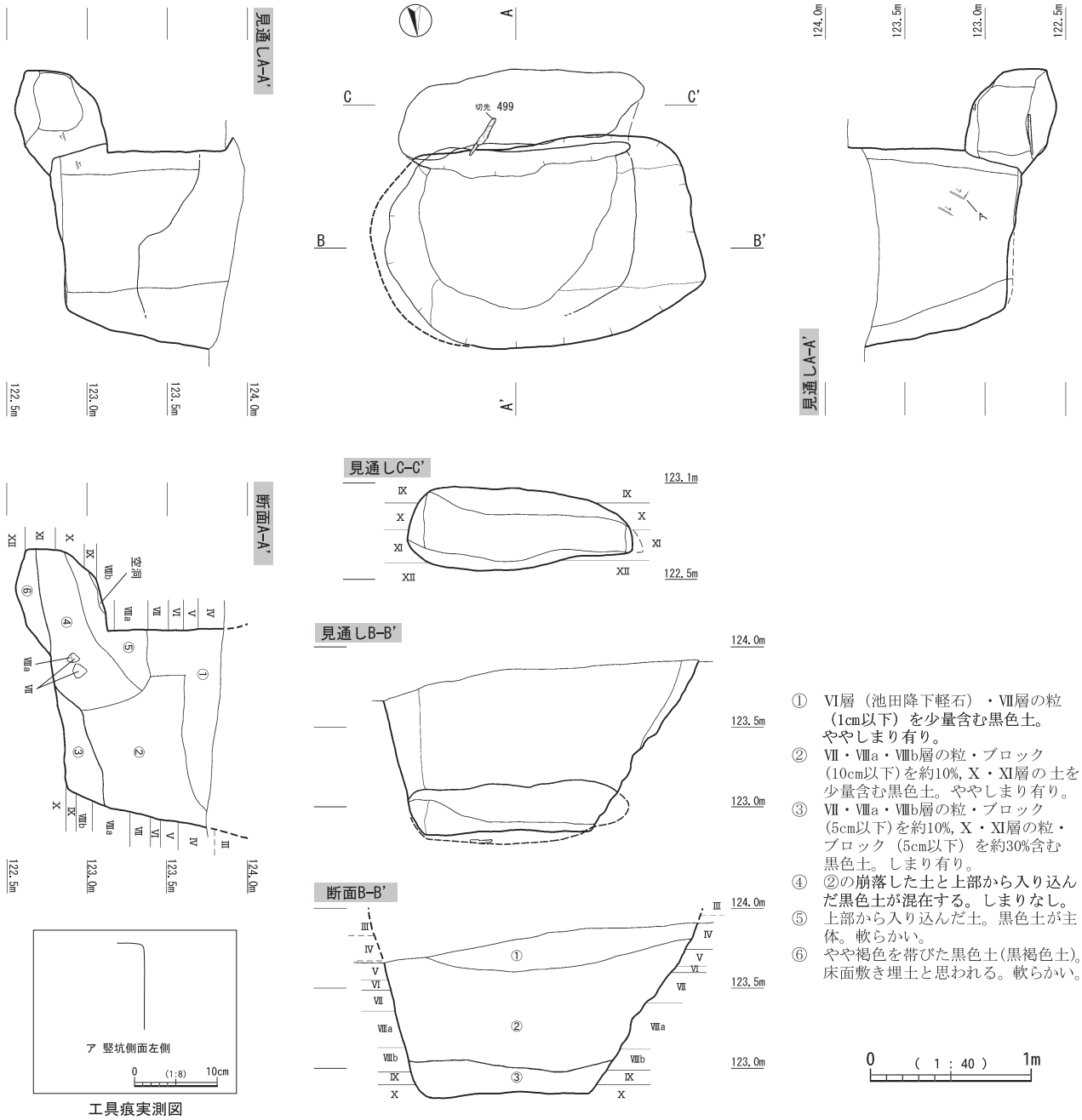
検出区	Ⅰ・J-41	玄室開口方向	南
分　類	C		

検出状態	須恵器等の遺物を取り上げた後に検出した。攪乱をほとんど受けていなかった。

	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	126	204	100	136	50	－	49	142	54	52
推定	130	－	115	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	楕円形
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅻ	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概要	【竪坑】 玄室に対して非常に大きい形状である。墓の構築層にはⅦ～Ⅻ層が含まれるが，埋土内にこれらの土が少なく地表面に残されたと考えられる。 【玄室】 床面は竪坑より深い。遺物の出土位置から屍床を設けていたと考えられる。羨道はほとんどない。
工具痕	竪坑や玄室の側面に一部残る。 幅不明の方形状のものが，竪坑左側面にみられる。玄室天井も残存しているが，明瞭なものはみられなかった。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	壺片（594・598）や，須恵器片（601）が出土した。
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	蛇行剣１点が出土した。
備考	－



工具痕実測図

① Ⅵ層（池田降下軽石）・Ⅶ層の粒（1cm以下）を少量含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%, Ⅹ・Ⅺ層の土を少量含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%, Ⅹ・Ⅺ層の粒・ブロック（5cm以下）を約30%含む黒色土。しまり有り。
④ ②の崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。しまりなし。
⑤ 上部から入り込んだ土。黒色土が主体。軟らかい。
⑥ やや褐色を帯びた黒色土(黒褐色土)。床面敷き埋土と思われる。軟らかい。

第 275 図　128 号地下式横穴墓

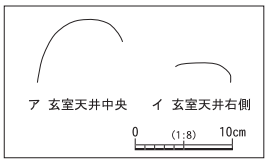
129号地下式横穴墓	検出区	I-42	玄室開口方向	南
	分　類	C		

検出状態	須恵器大甕の口縁部等の遺物を取り上げた後に検出した。攪乱をほとんど受けていなかった。

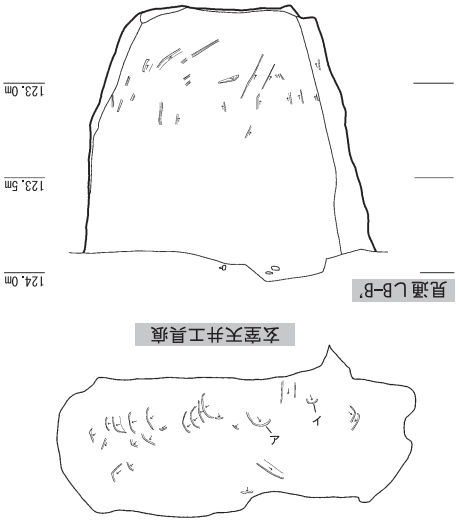
	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	83	155	140	120	45	－	71	184	72	34
推定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

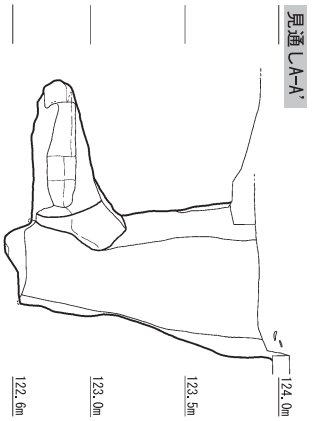
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

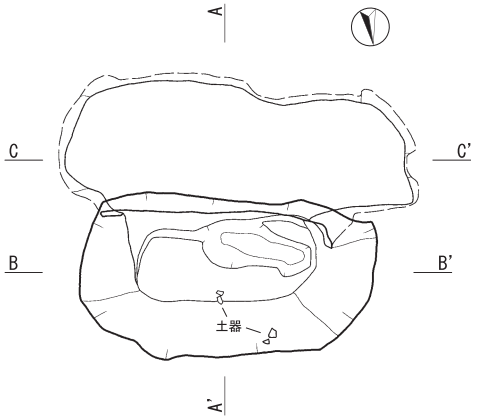
概要	【竪坑】 竪坑と玄室の床面はほぼ同じ高さであるが，一部深い部分がある。 【玄室】 Ⅶ・Ⅷ層の土が多く混在した黒色土である埋土③が竪坑から流入したものと考えられる。竪坑横幅より玄室横幅が広い。
工具痕	玄室天井に多くの工具痕が残っている。 アは幅不明のU字形のもので，幅は推定で10㎝以上，イは幅不明の方形状のものである。アが玄室天井に多く残っていることから，イの後にアを使用したと考えられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人骨	未検出
出土遺物 竪坑上面	坩（600）の破片や，須恵器片（601）が出土した。
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	なし
備考	－

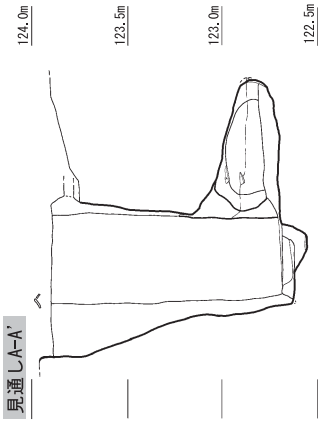


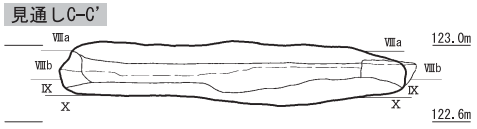
工具痕実測図

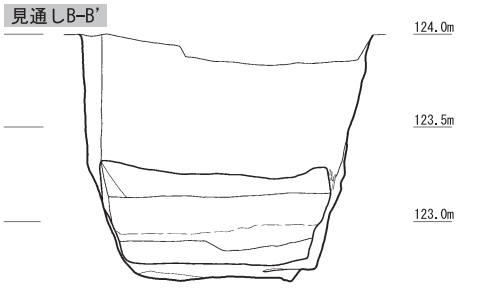


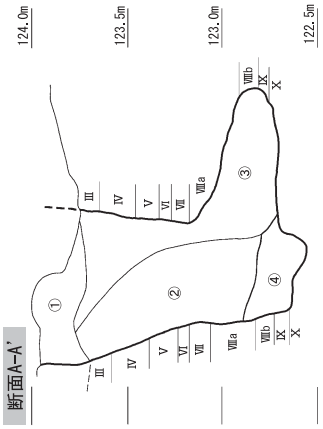


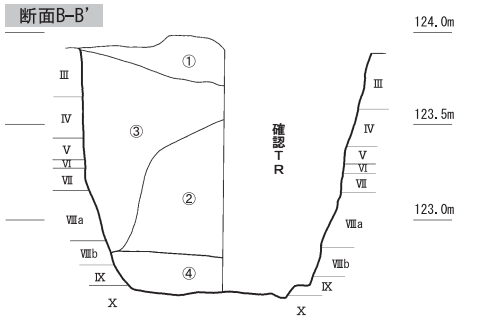


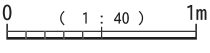












① Ⅶ・Ⅷa層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%含む黒色土。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の土は小さな粒多い。ややしまり有り。
③ ②の崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。軟らかい(他の遺構よりはやや硬い)。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(15cm以下)を約60%含む黒色土。しまり有り。

第276図　129号地下式横穴墓

130号地下式横穴墓

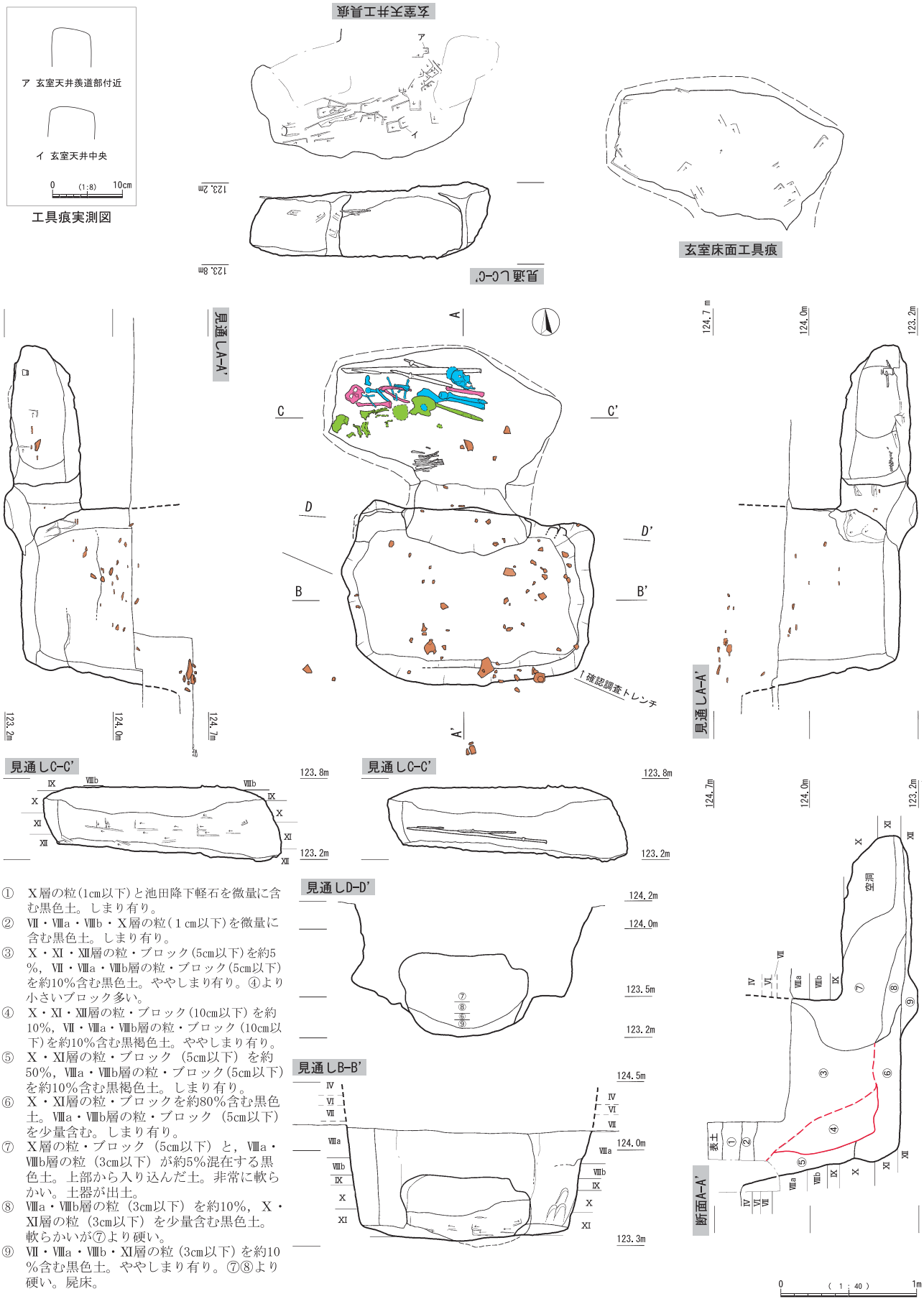
検出区	J-42	玄室開口方向	北
分　類	A		

検出状態	確認トレンチで竪坑部分を検出した。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	130	181	130	94	58	26	94	174	120	48
推　定	140	190	－	－	－	－	－	－	－	－

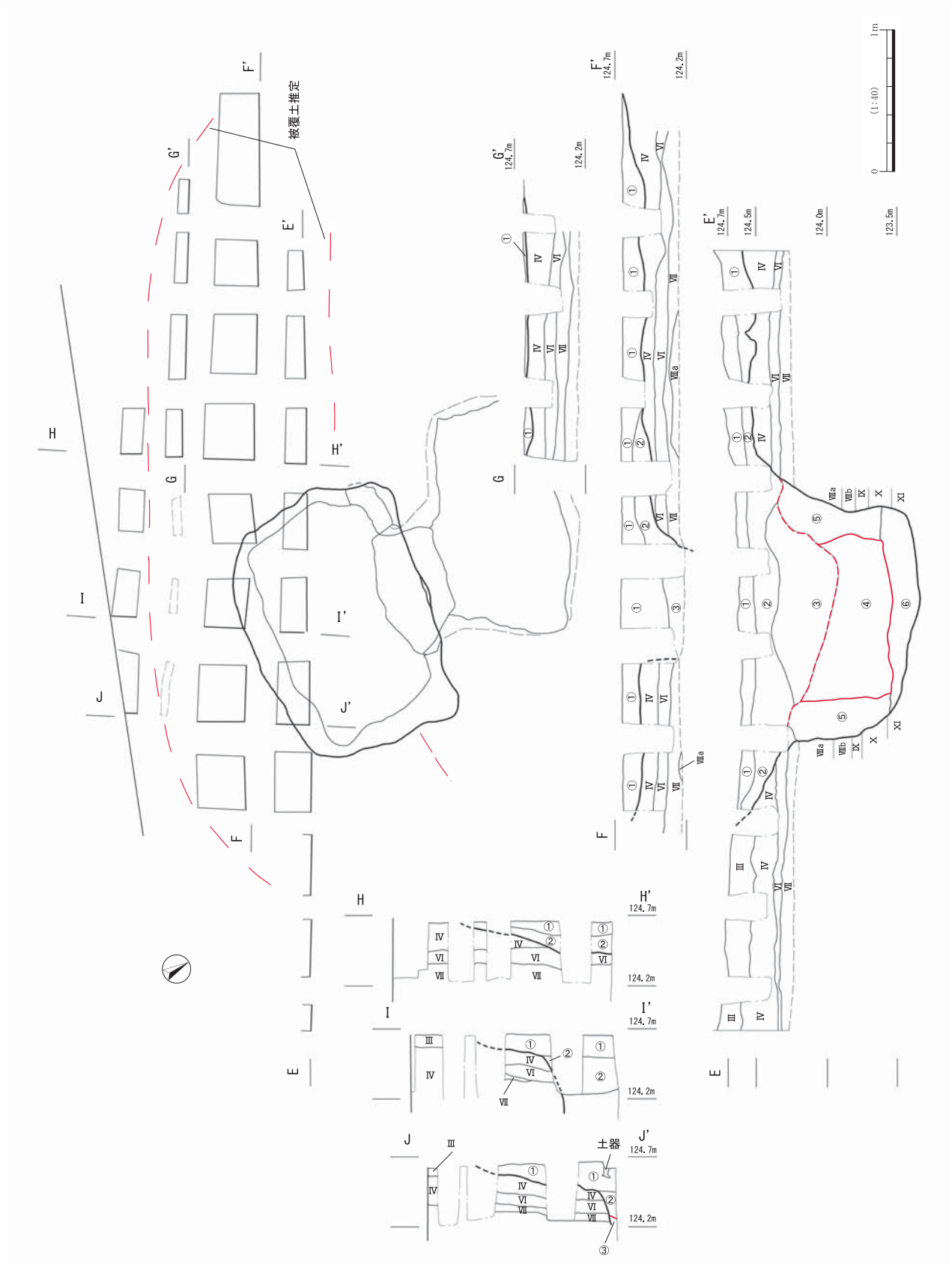
竪坑最下層	Ⅻ	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	Ⅸ・Ⅹ	玄室平面形	長方形？		
玄室床面層	Ⅶ	玄室断面形	長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	あり

概　要	【竪坑】 竪坑及び玄室の床面はほぼ平坦であるが，羨道部分は一段深くなっている。埋土③からは土器や須恵器が多量に出土し，埋土④には遺物は含まれていなかった。遺物の大半は高坏であった。また，埋土④と⑤は混在する層やブロックの量などが異なっていることから，区別できる。以上のことから，③と④，④と⑤間の少なくとも２回は掘り返しがあったと考えられる。 【玄室】 床面は竪坑よりやや深い。３体の人骨が検出されており，刀剣や鉄鏃も多数出土している。本遺跡の中でも遺物量が多く，注目される。人骨の３体は玄室の奥にまとめられ，同時に刀剣類もまとめられている。
工具痕	玄室の床面や側面，天井に多くの方形の工具痕が残っていた。 ア・イともに方形状のもので，同一のものと思われたが，両方とも玄室天井や側面に多数みられることや，幅の違いがあることから異なる工具と考える。アは幅 5.8 ㎝，イは幅 6.8 ㎝である。
赤色顔料	未検出
炭化物	玄室埋土から検出した。
人　骨	３体の人骨が埋葬されていた。第一人骨（青）は若年女性，第二人骨（赤）は壮年男性，第三人骨（緑）は壮年男性である。第一･第二人骨は同時埋葬の可能性が高く，第三人骨の埋葬時に奥に片付けられている。第三人骨もその後掘り返され，奥へ寄せられている。ただし，寄せた後に第四人骨を埋葬した形跡はない。掘り返し痕は２回分は確認できた。
出土遺物　竪坑上面	竪坑検出面及び埋土内で高坏４点，坩１点，須恵器１点の破片が出土した。
出土遺物　竪坑埋土内	（竪坑上面を参照）
出土遺物　玄室内	鉄刀１点，鉄剣１点，短剣２点，刃部片２点，鉄鏃 19 点（長頸鏃 16 点，圭頭鏃１点，鉄鏃片２点）が出土した。
備　考	－

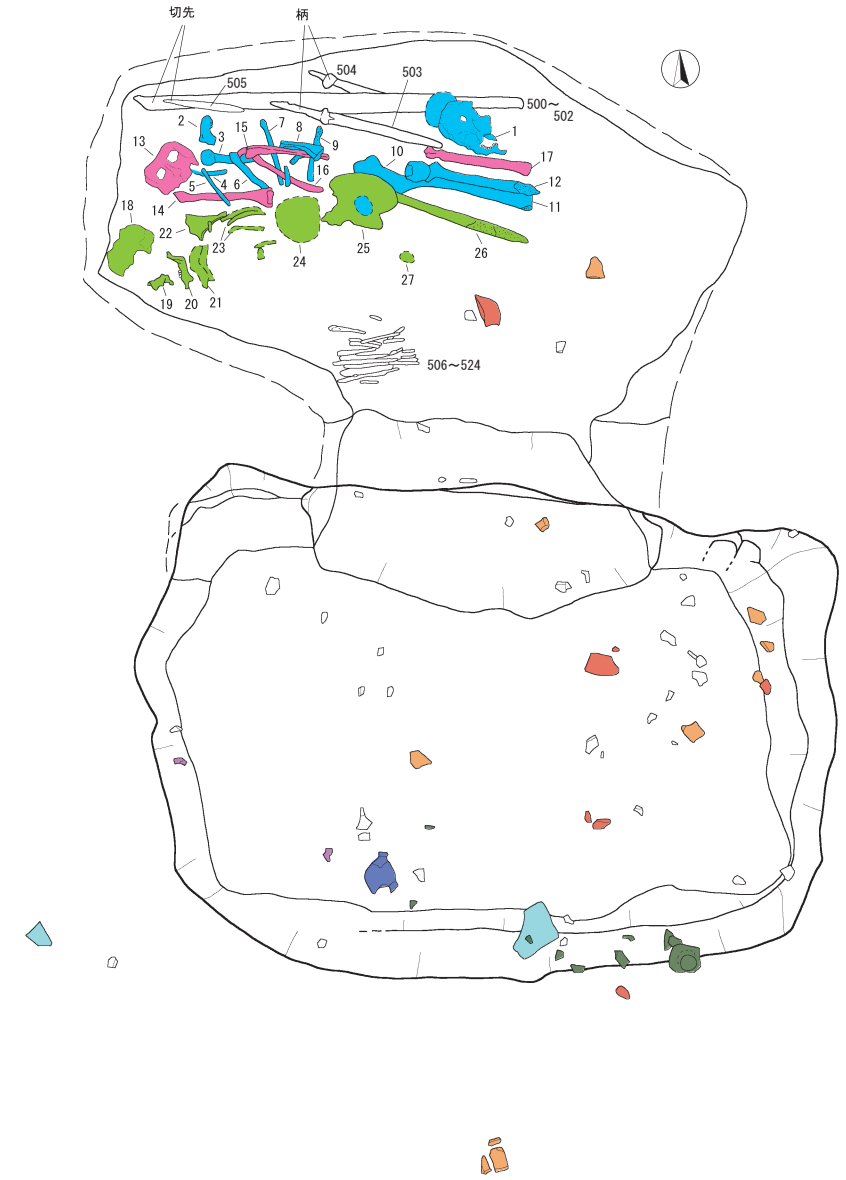


① X層の粒(1cm以下)と池田降下軽石を微量に含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb・X層の粒(１cm以下)を微量に含む黒色土。しまり有り。
③ X・XI・XII層の粒・ブロック(5cm以下)を約5%，Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。④より小さいブロック多い。
④ X・XI・XII層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%，Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%含む黒褐色土。ややしまり有り。
⑤ X・XI層の粒・ブロック（5cm以下）を約50%，Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%含む黒褐色土。しまり有り。
⑥ X・XI層の粒・ブロックを約80%含む黒色土。Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック（5cm以下）を少量含む。しまり有り。
⑦ X層の粒・ブロック（5cm以下）と，Ⅷa・Ⅷb層の粒（3cm以下）が約5%混在する黒色土。上部から入り込んだ土。非常に軟らかい。土器が出土。
⑧ Ⅷa・Ⅷb層の粒（3cm以下）を約10%，X・XI層の粒（3cm以下）を少量含む黒色土。軟らかいが⑦より硬い。
⑨ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb・XI層の粒（3cm以下）を約10%含む黒色土。ややしまり有り。⑦⑧より硬い。屍床。

第 277 図　130 号地下式横穴墓(1)



第 278 図　130 号地下式横穴墓(2)

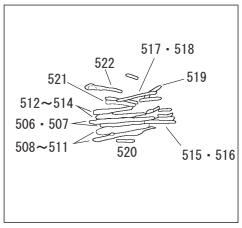


第一人骨
1　頭蓋骨
2　下顎骨
3　左上腕骨
4　肋骨
5　右肋骨
6　右鎖骨
7　右橈骨・尺骨
8　右上腕骨
9　長骨（部位不明）
10　左骨盤（寛骨）
11　左大腿骨
12　右大腿骨

第二人骨
13　頭蓋骨
14　左上腕骨
15　左橈骨
16　左尺骨
17　右大腿骨

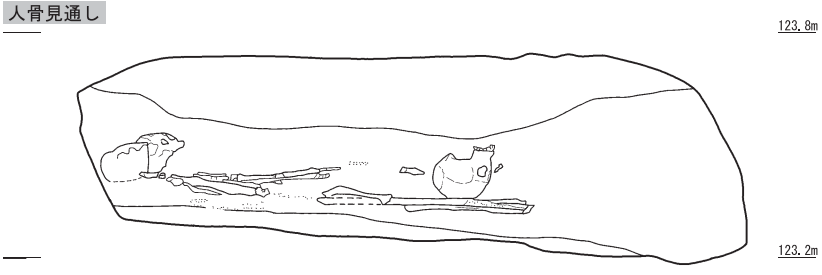
第三人骨
18　頭蓋骨
19　上顎骨
20　下顎骨
21　鎖骨（骨粉状）
22　右肩甲骨
23　左肋骨
24　左肩甲骨（骨粉状）
25　骨盤（寛骨）
26　左大腿骨
27　脊椎骨

土器
532（坩）
531（高坏）
528（高坏）
529（高坏）
530（高坏）
601（須恵器）



鉄器出土状況（1:20）

人骨見通し



0　（1：20）　50cm

第 279 図　130 号地下式横穴墓(3)

131号地下式横穴墓

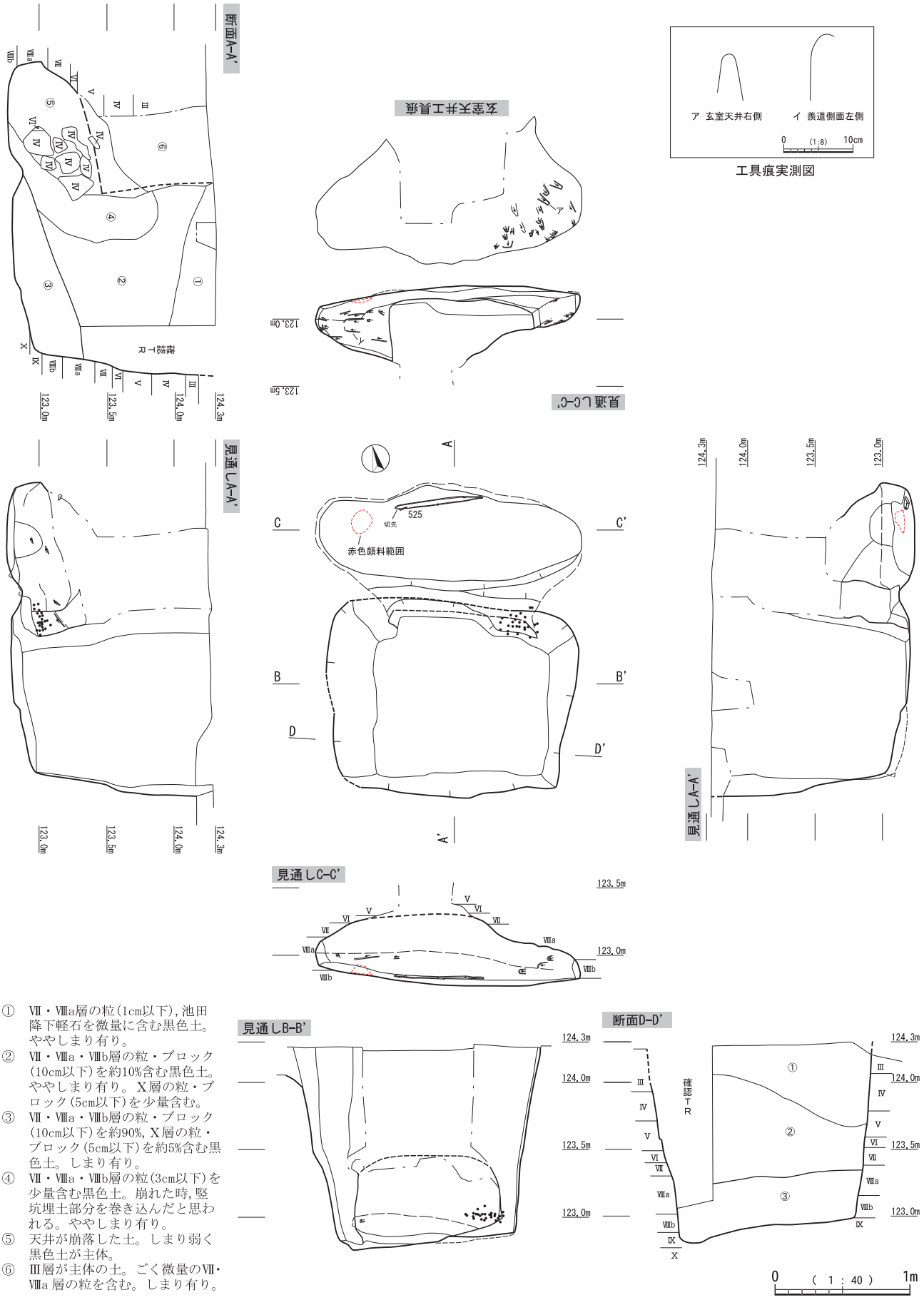
検出区	I-42	玄室開口方向	北北東
分　類	A		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層の混在する部分を掘り下げて検出した。

	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	145	184	140	106	－	26	74	196	100	－
推定	－	－	－	－	65	－	－	－	－	55

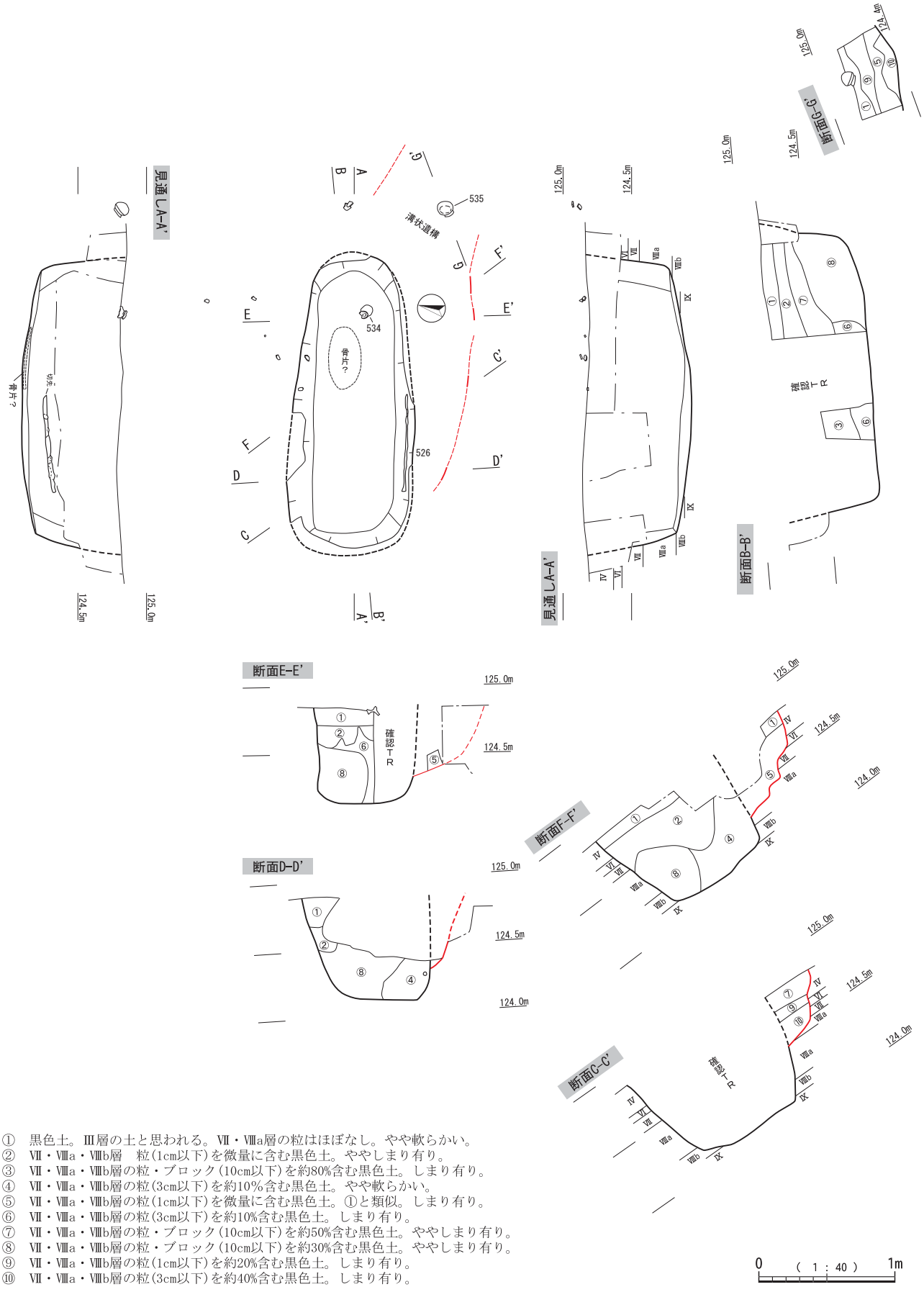
竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸方形	羨門正面形	長方形
玄室天井層	？	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅷb	玄室断面形	隅丸長方形（不整形）		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概要	【竪坑】 平面プランはほぼ正方形である。竪坑の埋土③はほぼⅧ層の土で，押しつぶされたような状態であった。炭化物が羨道右側に点在していた。玄室天井や側面には，奥に向かい削った工具痕が多数残っている。 【玄室】 竪坑と比べ，小ぶりな玄室である。玄室入口付近の床面が部分的に盛り上がる。正面壁側に鉄剣が副葬され，左側に赤色顔料が検出された。赤色顔料部分には頭蓋骨があったと推定される。
工具痕	幅は４cm程のＶ字状のものが玄室天井に残っている。羨道側面にもＶ字状のものがみられたが，玄室天井のものとは別の工具と考えられる。
赤色顔料	玄室で水銀朱を検出した。
炭化物	羨道付近から検出した。年代測定では 251calAD-385calAD，樹種はクスノキと同定された。
人骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点が出土した。
備考	－



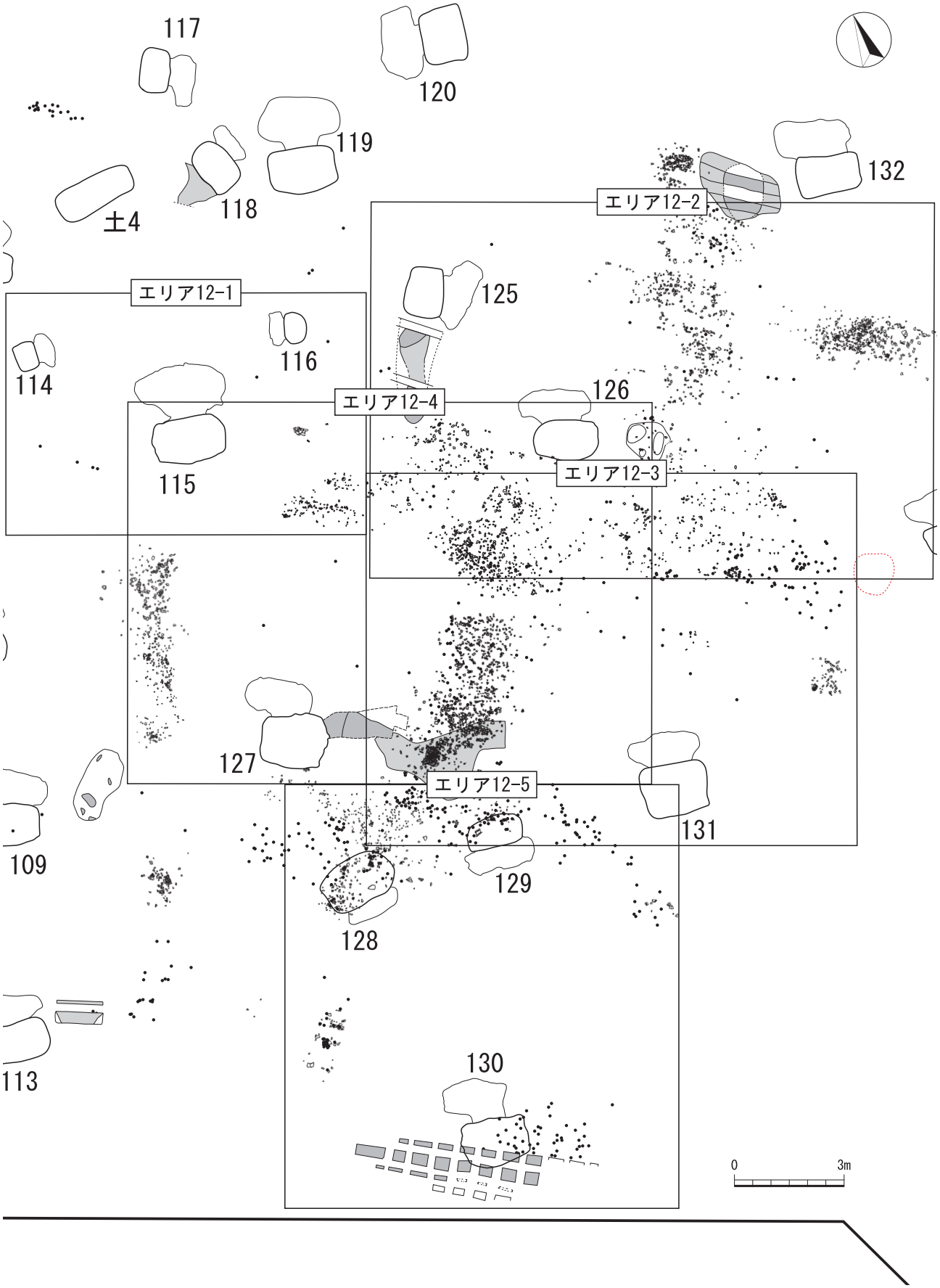
① Ⅶ・Ⅷa層の粒(1cm以下),池田降下軽石を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。X層の粒・ブロック(5cm以下)を少量含む。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約90%,X層の粒・ブロック(5cm以下)を約5%含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。崩れた時,竪坑埋土部分を巻き込んだと思われる。ややしまり有り。
⑤ 天井が崩落した土。しまり弱く黒色土が主体。
⑥ Ⅲ層が主体の土。ごく微量のⅦ・Ⅷa層の粒を含む。しまり有り。

第 280 図　131 号地下式横穴墓



① 黒色土。Ⅲ層の土と思われる。Ⅶ・Ⅷa層の粒はほぼなし。やや軟らかい。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層 粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約80%含む黒色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。やや軟らかい。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を微量に含む黒色土。①と類似。しまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。しまり有り。
⑦ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
⑧ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
⑨ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約20%含む黒色土。しまり有り。
⑩ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約40%含む黒色土。しまり有り。

第 281 図　４号土坑墓



第 282 図　エリア 12　小エリア区分図

４号土坑墓（第281図）

Ｈ－41区で検出した。完形の土器が出土したことを受け，土器周辺のトレンチャーによる攪乱を取り除いた結果，検出することができた。形状は楕円形を呈する。床面はⅧｂ・Ⅸ層まで掘り込まれている。土坑の埋土断面を観察した結果，被覆土がみられることから溝状遺構を切って土坑墓が造られていることが判明した。埋土から炭化物を検出したが，工具痕，赤色顔料は未検出である。

遺物は，土坑墓上面から小型鉢の底部片（534）と床面から20cmほど上位で鉄刀（526）が出土した。このほか，土坑墓から約50cm離れた溝状遺構の上面からほぼ完形の坩（535）が出土した。

エリア12-1遺物出土状況（第283図）

115号の東側に大型の壺片がみられた。玄室上部からは，内部にベンガラと思われる赤色顔料が付着した，小型の壺片が出土した。

エリア12-2遺物出土状況・土層堆積状況（第284図～286図）

125号の西側に細長くⅦ・Ⅷ層の混在する土がみられた。125号墓に近い箇所がよりⅦ・Ⅷ層土の混在する割合が高く，堆積も厚い。上面に遺物は出土していない。

126号の竪坑東側でⅦ・Ⅷ層が混在する土がみられた。広がりは不明である。また，この土と126号墓との間には赤色顔料がみられ，パイプ状ベンガラと同定された。

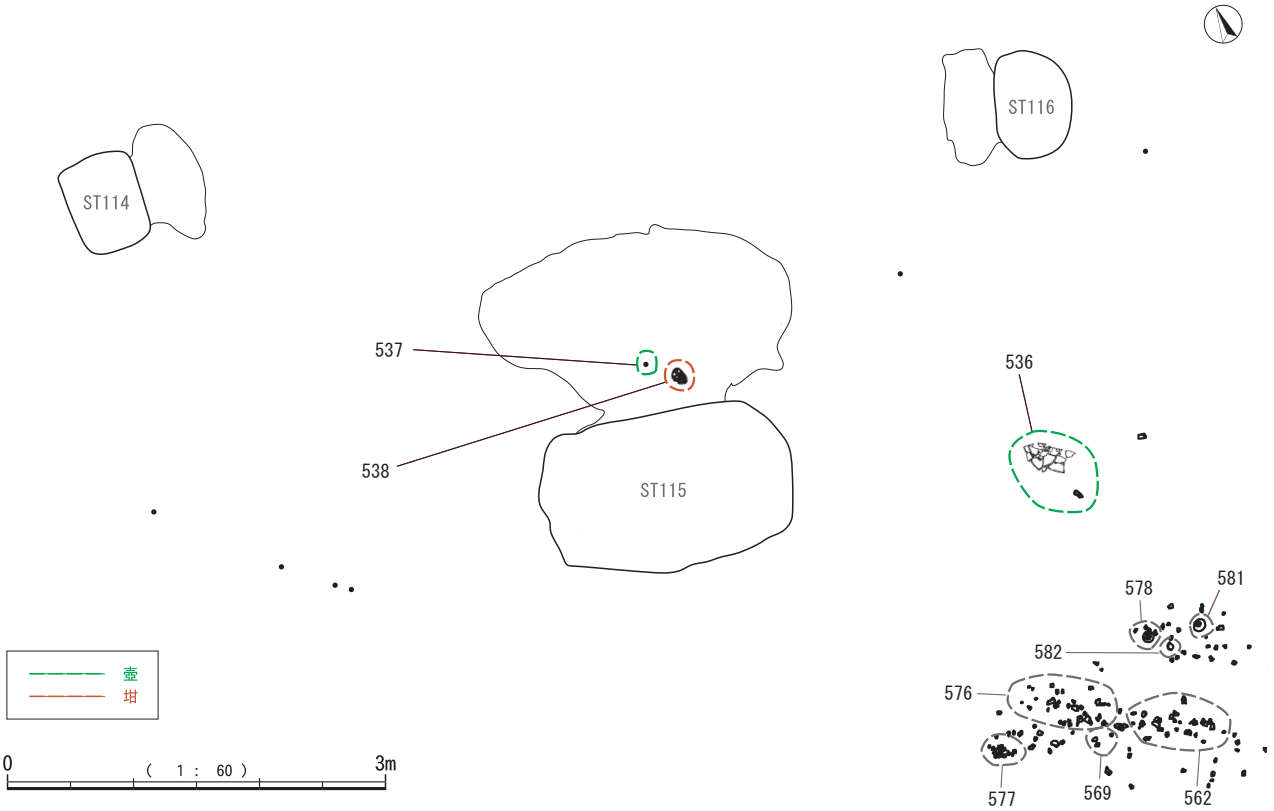
エリア12-3遺物出土状況（第289図・第290図）

131号地下式横穴墓の北側から，弧を描くように土器が出土した。西側は壺が多く，北側は高坏や坩が多い傾向がみられる。東側は他より比較的少ないものの，壺と坩の破片が出土した。土器の垂直分布をみると，軸Ａや軸Ｂでは出土位置の明確な高低差がみられない。しかし，軸Ｃの北側や軸Ｄの東側が中央の土器が出土していない空白部分に向け土器の出土位置が高くなっている。逆に軸Ｄの西側では，空白部分に向けて出土位置が低くなっている。特に軸Ｄの東側は地形に逆らうように出土していることから，遺構遺物の出土がない中央部分は何らかの高まりがあった可能性があるが，人為的なものか，自然な土の堆積によるものかは特定することはできなかった。

エリア12-4遺物出土状況・土層堆積状況（第291図～第293図）

127号周辺は表土が厚く撹乱を免れたため，遺構・遺物ともに残存状態が良好であった。

土器集中域は，玄室よりやや北側に中心をもち，円を描くように分布している。北・西側には高坏・坩・ミニチュア土器などの小型品，東・南側には大型壺や大型鉢など大型の土器が分布するなど器種構成に違いがみられる。なかでも572・573の内部に赤色顔料が付着していることや東側から鉄鏃が出土している点は注目される。軸Ａで土器の垂直分布をみると，両端部から中央に向けて遺物の出土位置が高くなり，遺構遺物の出土がない中

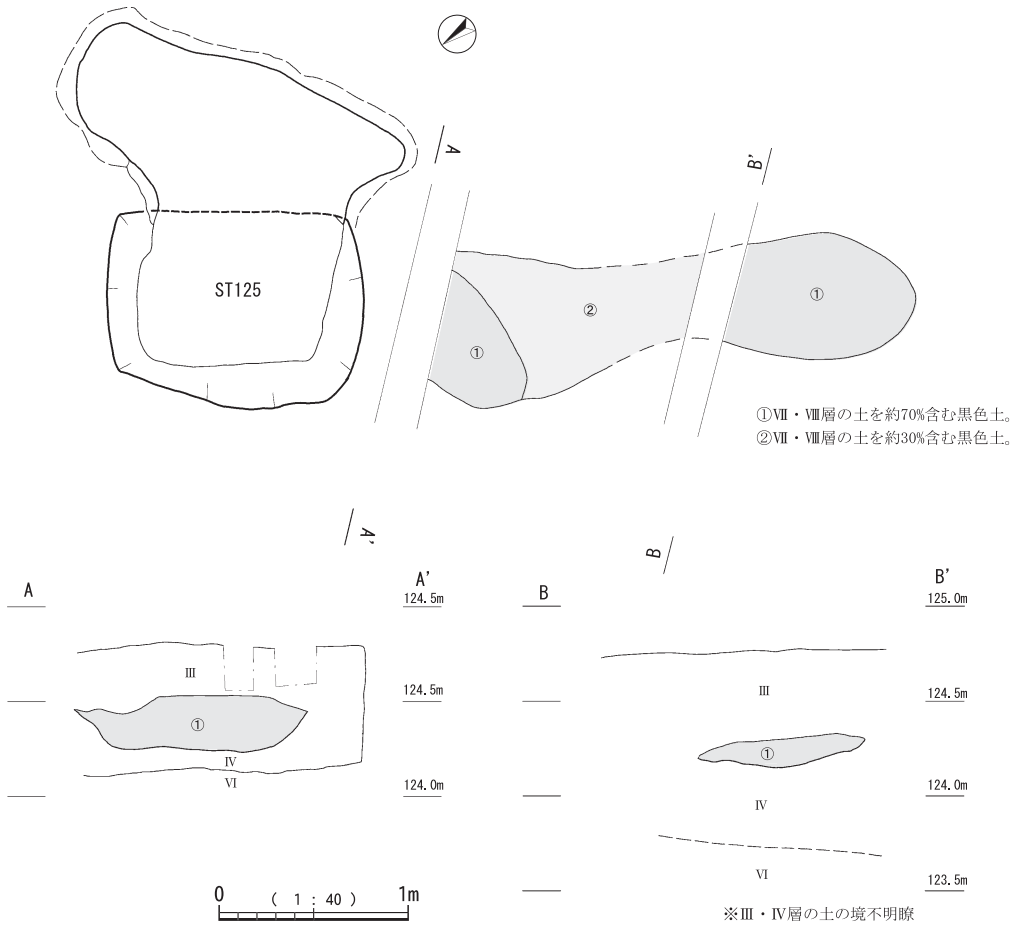


第 283 図　エリア 12-1 遺物出土状況

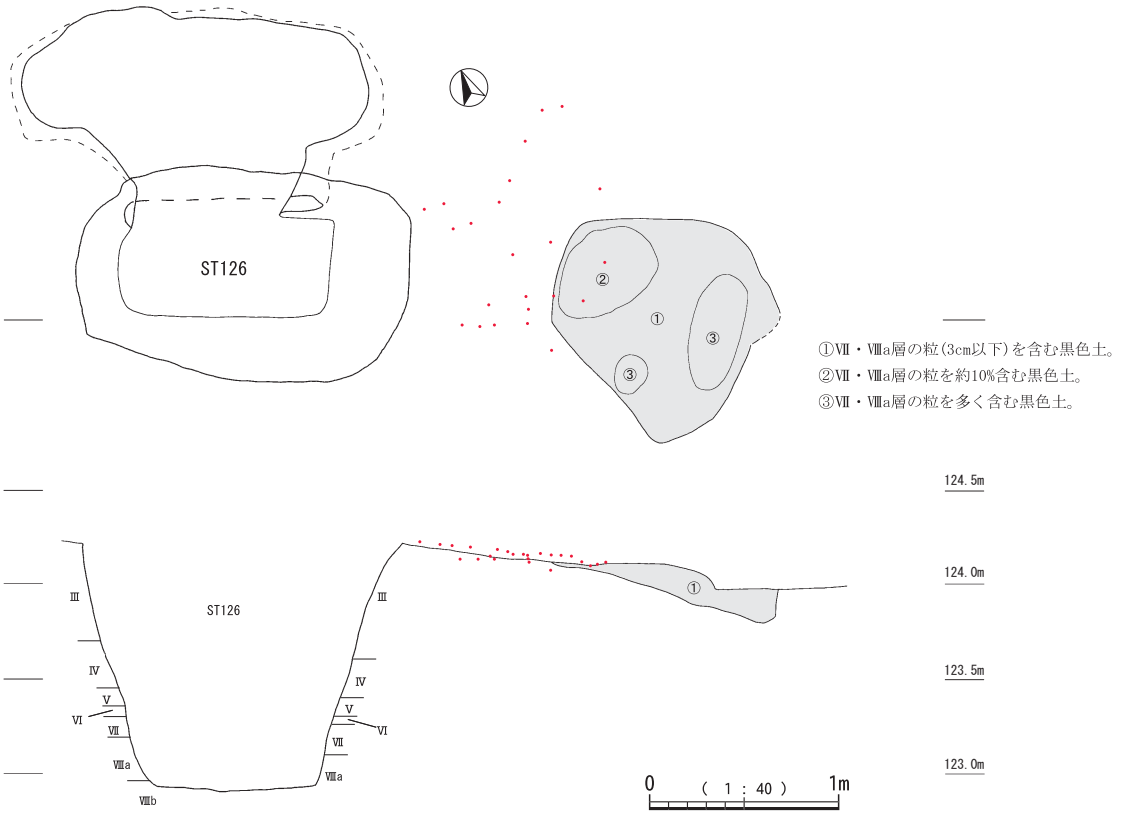
第 284 図　エリア 12-2 遺物出土状況(1)

第 285 図　エリア 12-2 遺物出土状況(2)

第 286 図　エリア 12-2 遺物出土状況(3)

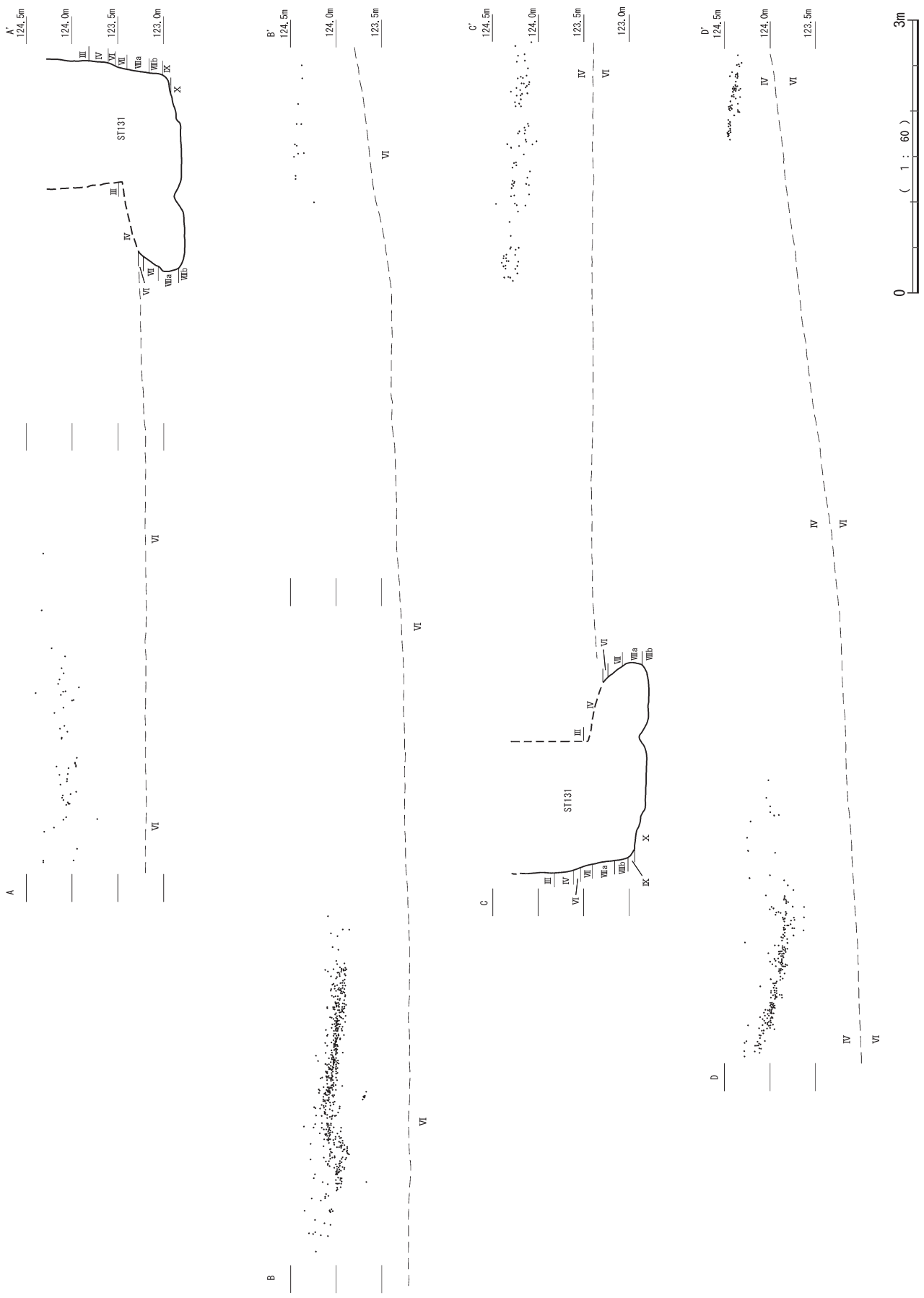


第 287 図　125 号地下式横穴墓周辺土層堆積状況

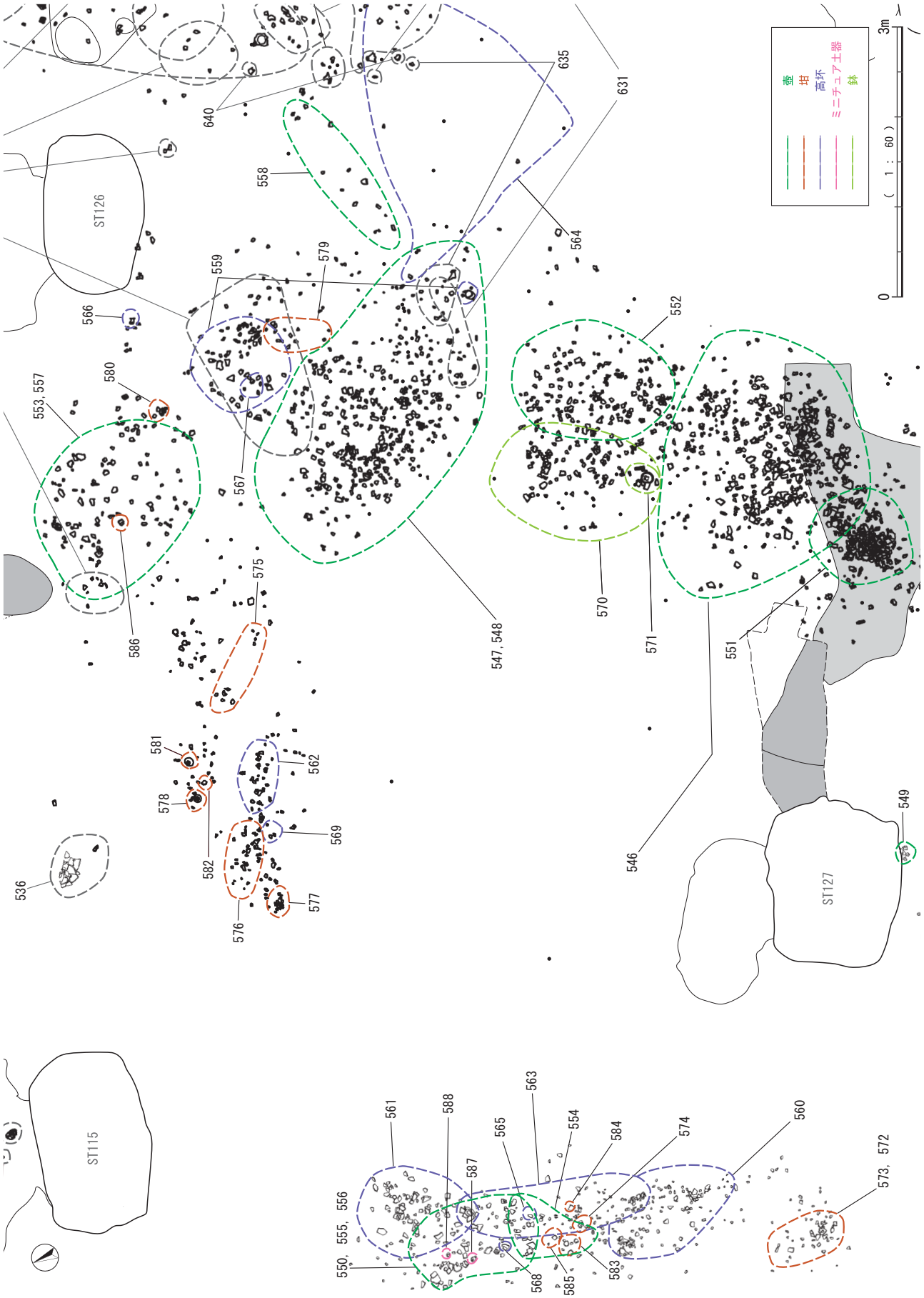


第 288 図　126 号地下式横穴墓周辺土層堆積状況

第 289 図　エリア 12-3 遺物出土状況(1)



第 290 図　エリア 12-3 遺物出土状況（2）



第 291 図　エリア 12-4 遺物出土状況（1）

第 292 図　エリア 12-4 遺物出土状況（2）

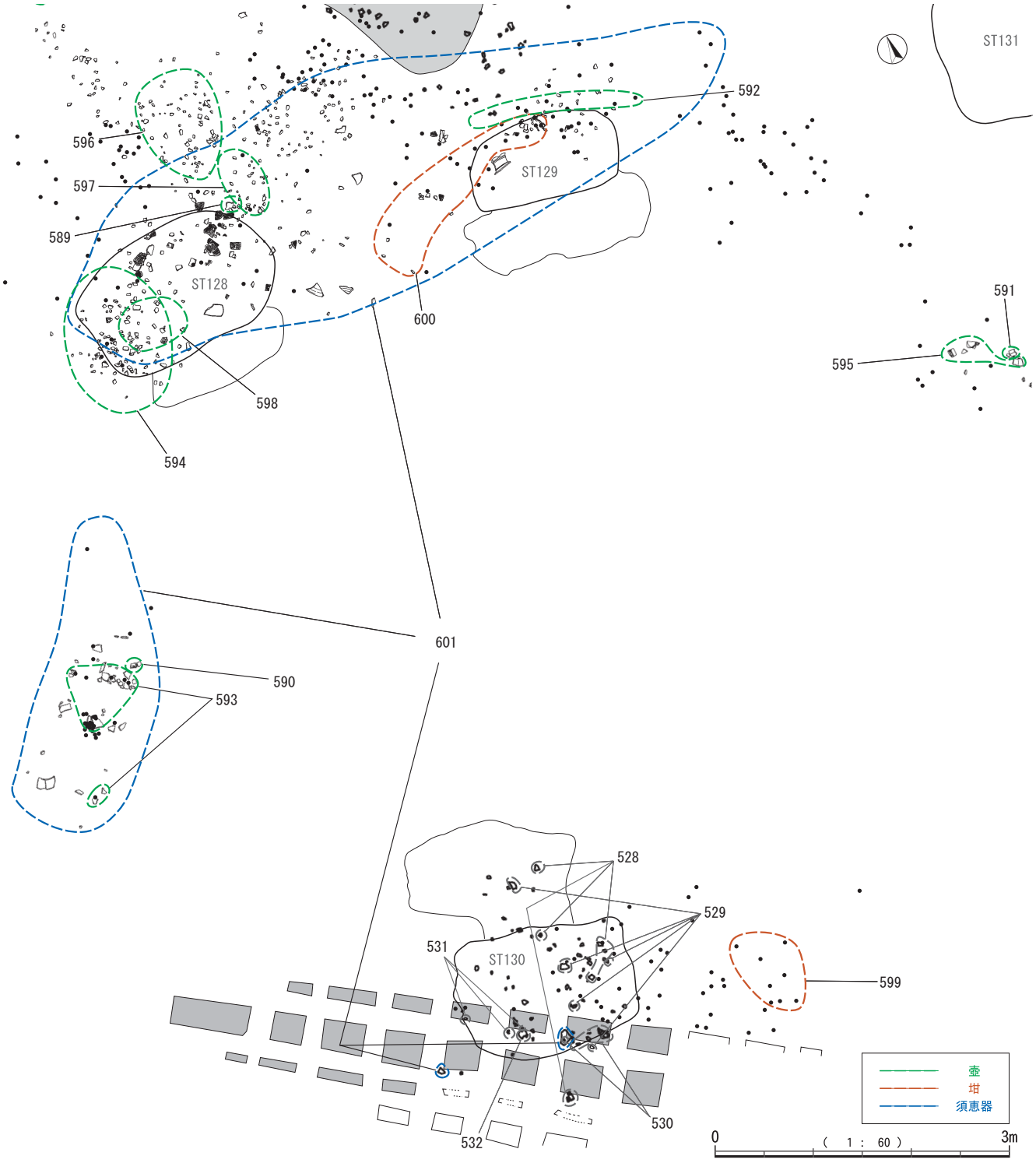
第 293 図　エリア 12-4 遺物出土状況 (3)

央部分は何らかの高まりがあった可能性がある。

127号の東側には開聞岳を起源とする白色のコラが分布するだけでなく，コラが付着した土器を確認した。

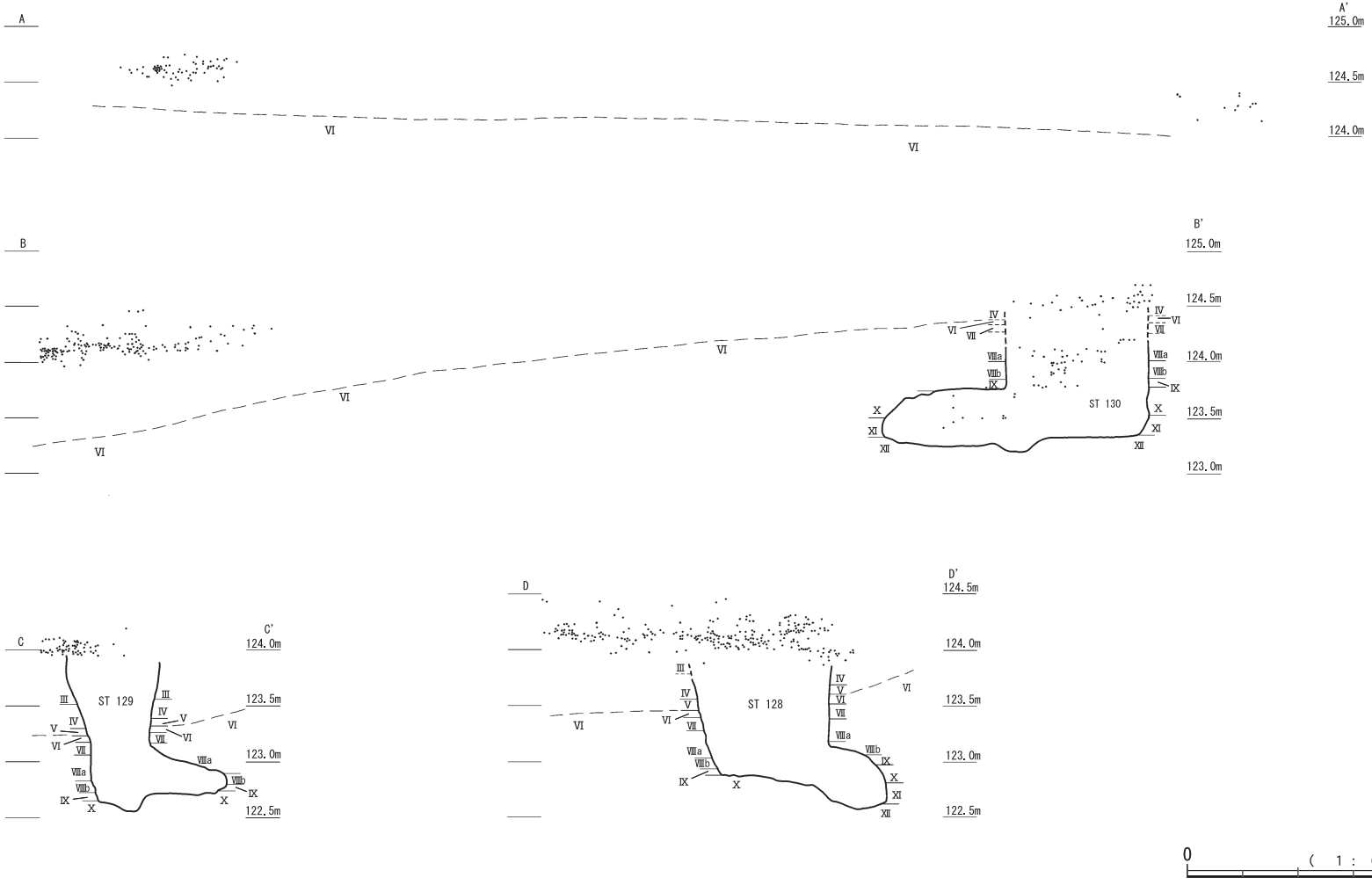
エリア12-5遺物出土状況（第294図～第296図）

表土の厚い128号・129号周辺は包含層や遺物の残存状況が良好であった。３基の地下式横穴墓はそれぞれの玄室が向かい合う向きに配置されており，玄室に囲まれた範囲は遺物が出土していない。竪坑部を含めた玄室の外側に土器の集中区が存在する。



第 294 図　エリア 12-5 遺物出土状況（1）

第 295 図　エリア 12-5 遺物出土状況（2）



第296図　エリア12-5遺物出土状況（3）

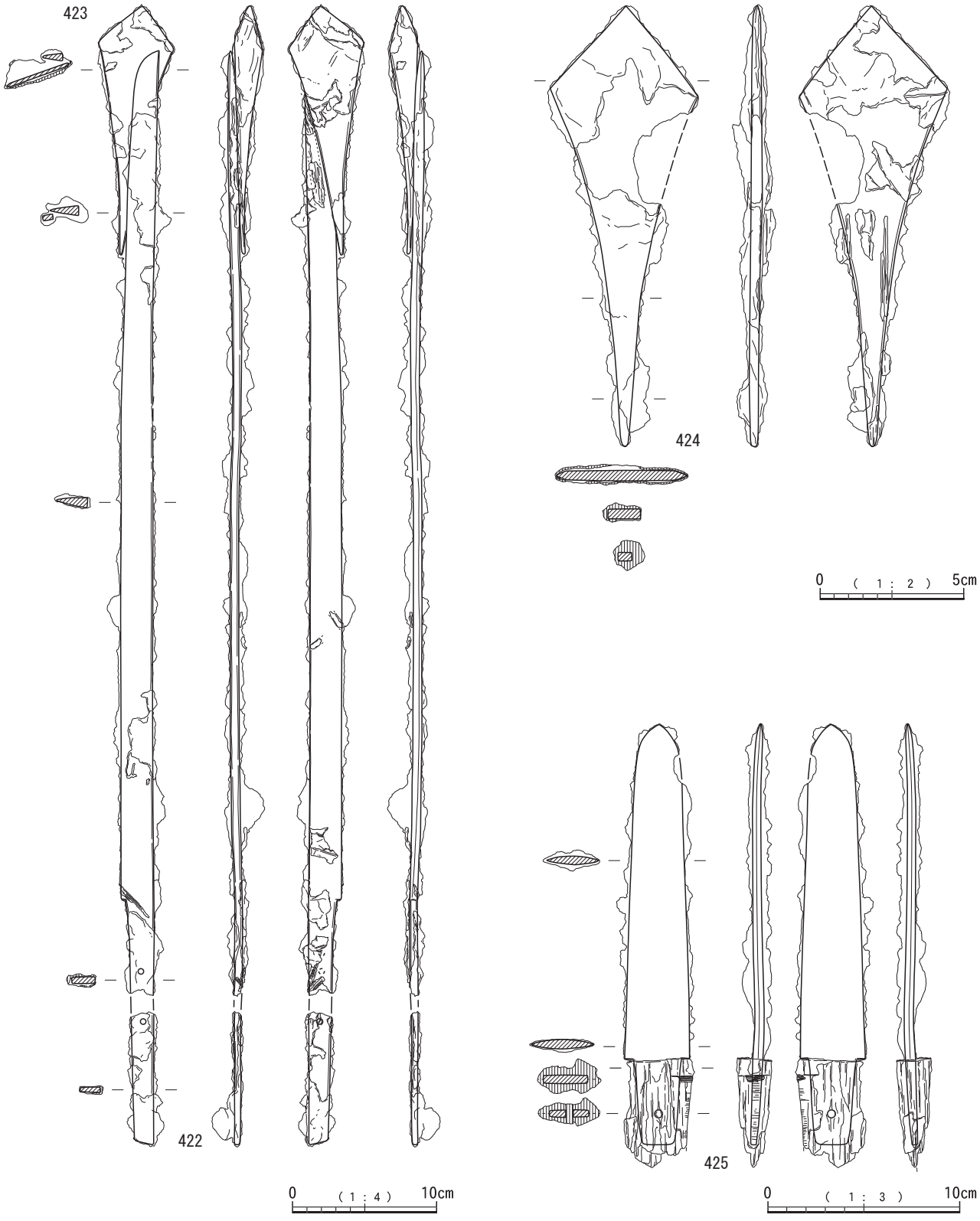
エリア12出土鉄器（第297図～第312図）

115号地下式横穴墓（第297図～第299図）

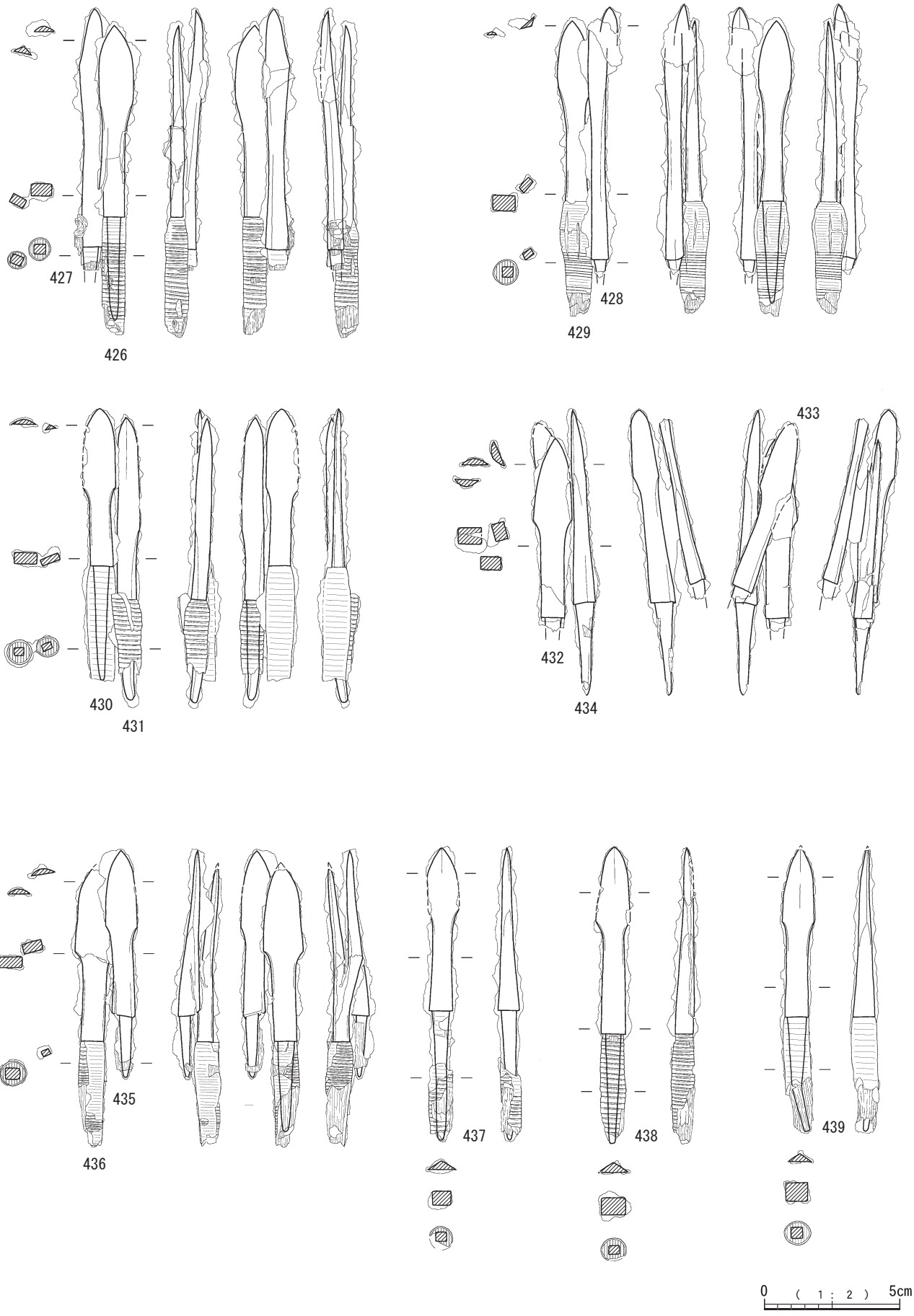
鉄器は鉄刀１点，短剣１点，鉄鏃38点（短頸鏃29点，圭頭鏃２点，不明１点，鉄鏃片６点）が出土したが，425の短剣１点と426 ～ 461の鉄鏃36点は玄室の床面から30cm上の位置で出土している。鉄器下の埋土がⅢ・Ⅳ層が混在する土であることから，地表面の鉄器が玄室天井の崩落にともなって玄室内へ落下したものであり，115号地下式横穴墓の副葬品ではないと考えられる。しかしながら，原位置が115号墓の玄室直上と推定されることから，115号墓との関連性は否定できないため，ここで取り扱うことにする。

422・423は銹着していたため，そのまま実測した。422は鉄刀である。茎部の一部が破損している。茎部の一部が出土しているものの，接合できない。しかし，茎部の出土位置や，刀剣類が他に共伴していないことから同一個体とした。刃部はふくら切先であり，刃部の断面は平造りを呈する。刃部の一部に布の付着がみられる。顕微鏡での観察から，絹製としている。また，銹化した葉や，矢柄が付着した痕跡もみられる。関部は片関であり，深さ３mmに落ちる直角の形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は台形を呈する。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔が確認できる。茎部に銹化した葉と材質不明の有機質が付着する。423は圭頭鏃Ⅲa類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。鏃身上部に銹化した葉が付着する。その上に重なって皮革とみられる有機質が付着している。顕微鏡での観察から糸の繊維の付着が確認されている。わずかに矢柄の痕跡がみられる。424は圭頭鏃Ⅲa類である。刃部下が抉れるように欠損する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。全体的に有機質が付着しており，一部では銹化した葉の付着がみられる。顕微鏡での観察により，刃部先端と茎部末端に布の痕跡が確認されている。付着した葉は，被子植物の葉であるとしている。

425は短剣である。刃部の一部が欠損する。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部は深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部断面は長方形を呈する。木製の目釘が残存しており，Ｘ線写真の観察から１孔の目釘孔がみられた。茎部には柄木が一部良好に残存しており，関部に柄の端部が確認できる。合わせ目の観察から，二枚合わせ式であることが確認できる。柄木は樹種同定により，ブナ科シイ属であるとしている。柄の糸巻きが一部残存しており，撚り糸で巻いていることが確認できる。426 ～ 454は短頸鏃Ⅱ類である。全体的に銹化が進行しており，状態が悪い。426・427は長三角形である。銹着していたため，そのまま実測した。426は銹化が進行しており，頸部に亀裂がみられる。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。427は茎部の一部が欠損する。銹化が進行しており，刃部に変形がみられる。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，状態が悪い。428・429は長三角形である。銹着していたため，そのまま実測した。428は茎部の一部が欠損する。刃部に銹化による膨張がみられ，ズレが生じている。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の残存はみられない。429の断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は銹化による膨張が生じているものの，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。430・431は銹着していたため，そのまま実測した。430・431は長三角形である。刃部の一部に欠損がみられる。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄はやや良好に残存するが，口巻きの単位が不明瞭である。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は銹化による膨張が生じているものの，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。432～434は銹着していたため，そのまま実測した。432は長三角形である。茎部の一部が欠損する。銹化による亀裂が生じているが，原形は保っている。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。433は長三角形である。刃部の先端や茎部に欠損がみられる。銹化が進行しており，一方の刃部関が不明瞭である。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。434は長三角形である。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に矢柄の痕跡がわずかにみられる。435・436は銹着していたため，そのまま実測した。435・436は長三角形である。435は銹化が進行しており，頸部に亀裂が生じている。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に矢柄の痕跡がわずかにみられる。銹化が進行しており，頸部に亀裂が生じているが，原形は保っている。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄がやや良好に残存しており，口巻きの単位がみられる。437～447は長三角形である。437～443は刃部の断面形が片鎬造りである。437は刃部の一部が欠損する。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄は状態が悪いものの残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。438は刃部の一部が欠損する。銹化の進行により，亀裂が生じている。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄が良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。439は刃部の先端が欠損する。頸部・茎部の断面形は方形を呈する。矢柄が残存するがやや状態が悪く，口巻きの単位が不明瞭である。440は銹化の進行により，先端が反り頸部に亀



第 297 図　115 号地下式横穴墓出土鉄器（1）



第 298 図　115 号地下式横穴墓出土鉄器（2）

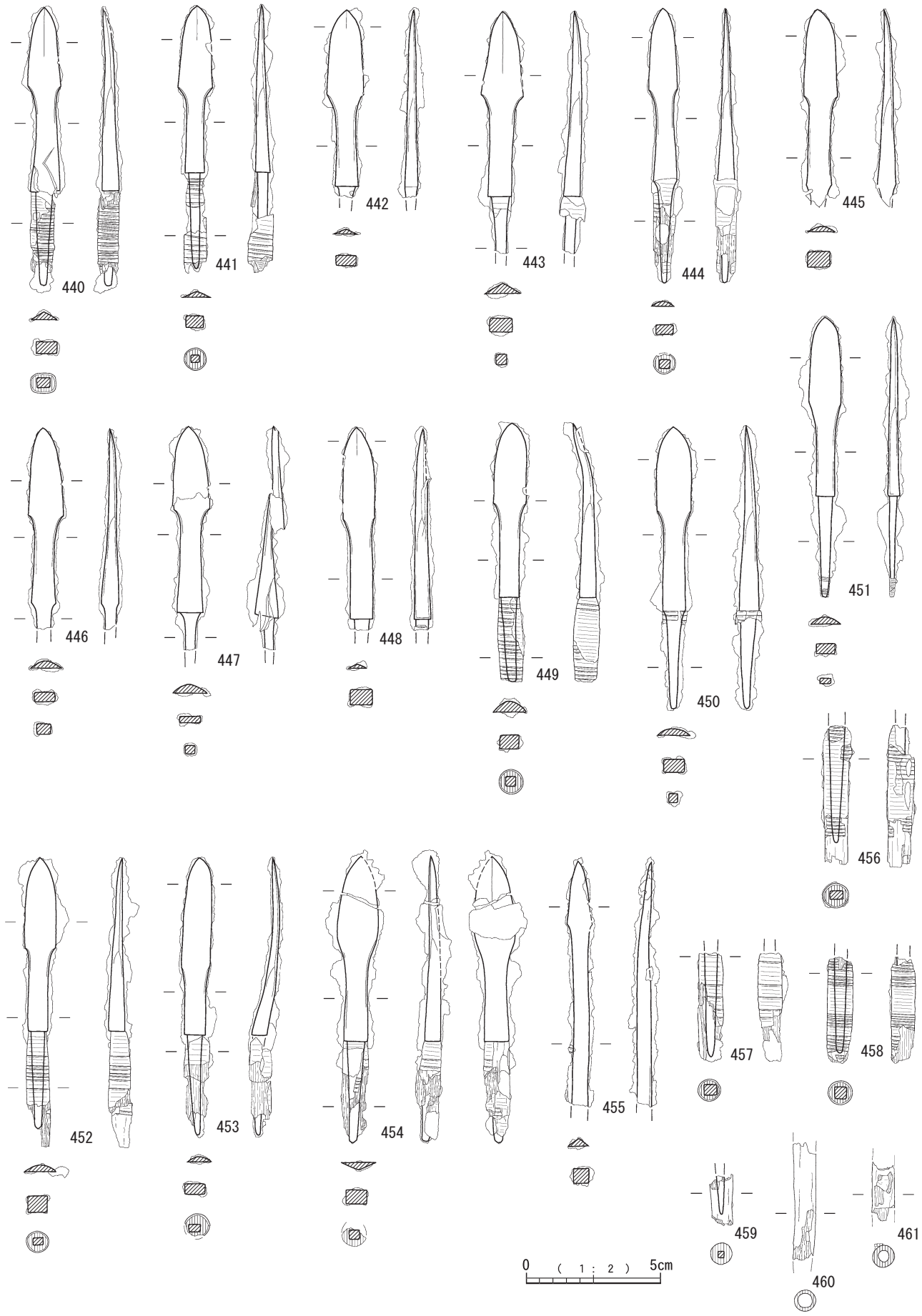
裂が生じている。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄が良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。441は刃部の一部が欠損する。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄は状態が悪いものの残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。442は茎部の一部が欠損する。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。443は刃部の一部が欠損する。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄がわずかに残存する。444～447は刃部の断面形が片丸造りである。444の頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄が残存するものの，状態が悪い。445は茎部の一部が欠損する。頸部の断面形は長方形を呈する。446は茎部の一部が欠損する。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。447は茎部の一部が欠損する。銹化の進行により亀裂や分裂が生じており状態は悪いものの，原形は保っている。頸部の断面形は長方形を呈する。448～434は長三角形である。448は刃部断面形が片鎬造りである。刃部の一部に銹化の進行による亀裂が生じている。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。449～453は刃部断面形が片丸造りである。449は銹化の進行により，上部が反っており一部欠損もみられる。頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄がやや良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。450の頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄がわずかに残存する。451の頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。茎部に糸巻きを施している。452の頸部・茎部の断面形は長方形を呈する。矢柄はやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。口巻きの端部が明瞭にみられ，長さ約３cmの口巻きを施していることが確認できる。453は長三角形である。銹化が進行しており，刃部から頸部にかけて湾曲がみられる。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，やや状態が悪い。454は刃部関が不明瞭な長三角形である。銹の膨張により，刃部に分離が生じている。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，やや状態が悪い。455は下部が欠損する。銹化が進行しており，状態が非常に悪い。刃部形態は長三角形とみられるが，頸部関が確認できない。断面形は刃部が片鎬造り，頸部方形を呈する。矢柄の痕跡がわずかにみられる。456・457は茎部片である。456の断面形は長方形を呈する。矢柄は銹による膨張が生じているがやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。457の断面形は長方形を呈する。矢柄が残存しており，やや状態が悪いものの一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。458の断面形は方形を呈する。矢柄は良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。459の断面形は方形を呈する。矢柄が残存するが，口巻きの痕跡は確認できない。460・461は矢柄片である。460は口巻きの痕跡がみられない。461は別個体の矢柄片が付着する。

116号地下式横穴墓（第300図）

鉄器は鉄鏃３点（鳥舌鏃３点）が出土した。462は茎部の一部が欠損する。先端に有機質が付着する。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きを施している。矢柄がわずかに残存する。463は茎部の一部が欠損する。断面形は刃部が平造り，茎部が長方形を呈する。矢柄が残存しており，口巻きの痕跡がみられる。464は銹化が進行しており，上部が不明瞭である。断面形は刃部が平造り，茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きを施している。矢柄の痕跡がわずかにみられる。

125号地下式横穴墓（第302図・第303図）

鉄器は鉄鏃が27点（短頸鏃15点，腸抉柳葉鏃４点，柳葉鏃４点，圭頭鏃２点，鉄鏃片２点）が出土した。465～482は銹着していたため，そのまま実測した。全体的に黄色い銹のようなもので厚く覆われており，大半の鉄鏃の形態が不明なため，九州国立博物館の協力によりＸ線ＣＴ撮影をおこなった。465は圭頭鏃Ⅲa類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。わずかに矢柄の痕跡がみられる。466は長三角形の短頸鏃Ⅱ類である。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。467は腸抉柳葉鏃である。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。468～482は目視では形態が不明なため，Ｘ線ＣＴ画像の観察から推定した。468は長三角形の短頸鏃Ⅱ類である。頸部の上部に亀裂が生じている様子がみられた。469～475は長三角形の短頸鏃Ⅱ類である。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。476は柳葉鏃である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。477は短頸鏃Ⅱ類である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。478 ～ 480は柳葉鏃である。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。481・482は短頸鏃Ⅱ類である。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄は一部良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。矢柄の一部に有機質が確認できるが，矢柄と平行な繊維方向であることから，別個体の矢柄と考えられる。483 ～ 485は銹着していたため，そのまま実測した。483は腸抉柳葉鏃である。逆刺の一部と茎部が欠損する。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。484は圭頭鏃Ⅲa類である。茎部が欠損する。断面形は刃部が平造り，頸部が長方形を呈する。485～487は短頸鏃Ⅱ類である。鏃身部は長三角形を呈する。485の断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄がやや良好に残存しており，口巻きの単位が明



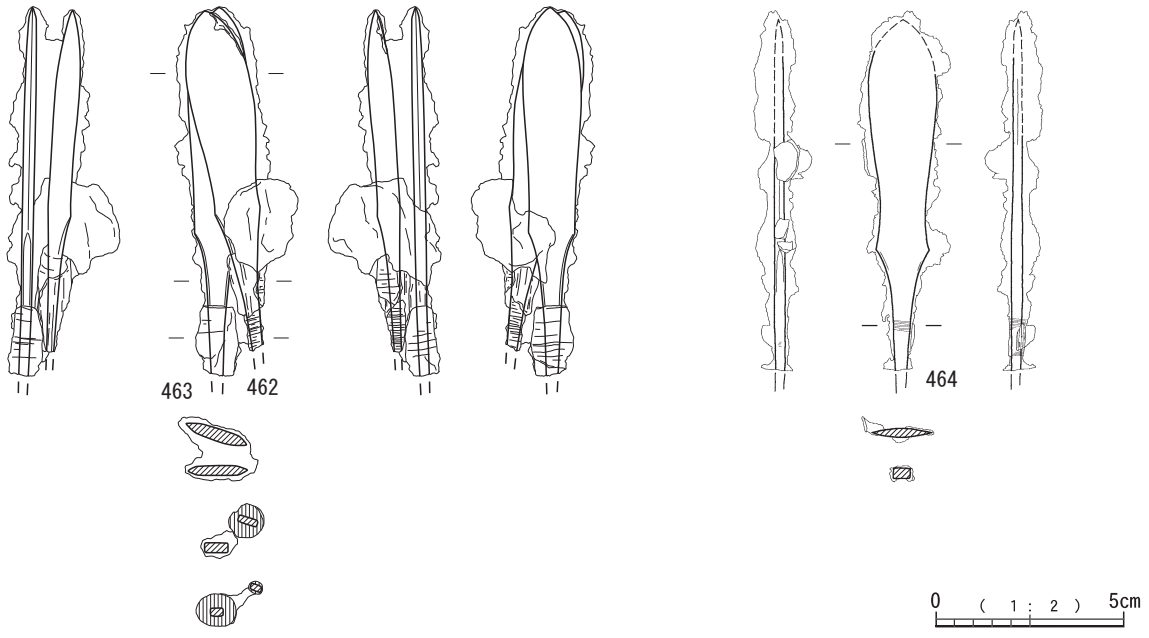
第 299 図　115 号地下式横穴墓出土鉄器（3）

瞭にみられる。486は先端と刃部関の一部，茎部の一部が欠損する。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存しており，状態が悪いものの一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。487は錆化が進行しており，上部が錆により不明瞭である。また，刃部に反りや，ずれが生じている。断面形は刃部が片鎬造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存しており，やや状態が悪いものの一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。488・489は腸抉柳葉鏃である。488は逆刺の先端が一部欠損する。錆化が進行しており，刃部の一部や茎部の末端が錆により不明瞭である。また，刃部にずれが生じている。断面形は刃部が片丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄がわずかに残存しており，一部では口巻きがみられる。489は逆刺の先端が一部欠損する。錆化が進行しており，上部が錆により一部不明瞭である。また，先端がわずかに反っている。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するもののやや状態が悪く，口巻きの単位が不明瞭である。490・491は茎部片である。490の断面形は長方形を呈する。矢柄がやや良好に残存しており，一部では口巻きが明瞭にみられる。491の断面形は方形を呈する。矢柄が残存するが状態が悪い。

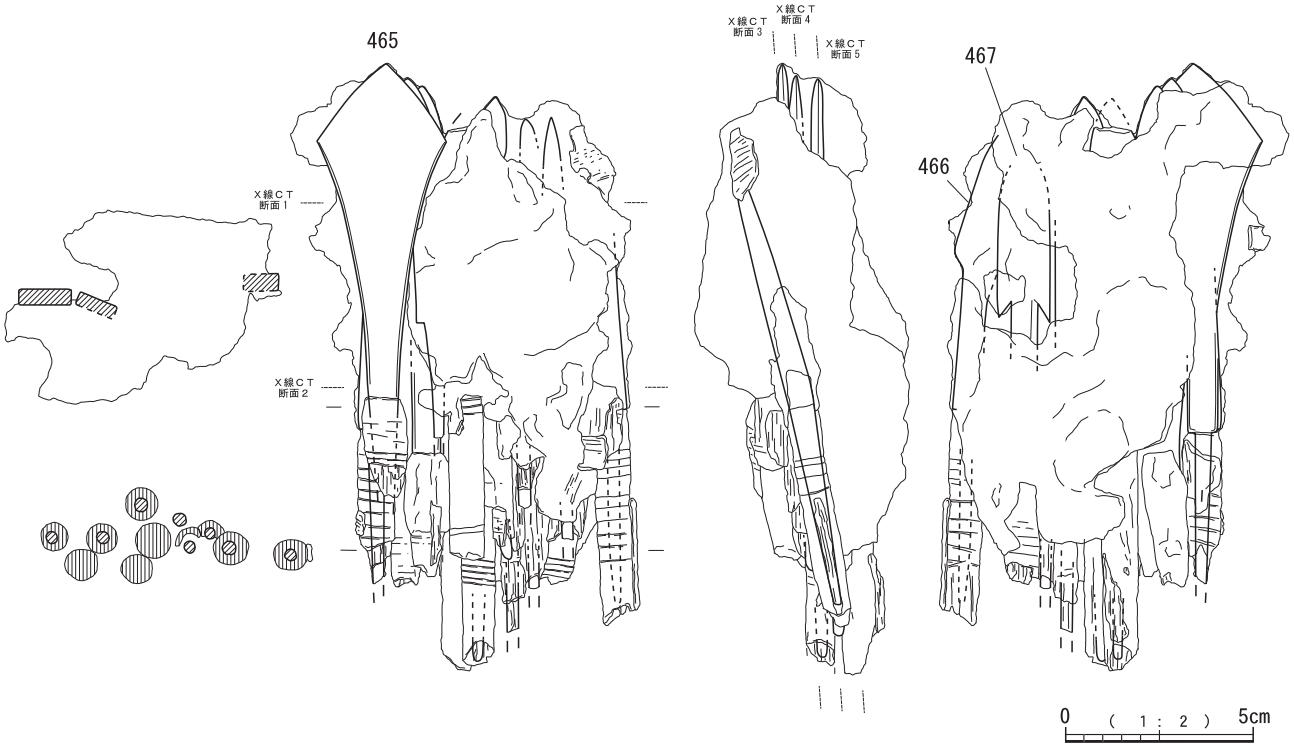
126号地下式横穴墓（第304図）

鉄器は鉄刀１点，青銅製の鈴５点が出土した。492は大刀である。刃部上部が錆化によりやや変形する。刃部はふくら切先であり，刃部の断面は平造りを呈する。関部は片関であり，深さ５mmに落ちる直角の形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は台形を呈する。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔がみられた。一部に錆化した平織布が付着するが明瞭な木質は認められないことから，木製の装具などはなく布を巻くなどして副葬したと考えられる。また，布とは異なる有機質の痕跡が付着するが，状態が悪く材質は不明である。

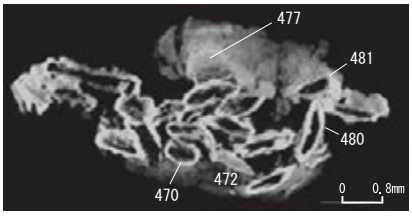
493～497は青銅製の鈴である。495以外はほぼ白色，495は濃緑色を呈する。493は環鈴の転用品である。出土時は494が錆着していたが，整理作業時に外れている。環の一部が欠損する。正面形は楕円形を呈する。鈴体の一面を欠き，強く折り曲げられている。環の残存部の太さは約５mmを測り，同じく環鈴の転用品である337より太い。脚部の中心に穿孔がみられ，穿孔に植物繊維が付着する。丸は直径約９mmの不整形であり，鈴口からの観察から礫製と考えられる。鈴体に付着しておらず，音が鳴る状態である。494は残存状態が非常に良好である。正面形は栗形を呈しており，338～341と形態が類似する。鈴口はほぼ閉じるが，口端がわずかに開く。鈕孔に493と同様の植物繊維が付着する。顕微鏡での観察から，カラムシに近い繊維が確認されている。495は鈕と鈴口の一部が欠損する。形態は最も球状に近い。鈴口の欠損部から黄白色の丸が観察できる。丸の形状はひょうたん型である。496は立小野堀遺跡から出土した青銅



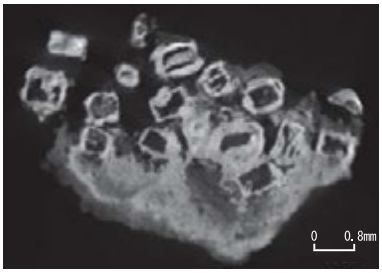
第 300 図　116 号地下式横穴墓出土鉄器



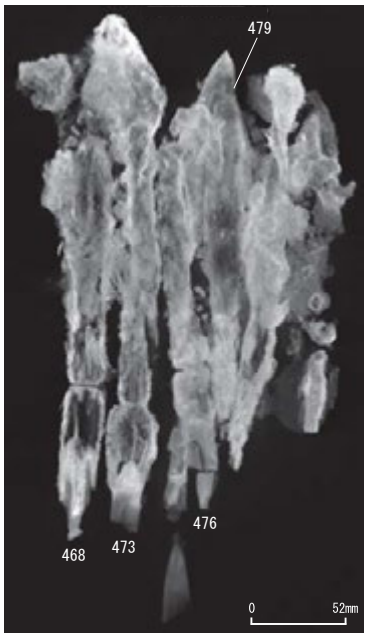
第 301 図　125 号地下式横穴墓出土鉄器（1）



X線CT断面１

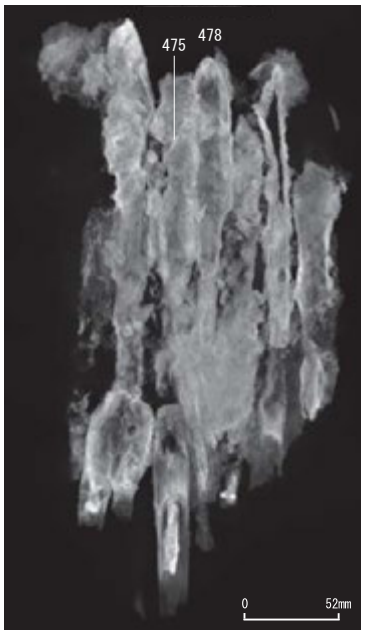


X線CT断面２



X線CT断面３

X線CT断面４



X線CT断面５

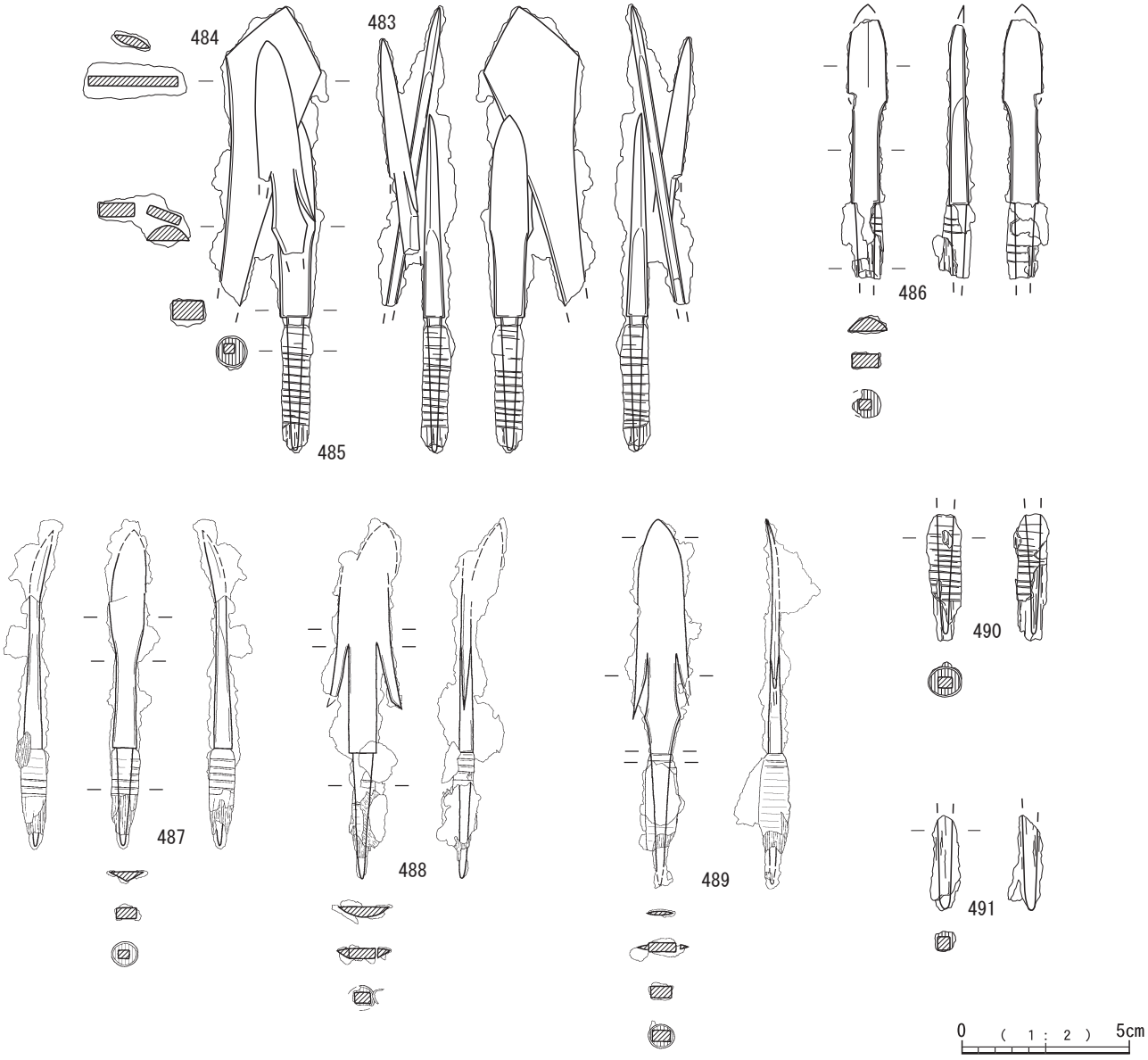
第 302 図　125 号地下式横穴墓出土鉄器（465 ～ 482）X線CT画像

鈴のなかで最も小型である。鈴体の一部と鈕上部が欠損する。正面形はわずかに縦長の楕円形を呈する。鈴口は約１mm重なって閉じられている。497は発掘調査時に下半分を破損した。破損した小片から鈴口が重なっている部分が観察できる。他の小鈴と比較し，鈕部分が大きく，鈕孔の幅が４mmと形状がかなり異なる。出土位置から丸の可能性が高い礫を検出している。最大径２mmの楕円形を呈する。

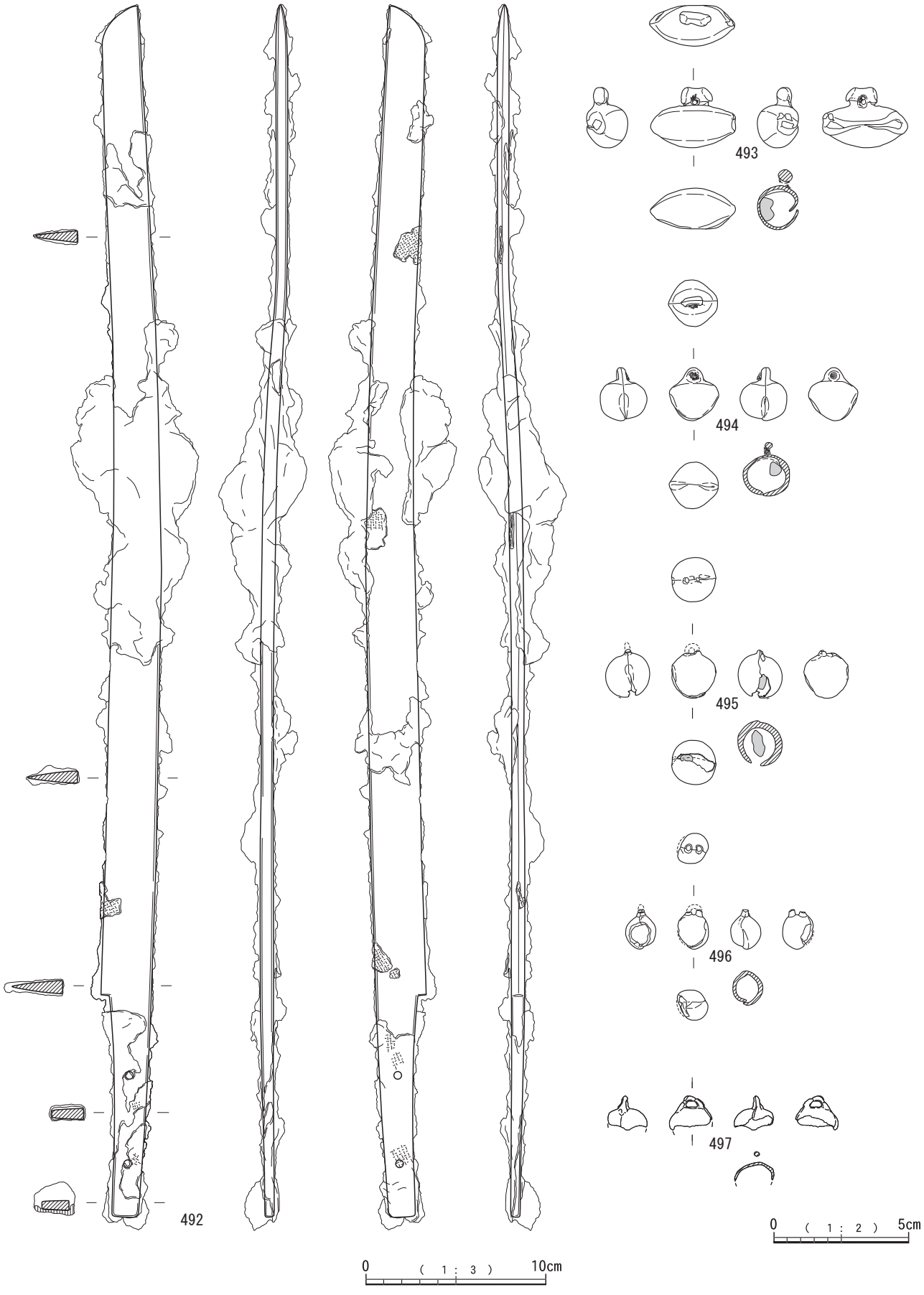
複数個体から鈕孔に付着する植物繊維がみられたことから，植物繊維製の紐のようなものに鈴を通して副葬しと考えられる。

127号地下式横穴墓（第306図）

鉄器は498の刀子が１点出土した。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，背側の切先はわずかに落とされている。刃部にくびれがみられるが，研ぎ減りによるものと考えられる。断面は平造りを呈する。刃部の一部に皮革の付着がみられる。状態が悪く詳細は不明だが，革製の鞘の痕跡と考えられる。関部は片関であり，深さ約2.5mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。茎部に鹿角製の柄が残存する。柄の端部は関の約１～２mm下部に位置する。



第 303 図　125 号地下式横穴墓出土鉄器（2）



第 304 図　126 号地下式横穴墓出土鉄器・青銅鈴

128号地下式横穴墓（第306図）

鉄器は499の蛇行剣１点が出土した。２回の屈曲部をもつ。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部にわずかに有機質が付着した痕跡がみられるが，状態が悪く材質は不明である。関部は深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。目釘孔は１孔確認できる。茎部に錆化した平織布が付着する。茎部に直に付着することから，装具はない状態で副葬されたと考えられる。

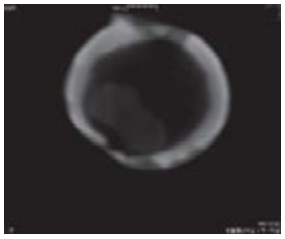
130号地下式横穴墓（第307図～第310図）

鉄器は鉄刀１点，鉄剣１点，短剣２点，刃部片２点，鉄鏃19点（長頸鏃16点，圭頭鏃１点，鉄鏃片２点）が出土した。

500～502は錆着していたため，そのまま実測した。

493

494

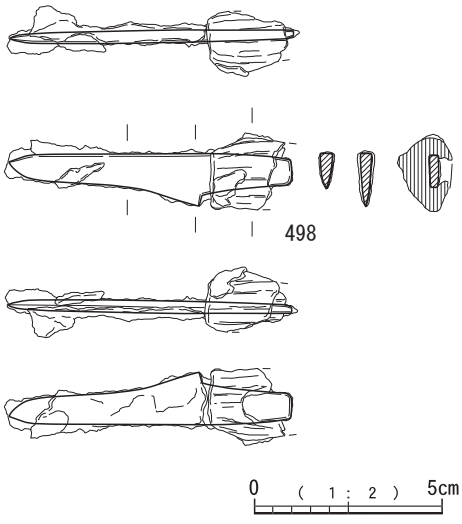

495

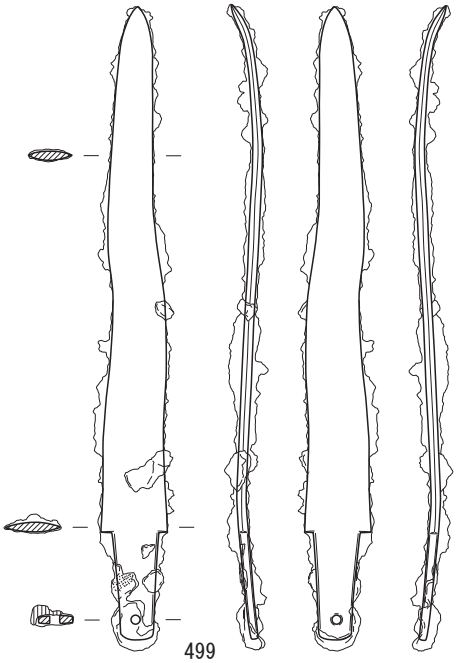
493

496

497

第 305 図　126 号地下式横穴墓出土青銅鈴Ｘ線ＣＴ画像





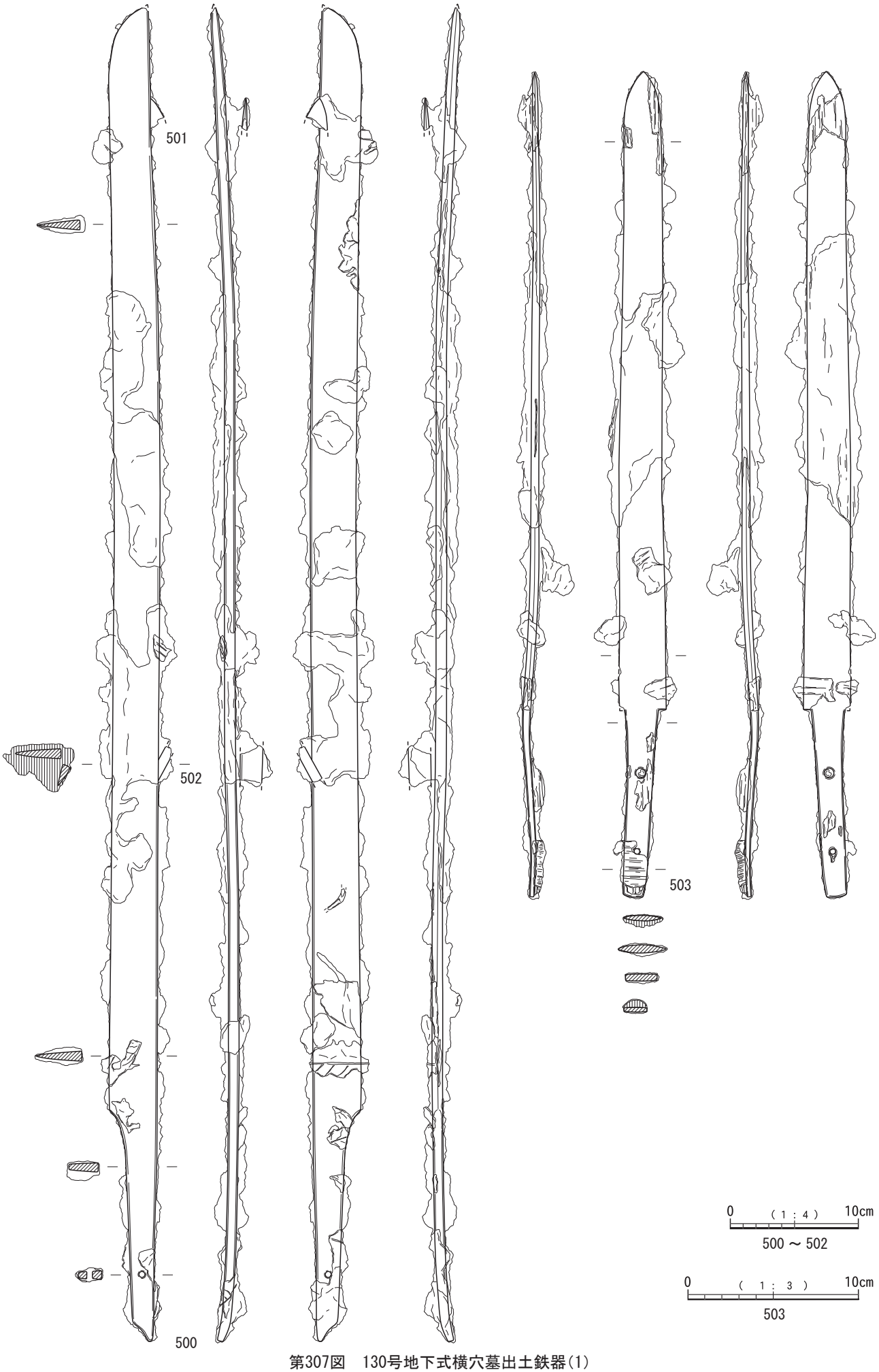
498　127 号地下式横穴墓
499　128 号地下式横穴墓

0 (1 : 3) 10cm

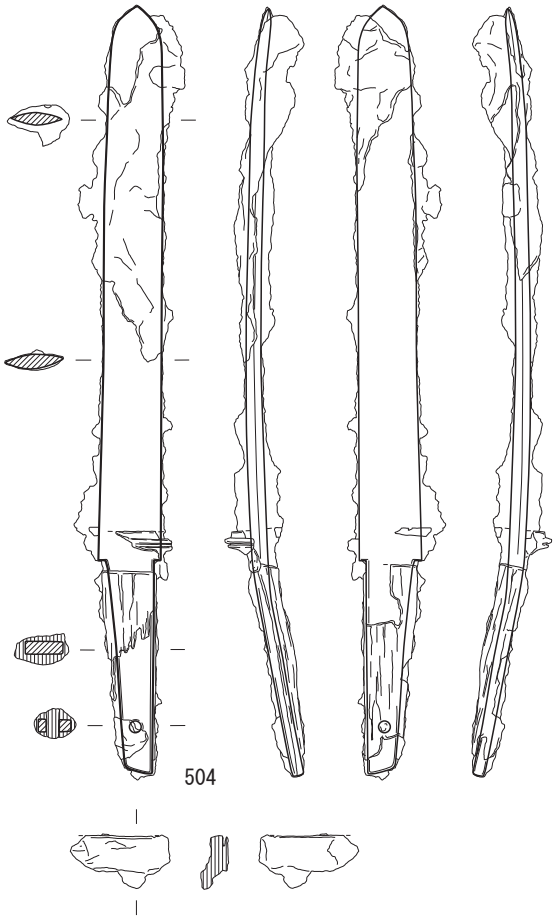
第 306 図　127 号・128 号地下式横穴墓出土鉄器

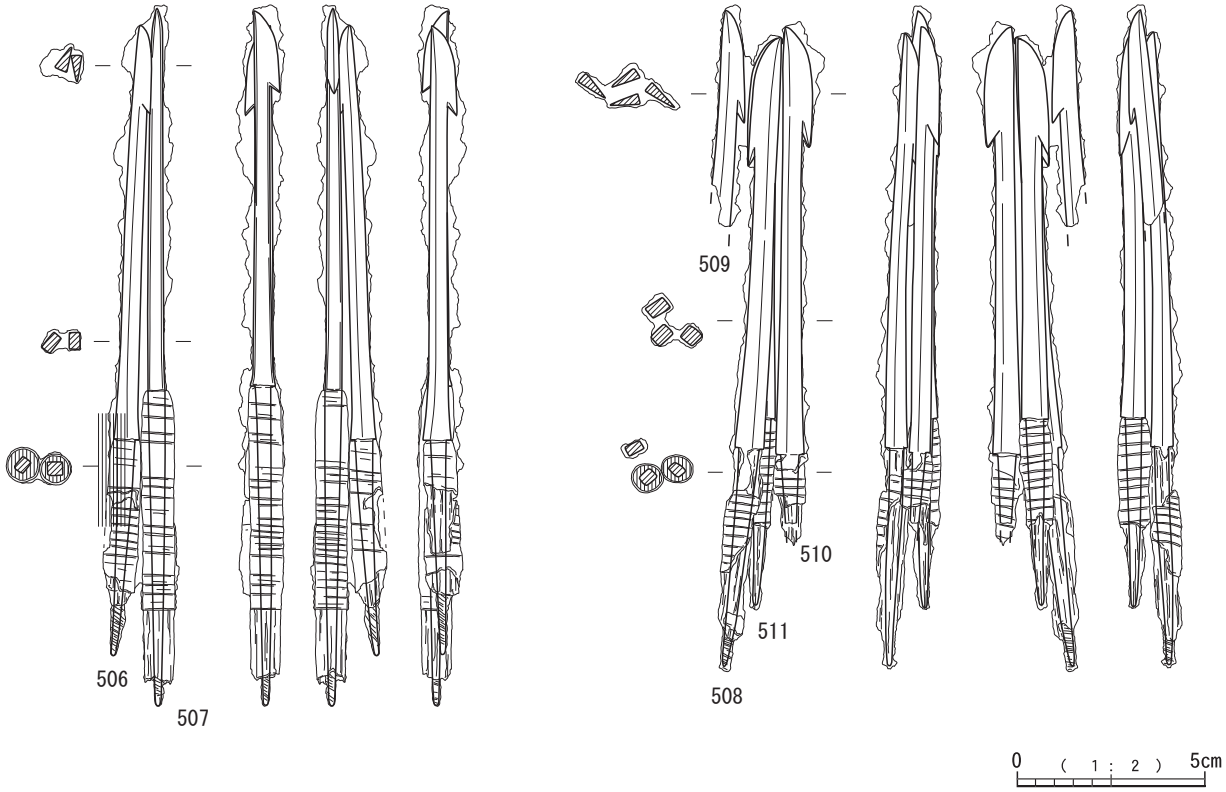
500は鉄刀である。先端がわずかに欠損する。推定長103.8cmを測り，立小野堀遺跡で出土した鉄刀のなかで最も長い。刃部はふくら切先であり，刃部の断面は平造りを呈する。全体的に有機質が付着する。有機質の一部は葉である。顕微鏡での観察から，布の痕跡を残す皮革が確認されている。刃部の中央付近に鹿角片が付着するが，出土状況から，504の鹿角片と考えられる。また，刃部下部では，紐のようなものが付着するが，状態が悪く詳細は不明である。関部は片関であり，ナデの形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は台形を呈する。目釘孔が１孔確認できる。刃部と同様の葉が付着する。全体的に木質の付着はみられない。501・502はレンズ状を呈する。501は刃部の先端である。断面形は片平造りである。断面や破損の形態から，505と同一個体である可能性が高いが，断面の錆化により接合できない。502は両端が欠損する。断面形は平造りである。503は鉄剣である。錆化により関部周辺がやや湾曲する。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の先端に鞘木がわずかに残存する。刃部の中部には，劣化した木質の痕跡があり，その上に重なって平織布がみられる。鞘木と鞘巻きの痕跡と考えられる。関部直上に鹿角製の鞘口が残存する。関部から1.9cm上に，鞘口の上端と思われる痕跡が確認できる。関部は一方が欠損するものの，深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。目釘孔が２孔みられる。茎部に柄木とみられる木質が付着するが，状態が悪く詳細は不明である。茎部下部に糸による柄巻きが残存する。504・505は短剣である。504は関部から「くの字」状に屈曲する。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部の上部に有機質が付着する。顕微鏡での観察から，動物性の毛と皮革であるとしている。関部直上に鹿角製の鞘口が残存する。関部から1.2cm上に，鞘口の上端と思われる痕跡が確認できる。鹿角製の鞘口は，出土時に他にも残存していたが整理作業の過程ではずれている。長さ約2.4cm，幅約3.3cm，厚さ約2.5cmを測る。関部は深さ約３mmの直角に落ちる形態である。関部の位置にややずれがみられ，左右非対称である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。X線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。茎部に柄木の木質が残存するが，状態が悪く形態は不明である。茎部下部に有機質が付着する。顕微鏡での観察から，布の痕跡としている。505は刃部先端が欠損する。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。断面はレンズ状を呈する。刃部の一部に有機質の痕跡がみられるが，状態が悪く材質は不明である。関部は深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。X線写真の観察から，１孔の目釘孔が確認できる。長さ約1.7cm，直径約３mmの鉄製の目釘が残存しており，目釘孔に斜めに通っている状態が確認できる。茎部に柄木とみられる木質が残存するが，状態が悪く詳細は不明である。

506 ～ 521は長頸鏃である。鏃身部形が確認できるものは全て片刃箭式であり，断面形は刃部が片平刃造り，頸部・茎部が長方形を呈する。506・507は錆着していたため，そのまま実測した。鏃身部長が約2.3cmを測り，共伴する長頸鏃のなかでは小型である。506は茎部に糸巻きを施している。矢柄がやや良好に残存する。口巻きにわずかに赤色顔料が付着する。507は茎部に糸巻きを施している。矢柄が良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。口巻きの端部が明瞭にみられ，長さ約5.8cm口巻きを施していることが確認できる。508 ～ 511は錆着していたため，そのまま実測した。508は茎部に糸巻きを施している。矢柄がやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。口巻きにわずかに赤色顔料が付着する。科学分析により水銀が検出された。509は頸部の一部から茎部が欠損する。510は茎部の一部が欠損する。矢柄が短いものの良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。511は矢柄がやや良好に残存しており，口巻きの単位が明瞭にみられる。512 ～ 514は錆着していたため，そのまま実測した。512は茎部の一部が欠損する。矢柄が残存しておりやや状態が悪いものの，口巻きの単位は明瞭にみられる。513は茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存するものの，状態が悪い。514は錆化の進行により，頸部関から「くの字」状にわずかに曲がっている。矢柄が残存しておりやや状態が悪いものの，口巻きの単位は明瞭にみられる。矢柄に赤色顔料が付着する。科学分析により水銀が検出された。また，顕微鏡での観察から，水銀朱の上に布の痕跡が確認されている。515・516は錆着していたため，そのまま実測した。515は茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存するが，状態が悪い。516は鏃身部から頸部の一部が欠損する。矢柄は良好に残存するが，口巻きは一部欠損している。517・518は錆着していたため，そのまま実測した。517は茎部の一部が欠損する。矢柄が残存するが，状態が悪い。518は錆化により鏃身部がわずかに反る。茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存しておりやや状態が悪いものの，口巻きの単位は一部で明瞭にみられる。519は茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存しておりやや状態が悪いものの，口巻きの単位は一部で明瞭にみられる。顕微鏡での観察から，矢柄の上に布の痕跡があることが確認されている。520は頸部の一部と茎部が欠損する。錆

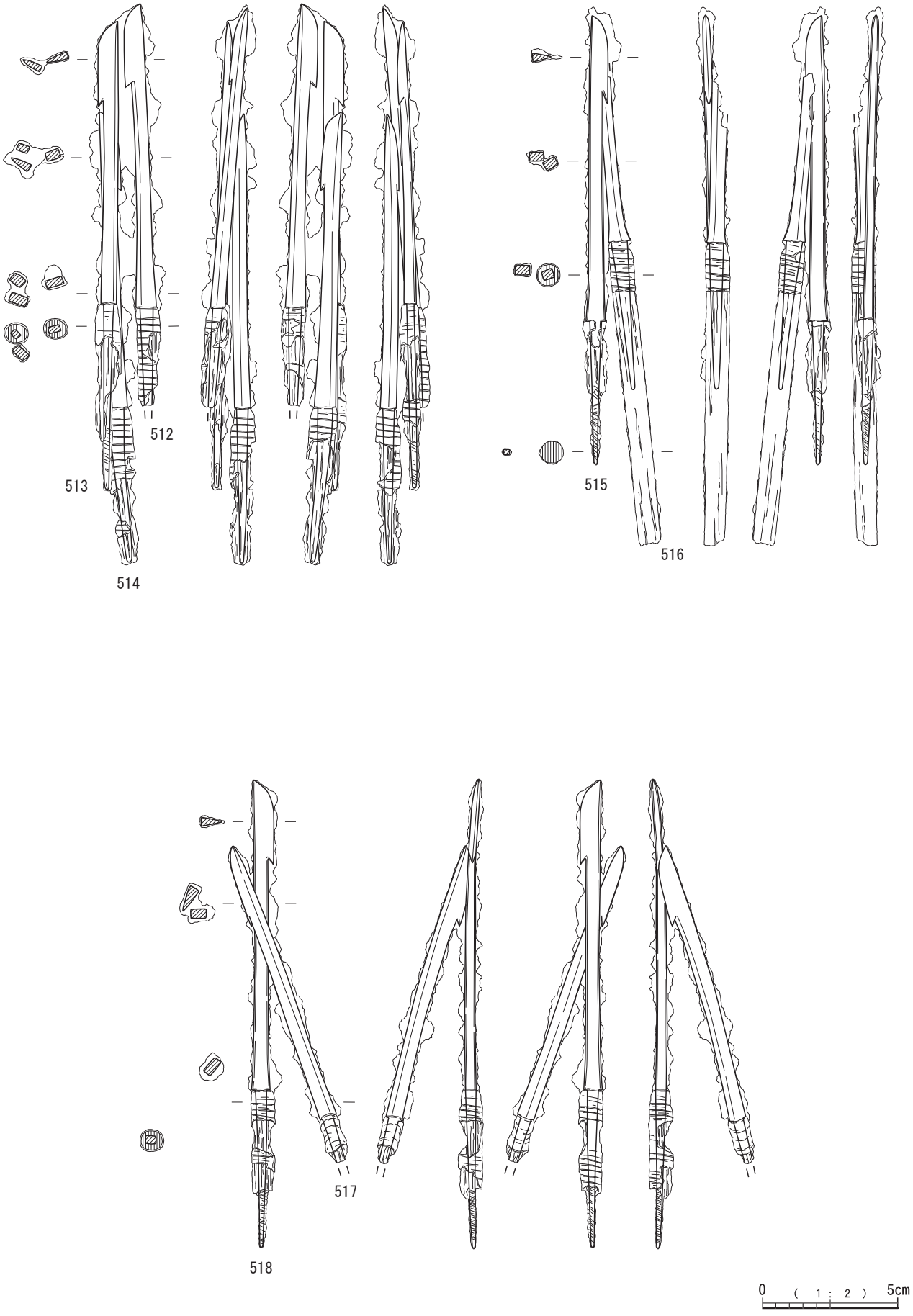


第307図　130号地下式横穴墓出土鉄器(1)

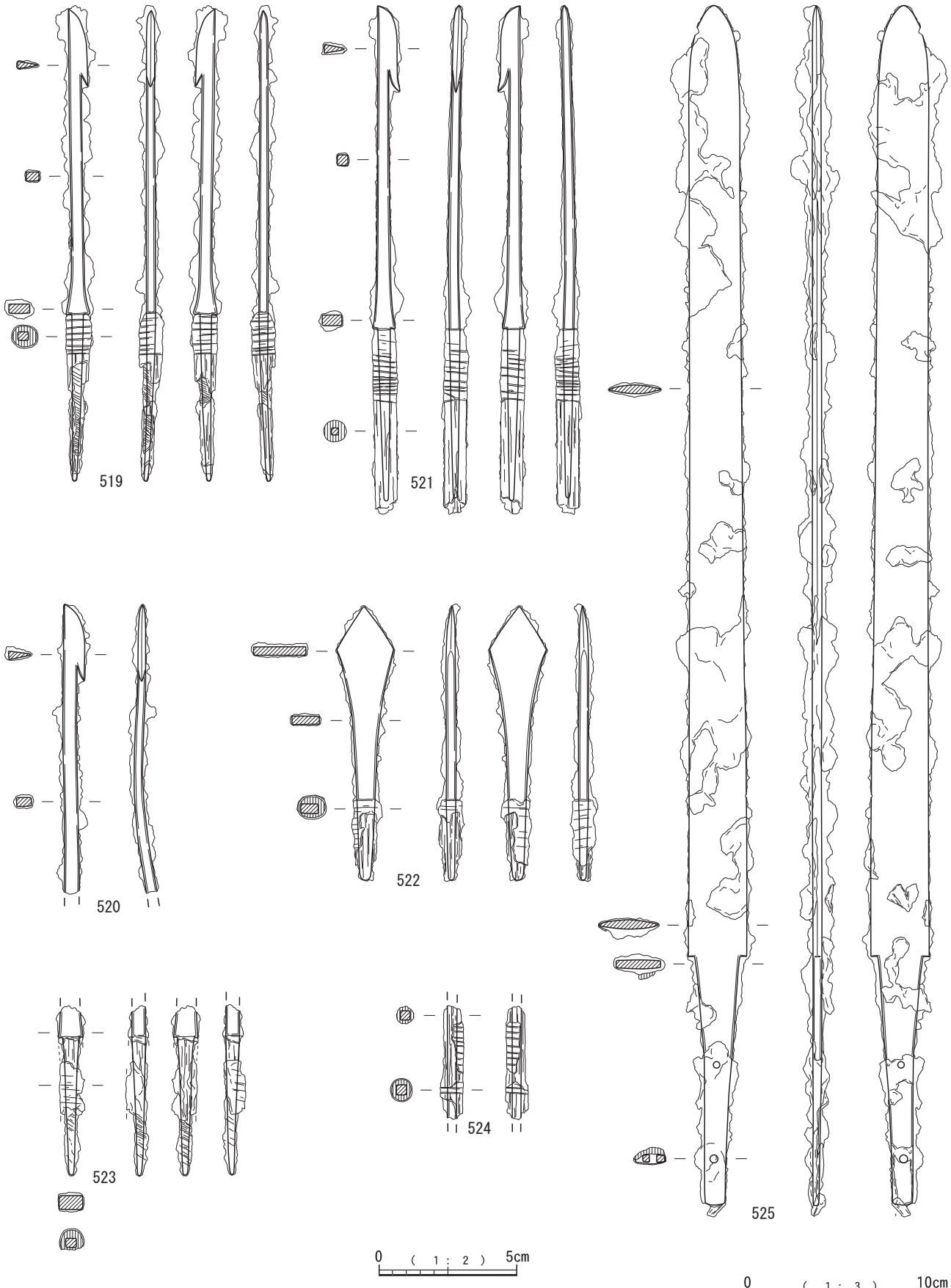




第308図　130号地下式横穴墓出土鉄器(2)



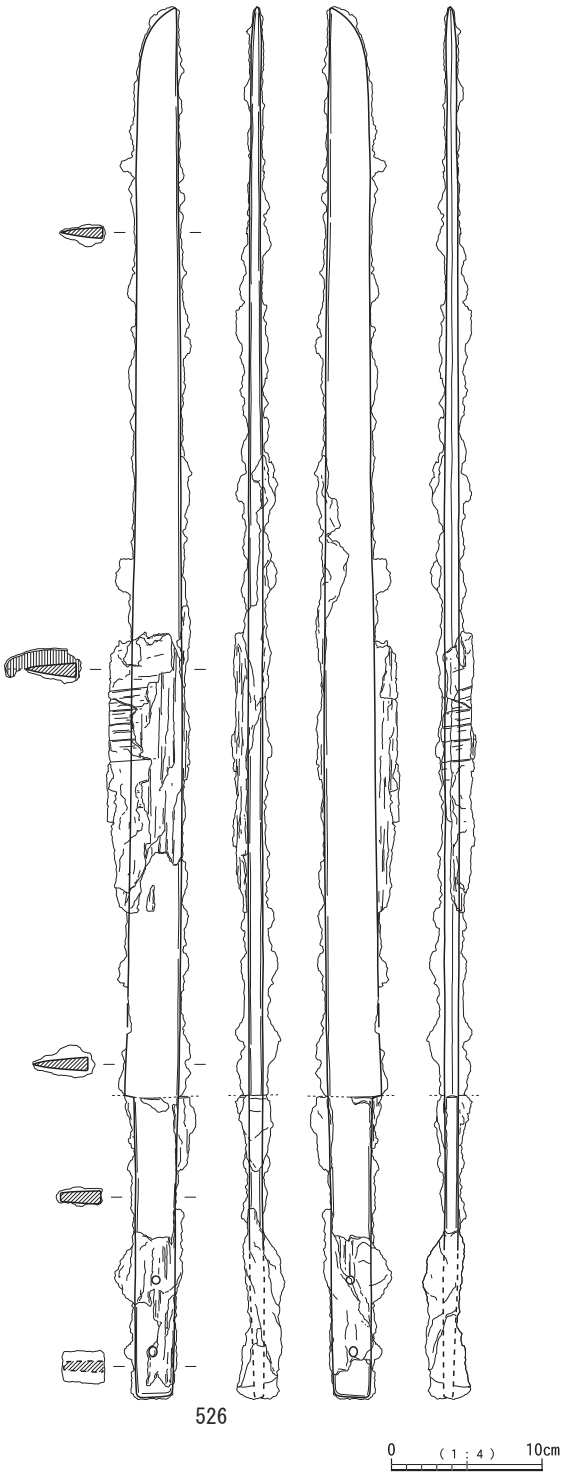
第309図　130号地下式横穴墓出土鉄器(3)



519 ～ 524　130 号地下式横穴墓
525　131 号地下式横穴墓

第 310 図　130 号(4)・131 号地下式横穴墓出土鉄器

化の進行により，反っている。521は刃部がＳ字状にくびれており，抉りが深い。茎部の断面形も方形を呈し，共伴する長頸鏃とは形態がやや異なる。矢柄が良好に残存する。口巻きの一部では巻きの単位が明瞭にみられ，最後の入れ込みまで観察できる。522は圭頭鏃Ⅱd類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するが，状態が悪い。



第 311 図　４号土坑墓出土鉄器

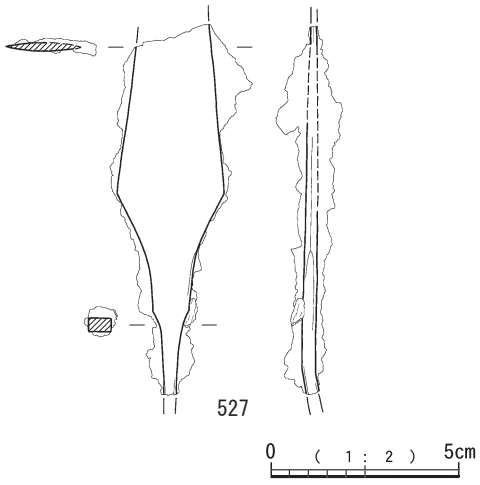
523・524は鉄鏃片である。523は頸部の一部から茎部である。断面形は頸部・茎部が長方形を呈する。茎部に糸巻きを施している。矢柄が残存するが，状態が悪い。顕微鏡による観察から，矢柄の一部に布の痕跡が確認されている。524は上下が欠損した茎部片である。断面形は方形を呈する。矢柄が残存しておりやや状態が悪いものの，口巻きの単位は一部で明瞭にみられる。

131号地下式横穴墓（第310図）

鉄器は525の鉄剣１点が出土した。切先に向かってわずかに細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部は深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔が確認できる。全体的に有機質が付着した痕跡がみられるが，状態が悪く材質は不明である。顕微鏡での観察から，一部で平織布の付着が確認されている。また，異なる箇所では錆化した葉の付着がみられる。これらのことから，有機質は布か葉が由来のものであると考えられる。

４号土坑墓（第311図）

鉄器は526の鉄刀１点が出土した。刃部はふくら切先であり，刃部の断面は平造りを呈する。鞘木が一部良好に残存する。鞘木の合わせ目の観察から，二枚合わせ式であることが確認できる。樹皮による鞘巻きが残存しており，鞘口にむかって左巻きに施している。関部は片関であり，深さ約５mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かってやや幅が狭くなる。茎断面は台形を呈する。茎部の下端が錆化による膨張が生じているが，原形は保っている。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔が確認できる。柄木の木質が残存しており，状態は悪いものの関部に柄の端部が確認できる。顕微鏡での観察から，柄木の一部に布の痕跡が確認されているが，状態が悪く詳細は不明である。



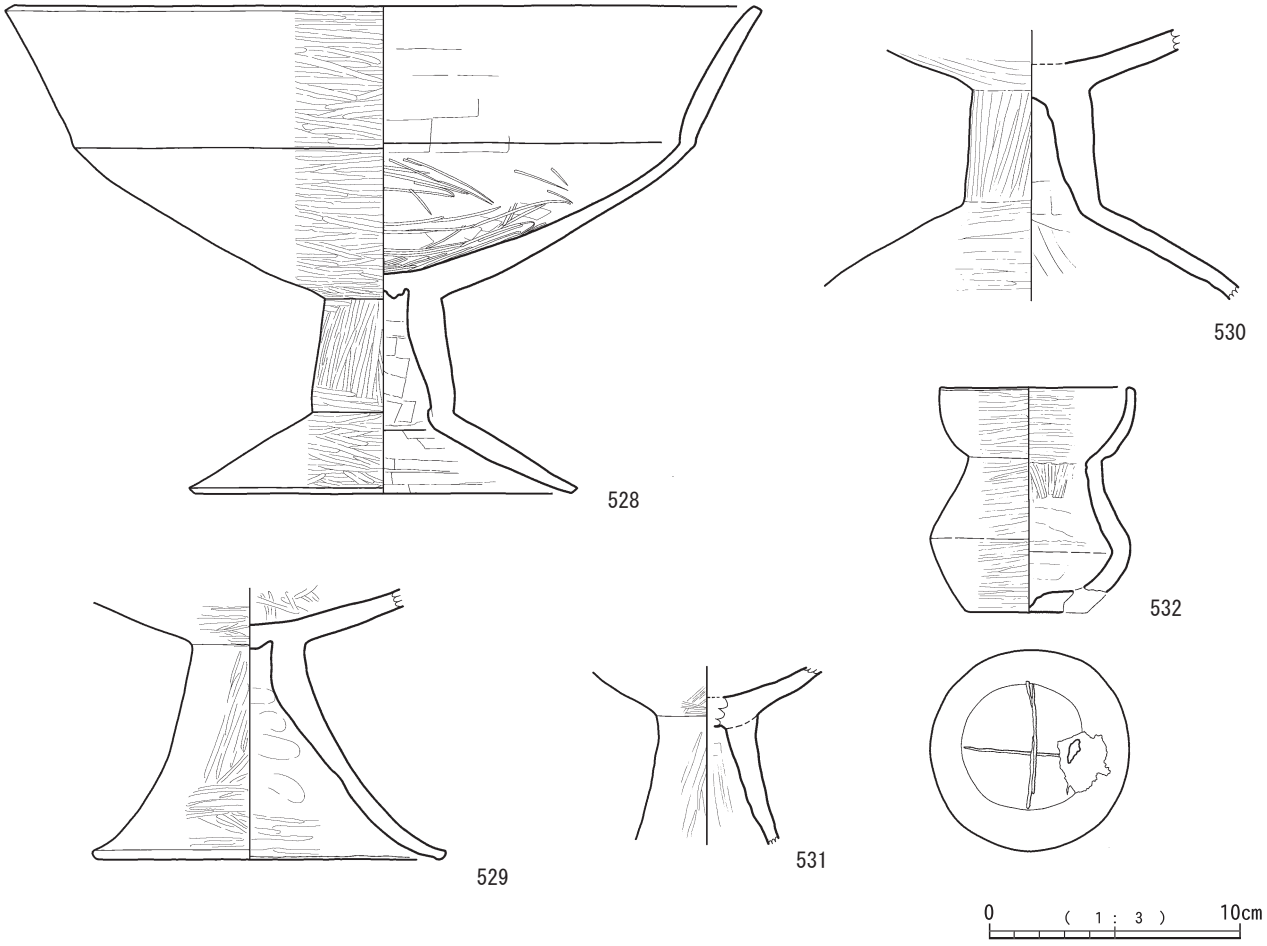
第 312 図　エリア 12 遺構外出土鉄器

エリア12遺構外出土鉄器（第312図）

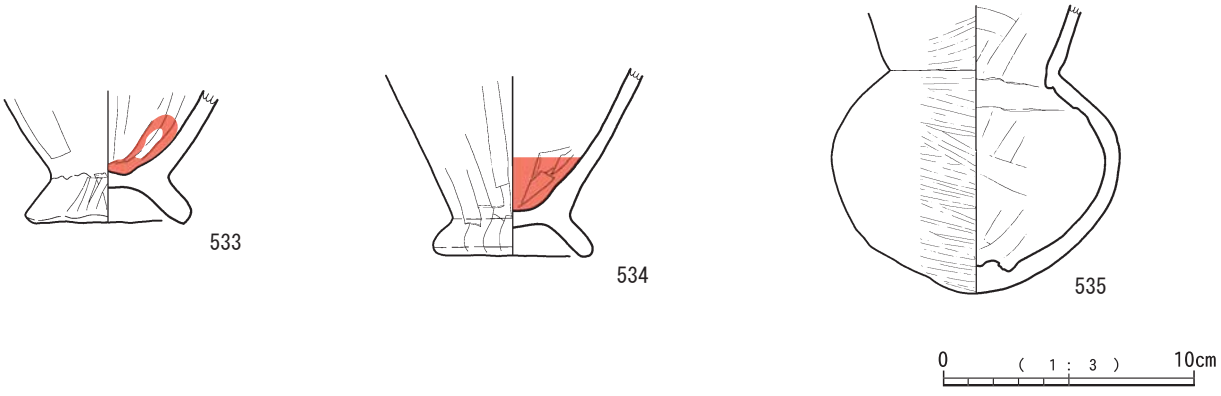
H-41から，527の大型鉄鏃が出土した。刃部の上部と茎部の一部が欠損する。錆化が進行しており，茎部が反っている。断面形は刃部が両丸造り，頸部・茎部が長方形を呈する。刃部の下部に角を有するが，刃部の終わりはさらに下部にあり，明瞭な刃部関をもたない。頸部関は斜関である。頸部にわずかに有機質が付着するが，状態が悪く，鉄鏃に伴うものかは不明である。

エリア12出土土器（第313図・第314図）

528 ～ 531は130号地下式横穴墓の周辺から出土した高坏である。528は高坏B類である。口径30cm，器高19.3cmを測る大型のもので，口縁部はやや外反し，口唇部は平坦を呈する。坏部屈曲の稜線が中位に入り，脚部は裾部分で屈曲して撥状に開く。外面は丁寧なミガキ調整が全体になされ，坏部内面の一部にも施されている。脚部内面は工具によるナデ調整である。529はスカート



第313図　130号地下式横穴墓周辺出土土器



第314図　４号土坑墓周辺出土土器

状に開く脚部である。外面と坏部内面にミガキがなされる。530は撥状に開く脚部である。外面はミガキ，内面は工具によるナデ調整である。531も脚部で，外面はミガキ，内面は工具によるナデ調整である。

532は坩F類である。口径7.7cmで，口縁部は内湾する。胴部は肩部が反るように張り，底部は平底を呈する。外面と口縁部内面にはミガキ，内面は工具によるナデや指ナデがなされる。底面には「+」状の沈線が施される。

533 ～ 535は 4 号土坑墓周辺から出土した。533・534は，鉢A類の底部である。内外面ともに工具によるナデ調整で，底部内面には赤色顔料が付着する。

535は，坩である。胴部最大径が11.4cmで，尖り底を呈するものである。外面は密なミガキ，内面はヘラ状工具によるナデ調整である。底部外面には煤が付着する。

エリア12-1（第315図）

536・537は壺である。536は壺 A 類である。胴部は二重突帯を有する。内外面ナデ調整である。537は，壺E類である。口径17.4cmの口縁部で，屈曲部から外反して伸び，口唇部は丸みを帯びる。屈曲部には稜線が入る。頸部には一条の刻目突帯を有す。外面は縦方向，内面は横方向のミガキ調整である。

538は坩である。体部の中位あたりに最大径を持ち，内外面に弱い稜線が入る。外面はミガキで，内面は接合痕が明瞭に認められる。底部は平底を呈する。

エリア12-2（第316図～第318図）

539～543は壺である。539は壺F類である。口径22.2cm，胴部最大径50.6cm，器高62.6cmを測る球形胴の壺である。二重口縁壺で，口縁は屈曲が強く，屈曲部から端部にかけて強く外反する。外面屈曲部に細い刻目突帯が，胴部には幅広突帯を有する。幅広突帯には斜格子状の刻みを施し，刻みには木目痕が認められる。底部は突レンズ状で歪みが顕著である。内外面ともに工具によるナデ調整である。540は壺B類で，口径21.2cmの直口縁壺である。口縁部は外反しながら先細りに伸びる。頸部と胴部には突帯を有するが，刻みを入れた後，頸部には 1 本，胴部には 2 本の沈線が入る。内外面ともに，工具によるナデや指頭圧痕が認められる。541は，頸部に斜格子状の刻目突帯を一条有する。刻み目には布目痕が認められる。542は，胴部に幅広突帯を有し，斜格子状の刻みが施される。外面はミガキ，内面は工具によるナデ調整である。543は，歪みの顕著な平底の底部である。外面は工具によるナデ調整である。

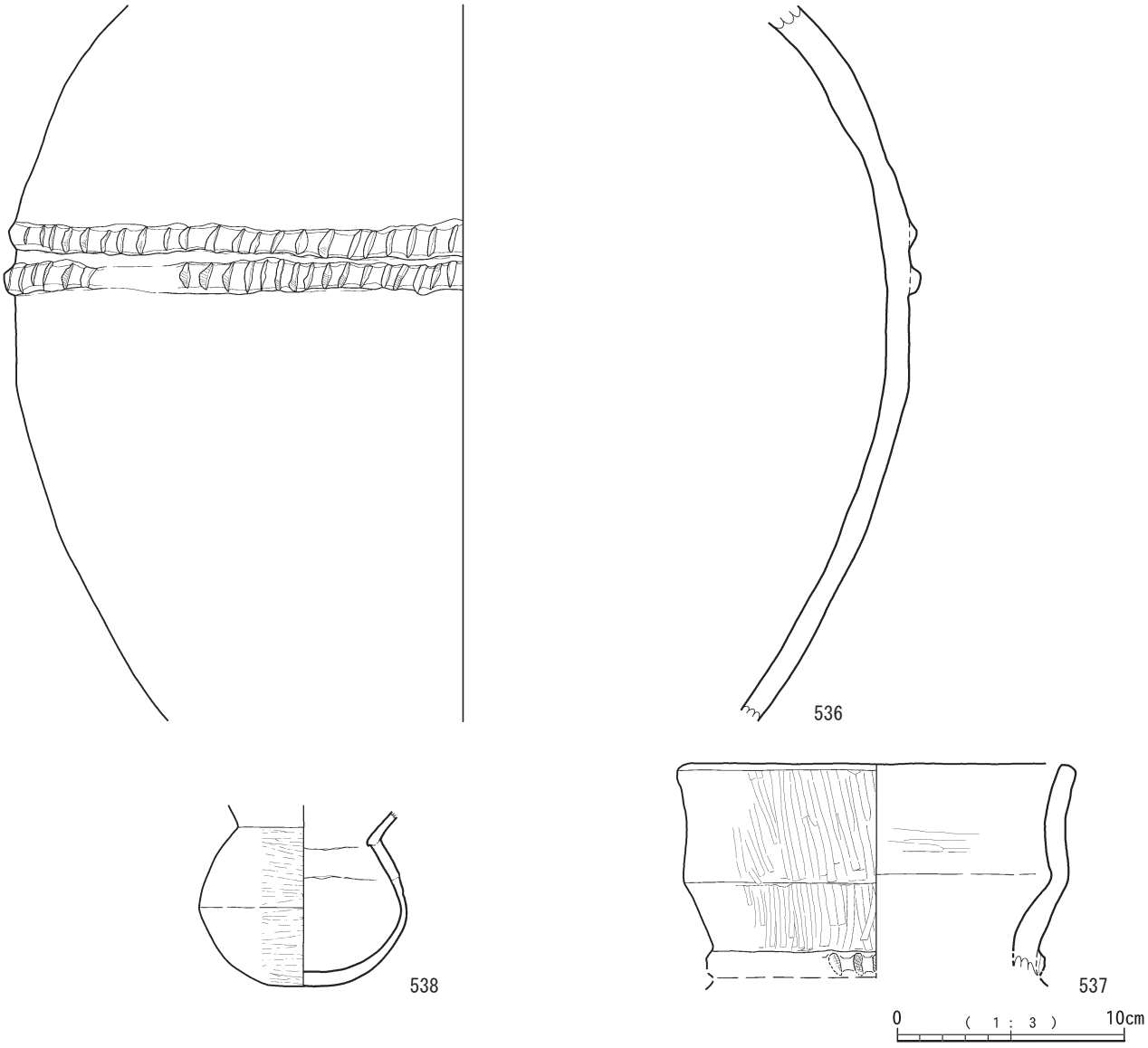
544・545は高坏である。544は坏部である。口径27.9cmで，内湾しながら伸びる。内外面ともに丁寧なミガキである。545は，スカート状に開く脚部である。外面はミガキ，内面はナデ調整である。

エリア12-3このエリアの土器は，エリア14の出土遺物として取り扱う。

エリア12-4（第319図～第325図）

546 ～ 558は壺である。546は壺A類である。胴部最大径58cm，器高は少なくとも83cmを測る大型のものである。頸部に 1 条，胴部に 2 条の突帯を有し，それぞれ鋸歯状の刻みが施されている。底部は平底である。内外面ともに工具によるナデ調整である。547 ～ 549は壺E類である。547は口径19.4cmの口縁部である。緩やかに屈曲し，屈曲部から上は外反して伸び，口唇部は丸みを帯びる。屈曲部外面には浅い刻目が施される。頸部に一条の刻目突帯，胴部には幅広突帯を有し，どちらも斜格子状の刻みが施されている。外面はミガキ，内面はナデ調整である。548は壺の底部で，547と同一個体の可能性が高い。尖り気味の平坦面をもつ。外面は工具によるナデ後ミガキを，内面はナデ調整がされている。549は，口径17.4cmの二重口縁壺の口縁部である。口縁部屈曲は緩やかで，外面には浅い刻みが施される。外面はミガキ，内面はナデ調整である。外面端部付近には煤が付着する。550は，刻目突帯を有する頸部である。内外面ともに工具によるナデ調整である。551は，壺E類である。口径13.4cmで，口縁部分が短く，口唇部は平坦を呈する。頸部には刻目突帯を有する。外面はミガキ，内面は工具や指によるナデ調整である。底部先端は欠損している。552は壺E類である。口縁屈曲部と頸部には稜線が認められる。外面はミガキがなされているが，内面は風化により剥離が目立つ。553・554は壺C類である。どちらも口径13.2cmで，やや内湾しながら外傾して開く単口縁をもち，口唇部は丸みを帯びる。外面はナデ調整で，内面は工具によるナデや指頭圧痕が認められる。555は壺A類である。刻み目には布目痕が認められる。胴部には 2 条の刻目突帯を有する。内外面ともにナデ調整である。556は底部に近い胴部である。内外面ともに工具によるナデ調整である。557・558は壺の底部である。557は尖り気味の丸底で，内外面ともに工具によるナデ調整である。558は，尖り気味の平底で，外面はミガキ，内面は指ナデ痕が認められる。

559～569は高坏である。559は高坏A類で，大型のものである。口径は30.3cmで，口縁部は端部で外反し，口唇部は平坦を呈する。深めの坏部をもち，脚柱部はエンタシス状を呈する。裾は撥状に開くものと思われる。内外面ともに工具によるナデ調整であるが，脚部内面はナデが強い。560・561は高坏C類である。560は口径30.4cmで，口縁部は外反して先細りに伸び，口唇部は丸みを帯びる。坏部は，外面中位に稜線が入り，内面には黒斑が広範囲に濃く吸着している。坏部と脚部は，円錐状の粘土塊を充填して接合されており，脚部はスカート状に開く。坏部は内外面ともにミガキを，脚部は外面と内面の裾端部分のみミガキ調整されている。561は口径31cmで，560と同様大型の高坏である。坏部は560



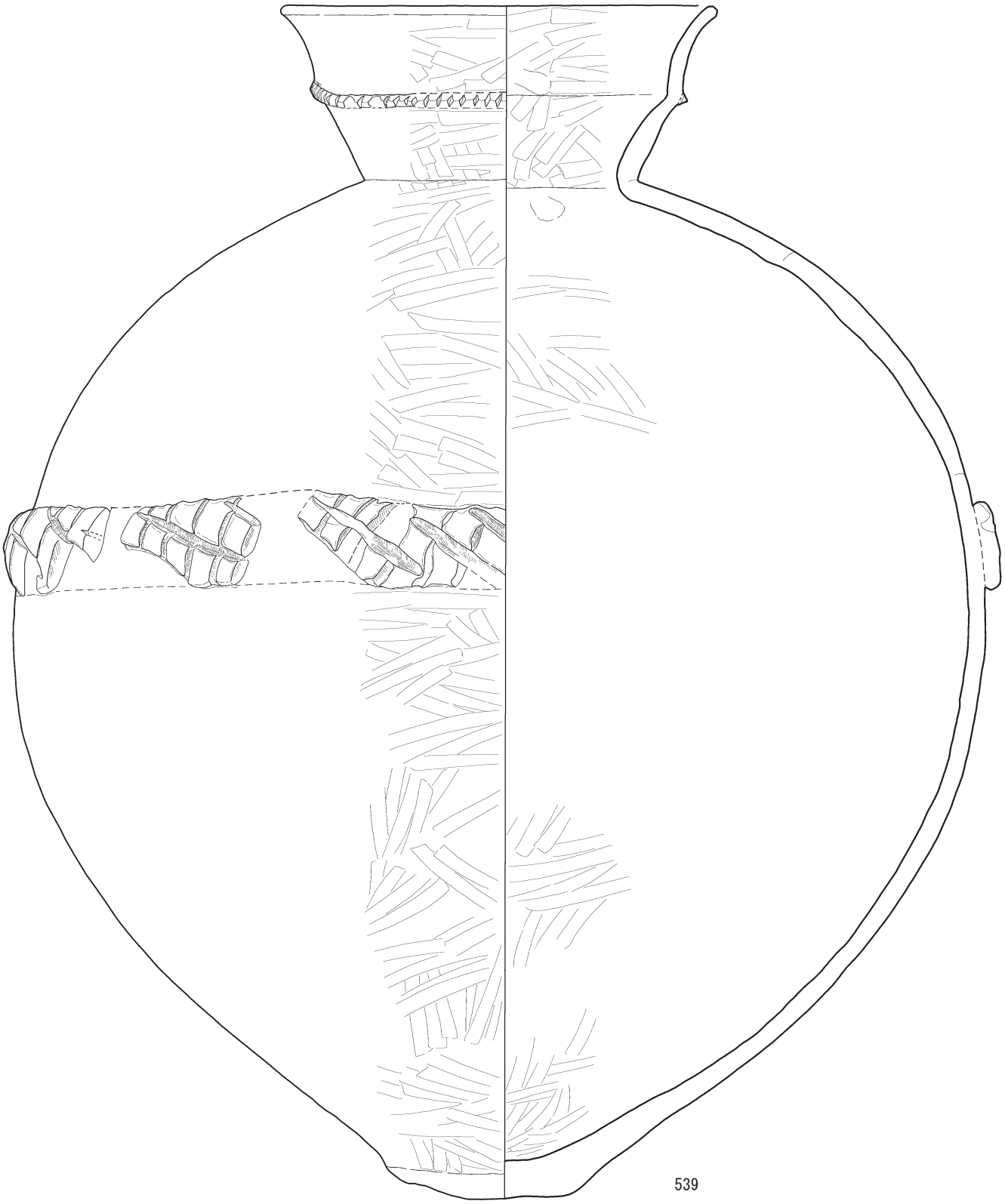
第315図　エリア12-1出土土器

より緩やかに屈曲し，外面には稜線が入る。外面にはミガキ，坏部内面には工具によるナデと指頭圧痕が認められる。脚部内面にも指頭圧痕が明瞭に認められる。また560と同様に坏部内面には広範囲に黒斑が吸着する。562は口径22cmで，口縁部は外傾しながら開き，口唇部は平坦を呈する。坏部内面には弱い稜線が入る。屈曲部外面には，一部に粘土をナデつけきれていない部分が認められる。563は高坏D類である。口径23.3cm，器高16.1cmを測る。口縁部は，屈曲部からほぼ直線的に開き，口唇部は平坦を呈する。坏部内面には沈線が数本引かれる。脚部はスカート状に湾曲する。外面は丁寧なミガキで，坏部内面にもミガキ調整がされている。脚部内面には指圧頭痕が認められる。564は口縁部が欠損して不明だが，坏部の屈曲部分は緩く丸みを帯びている。脚部はスカート状に湾曲し，裾部でさらに広がる。外面と坏部内面はミガキを，内面は工具によるナデ調整である。565～569は，坏の脚部～底部である。いずれも外面はミガキ調整が丁寧にされている。

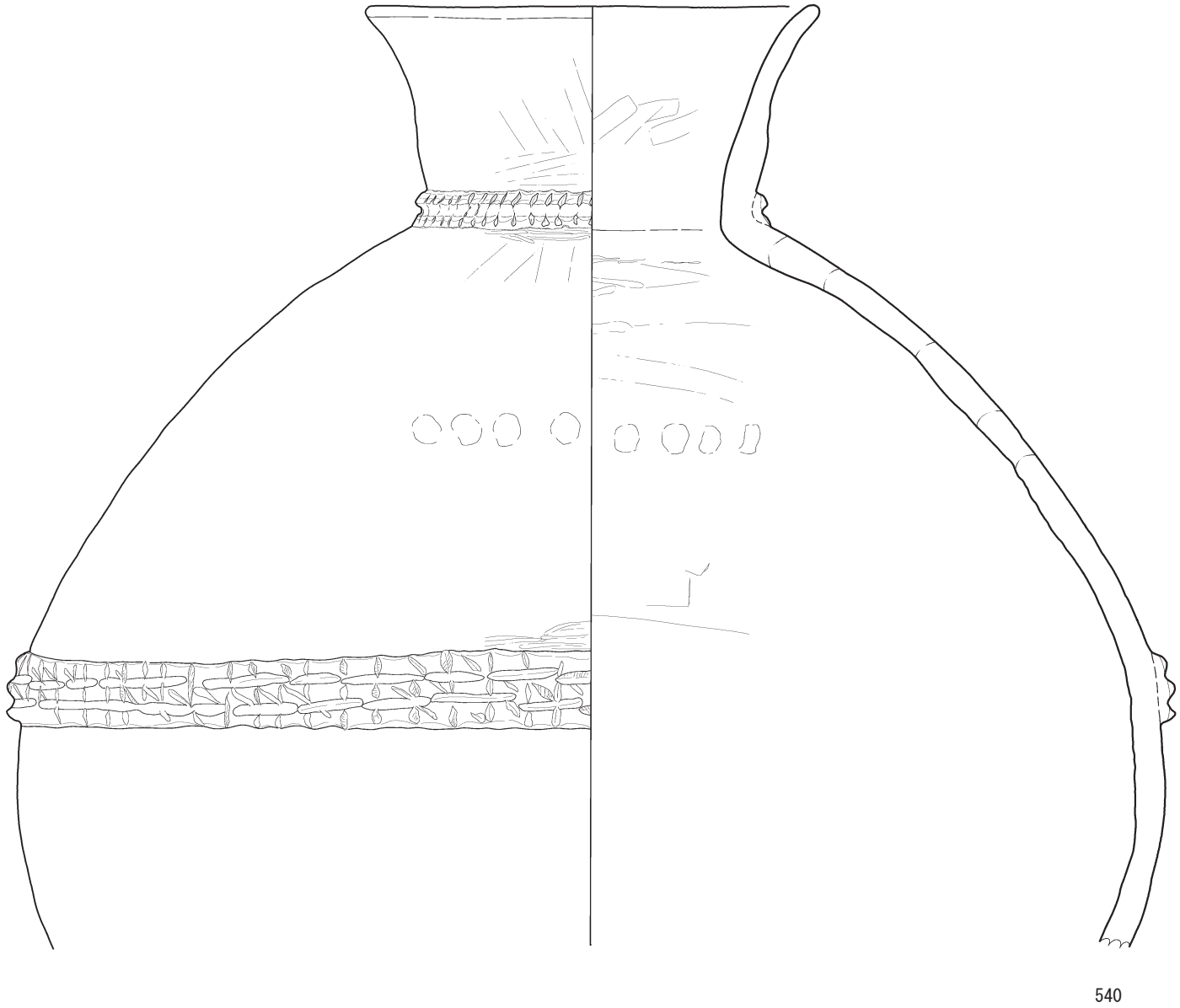
570・571は鉢B類で，大型で重厚なものである。口径45cmで，胴部には幅広突帯を有し，刻み目が施される。内外面ともに工具によるナデ調整である。

572～585は坩である。572は，口径16.6cmでやや内湾しながら伸びる口縁部で，赤色顔料が塗布されている。573は，胴部最大径が17cmである。外面には，一部に赤色顔料が塗布されている。底部に穿孔があり，底面には植物の茎と思われる規則性のない直線の圧痕が認められる。

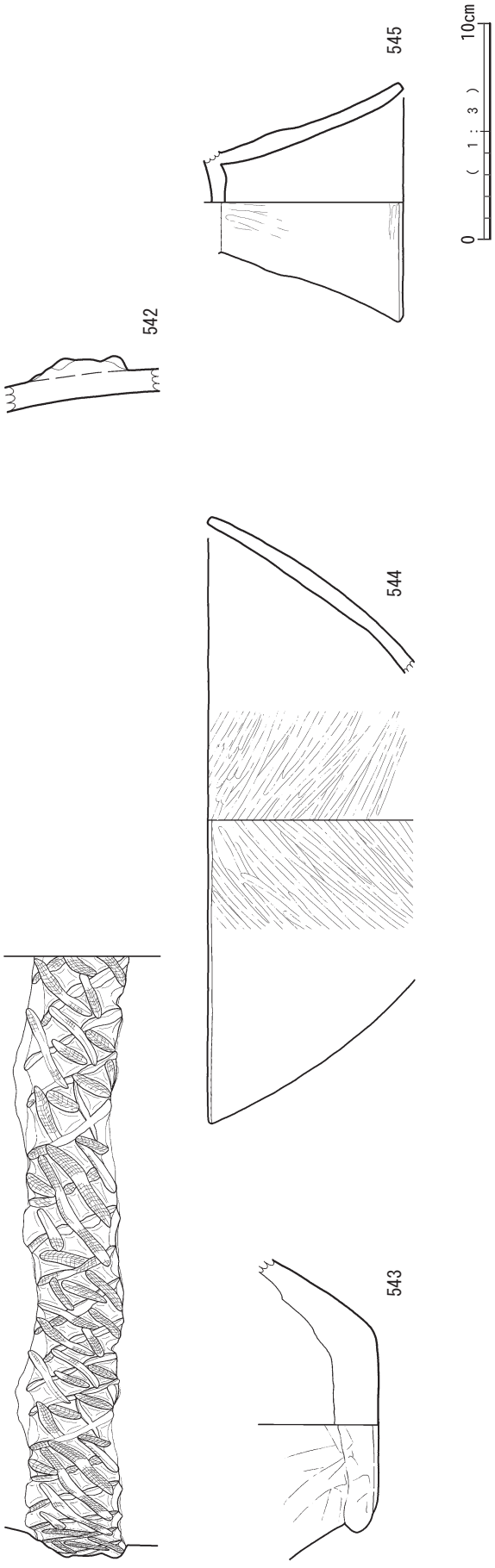
574は坩C類である。口径13.4cmで，口縁部は直線的に伸びる。胴部は下膨らみを呈し，底部は平坦面をもつ。外面及び口縁部内面にはミガキを，胴部内面には工具によるナデ調整がされている。575は坩B類である。口径9.7cmで，口縁部は内湾しながら端部にかけて先細りに伸び，口唇部は丸みを帯びる。最大径の位置は中位よりやや低く，下膨らみを呈する。底部は平底である。外



第316図　エリア12-2出土土器(1)



第 317 図　エリア 12-2 出土土器(2)



第 318 図　エリア 12-2 出土土器(3)

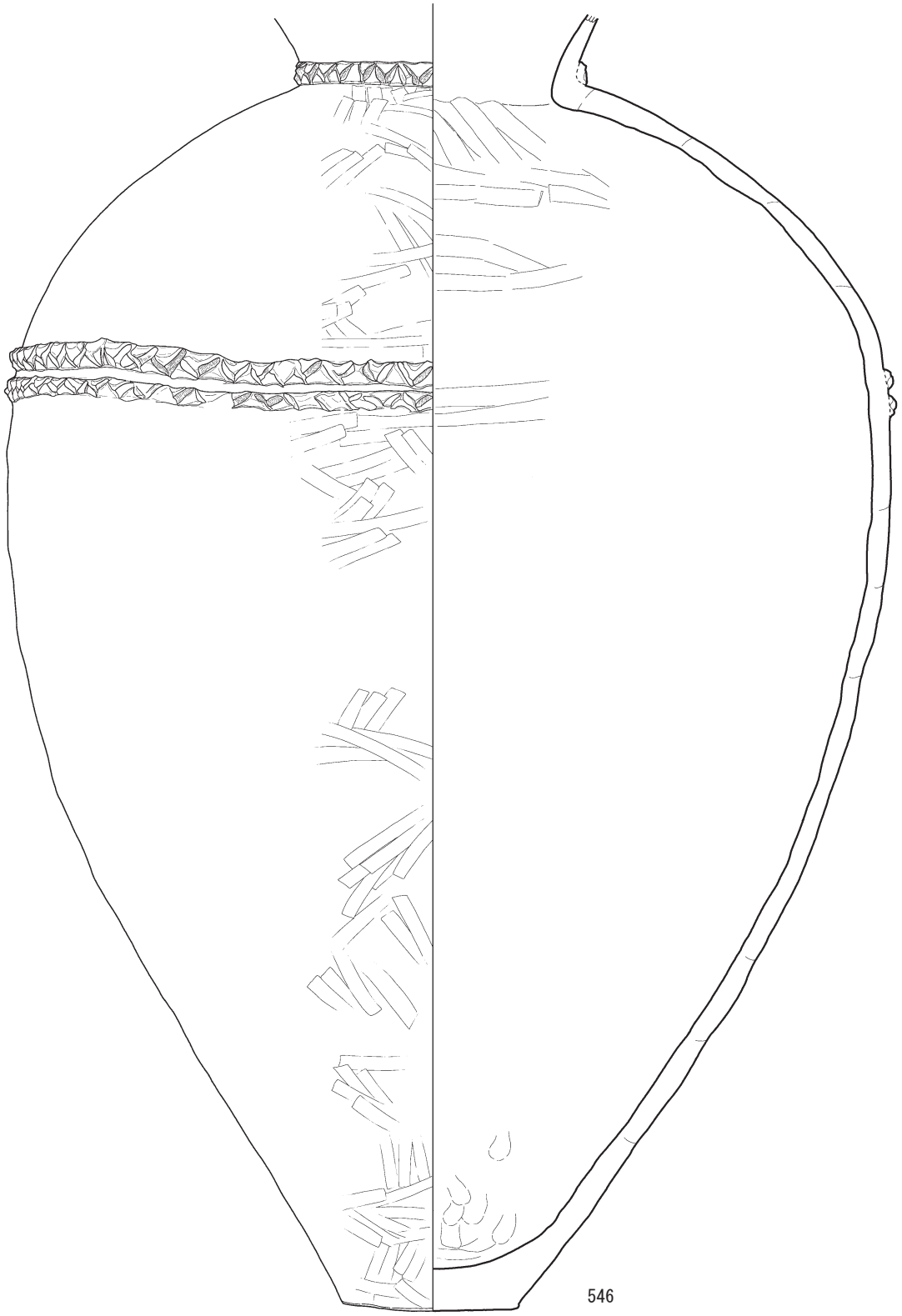
面は丁寧なミガキ，内面は工具によるナデ調整である。576は胴部最大径13cmで，外面はミガキ，内面は工具や指によるナデ調整が多方向になされている。胴部は丸みを帯びて，底部は平坦面をもつ。577は頸部で，外面と口縁部内面にミガキ調整がされている。578は坩E類である。口径８cmで，やや内湾して伸びる口縁部に，胴部最大径10.6cmの算盤玉状に張る胴部をもつ。外面には明瞭な稜線が入る。底部は平底である。外面は全体にミガキをなし，内面は工具によるナデ調整である。579は坩Ｄ類である。口径・胴部最大径ともに7.8cmで，口縁部は内湾しながら上に伸び，胴部が張る。底部は丸みを帯びる。580は胴部最大径7.7cmで，胴部のほぼ中位付近が緩く算盤玉状に張り，稜線が入る。丸底を呈する。外面には丁寧なミガキであるが，胴部最大径より下部分は風化により確認することが出来ない。内面はナデ調整である。581は胴部最大径８cmの小型のもので，外面は赤色顔料を塗布した後，丁寧なミガキがなされる。底部には穿孔を施す。582は平坦面をもつ底部で，穿孔を施す。583 ～ 585は丸みを帯びた胴部である。582は内面指ナデ調整である。584は底部が丸底を呈する。586は胴部最大径7.4cmで，算盤玉状に張るものである。底部は平底を呈する。内外面ともに工具によるナデ調整である。

587・588は，壺型のミニチュア土器である。

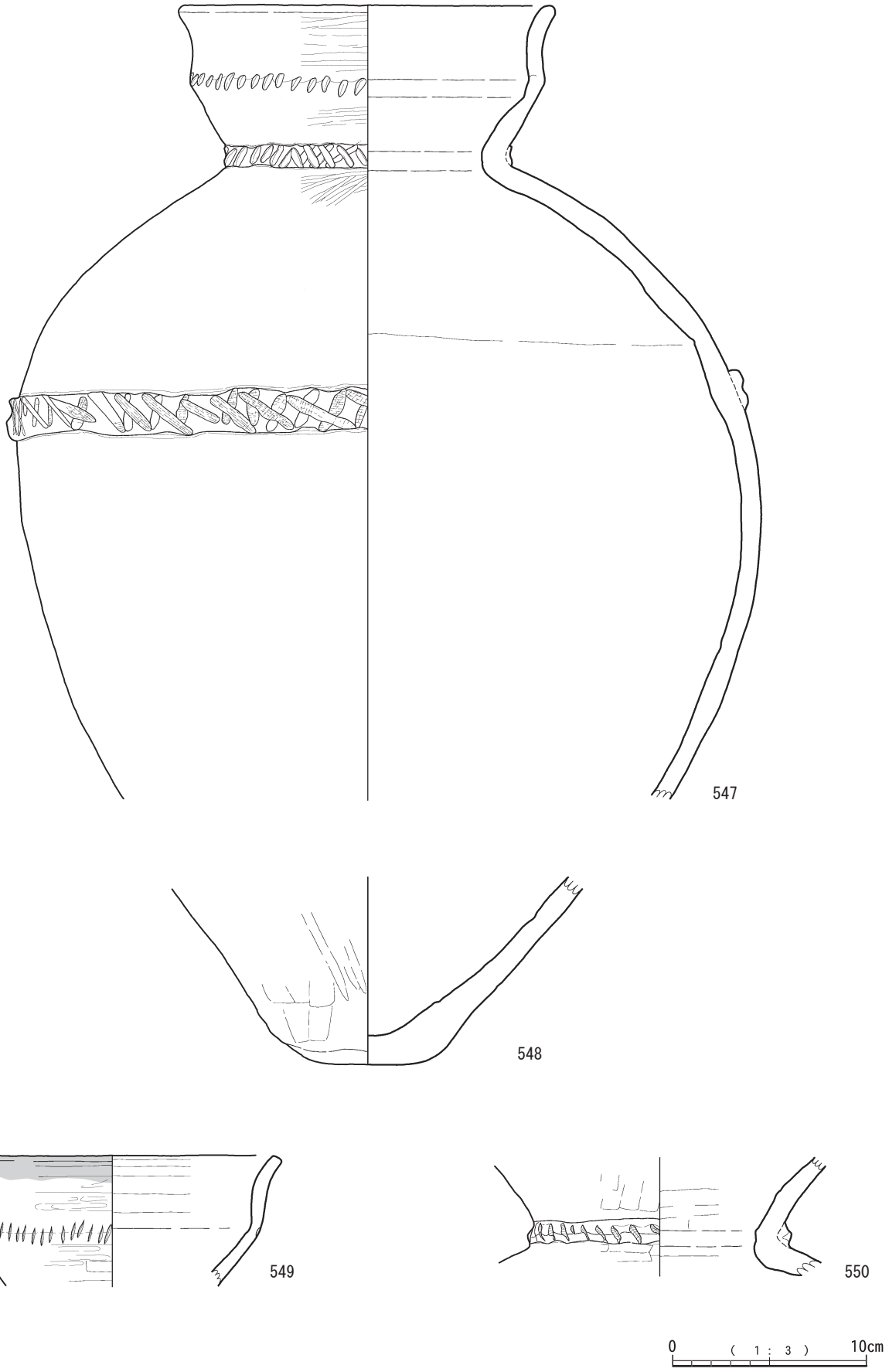
エリア12-5（第326図～第328図）

589～598は壺である。589は壺C類である。口径17.2cmの直口縁で，内湾しながら開き，端部のみ外反する。外面は工具によるナデを，内面は指ナデがなされる。590 ～ 591は壺E類である。590は，口縁部中程に浅い刻みを入れ，頸部に一条の刻目突帯を有する。591は，頸部に刻目突帯を一条有する。外面はミガキで，内面は工具ナデ調整である。口径16.4cmで，口縁部は屈曲部から上部が直立し，口唇部は平坦を呈する。屈曲部は緩やかで外面に浅い刻み目が施されている。頸部には鋸歯状の刻み目を施した突帯を有する。外面は丁寧な横方向のミガキ，内面はヘラ状工具によるナデ調整である。592は，頸部に刻目突帯を有する。内面には指頭圧痕が認められる。593は頸部に突帯を有し，斜格子状の刻みが施される。外面は多方向にミガキ調整を行い，内面は頸部屈曲部あたりに工具によるナデや指頭圧痕が認められる。594は，肩部に幅広突帯を有するものである。594は鋸歯状の刺突文で，布目痕が認められる。内面は工具ナデ調整である。595は羽状の刺突文で，布目痕が認められる。外面はミガキ，内面は工具ナデ調整である。596 ～ 598は底部である。596・597は底部先端が欠損し，内外面ともにナデ調整である。598は平底を呈する。外面は丁寧なミガキ調整である。

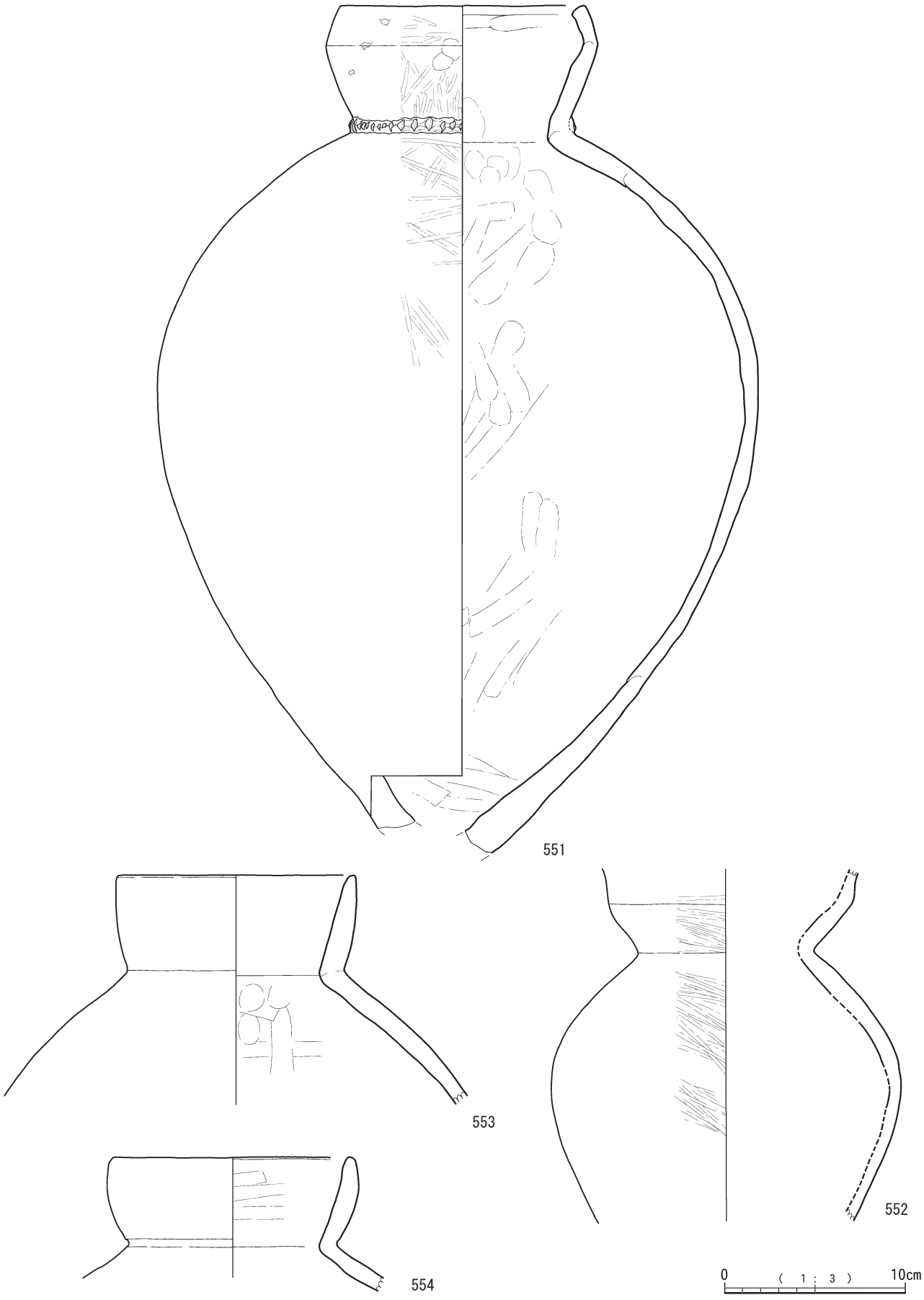
599・600は坩である。599は坩D類である。口径



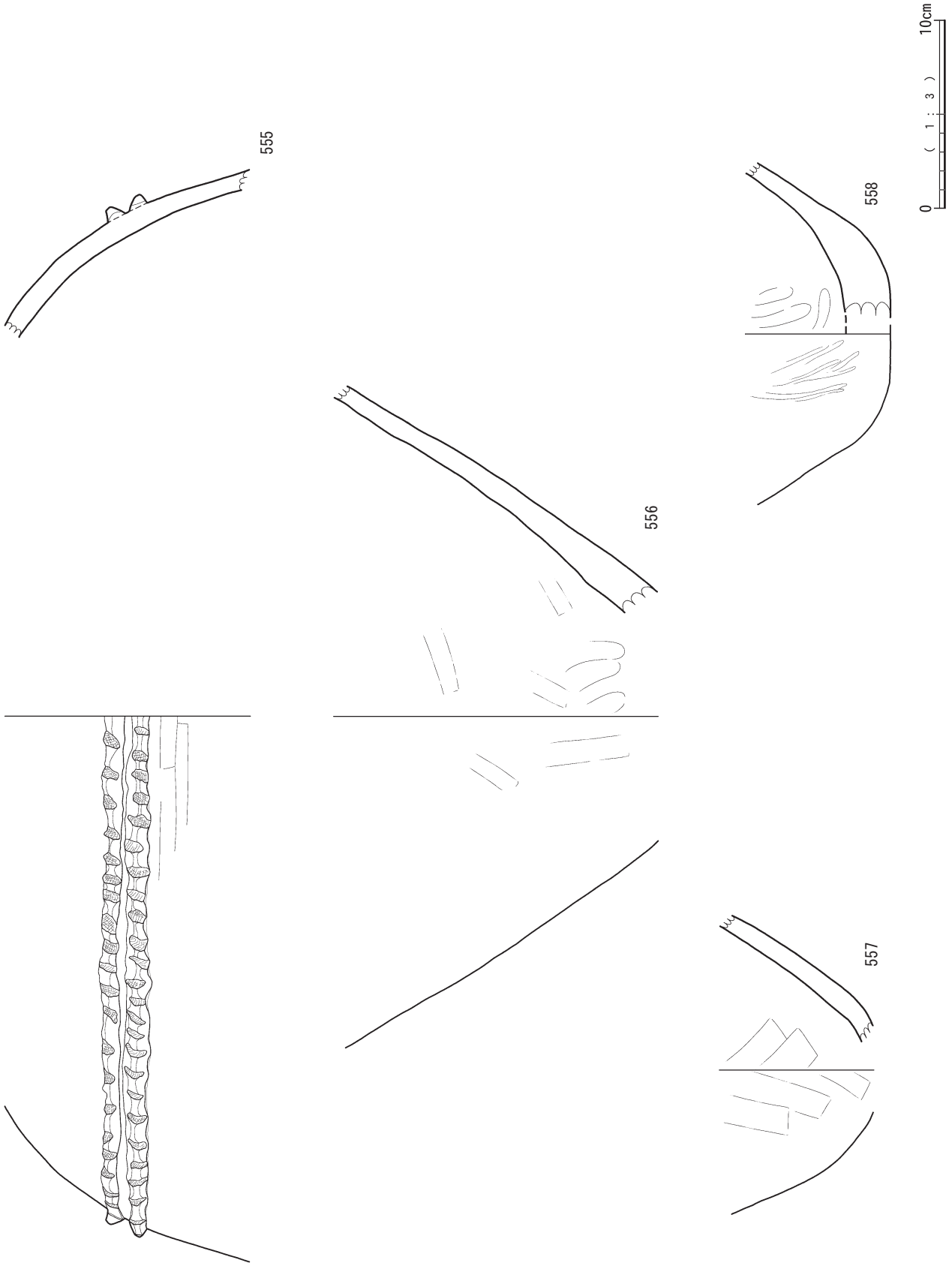
第 319 図　エリア 12-4 出土土器(1)



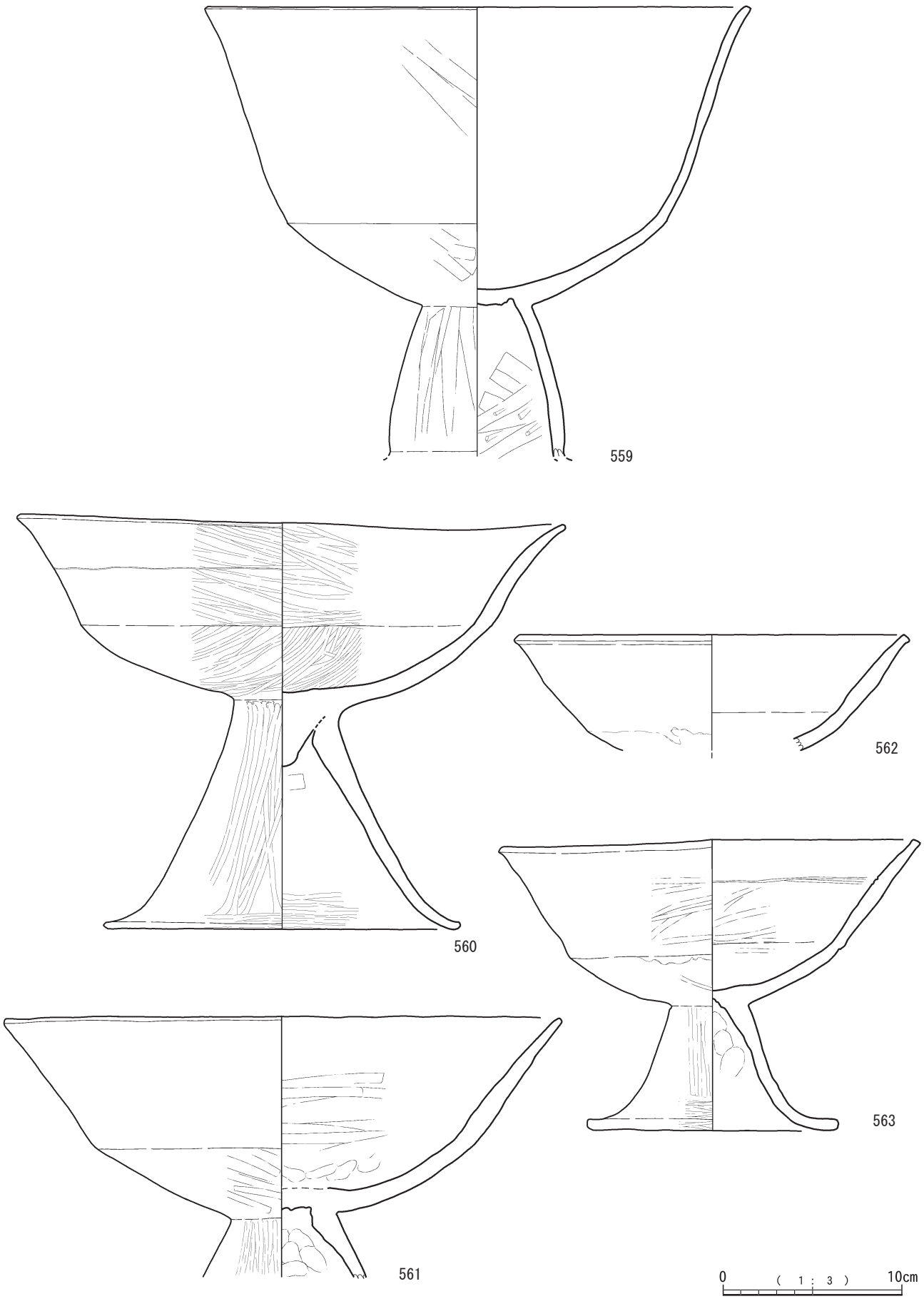
第 320 図　エリア 12-4 出土土器(2)



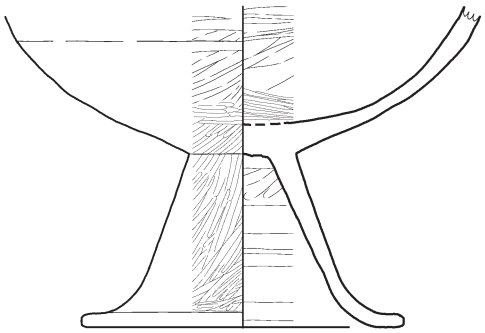
第 321 図　エリア 12-4 出土土器(3)

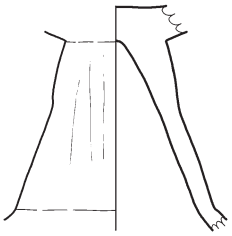


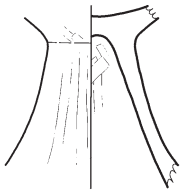
第 322 図　エリア 12-4 出土土器(4)

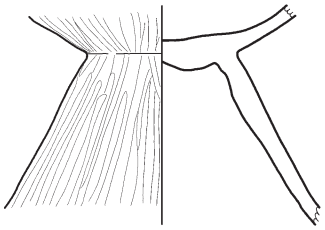


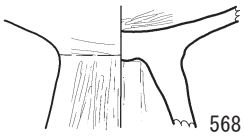
第 323 図　エリア 12-4 出土土器(5)

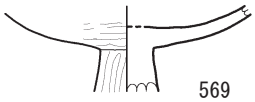

564

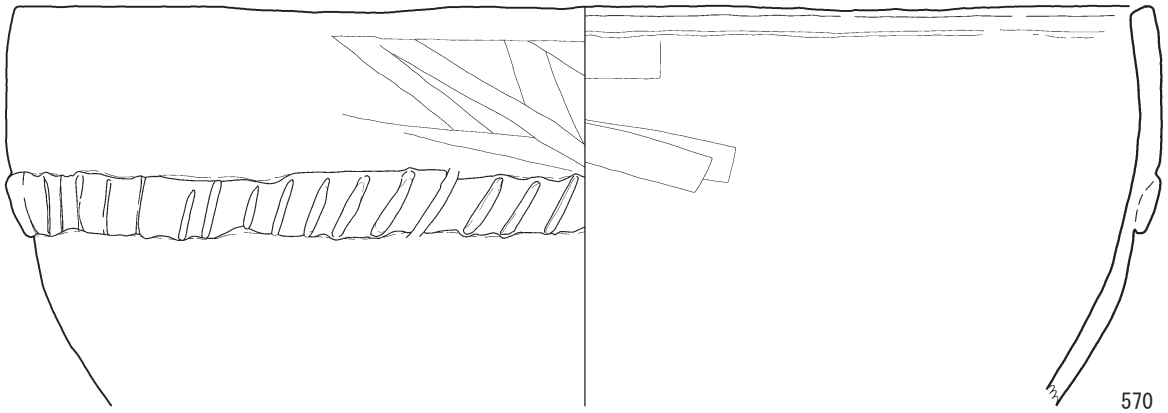

565

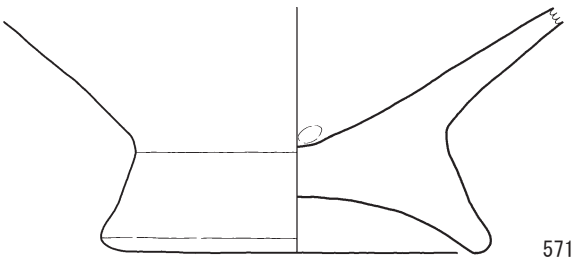

566

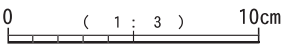

567


568

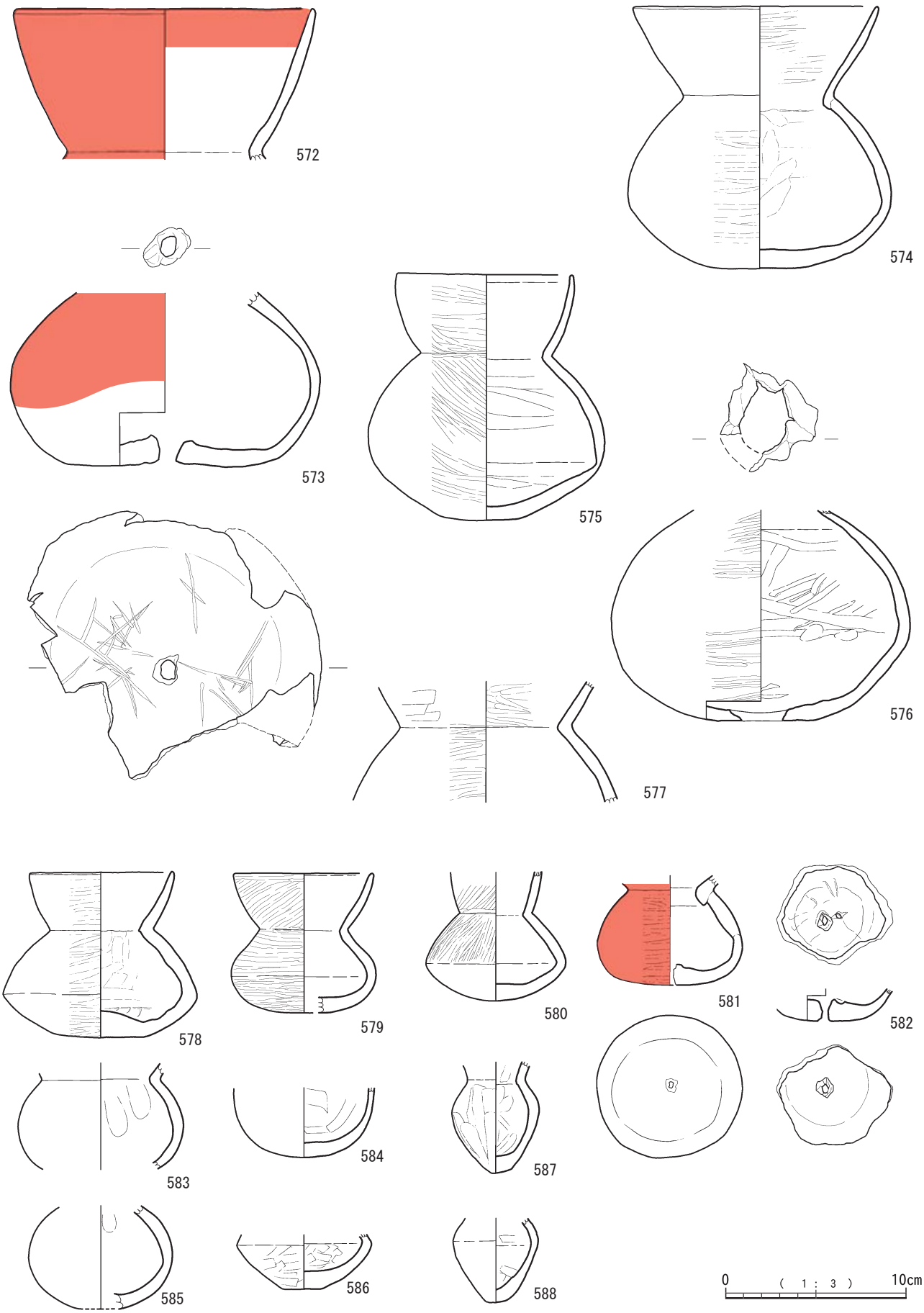

569


570

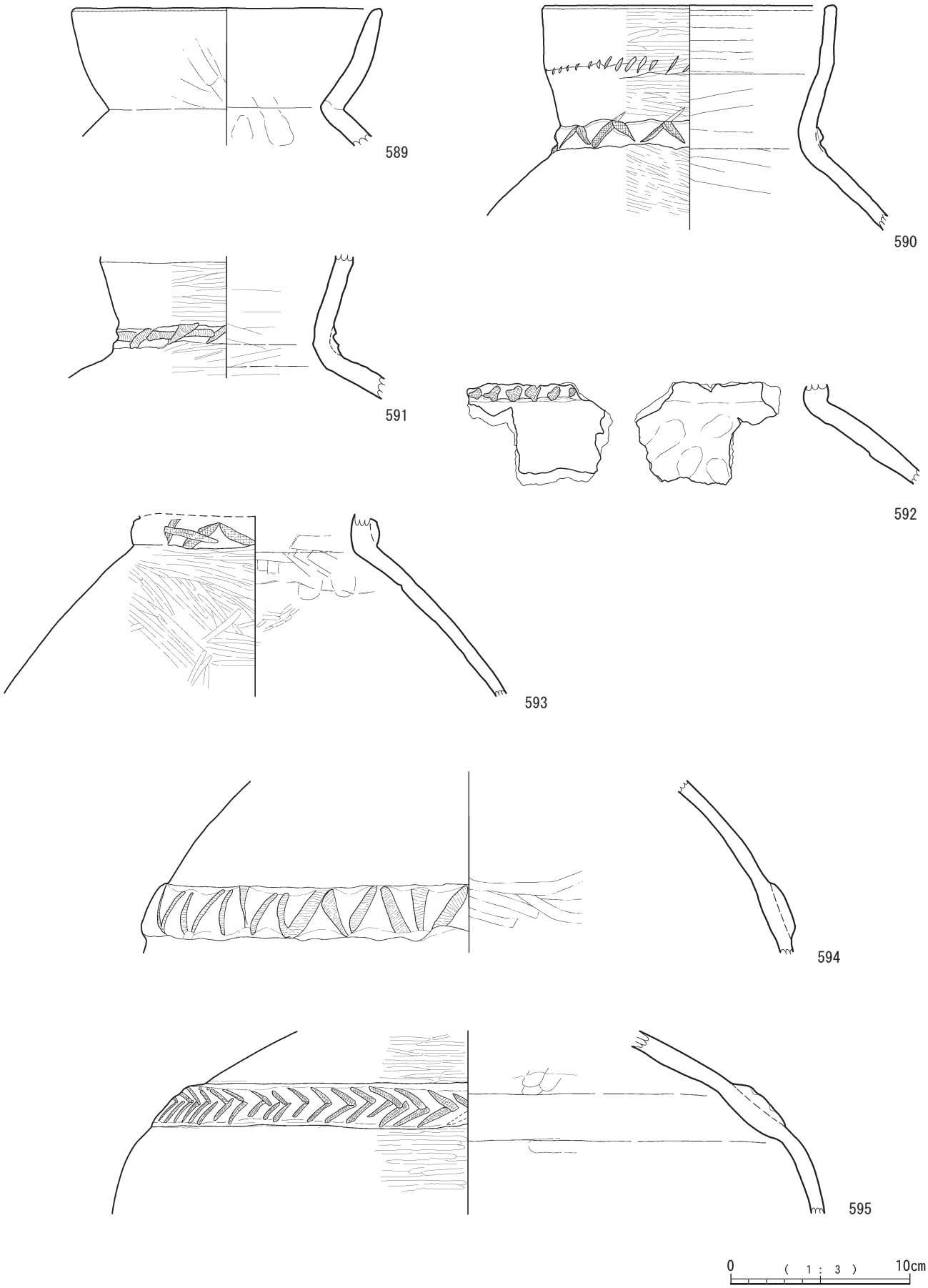

571



第 324 図　エリア 12-4 出土土器(6)



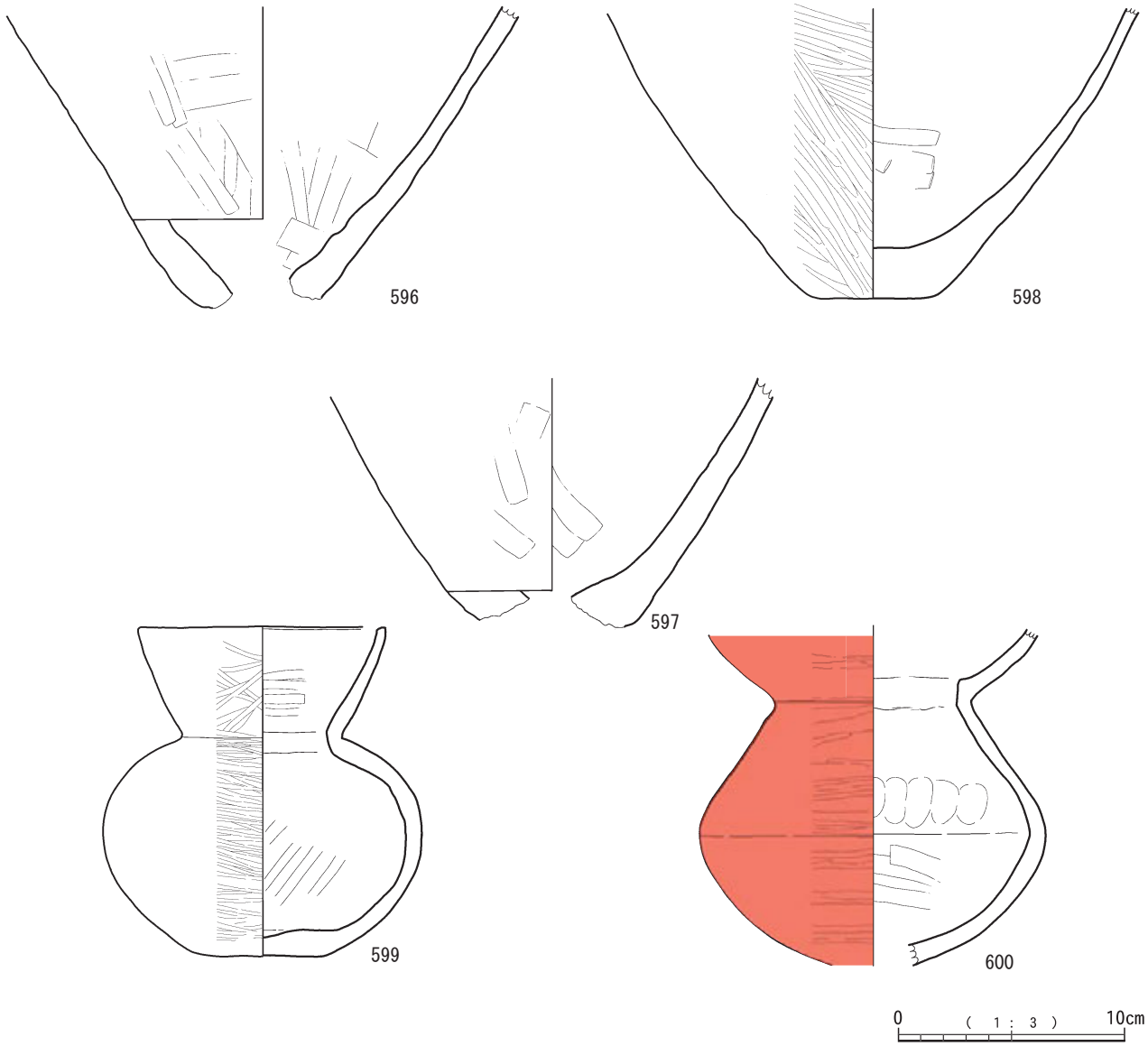
第 325 図　エリア 12-4 出土土器(7)



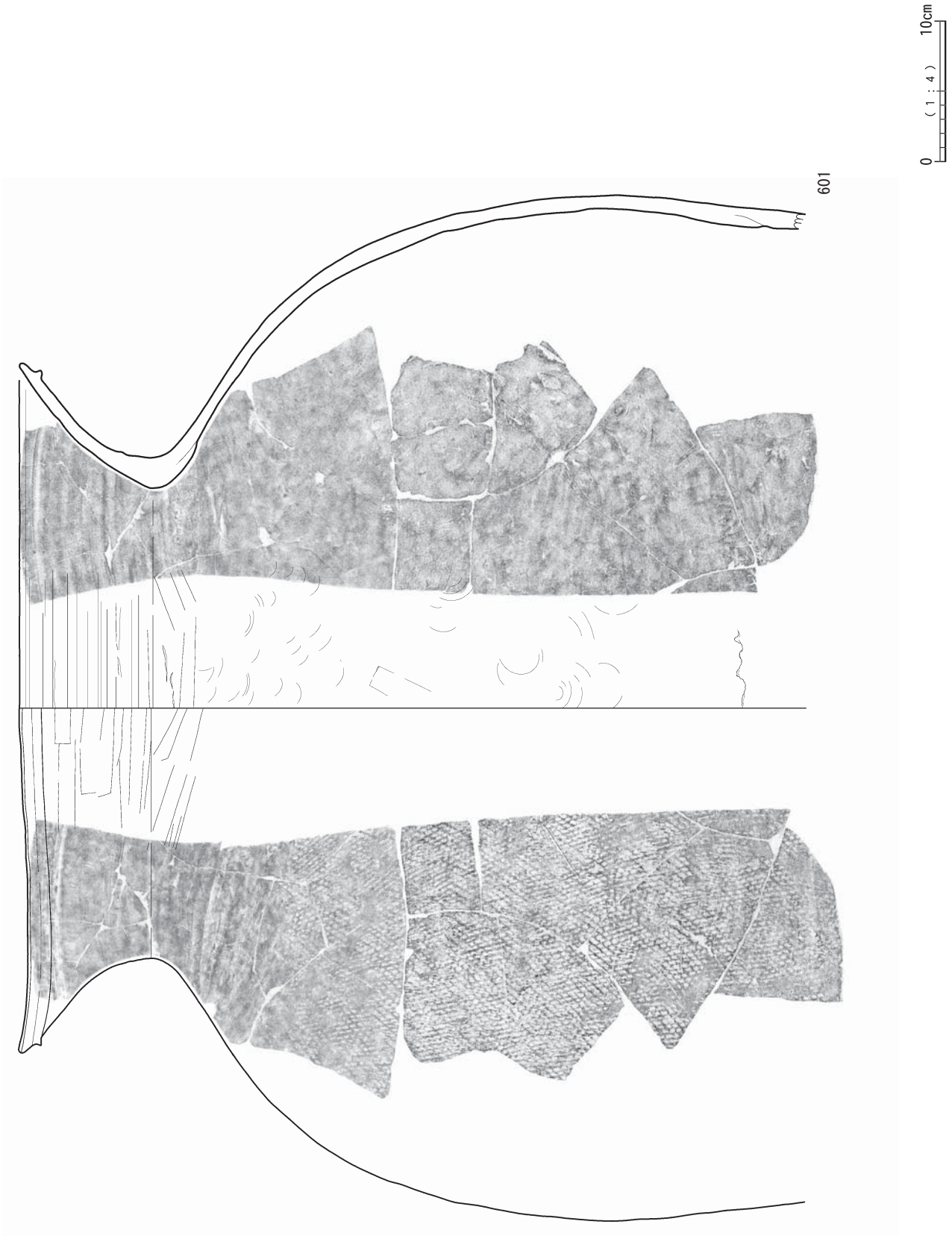
第 326 図　エリア 12-5 出土土器(1)

10.8cmで，口縁部はやや内湾しながら伸び，口唇部は平坦を呈する。肩部が張り，底部は平底を呈する。外面には丁寧なミガキ調整である。600は，底部が欠損しているが，坩B類と思われる。内湾しながら開く口縁部を持ち，胴部最大径は15.2cmで，肩部が反るように張る。外面には赤色顔料が塗布され，ミガキが密である。内面は工具によるナデや指頭圧痕が認められる。

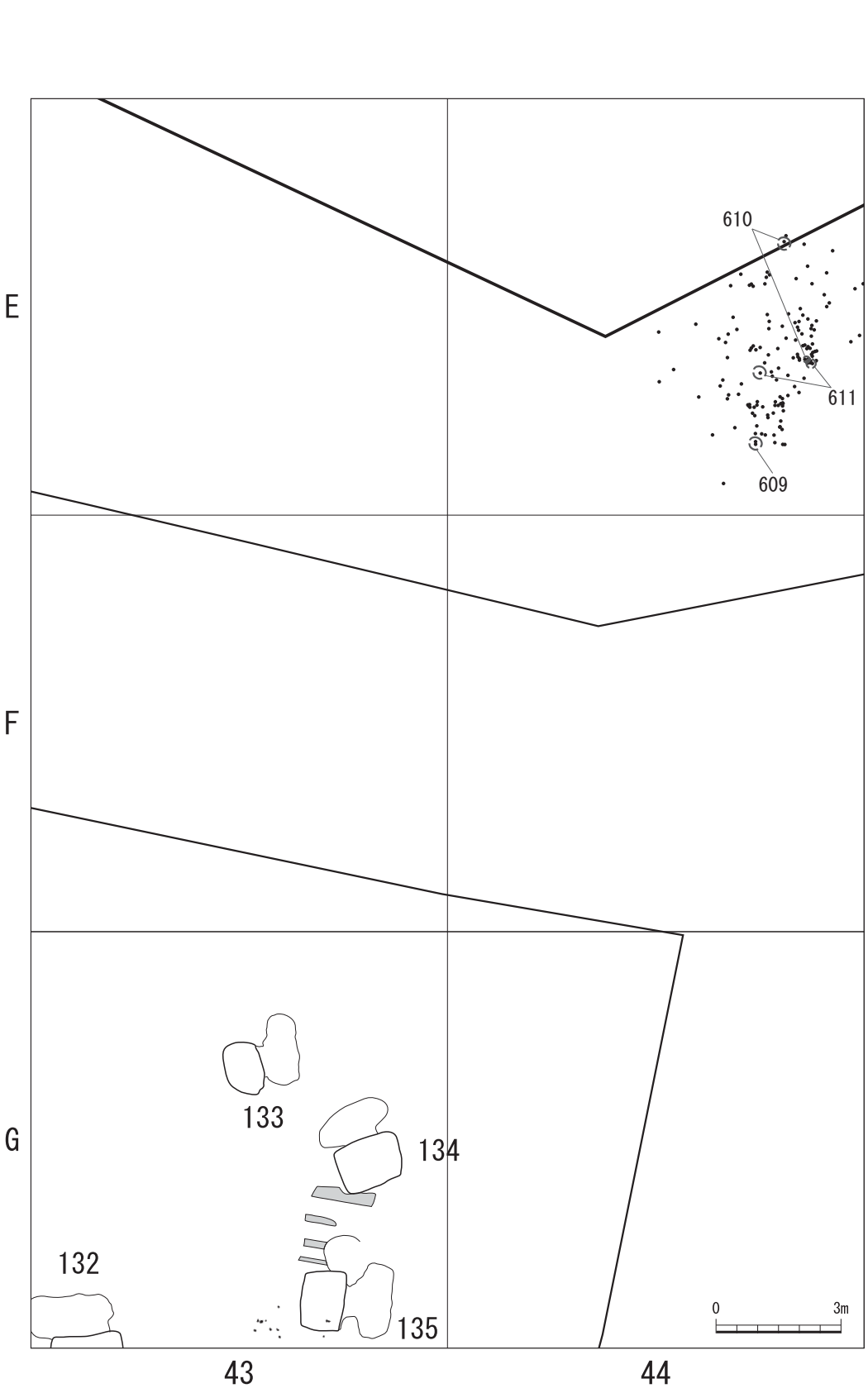
601は須恵器の大型甕である。頸部から口縁部に向けてほぼ45度の角度で伸びる。器壁が胴部で９mm程と厚く，頸部のくびれ付近は特に厚い。断面三角形の突帯を1条有する。外面は，口縁部から頸部はヘラナデ，肩部から胴部にかけてはタタキで，内面は当て具痕を丁寧にナデ消している。胎土に白色粒子を多く含む。愛媛県市場南組窯産で，焼成が甘い。TK216型式段階に該当し，古墳時代中期中葉に位置づけられる可能性が高い。



第 327 図　エリア 12-5 出土土器(2)



第 328 図　エリア 12-5 出土土器(3)



第 329 図　エリア 13　遺構配置図

132号地下式横穴墓

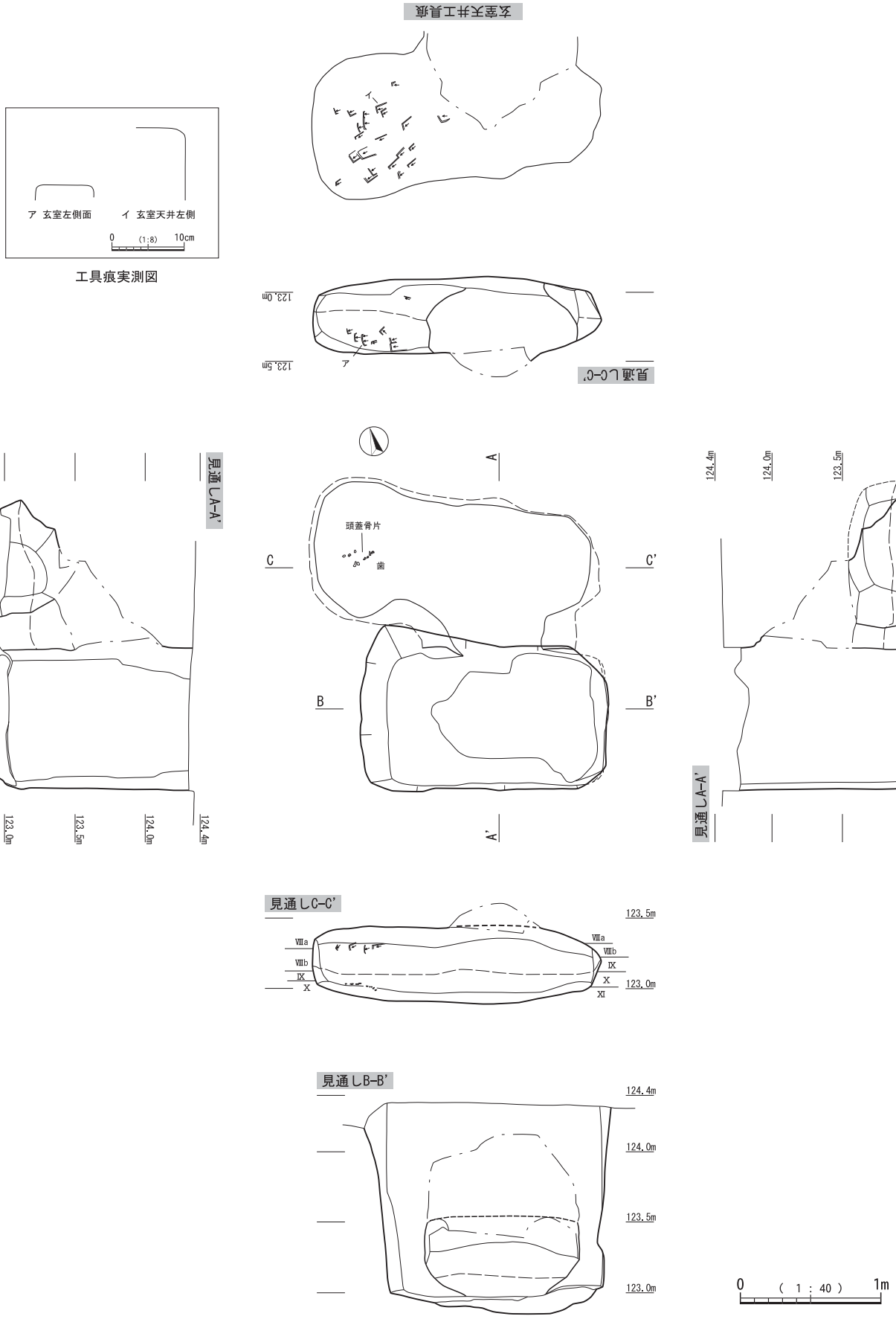
検出区	G・H-43	玄室開口方向	北北東
分　類	B２		

検出状態	土器が集中して出土した付近のⅦ・Ⅷ層が混在する部分で竪坑を検出した。玄室天井は崩落していた。

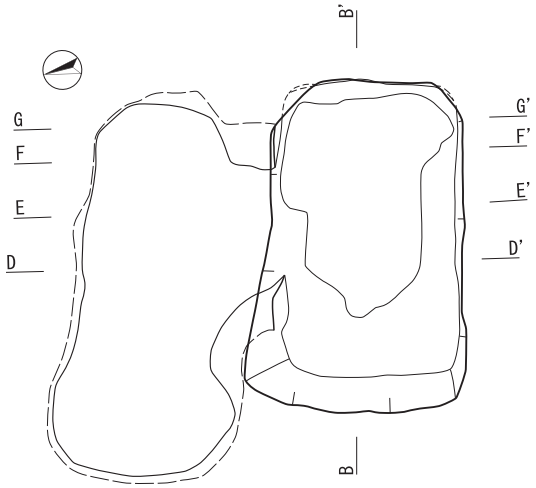
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	102	176	149	108	－	26	84	208	110	－
推　定	－	－	－	－	55	－	－	－	－	55

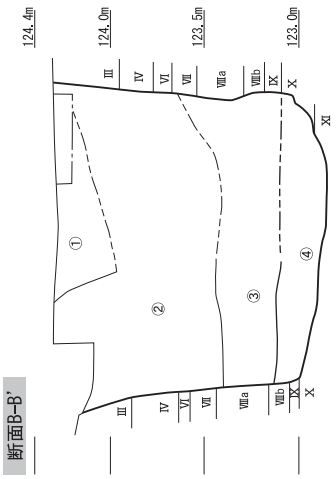
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

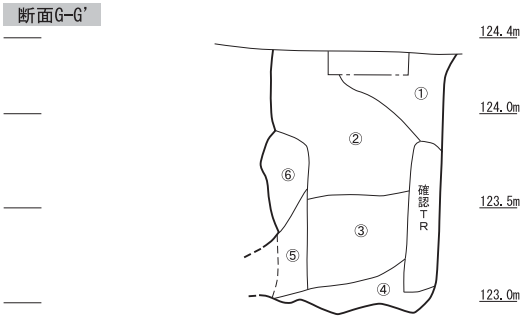
概　要	【竪坑】 断面Ａを観察している際に，埋土の質が異なる部分があり，羨道の可能性を想定して調査を進めた（断面Ｄ～Ｇの確認トレンチ部分）。その後羨道は北側に延びていることが判明した。竪坑の床面は玄室よりもやや低い。 【玄室】 玄室は左側に偏る片袖形で，天井に多くの工具痕が残っていた。左側に頭蓋骨片がみられた。
工具痕	玄室天井及び側面に残っている。 幅は8.3㎝の方形状を呈している。玄室左側天井や側面に多数みられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	頭蓋骨片のみ残存し，出土状態から１体分と考えられる。熟年と推定。
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－

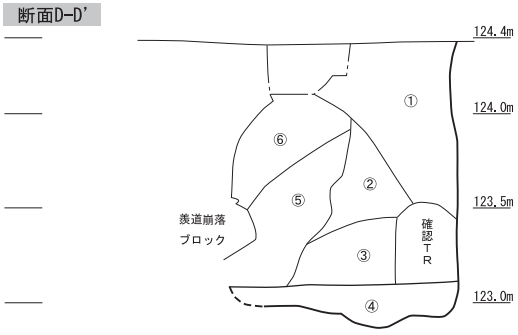


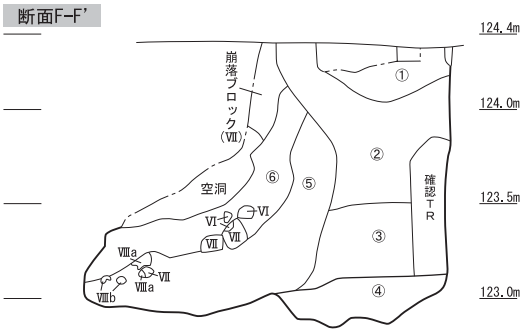
第 330 図　132 号地下式横穴墓(1)

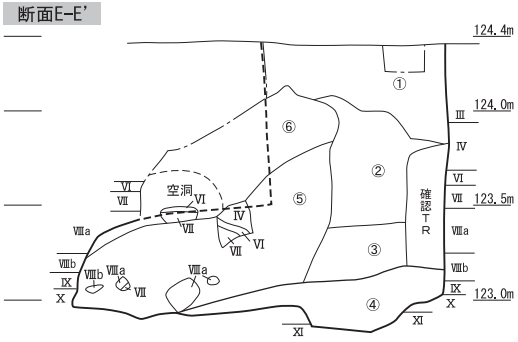




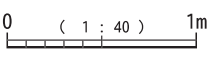








① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%含む黒色土。粒が多くブロック少ない。Ⅹ層を少量含む。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約70%含む黒色土。ブロックの割合が高い(Ⅹ層多量に含む)。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約30%,Ⅹ・Ⅺ層を約50%含む黒色土。しまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約20%,Ⅹ・Ⅺ層を約10%含む黒色土。竪坑が崩落した土が主体で上部から入り込んだ黒色土が混ざっている。軟らかい。
⑥ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。軟らかい。天井が崩落した土と上部から入り込んだ土が主体。軟らかい。



第 331 図　132 号地下式横穴墓(2)

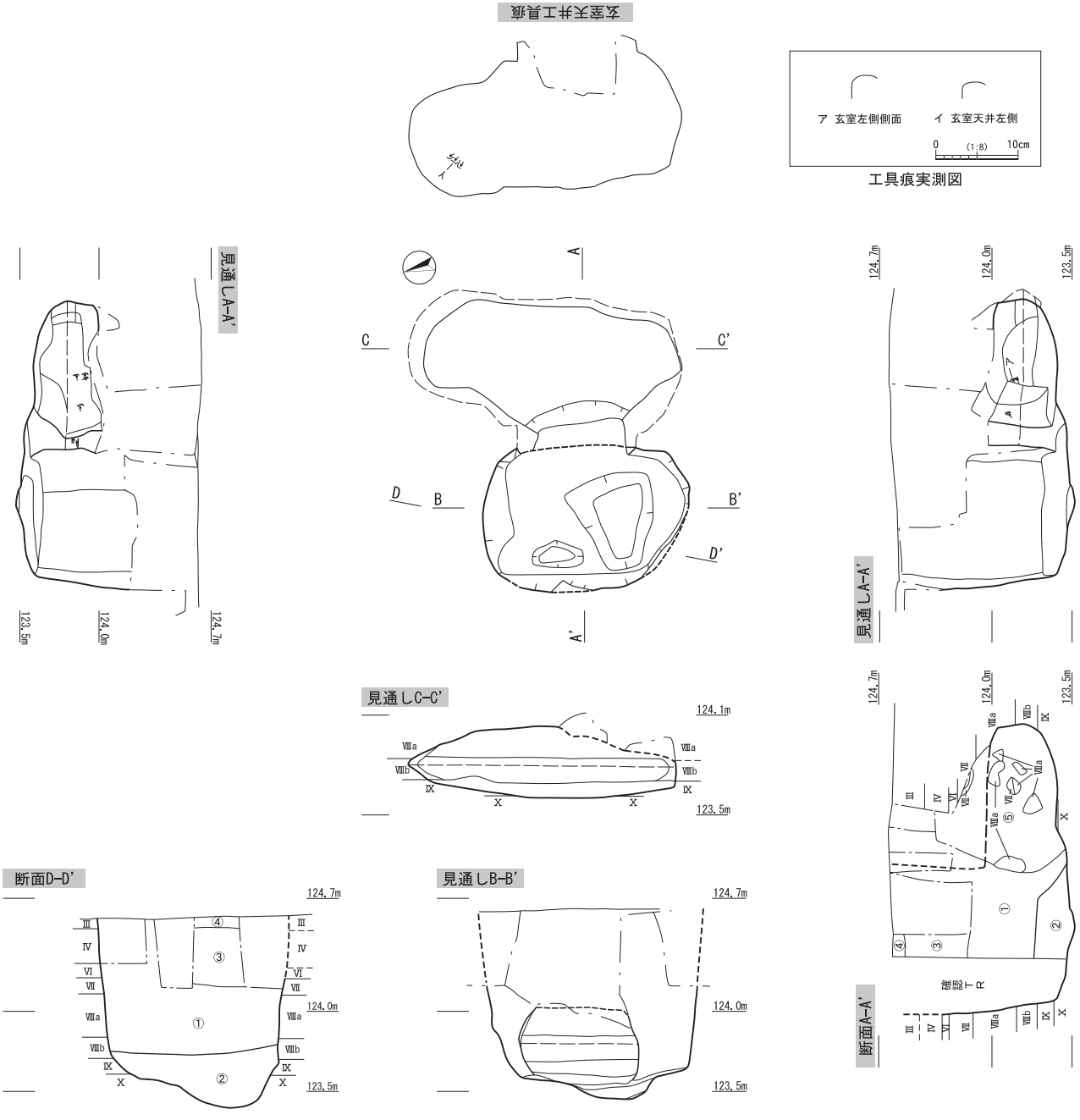
133号地下式横穴墓	検出区	G-43	玄室開口方向	東
	分　類	B１		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺の攪乱を取り除き検出した。玄室天井は一部崩落しかけた状態であった。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	90	128	72	74	－	18	80	172	98	－
推　定	90	135	120	－	45	－	－	－	－	45

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形（横長）		
玄室床面層	Ⅸ・X	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 中央より右側の床面に凹みがみられる。床面は玄室よりやや低い。 【玄室】 羨道との境は明瞭である。左側に偏る片袖状であり，横幅は竪坑より広い。
工具痕	工具痕は玄室天井や側面にわずかにみられ，いずれも小型である。 工具の幅は約３～４㎝と推測される。幅が明確に異なるものは検出されなかった。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒色土。Ⅸ層を含む。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%含む黒色土。ややしまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%含む黒色土。軟らかい。天井が崩落した土。

第 332 図　133 号地下式横穴墓

134号地下式横穴墓	検出区	G-43	玄室開口方向	北
	分　類	B１		

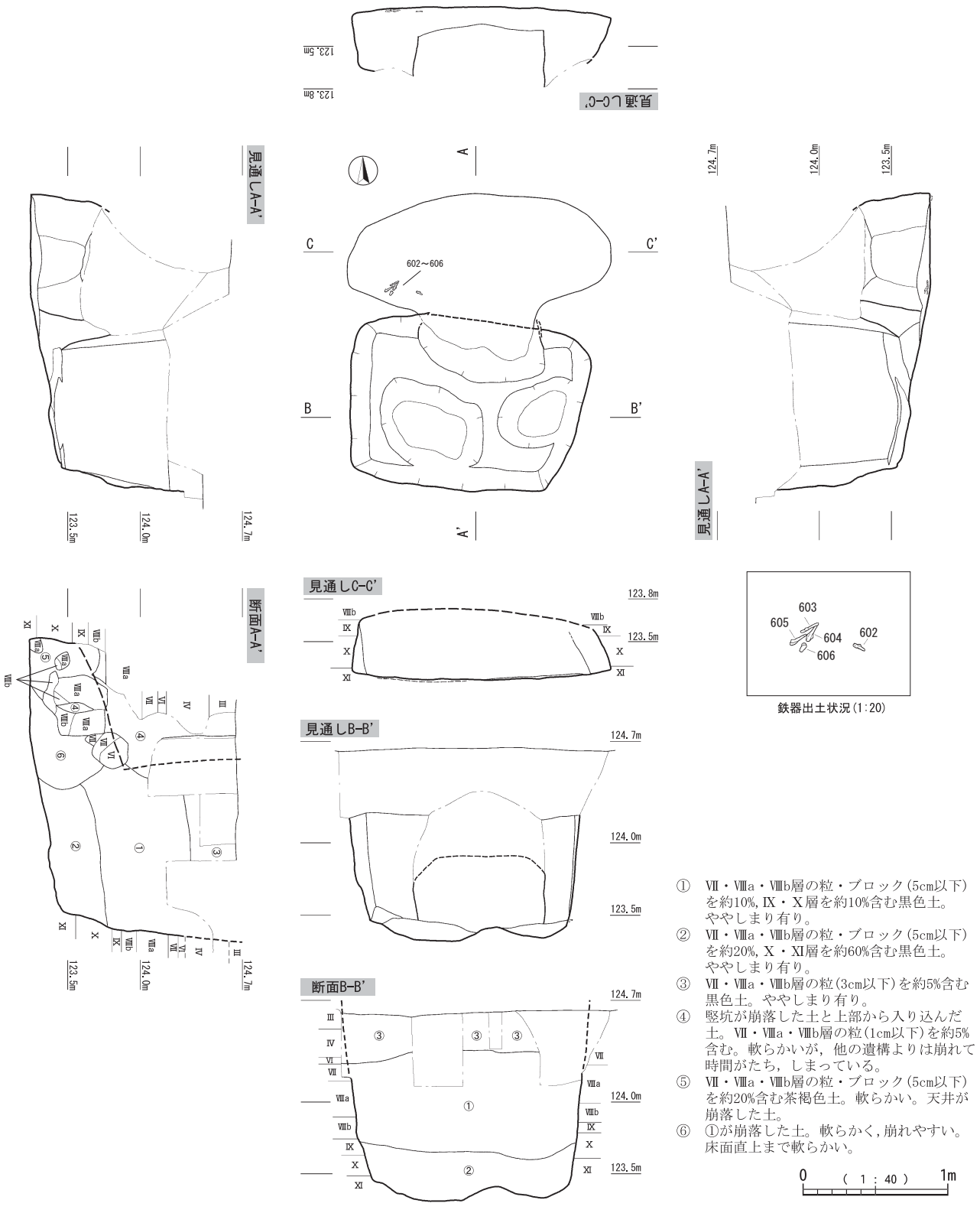
検出状態	わずかにⅦ・Ⅷ層が混在している部分周辺の攪乱を取り除いて検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	120	159	132	90	－	18	80	178	98	－
推　定	125	170	－	－	60	－	－	－	－	50

竪坑最下層	Ⅺ	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	台形？
玄室天井層	Ⅷb	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅺ	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は部分的に深くなる箇所がある。埋土②はＸ・Ⅺ層の土が多く，Ⅷ層の土を少量含む。玄室はＸ・Ⅺ層に構築されており，埋土②は玄室を構築した際の排出土と考えられる。 【玄室】 左側で鉄鏃束が出土しており，床面付近である事から屍床はなかったと考えられる。玄室床面は竪坑床面よりやや低い。
工具痕	未検出
赤色顔料	玄室埋土及び竪坑南側被覆土からパイプ状ベンガラを検出した。
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	刀子１点，鉄鏃４点（圭頭鏃４点）が出土した。
備　考	－

ST134(旧129)



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%, Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%, Ⅹ・Ⅺ層を約60%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
④ 竪坑が崩落した土と上部から入り込んだ土。Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約5%含む。軟らかいが, 他の遺構よりは崩れて時間がたち, しまっている。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約20%含む茶褐色土。軟らかい。天井が崩落した土。
⑥ ①が崩落した土。軟らかく, 崩れやすい。床面直上まで軟らかい。

第 333 図　134 号地下式横穴墓

135号地下式横穴墓

検出区	G-43	玄室開口方向	南東
分　類	B 1		

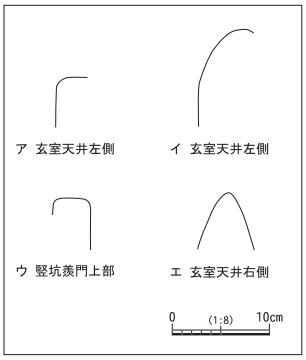
検出状態	トレンチャーによる攪乱を取り除いて検出した。玄室天井は概ね良好な状態で残存していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	110	141	116	80	58	19	74	178	93	48
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

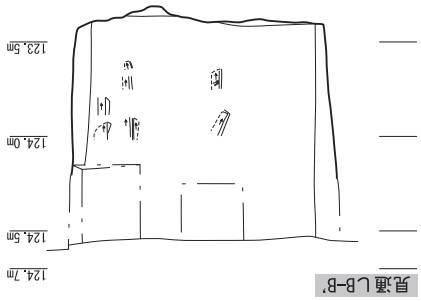
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	長方形	羨門正面形	台形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X・XI	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

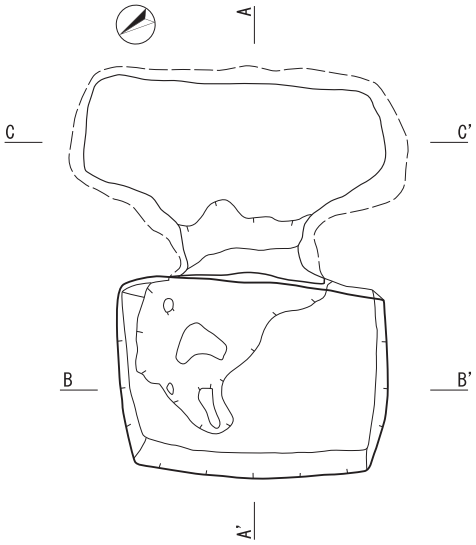
概　要	【竪坑】 ほぼ垂直に掘り込んで造られている。羨門は狭く，竪坑や玄室と明確に分かれる。羨道部分が一段低くなっている。 【玄室】 床面は奥に向かって若干高くなる。内部には軟らかい埋土⑤が流入していた。
工具痕	玄室天井左右側に，奥方向に掘削した痕跡がみられる。また竪坑側面にも多く残る。 アは方形状で幅不明であり，ウも方形状で幅４㎝である。方形で幅が明瞭であるのはウのみで，イはかなり大きいが，おそらくエが重複したものと考えられる。エは幅６㎝以上のＶ字形である。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出

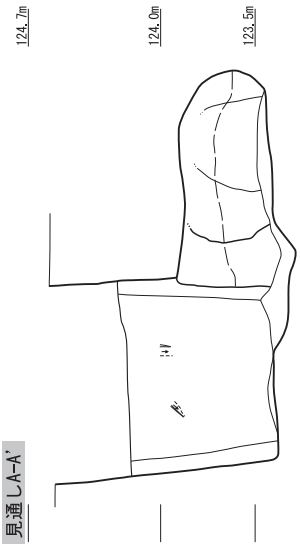
出土遺物	竪坑上面	壺（597・608）と同一個体と思われる破片が竪坑検出面から竪坑右後ろ側にかけて出土した。
	竪坑埋土内	なし
	玄室内	なし
備　考		－

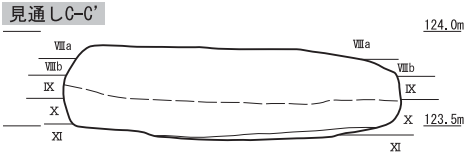


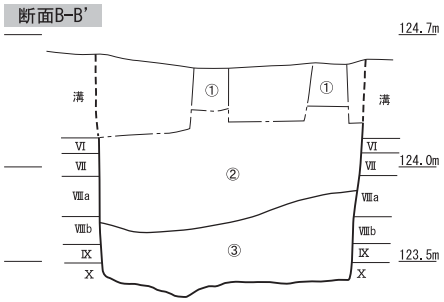
工具痕実測図

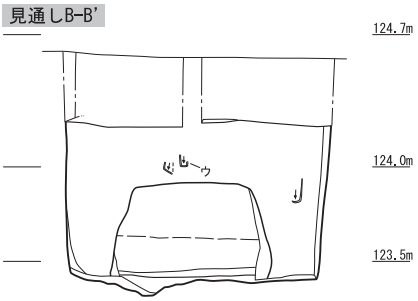


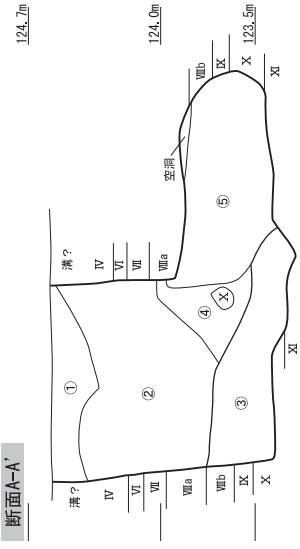


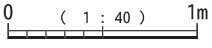












① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を微量に含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約60%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)とⅨ・Ⅹ層の粒・ブロック(5cm以下)を約40%含む黒色土。ややしまり有り。
④ ②が崩落した土。②よりしまり弱い。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約5%含む黒色土。しまり弱い。

第 334 図　135 号地下式横穴墓

132号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況（第335図）

西側でⅦ・Ⅷ層が混在する箇所がみられた。さらにその西側には，大型壺の破片が集中していた。

134号・135号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況（第336図）

134号墓と135号墓の間にⅦ・Ⅷ層の混在する土が広がっていた。トレンチャーによる撹乱のため，詳細は不明である。また，この土層からは赤色顔料が検出された。135号墓の南西側からは大型壺片が集中して出土した。

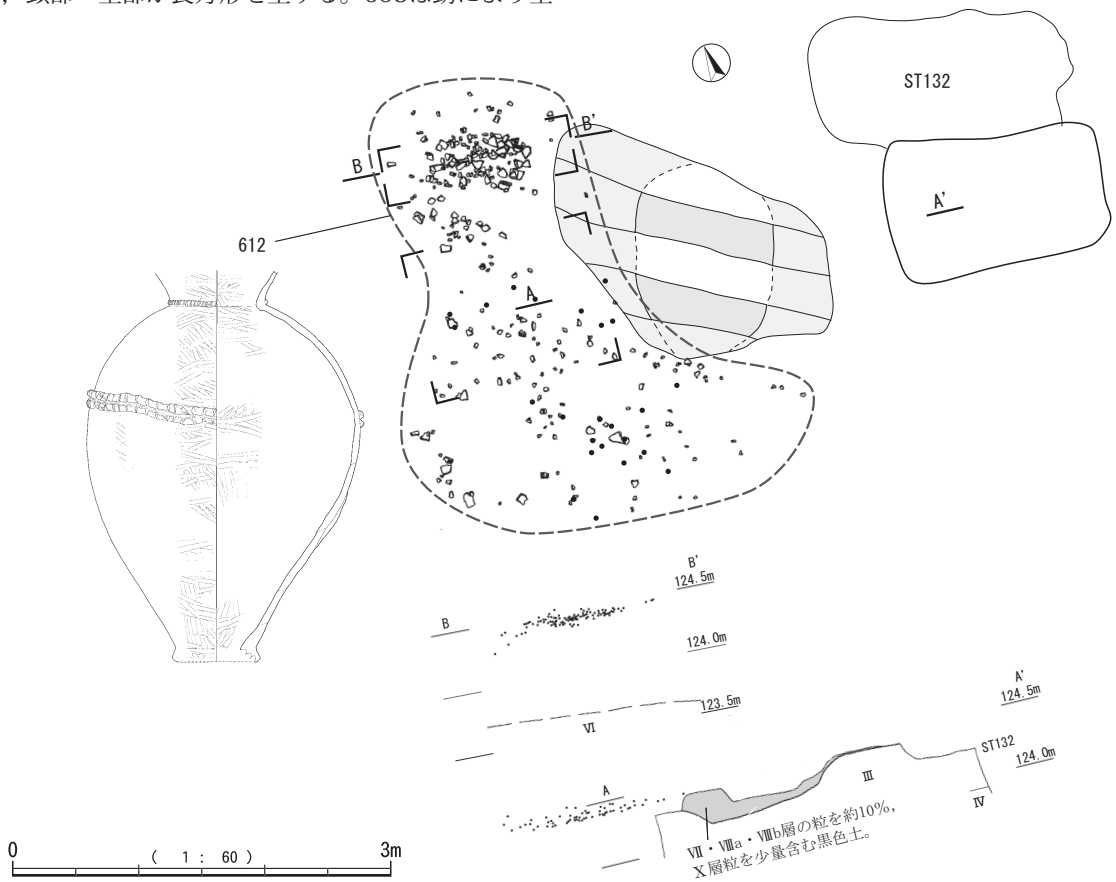
エリア13出土鉄器（第337図）
134号地下式横穴墓（第337図）

鉄器は刀子１点，鉄鏃４点（圭頭鏃４点）が出土した。602は小型の刀子である。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面は平造りを呈する。背側の一部に浅い溝がみられる。関部はＸ線写真の観察から片関であり，やや直線的なナデの形態である。茎部は茎尻に向かって幅がやや狭くなる。茎断面はわずかに台形状を呈する。茎部に鞘木の木質が残存するものの，状態が悪く詳細は不明である。

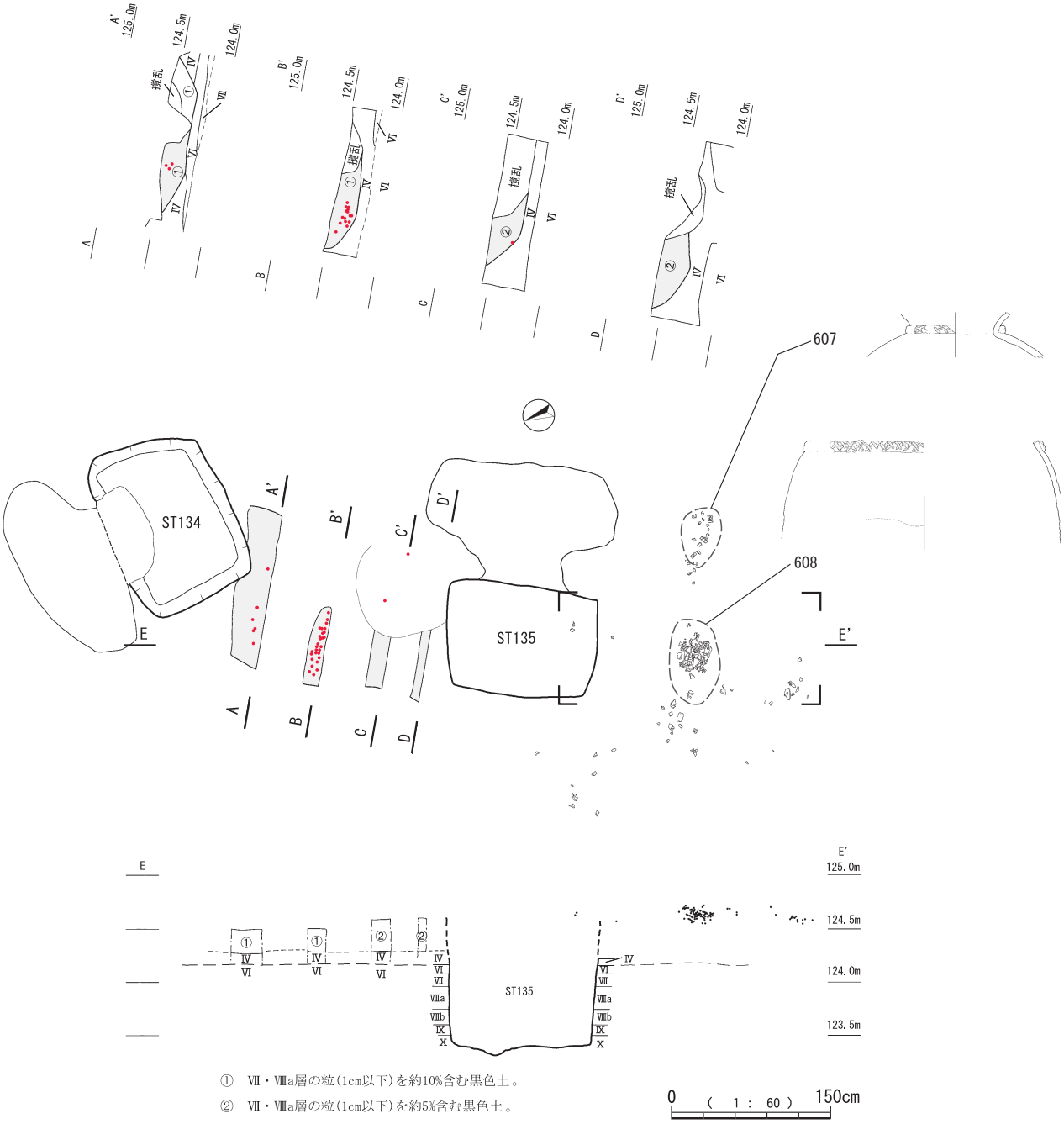
603～606は圭頭鏃Ⅰb類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。603は錆により茎部が変形する。矢柄がわずかに残存する。604は茎部の一部が欠損する。錆化が進行しており刃部の一部が不明瞭である。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。605は錆化が進行しており刃部の一部が不明瞭である。矢柄は短いもののやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。606は茎部の先端がわずかに欠損する。錆化が進行しており，全体的に錆が厚い。矢柄が残存するもののやや状態は悪く口巻きの単位は不明瞭である。

エリア13出土土器（第338図・第339図）

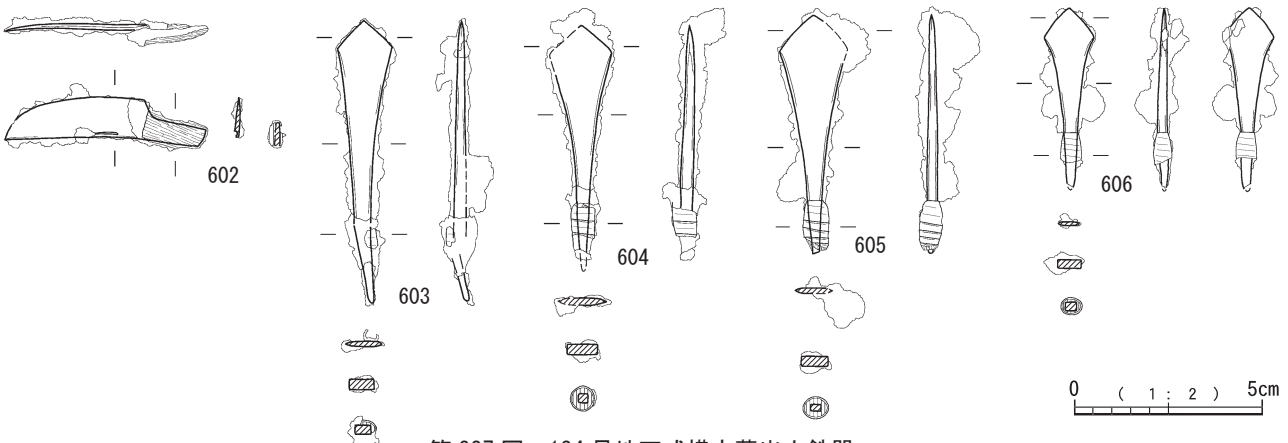
607～612は壺である。607は頸部に斜格子状の刻みが施された突帯を有する。608は幅広突帯を有する胴部である。突帯には斜格子状に刻みが施される。609は壺H類である。609は幅広突帯を有する胴部である。竹管文と二重の鋸歯文を合わせて施す。610は，斜格子状の刻みを施した幅広突帯である。611は，底径9.8cmの平底の底部である。外面は工具ナデ調整である。内面は剝離している。612は，歪みが顕著であるが，肩部が張り，胴～底部が台状になる。頸部には刻目突帯が，胴部には幅広突帯を有する。胴部突帯には，横方向に沈線を引いた後，縦方向に刻みが施され，刻み目には布目痕が認められる。胴部には補修痕があり，器壁の厚い部分がある。



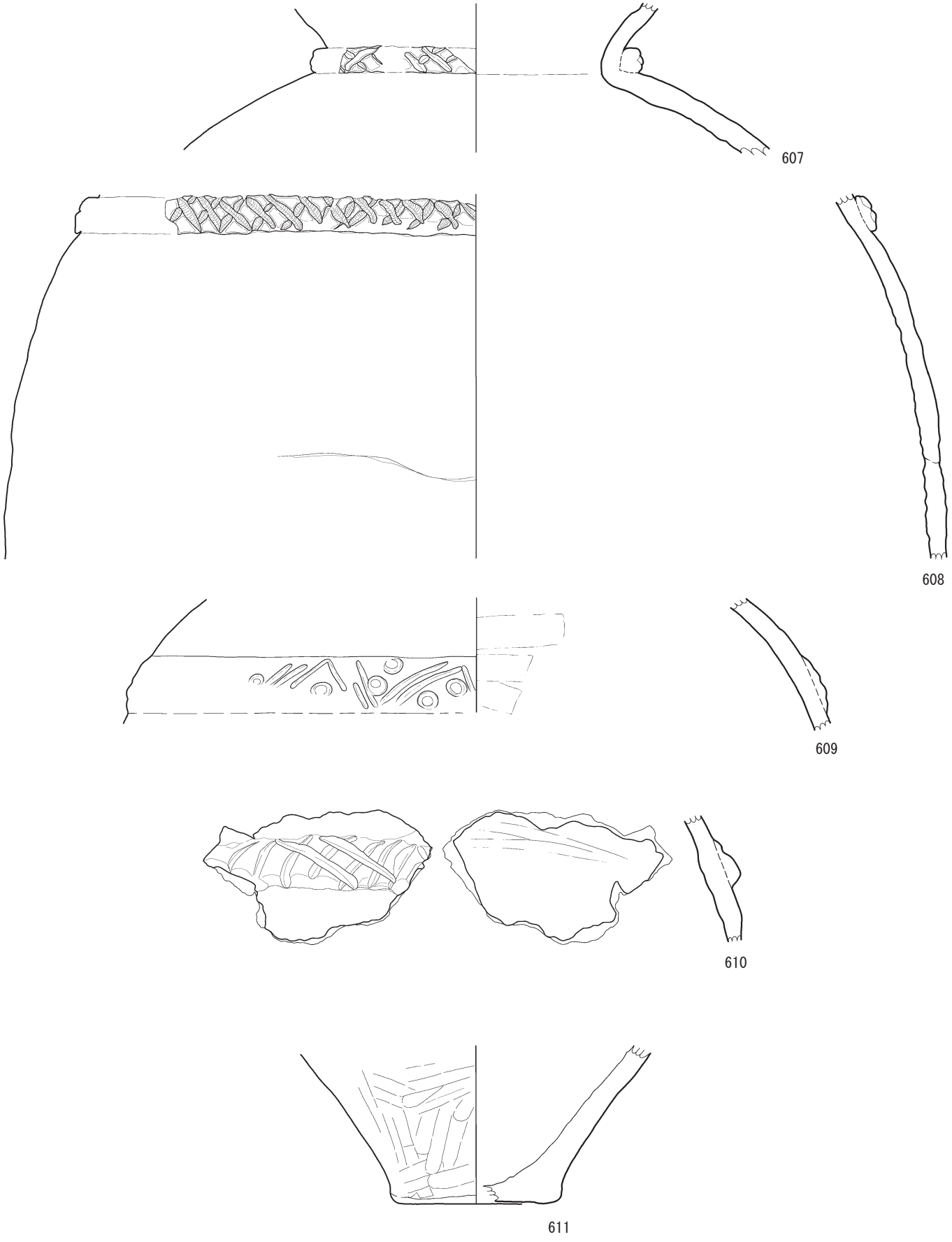
第 335 図　132 号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況



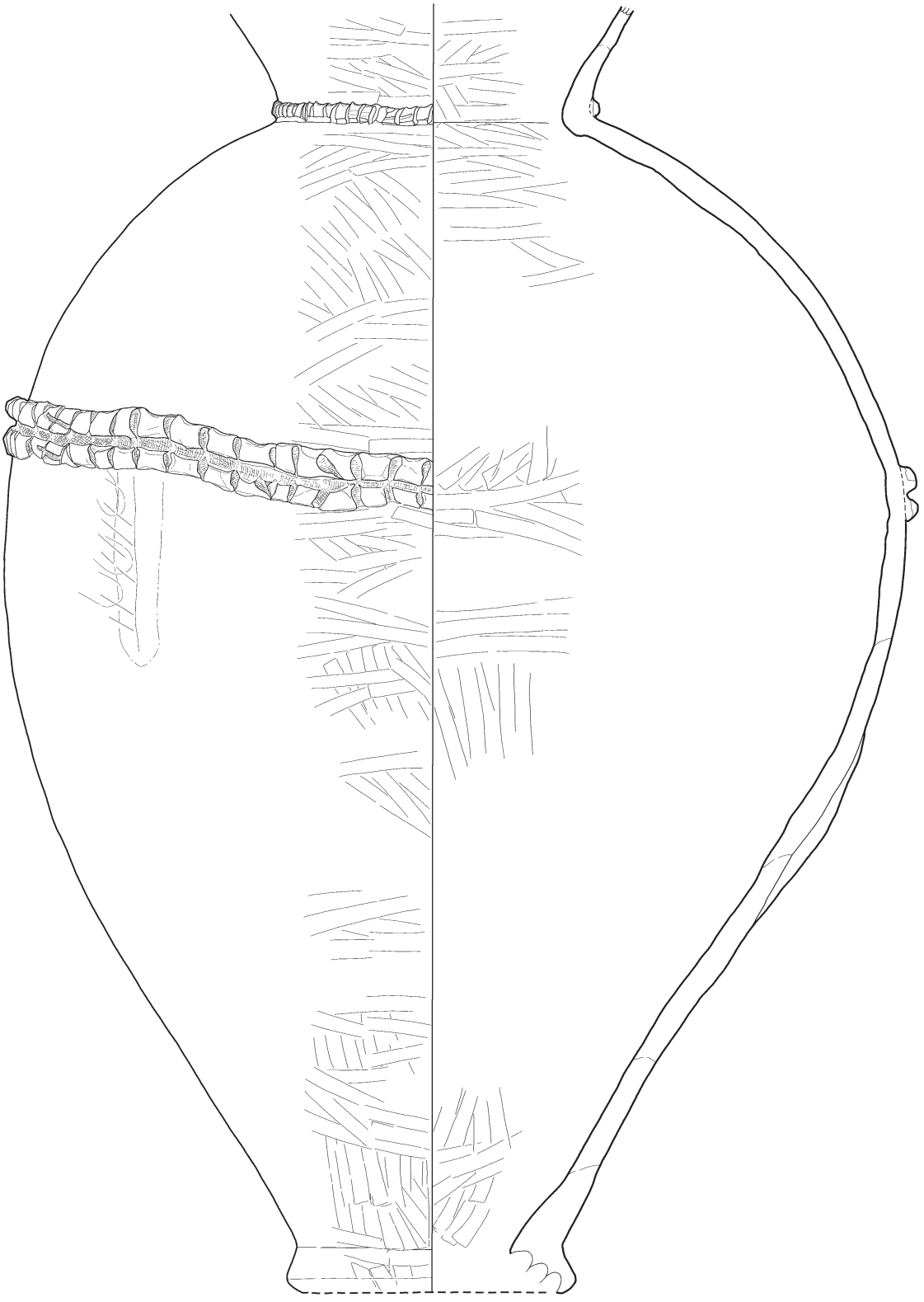
第 336 図　134 号・135 号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況



第 337 図　134 号地下式横穴墓出土鉄器

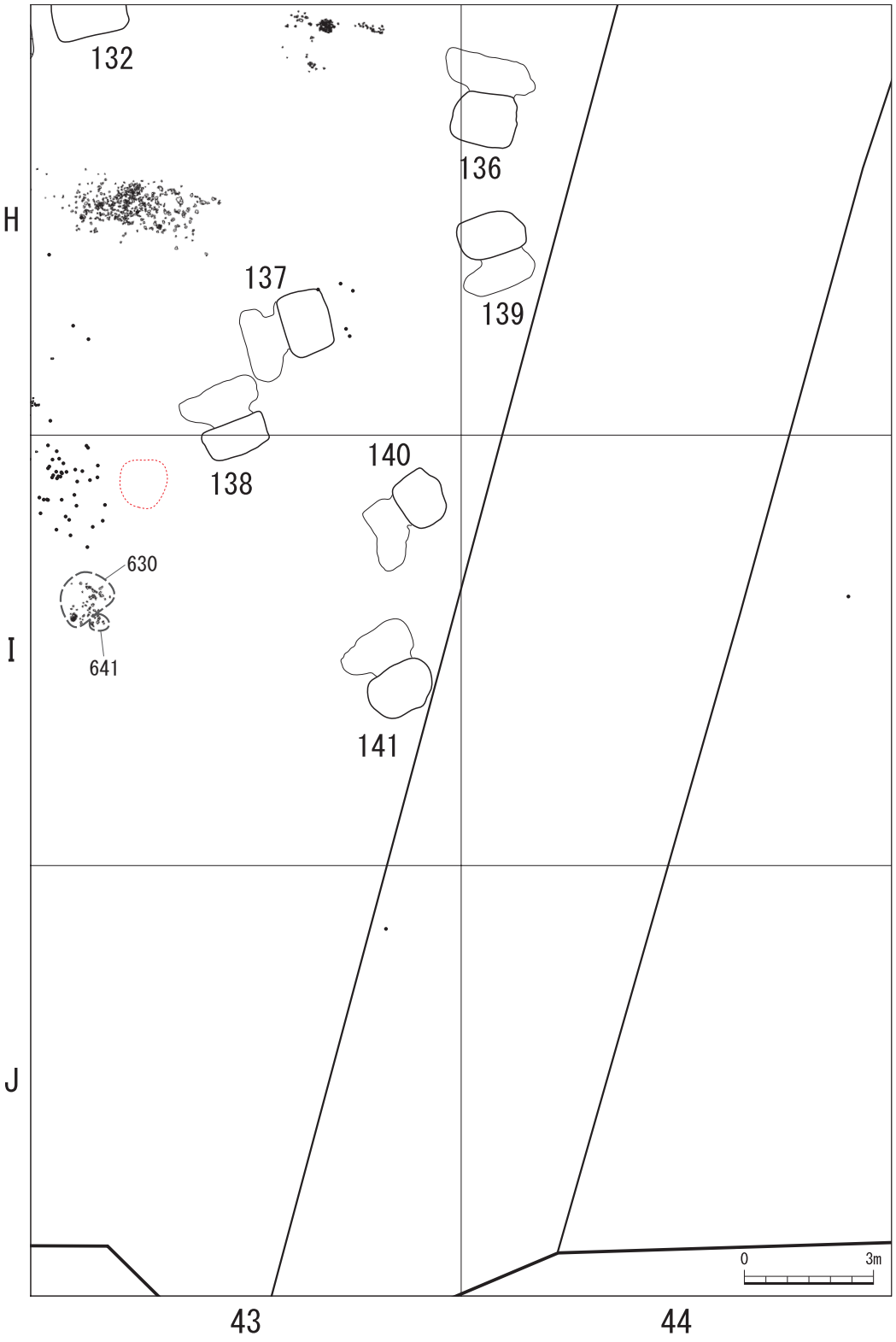


第338図　エリア13出土土器(1)



612

第339図　エリア13出土土器(2)



第 340 図　エリア 14　遺構配置図

136号地下式横穴墓

検出区	H-43・44	玄室開口方向	北東
分　類	B 1		

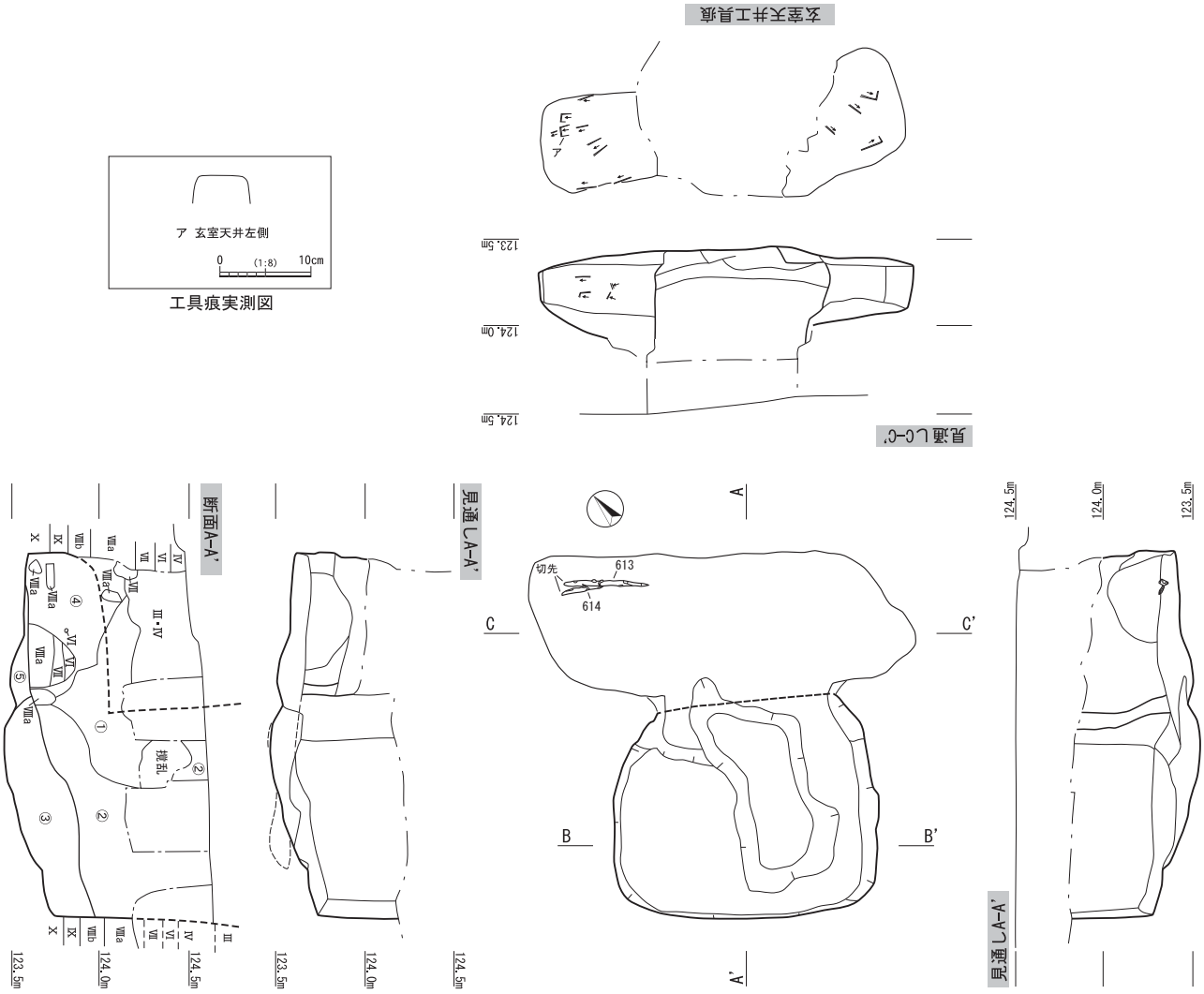
検出状態	攪乱部分を取り除いて検出した。玄室は攪乱を受ける前に，崩落しており，崩落土は上層に流れ込んだ埋土の土圧でやや硬くなっていた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	121	148	114	98	－	6	76	210	82	－
推　定	125	155	130	－	55	－	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 床面は軸Ａ付近で部分的に深い。埋土断面をみると，羨道付近の埋土①は黒色土主体であり，上部から多くの黒色土が流入したと考えられる。 【玄室】 竪坑や羨道より横幅が長い。左奥に鉄剣が切先を左に向け，副葬されている。
工具痕	天井や側面には幅 6.4 ㎝の方形状の工具痕が残っている。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，短剣１点が出土した。
備　考	－

工具痕実測図



① Ⅶ・ⅧaⅧb層の粒(1cm以下)を少量含む黒色土。ややしまり有り。上部から入り込んだ土と天井が崩落した土。
② Ⅶ・ⅧaⅧb層の粒・ブロック(10cm以下)を約40%含む黒色土。ややしまり有り。①より明らかに硬い。Ⅹ層を少量含む。
③ Ⅶ・ⅧaⅧb層の粒・ブロック(10cm以下)を約40%, Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。しまり有り。②よりやや硬い。
④ Ⅶ・ⅧaⅧb層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。天井が崩落した土。土圧のため，やや硬くなっている。
⑤ Ⅶ・ⅧaⅧb層の粒(3cm以下)を約20%, Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。しまり有り。屍床面と思われる。

0 (1 : 40) 1m

第341図　136号地下式横穴墓

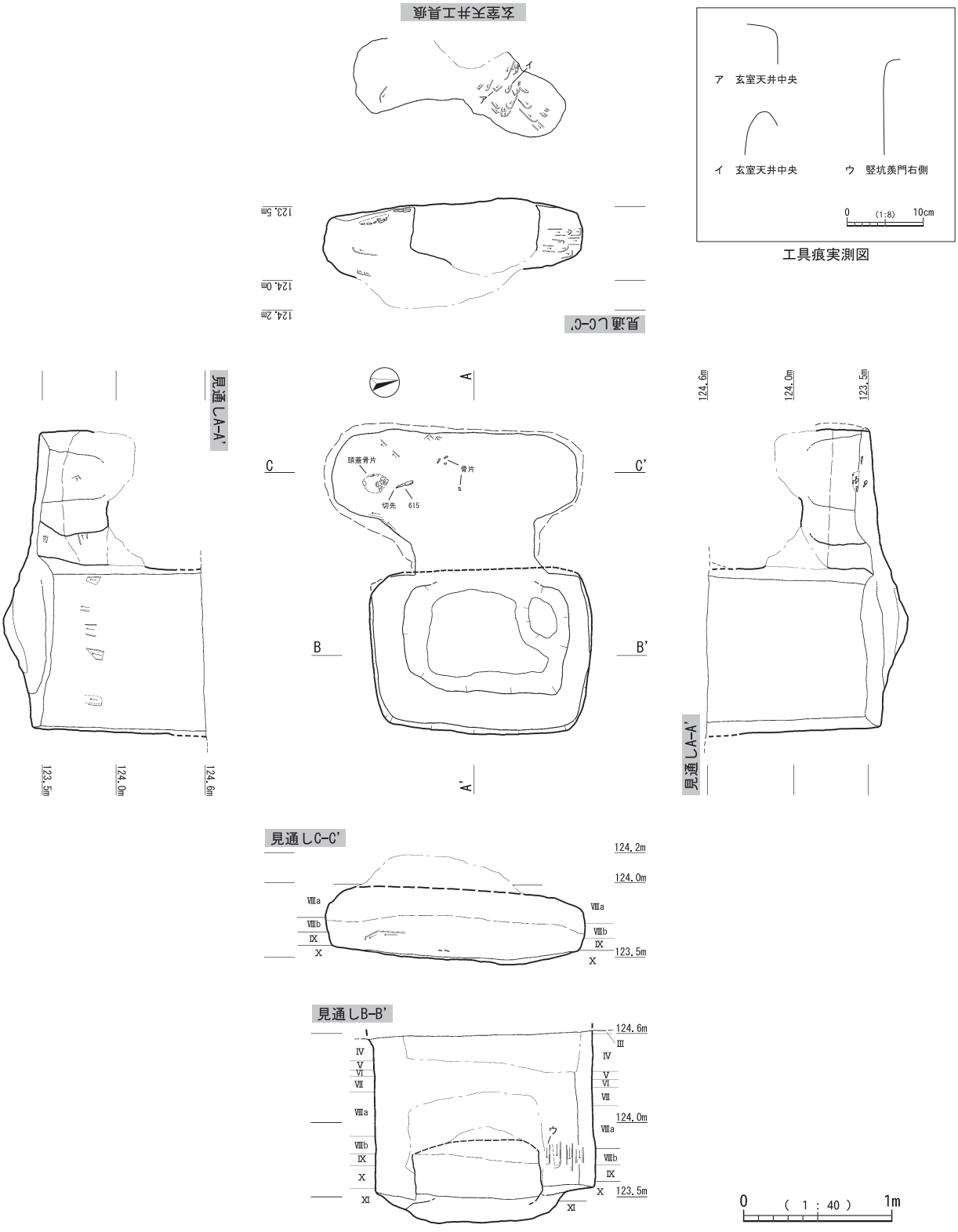
137号地下式横穴墓	検出区	H-43	玄室開口方向	西北西
	分　類	A		

検出状態	トレンチャーによる攪乱部分を取り除き，検出した。検出面はほぼ黒色土であった。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	112	148	135	84	－	19	76	172	95	－
推　定	－	－	－	－	55	－	－	－	－	60

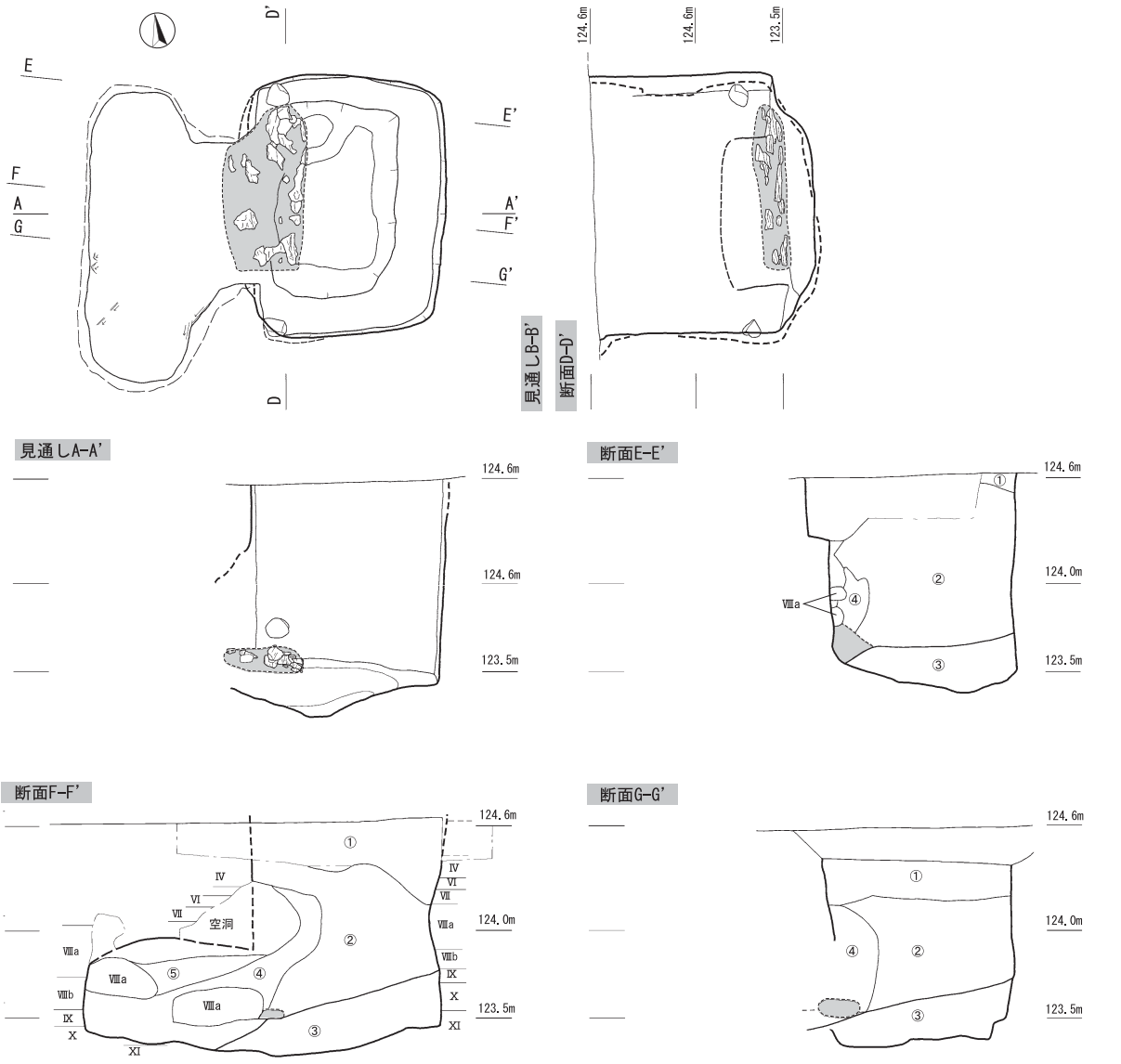
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	不整形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 中央部の床面が低くなる。埋土③は，Ⅷ～X層が主体となる。玄室の構築層と一致するため，玄室構築時の排出土と考えられる。また，しまりがあり硬く，炭化物が上面を覆っている。埋土③の上面が閉塞時の床面であった可能性が高い。 【玄室】 羨道から玄室の奥壁に向かって緩やかに高くなる。左側に頭蓋骨片が残存しており，すぐそばで刀子が出土した。人骨との位置関係から，刀子は胸のあたりに置かれていたと考えられる。また，玄室内の埋土をふるいにかけた際，鉄針が確認された。
工具痕	玄室内には天井や側面に多くの工具痕が残っている。 アは幅不明の方形状で，ウも同じものと推測される。方形状は天井や竪坑側面に多く残っている。イはV字状で，玄室天井や側面に残っている。幅は推定で5㎝程度である。
赤色顔料	頭蓋骨部分より水銀朱が検出された。
炭化物	羨道付近から検出した。年代測定では，316calAD-402calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	頭蓋骨と体肢の一部が残存していた。体肢骨はどの部位か不明である。頭蓋骨に赤色顔料が付着していた。熟年で性別は不明である。
出土遺物 竪坑上面	なし
出土遺物 竪坑埋土内	なし
出土遺物 玄室内	刀子1点，鉄針1点が出土した。
備　考	－



工具痕実測図

第342図　137号地下式横穴墓(1)



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約5%，Ⅹ層ブロックを少量含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%，Ⅹ層ブロックを約10%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約50%，Ⅹ層・Ⅺ層ブロックを約30%含む黒色土。しまり有り。
④ ②が崩落した土。しまりなし。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(3cm以下)を約10%含む黒色土。軟らかい。上部から入り込んだ土。

0 (1 : 40) 1m

第343図　137号地下式横穴墓(2)

138号地下式横穴墓

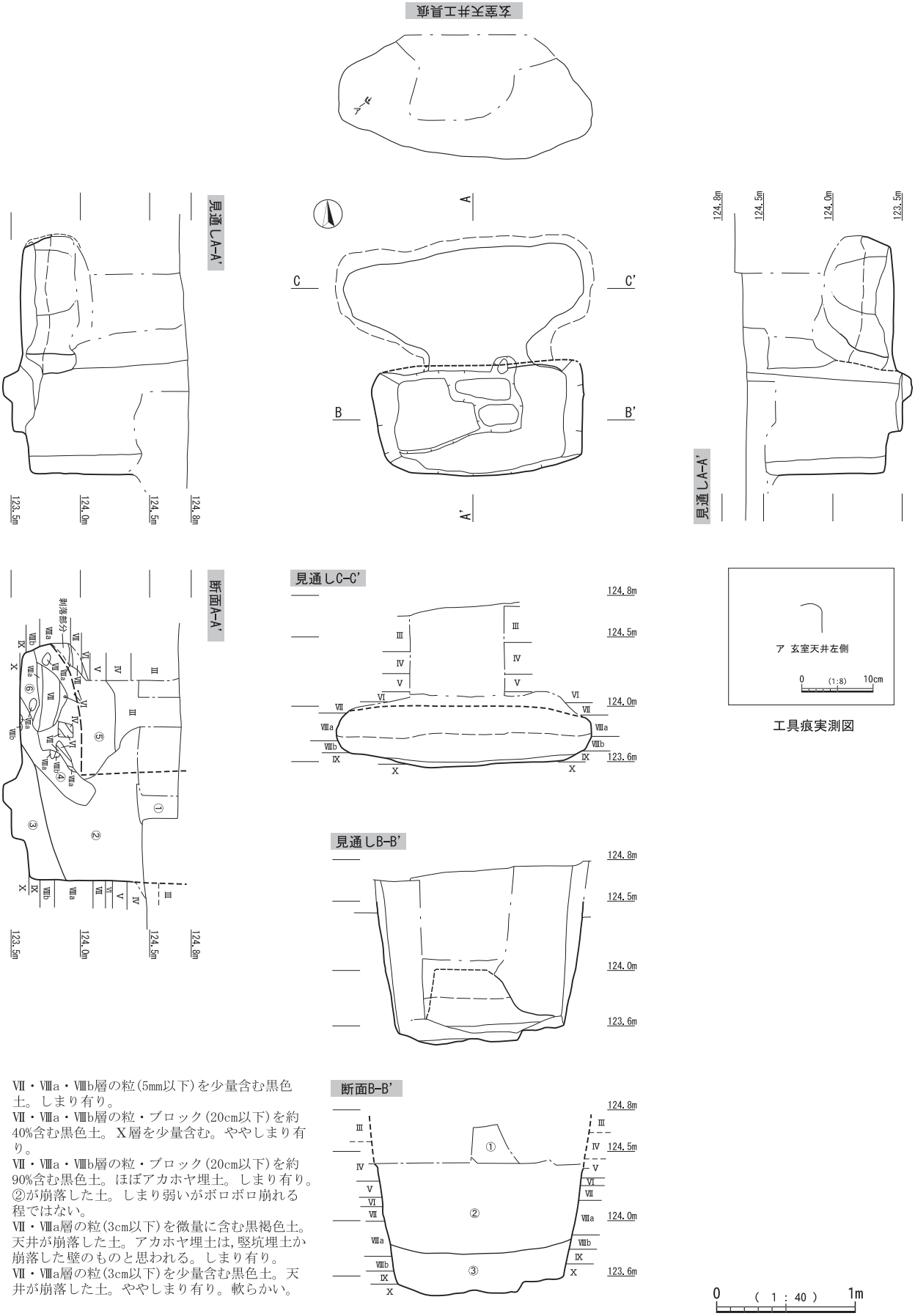
検出区	H・I-43	玄室開口方向	北
分　類	B 1		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する部分周辺のトレンチャーによる攪乱部分を取り除き，検出した。玄室天井は崩落していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	80	150	120	70	－	15	80	186	95	－
推　定	－	160	130	－	45	－	－	－	－	45

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	不明
玄室天井層	Ⅶ	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	X	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 埋土③はⅧ層が主体であり，玄室の構築層と一致するため，玄室構築時の排出土と考えられる。埋土③は，しまりがあり，上面は閉塞時の床面であったと考えられる。羨門は左右非対称で，右側の床面近くが切り込まれたような形状である。 【玄室】 床面はほぼ平坦である。天井はかなりの部分が残存していたが，剥落も多く，工具痕の残りは大変悪かった。
工具痕	玄室天井の一部に，方形状のものが残存している。 天井が崩落したブロック状の土には，U字形の工具痕がみられた。幅は不明である。
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(5㎜以下)を少量含む黒色土。しまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(20cm以下)を約40%含む黒色土。X層を少量含む。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(20cm以下)を約90%含む黒色土。ほぼアカホヤ埋土。しまり有り。
④ ②が崩落した土。しまり弱いがボロボロ崩れる程ではない。
⑤ Ⅶ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を微量に含む黒褐色土。天井が崩落した土。アカホヤ埋土は,竪坑埋土か崩落した壁のものと思われる。しまり有り。
⑥ Ⅶ・Ⅷa層の粒(3cm以下)を少量含む黒色土。天井が崩落した土。ややしまり有り。軟らかい。

第344図　138号地下式横穴墓

139号地下式横穴墓

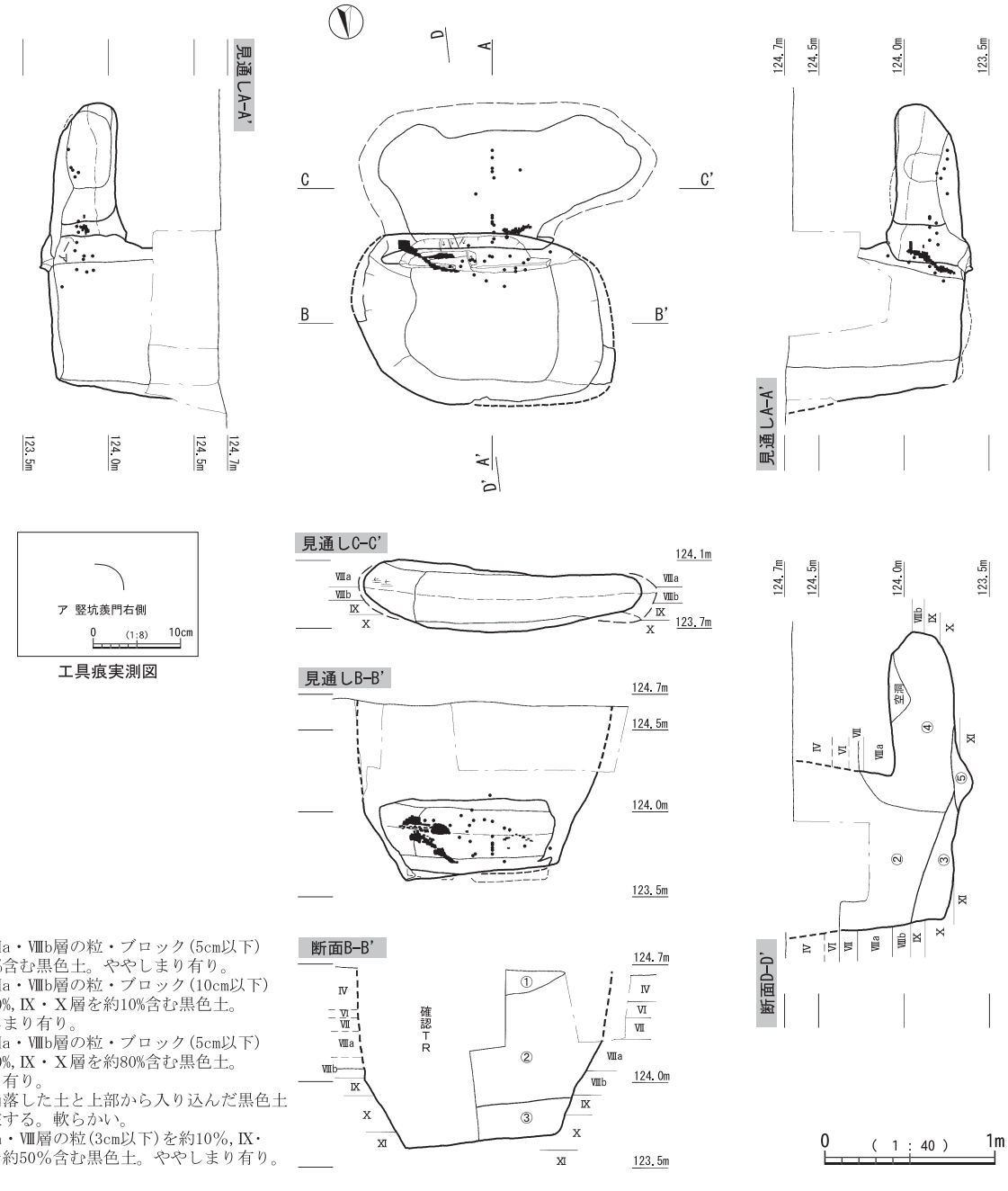
検出区	H-44	玄室開口方向	南
分　類	B２		

検出状態	Ⅶ・Ⅷ層が微量に混在する部分の周辺にある攪乱を取り除いて検出した。旧地形がやや高い位置にあったと思われ，トレンチャーによる攪乱がⅧa層にまで達している。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	98	150	100	102	45	8	70	174	78	38
推　定	－	150	－	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	逆台形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	X・XI	玄室断面形	楕円形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 右壁から左壁へ向かって床面が低くなる。上部の埋土①は，Ⅷ層の割合が大変少ない。黒色土主体の混合土である。羨道前においては，軟らかい埋土④が床面付近まで広がっており，炭化物を玄室内に流れ込むような位置で検出した。 【玄室】 右側へ張り出す形状である。上部の埋土①は，Ⅷ層の割合が大変少ない。黒色土主体の混合土である。天井には明瞭な工具痕はみられなかった。床面は奥に向かって高くなる。
工具痕	羨道部で，小型の方形状のものと推測される工具痕がみられる。
赤色顔料	未検出
炭化物	羨道付近から検出した。年代測定では 83calAD-223calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	なし
備　考	－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約50%, Ⅸ・Ⅹ層を約10%含む黒色土。ややしまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約10%, Ⅸ・Ⅹ層を約80%含む黒色土。しまり有り。
④ ②が崩落した土と上部から入り込んだ黒色土が混在する。軟らかい。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷ層の粒(3cm以下)を約10%, Ⅸ・Ⅹ層を約50%含む黒色土。ややしまり有り。

第345図　139号地下式横穴墓

１４０号地下式横穴墓

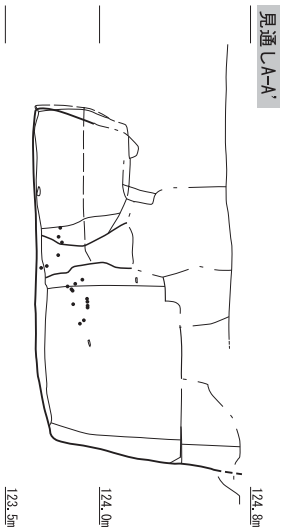
検出区	I-43	玄室開口方向	西南西
分　類	Ｂ１		

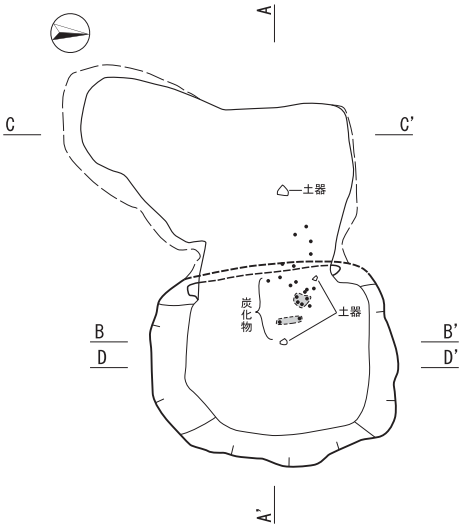
検　出 状　態	Ⅶ・Ⅷ層が混在する範囲の周辺の攪乱部分を取り除いて検出した。トレンチャーによる攪乱の影響で，天井は完全に崩落していた。

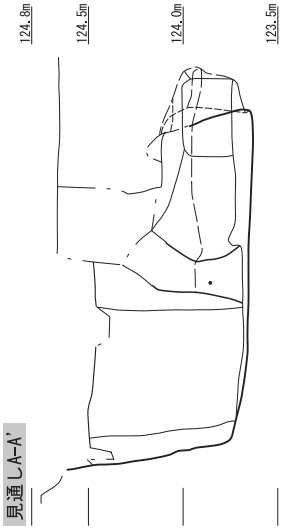
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	103	130	94	84	－	18	76	150	94	－
推　定	110	140	125	－	45	－	－	－	－	50

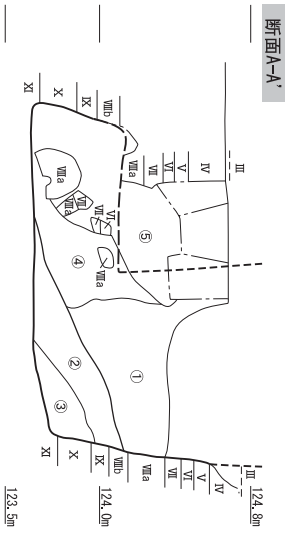
竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	不整形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

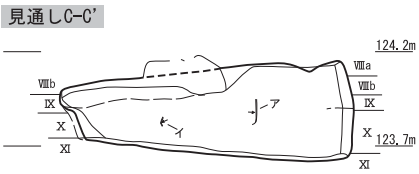
概　　要	【竪坑】 床面は玄室までほぼ平坦である。埋土断面において③はほぼⅧb層，②はほぼⅨ・Ｘ層である。玄室はⅧb～Ｘ層部分に構築されていることから，②と③は玄室構築時の排出土と考えられる。Ⅷb層を掘削した排出土を先に置き，その上にⅨ・Ｘ層を掘削した排出土を置いたものと考えられる。 【玄室】 左側へ強く張り出す形状である。土器は玄室床面付近で出土したが，破片であり，竪坑埋土か上部から流入したものと考えられる。羨道近くでは，炭化物が多く検出されている。
工　具　痕	玄室奥壁に方形状のものが残っている。
赤色顔料	未検出
炭　化　物	羨道付近で検出した。年代測定では 206calAD-265calAD，樹種はクスノキと同定された。
人　　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	土器片が１点出土し，玄室向かい側の土器集中区内の坩（641）と色調などが良く似ているが，同一個体とは断定できなかった。
出土遺物　玄室内	玄室床面で出土した土器は，竪坑からの流入土とともに入ったと考えられる。壺の胴部片と推定される破片で，周辺に同一個体と比定できるものは出土していない。
備　　考	－

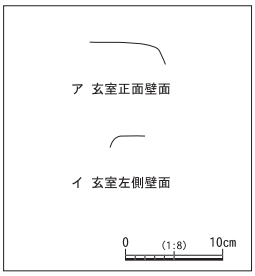




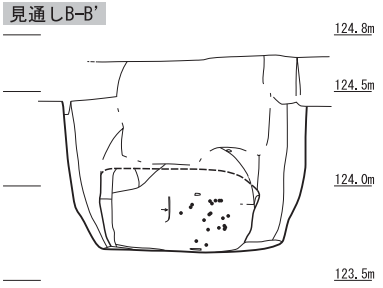


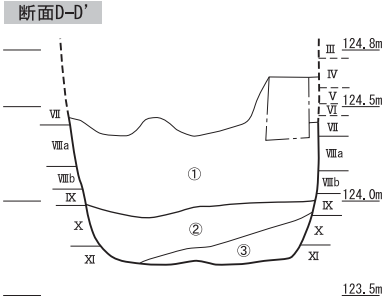






工具痕実測図





① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約60%, Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層を少量含む黒色土。ややしまり有り。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約5%, Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層を約80%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約90%, Ⅹ・Ⅺ層を約10%含む茶褐色土。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約5%含む黒色土。ややしまり有り。

0 (1 : 40) 1m

第346図　140号地下式横穴墓

141号地下式横穴墓

検出区	I-43	玄室開口方向	北
分　類	B 1		

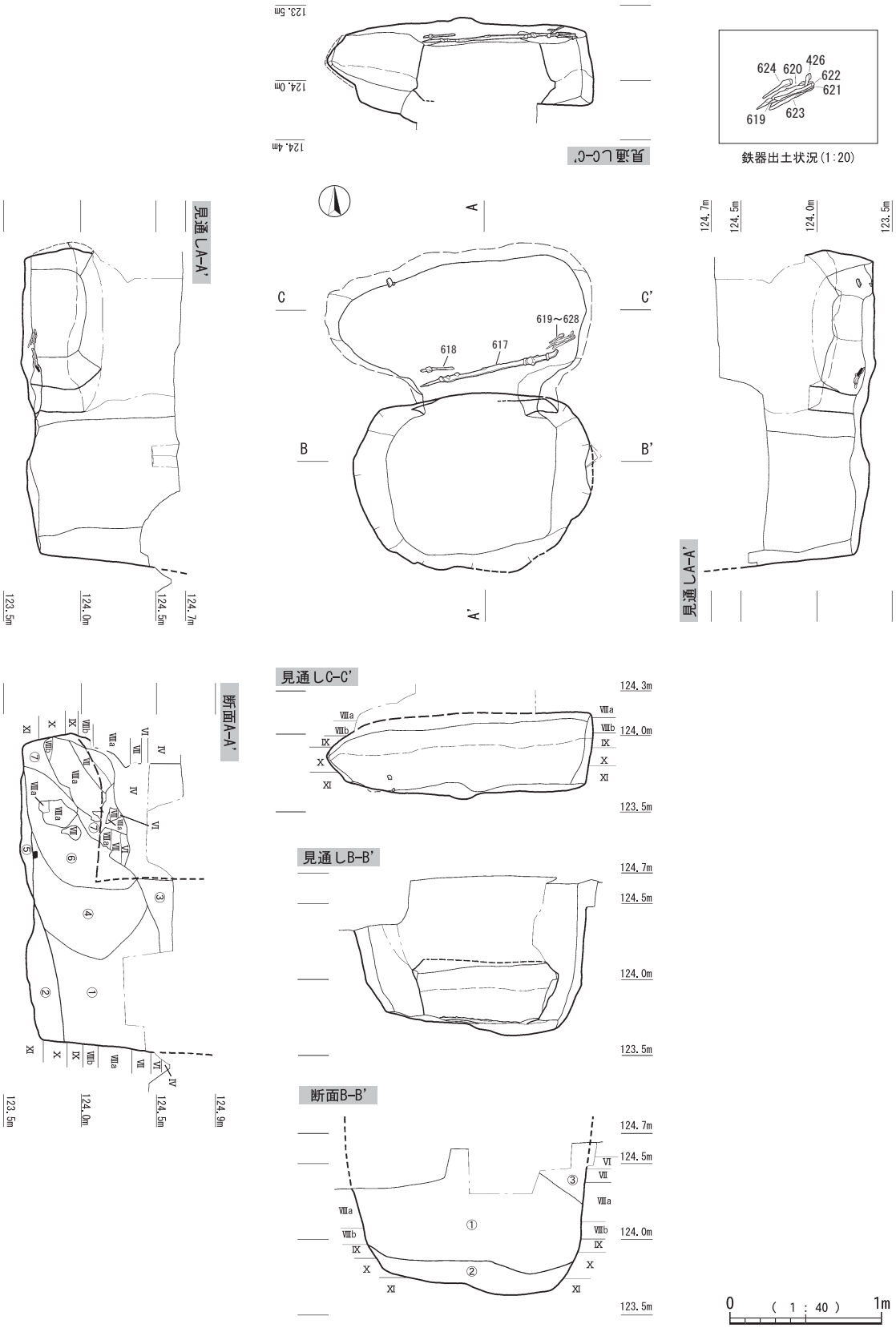
検出状態	深く掘り下げた部分の壁際から竪坑埋土の一部を検出した。

	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門		奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
				横軸	高さ					
現　状	116	159	92	94	－	15	90	174	105	－
推　定	120	165	125	－	45	－	－	－	－	50

竪坑最下層	XI	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	六角形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	隅丸長方形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	隅丸長方形		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

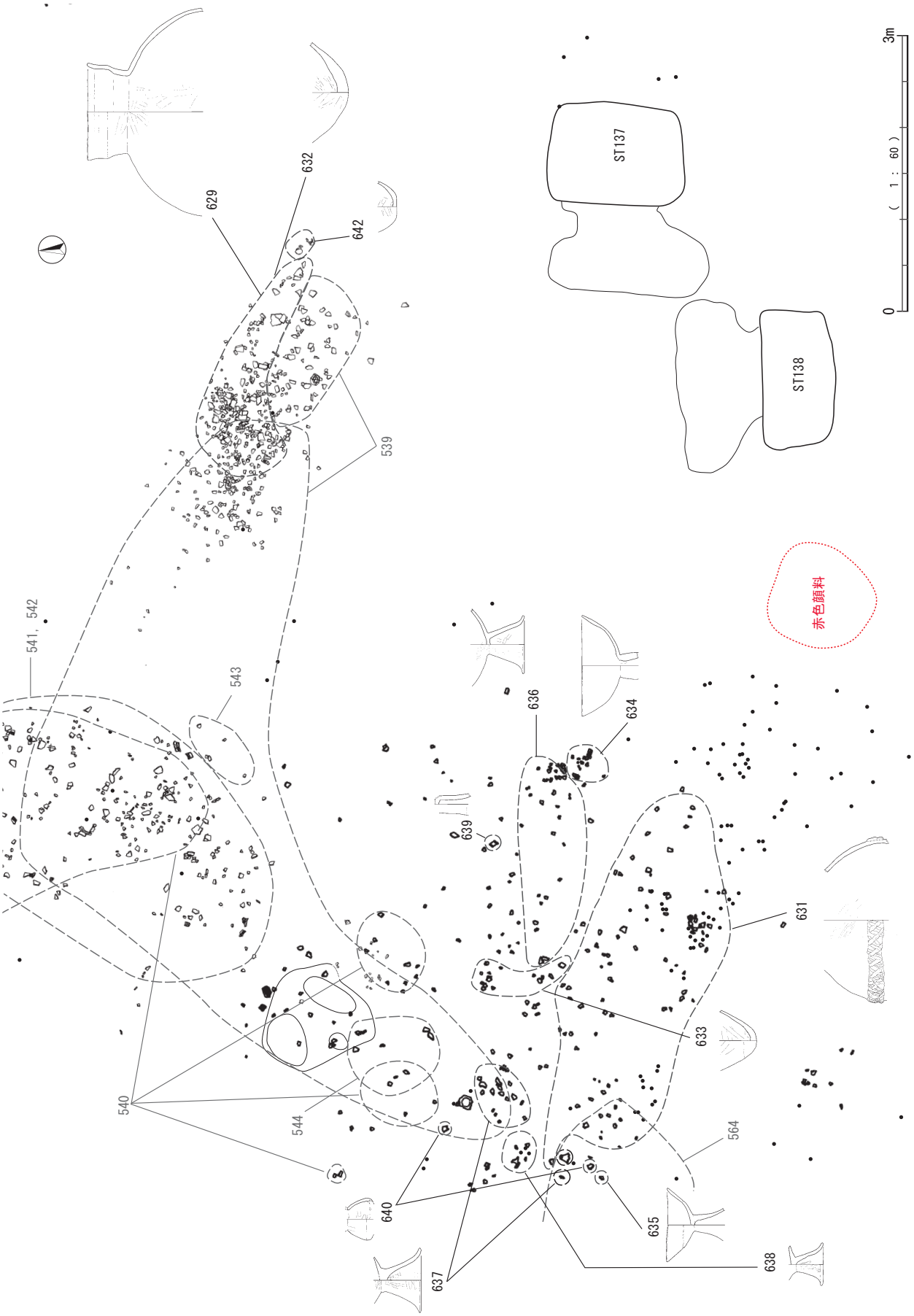
概　要	【竪坑】 埋土断面において床面近くの埋土②は，X・XI層主体で硬くしまっており，玄室はIX～XI層部分に構築されていることから，埋土②は玄室構築時の排出土と考えられる。 【玄室】 玄室天井は崩落し，竪坑から流れ込んだ土の上に，崩落した玄室の天井がブロック状に乗っている状態であった。羨道入口付近の床面一段高くなる。横軸は，竪坑の横軸とはずれる形状である。奥に土器が１点出土したが，天井崩落時に入り込んだと推測される。副葬品が多く，大刀は遺跡内で２番目に長いものであり，羨道の出入口付近で検出された。鉄鏃は長頸鏃である。鉄刀や長頸鏃の特徴から，南西側に位置する 130 号墓と関連があると推定される。
工具痕	明瞭な工具痕はほとんどなく，玄室の奥付近にわずかにみられる程度であった。玄室天井左奥の残存部にU字形と思われる跡が一部みられた。
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑埋土から検出した。
人　骨	未検出

出土遺物	竪坑上面	なし
	竪坑埋土内	なし
	玄室内	鉄刀１点，刀子１点，鉄鏃 10 点（長頸鏃５点，圭頭鏃１点，鉄鏃片４点）が出土した。 大型壺の突帯が出土したが，天井崩落時に流入したものと考えられる。
備　考		－



① Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(10cm以下)を約20%含む黒色土。ややしまり有り。Ⅹ・Ⅺ層を少量含む。
② Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(2cm以下)を約10%,Ⅹ・Ⅺ層を約50%含む黒色土。しまり有り。
③ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を約10%含む黒色土。粒はかなり小さい。しまり有り。
④ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒・ブロック(5cm以下)を約30%含む黒色土。① よりアカホヤ粒 が多く,①が崩落した土と思われる。①よりややしまり弱い。
⑤ Ⅶ・Ⅷa・Ⅷb層の粒(1cm以下)を少量含む茶褐色土。ややしまり有り。
⑥ 天井と①が崩落した土。軟らかいが他の墓よりしまり有り。
⑦ 天井が崩落した土。Ⅳ層にⅦ・Ⅷa・Ⅷb層の粒が少量混じる。軟らかいが他の墓よりしまり有り。

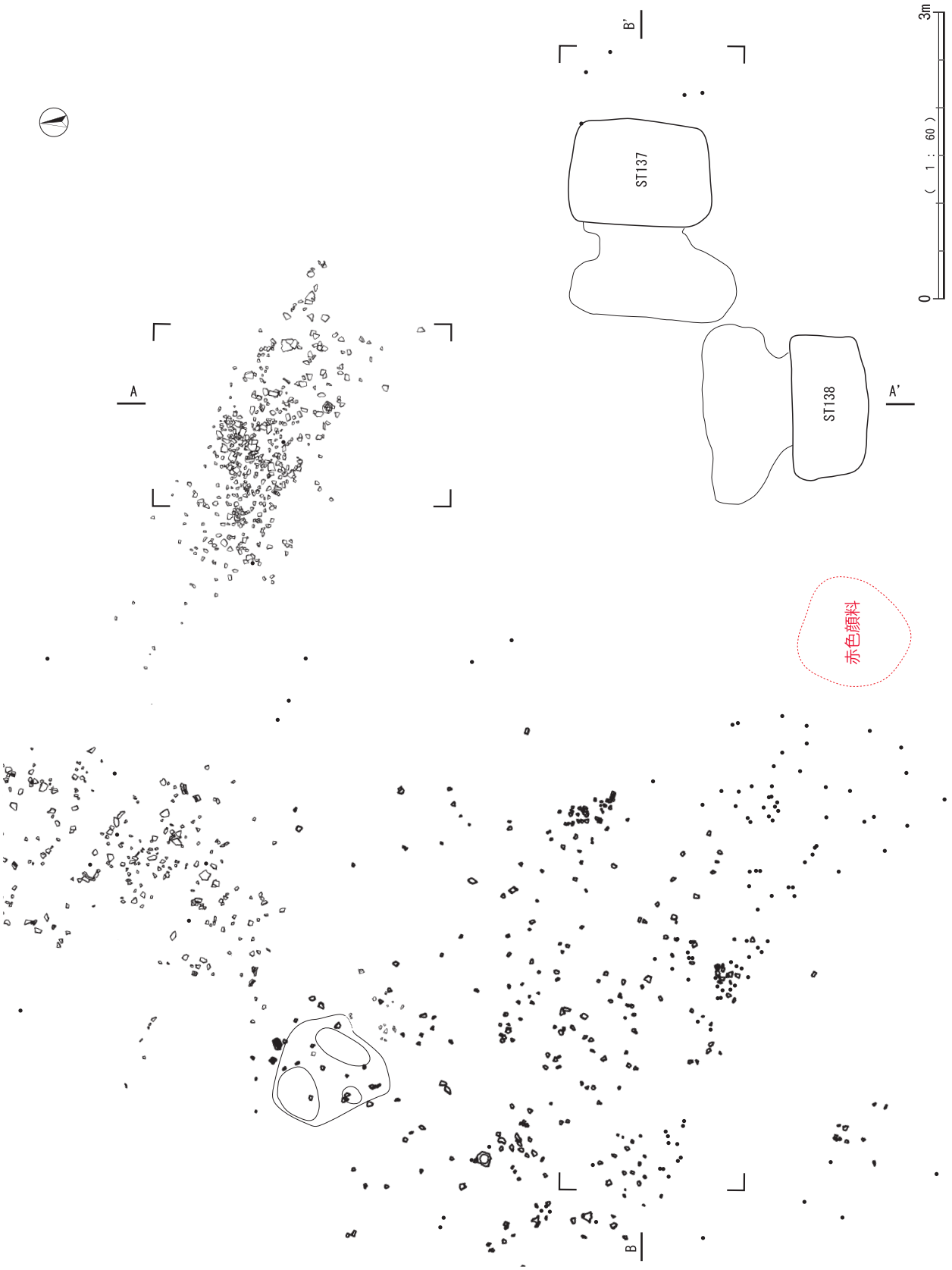
第347図　141号地下式横穴墓



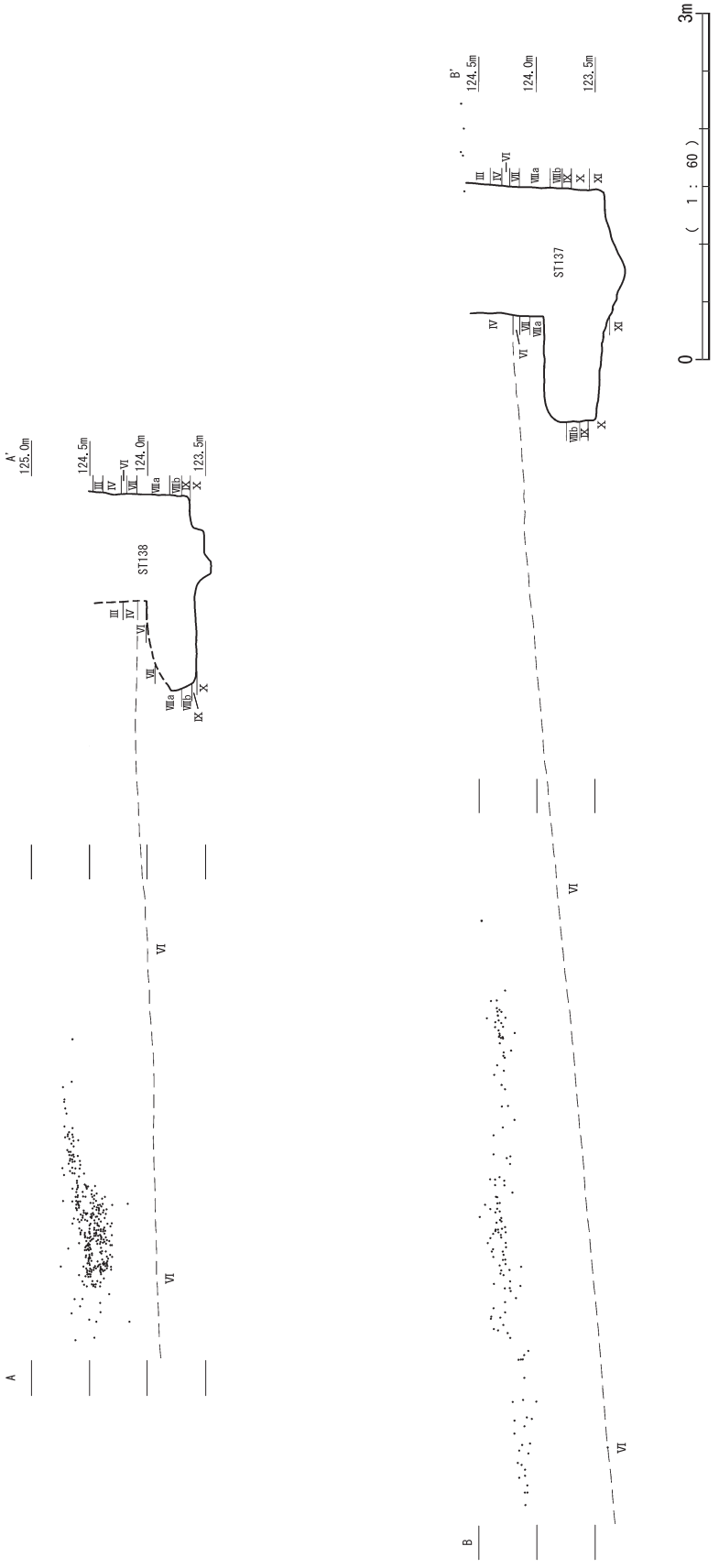
第348図　137号・138号地下式横穴墓周辺遺物出土状況(1)

137・138号地下式横穴墓周辺遺物出土状況・土層堆積状況（第348図～350図）

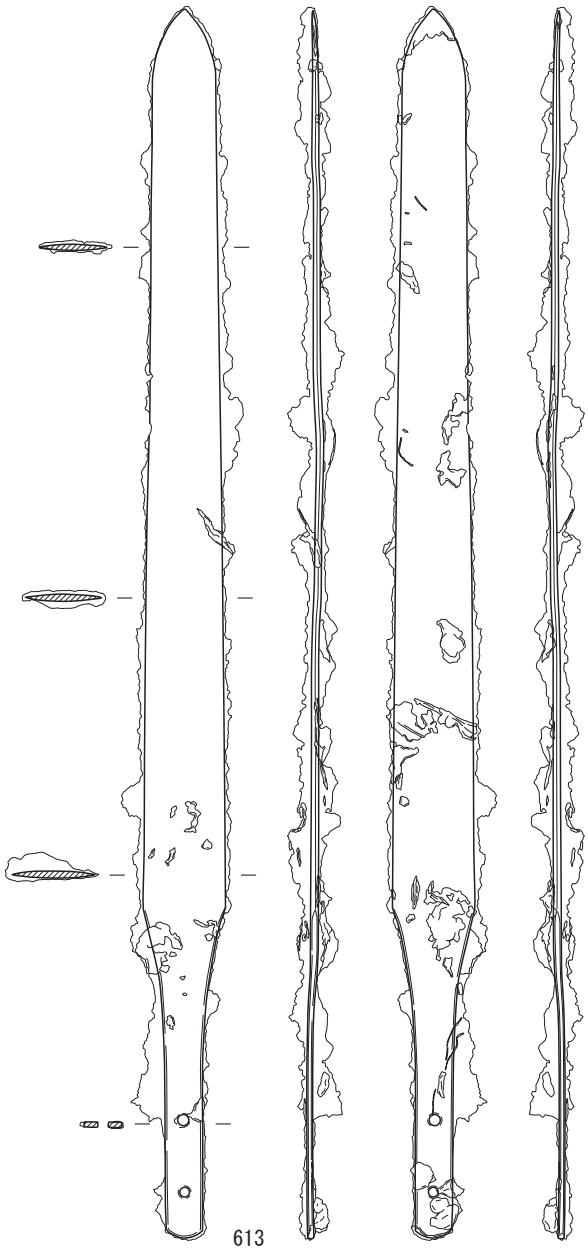
137号と138号の北側には大型壺，西側には高坏や小型壺が多く分布している。特に539の大型壺の破片は広範囲で出土した。また，138号の西側で赤色顔料がまとまって検出された。分析の結果，パイプ状ベンガラと同定された。



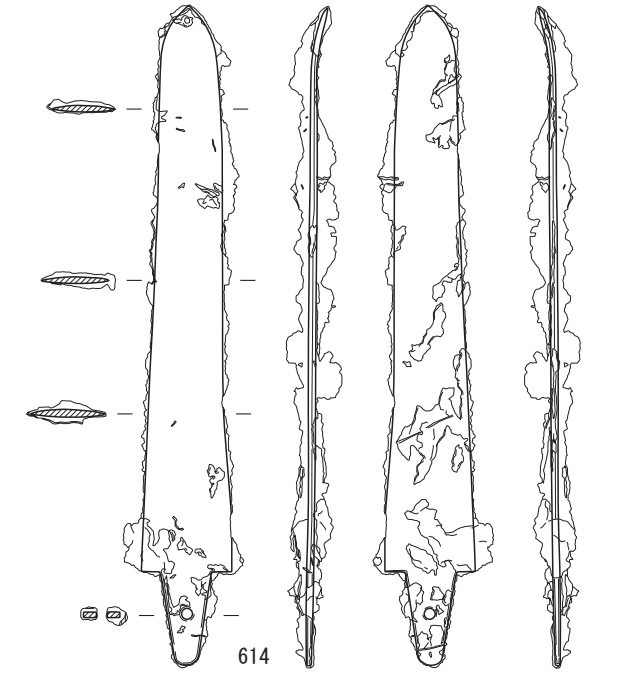
第349図　137号･138号地下式横穴墓周辺遺物出土状況(2)

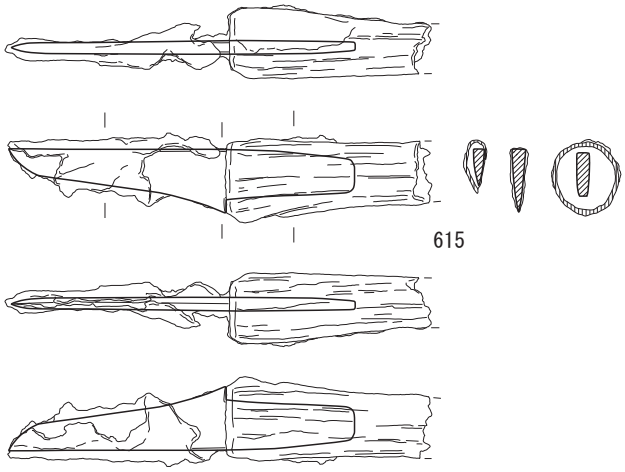


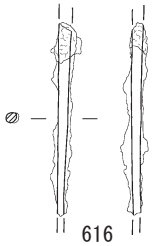
第350図　137号・138号地下式横穴墓周辺遺物出土状況(3)



613・614



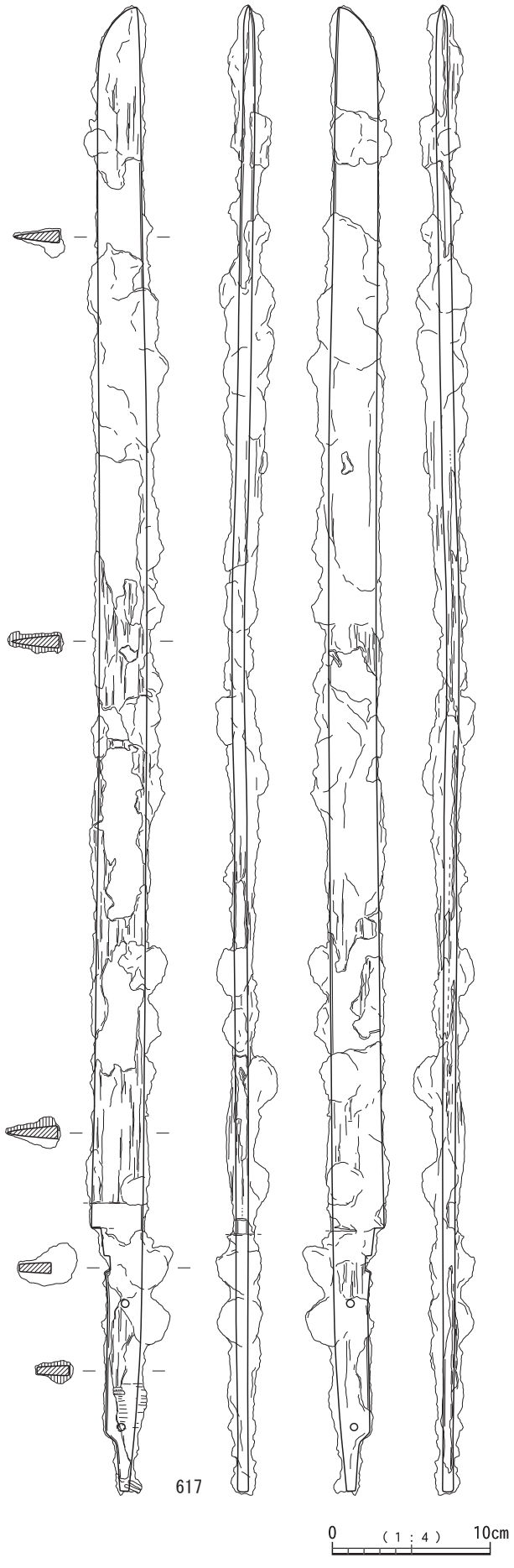




613・614　136号地下式横穴墓
615・616　137号地下式横穴墓

0 (1 : 1) 3cm

第351図　136号・137号地下式横穴墓出土鉄器



第352図　141号地下式横穴墓出土鉄器(1)

エリア14出土鉄器（第351図～第353図）

136号地下式横穴墓（第351図）

鉄器は鉄剣１点，短剣１点が出土した。613は鉄剣である。全体的に錆によりやや歪みが生じている。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部はナデの形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。Ｘ線写真の観察から，２孔の目釘孔が確認できる。全体に葉や木の根などの有機質が直に付着しており装具の痕跡はみられないことから，抜き身の状態で副葬された可能性が高い。614は短剣である。全体に対して関部の幅が広く，茎部は短い。切先に錆による歪みが生じている。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。関部は深さ約８mmと深く直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈する。目釘孔が１孔施されている。全体に葉や木の根などの有機質が直に付着しており装具の痕跡はみられないことから，抜き身の状態で副葬された可能性が高い。

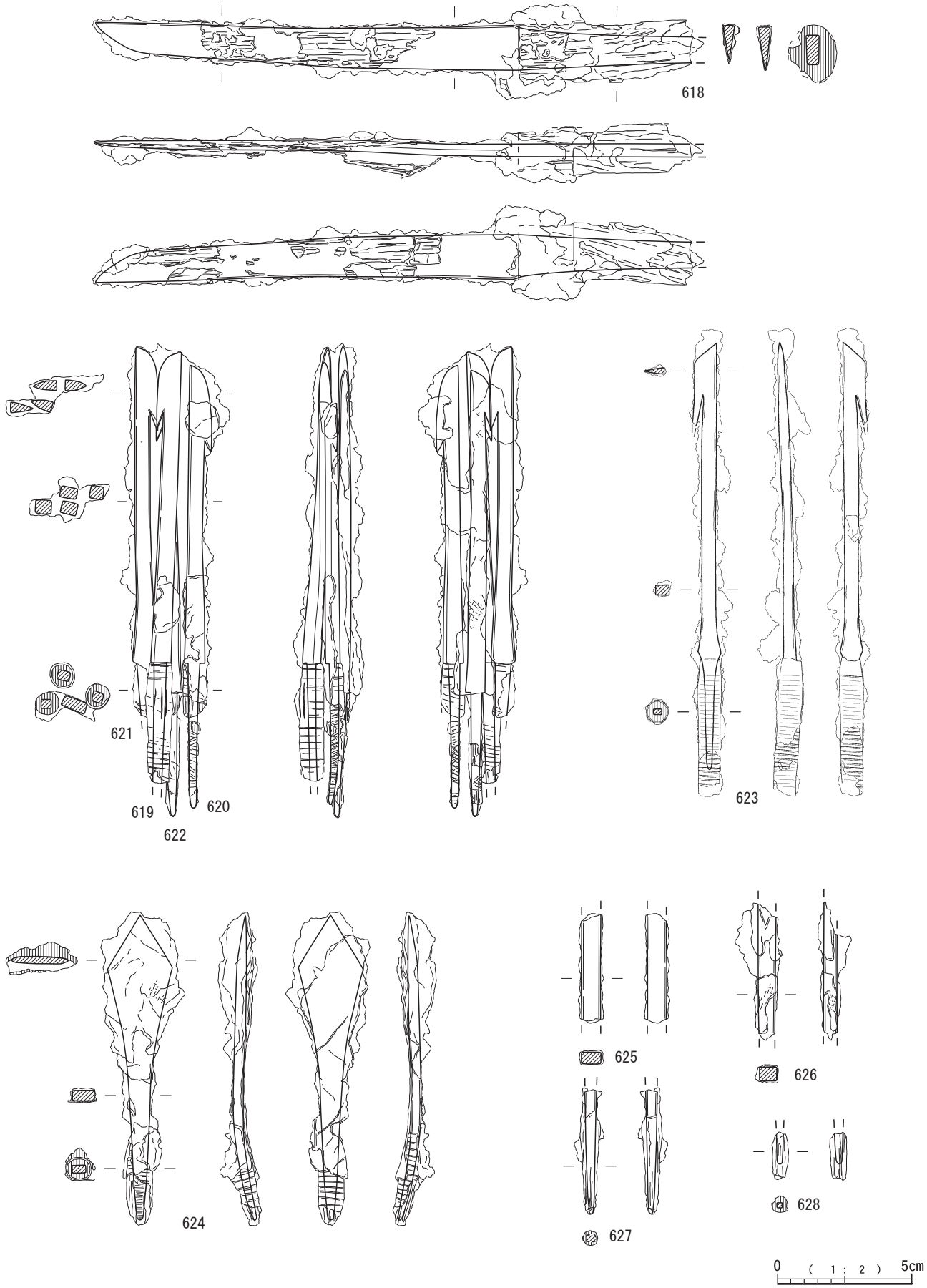
137号地下式横穴墓（第351図）

鉄器は刀子１点，鉄針１点が出土した。615は刀子である。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先である。刃部にくびれがみられるが，研ぎ減りによるものと考えられる。断面は平造りを呈する。皮革製の鞘が残存する。鞘の合わせ目はみられないが，背側は境目のない皮革で覆われていることから，刃部側に合わせ目があったと考えられる。関部は片関であり，深さ約４mmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は台形状を呈する。鹿角製の柄が残存する。

616は鉄針である。針孔・針先は欠損するが，共伴する鉄鏃がないことや断面形から鉄針と判断した。断面形はやや楕円形を呈する。一部に有機質が付着するが，状態が悪く詳細は不明である。

141号地下式横穴墓（第352図）

鉄器は鉄刀１点，刀子１点，鉄鏃10点（長頸鏃５点，圭頭鏃１点，鉄鏃片４点）が出土した。617は鉄刀である。刃部はふくら切先であり，刃部の断面は平造りを呈する。刃部に鞘木が残存しており，関部から1.5cmの位置に端部があることが確認できる。顕微鏡による観察で，切先部分に皮革が確認されたが，この鉄刀に付属するかは不明である。また，鞘木の上に付着する布も確認されたが，状態が悪く詳細は不明である。関部は片関であり，深さ５mmに落ちる直角の形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は台形を呈する。Ｘ線写真の観察から，上部に護拳帯装着用とみられる幅１cm深さ３mmの抉りと，２孔の目釘孔がみられた。柄木の木



第353図　141号地下式横穴墓出土鉄器(2)

質が残存しており，状態は悪いものの関部から２mmほど下に柄の端部が確認できる。一部で柄巻の紐の残存がみられ，顕微鏡での観察から「二本芯並列コイル状二重構造糸巻き」であることが確認された。618は刀子である。茎部の一部が欠損する。切先に向かって細くなる形状であり，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面は平造りを呈する。刃部の一部に鞘木の木質が残存する。状態は悪いものの，刃部の真ん中付近で鞘木の合わせ目が確認できる。関部は両関であり，緩やかなナデの形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は台形状を呈する。鹿角製の柄が良好に残存しており，関部から2.2cm下に段が施されている。これは，把縁を装着するための加工と考えられる。

619～623は片刃箭式の長頸鏃である。619～622は錆着していたため，そのまま実測した。619は茎部の一部が欠損する。断面形は刃部が片平刃造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄が残存するもののやや状態は悪く，口巻きは不明瞭である。620は刃部の一部に剥離が生じているが，原形は留めている。断面形は刃部が片平刃造り，頸部・茎部が方形を呈する。茎部に施された糸巻きが良好に残存する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。621は茎部の一部が欠損する。断面形は刃部が片平刃造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。622の断面形は刃部が片平刃造り，頸部・茎部が方形を呈する。刃部と頸部の一部に平織布が付着する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。623は逆刺の先端が欠損する。先端が直線的な造りで，鏃身部に角を有する。断面形は刃部が片平刃造り，頸部・茎部が方形を呈する。頸部の一部に錆化した葉が付着する。矢柄がやや良好に残存しており，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。共伴する他の長頸鏃とは，鏃身部や頸部関の形態が異なる。624は圭頭鏃Ⅱd類である。断面形は刃部が平造り，頸部・茎部が長方形を呈する。矢柄の残存状態は悪いが，一部では口巻きの単位が明瞭にみられる。矢柄の破損部から，茎部に施された糸巻きが確認できる。刃部から頸部にかけて，折り重なった布がみられる。顕微鏡による観察から，絹糸製の平織布とされている。反対の面には，全体に錆化した葉が付着する。顕微鏡による観察から，被子植物の葉とされている。625～628は鉄鏃片である。625・626は長頸鏃の頸部片と考えられる。625の断面形は長方形を呈する。626の断面形は長方形を呈する。一部に平織布が付着する。627・628は茎部片である。627の断面形は長方形を呈する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。628の断面形は方形を呈する。矢柄の痕跡がみられるものの，状態は悪い。

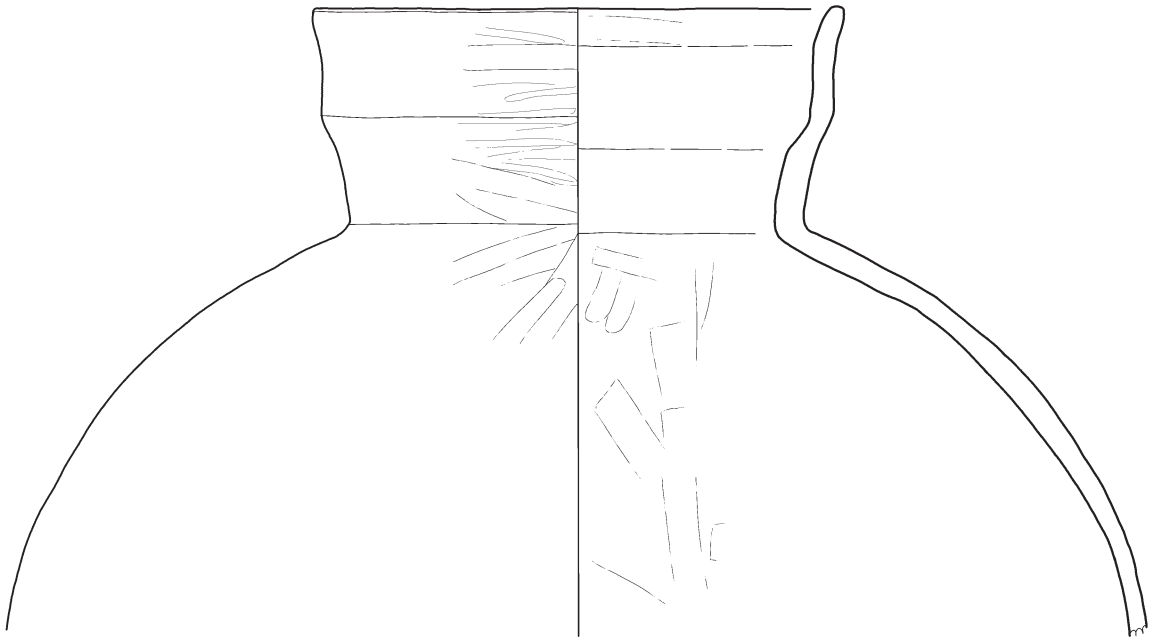
エリア14出土土器（第354図・第355図）

629～633は壺である。629は壺G類で，630は壺D類である。口縁部下半は内湾して，端部にかけて外反する。口縁部の中位よりやや上に接合痕が明瞭に認められる。頸部と胴部には突帯を有し，突帯には斜格子状の刻みが施される。629は口縁部の屈曲がやや緩やかで，まっすぐ上に伸び，端部で外反する。口縁部外面はミガキを，胴部は工具によるナデ調整である。630は口径16.8cmで，口縁部は屈曲部までは緩やかに内湾し，端部にかけては外反する。頸部に刻目突帯，胴部に幅広突帯を有する。外面はヘラ状工具によるミガキ調整である。内面は屈曲部から上位はミガキ，屈曲部より下は，工具によるナデ調整である。631は，幅広突帯を有する胴部で，斜格子状に刻みを施す。外面は斜位方向のミガキ，内面は工具によるナデ調整である。632・633はどちらも丸底を呈する底部である。

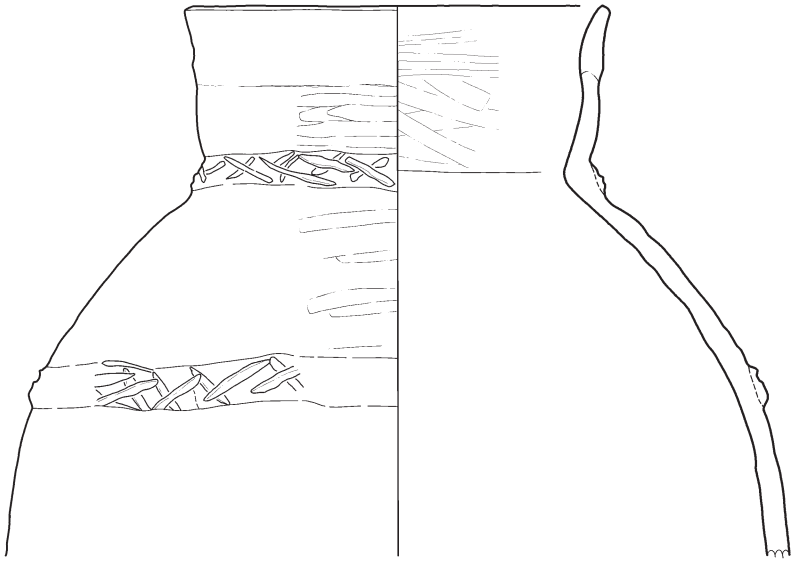
634～639は高坏である。634は高坏F類である。坏部は屈曲が弱まり，丸みを帯びる。口径21.8cmで口縁部は直線的に伸び，口唇部は平坦を呈する。坏部分と脚部分の接着時に粘土塊を充填した部分が欠損したものと考えられる。脚柱部はややエンタシス状を呈する。脚柱部内面には絞り痕が認められる。635は，高坏H類である。口縁部は直線的に外傾し，坏部中位に沈線を有する。636～638はスカート状に湾曲する。外面はヘラ状工具によるミガキである。636は，外面は丁寧なミガキ，内面は工具によるナデ調整である。637は，内外面ともに工具によるナデ調整である。638は，外面はミガキ，内面は工具によるナデ調整である。639は，細い脚柱部である。裾部との境に弱い稜線が入る。

640～642は坩である。

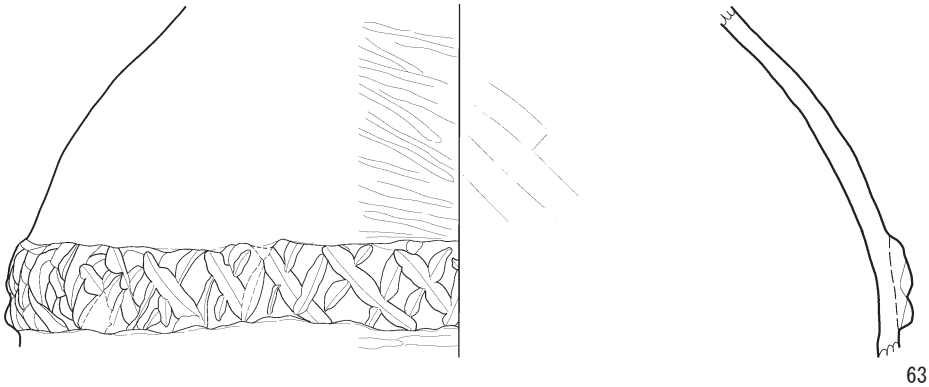
640は，胴部の下方に最大径をもつ。内外面ともに工具によるナデ調整である。641は胴部最大径12.8cmの大きめの坩である。胴部は算盤玉状に屈曲し，稜線が明瞭に入る。内外面ともにナデ調整である。642は底径5.2cmの坩の底部である。平底を呈する。内外面ともに工具ナデ調整である。



629



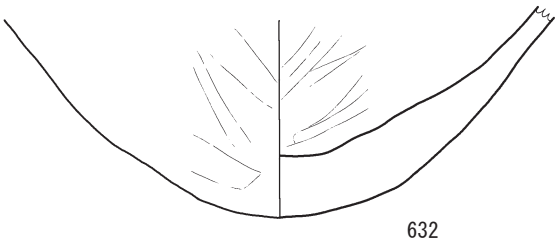
630



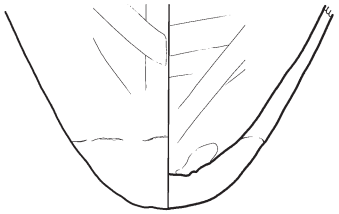
631

0 (1 : 3) 10cm

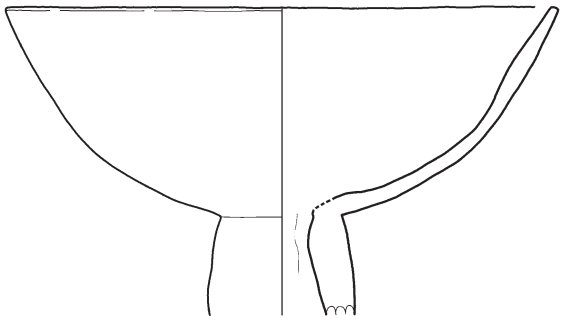
第354図　エリア14出土土器(1)



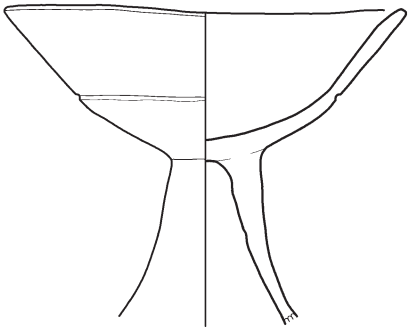
632



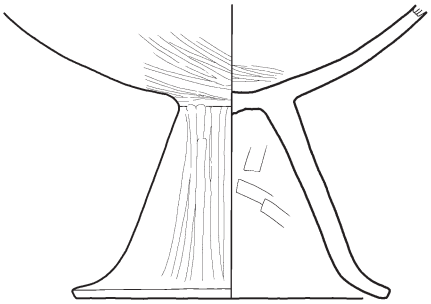
633



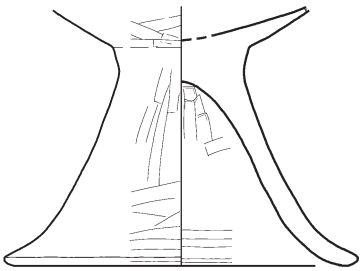
634



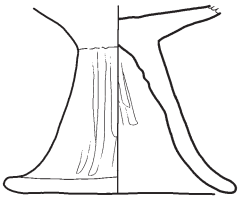
635



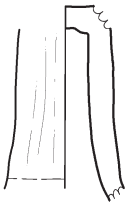
636



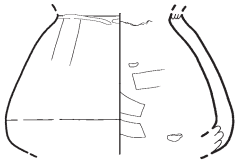
637



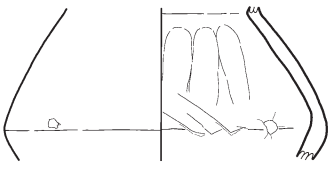
638



639

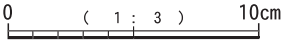


640



641

642



第355図　エリア14出土土器(2)

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（16）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

立小野堀遺跡 1

（第 1 分冊）

発行年月日　2017 年３月
編集・発行　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL：0995-70-0574　FAX：0995-70-0576

印　　刷　㈲国分新生社印刷
〒899-4301　鹿児島県霧島市国分重久627-1
TEL：0995-45-4880　FAX：0995-45-6979